

時の女神が見た夢

染色体

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時の女神に愛された男、ブルース・アッシュビー。

彼は第二次ティアマト会戦での大勝後、政界に転身し、歴代最年少の最高評議会議長として同盟初の帝国領侵攻作戦を指導した。

帝国領でも連戦連勝した同盟軍であったが、アッシュビーの突然の死によって撤退を余儀なくされた。

アッシュビーによって始められた伝説はその死によって終わりを告げたが、歴史の歯車が完全に元に戻ることはなかった。

そして、宇宙暦796年／帝国暦487年、新たな伝説が始まろうとしていた。

「らいとすたつふるール2015改訂版」に従って作成されています。

目次

第一部 前史（歴史の転換点）―― 1

第一部 1話 アルタイル星域会戦とそ

の影響―― 11

第一部 2話 連合領防衛作戦―― 24

第一部 3話 アイゾール星域会戦

38

第一部 4話 戦いの後―― 48

第一部 5話 策謀―― 57

第一部 6話 新たな英雄―― 61

第二部 1話 連合の方針と初戦

65

第二部 2話 帝国の内乱―― 75

第二部 3話 魔術師の帰還―― 83

第二部 4話 英雄を倒すために

89

第二部 5話 その星の名―― 96

第二部 6話 ヤヴァンホール星域会戦

―― 105

第二部 7話 来るべき時のため

117

第二部 8話 本懐―― 129

第二部 9話 内乱の終わり―― 145

第二部 10話 胎動―― 150

第二部 11話 異なる星を見ている

158

	第三部	1話	それぞれの思惑	—	169	第三部	9話	運命の糸	—	247
	第三部	2話	フェザーンの長い一日			第三部	10話	求めるもの	—	254
181	第三部	3話	とある中將の受難			第三部	11話	日記	—	266
194	第三部	4話	第十三艦隊	—	201	第三部	12話	忠臣たちの宴	—	290
	第三部	5話	ファルスター星域会戦			第三部	13話	連合存亡の時	—	312
	(前半)			—	206	第三部	14話	英雄はいつも遅れて		320
	第三部	6話	ファルスター星域会戦			第三部	15話	連合建国五十周年祭		
	(後半)			—	220	335				
	第三部	7話	ある男の矜持	—	232	第三部	16話	英雄の戦い	—	342
239	第三部	8話	フェザーンの戦い			358	第三部	17話	こんな夢を見た	
						第三部	18話	見果てぬ夢	—	371

幕間劇その1	あるいは、永遠ならざる	of the Earth	465
平和	——	——	——
幕間劇その2	あるいは、蠢く者達	第四部 5話 波及する動乱	483
396	——	第四部 6話 行く者来る者	496
幕間劇その3	あるいは、小夜啼鳥	第四部 7話 深くなる闇の中で	504
407	——	第四部 8話 回廊の戦い 前哨戦	518
第四部 1話	プロローグ：悪夢の只中	第四部 9話 回廊の戦い 本戦	523
で	——	——	——
第四部 2話	彼の旅・彼らの旅	第四部 10話 安息日	536
422	——	——	——
第四部 3話	黄昏に揺れる黄金獅子旗	第四部 11話 明けぬ夜が待つ	546
——	——	——	——
第四部 4話	Goldenbaum	第四部 12話 失われたもの	558
448	——	——	——

第四部 13話 逃げ出した先で

572

第四部 14話 アルジヤナフ星域会戦

579

第四部 15話 弟子たちの戦い

590

第四部 16話 いざ決戦へ

604

第四部 17話 博士の異常な愛情、ま

たは……

616

第四部 18話 チェスゲーム、銀河の

629

第四部 19話 第三次ヴェガ星域会戦

の決着

638

第四部 20話 見せよ!!? 幻の超必勝

戦術!!?の巻

665

第四部 21話 僕たちは信じている

673

第四部 22話 年貢の納め時

第四部 23話 残された者、残された

謎、探索の始まり

716

第四部 24話 「今度はわかったな」

721

第四部 25話 「しかもわかっていな

くもある」

732

第四部 26話 探索の終わり、星々の

果つる時

741

第四部 27話 還るべきその場所へ

第四部 37話 奪還者、そして

757

884

第四部 28話 去りゆく者、残る思い

第四部 38話 終戦会議後半 | 907

出 | 772

第四部 39話 条約成立祝賀会

第四部 29話 混乱の中で | 783

915

第四部 30話 最後の対決 | 799

第四部 40話 連邦による平和

第四部 31話 和解のとき | 817

941

第四部 32話 銀河帝国の終焉

エピソード1 宇宙暦805年 未来へ

830

の夢 | 955

第四部 33話 陰謀の季節 | 853

エピソード2 宇宙暦810年 過去

第四部 34話 会議を前に | 861

からの光 | 958

第四部 35話 終戦会議前半 | 867

番外編 その1 訪問者 | 968

第四部 36話 密議 | 872

番外編 その2 オーベルシュタイン・

レポート

番外編 その3 訪問者2

979 974

第一部 前史（歴史の転換点）

宇宙暦745年／帝国暦436年12月、第二次ティアマト会戦は、同盟軍、そして、ブルース・アツシユビー提督の完勝に終わった。

最終盤において、旗艦ハードラックに流れ弾が当たるという名前通りの不運があったものの、アツシユビーは軽傷を負うに留まり、同盟軍史上最年少での元帥となった。

アツシユビーはその直後に引退を発表し、政界進出、帝国領侵攻を公約として統合評議会議長となることを表明した。

長引く対帝国戦争の終結を願う民意、また、アツシユビーの実績と人気の前に評議会は解散を余儀なくされた。

出来レースとまで言われた選挙の後、アツシユビーは帝国領侵攻を目指した挙国一致評議会を提唱し、最年少元帥に続き最年少評議会議長の記録を打ち立てることになった。

宇宙暦747年／帝国暦438年12月、議長となったアツシユビーは1年余の準備の後、帝国領侵攻を開始した。

戦闘艦艇8万隻、支援艦艇4万隻、総計12万隻以上となった艦隊には、当然のよう

にアツシユビーと、副議長となっていたアルフレッド・ローザスが同行し、直接指揮を行ふことになっていた。議長が軍を直接指揮することの異常さ、議長戦死の危険性を指摘する者もいないわけではなかったが、アツシユビー議長は「議長が指揮するのが本当のシビリアン・コントロールだ」「アツシユビーは戦死しない」等の言葉で片付けてしまった。

後世から見れば大いに問題のある回答だが、それで片付いてしまうのがアツシユビーのアツシユビーである所以であり、当時の同盟市民の熱狂を現していた。ちなみに、コメントを求められたウオリス・ウオーリック宇宙艦隊司令長官をはじめとする730年マフィアの面々は揃って「アツシユビーだから」と答えたとされる。

イゼルローン回廊内の伏兵をアツシユビーの神がかり的かつ横紙破りな指揮によって排除しつつ、帝国側出口へ抜けた同盟軍遠征艦隊を待ち受けていたのは10万隻を超える帝国艦隊であった。

艦隊全体が回廊を抜けて展開を完了する前に戦闘を開始することになった遠征艦隊であったが、アツシユビーは半包囲の体制を取ろうとする帝国艦隊の一角への突撃を命じた。無謀で失敗するかと思われるその突撃は、その一角があつさりと崩れたことにより、同盟軍勝利のきつかけとなった。

帝国艦隊は第二次ティアマト会戦の傷を質、量の両面で埋めきれず、苦肉の策

として貴族の私領艦隊と正規艦隊の混成からなっていた。アツシユビー提督が突撃を指示した一角は複数の貴族艦隊によって構成され、艦艇も将兵の質も正規軍に劣り、指揮命令系統も不統一な状態であった。帝国艦隊の半包囲によって始まった戦闘は、同盟艦隊による突破と背面展開により攻守が逆転し、回廊から抜け出てきた後詰め艦隊との間に挟撃が成立することにより殲滅戦に移行した。撤退に成功した艦艇は半数以下であり、多くの艦艇は降伏か殲滅かを選択することになった。

イゼルローン回廊出口でのこの会戦の後、帝国辺境の「解放」に動いた同盟軍であったが、ここで多くの者にとつて予想外の出来事が起きた。それは本領安堵を条件とする多数の辺境領主の恭順であった。

解放を目的とする同盟が、貴族支配の存続を認めるのか？紛糾するかに思えた議論はアツシユビー議長の素早い決断によつてあっさりと収束した。アツシユビー議長は辺境領主に対し、帝国戦争への協力（財産の一部供出と補給への協力、戦力の提供）を条件として提示し、辺境領主は即座にそれを受け入れた。現在では、同盟は事前に諜報機関を通じて辺境領主との間に接触を持っていたという説が有力視されている。

反抗を続ける辺境領主への対応は恭順した辺境領主に任せ、遠征艦隊は帝国領奥地へとさらに進むことになった。帝国軍は態勢を立て直すまではゲリラ戦で対応しようとしたが、同盟軍侵攻に呼応するように帝国各地で反乱が勃発し、貴族の中にも同様に同

盟への恭順や帝国からの独立を選択する者が出現したため、十分な効果を上げることができなかった。

宇宙暦748年2月には辺境領主を中心に「独立諸侯連合」が成立し、帝国領辺境の帝国からの分離独立宣言が行われた。独立諸侯連合への合流を図る貴族が相次いだ。結局帝国軍が態勢を立て直し、再度の会戦を挑むまでに同盟軍は帝国領の半ばまで進出していた。同盟市民は熱狂し、銀河連邦の復活と、アツシユビーの連邦最年少国家元首記録樹立が噂された。

宇宙暦748年／帝国歴439年4月、シャンタウ星域会戦。

この戦いで銀河の帰趨が決まるかに思われた。同盟軍5万5千隻と帝国軍6万隻がぶつかった本会戦は、質の劣化の激しい帝国軍に対し、同盟軍が優勢に戦いを進め、最終的な勝利を手にするかに思われた。しかしながらここで一つの事件が同盟軍を襲うことになる。

アツシユビー死亡。

ハードラック艦橋において一人の同盟軍兵士がアツシユビーの心臓をブラスタードで撃ちぬいたのだ。後にその兵士はサイオキシソ麻薬によるせん妄状態にあったことがわかつている。止める間もなく艦隊全体に通信されたアツシユビー死亡の報に、同盟軍は混乱に陥った。実のところ帝国軍も偽報を疑い混乱したが、同盟軍の混乱が擬態では

ないことを見て取ったシュタイエルマルク大将による攻勢を端緒に、同盟軍は一気に壊滅の危機に陥った。ウオーリック司令官を中心に何とか態勢を立て直した時には、同盟軍の余力は既になく、撤退を選択せざるを得なかった。

占領地まで戻った同盟軍は、再進撃、撤退、現状維持のいずれかを選択する必要があった。

しかし、再進撃するには戦力が足りず、何よりアツシユビーを欠く同盟軍が現状で帝国を滅ぼし得ると信じる者は少なかった。一方で、ただ撤退するには現在までの成果は余りにも大きかった。切り離しに成功した辺境領、独立諸侯連合が今後も同盟に従属する場合、常に劣勢であった対帝国の勢力比が今後同盟側優勢に移行するという試算が行われていた。

結果選択されたのは、将来における併合も視野に入れた現状維持であった。恭順した諸侯も、帝国に戻ったとしても厳しい処断が待っていることを考えれば、同盟にも併合の野心があるとしても今更裏切ることとは考えられなかった。

恭順した諸侯の私領艦隊と払い下げられた同盟艦艇を中心に独立諸侯連合艦隊が組織される一方、同盟の艦隊の一部が連合に駐留し、防衛任務を担った。

同盟の新議長には副議長としてアツシユビーを補佐していたローザスが就任した。

独立諸侯連合領駐留艦隊司令官兼独立諸侯連合軍顧問に、本遠征の責任を取るとして

ジョン・ドリンカー・コープに司令長官職を譲ったウォーリックが就任することになった。余談だが、ウォーリックは晩年「諸侯の総意」として男爵位を授与され、本当の「パロン」となつて諸侯連合に骨を埋めることになった。

暫くの間は帝国も侵攻によつて受けた傷を癒す必要があり、積極的な行動は取れなかつた。その間、帝国から相当数の貴族と臣民が独立諸侯連合領に亡命し、同盟からの支援と亡命者の帰還もあつて、連合は短期間に発展を遂げることになった。

ここで困つた立場になつたのがフェザンである。

仮に独立諸侯連合と帝国の間に停戦が成立した場合、三角貿易で栄えるフェザンの地位が脅かされることになるし、独立諸侯連合が同盟に従属して積極的に帝国と対立した場合、下手をすると同盟による銀河統一が実現しかねない。何より今同盟がフェザンに対して野心を示した場合、帝国はフェザンを守ってくれるのか？

帝国が独立諸侯連合領を奪回し、旧態に戻るのがフェザンにとつては理想的であつたが、現状その余力は帝国になかつた。

フェザンは戦略の変更を余儀なくされた。

フェザンは可能な限り同盟と連合の間に離間策を打ちつつ、帝国の復興を支援した。また、帝国支援の見返りとして対同盟の防衛力としてフェザン回廊同盟側出口への独自の要塞建設と最低限の自衛艦隊の設立、更には「傭兵艦隊」の設立を認めさせた。

同盟と独立諸侯の離間も、下地（民主主義と貴族支配の矛盾、従属的な立場を強いられることへの連合の苛立ち）があったことから相当程度うまくいき、独立諸侯連合軍の整備が進むにつれ、同盟駐留艦隊の規模は最低限まで縮小された。また、常に同盟の支援に頼る存在として、同盟市民の対独立諸侯感情も好意的とは言えないものになっていった。

傭兵艦隊は、同盟による銀河覇権を防ぎ勢力均衡を図るためのフェザーンの苦肉の策であった。仮に同盟と独立諸侯が結束して帝国を攻める場合には、傭兵艦隊は「経済活動として報酬を得て」帝国側に立つて戦い、同盟が独立諸侯領に野心を示した場合には、独立諸侯側に派遣するそぶりを示し、現状を維持する。一方で、帝国が独立諸侯を攻める場合は、帝国による独立諸侯領奪回を望ましいと考えるフェザーンは静観するが、その場合は同盟が黙って見てはいない。

以前よりも遥かに危うい均衡の下、銀河の歴史は宇宙暦796年／帝国暦487年を迎えることになった。

宇宙暦796年／帝国暦487年初めにおける銀河の状況

各勢力の国力比率

帝国：同盟：フェザン：諸侯連合

38：42：12：8

帝国は辺境領を失い、政治的混乱も長引いたことで、経済力では同盟に逆転されている。同盟も大遠征の負担で一時低迷したが、諸侯連合を矢面に立たせていることで軍事的な負担と人的損失が軽減され、そうでない場合と比較して財政状況も多少好転している（とはいえ、連合への支援を重荷と考える同盟市民は多い）。諸侯連合は、同盟からの経済支援と両国からの人口流入で発展を遂げたが、対帝国の軍事負担がそれ以上の発展に対して重石となっている。フェザンも軍事負担の増大等で国力を一部削がれているが、帝国の消耗が大きく、全勢力に占める国力の割合は変化していない。

各勢力の人口

帝国／同盟／フェザン／諸侯連合

220億人／130億人／20億人／30億人

帝国は辺境領喪失による直接的な人口減の他、政治的混乱による死亡率上昇、人口流出が起きている。同盟は亡命者の流入減、諸侯連合への亡命者の帰還による人口減と戦死者の減少による人口増が相殺されている。諸侯連合は帝国及び同盟からの流入によ

り、短期間に人口が増大している（国力増大のため多産も奨励している）。

各勢力の軍事力

帝国／同盟／フェザーン／諸侯連合

15万隻（他貴族私領艦隊等15万隻）／12万隻（1万5千隻が連合に常駐、他星系守備艦隊等5万隻）／4万5千隻（他星系守備艦隊等1万5千隻）／1万隻（他傭兵艦隊1万5千隻）

それぞれ純戦闘艦艇数のみ

帝国は国力消耗から、同盟は防衛負担の減少から、軍拡競争は抑制気味である。

各勢力の政体

帝国／同盟／連合

専制君主制／共和制／貴族（諸侯）による寡頭制

連合は伯爵以上の貴族を諸侯会議で盟主に出す。新規の叙爵、陞爵も諸侯会議で決定される。

惑星開拓権は諸侯（男爵以上）に付与される。一部企業は、諸侯を名目上の開拓者として惑星を開発している。亡命貴族も新規開拓により領地を得る。同盟との関係上、惑

星上の地方政治に制限選挙導入。兵役に就いた成人に対し選挙権付与。帝国と異なり連合では女性も軍務に就く。

第一部 1話 アルタイル星域会戦とその影響

宇宙暦794年／帝国暦485年10月～11月

第三次ガイエスブルク要塞攻防戦 帝国の勝利

宇宙暦795年／帝国暦486年2月

第三次アルタイル星域会戦 帝国の勝利 同盟第4艦隊壊滅

宇宙暦795年／帝国暦486年9月

第四次アルタイル星域会戦 痛み分け 双方に損害多数

宇宙暦796年／帝国暦487年2月

第五次アルタイル星域会戦

アルタイル星域において同盟／連合の合同艦隊4万隻とラインハルト・フォン・ロー
エングラム上級大将率いる帝国軍2万隻によって行われた会戦は帝国軍の大勝に終
わった。

独立諸侯連合 連合行政政府（惑星リューゲン衛星軌道）

「三個艦隊が壊滅した……」

第五次アルタイル星域会戦の報告を受けた諸侯連合盟主クラインゲルト伯は、言葉を失った。補佐官が宥めるように報告を続けた。

「パエツタ提督負傷後に同盟軍の指揮を引き継いだヤン・ウエンリー准将の奮戦により、帝国軍は撤退しました。ただ負けたというわけではありません」

クラインゲルト伯は首を振った。

「問題は次だ。この数年、我々は劣勢が続き、消耗が激しい。我が国の正規艦隊が半減し、同盟の駐留艦隊が半壊したことで、彼我の戦力差は大きく開いている。これでは次の侵攻を防ぐことはできない。同盟に至急援軍を要請せよ。足元を見られることになるかもしれないが、この際しかたない」

フェザーン 首都星フェザーン

フェザーン自治領主アドリアン・ルビンスキーも補佐官ボルテックから会戦の報告を受けていた。戦闘の経過に少なからぬ衝撃を受けつつも、ルビンスキーは今後のことを考えていた。

「ローエングラム伯とヤン准将のことはそれでよいとして、ボルテック、この後我々はどう動くべきだろうか？」

試すような問いを受けてニコラス・ボルテックは答えた。

「は、支援を餌に連合に食い込むべきかと。同盟は連合に対して大規模な援軍を出すことになるでしょうが、同時に一層の従属も迫るでしょう。フェザーンとしても嬉しくない展開です。諸侯連盟としては同盟への過度の依存は避けたいはず。そこにフェザーンの入り込む隙が」

「甘いな、ボルテック」

ルビンスキーは首を振りながら遮った。

「は？」

「これはブルース・アツシユビーによつて崩された構図を復活させるチャンスだ。帝国では「金髪の孺子」に手柄を独占させまいと、さらなる侵攻計画が立てられているという。この機に帝国に連合を併せ？してもらい、争う同盟と帝国、漁夫の利を得るフェザーンというあるべき姿に復帰させるのだ。」

「しかし同盟が黙っておりませまい」

「無論だ。しかし同盟には二つ選択肢がある。今すぐに派兵するか、帝国が侵攻した後派兵するか、だ。前者が連合にとっては望ましいが、同盟にとっては現状維持に多大なコストをかけるに過ぎない。後者の方が、連合領占領のために消耗した帝国軍を同盟が叩くことができるし、状況によっては連合を併合することさえ狙える点でメリットが大きい。失態続きの現政権にとってもな」

「結局それでは帝国は連合を併？できないのでは？」

「同盟が大規模な艦隊を派遣する前にイゼルローン回廊を閉塞させる」

「なんですと？」

ボルテックは思わず耳を疑った。

「同盟の援軍が致命的に間に合わなくなるよう、一時的でいいのだ。方法も一つではないが……技術局で実施している大質量物体長距離ワープ実験があっただろう」

「要塞をワープさせるつもりですか？あれは未完成です」

「未完成でよいのだ。同盟艦隊の通過時期に合わせてイゼルローン回廊内の恒星近傍で小惑星サイズの大質量天体を、目的地を定めずワープさせるのだ。発生する時空震によりイゼルローン回廊は一時的に航行不能になる。イゼルローン回廊は狭いからな。さらに時間が必要ならばこれを数度行えばよい。イゼルローン回廊は同盟、連合の艦船であれば自由に航行可能だから準備は容易だ。無論、我々ではなく帝国の工作ということにするがな。要塞のワープのためだけに、あの実験を私が許可したと思っていたのか」「そこまで考えておいででしたか。」

「ボルテックよ、早速同盟の評議員連中に働きかけるのだ」

自由惑星同盟 首都星ハイネセン

連合への同盟軍派遣の是非に関する評議会の秘密会合が行われていた。

ヨブ・トリューニヒトが国防委員長として説明を行っていた。

「連合への援軍は第一陣として3個艦隊、後詰めとしてさらに2個艦隊の動員が必要となるとの試算が出ている。経費としては500億ディナールが予定される。連合を支援して帝国による旧領奪還を防ぐのが、40年来の同盟の基本方針だ。国防委員長としては臨時予算の承認を願いたい」

ジオアン・レベロが財政委員長として答えた。

「それだけの経費、臨時国債で賄う他はない。同盟は今日まで、アツシユビー時代の巨額の戦時国債を償還し、福祉予算を切り詰めさえして、財政の破綻を何とか防いできた。しかしながら、昨今の敗戦の結果、艦隊の再建、遺族年金の増加と、それも危うい状態となっている。この上さらなる派兵となれば、財政委員長としては看過しえない状況だ。連合を矢面に立たせ、同盟は民力休養に努めるというのが同盟の大戦略でしたが、連合防衛それ自体が民力休養の障害になるとすれば、大戦略自体の見直しが必要になるのではないか」

連合との折衝を担う国務委員長が反論した。

「しかし、連合を支援しないわけにはいかないだろう」

ホワン・ルイ人的資源委員長がレベロに代わり答えた。

「財政委員長も、連合支援それ自体を否定するわけではないだろう。今回の派兵自体は認めざるを得ないにしても、今後も同様の状況が続くことは同盟の国家破綻につながる。それを避けるための方策を同時に考えるべきということだ」

天然資源委員長が口を開いた。

「臨時国債発行となると有権者がどう考えるか。そのことを忘れてもらっては困る。帝国の連合侵略を防ぐためだとしても、有権者は、連合と同盟軍、そして何より現評議会の失態の尻拭いに血税が使われたと取るだろう。」

突如、経済開発委員長が提案した。

「経費節減ということでは、派兵時期を少し遅らせてはどうか。例えば連合の兵力が尽き、帝国軍も十分に消耗したタイミングまで待つとか」

国務委員長は驚いて声を上げた。

「そのようなことをすれば連合との信頼関係が失われる」

コーネリア・ウインザー情報交通委員長がその声を遮った。

「いえ、ぜひそうすべきですわ。その方が連合を存亡の淵から救ったことになり、同盟の勝利が劇的になります。所詮民主主義の大義を知らぬ国、信頼関係云々を気にしなくて済むよう、そのまま連合を併合してもいいではありませんか」

国務委員長は啞然とした。

「そのような危ない橋を渡るのは賛成しかねる。一步間違えて連合が帝国に滅ぼされたらどうするのだ」

ウインザーは鼻で笑った。

「その後帝国を叩けばよいのです。連合も帝国も民主主義の大義を理解しない点では同じです。同盟の滅ぼすべき敵が、もう一つの敵と相食んで滅びたとしても、むしろ喜ばしい限りではないですか。私に言わせると國務委員長は連合に肩入れしすぎですわ。そういえば國務委員長は連合と日頃から仲が良いようですわね」

連合との癒着を示唆するかのようなウインザーの言葉に、國務委員長は顔を紅潮させた。

「何を言い出すんだ！」

話の展開に困惑を隠せないまま、ホワンが指摘した。

「連合にはまだ同盟半個艦隊が残っていることも忘れないでお願いしたい」

「ちようどいいですわ。同盟が連合を見捨てないことの証拠として彼らには頑張ってもらいましょう。今回また英雄になったというヤン提督に任せればよいでしょう」

トリユーニヒトが発言した。

「将兵を捨て石にするような発言には国防委員長として賛成しかねる」

「捨て石ではありません。連合に殉じる必要もないのですから。ヤン少将ならうまく

やってくれるでしょう」

國務委員長はなおも食い下がった。

「連合には何と説明するのだ」

天然資源委員長が提案した。

「連合には対価として事実上の併合に近い内容の要求を送ればよからう。交渉が難航して、援軍が遅れても仕方のないだけの」

ここでサンフォードが口を開いた。

「即座に援軍を送るか、しばらく状況の推移を見守るか、の二つに意見が割れているようだな。ええと、ここに資料がある。みんな端末画面を見てくれんか」

積極的に発言したサンフォード委員長に全員が驚きつつも画面を確認した。

「我々の支持率と不支持率だ。悪いと言つていいだろう。このままでは来年早々の選挙には負けるだろう。我々が連合に即座に派兵したとしても、この状況は変わらないだろう。ところがだ、帝国に対して劇的な勝利を収め、さらに領土拡大などの何らかの成果を上げることができれば、支持率は最低でも15%上昇することがほぼ確実なのだ」

軽いざわめきが会場に生じた。レベロがうめくように呟いた。

「そんな理由で同盟の方針を決めていいのか」

しかし、ウインザーは言った。

「同盟の大義」を考えれば、結論は出たも同然ですわね。即時派兵か状況を見るか、投票を行いましょう」

投票の結果は以下の通りであった。

即時派兵：四、状況を見る：五、棄権：二

同盟の重大な方針変更が、ここに決まった。即時支援に投票したのはレベロ、ホワン、国務委員長、そしてトリユーニヒトであった。

散会后、ホワンとレベロが会議を振り返っていた。

「どうもおかしなことになったな。連合に戦費の肩代わりを要求した上で、加えて領土割譲や利権譲渡等の要求を行う、というところが落としどころかと思っていたのだが」

「ホワン、私も即時支援とは前提だと考え、その上で財政上の問題提起を行ったのだが。それがなぜあのような提案がなされ、賛成多数で通ってしまったのか。しかも、その理由が選挙対策だとは」

「誰かが余計なことを吹き込んだのではないか？それも複数人に」

しかしそれが誰か、あるいはどのような勢力なのか、二人には想像が付かなかった。

トリユーニヒトも一人書齋で会議を思い出し出していた。彼は自らの予想通りに進んだ会議に満足していた。

「フェザーンからの依頼通りに成り行きに任せてみたが、さて状況はどうなるか。まあ

「どうなったとしても私の地位は安泰だが。しかし、経済開発委員長も天然資源委員長も、自分たちが使い捨てにされようとは思ってもいいまい」

自由惑星同盟 首都星ハイネセン―独立諸侯連合 リューゲン星域 超光速通信

シドニー・シトレ元帥は、スクリーンを通じてヤンに通達を行った。

「ヤン・ウエンリー同盟軍少将を駐留艦隊司令官代理から正式に司令官に任じ、引き続き連合防衛を任せる」

ヤンは疑問に思った。

「艦隊司令官は中将をもってその任にあてるのではありませんか？しかも重要な駐留艦隊司令官であれば尚更」

「再編成される駐留艦隊の規模は先の会戦で残存した約8千隻、兵員90万。通常の約半数というところだ。兵力の補充はない」

「……別に増援の予定は？」

「ヤン少将、これは内密な話だが、それも現時点では予定されていない。評議会は旧来の方針を捨て、帝国の連合への侵攻を看過し、その上で時期を見計らって介入し漁夫の利を得るつもりでいる。領土割譲、属領化、あるいは併合までも視野に入れているのだから」

ヤンはしばし沈黙した。

「政略としてはまあ理解できなくもないのですが、連合人民に犠牲を強いることになり
ますね。それに駐留艦隊は事が起きた際にどう行動することを期待されているのです
か？」

「仮に連合が同盟に愛想を尽かして帝国に恭順することになれば目も当てられない。同
盟が連合を見捨てていない証拠として駐留艦隊には引き続き連合防衛に務めてもらう」
「要するに人質、いや、捨て石になれと」

「遺憾ながらそういうことだな。だが君ならば唯の捨て石で終わることはあるまい。そ
れが責任回避の結果であろうと、駐留艦隊の防衛行動は君に一任されることになろう
し、当然ながら連合の防衛は連合の判断によって行われる。そこにエルランゲン及びア
ルタイルの英雄として連合内で声望のある君の識見を活かすことは十分に可能だろう」
つまり連合に策を授けて帝国からの防衛を果たせと、そういうことかとヤンは見当が
ついた。

「本部長のお考えがわかってきました。しかしそう上手くいくでしょうか」
「君にできなければ他の誰にも不可能だろうと考えておるよ」

「もし君が駐留艦隊を率いて圧倒的劣勢の中で連合防衛という偉業を成し遂げれば、ト
リユーニヒト国防委員長も君の才幹を認めざるを得んことだろうな」

そしてライバルであるロボス元帥が手柄を上げることはなく、私を任用したシトレ本部長の立場も強化されるといふことかな、とヤンは想像した。

「自信がないかね」

「微力を尽くします」

「やってくれるか。では必要な物資があつたら何でもキャゼルヌに注文してくれ。艦艇以外であれば可能な限り便宜をはからせる」

「やれやれ一度歯車が狂うとどうにもならないもんだな」

通信が終わった部屋でヤンは一人愚痴をこぼした。

父親の死後、一文無しになり、人文関係の奨学金の選考には通らないことを役所で懇々と説得されて、結局士官学校に行く羽目になった。無事戦史研究科に配属されたと思つたら、戦略研究科に問答無用で転科、エルランゲン脱出に成功したばかりに、前線に貼りつく羽目になって……。

ため息をつきながらもヤンは立ち上がった。

「退職金は10年勤務しないと貰えないし、もう少しがんばるか」

銀河帝国 帝都オーデイン

ローエングラム伯ラインハルトはアルタイトルにおける功績で帝国元帥、そして宇宙艦

隊副司令長官に任命された。同じく昇進して少将となったジークフリード・キルヒアースと、元帥府となる建物で会話していた。

「老いぼれどもは、これを機に賊領全土の奪回を狙っているらしい。我らが元帥府の設立にも影響が出ている。元帥府の設立は事実上次の外征の後になりそうだ。人も艦艇も外征優先だということだ。邪魔な俺を除け者にして、次は自分達が武勲を立てる番だとな。担ぎ出されるミュッケンベルガーもご苦労なことだ」

「連合もメルカツツ提督をはじめ有能な将兵を抱えています。ただでやられはしないでしようし、同盟も介入してくるでしょう。待っていれば機会はラインハルトさまの前にすぐにやってくるはずです」

「わかっているさ。キルヒアース。時に、同盟の駐留艦隊の司令官にはあの男がなったそうだな」

キルヒアースの頭にもすぐにその名が浮かんだ。

「ヤン・ウエンリー、エルランゲンの英雄にして、アルタイルで我々の前に立ちはだかつた男」

「もしかしたらまた何かしでかしてくれるかもしれないな。お手並み拝見といこうか」
そう言つてラインハルトは不敵に笑つた。

第一部 2話 連合領防衛作戦

宇宙暦796年／帝国暦487年3月

独立諸侯連合 連合行政政府（リューゲン星域）

惑星リューゲンの衛星軌道上に設営された連合行政政府の会議室には、連合の盟主クラインゲルト伯爵、外務卿ハーフェン伯爵、軍務卿カイザーリング男爵、第一防衛艦隊司令官兼連合宇宙艦隊司令長官メルカツ元帥、第四防衛艦隊司令官クロプシュトック中将、臨時編成された第五防衛艦隊司令官ウオーリック中將ら、連合防衛に関わる要職が集まっていた。

ハーフェン伯がまず尋ねた。

「ヤン提督、援軍を求めた我々に対する同盟の返答を貴殿はご存知か」

「いいえ。ですが色よい返事ではないようですな」

「その通りだ。援軍の条件として連合全体の約半分にあたる領土の割譲及び外交権剥奪、連合行政に対する同盟官僚の受け入れを求めてきた。これでは帝国に下るのとどちらがましかわからぬではないか。同盟は我々を助けるつもりはないのか？」

ヤンはごまかすこともなく答えた。

「実のところ駐留艦隊に対しても、兵力の補充はありません。現行の戦力以上の支援を今のところ本国は行うつもりはないと考えた方がよいでしょう」

「同盟は我々に座して死ねと言うのか？」

先代クロプシュトック侯と共に連合に亡命して以来、常に防衛の最前線に立ち続けてきたヨハン・フォン・クロプシュトック中将の口調は詰問するかのようであった。

「駐留艦隊は引き続き連合防衛の任に当たります。」

「兵力の補充もなく、撤兵するわけでもなく、要は捨て石ということか。」

「否定はできません」

気持ちをはわかるが私を責められても、とヤンは思った。

「ヤン提督を責めてもしょうがない。此の期に及んでは現状の戦力で帝国に対してどう防衛戦を行うかということを議論すべきだ。エルランゲンとアルタイルの英雄の知略も借りてな」

バロンが歳を取ってからできた息子であり、その才覚を受け継いだと噂されるアリストアー・フォン・ウオーリック中将がクロプシュトックを宥めた。

メルカツツが話を進めた。

「連合に残された戦力は三個艦隊約3万5千隻程度、これにヤン提督の艦隊が加わっても4万3千隻。帝国の侵攻兵力は10万隻前後と推定されている。攻撃三倍の原則と

はいうものの、それが気休めに過ぎないのは諸將の知る通りだ。實際のところ複数方面から帝国が攻めてきた場合、我々はこれに対処できない」

ウオーリックが投げやりに言った。

「こちらから攻勢に出た方がまだ戦線を限定できるかもしれないな」

クロプシュトックは皮肉気な表情を浮かべた。

「そして華々しく散るといっわけですか。殊勝な意見ですな」

ウオーリックが応じた。

「別に散るつもりはない。何かもつとましな意見があるなら教えてくれ」

ヤンがためらいがちに発言した。

「ええと、こちらから攻勢にでた方がよいというのは正しい認識かと思えます。私に負けないための策があります」

ヤンの提案は驚きをもって迎えられ、その場で一部修正が加えられた後、承認された。この後連合はヤンの案に沿って防衛作戦を進めていくことになった。

駐留艦隊新旗艦ヒューベリオンに移ったヤンは、エドウィン・フィッツシャー副司令官をはじめとする幕僚に今後の方針説明を行った。会議後、ヤンはダステイ・アッテンボロー大佐に声をかけられた。

「昼寝のヤンと言われた先輩が、ここまで勤勉さを発揮するとは。滞在が長くて連合に

情が移りましたか？」

「そんなことはないんだけどね。ただまあ、連合の上層部は、同盟の政治屋連中と違って、民衆を戦場に出して自分たちが後方でふんぞり返っているわけではないからなあ。手伝う気にならないこともない」

「高貴なるものの義務」というやつですな」

「ああ、連合では軍事上の義務を根拠として特権階級の政治・経済上の権利が保障されている。このような軍事貴族体制は歴史上様々な場所でも何度も出現している。そして、軍事上・政治上の義務を特権階級が担う必要が薄れるとともに、その過程は様々なながら結局は消滅していったんだ。そして歴史の流れの中で今再び、連合でそれが出現した。今のところそれは大きな腐敗もなく運営されているように見える。民主共和制、専制君主制とも異なる可能性がここにはある。しかしそれは、銀河帝国という明確な軍事上の脅威と自由惑星同盟という政治上の脅威があつてのことだ。今後環境が変化した際に、この体制がどう変化していくのか。もしかしたら私はそれをもう少し見続けたいのかもしれない」

宇宙暦796年／帝国暦487年4月10日、連合は帝国領への逆侵攻を行った。連合主体の逆侵攻は、これまでも国力差から稀であり、ましてやこのタイミングで積極的な行動はとるまいと考えていた帝国は虚をつかれた。また、侵攻先は連合と帝国の係争

の中心であつた中央部ではなく、しかも二方面、連合の北部及び南部に面した貴族領であつた。

これに対して門閥貴族は狼狽の後激昂し、連合侵攻作戦の前倒しと、優先目標としての貴族領奪回を唱えた。この結果、帝国による連合侵攻作戦は準備が十分に整う前に行われることになつた。

銀河全域図（逆侵攻時）

宇宙暦796年／帝国暦487年5月5日、帝国艦隊は北部と南部二方面に分かれて侵攻を開始した。正規艦隊10万隻に貴族艦隊1万隻、二手に分かれたとはいえ各5万5千隻の大艦隊であつた。既に連合軍は撤退していたため、貴族領は即座に奪回された。貴族艦隊を再占領のために残した後、各方面本隊は連合領への侵攻を開始した。その時、二つの報告が入つた。連合による「北部領土放棄」宣言と、ガイエスブルク要塞陥落の報である。

宇宙暦796年／帝国暦487年5月15日

銀河帝国　ガイエスブルク要塞

ガイエスブルク要塞はフェザーン、連合、帝国三者の国境地帯に建造された難攻不落の要塞である。それは銀河に無二の威力の要塞砲と、巨大戦艦のビームも通さぬ装甲を備えていた。また、フェザーンの資金によって造られながら、帝国の所有物となつていく点でも特異な存在であった。要塞には、帝国駐留艦隊1万の他にフェザーン傭兵艦隊5千も詰めており、要塞それ自体とともに何度かの同盟／連合による攻撃を悉く跳ね返してきた。

そのガイエスブルク要塞の周囲に今、大規模な通信妨害が行われていた。

要塞司令官シュトゥックハウゼン大将と駐留艦隊司令官ゼークト大将はこれを連合艦隊の接近と考へて出撃すべきか否かの論争を始め、フェザーン傭兵艦隊司令官ヴェンツェル提督はどっちつかずの態度を取っていた。要塞司令官、駐留艦隊司令官という同格の司令官が存在し、さらに外様のフェザーン傭兵艦隊司令官がいるため、ガイエスブルクの指揮命令系統は複雑であった。

話が堂々巡りになりかけたとき、通信室から一つ連絡があった。

「外征艦隊から重要な連絡事項を携えて、ブレーメン型軽巡洋艦一隻がガイエスブルクに派遣されたが、回廊内において敵の攻撃を受け、現在逃走中。ガイエスブルクよりの救援を望む」

ゼークト大将は駐留艦隊全軍出撃したが、傭兵艦隊は要塞に残留した。帝国軍に求め

られない限り、傭兵艦隊は積極的な行動を取らないのだった。ブレーメン型軽巡洋艦が助けを求めてガイエスブルクに入港した時も、駐留艦隊は出撃したままだった。

「艦長のフォン・ラーケン少佐だ。要塞司令官にお目にかかりたい」

シウトツクハウゼン大將が面会を受け入れた時、ガイエスブルクの運命は決した。

ガイエスブルク要塞はラーケン少佐に扮した連合薔薇騎士連隊シエーンコップ大佐によつて占領され、駐留艦隊はガイエスブルク要塞主砲ガイエスハーケンにより半壊状態となった後、ゼークト大將の死亡とヤン艦隊による包囲により漸く降伏した。無傷の傭兵艦隊もあっさり降伏し、交渉により艦艇2千隻でフェザンに帰還することが決まった。帝国軍が降伏したのに、フェザンだけが儲からない戦いをする必要はないというのがヴェンツェル提督の考えだった。

作戦を情報面で補佐していた連合情報局パウル・フォン・オーベルシュタイン准將がヤン提督に話しかけた。彼は銀河帝国から亡命し、諜報畑で手腕を発揮してきた軍人であった。

「ヤン提督、お見事でした」

ヤンは頭をかきながら答えた。

「ここまでスムーズに進んだのはあなたのサポートがあつたからですよ」

オーベルシュタインは言葉が続けた。

「あなたならばゴールデンバウム朝を滅ぼすことも可能かもしれません」

「買いかぶりですよ」

義眼にも関わらずオーベルシュタイン准将の視線に値踏みするような色を感じ居心地が悪くなったヤンは素つ気なく答えた。

そこにシェーンコップが話に加わってきた。

「いやあなたなら可能でしょう。この戦いであなたはおそらくかのアツシユビー提督に比肩する名声を得るでしょう。それをどう使うのか。あなたが連合を導いていくつもりなら喜んでお伴しますよ」

「私は同盟の軍人ですし、第一早く引退したいんです。そんな役目は別の人にお譲りしますよ。さて、急ぎ出撃の準備をします。要塞に関しては手筈通りお二人にお任せします」

オーベルシュタインとシェーンコップ、タイプの違う二人からの波状攻撃にさしものヤンも早々に撤退を決め込んだ。

シェーンコップも去った後、オーベルシュタインは一人考えていた。再度亡命してローエングラム伯に与して帝国を内から滅ぼすことも考えていたが、同盟にも人がいたようだ。ヤン・ウエンリー、もう少し見定める必要があるな、と。しかし差し当たってオーベルシュタインにはやることがあった。捕虜リストに留意すべき名前を発見して

いたからだ。オーベルシュタインは部下に命じた。

「捕虜リストにあるフェザン傭兵軍ルパート・ケツセルリンク特任大佐を連れてくるように。くれぐれも内密にな」

宇宙暦796年／帝国暦487年5月18日

独立諸侯連合 クラインゲルト星域―連合行政政府（惑星リューゲン衛星軌道） 超高速通信

ウルリツヒ・ケスラー少将がスクリーン越しに報告を行っていた。「北部からの住民避難と重要施設の退避は無事成功しました」

軍民問わず連合の非戦闘艦艇を掻き集めて実施した大規模疎開作戦はクラインゲルト伯の息子であるアーベント・フォン・クラインゲルト中将与、ケスラー少将の二人の指揮の元、無事成功を収めた。

クラインゲルト伯は労いの言葉をかけた。「ご苦勞だった。卿の迅速な指揮がなければ、この作戦はもつと時間を要しただろう。クラインゲルト領を治める者としても感謝する」

「いいえ、伯爵が北部諸侯の説得に尽力して下さらなければ、この作戦にはもつと時間がかかったことでしょう。それに私は中将の補佐をしたに過ぎません」

クラインゲルト伯はしばし言葉に迷った。

「ケスラー少将、すまないが今後もアーベントを支えてほしい」
「もちろんです」

ケスラーは即座に答えた。

その日のうちにクラインゲルト伯は連合盟主として北部領土放棄宣言を行った。
連合による北部領土放棄は三者に異なる反応を引き起こした。

銀河帝国 北部侵攻艦隊

北部侵攻艦隊司令官グライフス上級大將は戸惑いを隠せないでいた。

「落ち着くのだ。動くのは賊軍の意図を分析してからだ。これは焦土戦術の一種ではないのか」

門閥貴族でもある参謀の一人が反論した。

「何を仰るのです。イゼルローン回廊までの領土を放棄したということは、勞せず
に領土拡大を行うチャンスです。それに同盟を僭称する叛徒どもが我らより先に北部を占
領する可能性があります。早く占領に向かうべきです」

別の参謀がさらに決断を迫った。

「そうです。司令官、決断を」

しばらく迷った後、グライフスは決断した。

「艦隊1万5千を後詰めとし、残り3万5千で北部領土を占領せよ。叛乱軍も動くかもしれない。遭遇を警戒し、哨戒艇を常に先行させるのだ。」

侵攻を開始した帝国艦隊であったが、見せつけるかのように頻繁に姿を現わす偵察型スパルタニアンによつて警戒態勢を取らされ、その進撃速度は想定されていたよりもはるかに遅いものとなった。

これは実のところイゼルローン出口から侵入してきた同盟艦隊のものではなく、駐留艦隊から派遣された少数の空母によるものであった。

「こんな工作任務にエースパイロットを投入するなんて、ヤン提督も人使いが荒い」ポプラン中尉はそうぼやきながらも任務を着実にこなしていった。

自由惑星同盟 首都星ハイネセン

報告を受けたサンフォードは耳を疑った。

「連合が北部領土を放棄しただと？ そんな馬鹿な」

トリユーニヒトは淡々と説明を行った。

「事実です。帝国は北部領土の回収にまず動くでしょうな。そうなるとイゼルローン回廊まで帝国の大艦隊が接近することになる。ご存知の通りイゼルローン回廊連合側出

口惑星モールゲンには5千万を越える同盟市民がおります。帝国の侵攻を座視していは、彼らは見捨てられたと受け取るでしょうな」

「イゼルローン回廊連合側出口惑星モールゲンは大解放戦争時代に獲得した同盟領であり、連合との貿易のため発展し、今では5千万人を越える人口を抱えていた。

サンフォードは動揺からようやく回復してトリューニヒトに答えた。

「勿論だ。早く艦隊を派遣してくれ」

「しかし、派遣した後はどうしますか。連合領に侵入するのであれば、帝国と戦火を交えることになりましょう」

「……艦隊はモールゲンに留まらせよう。当初の予定通り、今帝国とぶつかることはない」

「承知しました。しかし、同盟市民はどう受け取るでしょうな。私が早々に援軍を出すべきだと主張していたのをお忘れなきように」

同盟からイゼルローン回廊付近に待機していた第7艦隊がモールゲン防衛に出発した。

帝国北部侵攻艦隊は同盟艦隊を意識する余り、北部をゆつくりと占領しつつもそれ以上積極的な動きを取ることができなくなった。

銀河帝国 南部侵攻艦隊

連合の北部放棄宣言を聞いた艦隊司令部は騒然としていた。

ミュッケンベルガーが呟いた。

「連合は正気か？」

それを聞いたフレーゲル中將がミュッケンベルガーに答えた。

「連合は北部を放棄して南部防衛に集中する腹かもしれません」

「……おそらくそうだろうな。あるいは北部の防衛は同盟に任せるつもりか。いずれにしろ、我々は賊軍全軍と戦うことを想定しなければならない。」

「全軍と言つても叛徒どもの駐留艦隊を加えて四万隻程度。まだ我が軍が優勢です。どうということはないでしょう。なおご心配であればガイエスブルク要塞の駐留艦隊を出させれば」

その時、通信内容を何度も確認していた通信兵が報告を上げた。

「申し上げます！ガイエスブルクブルク要塞が陥落、繰り返します、ガイエスブルク要塞が陥落！駐留艦隊も壊滅！」

艦橋は騒然となった。

「なんだと！あの難攻不落のガイエスブルクが落ちるなどあり得ぬことだ」

「敵の偽報ではないか」

ミュッケンベルガーは自身も衝撃を受けつつ、蒼白になったフレীগエルに声をかけた。

「これでガイエスブルク要塞の戦力は当てにはできなくなつたな。一方で要塞を賊軍の手に置いたまま帰るわけにも行かぬ。賊軍と一戦を交え勝利を得る他ない」

「……元よりその予定でしょう。連合を滅ぼせば、要塞の陥落等もはや関係はありますまい」

フレীগエルは自分自身に言い聞かせるように答えた。そう、最後に勝ちさえすればよいのだ……

第一部 3話 アイゾール星域会戦

独立諸侯連合 アイゾール星域

「連合はアイゾール星域に艦隊を集中させた。スクリーン越しに提督たちが会話を交わしていた。

ウオーリックが率直な感想を口にした。

「ここまででは順調のようですな。圧倒的な劣勢から、ここまで状況を整えるとは、ヤン提督恐るべしですな」

メルカツツは淡々と語った。

「ローエングラム伯とはまた違った才を感じる。もはや老兵は去るのみかもしれん。しかし、これでもまだ五分とはいかない。連合の興廢は我々が帝国の艦隊を打ち破れるかどうかにかかっている」

クロプシュトックも口を開いた。

「我々は三個艦隊3万3千、あちらは5万。ヤン提督がガイエスブルク要塞より到着するまで、なんとか保たせましょう。アイゾールへの帝国軍の誘導はうまくいっていますか?」

ウオーリックは父譲りの口髭をいじりながら答えた。

「ああ、アイゾールに着いた帝国軍の反応が楽しみだ」

宇宙暦796年／帝国暦487年5月25日、連合艦隊3万3千隻と帝国南部侵攻艦隊5万隻はアイゾール星域で遭遇した。

帝国軍の参謀たちは予想外の事態に困惑していた。

「過去の星図と地形が変わっている」

「賊軍め、このような決戦のためにこの星域を改造していたな」

「しかし、そんなことは一朝一夕にできることはありませんぞ」

アイゾール星域は大部隊の展開に適した地形であるはずだった。だからこそ彼らは連合艦隊が待ち受けていることを予想しながらもその誘いに乗ったのだが、実際のアイゾール星域は多数の小惑星が分布する守りに適した地となっていた。これは、仮想敵国である帝国が自国の星図をすべて把握していることを問題視した「バロン」ウオーリックと、後に「守りの剣」と呼ばれるようになるカール・フォン・ラウエが、諸侯連合創立時から計画・推進したものだ。帝国の予想侵攻経路に位置する無人星系を、惑星を爆破して人工の小惑星帯をつくる等して、要害の地につくりかえる。アイゾール星域はその計画が実施された地の一つであった。

「それに賊軍ばかりで叛乱軍の艦隊がおりませんな」

フレーゲルがミュッケンベルガーに問いかけた。

「ガイエスブルク要塞を落としたのは叛乱軍だったということだ。まだ戦場に着いていないのは当然だろう。彼らが到着した場合彼我の差が縮まることになる。その前に決着をつけたいところだ」

時間が限られる中、参謀たちは作戦を立案した。

「彼らに後背からの奇襲を許した場合、まずいことになります。とはいえ、遊軍をつくるわけにはいかない。後背には機雷を散布して奇襲を防ぎましょう」

「小惑星帯にも敵が潜んでいる可能性があり、敵右翼に不用意に近づくのは危険です。兵力は我らが上、敵左翼艦隊に2個艦隊を当て、半包囲に持ち込みましょう」

機雷敷設完了後、帝国艦隊は前進し、連合艦隊と対峙した。クロプシュトゥク艦隊にドイツケル中將の艦隊、メルカッツ艦隊にミュッケンベルガー元帥直卒の艦隊、ウォーリック艦隊にフォーゲル中將、シュターデン大將の艦隊があたる形となった。

会戦推移1

距離が徐々に詰められ、ついには双方のビームの有効射程範囲に入った。

「ファイエル！」

「ファイエル！」

遠距離から砲撃戦は、兵力の差にも関わらず当初連合に分があった。

帝国艦隊のビームは星域に薄く広がる宇宙塵によって威力を減衰された。一方で、連合艦隊の方は本星域の性質を知り抜いており、連射性能を落とす代わりに威力を上げて帝国軍の戦列に有効打を与えることに成功していた。

帝国艦隊もすぐに対応を始めた。

「ビームの出力を上げつつ敵と距離を詰めよ」

連合艦隊はそれに対しゆっくりと後退を始めた。

帝国艦隊は前進速度を上げ接近しようとしたが、散在する小惑星とそこに設置された自動砲台によって戦列を乱され、そこを連合に砲撃され損害を広げる等、思うに任せなかつた。

「小惑星も目の前に来たならば敵と思ひ砲撃せよ」

帝国が思うように前進速度を上げられない理由はもう一つあった。

「賊軍が例の戦術を用いる様子はありません。このような宙域では必ず仕掛けてくるものと思いましたが」

「古い戦術だ。対応策も確立されているからな」

「しかし乱戦になればもしまやという事も」

「いない敵を恐れて時間を浪費し、現実の敵の到来を許すのは愚の骨頂だ。警戒よりも前進速度を優先、早急に接近して敵陣を食い破れ」

ミュッケンベルガーは全軍に総攻撃を命じた。

会戦推移 2

「なかなか堅い！」

帝国左翼を務めるプフェンダー中將は少数のクロプシュトゥック艦隊をなかなか打ち破れないでいた。連合は、アルタイルで残存した艦艇のうち装甲の厚い艦艇を優先的に復帰させ戦力に組み込み、艦隊の防御力を高めていた。

「しばらくの辛抱だ」

クロプシュトゥックは少ない戦力で、プフェンダー艦隊の攻勢をよく凌いでいた。

プフェンダー中將は更にレンネンカン普少將の分艦隊に命じて側面迂回を試みたが、小惑星帯に潜んでいたミサイル艦、宙雷艇等の部隊の伏撃を受け、失敗に終わった。

ミュッケンベルガー直属の艦艇も、メルカッツ艦隊を崩すことが出来ないうでいた。

「流石メルカッツ、近接戦闘でも隙がない」

フォーゲル、シュターデンの両艦隊もウォーリック艦隊を破ることが出来なかった。

ウォーリックは麾下のカール・ロベルト・シユタインメッツ少将に艦隊の半分を任せ、フオーゲル艦隊と対峙させ、自らはシユターデン艦隊に当たった。シユターデン艦隊は延翼し、ウォーリック艦隊を半包围しようと試みたが、ウォーリック艦隊も同様に延翼し、容易にそれを許さない。

戦線は膠着状態であつたが、兵力差からこのまま消耗戦が続けば、最後に残るのは帝国軍であつただろう。そこに連合艦隊後背に艦隊が出現したとの報が入った。

それは同盟艦隊ではなかつた。

「後背に出現した艦隊約四千隻、フェザーン傭兵艦隊と……帝国艦隊と思われませう」

「要塞駐留艦隊の残兵か？」

「だとしたら賊軍を挟撃する好機だ」

しかし帝国軍の期待は、裏切られることになつた。

戦況の変化に帝国艦隊の攻勢が停滞した隙にウォーリック艦隊が平行移動し、メルカツ艦隊との間にできた間隙に、所属不明艦隊が前進し、そのまま帝国の艦列に突入した。

帝国艦隊に動揺が走つた。

「フェザーンの守銭奴どもが裏切つたのか？」

「いや、鹵獲された艦艇を連合が使っているのだ！」

敵軍の動揺を見てとったメルカッツは、全軍に攻勢を命じた。

艦隊の突入により壊乱したフォーゲル艦隊が壁となつて孤立したシユターデン艦隊の側面をウォーリック艦隊が突き損害を広げる一方で、ミュッケンベルガー元帥の本隊をメルカッツ艦隊、プフェンダー艦隊をクロプシュトゥック艦隊が拘束し、援護を許さなかつた。

「あの艦隊は自動操縦だ。じきにフォーゲル中將が混乱を収める。そうすれば兵力はただこちらが優位。挽回は十分可能だ」

その期待はフォーゲル中將捕縛の報によつて裏切られることになる。

突入した艦隊に紛れ込んでいたジーグルド・アスタフェイ少將率いる特殊揚陸艦戦隊、通称斬り込み部隊が接舷攻撃でフォーゲル中將の旗艦バツツマンを制圧したのだ。バツツマン上で炭素クリスタル製の日本刀（サムライシユヴェールト）を腰に納めたアスタフェイ少將が独りごちた。

「この年で最後の奉公ができましたなあ」

艦隊中枢への接舷攻撃は帝国に対して常に劣る戦力で防衛戦争を行つてきた連合が編み出した、苦肉の策であつた。彼らは本来、少数の損傷艦を目くらましに、機を見て突撃を敢行する予定であつたが、ヤン提督から連絡があつたことで計画を変更していた。ガイエスブルク要塞からフィツシャー准將が引き連れてきた鹵獲艦合計5千隻に

紛れて旗艦に斬り込みを掛け、最大限の成果を出すことに成功した。

フォーゲル艦隊は既に四分五裂の状態にあった。

会戦推移 3

ミュッケンベルガーは一旦後退と再編を命じようとしたが、さらなる状況の変化がそれを許さなかった。

機雷原後背へのヤン艦隊の出現であった。

「機雷原後方に艦隊出現！一万余隻前後！ 同盟艦隊と思われれます」

「数が多い！間違いではないのか？」

同盟艦隊から機雷原に向けて何本かの光の柱が出現した。

「機雷原に穴が！ 信じられません！」

ミュッケンベルガーら上層部はその正体を知っていた。

「指向性ゼツフル粒子か！やはり情報が流出していたか」

連合と同盟は、連合に亡命したヘルクスハイマー伯よりその情報を得て、不完全ながら

「同盟艦隊が侵入してきます！」

「同盟艦隊が侵入してきます！」

「このままでは包囲殲滅されます！」

ミユツケンベルガーはこのまま戦っても無残な敗北が待っているだけと考え、撤退を決断した。

会戦推移 4

「包囲が完成する前に天頂方向に転進し、戦場を離脱せよ」

帝国艦隊の動きを見越してヤン提督は艦隊に移動を命じた。

「機雷原はもう捨て置いていい。機雷原に侵入した部隊を残して天頂方向に移動、撤退する帝国艦隊の側面を削ぎ落とせ」

実のところ、ヤン艦隊は鈍足の艦艇をガイエスブルク要塞に置いてきており、実数5千隻程度であった。小惑星を曳航して数を誤魔化していたのだった。また、ヤン艦隊が保有していた指向性ゼツフル粒子発生装置は未完成のもので、効果範囲も回数も限定されておらず、帝国艦隊が迎撃態勢を整える前に機雷原を踏破し切るのとは不可能であった。帝国軍は5千隻程度をヤン艦隊の牽制に振り向ければ、まだ互角の戦いを行うことも、整然と撤退することも可能であったし、その時間的余裕もあつた。しかし、指向性ゼツフル粒子の衝撃が、帝国の諸將に正確な状況判断を行う心理的余裕を失わせていた。そ

れこそがヤンの狙いだった。

メルカツツも連合の各艦隊に追撃を命じた。撤退は困難を極めた。熾烈な撤退戦の過程で、レンネンカンプ少将、ドイツケル少将ら多数の将官が戦死し、多数の艦艇が破壊された。生還率は4割を切った。

フェザーン回廊帝国側出口一帯から帝国の軍事力は一掃され、ほどなく連合の勢力圏となった。

第一部 4話 戦いの後

宇宙暦796年／帝国暦487年6月3日 銀河帝国 帝都オーデイン

ラインハルトとキルヒアイスが遠征の結果を議論していた。

「ラインハルト様、今回の遠征は失敗のようです。帝国は、北部で領土を拡大したものの、ガイエスブルク要塞と共にフェザーンとの連絡路を失い、また、叛乱軍と直に国境を接することになりました」

「ミュッケンベルガーが負けるかもしれないとは思っていたが、ここまでの結果になるとは。先に侵攻してこちらの侵攻経路を限定・誘導した後、同盟に我らとの対峙を強いて我々の戦力の半数を拘束した。これは一介の戦術家にできることではない。やはりヤン・ウエンリー、只者ではない」

「それにガイエスブルク要塞の奪取」

「ああ。しかし、その方法よりもその意図がどこにあるのかが気になるところだ。ガイエスブルク要塞の戦力が気になるなら、少数の戦力を派遣して攻めるそぶりだけ見せればよかったのだ。フェザーン回廊出口の勢力圏化もだ。単に連合防衛を考えた場合は不要な手だ。新たに勢力圏化した領域も貴族どもの抵抗があるから短期間では統治で

きまい」

「それでは意味のない手だったと?」

「いや、連合にこの状況を活かす知恵があれば長期的には連合の戦略的状況を改善することにはなるだろうな。しかし同盟にとつては、連合が従属的立場から脱して主体的に行動するようになるだけで決して得にはならない。ヤン・ウエンリーが構想したことに違いはないだろうが、あの男は同盟を捨てて連合につくつもりなのか?」

ラインハルトの疑問にキルヒアイスは答えられなかった。

オーデインに戻ったミュツケンベルガーは、会戦における敗北とガイエスブルク要塞及び南部領失陥の責任から宇宙艦隊司令長官職を辞任した。死罪を求める声もあつた。しかし、イゼルローン回廊側では領土を拡大していたことから、公式にはあくまで痛み分けと発表されたため、「皇帝陛下の慈悲」により死罪は免れることとなった。後任はローエングラム伯となり、ローエングラム元帥府が正式に発足したが、敗戦の影響もあり暫くは陣容整備に時が必要であつた。また、連合領占領の功でグライフスが元帥に昇進し、宇宙艦隊副司令長官となり、北部占領地域で3個艦隊を率いて同盟と対峙を続けていた。

宇宙暦796年／帝国暦487年6月15日

独立諸侯連合 連合行政府（キツシンゲン星域）

連合は、リユーゲンが帝国占領地域に近いことから行政府をキツシンゲン星域に移行させていた。そのキツシンゲン星域において連合の戦勝式典が行われていた。式典嫌いのヤンであったが、今回最大の功労者としてウォーリック記念大勲章を受章することになっていたため、出席せざるを得なかった。ヤンの連合における人気は絶大で、ヴァンダー・ヤン（奇跡のヤン）やヤン・デア・マギエル（魔術師ヤン）といった二つ名で呼ばれるようになっていた。ヤンを一代貴族に叙する話もあったが、それはヤンの方から断っていた。

式典を終えた後、クラインゲルト伯は関係者を非公式に呼び集めた。

「我々は北部領土を失った代わりに南部で勢力圏を拡大した。同盟は北部領土の半分を占領した一方で、帝国と半世紀ぶりに国境を接することになった。そして帝国は北部領土の半分を手にした一方、同盟と北部で睨み合いを続けることになり、その一方で、フェザーン連絡路を失うことになった。さて、我々はこれからどうすべきか。今回最大の功労者であるヤン提督の見解を聞きたい。」

ヤンは困ったような表情をした。

「二つ言っておかないといけないのは、私は同盟の軍人ということですよ。連合の進路を決めるのはあなた方です。」

「それはその通りでしょうが、しかしこのように状況を動かしたのはあなただ。何か見通しは持っているのでしょうか？」

そのように問うクロプシュトックの声には、以前のような険はなかった。

ヤンは仕方なしに答えた。

「……そうですね。連合にとつて重要なのはフェザーンとどう関わるか、です。」

集まった一同の表情に驚きが現れた。

「同盟でも帝国でもなくフェザーン？」

「ええ、今回の一件ではフェザーンが最も困った立場になりました。帝国との連絡線を断たれたのですから、交易国家としては致命的です。連合にとつてはこのフェザーンと、共存共栄を目指すか、それとも消滅させるかが問題となります」

「消滅……」誰かが呻いた。

「フェザーンと共存することを選択するなら、連合を経由して帝国と交易することをフェザーンに認めればよい。彼らは裏で画策することはやめないでしょうが、表立って連合に敵対することはないでしょう。できれば相互防衛条約でも結ぶのが理想的です。これまでのようにフェザーン傭兵に悩まされることもなくなり、連合にとつては今までより望ましい状況になるでしょう。お互いの立場がありますからすぐには難しいでしょうが、将来的には緩やかに統合していく道を探ってもいい」

一同の理解が追いついた頃合いを見計らつてヤンは続けた。

「もう一つはフェザーンを消滅させる道になります。対立と言い換えてもいいのですが、残念ながら今の連合にはフェザーンと帝国の二国を相手取つて長期的に対立を続けるだけの経済力・軍事力がない。このため、連合は対立を選択するならばすぐにでもフェザーン占拠を目指すべきです。フェザーンの軍事力は連合に大きく劣ります。何よりフェザーンにはフェザーン本星しかない。これを短期間に占領することは連合の軍事力でも可能です。あるいは圧力と交渉によつて平和裏に併合することも可能かもしれません」

メルカツツが尋ねた。

「軍事的には可能でしょうな。しかし、同盟や帝国がそれを許すかどうか」

「事が始まる前にお伺いをたてたならそうでしょう。しかし、短期間にフェザーンを占領し、彼らが保有していた国債の無効化を宣言すれば？帝国はともかく、同盟に力を失つたフェザーンを助ける義理はありません」

驚愕、納得、様々な感情が場に充満した。

「フェザーンと組むにしろ、併合するにしろ、これによつて連合は長期的に国力を増し、晴れて帝国及び同盟と抗し得る第三勢力となることが出来ます」益州を得て蜀を建国した劉備のように、とヤンは頭の中で付け足した。

「同盟と抗し得る、とはヤン提督はなかなか恐ろしいことを仰る」

「皆さんも仮に同盟が帝国を打倒したなら、と、考えたことはあるでしょう。フェザーンも連合も帝国と同盟が争っていたからこそ今まで存在してこられました。この後も今までと同じ立場に甘んずるか、違う道を取るかはあなた方次第です」

沈黙が場を支配した。ややあつてウオーリックがスクリーン越しにヤンに話しかけた。ウオーリックのみは南部において艦隊を率いて南部占領地域の平定を進めており、任地から通信で参加していた。

「ヤン提督、あなたは同盟軍人というより歴史学者のように語るのですね」

「私にとつてそれは褒め言葉です」

「そのように客観的に銀河のことを考えられるのなら、我が父と同じように、いつそのことと連合に帰属したらいかか？我々は歓迎しますよ」

「私はこれでも民主共和制に愛着がありますから。人類が選び得る次善の政体として。あなたの方の実践する高貴なる者の義務も興味深くはありますが、あくまで歴史学の対象としてです」

「残念です。我々は有能な戦略家無しでこの激動の時代を乗り越えないといけないよう
だ」

「果たしてそうでしょうか？」

ヤンはウオーリックの目を見ながら続けた。

「私の本来の案ではガイエスブルク要塞には少数の牽制部隊を送るだけの筈でした。私にガイエスブルク要塞を落とすことを提案し、アイゾールの戦いの後には南部帝国領の勢力圏化を進めたあなたなら、この状況も最初から見えていたのでは」

ウオーリックは父親のように芝居がかった動作で答えた。

「買い被りですよ。私は父同様一流半止まりの男です。今回も状況に乗ることしかできなかつた。私は、あなたなら何か策を持っているかもしれないと、そう思つて尋ねただけです。まさか本当にガイエスブルクを落とすつもりとは。」

やれやれ、物ぐさなはずなのに、頼まれるとついやってしまう、これは私の悪い癖なのかもしれないとヤンは思った。

「そういうことにおきましようか」

同盟本国では政権の中途半端な判断に批判が集まっていた。また、秘密会合の内容もどこからかリークされて大問題となっていた。

「政権の人気取りを理由に方針決定が行われたのか！」

「北部領土を帝国に抑えられたのは大きな失敗だ。艦隊を派遣するなら北部領土を帝国より先に解放すべきだったのだ」

「帝国と国境を接することになり、結果的に防衛負担が増えることになった。こうなる前に連合を支援すべきだったのだ」

一方で、ヤンに対しても賛否両論があった。

「難攻不落のガイエスブルク要塞を落とす、帝国の侵攻を防いだ手腕は賞賛するしかない」

「ヤン提督のしたことは全て連合の利益になっただけで、同盟にとつては今後の苦労が増えただけではないか」

「ヤン提督は与えられた任務を忠実に果たしたのだ」

「ヤン提督は、同盟で勤務していた頃は穀潰しだの昼寝だのと言われていたそうではないか。それがエルランゲンの英雄、アルタイルの英雄と持て囃され、同盟よりも連合に愛着を持っているのではないか」

「ヤン提督は自ら招いた帝国の脅威をどうするつもりなのか」

ヤンは連合の民衆からは絶大な人気があったが、同盟市民からはそれほど認知も支持もされていなかったのだ。

宇宙暦796年／帝国暦487年6月のうちに、サンフォード政権は次の選挙を待たずに倒れ、トリユーニヒトが暫定議長に選任されることになった。

自宅の書齋でトリユーニヒトは祝杯をあげていた。

「フェザーンの予想とは大分異なる結果となったようだが、私にとつてはまず満足できる結果になった。しかし、ヤン・ウエンリー、連合、いずれも私が帝国を打倒した国家元首となるには邪魔な存在だ。しばらくは、フェザーンの思惑に乗ってやるとするか」

シトレ元帥も当初の思惑通りにはいかず、ロボス元帥と共に辞任することになった。統合作戦本部長にはグリーンヒル大将、宇宙艦隊司令長官にはドーソン大将が後任となった。ヤン・ウエンリーも中将に昇進し、駐留艦隊司令官にひとまず留任されたが、駐留艦隊の戦力補充は行われなかった。

第一部 5話 策謀

宇宙暦796年／帝国暦487年7月、国防委員会からヤン提督に召還の指令が出た。

「ヤン提督は連合防衛における同盟の利益を無視した軍事行動に関して査問に応じるように。ヤン提督は艦隊をフィッツシャー少将に任せ、可及的速やかにハイネセンに帰還せよ」

ヤン提督としては国防委員会の命令には従わざるを得ない。

「やつぱりやり過ぎたか。ここらが引退のしどきかな」

どこから話を聞いたのか、オーベルシュタインとシエーンコップがヤンに会いに来た。

彼らはいずれも昇進し、オーベルシュタインは連合軍情報局局長となっていた。

「ヤン提督、わざわざ査問にかかりに帰還される必要はありますまい。このような冷遇を受けるならいつそのこと連合に帰属されてはいいかがか」

「きつと楽はさせてもらえないんだろう？やめておくよ」

すかさずシエーンコップが提案した。

「どうしても帰られるならローゼンリッターが護衛しますよ。何ならハイネセンまで乗り込みましょうか」

誰から見ても決して馬が合うとは思えない二人であったが、何故かヤンに関わる時は無言の連携を見せた。ヤンはため息をつきながら答えた。

「もう少しで年金も貰えるようになるし、国防委員会を刺激するようなことは避けるよ」

ヤンは巡航艦レダⅡに乗り、同盟領への帰路についた。同盟領の手前まではケスラー中将の艦隊が護衛に付いた。同盟領に入ってからには迎えの部隊がやってくる手はずであったが、その姿は見えなかった。しばらく単独航行を続ける巡航艦レダⅡに、宙域に帝国の偵察艦が出現しており、遅れていた護衛部隊がレダⅡに向かっていているとの通信があった。一時間後、一隻の帝国船がレダⅡの近傍に出現し、レダⅡに対して砲撃を始めた。応戦しようとしたところ、それを追うように同盟駆逐艦二隻が出現し、武装船を集中攻撃して破壊した。駆逐艦の一隻が接舷とヤン提督への挨拶を求めたため、艦長はヤンに確認の上、接舷を許可した。乗り込んで来たのは確かに同盟軍の軍服を来た男達であったが、目的は挨拶ではなかった。出迎えたレダⅡ艦長らはブラスタターの前に倒れた。ヤンは日頃のものぐさが功を奏して、出迎えの場にはいなかったため、男達の襲撃を受けるまでに時間的猶予があった。頼まれたらやってしまうこの性格、いい加減直した方がよいか、と場違いなことを考えながら、逃げるヤンであったが、一発の銃撃に

より左腿を撃ち抜かれ、血溜まりの中死を待つばかりとなった。撃つた人間は狂ったように叫びながら、ヤンの死を確認することもなく立ち去ってしまった。

このまま死ぬのか、まあ誰か迷惑をかける家族がいるわけでもなし、それでもよいか、ジエシカにはラツプがいるし、と、そんな思いが過ぎりつつ時間が過ぎていった。考えるのに支障を感じるようになった頃、遠くからヤンを呼ぶ声が聴こえてきた。これがお迎えというやつか、と薄れゆく意識の中、ヤンは思った。

「……提督……ヤン提督!!」

目の前にプラチナブロンドの髪がチラついた。美しいな、そんな場違いなことを思いながらヤンは意識を失った。

「間に合いましたわ、ヤン提督」

ヤンが目覚めた時にも、一番先に目に入ったのはプラチナブロンドの髪であった。

「ヤン提督! よかった……」

印象的な髪の持ち主の女性は潤んだ目でヤンを見つめていた。

「君は?」

「ローザ。ローザ・フォン・ラウエ少佐です。エルランゲンでの恩を、今僅かですが返すことができました」

同盟との国境で活動中の連合軍情報局所属の特務艦アイフェル艦長ローザ・フォン・

ラウエ少佐は局長オーベルシュタインからヤン提督暗殺計画の存在を知らされた。その瞬間には彼女の行動は決まっていた。

「念のために言っておくが、この情報を知った卿が救援に向かったとしたら、これは同盟への不法進入となるし、万一の時は卿の独断専行として処理されることになる。それでもよいか？」

「無論です。ラウエ領エルランゲンの民と、何より私自身の恩人であるヤン提督のためならばどこにでも行きます」

ローザはこの時、オーベルシュタインがいつどこでその情報を入手したのか、疑問に思うことはなかった。そして、彼女は同盟領内で同盟駆逐艦に接舷されたレダIIを発見し、ヤンの救出に成功することになった。

宇宙暦796年／帝国暦487年8月2日、連合盟主クラインゲルトの名で、次のような声明が発表された。

「ヤン提督の乗艦に攻撃を加えていたのは同盟艦だった。我々としては、同盟軍の中にヤン提督を害そうとする勢力がいると考えざるを得ない。同盟による真相究明を望む。また、それが為されない状態で大恩人であるヤン提督を同盟に帰すわけにはいかない」

同盟は事実無根としてこれに抗議した。

第一部 6話 新たな英雄

宇宙暦796年／帝国暦487年9月、ヤンの問題が解決する前に、大きな事件が起きた。帝国の北部駐留艦隊二個艦隊が僅か半個の同盟艦隊に敗退するという事件である。

情報部より戦闘記録を入手したウォーリック大將は衝撃を受けることになった。

「これは、まるでアッシュビー提督の采配ではないか。」

その出自もあつてウォーリックは、幼い頃よりアッシュビーの戦譜を意識し、よく覚えていた。ある時点で理解不能の判断が、先々では最適な行動であつたと分かる、未来を予測しているかのような艦隊行動の数々。それはまさにアッシュビー提督を彷彿とさせるものであつた。

ローエングラム元帥府でも、今回の敗戦に対してキルヒアイスが諸將に見解を尋ねていた。軍の弱体化を見たカストロプ公が起こした反乱を短期間に鎮圧したキルヒアイスは中将に昇進していた。

ワーレン中将が戦闘の推移を確認して感嘆の声を上げた。

「見事だ。いずれの艦隊も、会敵した直後に急所を的確に突かれ、隊列を乱して短時間で

大きな損害を出している」

「そのぐらい俺にもできるぞ」

勇猛をもつて鳴るビッテンフェルト中將が不満そうに応じた。

「卿の場合、相手だけでなく自分も大損害になるではないか」

ロイエンタール中將の言葉は辛らつだった。

ビッテンフェルトが怒り出す前にミッターマイヤー中將が話を遮った。

「それよりも、敵未来位置への最短経路を行くこの戦場移動の妙だ。結果から見れば最適解なのはわかるが、このような動きは未来予測でも出来なければ無理ではないか？」

この疑問に答えられるものはいなかった。

ロイエンタールが静かな声で呟いた。

「我々はこの敵に勝てるかな？」

そしてローエングラム伯はどうだろうか。その問いをロイエンタールは胸の内に留めておいた。

宇宙暦796年／帝国暦487年9月31日、同盟最高評議会議長ヨブ・トリューニヒトより同盟全土に向けて演説が行われた。

「今、同盟は再び帝国と国境を接することになった。同胞諸君がこれを不安に思う気持ちも私にはわかる。しかし、思い出して欲しい。諸君らの父、諸君らの祖父、諸君らの

先祖はずっと専制政治と闘って来たのだ。この銀河に民主政治の灯火を守るのは同盟のみであり、悪逆なる圧政者の手から、帝国の、そして連合の民を解放することができるのも同盟のみである。打ちてしまふ。今こそ専制政治を倒すのだ」

万雷の拍手が鳴り響いた。

「ここで同胞諸君に新しい英雄を紹介したい。記憶に新しい快拳、僅か半個艦隊で帝国の大艦隊を打ち破った男だ。彼はライアル・アトキンソン中将、今まではそう名乗っていた」

赤髪の男がそこに立っていた。その赤髪と鋭く輝く両眼を備えたその精悍な顔は、見る者にある英雄を想起させた。

「ご紹介ありがとう。私は今まで、ある出自を隠して生きてきた。髪の色も変えて。そう、気付いた人もいるだろう。私はかの英雄ブルース・アツシユビーの血を引いている」
どよめきが会場を包んだ。

「波乱のない時代であれば、私はこのまま出自を隠して生きていったことだろう。しかし、同盟と帝国が50年振りに国境を接した時、私は悟ったのだ。時代が、同盟が、再び英雄を欲していると。私は今ここにあって名乗ろう。私はブルース・アツシユビーの志を継ぐ者、そして帝国を滅ぼす者、ライアル・アツシユビーだ。私は宣言する。まずはブルース・アツシユビーの置き土産、連合を同盟領として回収し、その後必ずや帝国

を打倒すると」

トリューニヒトが再び壇上に登った。

「同盟市民諸君、自由惑星同盟は連合人民30億解放のため、諸侯連合に宣戦布告する。全銀河に自由を！全銀河を解放せよ！」

戸惑いを感じる者がいたとしても、その思いは熱狂の渦に巻き込まれ、すぐにかき消された。

宇宙暦796年／帝国暦487年10月、ここに同盟、連合間の戦争が始まった。

そして同月、銀河帝国皇帝フリードリヒ四世が崩御した。

銀河は更なる激動の時代を迎えることになった。

第二部 1話 連合の方針と初戦

宇宙暦796年／帝国暦487年10月15日

独立諸侯連合 連合行政府（キツシンゲン星域）

独立諸侯連合は、宣戦布告を行ってきた同盟への対応に追われていた。その日は連合の対同盟の方針を決める会議が開かれていた。参加者は以下の通りであった。

盟主：クラインゲルト伯爵

外務卿：ハーフェン伯爵

軍務卿：カイザーリング男爵

第一防衛艦隊司令官兼宇宙艦隊総司令官：メルカツ元帥

第二防衛艦隊司令官：シュタインメッツ中将

第三防衛艦隊司令官：ケスラー中将

第四防衛艦隊司令官：クロプシュトック大将

第五防衛艦隊司令官：ウオーリック大将

統帥本部総長：ブルクハルト・フォン・エーゲル元帥

軍情報局長：オーベルシュタイン少将

オーベルシュタインが情報局の代表として報告を行っていた。

「情報局の調査によれば、侵攻規模は最大8個艦隊10万隻規模と推定されています」

クラインゲルト伯が嘆息した。

「10万隻……先の帝国の侵攻と同規模か。対するに我々は損傷艦、鹵獲艦の再戦力化を進めたとはいえ、5万隻弱。流石に帝国軍に対したのと同じ戦略は使えまいし如何したものか。外務卿、同盟は本当に連合の滅亡を望んでいるのか？ 領土割譲なり何なり、何か要求を行って来てはいないのか」

「ありません。既に弁務官は帰国しましたし、非公式のルートで問い合わせを行っても無条件降伏を要求されるのみでした。状況が大きく変わるまで、同盟は聞く耳を持たないでしょう」

オーベルシュタインは補足の説明を行なった。

「8個艦隊とは言っても、動員体制が整ってからのことです。同盟の正規艦隊は、先に正規艦隊から外された連合駐留艦隊を除いて現在11個艦隊。その7割を派遣するには相応の準備が必要です。同盟は財政均衡のため、再編中の艦隊を含めて約半数を非稼働の状態に置いていました。それを実戦に耐える状態にするには最低でも4ヶ月はかかるかと推定されています。まずは4個艦隊5万隻程度に対処すればよいのです」

「つまりは今回も各個撃破が可能というわけか」

諸將の顔に理解の色が広がった。

「それだけではありません」

オーベルシュタインは続けた。

「同盟は民意で動く国です。同盟市民は今新しい英雄の出現に熱狂状態にあります。しかしそれは一時的なものです。市民の熱狂を維持するには4ヶ月も経たずに何かしら勝利を上げる必要があるでしょう。連合としては、彼らに勝利を許さないことが重要です。さらに、アツシユビーを名乗る男を戦場で討ち取ることが出来れば、同盟市民は継戦意欲を失うでしょうな」

南部に引き続き駐留しているウォーリックがスクリーン越しにオーベルシュタインに尋ねた。

「ヤン提督の様子はどうだろう。協力しては頂けないのか」

「大分回復されたのですが、本人が引退を望んでいます」

「ヤン提督の智謀と用兵があれば心強かったのだが」

「ヤン提督の説得には情報局が引き続き当たりましょう。しかし、当面はヤン提督に頼るのは難しいでしょうな」

メルカッツが話を戻した。

「今モールゲンには同盟軍二個艦隊が詰めているが、さらに二個艦隊が到着するのにど

れだけの時間が必要か」

「あと一週間ほどで到着です。ライアル・アツシユビーと一緒にです」

クロプシュトックは渋面をつくった

「こちらから仕掛けても到着までには間に合わないか。今思えばトリユーニヒト氏の演説の後すぐにでも仕掛けるべきだったかもしれない」

ハーフェン伯は溜息を吐いた。

「同盟の真意がわからない状態で不用意な行動は出来なかった。仕方あるまい。戦わないで済ませられるのが一番良かったのだから」

ここでエーゲル元帥が提案を行った。

「まだ遅くはない。到着した二個艦隊が完全に体制を整える前にモールゲンで決戦を強いればよい。モールゲンを奪いイゼルローン回廊を抑えることができれば、守りやすくもなり、同盟市民の厭戦感情も増すだろう」

これにメルカッツも同調し、具体的な作戦に関しては司令官の打ち合わせに委ねられることになった。

クラインゲルト伯が話題を変えた。

「フェザン及び帝国の動向はどうか？」

ハーフェン伯が答えた。

「帝国はご存知の通り皇帝が死に、内乱が起きようとしています。先の敗戦もありますし、連合、同盟いずれにも関わる余裕はないでしょう。フェザーンは帝国への交易路解放を求めて来ました。フェザーンとしては稼ぎ時ですから。通行料を得た上で許可を行なっております」

フェザーンの動向には引き続き注意を配ることとなった。

会議も終わろうという時、思案顔をしていたウォリックが提案した。

「今後のための政治的な布石を打っておいてもよいのではないだろうか」

殆どの者が怪訝な顔をした。

「布石?」

「ええ。帝国軍と一時的に休戦しましょう」

「休戦!?!」

皆が驚いた。ハーフェン伯が代表して尋ねた。

「同盟と戦端が開かれようとしている時だ。それが可能なら勿論そうすべきだろうが、帝国は認めるまい」

「帝国には建前がありますからな。なので、休戦するのは軍同士、しかも一時的にです。

1年ほどでしょうか」

ハーフェン伯は考え込んだ。

「ふむ、戦力を集中できるだけでなく、その事実自体が同盟への牽制にもなるか」

「ええ、それだけでなく、今後の帝国との関係を变える契機にできるかもしれませぬ。同盟が敵となった今、連合が生き残るには必要なことかと」

クラインゲルト伯が口を開いた

「……なるほどな。いいだろう。それで帝国軍の誰に接触する？そして誰が行く？」

「接触するのは勿論ローエングラム伯です。選択肢はそれ以外にありません。内乱においてもおそらく彼が属した陣営が勝つことになるでしょうから。そして接触するのは……」

オーベルシュタインが立候補した。

「小官が行きましょう。情報局としても彼の為人を見極めたく存じます」

調整の結果、オーベルシュタインと、軍務省よりアーベント・フォン・クラインゲルト統帥本部次長が銀河帝国に出向くことになった。

4日後、宇宙暦796年／帝国暦487年10月19日、メルカツツ、クロプシュトツク、クラインゲルト、シュタインメッツの4個艦隊4万1千隻が同盟領モールゲンに向かった。モールゲンで迎え撃つ同盟艦隊はムーア、アツプルトン、ホーランド、アツシユビーの4個艦隊5万隻と考えられた。

さらに3日後、帝国軍と事前交渉を済ませたアーベントとオーベルシュタインが帝国

首都オーデインに向けて密かに出発した。

連合艦隊は事前のスケジュール通り順調にモールゲン星域に向かっていた。しかしその途上、連合領内ドヴェルグ星域にワープした連合艦隊は、直後に奇襲を受けることになった。ワープ先に潜んでいたアッシュビー率いる高速戦艦中心の一個艦隊が、メルカッツ艦隊に突撃を行ったのだ。ワープ直後で艦列の乱れていたメルカッツ艦隊は奥深くまで突入を許した。アッシュビー艦隊はメルカッツの乗る旗艦ネルトリンゲンを目指し突き進んだ後、艦隊を突き抜け、そのまま離脱した。ネルトリンゲンも砲撃を受け、メルカッツは一命をとりとめたものの重傷を負った。

総司令官の負傷により、連合艦隊は一旦撤退をせざるを得なくなった。

このアッシュビーの活躍に、同盟市民の戦意は高揚し、継戦意欲を挫くという連合の目論見は失敗に終わった。

奇襲を成功させて帰路に着いたアッシュビー艦隊旗艦ニュー・ハードラックでは、ライアル・アッシュビーがヘイゼルの瞳を持った副官と会話していた。

「うまくいったな。メルカッツを討てたかどうかはわからないが無傷ではあるまい。これであの頑迷な3人も、俺の言うことに少しは従うようになるだろう」

「しかし、ここまで露骨にやっては、タネに気付くものが連合内に出てくるかもしれない」

副官、フレデリカ・グリーンヒル中尉の懸念にアッシュビーは答えた。

「今回の連合軍の航路はモールゲンまでの最短経路だった。そこで待ち伏せを行うのはおかしな話ではないだろうか？「偶然」連合の索敵に引つかからず、「偶然」メルカッツ艦隊を狙うのに適した場所にいただけの、ただの不運だと考えるだろうかよ。それにある程度気付かれたところで短期間には対処のしようがない。勝負は次の一戦でつくのだし。名将メルカッツを欠いた連合に為すすべはあるまい」

「ヤン・ウエンリーが連合に加担した場合はどうでしょう？」

フレデリカはその名前を出した時、何故か奇妙な感覚に囚われた。おそらく、敵将として語るのに慣れていないからだろうと一人納得した。

「確かにヤン・ウエンリーは恐るべき戦略家だが、事はもう戦術レベルの話になっていく。手品のタネ等関係なしに、戦術レベルの戦いで俺は誰にも遅れをとるつもりはない」

それがアッシュビーの名を継ぐ俺の自負だ、とアッシュビーは口に出さずに考えた。

フレデリカは冷やかと言っているいい態度で応じた。

「そうであれば良いのですか」

「副官殿はまだ心配のようだ。どうだ？ 410年ものには及ばないだろうかよいワインがある。俺と君は運命共同体だし、「エンダースクール」の先輩後輩の間柄だ。俺の部

「屋でもう少し親睦を深めないか？」

フレデリカは上官を睨みつけた。

「遠慮しておきます」

立ち去ったフレデリカを見ながら、ライアル・アッシュビーは思った。気の強い女が好きなのも、戦いに血が滾るのも、ブルース・アッシュビーの血のせいだろうか、と。本物のアッシュビーと違い利用される立場の俺だが、戦いの現場では誰の掣肘も受けるつもりはない。せいぜい好きにやらせてもらおうとしよう。

フレデリカは一人廊下を歩きつつ考えていた。

彼女は上官が時折見せる昏い表情が気になっていた。

彼が抱えているものは何だろうか。……でもそれに関して当面私にできることはないのでだろう。私は自分の仕事を果たすだけだ。

そう思いながら、計算機室へと入っていった。

宇宙暦796年／帝国暦487年11月3日、同盟軍はモールゲンを出発し、連合領侵攻を開始した。

宇宙暦796年／帝国暦487年11月10日、帝国軍と連合軍の間で1年を期限とする休戦条約が締結された。

同11月11日、同盟軍により連合領ドヴェルグ星域が占領された。

同盟軍は艦隊を分散させず、また、侵攻経路にある連合の軍事基地を確実に潰していった。このため侵攻速度は意外なほどゆっくりとしたものだったが、連合は確実に追い詰められていた。

第二部 2話 帝国の内乱

同盟軍と連合軍の初戦より前に、少し時間を遡る。

宇宙暦796年／帝国暦487年10月、ラインハルトは皇帝崩御の報を聞いた。

フリードリヒ4世が死んだ！俺がこの手で殺す前に！

ラインハルトは皇帝が自らの手によらず死んだという事実には思いの外衝撃を受けていた。

「ラインハルト様、これからいかが行動なされますか？アンネローゼ様の安全をまずは確保すべきではないかと」

キルヒアイスの冷静な声にラインハルトは現実に立ち戻った。

「……ああ、そうだな。しかし今姉上に会うことはできないだろう。口惜しいことだが。帝国では今までも違い公然とした権力闘争が始まるだろう、俺たちは姉上の心が休まるよう、情勢を安定化させることに力を尽くそう。先々宇宙を手に入れる為にもな」

「さしあたっては誰が権力を握るかですが、巷ではブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯、そして皇孫のエルウィン・ヨーゼフを擁するリヒテンラーデ侯の3人が候補に上がっています」

「その中で独自の武力を持たないのはリヒテンラーデのみ。おそらくは先方から接触してくるだろうが、さて。俺にはブラウンシュヴァイク、リッテンハイムの両方を相手取っても負けることなどないとわかっているが、残念ながら他の者がどう考えるかはまた別だ。」

俺が宇宙艦隊司令長官として実績をつくる前に皇帝が死んだのが痛いな」

「リヒテンラーデ侯はラインハルト様を味方につけるだけでなく、さらに勝率を上げる手を考えてくると」

「おそろくな。俺にとつては皇帝の座が遠のくことになるだろうから嬉しいことではないがな」

「焦ることはありません、ラインハルト様。アンネローゼ様をまずはお救いすることができるのです。まずは着実にことを進めていきましょう」

この後、連合軍より連絡を受けたラインハルトは、アーベント、オーベルシュタインと会談した後、休戦を受け入れることになった。

ラインハルトの読み通り、リヒテンラーデ侯は今後の策を考えていた。

ブラウンシュヴァイクあるいはリッテンハイムのいずれかに国を任せるとは論外である。彼らは自らの利益しか考えていない。やはりヨーゼフ様が成人なされるまで、私がいざばらくは国を仕切るしかなからう。しかしあの二人に抗するには武力が必要だ。

この国であるの二人に対抗する気概と武力を兼ね備えているのはローエンングラム伯のみ。彼自身の野心は警戒すべきだが協力関係を結ぶのに向こうも躊躇はずまい。だが、勝てるのか？ローエンングラム伯の提督としての能力は疑うべくもないが、先の戦いでも二万隻を指揮したに過ぎない。大軍の指揮官としての能力は未知数だ。仮にリッテンハイム、ブラウンシュヴァイクの両名が手を組むことになれば、ローエンングラム伯の2倍、下手をするると3倍の兵力を揃えるだろう。これでは分の悪い賭けだ。

リヒテンラーデ侯はしばし悩んだ末結論を出した。

やはり、どちらかを取り込むしかないな。だとすれば、権勢がブラウンシュヴァイク公に劣り、多少は御しやすくもあるリッテンハイム侯にすべきだろう。ブラウンシュヴァイク公には死んでもらい、それによって門閥貴族の力を削ぐ。その上で私、ローエンングラム伯、リッテンハイム侯の3人が鼎立することで、誰か一人が国政を壟断する危険を回避すべきだ。

リヒテンラーデ侯はラインハルトと連絡を取った後、二人でリッテンハイム侯との会談に臨んだ。リッテンハイム侯も最初は拒否の姿勢を示したが、断ればブラウンシュヴァイク公に話を持っていくと言われては最終的に受け入れざるを得なかった。

ラインハルトがリヒテンラーデ侯、リッテンハイム侯と会談を行ったその日、ロイエンタールはミッターマイヤーと酒を飲んでいた。

「ミッターマイヤー、我らが主は、リヒテンラーデ侯、リッテンハイム侯と組むことにしたらしいな」

「ああ、そうなると敵はブラウンシュヴァイク公ということになるが」

「ふん、数は揃えるだろうが、それを指揮する人材がな。誰か思い当たる者がいるか？」
「ミュッケンベルガー元帥が全体指揮を執るとなれば多少は警戒すべきだろうが、断つているという噂だしな」

「ローエングラム伯も、物足りない思いをするだろうな。なあ、ミッターマイヤー」

ロイエンタールはいつにも増してシニカルな笑みを浮かべた。

「俺に門閥貴族の血が流れているのは知っているだろう？ いったい、卿と俺とでブラウンシュヴァイク公側に行かないか。卿と俺ならば伯の天才を凌駕することも可能だろうよ」

ミッターマイヤーは友の顔をじっと見つめた。

「酒の量が多すぎだぞ。仮にそうしたとして、ローエングラム伯の部下である我々のことをブラウンシュヴァイク公は信頼すまい。飼ひ殺しにされるのがおちだ」

「ははは。そうだな、酒が過ぎたな。忘れてくれ、ミッターマイヤー」

そう言いながらもロイエンタールはなおも言葉を続けた。

「俺たちはローエングラム伯の天才を戦場で見た。この人ならば何者にも勝ち得るだろ

うと。だからこそ元帥府に誘われた時、臣従することを誓った」

「ああ、そうだな」

「だが、こうも思うのだ。本当に俺は伯の天才を部下でありたいのか、とな。俺ならば敵として伯の天才をもっと引き出せるのではないか、とな」

「……本当に飲み過ぎだな。もしかして卿もあの義眼の男にあてられたのか？」

義眼の男、連合からの使い、オーベルシュタインという名のその男は元帥府で傲然と言い放つたのだ。「ローエングラム伯は、覇業をなすに足る器だ。しかし惜しむらくは人材に恵まれていないことだな。卿らの中に、光に付き添う影のように、闇にまみれても伯を覇業に導く、そんな者がここにいるのか？」と。ビットェンフェルトなどはもう少して殴りかかるところだった。同行していたクラインゲルト大将が頭を下げることでその場は収まったが、ミッターマイヤーも未だに怒りを抑えきれずにいた。一体あのオーベルシュタインという男は何様のつもりか。

「ヤン・ウエンリーにライアル・アツシュビー、あるいはメルカツツ、伯の敵となり得る人物はいくらでもいるではないか。卿の出る幕はなかるうよ」

「……そうか、そうだな。そのはずだな。ただ、何かが違うような気がするのだ。オーベルシュタインなど関係ない。俺たちはもっと心躍る戦いをしていたような……まるで……質の悪い夢でも見て……」

ロイエンタールはそのまま眠りについてしまった。

ミッターマイヤーもロイエンタールも、その後その日のことを話題にすることはなかった。

宇宙暦796年／帝国暦487年11月10日、連合軍との間に休戦条約が発効された。

宇宙暦796年／帝国暦487年11月15日、次のような決定が発表された。

「エルウイン・ヨーゼフ2世即位。リッテンハイム侯には大公爵の位を許す。リヒテンラーデ侯は公爵に上がった上で宰相に、ローエングラム伯は侯爵となりリッテンハイム大公と共に幼帝を支える」

当然蚊帳の外になっていたブラウンシュヴァイク公は怒り狂った。反乱を起こすことを決め、予め準備を整えていたアン斯巴ツハ准将に導かれ自派の貴族とともに帝都を脱出した。ラインハルトの命を受けたビッテンフェルトは軍務省ビルを占拠した。統帥本部総長と軍務尚書の2人を拘禁し、ラインハルトはその二つの役職を兼ね、帝国軍最高司令官の肩書きを得て軍務の全権を握った。宇宙暦796年／帝国暦487年12月1日、ラインハルトにエルウイン・ヨーゼフ2世からブラウンシュヴァイク公討伐の勅令が下った。

ブラウンシュヴァイク公は自派の貴族を糾合した。彼らの多くもアン斯巴ツハより

警告を受けて事前に脱出を行っており、後がないことを理解していたことから、ブラウンシュヴァイクの呼び掛けに応じた。彼らはガルミツシュ要塞に集まりガルミツシュ盟約軍を名乗った。

帝国軍からもブラウンシュヴァイクに近かったグライフス宇宙艦隊副司令長官、シュターデン大将や、ファールレンハイト中将、ノルデン中將らが参加した。総兵力は10万隻にもなり、ラインハルトに従う正規軍6万隻、リッテンハイム大公派4万隻の合計と同数となった。

ラインハルトはブリュンヒルト艦橋でスクリーンを通してキルヒアイスと会話していた。

「どこかで情報が漏れたのか。帝都脱出を防げなかったのは失敗だったが、まあいいだろう。実力を示した方が俺としてもいろいろやりやすくなるからな」

キルヒアイスはラインハルトの傍らから離れ宇宙艦隊副司令長官に任ぜられ、2万隻を率いていた。この抜擢に異論を持つものもいたが、キルヒアイスであれば実績で黙らせるだろうとラインハルトは信じていた。

「気になるのは叛乱軍と賊軍の動きですが」

「奴らは奴らで相争うのに当面は忙しいだろう。その間にブラウンシュヴァイクを片付けよう。願わくば賊軍には粘ってもらいたいものだな」

総参謀長を務めるメックリンガーが声をかけた。

「ところで彼らの公称に関して軍務省の書記官から問い合わせが来ております。ブラウンシュヴァイク軍と呼ぶのも、我々の立場からすれば中立的に過ぎます。しかしながら叛乱軍、賊軍は共に既に使われている呼称です。何かしら呼び名を考える必要があります」

ラインハルトはしばし悩んだ末に答えた。

「まあ適当でよいだろう。逆軍（げきぐん）でいいのではないか」

第二部 3話 魔術師の帰還

ヤンは護衛役のローザ・フォン・ラウエを伴って連合直轄領の惑星で療養していた。オーベルシュタインは帝国からの帰路、エーゲル元帥より連絡を受け、ヤンの説得に直行することになった。

「些か意外でした。何か所か療養先を変えていると伺いましたが、わざわざ帝国国境に近いこの惑星を療養の場選ばれていたとは」

「ここは以前お世話になった故ケーフェンヒラー男爵の旧領です。葬儀に参列できず、不義理を働いておりましたから。墓参りをしたかったのです」

「そうでしたか」

「……オーベルシュタイン少将、気になっていたので、その脚は一体？」

オーベルシュタインは脚に包帯を巻いていた。

「オーデインで犬に噛まれたのです。何、大した怪我ではありません」

「それは災難ですね。お大事に。いや、私が言うのも変か」

「ヤン提督」

オーベルシュタインは改めてそう呼び掛けた。

「もう提督ではありませんよ。同盟軍からは除隊扱いです」

「それでもあえてそう呼ばせて頂きます。ヤン提督、お聞き及びと思いますが今連合は危機にある。お力を再度貸しては頂けないでしょうか？」

「一個人にできることは限られています。私の代わりは誰かがやれるでしょう」

「ご謙遜なさるな。そうでないことはエルランゲン、アルタイル、それに先の防衛戦で、連合市民はよく知っています」

「それでも私は軍が好きではない。引退したいのです」

「あなたの艦隊はどうするのです？」

オーベルシュタインは攻め方を変えた。

「駐留艦隊のことですか？彼らは私の所有物ではありません、預かっただけですよ」
「それでも実質あなたの艦隊だった。彼らは今事実上の軟禁状態にあります。このままにしておくつもりですか？」

「一時的なものでしょう。連合が勝つにせよ負けるにせよ、状況が落ち着けば彼らは解放されるはずですよ」

オーベルシュタインは黙って紙の束を差し出した

「これは……」

「あなたの艦隊員の署名です。隊員の7割が同盟と戦う事になってもヤン提督に付いて

いきたいと要望しています。……仮に連合が負け、この署名の存在を同盟軍が知ったら、彼らはどのような扱いを受けるでしょうか？」

「……脅迫ですか？」

「まさか。ただ懸念を伝えているだけです」

ローザが見かねて口を挟んだ。

「オーベルシュタイン少将、ヤン提督はお疲れです。お話はまたの機会とさせて下さい」
「今は危急の時、療養中であることは承知の上でここに來ているのだ。しかしラウエ少佐、卿も彼のことをヤン提督と呼んでいるではないか。卿もやはりヤン提督に期待しているのではないのか」

オーベルシュタインは指摘した。

その言葉にローザは動揺した。

「ラウエ少佐、ありがとう」ヤンは落ち着かせるように声をかけた。

「はあ……。みんな、私のことなんて放っておけばいいのに。ラウエ少佐、私は戻るよ。今まで付き添ってくれてありがとう。君の紅茶がもう飲めないのは残念だよ」

「あなただけが責任を背負いこむ必要はありません！」

「それでも私にはやれることがあるらしい。連合に対しても同盟に対してもね。決めるのは民衆だが、そこに冷や水をぶっかけて冷静になってもらうぐらいのことは許される

だろう」

ヤンはそう言いつつも、それが同盟軍兵士の死を意味することに思い至り陰鬱な気分になった。

そんなヤンを見るオーベルシュタインの目はどこまでも冷徹だった。

ヤンに連合を見捨てさせないためのくびきとなることを期待してローザ・フォン・ラウエを世話係に置いてはみたが、はてさて効果があつたかどうか。ヤンの方も情が湧いていないわけではないようだが。

いずれにしろこれで舞台は整った。覇者となるのは誰だろうか？ ヤンか、ライアル・アッシュビーか、ローエングラム侯か、それとも……。よくよく見定めることにしよう。

「ああ、そうそう。オーベルシュタイン少将」

不意に呼びかけられてオーベルシュタインは思索から立ち戻った。

「なんでしよう、ヤン提督」

「私を襲った奴らの正体はわかりましたか？」

「……ええ。憂国騎士団を名乗る同盟の右翼団体のメンバーだったようです」

「そうですか。それだけですか？」

「ええ、それだけです」

「わかりました」

ヤンは駐留艦隊に戻った。ヤンの復帰に合わせて、駐留艦隊のうちヤンに従うことを選択した将兵は軟禁状態を解かれた。

「フィッツシャー少将、グエン准将、あなた達も残ってくれるとは」

「私も昨今の同盟のやりようには疑問を持ってしまっております。それにあなたと同様部下を見捨てられませんので」

「私は思い切り戦えるならどこでも構いません。そして、あなたの下は戦いやすい」

後者の発言に対しては苦笑いをしつつ、ヤンは二人に謝意を示した。

アッテンポローが待ちかねたようにヤンに声をかけた。

「先輩、ところで艦隊名はどうします?」

「艦隊名? そうか、もう駐留艦隊ではないのか」

「実はもう考えたんですけどね」

「なんだい?」

「ヤン不正規隊(ヤン・イレグラレス)というのはどうです?」

「……どうかなあ。なんだか語呂が悪いような」

「よいですな。気に入りましたよ」

予期しない声にヤンは驚いた。

「シェーンコップ准将、なぜここに?」

「おや？まだ連絡は入っておりませんか？ローゼンリッター第二連隊はヤン提督の指揮下に入ります」

同日連合より通達があった。

「ヤン提督を中将待遇の客員提督（ガスト・アトミラール）とした上で、ローゼンリッター第二連隊と南部元帝国領の恭順部隊約2千隻をヤンに預ける」

総計1万隻、連合軍属ヤン艦隊、通称ヤン・イレグラレスがここに誕生した。

「……。ラウエ少佐、なぜ貴官もここに？」

「ヤン提督の引き続きの護衛役と、副官を拝命しました。引き続きよろしく願いします。……ヤン提督はお嫌でしたか？」

「いや、貴官の紅茶をまた飲めるのは嬉しいんだけどね」

第二部 4話 英雄を倒すために

宇宙暦796年／帝国暦487年11月14日

独立諸侯連合 連合行政府（キツシンゲン星域）

連合ではヤンを加えて再び今後の方針に関する会議が行われていた。

エーゲル元帥が議論の口火を切った。

「目下、同盟軍の侵攻速度は速くない。しかし確実に連合の中央を犯しつつある。連合の国家機能が任意の場所に移転可能であるとはいえ、人心の面からも我々はこれ以上の同盟軍の侵攻を許容できない。艦隊戦を挑む必要があるが、しかしライアル・アツシユビーの能力と意図がわからないまま決戦に臨むのは不用意に過ぎる。ヤン提督、何かこれに関して思うところはないか」

ヤンは頭を掻きながら答えた。もはやベレー帽はその頭になかった。「すべてわかったとは言えませんが、彼のことは今回の単独行からある程度知ることができました」

ウオーリックが口を挟んだ。彼は、メルカツツの負傷とクロプシュトツクの固辞により、連合軍宇宙艦隊司令長官代理となっていた。

「一つ、敵はこちらのワープ位置を知ることができる。二つ、敵はこちらの艦隊の艦艇配置を知ることができる。そんなところか」

「その通りです」

参加者の殆どが愕然とした。クロプシユトックが尋ねた。

「一体どうやってそんなことを知り得るといふのか？」

ヤンは語り始めた。

「それに答えるにはかつてのブルース・アツシユビーの活躍について知る必要があります。私は以前、クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー男爵という方の知遇を得ました。エルランゲンでの話を聞きたいと言われまして」

ハーフェン伯が不思議そうな顔をした。

「ケーフェンヒラー男爵か、同盟の捕虜になった後、連合に帰属した御仁だな。少し前に亡くなられたと聞いたが、それがアツシユビー提督とどうつながるのか？」

ヤンは続けた。

「私はその故ケーフェンヒラー男爵より、ジークマイスター提督、ミヒヤールゼン提督、アツシユビー提督の関係について調査していると聞いたことがあります」

「ジークマイスター提督と言えば同盟に亡命後、連合に移り情報局のトップを務めた人物ではないか。ミヒヤールゼン提督は聞いたことがないが」

「ミヒヤールゼン提督はアツシユビー遠征後程なく不審死を遂げた人物です」

ヤンは、居並ぶ参加者にジークマイスターとミヒヤールゼンの間に構築された諜報網、それをアツシユビーが利用していたことを説明した。

それは同盟と連合の秘史というべきもので、クラインゲルト伯にとつても初めて聞く話であった。戸惑う諸将を代表してウオーリックが尋ねた。

「確かにそう考えれば、アツシユビーの戦理に反する戦術も説明がつく部分があるが。しかし容易には信じがたいのも事実だ。何か確証はあるのですか？」

ヤンは頷いた

「私は先日連合軍情報局の保管するブルース・アツシユビーとジークマイスター提督に関する機密情報を開示して頂きました」

オーベルシユタインが反応した。

「私は許可した覚えはないが」

「貴官が帝国に行っていた時期のことですから。エーゲル元帥に司令長官権限で許可を貰いました」

「しかしその間貴官は療養中だったではないか」

ヤンは悪びれずに答えた。

「療養中でしたが、連絡は取れましたからね」

オーベルシュタインは何か言いたげであったが、ヤンは構わず話を続けた。

「得られた情報にはミヒャールゼン提督の諜報網がジークマイスターを通じてアツシユビーに情報提供を行っていたことの記録が存在していました。その情報提供は戦場でもある程度リアルタイムで行われていたこと、さらには情報が一旦アルフレッド・ローザス提督に集約され、解析された結果がアツシユビー提督に伝えられていたことも」

ウオーリックが考え込みつつ語った。

「以前、ローザス提督の墓参りをさせて頂いた際、お孫さんに言われたことがある。アツシユビーは祖父の功績を盗んだ、と。世迷いごとかと思っていたが、そういう経緯のことを言っていたのかもしれないな」

「なるほど。しかし勿論、だからと言って彼が偉大な将帥でなかったわけではありませぬ。ブルース・アツシユビーは情報を最大限活用する術を心得ていましたから。そして、ライアル・アツシユビーも心得ているのでしよう」

クロプシュトックが口を挟んだ。

「つまり卿は初代と同様二代目アツシユビーが、諜報網により我が軍の情報を得ていると言いたいわけか」

「そうです。個人の天才に答えを求めず、精神感應能力や未知の読心技術を仮定しない限りは、自ずとその答えしかなくなるでしょうが」

クロプシュトックは納得できずオーベルシュタインに問いかけた。

「しかし可能なのか？そこまで連合の防諜は穴だらけなのか？」

オーベルシュタインが発言した。

「私はこの件に関して否定も肯定もしません。仮に、私が連合の防諜の堅固さを語ったところで、私は当事者。方々も信じがたいでしょう」

シュタインメッツも疑問を呈した。

「しかしライアル・アッシュビーが本当にワープ位置の情報を知ることができるなら、全軍をもって連合艦隊を殲滅することもできたのでは」

ヤンが答えた。

「おそらく彼には独力で結果を示す必要があったのです。トリューニヒトの議長就任後、シトレ元帥に近い提督はトリューニヒトと距離を置き、逆にロボス元帥の派閥はトリューニヒトに近づきました。今回の第一陣のうち、ムーア、アッシュビー両中将はトリューニヒト派、アプルトン、ホーランド両中将は旧ロボス派です。つまり今回の出兵の第一陣はトリューニヒトに近い提督で固められています。アッシュビー提督にとつて一見やりやすい体制のように思われますが、実態はむしろ逆です。ムーア中将は年齢や先任順にこだわり、年下の言うことを素直に聞くタイプではありません。ホーランド中将は自身も若手の俊英としてブルース・アッシュビーの再来と呼ばれたこともあ

る人物、今の状況を面白く感じてはいないでしょう。アップルトン中将は性格的な陰は少ないものの、用兵に関してはひたすら堅実志向、奇抜で道理に反する作戦には賛成しないでしょう。ライアル・アッシュビーは今回そんな彼らを従わせるために実績を作る必要があったということですよ」

「それが今回の単独行だったというわけか」

「はい。次の戦いでは4艦隊で臨むでしょう。艦隊を分散させずに進撃して来ているのもそのためです。連合艦隊をその一戦で壊滅させるために」

参加者のうち幾人かは心に覚えた寒気を隠し切れなかった。

エーゲル元帥の冷静な声が皆を落ち着かせた。

「ふむ、手段はともかく、ライアル・アッシュビーが我々の情報を得ている可能性は高かろう。それは大きな脅威だが、我々は彼らの艦隊とこれ以上対決を引き延ばせない。さて、我々はどうすべきだろうか。見つからない諜報網を潰すのに時間を割くのか？」

「情報の入手方法はいくつか考えられますが、その全てを潰し切れる確証はありません。であるなら情報が知られている前提で動くべきでしょう」

ヤンは対応策を提案した。その提案に諸将は驚きつつも賛同し、基本方針が決定された。

ウオーリックがそこで尋ねた。

「ところで、ヤン艦隊は、二代目アツシユビーとの決戦に参加してくれるのかな」

「私はともかく、将兵を同胞同士殺し合わせるのはやはりなるべく避けたいと思います。躊躇いが敗北につながらないとも限りません。それに、フェザーンの動向が非常に気になります。私はフェザーンが同盟の侵攻に積極的に加担していると考えています。フェザーンが連合に出兵することも可能性として考えておくべきでしょう。私はウオーリック提督と交代で、南部の守りにつきます」

「なるほど、それがいいだろうな」

「ウオーリック提督、具体的な作戦はお任せします」

「……わかった。私の父は常にアツシユビーの後塵を拝していた。私までそうである必要はないだろうな」

作戦は別会議で詰められることになった。

会議も終わり、帰ろうとするオーベルシユタインをヤンは呼び止めた。

「オーベルシユタイン少将、今少し話があります。他の方々も少しお時間を頂きたい」

第二部 5話 その星の名

ヤンの言葉を受けて振り向いたオーベルシュタイン少将はいつにも増して生気が感じられなかった。

「何でしょう、ヤン提督。私も暇ではないのだが」

「オーベルシュタイン少将、あなたは私が襲われた際にラウエ少佐を派遣したが、そのタイミングで情報を知り得ていたならFTL通信で私に連絡し、引き返させることも可能であったはずだ。何故そうしなかったのです?」

オーベルシュタインは淡々と答えた。

「……連合にとつて、ヤン提督は味方に引き入れるべき人材だと考えていた。そのためには、ヤン提督が同盟の何者かから襲撃を受け、それを連合が助けるといふ状況が発生することが望ましかったのです。道徳的には褒められた行動ではないだろうが、連合のことを考えてのことだ。何か問題があるのですか」

啞然とする面々の中でヤンは穏やかに返した。

「それぞれの立場があるでしょうから、私はそれが問題だといいたいわけではありません。ただ、オーベルシュタイン少将が権謀術数に長けた人物だということを皆さんに再

確認頂きたかったのです。……話を交えましょう。私の閲覧したアッシュビーに関する機密情報ですが、情報局のトップであるオーベルシュタイン少将であれば知ることのできる情報です。あなたならライアル・アッシュビーも同様に連合の情報を得ている可能性に気づいていたはず。何故今まで指摘しなかったのですか？」

「買い被りです。私は気づかなかった。それだけのことです。第一私はそのような機密文書を見てはいません」

「おかしいですね、音声記録でも画像記録でもなく、文書ですか。私は情報としか言っていないかったのに」

「……三文小説のような真似はやめて欲しい。情報局内の機密情報は複製による漏洩の危険性を減らすため7割がたが紙の文書となっている。文書であることが普通。それだけのことです」

「まあ良いでしょう。ところで私はもう一つ、機密情報を開示してもらっていました」
「……何でしょう」

「私を襲撃した集団の調査記録です」

「その記録がどうかしたのですか？」

「確かに以前あなたから伺ったように、集団のメンバーは憂国騎士団が複数人存在しました。しかし憂国騎士団ではない現役の兵士も相当数いた。むしろ大きな共通点は、彼

らの多くがサイオキシン麻薬の常習者であり、さらには判明した限りで殆どが地球教への入信歴を持つということでした」

誰かが呟いた。

「地球教徒!? 宗教団体がテロルを行うのか……」

ヤンは話を続けた。

「古来、宗教集団は大きな力を持つて来ました。それこそ大規模なテロルを画策し得るほどに。あなたは確実に地球教徒のことを知っていたはずだ。しかしそれを我々に知らせずにいた。私はともかく、司令長官にも、軍務卿にも、だ」

外務卿は険しい顔をした。

「ヤン提督のことは、国家間の国際問題となっていた。正確な情報を出さないのは連合への背信と言われても仕方がない」

オーベルシュタインは無言であった。ヤンは構わず続けた。

「私は同盟の諜報網にフェザーンと地球教が関わっていると疑っています。時間をかけて調査を行えばそれが事実かどうかともわかるでしょう。オーベルシュタイン少将、これは別に裁判ではない。ここまで疑わしい状況が積み重なれば、あなたはクロだと多くの人は判断するでしょう。私は貴方から説明を聞きたいのです」

居並ぶ面々は息を呑んだ。

「多数の地球教徒が潜在的な諜報員となるなら、防諜から漏れる可能性も高いか……」
「まさかオーベルシユタイン少将は……」

オーベルシユタインは少しの沈黙の後、語り始めた。

「はじめに言っておこう。私は地球教徒ではない」

ヤンは頷いた。

「ええ、そうでしょうね。あなたはもつと別のものを人生の目的にしている人だ」

「だが、無関係ではない。私には地球教徒の中に協力者がいる。そこから情報を得ていたのです」

オーベルシユタインは語った。地球教がフェザン成立を推進したこと。地球教の目的が同盟と帝国の共倒れであり、戦乱の中での地球教の普及と地球の復権、宗教による統治の実現にあること。それをフェザンによるコントロールで実現しようとしていたことを。

「しかしブルース・アツシユビーという規格外の存在により全てが壊された。アツシユビーによる銀河統一は暗殺により防ぐことができたが、第四勢力、独立諸侯連合が成立してしまったのだ」

誰かが呟いた。

「アツシユビー暗殺も地球教なのか」

オーベルシュタインは続けた。

「その時から地球教にある一派が生まれた。従来のフェザンによるコントロールを推進する派閥を仮にフェザン派と呼ぶなら、それは連合派だ。フェザンに見切りをつけ、連合を同盟・帝国に並ぶ勢力にして戦乱を加速しようという一派だ。私が協力関係を結んでいるのは連合派だ。ヤン提督の暗殺を推進したのはフェザン派で、私にそのことをリークしたのが連合派だ」

カイザーリング男爵が疑問を呈した。

「ならば、今二代目アツシユビーに協力しているのは？」

「フェザン及び地球教のフェザン派です。フェザンがトリユーニヒトとライアル・アツシユビーを動かしている、というのが正しいが」

カイザーリング男爵はさらに尋ねた。

「オーベルシュタイン少将、それでは卿はその動きを看過することでフェザン派を利しているではないか」

「見極める必要があったのです」

「何？」

「私の目的は連合派を助けることではなく、ゴールデンバウム王朝の滅亡です。それを実現できる覇者を私は探していた。それがライアン・アツシユビーであるならそれでも

よかった。そしてここで連合に、あるいはヤン・ウエンリーに討たれるようであれば、所詮帝国を滅ぼすことなど出来ない存在だったということです」

「……」

「語れることは全て語った。ヤン提督、あなたは予想以上に私を驚かせてくれた。あなたにここで阻まれるとは、私がまず器ではなかったということだろう。もはや惜しむべき身でもない、どうしても処分するといいでしよう」

訪れる沈黙の中、ウォーリックが質問した。

「……確認するが、卿の目的はゴールドンバウム王朝の滅亡だな」

「そうです」

ウォーリックが続けた。

「ならば、連合の目的とは矛盾しないな。連合はゴールドンバウム王朝を主敵としてずっと戦時体制を続けているような国家だ。息切れしないうちに平時の体制に移行しないといけないが、我々を敵視し続けるゴールドンバウム王朝が滅ばない限り、それは無理だ」

オーベルシュタインは無言であった。

「オーベルシュタイン少将に、ゴールドンバウム王朝が滅ぶべく動いてもらうことは、連合の利益になるだろう。同盟による帝国滅亡も考えていたようだが、アッシュビーが敗

「れば卿は連合と歩調を合わせるしかなくなるのだろうか？」

「私がローエングラム侯に連合を売ることを考えないのか？」

「卿はヤン・ウエンリーにも期待している。ヤン・ウエンリーが連合に属する限り、ローエングラム侯を利用することはするまい」

「たしかにそうだが……」

「要するにだ、この緊急事態にオーベルシュタイン少将の才能を活かさないのは惜しい。私の提案はオーベルシュタイン少将にはこのまま頑張ってもらおうということだ」

諸提督は動揺を見せた。その中でカイザーリング男爵が口を開いた。

「ウオーリック司令長官代理には伝えていなくて悪かったが、実は会議が始まるより前に統帥本部総長、そしてヤン提督と既に話をしていたので。オーベルシュタイン少将、ウオーリック大将の言う通り、卿の能力は貴重だ。このまま情報局を率いてもらいたい」

オーベルシュタインは彼らしくなく逡巡を示した後で答えた。

「……それでいいというのであれば」

会議後、ヤンはウオーリックと出くわした。ウオーリックは行政府に係留されている二隻の艦を眺めていた。それはかつての「バロン」ウオリス・ウオーリックの旗艦「ルーカイラン」とブルース・アッシュビーの旗艦「ハードラック」であった。いずれも記念

艦扱いでモスボール処理されたうえで連合の行政府に係留されていた。

ヤンがウオーリックに話しかけた。

「お父上のことを考えていらつしやったのですか」

「ああ。親父はな、アツシユビーの話をする時はいつも悔しそうな顔をしていたんだ。俺は二番手でいいんだ、とか言いながら、自分にそう言い聞かせているのが見え見えだったよ」

ウオーリックは懐かしむような顔をした。

「だが、ハードラックを連合に留め置くことを決めたのも、親父だったらしい。いつか連合を橋頭保に帝国に侵攻する日が来る、ハードラックとルーカイランはその証だとか何とか理屈をつけていたが、きつと何だかんだ言つてアツシユビーのことが忘れられなくなつたんだろうな。親父にとつてアツシユビーは、永遠に勝てないライバルであり、憧れであり、呪縛だったんだ。その余慶を被つて、俺にとつてもアツシユビーの名は、憧れであり、勝てないと思わされる名になつてしまった。歴史上の存在だからそれでいいと思つていたのだが、まさか戦う羽目になるとはなあ」

困つたと言いたげな顔をしているウオーリックにヤンは助言をした。

「彼はブルース・アツシユビーとは異なる人間です。仮に同じ素質を持っていたとしても彼には2つ足りないものがある」

「何だい？」

「一つは経験、艦隊司令官としては十分以上の手腕を示していますが、全軍の司令官となるとまた違います。彼は複数の艦隊を実戦で指揮した経験がない」

「たしかに」

「もう一つは、信頼できる仲間の存在。ブルース・アツシユビーには730年マファイアがいましたが、ライアル・アツシユビーにはそれがいない。危機に陥った時にそれは大きな差となって表れてくるでしょう。……もう一つありました」

「？」

「ライアル・アツシユビーの味方にはウォーリックがいません」

それを聞いてウォーリックは破顔した。

「なるほど！確かにその通りだ。今回ウォーリックは連合側だ。ウォーリックがいる側が勝つ、「マーチ」ジャスパーに倣ってそんなジnkスを打ち立てるとするか」

第二部 6話 ヤヴァンハール星域会戦

宇宙暦796年／帝国暦487年11月20日、ウォーリックを総司令官とし、クロプシユトツク、シユタインメツツ、ケスラー艦隊司令官とする連合艦隊4万5000隻が、同盟に占領されたヤヴァンハール星域に向けて出発した。前回の轍を踏まぬよう、ワープの際は斥候を出し、4艦隊が密集して、ワープ後も即応体制を取れるよう警戒しながら注意深く進んでいった。

宇宙暦796年／帝国暦487年11月25日、連合艦隊はヤヴァンハールへの最後のワープを行おうとしていた。

宇宙暦796年／帝国暦487年11月25日

自由惑星同盟 連合領侵攻艦隊

この時代、艦隊のワープ座標情報や艦隊に属する各艦艇の位置情報は全艦艇で共有されていた。多数の協調して艦隊運動を行うためである。

連合の艦隊には一定数の地球教徒とそのシンパ、あるいはフェザーン諜報員がおり、その中には航法担当要員や通信担当要員が存在する。彼らは自らの知り得た情報を、日

頃の公的通信や私的通信にあえて断片にして送信する。送信された情報は、その星域に存在する星間基地や連合籍、フェザン籍の民間船の地球教徒及びフェザン諜報員が受信し、同盟軍、アッシュビーの旗艦ニュー・ハードラックに向けてFTL（超光速通信）で送信される。集まった情報はそれだけではノイズ混じりの断片情報に過ぎない。それを復元するのが驚異的な記憶能力と情報処理能力を持つフレデリカの役目であり、彼女にしかできないことであつた。このことは同盟軍でもライアル・アッシュビー以外のものには知らされていなかった。

諜報によつて情報を得ていたのはブルース・アッシュビーもライアル・アッシュビーも同じであつたが、得ていた情報の性質は、諜報網とパートナーの分析官の性質によつて大きく異なつていた。

連合軍が送り込んだ斥候艦を、小惑星群の陰でそれぞれやり過ごした後、同盟軍の各艦隊は、フレデリカの割り出した連合軍のワープ予定座標の周囲に移動を開始した。ワープには数光秒の誤差があるため、それを加味してなお連合軍を包囲内に収められるように、一定距離を空けて、ワープ予定座標を中心とした正四面体の各頂点に艦隊は移動した。

アツシユビーは小声でフレデリカに話しかけた。

「グリーンヒル中尉、敵は前回の経験に学んで警戒態勢を取っているということだが、敵のワープ予定ポイントが変更されたという情報はないな？」

「ありません」

「ならば我が軍の勝利だ」

「私が転移位置の予測を間違える可能性は考えないのですか」

「それはないな。貴官のことは信頼している。貴官の分析能力と俺の指揮能力が作戦の根幹だ」

「……」

「さて、連合艦隊の準備が順調なら、そろそろワープ時刻だ」

だが、連合艦隊はなかなかやって来なかった。

30分ほどが経過し、アツシユビーの直観が警報を鳴らし始めた時、レーダーが、空の歪みを検知した。オペレーターが報告を行った。

「ワープ来ます！しかし位置は……我が軍の包囲の外です！」

「やられたな！」

連合艦隊は、同盟艦隊が形成していた正四面体の4点のうち3点を構成するアツシユビー、アップルトン、ムーアの三艦隊のそれぞれ斜め後方に出現した。

「グリーンヒル中尉、我々の作戦はどうやら読まれていたようだ。ここからは私の指揮能力次第だな」

連合の艦隊司令官達は、ワープの直前に転移位置を予定の位置より一定距離ずらす事を事前の打ち合わせで示し合わせていた。知っていたのは艦隊司令官のみであったため、変更には少し時間を要した。

アッシュビーをウォーリック、シユタインメッツの二艦隊が、アツプルトンをケスラー艦隊が、ムーアをクロプシユトック艦隊が有利な位置から攻撃する形となった。

実のところアッシュビーは万一の場合に備えて対応策を考え、先に諸提督に到達していた。

連合艦隊が包囲の外に出現することは念のため想定しなければならない。その場合、接敵していない艦隊は小惑星帯に移動し待機する。接敵した艦隊は敵を小惑星帯付近まで誘導し、待機していた艦隊に敵の相手を引き継がせる。待機していた艦隊は小惑星帯を利用して防御戦闘を行う。その間に残りの艦隊は旋回し、敵の後背を取って包囲する。

これが成功すれば、敗北の淵に立たされるのは連合であっただろう。

しかし二つの誤算が生じていた。一つはムーア提督である。ムーア提督の艦隊はクロプシウトツク艦隊の猛攻に晒され、有効な対処が出来ないうちに旗艦まで攻撃に晒され統率を失っていた。もう一つは、フリーハンドとなっていたホーランド提督の行動である。ホーランド提督はアツシユビーが二個艦隊に攻撃されようとするのを見て、先に対応策を無視することに決めた。

「アツシユビーを救え！アツシユビーを救い、連合と帝国を滅ぼす者、新たな英雄ウィレム・ホーランド、それはこの俺だ！」

ホーランド艦隊は、アメーバのように広がりながらアツシユビー艦隊を乗り越え二個艦隊に浸透を図った。ウォーリック、シユタインメツは、ホーランドの予想外の行動の前に混乱した。

「これが俺の考案した芸術的艦隊運動だ！」

ウォーリック、シユタインメツ両艦隊はホーランドに付き合わず、一時距離を置くことを選択したが、それも容易ではなかった。

ホーランドの行動はアツシユビー艦隊を連合の攻撃から守る形になったが、アツシユビーはホーランドの無秩序な艦隊運動に巻き込まれて艦列を乱され、再編に手間取ることになった。そして何より、戦術を一から練り直す必要を生じてしまった。同盟軍にとつて何より貴重な時間がここで浪費された。

アップルトン艦隊のみは、当初の予定通りの行動を取ったが、他の艦隊と連携できないため、ケスラー艦隊の追撃をかわすのに精一杯となった。

艦隊再編に成功したアッシュビーは、非生産的な運動を続けるホーランドを尻目に、シユタインメツツ艦隊に向かう進路を取った。シユタインメツツ艦隊は、挟撃を受けることを避けるべく迫るアッシュビーと距離を取ろうとしたが、それはアップルトン艦隊に態勢を整える機会を与えることになった。

ここで戦闘開始から二時間、ムーア提督が旗艦と共に戦死を遂げた。

その報を聞いたアッシュビーは、シユタインメツツ艦隊をアップルトンに任せ、クロプシュトック艦隊に向かつて移動し、攻撃を加えた。ほぼ正面からの攻撃となったが、アッシュビーはクロプシュトック艦隊の呼吸を呼んでいるかのように攻撃のタイミングをずらし、一方的に損害を蓄積させた。ムーア艦隊への全力攻撃で消耗もしていたクロプシュトック艦隊は、最終的に大きな損害を被り、再編のために一時後退をせざるを得なくなった。

戦闘開始から三時間、ホーランドの艦隊運動に限界が訪れた。そのタイムリングを待っていたウォーリック、シユタインメツツはここぞとばかりに攻撃に移った。ウォーリック、シユタインメツツが連携し構築していた縦深に入り込んでいたホーランドは上下左右から打ち据えられ、急速に数を減らしていった。ホーランドは無定形の艦隊運動を再開して縦深を突破しようとしたが、追隨できる艦は少なく、縦深内に艦隊の多数を残したまま、100隻程度が抜け出すことができたに留まった。旗艦エピメテウスも重大な損傷を受け、ホーランドも重傷を負った。ホーランド艦隊は完全に統率を失った。

ここでウォーリックは残敵処理をシユタインメツツに任せ、回頭と陣形変更を行った。

クロプシユトツク艦隊を後退させたアツシユビーがウォーリックの元に向かってきたためである。

「ここが正念場か。二代目対決、親父はアツシユビーに勝てなかったが、俺は勝つ」

アツシユビーはここでウォーリックを討つことに突破口を見出そうとしていた。総大将であるウォーリックを討ち、その余勢を駆つて士気の低下したシユタインメツツ艦隊を打倒する。そうすれば、お互い二個艦隊が残ることになり、少なくとも負けること

はない。ここで負けなければ、やりようはいくらでもあるのだ。

アツシユビーはウオーリックの位置を把握していた。ウオーリックは艦隊の中央部に居り、縦深陣を敷いて突撃するアツシユビーを包囲しようとしている。しかし、縦深陣は突破されれば意味を成さない。アツシユビーはあえて虎穴に飛び込んだ。アツシユビー艦隊の速度と要所への攻撃は、ウオーリック艦隊の反撃を防いだ。縦深を踏破し、ウオーリックの本隊を目指したアツシユビーであったが、その距離は全く詰まらなかった。

アツシユビーはその理由に気づいた。

「ウオーリックの本隊は指揮を放棄して、ただ逃げているのか!？」

ウオーリックはアツシユビーと直接対決をする気はなく、ただ時間稼ぎに徹していた。クロプシュトツク艦隊の再編と、シユタインメツツ艦隊の残敵処理が完了するのを。

「相手の得意分野で戦う馬鹿がいるか! 1対1では勝てなくてもいい。だが、総司令官としては勝たせてもらう」

「やられた! これは詰んだか」

ウオーリックの意図が始めから分かっていたら、アツシユビーはクロプシュトツク艦隊を完全に打倒することに集中し、その後、アップルトンと共にケスラー艦隊を攻撃し

たかもしれない。しかしもはや何をすることも時間が足りなかった。クロプシュトック艦隊は再編を終え、アツシユビー艦隊に向かいつつあったし、シュタインメッツ艦隊もホーランド艦隊の残存戦力の掃討を完了しつつあった。

「全軍撤退せよ。殿は俺が担う」

アツシユビーは全軍に指令を出しつつ、シュタインメッツ艦隊に対して攻撃を行い、ホーランド艦隊の残部隊の撤退を助けた。

その後、アツシユビー艦隊はクロプシュトック艦隊と、再び集合したウオーリック艦隊を相手に戦うことになった。一時混乱したシュタインメッツ艦隊もそれに加わった。アツシユビーは艦隊各部隊に少しずつ離脱を指示しつつも、残存部隊を率いて同時に反撃を行うという離れ業を見せた。

集中砲火のポイントから部隊を巧みに退避させ、各艦隊の要所に適宜反撃し、連合軍が包囲殲滅に移るのを許さなかった。

しかし、最終的には旗艦以下300隻となり、組織的抵抗も難しい状態となった。

アッシュビーは昏い表情で呟いた。

「ふん、英雄らしく最後は突撃して玉砕でもしてみるか」

「馬鹿なことを言わないでください！」

フレデリカが叫んだ。

アッシュビーは顔を向けずに応じた。

「何だグリーンヒル中尉？」

「閣下は常に味方の犠牲を最小限にすることを考えていたではありませんか。我々以外には既に撤退を完了しました。これ以上の戦闘は無意味です。閣下一人ならともかく、兵士まで犠牲にするのですか？」

アッシュビーはフレデリカの顔を見た。

「……そうか、そうだな。グリーンヒル中尉、残部隊に降伏を指示してくれ。死ぬのは私だけでいい」

「閣下が死ぬ必要もありません」

「私は「産み出されて」以来、来るべき戦場でアッシュビーとして振る舞うことを期待されて生きてきた。私自身もそれを成すだけの存在だと自分を規定してきた。負けた英雄など誰にとつてももう存在価値はないのだ。私を利用した者にとつても、私にとつてもな」

フレデリカは沈黙した。

「中尉、これまでの協力を感謝する。まあ中尉に看取られて死ぬるのだ。本物のアツシユビーと比べてもそう悪くない人生だったかもしれない」

そう言つてブラスターを取り出そうとしたアツシユビーの後頭部を、フレデリカが通信端末で殴りつけた。気を失つたアツシユビーを抱きとめながら、唾然としている艦橋員を見回してフレデリカは言い放つた。

「二度、思い切り殴りつけやりたかつたのよ。ほら、見ていないで早く降伏信号を出して！」

そして、慌てて動き出した艦橋員を横目で見つ、聞いていないだろうアツシユビーに小声で囁いた。

「あなたには沢山文句があるのよ。自分だけ言いたいことを言つて死ぬなんて、許さないんだから」

戦闘開始から8時間、ヤヴァンホール星域の会戦は連合の勝利で終わった。

同盟は二万四千隻の艦艇を失い、ムーア提督が戦死、アツシユビー提督が捕虜となつた。

連合も勝利したが一万三千隻もの艦艇を失つた。その大半がライアル・アツシユビーによるものだった。

残存の同盟軍はモールゲンまで撤退した。

同盟の侵攻はひとまず防がれたが、連合の敵は同盟だけではなかった。

ヤヴァンハールで同盟と連合の会戦が行われたその日、フェザーンの艦隊が、連合との国境を侵犯した。フェザーン正規艦隊一万隻、傭兵艦隊一万隻の計二万隻、フェザーンのほぼ全力であった。

第二部 7話 来るべき時のため

宇宙暦796年／帝国暦487年11月25日、ボーメル特任中将率いるフェザン傭兵艦隊一万隻が、同盟からの依頼と称して連合領に進入した。

この時南部防衛を担っていたのはヤン艦隊であった。

ヤンとしてはこれに対応して出動せざるを得ない。

ヤン艦隊一万隻がフェザン傭兵艦隊と会敵しようかという時、次の報が届いた。フェザン正規艦隊一万隻の連合領侵入であり、その目的地はガイエスブルクであった。また同時にガイエスブルク要塞周囲にフェザンの民間船舶が集まりつつあるとの報もあつた。

フェザンは、準備期間の削減と連合への情報漏洩回避のため、帝国への軍需物資輸送に偽装して民間船舶に要塞攻略用物資と人員を積載して予め連合領に送り込んでいた。これによりフェザン正規艦隊の航行速度も上がっており、ガイエスブルク到着にヤン艦隊が間に合わないのは確実となっていた。

ヤンと分艦隊司令官は通信を交わした。アッテンポローがヤンに話しかけた。

「先輩、敵は我々をガイエスブルク要塞から引き離す作戦だったんですね」

「二番目に悪い予想が当たったな」

「これ以上悪い予想があつたんですか？」

「ああ、最悪なのはフェザン艦隊が目的地を定めず分散し、通商破壊や生産施設の攻撃に出られることだった。それをされると今の兵力では短期間に対処できない。だがフェザンは要塞に引き寄せられてくれた。ガイエスブルク要塞の奪取と、その後の帝国との連絡経路確保が彼らの目的だろうね。要塞攻略部隊と我々への牽制部隊、二つに分かれてそれぞれ纏まってくれているのは、むしろありがたいだ」

旧南方私領艦隊を指揮するアデナウアー准将が指摘した。

「しかし、我々は傭兵艦隊を速やかに無力化した後、ガイエスブルク要塞の援護を行わなければならぬ。一方で先方は無理に戦わず我々を拘束していればいいだけだから、なかなか厳しい戦いですな」

ヤンの声は落ち着いていた。

「大丈夫、なんとかなるさ」

ヤン艦隊はフェザン傭兵艦隊と接触する直前で、ガイエスブルク要塞方面に進路を変更した。

驚いたのは傭兵艦隊である。ポーメルは慌てて艦隊に追撃を命じた。

傭兵艦隊としては、ヤン艦隊が近づけば退き、退けば有人星系を攻撃する構えを示し

てヤン艦隊を拘束しようと考えていた。しかしヤン艦隊は遁走と言ってもいい速度で星域を離脱にかかっていた。

傭兵艦隊としては、有人星系を攻撃するそぶりを見せるべきところであったが、全く無視されるのは彼らの想定外の範囲外であった。仮にこのまま有人星系を攻撃、占領したとしても、連合への一時的な嫌がらせにはなっても、作戦目標達成の助けにはならない。何よりフェザーン政府からの依頼の範囲外である。

結局ヤン艦隊がガイエスブルク要塞攻略の障害となることを防ぐため、全力で追いかけることになった。

しかしその行動もヤンの手の平の上であった。ヤンは進路上にある小惑星帯にアツテンボロー准将率いる二千隻を予め伏せていた。そして追撃してきた傭兵艦隊が小惑星帯を通り過ぎる際に側面を攻撃させた。これにより戦列が乱れたところに、反転した本隊八千隻が総攻撃をかけた。

傭兵艦隊は潰乱状態となったが、ヤンはとどめを刺さずに離れていった。

傭兵艦隊が再編を完了した時にはヤン艦隊は既に遠くに離れてしまっていた。とはいえ、追わないわけにもいかず、しかし再度ヤン艦隊の攻撃を受けたら今度こそ壊滅する危険もあつたため、一定距離離れた状態で警戒しつつ追いかける状態となった。

既に傭兵艦隊はガイエスブルク要塞からヤン艦隊を引き離し、正規艦隊が要塞を攻略

するまでの時間を稼ぐという最低限の役目は果たしていた。この上は、ガイエスブルク要塞を攻略した正規艦隊との間で挟撃を図る、それがボーメルの考えであった。

ヤン艦隊接近の報はフェザーン正規艦隊にも入った。

フェザーン正規艦隊がガイエスブルク近傍に到達した時、ヤン艦隊は8時間後に到着予定であった。

予定よりも時間の余裕は少なかつたが、司令官グレゴリー・エフレーモフ中将は、それでも攻略には十分と考えていた。

ガイエスブルク要塞の司令官はカール・グスタフ・ケンプ中将であつた。彼の巖のよ
うな外見は、初の防衛戦で浮足立つ将兵に安心感を与えた。

「かねての手筈通り防衛を行う。空戦隊と陸戦隊は準備しておけ」

エフレーモフの指令でフェザーン正規艦隊よりガイエスブルク要塞に以下のような通信波が繰り返し送信された。

「石のような心は黄金の槌をもつてのみ開くことができる」

それは要塞の軍事機能停止のキーワードであつた。

ガイエスブルク要塞はフェザーンの資金で建造された。システム構築にもフェザーンが関わっており、特定のキーワードに反応してその軍事機能を停止するよう予め仕込んであつたのだ。

エフレームフはさらに命じた。

「さて、システムが停止しているか確認しよう。岩塊を投射せよ」

ガイエスブルクに向かって、複数の岩塊が艦艇によって牽引され、投射された。

投射された岩塊に対しガイエスブルクは無数の砲塔でもって応戦した。岩塊のうち二つは破壊され、小塊となってガイエスブルクの装甲を歪めるに留まったが、残りは形状を留めたまま衝突しその装甲に穴を開けた。

「ガイエスハーケンが使えなかつたか。残念ながらソフトウエア上の仕掛けは解除されてしまったようだが、やはりガイエスハーケンの仕掛けは見つけられていなかったようだ」

フェザーンの仕掛けは二重であった。無数にある砲塔、レーダー等についてはソフトウエア上の仕掛けのみであったが、ガイエスハーケンに関しては、その機構内部に仕掛けられたハードウエア的なりレイによって停止させられるようになっていた。それを見つけるのは至難であるだろう。

「空戦隊はガイエスブルクの制空権を確保しつつ、砲塔を破壊せよ。時間との勝負だ。揚陸部隊は破口に突入する準備をしておけ」

ケンプは呆然とする部下を叱咤しつつ、対応を命じた。

「ガイエスハーケンが使えなくとも、要塞の堅牢さに揺るぎはない。リントヴルム部隊

は出撃し、砲塔と連携して制空権を維持せよ」

リントヴルムは連合がスパルタニアンを再設計する形で開発した単座式戦闘艇であつた。性能的には、同盟のスパルタニアン、帝国のワルクューレ、フェザーンのラーストチカと較べて特段秀でたところはないが、コンパクトで収容性が良く、同盟・帝国・連合のいずれの艦や要塞でも運用可能という特色を持っていた。勿論各国製の艦艇を運用する連合の事情に合わせてのことである。

ガイエスブルク要塞には同盟軍迎撃を優先して少数の艦艇しか配備されていなかったが、戦闘艇に関しては別であつた。空母数の不足で溢れた戦闘艇とその乗り手が、ガイエスブルク要塞には集められていた。さらに司令官のケンプが戦闘艇の専門家であつたことからガイエスブルク要塞の防空力は非常に高いものがあつた。

彼らは無理なドッグファイトを避け、敵を砲塔に誘導して撃破する等効率的な戦闘を行なつた。

イワン・コーネフ中尉、クレメンティーネ・エーゲル准尉ら、エースパイロットの個人技も光つた。

制空権の確保が進まないのを見てエフレームフは方針を変更した。

「戦闘艇は引き上げろ。艦砲のみで制圧する。砲塔の破壊も要塞前面だけで良い」

敵戦闘艇の撤退に合わせて要塞側も戦闘艇を収容した。

以後は砲撃戦となったが、移動可能な艦砲に対して固定砲台は不利であり、時間はかかったものの、ガイエスブルク要塞前面の砲塔はついに沈黙した。

「揚陸用意、破口から侵入せよ」

フェザーン正規艦隊は砲撃を続け、ガイエスブルク要塞からの戦闘艇の出撃をけん制した。

要塞内に侵入した部隊は、強力な迎撃を受けた。ガイエスブルク要塞には要塞防衛指揮官ヘルマン・フォン・リュウネブルク少将指揮下の陸戦隊の他、オットー・フランク・フォン・ヴァーンシャツフェ大佐率いるローゼンリッター第一連隊、カスパー・リンツ大佐率いるローゼンリッター第二連隊とジークルト・アスタフェイ少将率いる特殊陸戦隊が駐留していた。いずれも精鋭揃いでライナー・ブルームハルト少佐、バルタザール・アーベントロート少佐ら、名の知られた勇士も多数参戦しており、多少の戦力では勝負にならなかった。エフレームフは数で押し切ろうとさらに陸戦隊を送り込み、ようやく各所で橋頭堡を確保した。しかしそのために貴重な時間を使うことになり、陸戦隊が侵入し終わるかどうかというタイミングで、ヤン艦隊が到着することになった。

ヤン艦隊はフェザーン正規艦隊を包囲するように展開したがエフレームフは動じなかった

「臆する必要はない。全艦反転し、ヤン艦隊を攻撃せよ。後ろは要塞だ。ヤン艦隊も全

力で攻撃はできない」

実際、ヤン艦隊は要塞にダメージを与えることを恐れてか、フェザン艦隊と大きく距離を取り、砲撃も控えめであった。

「もうすぐ傭兵艦隊が到着する。そうなれば挟撃だ。これならヤン艦隊に勝てるぞ。いや、要塞占拠が先に終わるかもしれない」

程なく傭兵艦隊が星域に到達し、ガイエスブルク要塞に向けて移動中との報告があった。

その時、オペレーターが顔を引き攣らせた。

「ガイエスブルク要塞よりエネルギー反応。ガイエスハーケンです！」

フェザン正規艦隊のうち、千五百隻ほどが瞬時に消滅した。

エフレームフは愕然とした。

「馬鹿な。まさかガイエスハーケンは使えたのか？」

時間を遡る。ヤンがガイエスブルク要塞を奪取した際、オーベルシュタインはフェザン傭兵軍ルパート・ケッセルリンク特任大佐と面会を行っていた。

「その年で大佐とは大したものだ」

ケッセルリンクは笑みを浮かべながら答えた。

「傭兵軍は実力主義ですから。とはいえ、正規軍ではないので正規の階級ではありません」
「卿は正規軍の方でも階級を持つているだろう。フェザーン正規軍特務機関、ケッセルリンク大佐？」

「はてさて、どこの誰がそんな法螺話を吹き込んだのか？ 教えていただきたいものです
ね」

「あなたの父親でないことだけは確かだ。自治領主のご子息殿」

ケッセルリンクの顔から余裕が消えた。

「一体この面会の目的は何ですか」

「卿が来るべき時に来るべき地位を得る、その手伝いをしよう」

「……何のことは分かりかねるが、その見返りはあなたの手伝いですか？」

「左様。来るべき時に動いてもらうのが、その手伝いだ」

ケッセルリンクは相手を見定めるかのようにオーベルシュタインの瞳を見つめたが、そこには何も見いだせなかった。しばしの沈黙の後、ケッセルリンクはゆっくりと答えた。

「私が、フェザーンを裏切ることは、ありませんよ」

「フェザーンは裏切らぬ、か。ひとまずはその返事で満足しよう。もう一つ聞きたい。私はこのガイエスブルクに何らかの工作が行われていると考えているのだが、それに関

して何か見解はあるか」

「ありませんね。隅々まで調べればよろしいでしょう。あまり長い時間話し込んでいると余計な疑いを招くかもしれません。そろそろ戻らせて頂いてもよろしいでしょうか」

オーベルシュタインが許可を示したのを見て、ケッセルリンクは立ち上がったが、何かを思い出したかのように言った。

「驚の鉤爪は折れやすい。よくよく手入れすべきでしょうな」

「なるほど。私も一つ助言しよう。卿がご昵懇のドミニク・サン・ピエールというご婦人、卿よりも別の男に靡いているようだ。気を付けたほうがよからうな」

「……………」忠告痛み入ります」

返事に時間を要したのは、ケッセルリンクの若さを示すものだっただろう。

この後時間がかかったものの、連合軍情報局によってガイエスブルク機能停止の仕掛は秘密裡に解除された。

この事実をオーベルシュタインによって伏せられており、ヤンとケンプに知らされたのは、宇宙暦796年／帝国暦487年11月14日の会議の後だった。その後、ヤンとケンプは、これをフェザーンに対する罠として逆用し、この機会にフェザーンの戦力を最大限削ぐべく、内密に作戦を構築したのだった。要塞内部の諜報員によってフェザーンに情報が漏れるのを防ぐため、ガイエスハーケンを一時的に動作不能とする工作

すら秘密裡に施して。

再び、時間を戻す。

フェザン正規艦隊はガイエスハーケンによって恐慌状態に陥った。そこにさらに第二射が放たれ、千隻以上の艦艇を破壊された。射程外に退避しようとしても、既にヤン艦隊に包囲されており、困難であった。

ヤン艦隊より降伏勧告が伝達された。

傭兵艦隊の到着の前に我が艦隊は壊滅するだろう、エフレームフはフェザン人らしく、引き時を心得ており、時間を置かず降伏を選択した。

傭兵艦隊司令官、ボームルはコンソールに足を投げ出しながらぼやいた。「くそ、正規艦隊が降伏してしまつては、我々が頑張る必要もない。逃げるとするか」

そこにヤンより通信が入った。

ボームルは慌てて居ずまいを直し、通信に出た。

「フェザン傭兵艦隊のボームル特任中將です。以後ご最員に。……まさか仕事の依頼ですか?」

ボームルはそこでニヤリと笑おうとして失敗した。

「連合軍属ヤン・ウエンリーです。依頼といえば依頼かもしれませんがね。降伏するか、逃

「逃げるかを選択してもらえませんか？逃げるようでしたら追いはしません」

「見逃してもらえませんか？それはありがたい。では逃げるのでそうしてもらいましょう」

傭兵艦隊は整然と撤退して行った。

ローザがブランデー入りの紅茶を出しながら尋ねた。

「最後の通信は何だったのですか？わざわざ連絡しなくても先方は逃げるつもりだったと思うのですが」

「彼らに大人しく退却してもらうためだよ。我々は追撃することも可能だった。それを想定した場合、彼らは艦隊をあえて分散させて連合領内に散らばる可能性があった。そうなるその後処理が厄介だし、海賊化して有人星系に被害が及ぶことも考えられた。その選択肢を消すための会談だったんだ」

「なるほど」

「今回の戦いでフェザン正規艦隊の殆どを叩くことができた。ここでフェザンの残存勢力である傭兵艦隊に知己をつくっておくのは後々意味のあることなんだよ。おそらくはね」

来るべきフェザン攻略に向けて、とヤンは口には出さず、紅茶を飲み干した。

こうしてフェザンのガイエスブルク要塞攻略作戦は失敗に終わった。フェザンに帰り着いたのは傭兵艦隊七千隻のみであった。

第二部 8話 本懐

宇宙暦796年／帝国暦487年12月、帝国は内乱の渦中にあつた。

ブラウンシュヴァイク公は暗澹とした気分でした。

貴族たちの前では「我らの勝利疑いあるなし」などと意気軒昂なところを見せていたが、その実、勝利する自信などなかった。

彼我の兵力、経済力が拮抗している以上、多少の理性があれば必勝などと信じられるものではなかった。

頼みとすべきグライフス上級大将の正規艦隊も北方で、ガルミツシュ要塞からは離れている。軍略に関しても頼れる者は少なかった。

いささか頼りないがシュターデンの意見を聞くべきか。

そう考えた矢先、腹心のアンスバツハ准将が面会希望者の存在を伝えに来た。

「誰だ？」

「フアーレンハイト中将です」

「フアーレンハイト中将？ ああ、貴重な実戦派の提督か。会いたいと言うなら会ってやってもよいが」

フアーレンハイト中将はすぐにやって来た。

「ブラウンシュヴァイク公、機会を頂きありがとうございます」

ブラウンシュヴァイク公は面倒そうに答えた。

「挨拶はよい。それよりも用件は何だ」

「私は公の利益になる提案を持つて来ました。ここにはアンスバツハ准将しかいないので率直に答えて頂きたいのですが、ブラウンシュヴァイク公には勝利の自信はどの程度おありですか」

アンスバツハ准将が急いで口を挟んだ。

「フアーレンハイト中将、失礼ですぞ」

ブラウンシュヴァイク公は一瞬激昂しかけたが、アンスバツハに機先を制されたため、思い直すことができた。

「いや、いい、アンスバツハ。正直に言つて、ないな。彼我の戦力は拮抗している。そうなればあとは指揮官の差だが……」

「勢いだけの青年貴族に、正規軍の中でも実績のいまいちな提督達、信頼しろという方が無理な話ですな」

ブラウンシュヴァイク公は何か言いたげなアンスバツハ准将を手で制して話を促した。

「話を続けてくれ。卿は何が言いたい？」

「私の策を用いれば勝てる可能性が上がります」

フアーレンハイトは自身の策を披露した。

まず、青年貴族のうち、特に血気盛んで統率に不安のある者を選んで、帝国各地に分散させゲリラ戦を担わせる（総数約一万余）。

さらにグライフス上級大将率いる二万余に、首都オーデインを目指し南下してもらう。

これによって、敵の目と手をそちらに引き付けられるし、我々も本隊の統率を取りやすくなる。

そして残りの部隊がローエングラム侯率いる本隊となるが、彼らはこのガルミツシュ要塞を目指して向かってくることになるだろう。

それに対して盟約軍の本隊五万余はガルミツシュ要塞で、遠征で消耗した敵軍を待ち受ける。

一方で別働隊一万余程度でオーデインを突き、リッテンハイム大公、リヒテンラーデ公を捕縛し玉璽を確保する。これに動揺した敵本隊、そしてローエングラム侯を盟約軍の本隊が討つ、

という策だった。

ブラウンシュヴァイク公はこの策に興味を持ったが、一方で迷ってもいた。「なかなか興味深い策だ。しかし……」

フアーレンハイトはすかさず話を続けた。策を通すにはブラウンシュヴァイク公に直接的なメリットを提示することが重要だと彼は理解していた。

「ええ、しかし私の提案ということになると、それだけで反対意見も多くなるでしょう。このため、公の考えた策だということにして頂きたいのです。そうすれば公の声望もますます高まりましょう」

「ほう、しかし卿のメリットは？」

「勿論、ガルミツシュ盟約軍の勝利です。ではありませんが、一つお願いがあります」「何か？」

「私の策では別働隊と本隊を率いる者がそれぞれ必要です。玉璽を確保するのは重要な役目、公にはぜひ別働隊を率いてオーデインに乗り込んで頂きたい。軍事面のサポート役としてシュターデン大将を連れて行かれると良いでしょう。一方で本隊の方は私に任せて頂きたい。私はローエングラム侯と戦いたいのです」

「確かに別働隊は他の者には任せられないが、本隊を卿が？他の者は納得するまい」

「ブラウンシュヴァイク公の抜擢となれば少なくとも表向きは反対されないのでしょう。従えないものはゲリラ戦部隊に回せばよいでしょう。そして何より」

フアーレンハイトはここで言葉を切った。

「公は、公以外の門閥貴族や高位の将官が大功を挙げるのを許容できますか？」

今は公と並ぶ立場の者がいないが、今回戦功を積んで名声を得る人物が現れたなら

……

ブラウンシュヴァイク公は、しばし考えた後、フアーレンハイトの提案を受け入れることにした。

ブラウンシュヴァイク公は、貴族達を集め、アンスバッハに「公自らの策」を披露させた。

貴族達の多くも、正規軍の将官も、公がまともな見通しを持っていたことに安堵した。

フレーゲル男爵はゲリラ部隊のリーダーを任され、奮い立っていた。

ランズベルク伯が呑気に尋ねた。

「流石、盟主。このランズベルク伯アルフレッド、感嘆致しました。して、その別働隊には誰が行くのですかな？ また、本隊を率いるのはどなたが？ 盟主おん自らでしょうか？」

「私が別働隊を率いる。これは危険だが最重要の任務。盟主が行うべき役目だ。シュターデン大将にも付いてきてもらおう。そして本隊の指揮だが、実戦経験の豊富なフアーレンハイト中将に任せる。諸將はフアーレンハイト中将の指揮に従うべし」

これには驚く者が多かったが、盟主自らの指名であり、また他に適任といふべき者も少なかったことから、その通りに決まった。

フアーレンハイトは、思惑通りに進んだことに満足していた。

これでもローエングラム侯に勝てる可能性は高くないだろうが、少なくとも同じ土俵で戦うことはできるのだから。

宇宙暦796年／帝国暦487年12月7日、フレーゲル男爵、ヒルデスハイム伯爵らが各地でのゲリラ戦に向けて出発した。

同12月8日、リッテンハイム大公派貴族軍三万隻が国内ブラウンシュヴァイク派領邦の制圧に出撃した。彼らは各地でブラウンシュヴァイク公派のゲリラ部隊と戦いを繰り広げることになった。

同日、ローエングラム侯ラインハルト率いる四万隻がガルミツシュ要塞攻略に向けて出撃した。ラインハルトは途中レンテンベルク要塞を攻略し、その後ガルミツシュ要塞のあるキフォイザー星域に向かった。

同12月9日、グライフス上級大将率いる二万隻がオーディンに向けて出発した。

同日、キルヒアイス宇宙艦隊副司令官率いる二万隻がオーディンを出発、グライフス上級大将の迎撃を行うことになった。ワーレン中将、ルツツ中将がキルヒアイスの麾下に付いた。

同12月10日ブラウンシュヴァイク公爵、シュターデン大将率いる二万隻が密かにガルミツシュ要塞からオーデインに向けて出発した。

オーデインにはリッテンハイム大公派ラムスドルフ上級大将率いる近衛艦隊一万隻が残っていたが、戦力差からブラウンシュヴァイク、シュターデン両名共に勝利は確実と考えていた。

キフォイザー星域ではファーレンハイト中将率いる五万隻がローエングラム軍を待ち受けていた。そして時機を見てローエングラム軍と会敵した。それは丁度ブラウンシュヴァイク公がオーデイン到達するはずの時刻であった。

銀河全域図（帝国内乱推移）

ローエングラム軍の艦隊構成は、

ローエングラム元帥 一万隻

ミッターマイヤー中将 一万隻

ロイエンタール中将 一万隻

ビッテンフェルト中将 九千隻

であつた。

一方のガルミツシユ盟約軍側は、

フアーレンハイト中将 一万二千隻

ノルデン中将 一万一千隻

プフェンダー中将 一万一千隻

エルラツハ中将 一万一千隻

であつた。

正規軍將校や実戦経験のある貴族に艦隊、分艦隊の取りまとめを任せ、短い準備期間ながら、艦隊としての体裁をなんとか整えることが出来ていた。

双方徐々に距離を詰め始めたが、途中でローエングラム軍が後退を始めた。程なく盟約軍側に報告が入つた。

「ブラウンシュヴァイク公、オーデイン占領！」

盟約軍の諸將はその報に歓喜し、後退していくローエングラム軍への追撃を始めた。一人制止を呼びかけたのは、オーデイン占領の失敗を予想していたフアーレンハイト中将のみであつた。

「待て、予定では公がオーデインに到着したかどうかというタイミングだ。占領が完了するには早過ぎる。罨かもしれん」

ノルデン中將が反論した。

「そんな事を言っているには逃げられませんぞ。現に敵は撤退している。前線の血気盛んな奴らも止まりますまい。むしろ今は勢いに任せるべき時です」

「追撃するなどは言わん。せめて足並みを揃えるべきだ。これは命令だ」

諸將も最終的には総司令官であるファアレンハイト中將の命令を受け入れ、追撃は四艦隊揃って行われたが、最前線では突出する部隊が後を絶たなかった。

そんな中、突如最前線からの連絡が途絶えた。

「イメディング男爵通信途絶！」

「ノームブルク男爵もです！」

盟約軍はローエングラム軍に知らぬ間に半包围されてしまっていた。

「今までの後退は擬態だったか！」

ファアレンハイトは諸將を落ち着けようとした。

「落ち着け！こちらの方が数は多い。半包围されたところで突破すればよい。オーディンは陥ちた。これは奴らの最後の足掻きだ」

オーディン占領の報が本当であればだが、と思いつつも、まずは統制を取り戻すのが先だとファアレンハイトは考えていた。

しかし、ここでタイミング悪くさらなる報が入った。

「別働隊、オーデイン目前で壊滅！ブラウンシュヴァイク公捕縛！」

「何と！オーデイン占拠の報は偽報か？」

「いや、今回の報こそ偽報だろう！」

盟約軍はブラウンシュヴァイク公ありきの軍である。盟主の状況が不明という事態に、盟約軍は混乱状態に陥った。

「落ち着け！目の前の敵に対処せよ。公が囚われたとしても、ここで勝てばお救いすることは可能だ！」

フアーレンハイトの檄に麾下の部隊は落ち着きを取り戻したが、他の艦隊は別であった。

副官のザンデルス少佐が注意を喚起した。

「ノルデン艦隊、ビットェンフェルト艦隊に突破され、なす術がありません。プフェンダー艦隊、エルラツハ艦隊もそれぞれミッターマイヤー艦隊、ロイエンタール艦隊の攻撃を受け、戦線崩壊の危機にあります」

艦の質、兵の練度、指揮官の能力……艦艇数以外のいずれにおいてもローエングラム軍の方が優っており、勢いを失った今となつては抗することは難しかった。とはいえ、プフェンダー、エルラツハの両艦隊がまだ完全な崩壊に至っていないのは、両提督の意地を示すものだっただろう。

「ファアーレンハイトはノルデン艦隊の援護に回りつつ、全艦隊に呼びかけた。

「もう少しだけ踏ん張るんだ。必ず転機が来る」

30分後、ホフマイスター少将率いる五千隻が現れ、ビッテンフェルト艦隊の側背から襲いかかった。

ファアーレンハイトは麾下で信頼するホフマイスター少将に五千隻を預け、事前に潜伏させていたのだ。

予定通りブラウンシュヴァイク公がオーデイン占領に成功してローエングラム軍が後退した場合には、その退却経路を遮断する役目を果たすはずであった。逆に彼らがガールミツシュ要塞を意地でも落とそうと前進してくれば、後方から挟撃する役目を与えられていた。現実はそのどちらでもなかったため予定は狂ったが、それでもホフマイスター少将は効果的な役割を果たした。

ビッテンフェルト艦隊は守勢に弱いという欠点を露わにし、大きな損害を被った。その間にノルデン中将は後退を果たした。

ホフマイスター少将の部隊は、援護に出たラインハルト艦隊の攻撃を受けて短時間で壊滅の危機に陥った。

しかし、これによってファアーレンハイトとラインハルトの間に細い道が出来た。ファアーレンハイトは突撃を指示した。

「これが唯一の勝機だ。ローエンングラム侯の首級を取れば、我が軍の勝ちだ」

ファアーレンハイトの突撃は迅速を極め、ラインハルトの艦隊は側面を衝かれ、中央突破されるかに見えた。

しかし、ラインハルト艦隊はあえてファアーレンハイト艦隊の突破を許し、その後左右で逆進し、ファアーレンハイト艦隊の後背を取った。

ファアーレンハイトはアルタイル星域でこの戦法を経験していた。

「これはヤン・ウエンリーの戦法ではないか！」

ラインハルトは艦橋で独語した。

「私も学ぶことはある。多少癪だが、有効な戦法なら使わない道理はない」

立ち直ったビッテンフェルトにホフマイスターを任せ、ラインハルトはファアーレンハイト艦隊の攻撃に集中した。

ミッターマイヤーも、壊滅寸前のプフェンダー、エルラツハ両艦隊をロイエンタールに任せて迅速な機動でファアーレンハイトの進行方向を遮断した。

「ファアーレンハイトを倒せば後は烏合の衆。まずは奴を倒せ」

気がつけばファアーレンハイトは敵中に孤立していた。

「私に集中してくれるのは光栄の極みだな。だがこれで勝ちの目は消えた。ザンデルス少佐、各艦隊に伝達、各自撤退せよ、行き先は任せる、と」

ザンデルス少佐が伝達を完了するのを見てフアーレンハイトは続けた。

「皆すまないが本艦隊は殿を務める。もうひと暴れするぞ」

ホフマイスターを戦死させたビッテンフェルトもフアーレンハイトに向かつてきた。

「後背のローエングラム、ビッテンフェルトは放っておけ。正面のミッターマイヤー艦隊に突撃せよ」

フアーレンハイト艦隊の突撃は熾烈であったが、ミッターマイヤー艦隊は縦深陣を敷いてこれを受け止めた。ラインハルト艦隊、ビッテンフェルト艦隊はミッターマイヤー艦隊に当てぬよう、ひとまずは攻撃を緩めざるを得なかった。

フアーレンハイト艦隊の突進は強力であったが、巧みな縦深の中で力を失い、周囲から攻撃されるに任せるしかなかった。

そんな中、プフェンダー中将戦死の報があつた。エルラツハ艦隊を逃がすために盾となつたらしい。アイゾールで部下を犠牲にして帰つて来たと嘲られていた男だったが、実のところ死に場所を探していたのかもしれない。

残存艦艇数が一千隻を切った頃、ラインハルトより降伏勧告がなされた。

「卿の勇戦に敬意を表す。死なせるには惜しい。幕下に加わる気があるなら、降伏を許すがどうか」

フアーレンハイトは考えた。

十分に戦ったじゃないか。ローエングラム侯は仕えるに値するお方のようだし、この辺で降伏するか。

降伏の意志を伝えようとしたその時、ふいにブラウンシュヴァイク公や盟約軍の諸将の顔が頭に浮かんだ。

ブラウンシュヴァイク公、お世辞にも人格者ではなかったが、約束は守ってくれた。「後は頼むぞ」と私に言っておーティンに向かった公の声は、隠し切れない不安からか、かすかに震えていた。

アンスバッハ准将、彼は私に感謝していた。

「あなたのおかげで、勝つにしろ、負けるにしろ、公は無様を晒さずに済みそうだ。公のことは私が何とかするから、卿はローエングラム侯との一戦に集中してくれ」

ノルデン中将、プフェンダー中将、エルラツハ中将、ホフマイスター少将、なんだかんだで私の作戦に付き合ってくれた。

断ち切るには付き合いが深くなり過ぎたか。

よろしい、本懐である。

フアーレンハイトはそう呟いて、ザンデルス少佐に向き直った。

「艦長、退艦の指示を出してくれ。ザンデルス少佐、各艦には降伏するように伝えろ」

「閣下は!？」

「私は残る。一人安穩と降伏するにはしがらみが多過ぎるようだ。この艦でローエングラム侯の艦隊にでも突っ込んでみるさ」

「……一人では操艦は難しいでしょう。私も残りますよ」

結局大半の乗員が残ることになった。

また、降伏の指示にも関わらずファーレンハイトと行動を共にする艦も少なくなかった。

「酔狂な奴らが多いようだ」

人間、悪い面も良い面もある。少なくとも、最後の思い出に悪くない経験ができた、とファーレンハイトはそう思った。

ファーレンハイトはローエングラム侯に回答を送った。

「私自身は降伏を拒否する。最後の一戦に臨ませて頂く。侯も武人ならば、お相手願おう」

ファーレンハイト艦隊の残存艦は旗艦ダルムシユタットを先頭にローエングラム艦隊に向かって最後の突撃を行なった。

彼らは前後より打ち据えられて艦数を減らして行き、ついには満身創痍のダルムシユタット一艦となった。

ダルムシュタットの艦橋は炎に包まれ、幕僚も既に殆どがヴァルハラ入門をくぐつた。スクリーンにはブリュンヒルトの白い船体が映っていた。

「本懐である」

ファアーレンハイトは最後に再びそう呟いた。

キフオイザー星域会戦、結果を見ればローエングラム軍の大勝であったが、ブラウンシュヴァイク派門閥貴族の意地が示された戦いとして、後世に記憶されることとなった。

第二部 9話 内乱の終わり

キフオイザー星域における戦いの大勢が決しつつあった頃、ブラウンシュヴァイク公率いる盟約軍別働隊はオーデインの手前まで来ていた。

キフオイザーにおいて盟約軍が受け取ったオーディン占領の報、ブラウンシュヴァイク公捕縛の方向は共に偽報だったのだ。

ラインハルトは、盟約軍が別働隊を組織してオーディンを襲うという情報を内通者から入手しており、監視を強化していた。

キルヒアイスの分派もグライフスへの備えであるとともに別働隊への備えでもあった。

別働隊の動向が判明するや否や、キルヒアイスはワーレンに五千隻を預けてグライフス軍二万隻に対する牽制とし、自身は密かに反転し、別働隊への攻撃に向かったのだ。

キルヒアイスは盟約軍を発見すると、いきなり全軍で当たるのではなく、八百隻の部隊を五個編成し、様々な方向から時間差で一撃離脱の攻撃に向かわせた。

その襲撃に別働隊は虚をつかれたが、盟約軍の中でも精兵を揃えていたこと、シュ

ターデンが理にかなった艦艇配置を行なっていたことから、なんとか持ち堪えることができた。

しかし再度の襲撃が予想される以上は対応策を考えざるを得ない。その星域は小惑星群が散在しており容易に敵の所在を見つけられない。

襲撃の方向がわからない以上、シユターデンにとつて取るべき布陣は一つしかなかった。

「全艦球形陣に移行、全方位を警戒せよ。敵は四千隻程度の寡兵だ。落ち着いて対処すれば問題ない」

この間、アン斯巴ツハはブラウンシユヴァイク公に余計な命令を出させないことに腐心していた。

「奴らに我々の位置が知られた以上、一刻も早くここを離脱しらオーディンに向かうべきではないのか？」

「ここは専門家の意見に従いましょう」

しかし今回はブラウンシユヴァイク公の意見の方がまだ正しかった。別働隊は球形陣を敷いたことで全方位の敵に対応できるようになったが、機動力も突破力も欠く状態となった。

それがキルヒアイスの狙いだった。ブラウンシユヴァイク公を逃さないために。

キルヒアイスは今度は一万五千隻の大軍で全方位から別働隊に襲いかかった。

別働隊は四方八方から打ち据えられた。球形陣は防御力には富むが、回避と攻撃に支障が出る。キルヒアイス軍はゆっくりと戦力を削いでいった。

「これではダゴンの殲滅戦の二の舞ではないか！」

アンスバッハが主の叫びに反応してシュターデンに尋ねた。

「シュターデン大将、打開策はないのか」

「ない。こうなる前に撤退すべきだった」

「だから言ったではないか！」と叫ぶ公を無視してアンスバッハは食い下がった。

「一点突破を図るとか、勝てないまでも逃げるだけならやりようはあるでしょう！」

「突破には機動力と火力に富む艦が不可欠だ。敵は突破に適した艦から潰しに来た。今から突破を試しても全滅が早まるだけだ」

「全滅……」

ブラウンシュヴァイク公は蒼白となった。

そこにキルヒアイスから通信があった。

「大勢は決しました。キフオイザー星域での戦いも我々の勝利に終わりました。この上は兵に無駄な犠牲が出るだけです。盟約軍の盟主として降伏してください」

「ファーレンハイトの無能者め！……いや、それは我々も同じか。しかし降伏だと……」

降伏すれば助かるのか？」

ブラウンシュヴアイク公は縋るようにアンスバッハを見た。

「助かりますまい。公は反乱の首謀者として処刑されるでしょう。そしてその前に盟約軍全体への人質として利用されましょう。そうなればアマーリエ様、エリザベート様の身も危うくなります」

「ではどうすればよい？」

「……」自裁を」

「……アマーリエとエリザベートは大丈夫だろうな？」

「シュトライトが身の安全を守る手筈を整えております。ご安心を」

「わかった。だが、ローエングラム、リッテンハイム、リヒテンラーデ、奴らが覇権を握るのは我慢がならぬ。アンスバッハ、約束してくれ。奴らを地獄に叩き落とすと」

「時間はかかるかもしれませんが、お約束しましょう」

その後も一悶着はあったものの、最終的に公は自決し、別働隊は降伏した。

「公が無様を晒す前に、決着となってよかった。公の名譽を守ることができたのだから。ブラウンシュヴアイク公、このアンスバッハ、約束は守りますぞ」

アンスバッハは降伏に伴う手続きの最中に、いつの間にか姿を消した。

別路オーディンに向かいつつあったグライフス率いる正規艦隊は大半が降伏したが、

グライフスを含め五千隻ほどは連合に亡命した。

ガルミツシユ要塞では熾烈な攻防戦が行われた。オフレッツサー上級大将率いる装甲擲弾兵部隊によつて多数の揚陸部隊が血祭りに上げられた。

しかし最終的にはミッターマイヤー、ロイエンタール両中将の仕掛けた罠でオフレッツサーは捕縛された。

それを見たオフレッツサーの部下がガルミツシユ要塞を爆破したことで攻略戦は終結を見た。

要塞が爆破されたことでアマーリエ、エリザベートをはじめ多数の要人の生死が不明となった。

オフレッツサー自身はラインハルトの前で舌を噛み切つて自殺した。

未だ各地で盟約軍残党が活動しているものの、12月下旬までには盟約軍の大規模な軍事力は壊滅し、帝国の内乱は終息を迎えようとしていた。

リヒテンラーデーローエングラムーリッテンハイム体制は盤石になったかに見えたが、一つ予期せぬ事態が起きていた。

連合との戦いで打撃を受けた筈の同盟軍による、現帝国領、旧北部連合領の占領であつた。

第二部 10話 胎動

少しだけ時間を遡る。

同盟、フェザーンの侵攻も小康状態となった宇宙暦796年／帝国暦487年12月10日、連合行政府に来ていたヤン・ウエンリーはオーベルシュタインと呼ばれた。

ローザを伴って入ったその一室にはウォーリック宇宙艦隊司令長官代理とオーベルシュタイン、情報局長補佐アントン・フェルナー大佐、捕虜となっていたライアル・アツシュビー、フレデリカ・グリーンヒルがいた。

ヤンは呑気な感想を述べた。

「なかなか珍しい集まりですね」

オーベルシュタインが答えた。

「まだあまり広めたくはない話なので、少数の関係者だけ集まってもらいました。ヤン提督には同盟出身者としても見解を伺いたい。フェルナー大佐は、ライアル・アツシュビー中将の調査を担当しています。……統帥本部が私に付けたお目付役でもあるようですが」

フェルナーは本気で心外そうな顔をして答えた。

「とんでもない。私は局長の忠実な部下ですよ」

「ふん」

「どうやらオーベルシュタイン少将のお目付役としては適任そうだなとヤンは思った。

オーベルシュタインは仕切り直した。

「用件に戻りますが、情報局はライアル・アツシユビー中将自身の同意の元、彼の遺伝子検査を行ないました。それでわかった事ですが、彼がブルース・アツシユビーの血縁と
いうのは本当のことのようです」

ウオーリックが感慨深げな表情をした。

「ほう、それでは俺は本当に2代目対決に勝利したのだな。あの世で親父も喜んで
いるかもな」

「それで話が終わればよかったです」

と、オーベルシュタインは続けた。

「連合が持つブルース・アツシユビーのゲノム情報は不完全ですが、それでも言えること
はあります。ライアル・アツシユビーのゲノム情報はブルース・アツシユビーのそれと
完全に一致しました」

それが何を意味するか、参加者には想像がついていた。

ローザが思わず呟いた。

「クローン……」

オーベルシユタインは頷いた。

「おそらくそうだろうな。だがそれは言うまでもなく禁忌技術だ。推測できるところもあるが、できれば本人の口から聞きたいと思つてな。……ああ、本当はもう少し早く聞きたかつたのだが、アツシユビー提督の頭部の怪我が思いのほか深く、回復されたのが最近なのだ。それはともかく、アツシユビー提督、お話頂けますか？」

何故か目を泳がせているフレデリカの隣で、ライアル・アツシユビーが答えた。

「私の立場からすればもはや隠すことでもない。知っていることは話そう」

ライアル・アツシユビーの話が始まった。それは同盟の秘史といふべきものだった。「ブルース・アツシユビーの死後、同盟軍の中にとある組織が出来た。その名は「エンダースクール」。名前の由来は創立者の名前だとも、人類が地球に留まっていた頃の年少の英雄の名だとも噂されていたが、まあそれは重要ではないだろう。」

それは最初はブルース・アツシユビーに続く次代の英雄を育てるための組織だった。同盟軍関係者の子弟の中で見込みのある子弟に幼少時から英才教育を施す組織だ。

帝国や連合の幼年学校と似ていると言えば似ている。違うのは非公開だったことだ。まあ、当初は大した秘密でもなかったもので、噂は広まっていたがな」

ヤン・ウエンリーが口を挟んだ。

「たしかに、軍関係者の子弟に英才教育を行う組織があるという噂はあったな」
アッシュビイーは話を続けた。

「エンダースクールは、期待と裏腹に大した成果は上げなかったらしい。」

しかし、資金難に陥ったところにフェザンが投資を持ちかけたことでエンダースクールは変質した。

ブルース・アッシュビイーの後継者ではなく、ブルース・アッシュビイー自身を生み出すための組織に。

ブルース・アッシュビイーの血液検体からゲノム情報が調べられ、染色体が合成され、受精卵が作られ、代理母の子宮で育てられた。そして生まれたのがブルース・アッシュビイーのクローンだ。

クローンは用意された教育環境で英才教育が施されたが、アッシュビイーの能力を持った存在はなかなか出てこなかった。

環境の違い、ゲノム修飾の違い、理由はいくらでも考えられた。化学的な擬似記憶の移植処置、遺伝子発現レベルの調整、アッシュビイー・クローン同士の殺し合い……：試行錯誤が続けられ、その数だけ失敗作が生まれて処分された。

かけたコストに見合わぬ成果、もはや誰も止め時を見失っていた。

そんな時に生まれたのが私だった。

187体目のアツシユビー・クローン。

何が要因だったのかというと正直分らないが、私はブルース・アツシユビーと同等と言える戦術能力と相応のカリスマを備えていた。

私は別の名を与えられ、整形すら施され、士官学校に入学し、しばらくはただの軍人として活動した。必要な時に同盟やフェザーンの役に立つように。まあ私に関しては後にご承知の通りだ」

あまりの話に参加者は何も言えなかつた。

アツシユビーが重苦しい雰囲気を感じ、言葉を重ねた。

「ああ、同情は不要だ。私自身が死んだわけでもなし。今や英雄でなければならぬという呪縛もない。清々しささえ感じているぐらいだ」

オーベルシュタインが話を促した。

「エンダースクールの今について教えて欲しい。なくなつたわけではないようですが」

「エンダースクールは、私というひとまずの成功例を生み出したことでようやく自分達を省みる余裕ができた。彼らは気づいたのだ。結局はクローンなどに頼らず、見込みのある子供に英才教育を施す方がまだしも効率的だということに。」

それからのエンダースクールは、軍関係者の子弟に対する英才教育組織として機能した。初期のように。

私を生み出すための実験から教育ノウハウを得たこともあり、これは一定の成果を生み出した。

ここにいるフレデリカ・グリーンヒル中尉もエンダースクール出身者だ。彼女は常識離れた記憶力と情報解析能力を持っている。私の作戦にも不可欠な人材だった」

視線が集まって、フレデリカは恥ずかしそうにしていた。

興味深そうに見ているヤンの隣ではローザが不機嫌そうな顔をしていた。

「用心したまえ」

と、ライアル・アッシュビーは言った。

「エンダースクールの成功作と言える存在は彼女の他にも何人かいる。それに最近、エンダースクール史上最高の傑作が出たという噂もある」

オーベルシュタインが尋ねた。

「あなたを超える能力の持ち主なのか？」

「あくまで噂だ。それ以上の情報はないさ。私は戦術では誰にも負けるつもりも、負けたくもりもないしな」

そう言つてライアル・アッシュビーはウォーリックの方を見た。

アッシュビーからの聴取が終わり、艦隊が駐留する南部に戻るため旗艦パトロクロスに移動する途上、ローザはヤンに尋ねた。

「ライアル・アッシュビーの副官をどう思いましたか？」

「フレデリカ・グリーンヒル中尉のことか。うーん、情報解析のノウハウを一度ご教示願いたいところだけど。あと、美人だ」

「……閣下は彼女とはあまり関わらない方が良いと思いますわ」

「何故だい？」

「女の勘です」

「そう言われると困るな」

「……閣下、エルランゲンの危機の時、私はまだ軍人ではなく、ただの伯爵家の令嬢でした。閣下はまだ中尉で、食事をする暇もろくになくてサンドイツチを齧りながら脱出の指揮をとっていました。そのサンドイツチを喉に詰まらせた時、私が紙コップに紅茶をいれて持って行っただけですが覚えていらつしやいますか？」

「……」

「その時閣下が何と仰ったかも？」

「……何と言った？」

「こんな美味しい紅茶は飲んだことがない、船の上でも飲めたらいいのに、と」

「……私の言いそうなことだ」

「……」

「……ラウエ少佐、まさか少佐が軍に入ったのは私に紅茶を振る舞うためではないよな？」

「それは流石に違います。私にも色々事情がありますから。ですが、軍で閣下にまたお会いしたいと思つていたのも事実です」

「……あの時の紅茶の味は覚えてるよ。でも不思議と今の方が美味しい気がするんだ」

「練習しましたから」

ローザはそう言つて微笑んだ。

それから二週間後、北部旧連合領が同盟に占領されたとの報告が連合に届いた。作戦実施者の名はアンドリユー・フォーク少将。

「用心したまえ」

連合の幾人かは、アッシュビーの言葉を思い出した。

第二部 11話 異なる星を見ている

宇宙暦796年／帝国暦487年12月27日、同盟軍はヤヴァンハールで指揮官を失った第六艦隊、第七艦隊を合わせて臨時編成の第十二艦隊とし、フォーク少将の指揮の元、北部旧連合領に侵入させた。

帝国は内乱中であり、少数の防衛部隊と少数の軍事基地しか設置されていなかった。それを分散させた部隊で効率的に潰していくことで占領はスムーズに進んだ。

連合が住民を退避させていたため、住民統治を考える必要もなかった。

同盟は労せずして最大の成果を上げた形となった。

同12月30日、年の瀬にも関わらず連合行政府では会議が開かれていた。

同盟軍の北部旧連合領占領への対応を議論するためである。

ウオーリックが発言した。

「正直意表を突かれたのは事実だ。オーベルシュタイン少将、情報局はこれに関して何か掴んでいたのか？」

「モールゲンの同盟軍で再編と物資集積の動きが活発になっていたことは先に報告して

おります。それ以外は何も」

「フオーク少将については？」

「士官学校首席卒業の若手将官で、ロボス元帥のお気に入り、参謀だったようですが、それ以上の情報が今の所ありません」

南部に駐留を続けるヤンもスクリーン越しに情報を伝えた。

「艦隊のメンバーにも訊いてみたのですが、秀才だが性格に難あり、との評判でしたが実力の程は不明です」

エーゲル元帥が話題を変えた。

「フオーク少将のことはおくとして、同盟の意図を知りたい。今やあそこは帝国領。連合を攻撃しつつ帝国を刺激するのは戦略的には下策ではないか？」

これにヤンが答えた。

「戦略的に下策でも、同盟の政治にとつては大きな意味があります。同盟市民はこれを大きな成果と考えるでしょう。そして同盟では来年1月末に選挙があります」

「選挙……」

民主制ではない連合の軍人の中には理解が及んでいない者もいた。

「私は、新しい英雄であったライアル・アッシュビーが倒されたことで同盟市民が冷静になることを期待していました。1月末の選挙でトリユーニヒト政権が倒れ、次にできる

政府との間で講和が成立することを。しかし今回の成果はアッシュビーの敗北を補ってしまいかもれません」

オーベルシュタインが補足した。

「最新の世論調査では現政権の支持率が既に15%上昇しておりますな」

ウオーリックがヤンに声をかけた。

「トリユーニヒトの演説を聞いたか？ヤン提督を卑劣漢呼ばわりしていたな。駐留艦隊の人員を人質にアッシュビー提督を脅し、その行動を縛って敗北させたなどと、とんでもない嘘を言っていた。フオーク少将はその敗北を取り返した、皆一丸となって連合と同盟最大の敵ヤン・ウエンリーを倒そう云々……」

クラインゲルト伯がヤンを気遣って言った。

「私が反論の声明を出そうか？」

ヤンは肩をすくめた。

「お氣遣いありがとうございます。ですが逆効果になるだけでしよう」

カイザーリング男爵は嘆息した。

「どうやら今後も戦争が続く前提で動く必要があるようだな」

クラインゲルト伯は深刻な面持ちであった。

「実のところ、連合の財政と経済は危機的状况にある。同盟のみならずフェザーンも敵

となったからな。フェザーンへの国債償還が止まったのは僥倖だが、経済への打撃は大きい。帝国からの亡命貴族の財産接収でも焼け石に水というところだ。ブラツケ民政卿には、来年は何かもたせるが再来年は保証できないと言われている」

ハーフェン伯の表情も暗かった。

「連合は常に戦時体制で戦ってきた国家だが、この1、2年の消耗と数ヶ月内の情勢変化でそれが限界に来ている。破綻する前に事態を打開する必要があるだろう」

ウオーリックが提案した。

「時を置かずフェザーンを占領しよう。それだけでも一息つけよう」

ハーフェン伯が口を挟んだ。

「フェザーンからは講和の打診があつたのだが」

「流石に虫が良すぎる。我々としては信用できないでしょう」

クラインゲルト伯が抵抗感を示した。

「連合が侵略国家になるのか」

ウオーリックは何を今更といった態度で答えた。

「元々手を出して来たのは向こうです。それにこれは連合生存のために必要なことです」

「致し方あるまい」

クラインゲルト伯もそれ以上は何も言わなかった。

ヤンがオーベルシユタインに尋ねた。

「地球教徒の動向はわかりますか。彼らにフェザン攻略を邪魔されると厄介だ」

「先の敗北以来、地球教のフェザン派は立場を急速に弱めており、外に目を向ける余裕を失っています。情報局は連合軍内の地球教徒も洗い出しを進めており、以前のような活動はできません。連合派は連合によるフェザン占領に賛成しており、むしろ喜んで後押しをするでしょう。しばらくは、彼ら連合派と暗黙の協調関係を維持するべきでしょう」

「しばらくは、だな」

ウオーリックは口を挟んだ。

エーゲル元帥が議論をまとめた。

「速やかなフェザン占領、地球教連合派との暫定的な協調関係、それは決定事項ということではよかろうな。後は、誰をフェザンに派遣するかと、占領後の統治体制についてだが」

ウオーリックが提案した。

「先にフェザンと戦ったヤン不正規艦隊、それにシユタインメツツの艦隊に行ってもらいましょう」

ヤンは頷いた。

「では、占領後の統治体制は？下手を打つとフェザン商人が敵にまわる恐れがあるぞ」
オーベルシュタインが発言した。

「それに関しては私に一案があります」

オーベルシュタインの案に則ってフェザン占領計画が進められることになった。

年が変わった。

新年を迎えた帝国では、ミッターマイヤーとロイエンタールが酒を酌み交わしていた。
た。

彼らは揃って大将に昇進していた。

ミッターマイヤーがグラスをあげた。

「新年に乾杯」

ロイエンタールが呟いた。

「フアーレンハイトに乾杯」

ミッターマイヤーは盟友を見た。

「……卿が何を思っているかわかる気がするが、何も言うなよ」

「わかっているさ」

「……同盟軍が我らの領土を占領したが、これに対してローエンングラム侯は奪回に動くらしい」

「当然だな。連合軍との休戦も未だ有効だからな。攻めるとしてもそこしかあるまいし」

「とはいえ、国内がもう少し治ってからはなるだろうが」

同盟軍残党の掃討が完了していなかったのだ。

ロイエンタールとミッターマイヤーが話をしていた頃、上級大将に昇進したキルヒアイスがラインハルトに何度目かの意見具申を行なっていた。

「ラインハルト様、同盟軍残党と、リッテンハイム大公派貴族軍の件ですが」

「ああ、そろそろ我々が乗り出すべきだろう」

ブラウンシュヴァイク派領邦の占領と残党掃討はリッテンハイム大公派貴族軍に任されていたが、その進捗は遅いものだった。それだけでなく、占領地では貴族軍による乱暴、狼藉、略奪が後を絶たなかった。

「今少し早くそうすべきだったのでは」

「……わかっている、何度も言うな、キルヒアイス。これは必要なことだ。あのオーベルシュタインのごとき輩の口車に乗るのは口惜しいが」

ラインハルトは、麾下の提督に命じて速やかにブラウンシュヴァイク派領邦を占領し

残党を壊滅させた。

さらに軍紀肅清の名の下に占領地で問題を起こした多数の貴族將校を処罰した。

これはリッテンハイム大公派の勢力弱体化を図るものであり、休戦のためにラインハルトと会見した際、オーベルシュタインが提案したことでもあった。

これをリヒテンラーデ公は黙認し、リッテンハイム大公も表立って反対することはできず、幾人かの処罰を緩める程度しか影響力を發揮できなかった。

リッテンハイム大公の勢力は弱まり、ラインハルトとリヒテンラーデ公の勢力が伸長することになった。

内乱の傷跡は浅くはなかったが、ブラウンシュヴァイク派貴族の没収財産で帝国の財政状況はある程度回復した。リヒテンラーデ公の元、内乱復興と国内改革が進められるとともに、ラインハルトによって北部旧連合領の奪還準備が整えられていった。

フェザーンではルビンスキーが愛人であるドミニク・サン・ピエールの私邸にいた。

「同盟に英雄を誕生させ、連合を併呑させる。英雄にはそこで退場してもらう。同盟は連合併呑の過程とその後の統治で著しく疲弊する。一方で帝国は、ブラウンシュヴァイク派貴族の消滅により、財政的にも政治的にも、また、軍事的にも再生する。その段階で再生した帝国に連合領を奪回してもらい、旧来の図式を復活させる、というのが、筋書

きだったのだがな」

ドミニクはワインをグラスに注ぎながら答えた。

「完全に失敗したようね」

「ああ失敗だ。地球教総教主も怒り狂っているようだ。フェザン派は力を失い、連合派が力を伸ばしている。今の地球教に連合を手玉に取る力量があるのかはわからない。まあ、地球教がフェザンを見限ってくれるならそれもよし。フェザンは、というより俺は、別の道を行かせてもらおう。幸いトリユーニヒトはまだやるつもりのようにだしな」

ドミニクは一見気のない態度で答えた。

「うまくいくといいわね」

「ところでルパートの奴は最近どうだ？」

「来る頻度が減ったわね。別に愛人をつくったみたいよ」

「ほう……」

「楽しそうね」

「息子は俺に似過ぎている。だから行動の予想がしやすかった。だが、予想の範囲を越えた行動を取ってくれるのなら親としては嬉しいもんだ」

「寝首を搔かれるかもしれないの？」

「俺の寝首を掻くぐらいの実力を貯えているならそれはそれでよいことさ。素直に掻かれるつもりもないがな。」

そう言つてルビンスキーはワインを飲み干した。

新年のパーティの後、トリューニヒトは自邸にその人物を迎えていた。

「モールゲンから蜻蛉返りさせて悪かつたね」

「いいえ、議長閣下のお願いとあれば」

「帝国領侵攻作戦の計画立案は見事だった。フォーク少将の大言壮語を、見事に実行可能な計画にまとめてくれたね。流石エンダースクール創設以来の逸材と呼ばれただけのことはある」

「勿体無いお言葉です」

「……お父上のことは残念だった。ヤヴァンハールの戦いで名誉の戦死をされたとのことだが」

「父は与えられた場所で最後まで国家の為に尽くしました。そう言つて頂けると父もうかばれます」

「ヤン・ウエンリーの卑劣な脅しがなければ、ライアル・アッシュビーも負けることはなく、お父上も戦死することはなかったかもしれない」

「今更言つても仕方のないことです」

しかし、そう答えたその表情は少し強張っていた。

「……これからは私を父親だと考えてくれていい。何か困ったことがあつたら遠慮なく相談してくれ」

「ありがとうございます。そうさせて頂きます」

トリューニヒトはその顔を見ながら微笑んだ。

「さて、今日呼んだのは君の次の任地のことだ。君には弁務官付きの駐在武官としてフェザーンに行つてもらいたい」

トリューニヒトは相手の理解の程度を確かめて言葉を続けた。

「連合はおそらくフェザーン侵略に動く。ヤン・ウエンリーもフェザーンにやつて来るだろうな。君にはその備えになって欲しいのだ。やつてくれるね、ユリアン・ミンツ君」

亜麻色の髪を持つその少年は、敬愛する最高評議会議長顔を見ながら答えた。

「はい。祖国と自由のため、僕が必ずヤン・ウエンリーを倒します」

第三部 1話 それぞれの思惑

宇宙暦797年／帝国暦488年1月は、大きな戦いのない月となった。だが、これが嵐の前の静けさに過ぎないことを誰もが感じていた。

独立諸侯連合

連合では、帝国の内乱を逃れてきた亡命者、亡命艦艇の受け入れ処理と、フェザーン攻略への準備が行われていた。

1月10日、連合内の新人事が発表された。

メルカツツ元帥は負傷の予後が思わしくなく、予備役編入の上、長期療養に入った。総司令官の後任は代理を務めていたウォーリック大将となった。第一防衛艦隊の司令官には、副司令官だったフォイエルバツハ少将が、中将に昇進の上任命された。

統帥本部総長エーゲル元帥も引退を希望し、アーベント・フォン・クラインゲルト大將が後任となった。

ヤヴァンホール星域会戦、ガイエスブルク要塞攻防戦で戦功を挙げた諸将については、先の昇進から半年も経っていないことから、昇進は見送られたが、ケスラー、シユ

タイムメッツ、ケンプは一代貴族への軍部からの推薦が決まった。

ヤンの中將待遇から大將待遇となったが、前と同様一代貴族への推薦は断った。帝国より亡命して来たグライフス上級大將は中將待遇となった。

連合の艦隊戦力は、ヤヴァンハールの会戦で大きな損害を出した。

しかしガイエスブルク要塞攻防戦で降伏したフェザン正規軍艦艇、帝国からの亡命艦艇の接収により、数の上では以前と同程度の水準を保っていた。

ヤン艦隊はフェザン正規軍艦艇のうち三千隻ほどを加え、一万三千隻となっていた。

1月下旬、フェザン攻略のため、シユタイムメッツ艦隊が、ガイエスブルク要塞でヤン艦隊と合流を果たした頃、クラインゲルト伯はウォリックを呼び出していた。

「会議ではよく顔を合わせるが、こうして一対一で話するのは久しぶりだな」

「そうですね。下手をすると父の葬儀以来かもしれないな」

クラインゲルト伯はあらためて呼びかけた。

「ウォリック男爵、私が連合の盟主に選ばれてから8年が経過した。私もそろそろ引退を考えても良い頃だ」

「何を仰いますか。この難局で盟主交代等、混乱を呼ぶだけです」

「無論、この戦争が終わってからの話になる」

「盟主は、この戦争が終わるとお考えで」

「終わらせてくれるのだろうか？ 少なくともこの総力戦体制は一度終わらせなければならぬ。でなければ、連合は遠からず限界を迎えよう」

「……そうですか」

「卿は、この戦争の終わらせ方をどう考える？ ヤン提督ではなく、卿自身の考えを聞きたい」

「……ヤン提督の考えとさほどズレがあるとも思いませんが。まずは攻略予定のフェザーンとの攻守同盟締結、帝国との対同盟の暗黙の連携。これによって同盟の戦力を叩きます。」

戦力枯渇を狙うわけではなく、戦死者数の増加によって同盟の厭戦感情を惹起し、講和にこぎ着ける、と言うのが私の考えです」

「対帝国はどうかな？」

「帝国とは対同盟の連携によって、一定の信頼関係を構築することが可能でしょう。これにより、講和を狙うのが基本方針となりましょう。旧来の帝国ではなく、ローエングラム侯が主導する帝国であれば、講和の可能性は高くなると考えます。ですが……」

「？」

「私の見るところ、ローエングラム侯は野心に溢れ、戦いを好む為人のようです。彼を講

和のテーブルに着かせるには少なくとも一戦交えて、納得させる必要があるように思います。対同盟の戦いで減った帝国の戦力が回復しないうちに、場合によつてはこちらから仕掛けることも考えるべきかと」

「……うむ。この連合で、そこまで見通すことができる者は多くはない。私としてはウォーリック男爵、卿に私の後を継いでもらいたい」

「ご冗談を！ 盟主になれるのは伯爵以上ですぞ。前軍務卿のバルトバッフェル伯ですとか、適任者は他にいるように思いますか」

「ウォーリックを名乗る者がずっとバロンであり続ける必要はなからう。功績的にはお父上の代で伯爵となつていてもよかつたぐらいだ。そしてこの戦争を卿の力ですうまく終わらせることが出来れば、私の推薦で子爵、そしてひとまずは一代限りの伯爵として盟主になつたとしても誰も文句は言うまい」

「……しかし、戦争が終われば正直誰が盟主となつてもよくはありませんか？」

「本気で言っているのか？ 戦争が終わつた後こそ連合の舵取りが重要になるだろう」
「……」

「この戦争には平民もよく協力してくれている。これに報いるのに権利の拡大はまず考えるべきことだろう。しかしそうなると連合の現在の体制が揺らぐ可能性も出てくる。我々諸侯は戦いの前線に立つことと引き換えに、連合を導く権利を得て来た。しかし戦

わなくなれば？ヤン提督が言っていたように、連合の貴族制は今のところうまくいっていると言えるが、今後は不透明だ。下手をすると帝国の門閥貴族のように、墮落し、民衆から排除される対象となるかもしれぬ」

「そこまでお考えでしたか」

「見くびらないでくれ。それに卿も考えていたことだろう」

「……否定はしません」

「私はこうも思うのだ。地球教の狙いが帝国と同盟の争いの拡大とその中の地球教の伸長にあるとするなら、連合の諸侯にとっては、それに乗っかることも一つの選択肢ではないかと」

ウオーリックは思わずクラインゲルト伯を見やった。

「連合が争いを積極的に拡大させると言うのですか？仁君と名高い盟主とは思えぬ発言です」

「国が乱れるよりはマシかもしれぬ。私とて権謀術数と無縁だったわけではない。選択肢としては様々なことを考えるさ。好むと好まざるとに関わらず」

「……」

「だが私としては連合の諸侯にそんな道を選んで欲しくはない。諸侯という存在が戦時の徒花ではないことを、平時において示して欲しいのだ。その道を探ることこそ実のと

ころウォーリック伯に頼みたいのだ」

「……大任ですな」

難しい顔になったウォーリックを見てクラインゲルト伯は穏やかに言った。

「まだ時間はある。考えておいてくれ」

自由惑星同盟

同盟では、2月早々に選挙を控え、その準備が進められていた。また、全正規艦隊が稼働状態に移行するのも1月末から2月上旬にかけてであった。この二つが済み次第、活発な軍事活動が開始されるものと考えられていた。

1月20日、評議会の秘密会合が開かれた。

ネグロポンティ国防委員長が現状の報告を行なった。

「まもなく全正規艦隊が稼働状態となります。戦闘艦艇約十四万隻が実戦戦力として動かせる状態となるのです。そうなれば連合など鎧袖一触となりましょう」

財政委員長に留任したジョアン・レベロはネグロポンティ、そしてトリユーニヒトを責め立てた。

「今回の戦費のための巨額の臨時国債の発行、これにより同盟の財政には今後数十年にわたり暗い影が投げかけられるでしょう。私は国債の発行自体を否定するものではな

い。しかしそれに見合った戦果を同盟が得ているかという否と言わざるを得ない」

ネグロポンティは反論した。

「同盟は領土拡大を果たした」

レベロは憤然として言った。

「あれこそ愚策だった。あれで帝国は対同盟に本腰を入れることになった。二正面作戦を避けるべきだということは素人の私にだってわかることだ」

トリューニヒトがネグロポンティに代わって答えた。

「二正面作戦が愚策なのは、その国が二正面作戦に耐えられない国力しか持たない場合に限られる」

「同盟にはそれだけの国力があるか?」

「そうだ。今同盟はそのリソースを軍需生産に振り向けている。これによって同盟の内総生産がこの数ヶ月急拡大を続けているのは財政委員長もご存知だろう。現時点で同盟は連合と帝国の二国を相手取れる国力を有していると言っている」

「臨時国債でドーピングをしているようなものだ。長くは保たない」

「だが、同盟よりも連合の方が先に破綻するだろう。それは財政委員長こそよく知っているはずだ」

「……議長は連合と我慢比べを行うおつもりか」

「ああその通りだ。連合に対しては戦場で必ずしも勝つ必要はない。活路さえ塞いでやればいいのだ。そうすれば自ずと膝を屈することになるだろう」

「……では、帝国に対しては？ 帝国は先の内乱で一時的に損害を被ったが、多数の門閥貴族の財産が接収された結果、財政が健全化し、リヒテンラーデ公の改革で経済も活性化の兆候が出ている。ローエングラム侯によつて軍の再建も進みつつあると聞く。

連合と我慢比べをした結果、疲弊した我々は強大化した帝国と戦う羽目になりはしないのか」

「それを避けるための二正面作戦である。帝国は内部にリッテンハイム大公とローエングラム侯の対立を抱えている。ローエングラム侯は戦争の天才かもしれない。しかし、万端に準備を整えた同盟軍と戦えば仮に同盟軍が負けるとしても、相応の損害を負うだろう。

そうなれば追い詰められた状態のリッテンハイム大公が、ローエングラム侯に牙を剥き、再度の内乱が起きるだろう。二度の内乱で国内を荒廃させた帝国は、果たして我々に勝ちうるだろうか」

トリユーニヒトは息を継ぎつつ、レベロに笑みを見せた。

「……まで語れば、賢明なる財政委員長には同盟がいかにも有利かお分かりだろう。同盟は戦場で勝ちきる必要はない。極端に負けなければいいのだ。そうすれば最終的な勝

利は同盟に転がり込むのだから。これがアツシユビー以来、同盟が積み上げてきたものの成果だ」

レベロは数瞬沈黙した。

「……なるほど、議長閣下は一定のご見識をお持ちのようだ。しかし、財政委員長としてはまだ言うべきことがある。臨時国債の引き受け手、つまりフェザーンのことだ。仮に連合と帝国に同盟が勝ち得たとしても、その過程で同盟はフェザーンに多額の借款をすることになるだろう。フェザーンに同盟が財政面から支配されることを私は懸念する」

トリユーニヒトは再び笑みを見せた。

「財政委員長の懸念はもつともだ。だがそうはならない。議長として保証しよう。おそらくは数ヶ月のうちに君も納得する結果が得られるだろう」

レベロはトリユーニヒトをまじまじと見た。

「何を根拠にそう言うのかわからないが、そこまで言うならいいだろう。どうなるか見せてもらおうじゃないか」

会議終了後、トリユーニヒトは私邸で一人ワインを飲みながら、考えに耽っていた。

彼が会議でレベロに語ったことの多くは、元々はユリアン・ミンツとの議論の中で生まれたことだった。

ユリアン・ミンツの戦略眼は、シトレ、ロボスの両元帥も持ち得なかったものだろう。ヤン・ウエンリーにも勝るかもしれない。いい手駒に育ったものだ。せいぜい私のために働いてくれ給え。そうである限り、求めるものはいくらかでも与えようじゃないか。

銀河帝国

1月25日、帝国ではラインハルトが諸将を前にして出征の説明を行なっていた。

この頃までには盟約軍残党は壊滅し、狼藉を働いたりツテンハイム大公派貴族軍の処罰も済んで、国内は一応の静けさを取り戻していた。

「2月、対同盟に六個艦隊七万隻を派遣する」

その規模に居並ぶ諸将はどよめいた。

「出征するのは、私とミッターマイヤー、ロイエンタール、ビツテンフェルト、ワーレン、ルッツだ。キルヒアイス副司令長官、ミュラーはオーデインに留まり、万事目配りを怠るな」

「御意！」

「この一戦で、同盟に回復困難な打撃を与えるのだ」

諸将が帰った後も、キルヒアイスは元帥府に残っていた。ラインハルトから話があるとなわかっていったのだ。

「俺が出征している間にリッテンハイムが軽拳に出る恐れがある。オーディンに残ってもらうのはそのためだ。わかっているな、キルヒアイス。最優先すべきは姉上だ。それ以外は捨てておいていい」

「はい」

「俺が遠征から帰ったら、リッテンハイムを拘束する。奴らは俺がいない間に何も画策しないわけがない。それをもって大逆の証拠とし、リッテンハイムの勢力を排除する。その後は相手の出方次第だが、おそらくはリヒテンラーデも排除することになるだろう。そして、休戦期間が明けた後は連合と雌雄を決する戦いを行い、併呑するのだ」

「その後は同盟ですね」

「そうだ。まだ長い道のりだがな。俺にできると思うか？」

「ラインハルト様以外の何者にそれが叶いましょう」

キルヒアイスはふと思いついて尋ねた。

「ラインハルト様、皇帝のことですが。ゴールデンバウム王朝打倒のためにはいずれ皇帝を廃する必要がありますが」

「……心配するな、俺は子供殺しになる気はない。いずれ時が来れば帝位を譲らせるさ」
そう答えながらも、エルウィン・ヨーゼフⅠ世が素直に帝位を譲るかという確信が持てないのだった。

短い時間しか接したことはなく、ラインハルトは皇帝を名乗る子供のことを十分に把握しているとは言えなかった。

今のところ痼が強く、時折見せる視線の鋭さだけが少し印象に残るといふ程度である。今後彼がどのようなように成長するのか、未だ20歳のラインハルトには想像するのも難しかった。

そしてラインハルトの意識は、同盟軍のまだ見ぬ雄敵の方に多分に向けられているのだった。

フェザーン

1月25日、弱冠14歳のユリアン・ミンツ少尉がフェザーン駐在武官に着任した。

14歳での少尉任官はアッシュビー以前の防衛戦争時代には前例があったものの、近年では稀であった。さらにはフライングボール年間得点王のフェザーン駐在武官就任ということ、一定の耳目を集めた。

しかし選挙を目前に控えたトリユーニヒト議長のおざとい人気取りの一環との解釈で、多くの人にはすぐに忘れ去られた。

それから1週間後の宇宙暦797年／帝国暦488年2月1日、フェザーンで事件が起こった。

第三部 2話 フェザーンの長い一日

宇宙暦797年／帝国暦488年2月1日 フェザーン自治領 首都星フェザーン
その日、フェザーンでは大事故が頻発していた。軍や政府の複数の高官も事故や事件に巻き込まれていた。

フェザーンはガイエスブルク要塞攻略失敗後、正規軍戦力に著しい欠乏をきたしており、傭兵軍によってその穴埋めを行っていた。

そのような余裕のない状況下で大事件が起こった。自治領主府、同盟弁務官事務所、航路局、公共放送センター、中央通信局、宇宙港、治安警察本部等重要施設がフェザーン正規軍と傭兵軍の部隊によって占拠されたのだ。クーデターである。

自治領主府の一角、補佐官室ではニコラス・ボルテックが目の前事態に動転していた。

ガイエスブルク要塞攻略失敗により、その権勢に翳りを見せたルビンスキーに代わり、自治領主になれる可能性が見え始めた矢先のクーデター。

今補佐官室にはボルテックと、そのボルテックにブラスターを突き付ける一人の人物がいた。

「一体何が目的だ？」

ボルテックは陳腐な台詞を、目の前の人物、ルパート・ケッセルリンク准将に投げかけた。

ケッセルリンクは、ガイエスブルク要塞攻略に参加せず、さらにはその失敗を事前に警告していたことで、准将に昇進していた。

「何が目的ですって？補佐官殿、ご冗談が過ぎますよ。ご存知のはずでしょう？」

ボルテックはケッセルリンクが何を言っているのかわからなかった。

「はあ？私は何も知らないぞ」

ケッセルリンクは囁んで含めるように説明を行なった。

「いいですか。このクーデターの目的は、フェザンを危うくするアドリアン・ルビンスキーからフェザンを解放するためのものです。そしてそれは一人の人物によって主導された。かくいう私もその人物の密命で動いていましたね」

「一体誰だそれは？」

ケッセルリンクは真顔で答えた。

「無論、あなたですよ。ニコラス・ボルテック補佐官」

「……はあ?!」

間の抜けた声が部屋全体に響き渡った。

1時間後、ニコラス・ボルテックは今回の事態に対して声明を発表していた。「今回の一連の事態は、アドリアン・ルビンスキーよりフェザーンを解放する為のものである。」

市民の皆様には多大な心配をおかけして申し訳ないが、まず全てフェザーンの皆様のためであることをご理解頂きたい。

アドリアン・ルビンスキーは武力によらない繁栄というフェザーンの方針に背き、いたずらに正規軍を動かし、かつ大敗させ、この国を危うくした。

さらにはルビンスキーがこの国を自由惑星同盟に売り渡そうとしていることが判明した。

フェザーンを愛するものとして私はルビンスキーを自治領主として容認できない。そのためにこの行動に至ったのだ。

今後は私が暫定の自治領主となり、同盟の侵略に対抗するため、連合と共同戦線を構築する。

一つ、フェザーン、連合共同軍の設立

二つ、フェザーン、連合間の関税の段階的撤廃

三つ、……」

ケツセルリンクは声明を読み上げるボルテックを見てほくそ笑んでいた。

1時間前の狼狽ぶりがまるで嘘のようじゃないか、ボルテックには役者の才能があるようだ、と。

今回のクーデターはケツセルリンクとオーベルシュタインの二人が主導したものであった。ケツセルリンクはボルテックから密命を受けたと偽り、正規軍、傭兵軍の両方に協力者を増やしていった。

元々先日の大敗で正規軍、傭兵軍問わずルビンスキーへの不満が高まっていたことから、クーデターの準備は順調に進んだ。オーベルシュタインの工作もこれを後押しした。そしてボルテックは知らぬところで首謀者にされ、今や本人もその立場を受け入れていた。

ケツセルリンクは自らが表舞台に出るにはまだ早いことを自覚していた。自覚できたことが彼の成長と言えるかもしれない。ひとまずはボルテックを矢面に立たせ、自分は黒幕に徹することにしたのだ。

ボルテックが失敗し、民衆の支持を失った時は、自分がフェザーン再生の星として表舞台に出ても良い。失敗しなければ、それはそれで単純にボルテックの後継に収まれば良いのだ。

ルビンスキーを追い落としたことで彼はひとまずの満足を得た。空虚な満足であることも自覚しつつ。

だが、安心するにはまだ早かった。

ルビンスキーの行方が不明であったのだからだ。

フェザーンのクォーターより一週間ほど時を遡る。

ユリアン・ミンツがフェザーンへの着任早々行なったのは、ヘンスロー弁務官の随員として自治領主と面会することであった。

形式は随員であったが実際はルビンスキー、ユリアンの会談となった。ヘンスローですら別室で待たされて。

挨拶もそこそこに二人は話を始めた。

「ミンツ少尉、トリユーニヒト議長秘書の子と聞いていたが、さて、一体どんな話を持ってきてくれたのだろう」

「領主閣下、今フェザーンが危機にあるのはご存知の通りです」

「ふむ、連合が攻めてくる。確かに危機には違いない。それで、トリユーニヒト議長は

フェザーンを助けてくれるというのかな」

「助けるのはフェザーンではない。領主閣下、あなたです」

「ほう」

ルビンスキーはわずかに眉を上げ、続きを促した。

「連合によるフェザーン占領、それがどのように行われるのか、それは正直どうでも良いことです。同盟が介入しない限り、それはおそらく成功するでしょうから」

「同盟は介入しないのか？」

「ええ、一旦はフェザーンが連合の占領下となることを許容します。しかし、その時連合はフェザーン人の恨みを少なからず買うことになるでしょう。その状態になった後に、同盟は介入する。先に手を出した方が負ける、これはそういうゲームです」

ゲームときたか。その発想は嫌いではない、とルビンスキーは思った。

「ふむ、そして反攻のため旗頭として私を利用するというわけか」

「話が早い。その通りです」

「そして今度は同盟がフェザーンを支配する、と」

「ご安心を。同盟はフェザーンの独立まで奪う気はありませんよ。ちよつとした要求は行うでしょうが」

「しかし、フェザーンへの見返りは何だ？何も見返りなしにフェザーンが動くとは思わ

ないでもらいたい」

「まず、あなたの自治領主への返り咲き。これは保証します。その上で、同盟の政治的、軍事的な銀河覇権下でのフェザーンによる経済覇権、これを許容しましょう」

「ほう、許容とききたか。覇権を確立できるかどうかはフェザーンの努力次第というわけか」

「その通りです」

だがこの提案こそがルビンスキーの望むところだった。同盟から言つて来なければ自ら持ちかけていただろう。

「致し方ない。それで納得しよう。で、まずは私を助けるということだが、どうする気かな？ 私には地下に潜ろうと思つていただけのだが」

「逆です。領主閣下には宇宙に昇つてもらいます。既にフェザーン人の同盟協力者が手筈を整えています。他にも要人の何人かには同様に声をかけています」

しれつと言いおつて。従わないならお前の代わりは幾らでもいる、そう言いたいのだな、内心そう考えつつ、ルビンスキーは笑顔でユリアンと握手した。ユリアンも同様に笑顔であった。

クーデター発生後に戻る。

クーデター成功の報告を受けたヤンは、シユタインメツツとともに「ボルテック暫定領主の要請」に従い、フェザーン本星に急行していた。ここからの成否は同盟にどれだけ先んじることができにかかっていた。

フェザーン本星にてヤンはフェザーン傭兵艦隊からの通信を受け取った。

「ご無沙汰しております。フェザーン傭兵艦隊のボーメルです。一緒に仕事ができることは嬉しい限りです」

今回は満面の営業スマイルであった。

「ボーメル提督、私もだよ。ところで、フェザーンの宇宙戦力はすべてボルテック領主に従っているのだろうか」

「いいえ、残念ながらそういうわけにはいきませんでした。正規艦隊三千隻のうち一千隻

ほどがファルケンルスト要塞方面に逃走しました」

「ファルケンルスト要塞はどうなっている?」

「そちらも傭兵軍陸戦部隊が押さえているはずです。……そう言えばまだ要塞からは連絡がありませんな」

ヤンは内心冷たいものを感じた。

「もしかしたら、ここで話をしている余裕はないかもしれない。すまないが我々はファ

ルケンルスト要塞方面に急行させてもらう。シユタインメツツ提督はここで待機しておいてくれ」

ヤン艦隊はファルケンルスト要塞に、出せる限りの速度で向かった。その途上、千隻ほどの部隊が、ファルケンルスト要塞方面に向かっているのを見つけた。

オペレーターがヤンに報告した。

「艦種からフェザーン正規軍の部隊だと思われます」

ヤンは不審に思った。

「これがボーメル提督の言う逃走部隊だとすれば、未だにこのような位置に留まっているのは怪しい。全艦、一旦停止」

しかし、功を焦ったグエン・バン・ヒューの部隊が、命令を聞かず突出し、勝手に追撃を始めた。

「やむを得ない。後退命令を出しつつ、グエン分艦隊を追いかけろ。ただし、伏兵の存在に警戒を怠るな」

グエン分艦隊は、なおも命令を聞かず前進し、ついにはフェザーンの部隊に追いついたかに見えた。

しかしその瞬間、後背からビームの集中攻撃を受けた。フェザーン回廊の天頂方向、航行不能領域ぎりぎりには艦隊が潜んでいたのだ。その攻撃は苛烈を極め、艦隊は瓦解す

前となった。

グエンは絶叫した。

「そのまま前進し天底方向に逃げろ！」

生き残っていた艦艇はその命令に従ったが、そこもまた死地であった。待ち受けていた別の艦隊からの砲火が、残存の部隊を粉砕した。グエンは乗艦もろともこの世から消滅した。

「呆気なさすぎる。こいつら本当にヤン・ウエンリーの部下か？」

同盟軍第十一艦隊司令官ウランフ中将は、拍子抜けしたとばかりに独語した。

「さすがにヤン・ウエンリーは釣り出せなかったな」

そんなウランフに通信を入れたのは、彼とともにグエンを罠に嵌めた第十艦隊司令官ボロディン中将であった。

「まあヤン・ウエンリーと戦うのは次の機会と考えるべきでしょうな」

「しかし、この戦果が弱冠14歳の少年の指示の産物だというのも少し複雑な気分になるな」

「ふむ、しかし戦理に叶った指示ではありません。そうである限りは文句は言えませう」
その時、ウランフ、ボロディンの両艦隊のオペレーターが警告を発した。

「新たな艦隊接近、数一万隻以上！」

ウランフとボロディンはスクリーン越しにお互いを見やった。

「どうしますか？」

「今無理に戦う必要はなからう。敵をファルケンルストに近づけないという目的は達成できたし、十分に打撃も与えた」

「では撤退しましょう」

ヤン艦隊の目前で、ウランフ、ボロディンの艦隊は整然と撤退を行なった。ヤンはそこに乗じるべき隙を見出せなかった。

「名將は退き際を心得る、か。ウランフにボロディン、厄介な連中が出てきたな。これではファルケンルストには迂闊に近づけないな。そして残念だが、ファルケンルストは同盟の手におちたと見るべきだろう」

参謀長のオルラウ少將が尋ねた。

「では撤退なさいますか」

「ああそうしよう。残存部隊を收容後、全軍フェザーン本星まで後退せよ」

ファルケンルスト要塞、それはフェザーンがフェザーン回廊対同盟側出口にその財力をあげて建造した巨大要塞である。

直径50 km、鏡面処理を施した超硬度鋼とスーパーセラミックによる複合装甲を持ち、要塞主砲ファルケンシュナーベルは8億5千メガワットを誇る。カタログスペック

はガイエスブルク要塞を上回り、銀河最大最強の要塞であった。

ブルース・アッシュビー以後の強大化した同盟への恐れがフェザーンにこのような要塞を造らせたのである。

収容艦艇数一万八千隻、収容人員も四百万人を誇るが、平時においては数百隻程度の艦艇と、十万人程度の人員がいるに留まっていた。このため、ヤンはこの要塞を容易に落とせるものと考えていた。ヤンの当初の構想ではフェザーン占領後の対同盟の防波堤としてこの要塞を機能させるつもりであったが、同盟の異常に迅速な行動の前に、修正を余儀なくされていた。

クーデターより先に、ルピンスキーはフェザーン商船に偽装した同盟艦艇によってファルケンルスト要塞に辿り着いていた。そしてその場で同盟軍の要塞進駐を認めただのである。フェザーン国境付近に待機していた同盟第二艦隊、第十艦隊、第十一艦隊、その他陸戦部隊、工兵部隊は迅速に要塞に進駐を果たした。

仮にクーデターのタイミングが数日遅れていたら、ルピンスキーの不在とファルケンルスト要塞への同盟進駐は大きな騒ぎとなっていただろう。

実際には、同盟側がその兆候をある程度捉えていたため、同盟にとって理想的なタイミングで事を起こすことができたのだ。

さらにユリアンの手引きで、クーデターに前後して長老衆、正規軍上層部等のフェ

ザーン要人も要塞に辿り着いていた。

ただ一つ、ユリアンが不思議に思ったのは、トリユーニヒトからの要請で救出すべき要人リストの中に地球教の主教が加えられたことだった。だが、ユリアンも多忙であり、そのことは意識の片隅に追いやられた。

今やファルケンルスト要塞は対連合の一大反攻拠点となりつつあった。

第三部 3話 とある中將の受難

平和であるはずのフェザーンの政変と同盟軍のファルケンルスト要塞進駐の報は、同盟市民にも動揺をもたらした。

だが、トリユーニヒトの演説はそれを沈静化させた。

彼は、ファルケンルスト要塞進駐の意義を強調し、今後同盟とフェザーンが共同歩調を取ることを明言した。フェザーンの保有する同盟国債の放棄と引き換えに。それには先日発行した臨時国債も含まれていたのだから同盟は無償で戦費を調達したに等しい状態となった。

また、トリユーニヒトは自らが任命したユリアン・ミンツの功績を讃えた。

フェザーン自治領主ルビンスキーをクーデターから救い出し、ファルケンルスト要塞を同盟軍の手中とし、さらにはあのヤン・ウエンリーの艦隊に打撃を与えた、と。

さらに遡って、フォークによる帝国領侵攻作戦の成功もユリアン・ミンツの作戦指導の賜物だと暴露したのだった。

ユリアン・ミンツは同盟でワンダー・ユリアン（驚異のユリアン）と呼ばれ、若き英雄としてまで囃されるようになった。

2月10日、同盟で行われた選挙はトリユーニヒト率いる主戦派の勝利に終わった。ジョアン・レベロ、ホワン・ルイは野に下った。

評議会の大半をトリユーニヒト派が占めることになった。

戦争は継続されることが決定的となった。

フェザーン回廊側の対連合戦線、イゼルローン回廊側の対帝国戦線、同盟は今後二つの戦線を戦うことになる。

アンドリユー・フォークは中将に昇進していた。そして対帝国作戦の総司令官に任命され、我が世の春を謳歌しておかしくない筈であった。

しかし……

フォークは、未だにあのエンダースクールの後輩のことを思い出すと怒りが湧き上がってくるのだった。

……ユリアン・ミンツ、私の作戦を台無しにしてくれた小僧。そもそもトリユーニヒト議長に帝国領侵攻作戦を持ちかけたのは私だったのだ。司令官を失った二つの艦隊を糾合し、私が指揮を取って内乱の最中で無人の野に等しい旧北部連合領を抜け、帝国

領奥深くに侵攻する私の計画が。

奴は私の作戦案を見てこう言ったのだ。

「この、高度の柔軟性を保ちつつ臨機応変に対処する、というのは何ですか？ 行き当たりばったりと議長は解釈しましたよ。隙あらば長駆オーデインに攻撃を仕掛けたい、と正直に書いた方がまだマシでしたね。まあそんな自己満足に一個艦隊の将兵の命を犠牲にするなんて、僕も議長も許しませんけどね。」

……ああ、僕は議長からあなた宛の命令書を預かっています。ちゃんと宇宙艦隊司令長官の名で。フオーク先輩は僕の作戦案に従うように、との内容です。副司令官のストークス少将もご存知のことですから、現場でも無視はできませんよ。現実的な作戦案をここに用意しておきましたから、よく読んで実行の程よろしくお願いします。

……無論功績はあなたの物になりますからご心配なさらず。

え、失敗したら？ 嫌ですね、あなたの責任に決まっているじゃないですか。

……そんな顔しないでください。

……チョコボンボン食べます？」

あの小僧め！

エンダースクールに誘われた時、私は悟ったのだ。

エンダーとは忘れられた英雄の名だという。

エンダーとはすなわちアンドリユ어의愛称。

このアンドリユ어・フォークこそがエンダーの、そしてアツシユビーの後継としての自由惑星同盟を導いていくのだと。

それを、士官学校にも行っていない小僧の指示に従えなどと！

……しかも、私の指揮のおかげで、つまらない作戦でも着実に成果を上げることが出来たというのに、トリユ어ニヒトは！演説で私の功績をうばってあの小僧のものにしてしまった！

……いや、終わったことは仕方ない。無理にでもそう考えよう。

しかし、それに輪をかけて今回は何だ??

稼働状態に移行した同盟軍正規艦隊はイゼルローン回廊を抜け、モールゲンに集結していた。

2月15日、帝国との決戦に臨む司令官がモールゲンで作戦について議論していた。

主な参加者は下記の通りであった。

総司令官 フォーク中将

第三艦隊司令官 ホーランド中将

第四艦隊司令官 アル・サレム中将

第五艦隊司令官 ビュコック中将

第八艦隊司令官 アップルトン中将

第十二艦隊司令官 ルグランジュ中将（フォーク中将の後任）

情報主任参謀 ビロライネン少将

工兵部隊指揮官 バウンズゴール技術少将

作戦主任参謀 コーネフ中将

作戦参謀 ワイドボーン少将

作戦参謀 ラップ中佐

今は作戦参謀グループが作戦案の説明を行なっていた。

しかし説明者のラップ中佐の視線は、明らかにフォークではなくビュコックを向いていた。

いや、はつきり言つてフォークは存在を無視されていた。

そもそもこの作戦会議は私が立てた作戦案を皆に披露する場ではなかったのか？そう考えながら、フォークは発言した。

「ちよつと待つてください。総司令官はこの私です。何故このアンドリユー・フォークを無視して話を進めるんです!？」

提督達は顔を見合わせた。ビュコックが代表して答えた。

「統合作戦本部からの通達は見えていないのかね？ フォーク中将は直接の指示は出さず監督に専念せよ。指揮は先任のこのビュコックが取るように、と。端的に言つてしまえば、貴官はお飾りでいろということだな」

「はあ!?! そんなことは聞いていない！ 総司令官は私だ！ 私の意見に従うのが筋でしょう！」

「だからお飾りということなんじゃよ」

「何故この私がお飾りで、引退間際の年寄りが指揮を取るんだ!?!」

ホーランドが我慢できず口を挟んだ。

「フォーク、貴様、ビュコック閣下の経験と実績を尊敬せんか!?!」

ビュコックはホーランドを片手で制した。

「まあ私が引退間際の年寄りなのは事実だからそこはよいさ。重要なのは、これが宇宙艦隊司令長官からの指示だということだ。ここにいる誰もこの指示には逆らえんという(ことさ)」

「現場での指揮は総司令官に任されるはずです!?!」

「まあそうなんじゃがね。もう一つ通達があつてな。フォーク中将がこの命に服さざる時は心神耗弱を理由にこのビュコックの一存で指揮権を剥奪してよい、とな。こんな通達、私の長い軍歴でも初めてじゃが、出ているものは仕方ない。貴官も私も従うしかな

いな」

「こんなことが許されるものか。認めない、認めない……」

ブツブツと呟きだしたフォークの目を見ながら、コーネフ中將が低い声を出した。

「上をお飾りにして好き勝手なことをする。許されるも何も、これは貴官がロボス閣下にしていただくだろうが」

フォークの中で何かが切れ、彼は白目を剥いて昏倒した。

ヤمامラ軍医少佐の所見では転換性ヒステリーとのことだった。

諸將は相談の結果、フォーク中將をモールゲンに置いて決戦に臨むことに決定した。総司令官が倒れたとの情報は士気に関わることから、決戦終了後まで伏せられることになった。秘密を守るために、以後フォークに面会を求めめる者は「敵襲以外起こすな」との伝言の前に追り返されることになった。

第三部 4話 第十三艦隊

宇宙曆797年／帝国曆488年2月13日、

フェザーンで同盟と対峙を続けるヤン・ウエンリーへの援軍として、クロプシュトツク、フォイエルバツハの二個艦隊が派遣されることが決定された。

北側からの同盟軍の侵攻を懸念する連合としては、これが限界であった。

フェザーンに展開する連合軍艦艇数はこれで四万隻となった。さらにボーメル中将率いるフェザーン正規軍、傭兵軍混成艦隊を合わせると五万隻にもなる。

ファルケンルスト要塞周辺に展開する同盟軍四万六千隻、フェザーン軍二千隻と拮抗する戦力が揃えられることになった。

2月14日、10時25分にユリアン・ミンツは中尉への昇進辞令を受け、その後同日の16時30分には大尉への昇進辞令を受けた。

翌日、同盟軍第十三艦隊の設立が発表された。

所属艦艇数五千隻、旗艦はシヴァ、司令官はユリアン・ミンツ大尉であった。

異例の抜擢であったが、小規模の実験艦隊ゆえの特例との説明がなされた。

主な幕僚として、

副官兼艦隊航法担当士官 シンシア・クリステーン中尉

参謀長兼情報主任参謀 バグダツシユ少佐

副司令官 デツシユ准将

旗艦艦長 ニルソン中佐

陸戦部隊指揮官 ジャワフ大佐

その他、司令官護衛役としてルイ・マシユンゴ准尉がいた。

マシユンゴはフェザーン駐在武官時から護衛役を務めていた。

バグダツシユはフェザーン脱出作戦でユリアンに協力しており、それゆえの抜擢だった。

規模、人員、司令官、艦艇構成、様々な面で異色の艦隊であった。

ユリアンはファルケンルスト要塞近傍で第十三艦隊と合流した。

旗艦シヴァに乗り込むと、お嬢様然とした女性士官が笑顔で挨拶をしてきた。

「ごきげんよう、ミンツ大尉。シンシア・クリステーン中尉です。あなたの副官を務めます」

そして顔を近づけ小声で囁いた。

「私もエンダースクール出身よ。よろしくね後輩君」

ユリアンは一瞬どぎまぎしたが、すぐに落ち着きを取り戻して答えた。

「よろしく願います、クリステイーン中尉。この実験艦隊の運用では、いろいろとお願いすることになると思っています」

「はい、何なりとご相談ください」

ファルケンルスト要塞はルフエーブル中将、マスカーニ准将の元、改修が進められていた。クーデター以前からフェザーンによつて秘密裏に改修準備が行われていたこともあり、作業は順調に進んだ。

第十三艦隊も作業に協力していた。そのための部隊でもあったのだ。

ファルケンルスト要塞内でシンシアは地球教デグスビイ主教に声をかけられた。

「すみません、そこのお嬢さん。民間人に対する避難指示が出たようなのですが、どこに向かえばいいのか……」

「ああそれでしたら」

デグスビイはシンシアの答えを遮った。

「クリステイーン中尉、ユリアン・ミンツを籠絡せよ。あれは地球教にとつて有用な人材だ。まだ若いしくらでも染められる」

シンシアは表情も変えずに答えた。

「承知しました。全ては地球のために」

「まずは、ユリアン・ミンツにヤン・ウエンリーを討たせるのだ」

人が近づいてくる気配を察したデグスビイは話を打ち切った。

「ありがとう、お嬢さん。あなたに地球の恩寵がありますように」

デグスビイは離れていった。

入れ替わりに近づいて来たのはユリアンだった。

「デグスビイ主教と何を話していたんですか。クリステイン中尉」

「二人の時はシンシアでいいですよ、ユリアン君。道を尋ねられたんです。それよりファルケンルスト要塞の中に仮設の喫茶店ができたそうなんです。一緒に行きませんか?」

「いいですね。ではマシユンゴ准尉も誘って行きましょう」

「……」

2月28日、一つの実験が行われた。

ファルケンルスト要塞は、遠巻きに監視する同盟軍正規艦隊の前で激しい時空震を発生させながら忽然と姿を消した。

その後要塞は、再度時空震を伴って数十光秒先に姿を現した。

オペレーターがユリアン・ミンツに報告した。

「ファルケンルスト要塞に異常なし。ワープ実験成功です！」

ファルケンルスト要塞の機動要塞化、これはルビンスキーが準備していた切り札であり、今やそれは同盟軍によって有効活用されようとしていた。

歓声に包まれる艦橋の中でユリアン・ミンツは独語した。

「これでヤン・ウエンリーを討つ準備が整った」

既知銀河最強の機動要塞と、第二、第十、第十一、第十三艦隊の合計五万一千隻。同盟軍とユリアン・ミンツがヤン・ウエンリーに対して用意したものだ。

宇宙暦797年／帝国暦488年3月3日、同盟軍はファルケンルスト要塞とともにフェザーン本星に対して進軍を開始した。

第三部 5話 ファルスター星域会戦（前半）

フェザーン回廊で同盟と連合が睨み合いを続けていた頃、帝国も同盟との戦いに突入しようとしていた。

宇宙暦797年／帝国暦488年2月12日、

対同盟遠征艦隊の出発が迫るオーデインで一つ大きなトラブルが生じていた。

ロイエンタールの乗った自動車が郊外で事故に遭い、運転手は即死、ロイエンタール提督も危篤状態に陥ったのだ。

この事態にラインハルトはキルヒアイスを呼び寄せた。

「リッテンハイム大公の関与を疑って探りを入れてみたが、どうやら違うらしい。本当に単なる事故なのかもしれない。ロイエンタールの意識が戻らないと分からぬがな。リッテンハイム大公も運が良い。我らが出征を控えていなければ、たとえやつていなくともこれを理由に拘束してやったものを」

「ロイエンタール提督が回復次第事情は聴くようにします。ラインハルト様は出征に集中なさってください」

「うむ。キルヒアイス、また何か起こるかもしれない。姉上のこと、十分注意してくれ」

「はい、ラインハルト様」

元帥府は暗い雰囲気に含まれていた。

ビットェンフェルトがワーレンに話しかけた。

「ロイエンタール提督が交通事故とはな。俺はてつきり女に刺されたのかと思つたぞ」

ビットェンフェルトなりに重苦しい雰囲気吹き飛ばそうとしての軽口だったが、ミッターマイヤーが自分を刺すような眼で見ているのに気づいて、沈黙せざるを得なくなつた。

そこにラインハルトとキルヒアイスがやって来た。

「卿ら、ここで黙つて立つていてもロイエンタールの傷が治るわけではない。卿らの義務を果たせ。ミッターマイヤー、ロイエンタールのことは残念だが、次の戦いで卿に期待するところさらに大となった。苦勞をかけることになるがよろしく頼む」

「勿体無いお言葉」

「ミュラー、ロイエンタールの代わりに出征の準備をせよ。ロイエンタールの艦隊は一時キルヒアイス副司令長官の預かりとする」

ミュラーは転がり込んだチャンスに心躍らせた。

「はっ！必ずやご期待に応えます」

「次の戦いに帝国の興廃がかかっている。出征は近い。気を引き締めよ！」
「御意！」

重苦しい空気はラインハルトの檄の前に消え去った。

2月15日、ラインハルト率いる対同盟遠征艦隊がオーデインを出発した。

2月23日、同盟占領地域に入った帝国軍は、同盟の基地を探索、攻略しつつ進んで行った。

途中ビューフォート准将率いる同盟軍のゲリラ部隊に一部艦隊の補給線を絶たれる事件も起こったが、一時的なもので済んだ。

警戒の必要性から前進速度は落ちたものの、基本的には順調に進んでいった。

ラインハルトは諸将に語った。

「敵はおそらく我々の補給線が伸びて消耗するのをモールゲン星域近郊で待っている。だが、それは想定済みのことだ。臆する必要はない」

3月1日、斥候部隊が同盟軍の大部隊を発見した。

その星域の名はファルスター星域といった。

ファルスターAとファルスターBの二つの恒星が近接する連星系を中心とした星域であった。

3月4日、ファルスター星域で同盟軍七万五千隻と帝国七万二千隻が激突した。史上最大規模の会戦の幕開けであった。

同盟軍は、ファルスターA、Bの近傍に布陣していた。

会戦推移①

その布陣は、双頭の蛇と呼ばれる陣形に思われた。縦に長い陣形で、二つの頭をそれぞれ二個艦隊が構成し、その間の胴体にあたる部分を一個艦隊が構成していた。

帝国軍の諸将は、この陣形に戸惑いを見せた。

「戦力が拮抗しているにも関わらず、双頭の蛇の陣形を取るとは……敵は何を考えている？ 各個撃破の格好的ではないか」

「しかも胴の部分が薄い。各個撃破してくれと言っているようなものだ」

総参謀長のメツカリンガーが情報を提供した。

「敵の総司令官はフォーク中将、北部占領の手際はよかったが、戦術に関しては未知数で

すな。捕虜の情報だと、独善的だとか、能力はともかく性格に関してはあまり良い噂はないようですが」

帝国軍はビュコックが指揮を執っていることを知らなかったのだ。

「後背に機雷原を敷いているということはないか？司令官が冷酷な作戦をとり得るなら、あの艦隊は捨て石で、機雷原で突破を防ぎ、その間に包囲するつもりだとか」

「そんなものは見当たらないな。せいぜい小惑星が点在している程度だ。それもごく少数だ」

「あの艦隊の周囲に指向性ゼツフル粒子が充満しているとか」

「そうだとしたら近づいた時に探知可能だし、先走ってこちらが砲撃を始めたら逆効果だろう」

なかなか結論は出なかった。

ついにラインハルトが決断をした。

「敵が何を狙っているにせよ。中央が薄いのは事実だ。ミッターマイヤー、ビットェンフェルトは鋒矢の陣形で速やかに敵の胴体部に突撃せよ。その間、残りの四個艦隊は敵の双頭を牽制し、胴体部の撃滅後にミッターマイヤー、ビットェンフェルトと連携して双頭の各個撃破に移れ」

ミッターマイヤー、ビットェンフェルトは命令の通り高速で同盟軍の胴体部に向かっ

た。

それを見守るラインハルトであったが、何か引つかかっていた。

二重連星系、点在する小惑星……

ラインハルトの直観が危険を察知した。

「おかしい！二重連星系のごく近傍では天体は安定軌道を取れない筈だ！本来ファルスター星系には小惑星など殆ど存在しない。ごく少数とはいえ、点在する小惑星、これは罨だ！ミッターマイヤー、ビットェンフェルトに後退を指令！いや、遅いな。斜め天頂方向への回避を命じよ」

「しよ、承知しました！」

オペレーターは慌てながらも指示を実行した。

メックリンガーは航法データを確認した。

「たしかに、ファルスターA、Bの周囲にこんな数の小惑星は記録されていませんな。迂闊でした……」

「いや、私も気づくのが遅かった。問題はミッターマイヤーとビットェンフェルトの回避が間に合うかどうかだが」

「同盟軍は何を用意しているのでしょうか？」

「小天体サイズの罨、いくつか思いあたるものはあるが……すぐにわかる」

ミッターマイヤー、ビットンフェルトは指示に従い、斜め天頂方向に進路を変更した。このまま行けば敵艦隊の直上を抜ける形になる。

砲の射程のギリギリを通過しようとしたその時、何も無いと思われた空間から無数の光条が伸びた。

高出力レーザー、荷電粒子ビーム砲、中性子ビーム砲、長距離レーザー水爆ミサイル、磁力砲、それらがミッターマイヤー、ビットンフェルト艦隊に向かって殺到した。

先頭を行くビットンフェルト艦隊の被害はまだ大きくなかったが、後続のミッターマイヤー艦隊の被害は甚大であった。

「我が艦隊の損失二千隻！」

「くそっ！しかしローエンングラム侯の指示がなければこんなものでは済まなかった」

その攻撃は同盟軍の用意した。機動型アルテミスIの首飾り、通称アルテミスIIIによるものであった。

同盟はこの時点までに三つの「アルテミスIの首飾り」システムを保有していた。

一つは首都星バーラトに設置された旧来のものであり、もう一つは先日モールゲンに設置された新型アルテミスIの首飾り、通称アルテミスIIである。

そして最後の一つが、バウンズゴール中将の元機動兵器として改修されたアルテミスIIIであった。

単独でのワープ能力は持たないものの、搭載した通常航行用エンジンによって艦隊運動に追従できる機動能力を獲得していた。

これが胴体部と頭部の間に6基ずつ、小惑星に偽装された上で展開されていた。

12基全てを合わせるると一個艦隊を優に越える攻撃力を保持していた。

「これからは無人兵器と我々工兵の時代だ。それをこの会戦で証明して見せる」それがバウンスゴール技術中将の野望であった。

会戦推移2

胴体部を担当していたビュコック提督は、次の指示を出した。

「流石はローエングラム侯、気づいたか。同盟と連合に何度も煮え湯を飲ませただけのことはある。全軍プランBに移行せよ」

双頭のうち一つからホーランド艦隊が分離し、ミッターマイヤー、ビッテンフェルトの艦隊に向かった。

それ以外の艦隊とアルテミスIIIは、帝国軍本隊に向かって前進した。

同盟軍の作戦は、ある意味非常にシンプルであった。

帝国軍に、同盟軍の戦力を自らと同程度だと誤断させ、戦術上のミスを誘う。その上

で優勢な戦力で撃破を図る。

それだけだったが、仮に戦場で帝国軍に意図を察知されても、ほぼ確実に優勢は確保できる点で確実性の高い作戦だった。

現在まで状況は同盟軍の想定範囲内で推移していた。

ラインハルトは指示を出した。

「あれは叛徒どもの首星を守るアルテミスの首飾りと同等のシステムに機動力が加わったものだ。一基ごとの攻撃力は高いが、逆に言えば一基落とすだけで攻撃力を大幅に削ることができる。

ワーレン、ルッツはまずアルテミスの首飾りを優先的に狙え。私とミュラーはその間、敵艦隊の攻勢に対する防壁となる。ミッターマイヤー、ビッテンフェルトは遊撃を行え」

ミッターマイヤー、ビッテンフェルトは命令を果たすことが出来なかった。ホーランド艦隊に喰らいつかれたのだ。

「さらに磨きをかけた我が芸術的艦隊運動を見よ！」

ホーランド艦隊は機動性に富んだ艦隊運動で、ミッターマイヤー、ビッテンフェルト両艦隊に浸透し、一時統制不能の状態に陥れた。

ホーランドは前回の反省から、艦隊の半分、七千五百隻に「芸術的艦隊運動」を行わ

せる一方、残り半個艦隊には待機と敵艦隊への牽制を行わせていた。ミッターマイヤー、ビットンフェルト両艦隊の後退の動きはこの半個艦隊によって阻害された。

半個艦隊を担ったのは新たにホーランド艦隊の副司令官ライオネル・モートン少将であった。熱血熱狂のホーランドと沈着冷静なモートンの組み合わせが予想外の相乗効果を生み出していた。ホーランドが先の会戦において挫折を経験していなければ他者に頼る発想は生まれていなかっただろうが。

ホーランド率いる半個艦隊が芸術的艦隊運動の限界に達する前に、モートンの率いていた半個艦隊も芸術的艦隊運動を開始し、先の半個艦隊に休息と補給の機会を与えた。ホーランドとモートンは指揮をスイッチし、ホーランドは芸術的艦隊運動を続けた。

このような工夫をしても消耗が激しいことに変わりはないためいずれ限界は来るが、二個艦隊を長時間拘束するという役目は十分に果たしていた。

「帝国の狂犬ビットンフェルトに加えてラインハルトの片腕のミッターマイヤーを一個艦隊で抑えられるなら十分にお釣りが来るといふものじゃ」

いや、同盟の狂犬ホーランドの暴走を帝国軍が二個艦隊を使つて抑えてくれていると考えればさらに有り難みがあるな、とビュコックは思ったが流石に口には出さなかつた。

会戦推移 3

本隊同士の戦いも激しいものになった。ピュコック、アップルトンをラインハルトが、アル・サレム、ルグランジュをミユラーがそれぞれ受け持つ形となった。それぞれ2・5倍の戦力差であったが、いずれもよく戦列を維持した。

ミユラーはこの時、旗艦を三度乗り換える奮戦を見せ、ついに耐え抜き、「鉄壁」の異名を得た。

その間にワーレン、ルッツはアルテミスⅢへの攻撃を実施した。

ルッツは的確な指示を出した。

「鏡面装甲を持つアルテミスの首飾りにビーム攻撃は効き目が薄い。戦艦部隊を前面に出して肉薄し、雷撃艇、ミサイル艦を主役にして攻撃を加えよ」

ワーレンも檄を飛ばした。

「首飾りシステムは本来衛星軌道上に展開して衛星同士相互連携することを前提としたもの。いくら航行可能になったとはいえ、相互の連携は元祖に劣る筈だ。恐れるほどのものではない」

時間はかかったものの、ワーレンとルッツは12基全ての破壊に成功した。多数の艦艇の犠牲と引き換えに。

アルテミスⅢの撃破によってワーレン、ルッツはラインハルト、ミュラーの支援に回ることができた。

しかしながら依然として戦力的には帝国軍が不利であった。

戦況は同盟軍優勢で推移したが、勝敗は未だ決してはいなかった。

会戦推移 4

同盟軍にも帝国軍にも積極的な行動に移るのを躊躇う要因が存在した。

ビュコックは、戦場にロイエンタール提督がいらないことを疑念を持っていた。キルヒアイス副総司令官がいらないのは不測の事態に備えるためだと理解できる。しかし、帝国にとって最重要であろうこの決戦にロイエンタール提督までいないとは。

ロイエンタールが事故に遭ったという情報は同盟軍にも伝わっていたが、それが本当かどうか判断しかねていたのだった。

帝国軍がロイエンタール提督を別働隊とし、攻撃の機を伺っているという疑いを拭い

去れていなかった。

ラインハルトは、総司令官であるはずのフォークの旗艦の姿を未だ捉えられていないことを不審に思っていた。

すなわち同盟にはまだ予備戦力があるのではないか。

その恐れがラインハルトにいつも積極的な行動を抑制させていた。

しかし、ここに来てビュコックは決断した。

「待っているとホーランドの奴に限界が来るじやろう。帝国軍に別働隊があるとすればここまでのタイミングで出現しない理由がない。おそらく存在しないのじやろう。ならばここで全面攻勢に移るべきだ。全軍に突撃を指令せよ」

同盟の攻撃が勢いを増した。帝国軍の各司令官もよく凌いだが、戦局を変える程ではなかった。

ラインハルトはビュコックに対応していた。ラインハルトの天才的な指揮は、ビュコック艦隊の艦列に度々亀裂を生じさせたが、戦力差とビュコックの熟練した指揮の前にはなかなか有効打を与えることができなかった。

ミッターマイヤーはホーランドの奔放な艦隊運動に辟易しつつも、ビットェンフェルト艦隊を解放して本隊の援護に回すべく悪戦苦闘していた。

ビットェンフェルト艦隊はホーランドの艦隊運動に付き合っただけで統制を失ったままであ

り、ミッターマイヤーの努力が実を結ぶまでにはまだ時間がかかりそうだった。
このまま戦局が推移すれば、いずれ同盟が勝つことは明らかとなっていた。

会戦推移 5

しかし、勝敗はこの戦場の外で決まることになった。

第三部 6話 ファルスター星域会戦（後半）

ファルスター星域で会戦が始まった頃、

モールゲンでは、アンドリユー・フォークが秘密裏に療養を続けていた。

チョコボンボンの差し入れが届けられてそれを見たフォークが再度卒倒するという一幕があったものの、現在ではまともな会話が成立する程度には回復を見せていた。

とはいえ敵襲以外での外部との接触は、宇宙艦隊総司令官の名で固く禁じられていたが。

そのフォークの部屋の前に、モールゲン同盟軍基地司令官セレブレッゼ中將の副官サンバークが駆け込んで来た。

フォークの護衛と監視を命じられていたシムズ軍曹が用件を問い質した。

「敵襲以外でフォーク中將を起こすというのが、ドーソン総司令官のご命令です」
「だからその敵襲だ！」

連合軍二個艦隊二万隻がモールゲンに侵入したのだ。

セレブレツゼ中將は突然の事態に動揺していた。彼は後方支援のスペシャリストであり、防衛戦についてはまったく経験がなかった。このため、フォークに頼らざるを得なかったのだ。

「落ち着きたまえ、セレブレツゼ中將。このアンドリユー・フォークがいれば例え敵に想像を絶する新兵器があろうと恐るるに足りん！」

久々に解放されたフォークは自信に満ち溢れていた。頼られるということが何よりの精神安定剤となっていたのだ。

「何でもよいが、戦闘指揮は専門の人間に任せろさ」

自分以外に指揮を押し付けられるなら誰でもいいというのがセレブレツゼ中將の本音だった。

「連合軍は二万隻、二個艦隊というが、実質一個半艦隊だ。現在モールゲンにはキャボット少將率いる八千隻と、アルテミスIIがある。アルテミスIIは最新技術によってハイネセンの物より攻撃力を増している。その戦力は二個艦隊に迫るものがある。それにこのフォークがいれば、負けることの方が難しいだろう」

「なるほど……」

セレブレツゼ中將は納得したが、サンバーク少佐には疑問があった。

「しかしそれは連合軍も承知だったはず。ここに来たということは何かしら勝算がある

ということではないのですか？」

「たしかに……」

「おそらく、勝算はない」

「えっ!？」

「どういうことだ？フオーク中将!」

「彼らの目的は、連合がモールゲンに侵攻したという事実をつくるということだろう。これが現在決戦中の同盟軍に伝われば動揺を生むだろう。下手すれば撤退ということになりかねない」

「なるほど……」

再度納得するセレブレッゼであったが、サンバークはなおも食い下がった。

「帝国と連合が組んだということですか……驚きですが、しかしそれなら直接ファルスター星域に行つて我が軍に強襲をかけた方が早いのでは？」

「それだと連合軍にも損害が出るだろう。連合にとつて虎の子の二万隻、本来は一隻足りとも失いたくないだろうからな。戦況によつては帝国軍撤退後に単独で同盟の大軍と戦う羽目にもなりかねんし。」

「たしかに……」

「いちおう筋はとおつているようですね」

ついにはサンバークも納得した。

「ひとまず、連合軍のことはキャボット少将とアルテミスⅡに任せておけばよい。我々がすべきことは、ファルスター星域で戦う同盟軍に我々の無事を伝えることだ。奴らめ、最初からこのフォークの作戦に従っていれば、このような事態にならずに済んだもの……」

ブツブツと呟きだしたフォークを尻目にセレブレッゼは指示を出した。

「サンバーク少佐、早速超光速通信の用意を！」

しかしその時、急に基地が暗くなった。陽光が消え去ったのである。

セレブレッゼは不審に思った。

「何だ？モールゲンに日食を起こすような月はないぞ？」

その時には宇宙で事態が進行していたのである。

ウオーリックは、二万隻の艦艇それぞれに多数の氷塊を曳行させていた。

そしてそのまま惑星モールゲンと、それを守るアルテミスⅡを囲む形で停止した。

キャボット少将率いる八千隻は、それを遠方から監視していた。

「奴ら何をするつもりだ。氷塊を放ったとて、アルテミスⅡを破壊することはできんぞ。だが、我々単独で二万隻に当たること出来ない。ここは様子見か」

キャボットにウオーリックの意図が読めたなら、意地でも彼らの行動を止め、動いた
だろうが。

ウオーリックは命じた。

「各艦、手筈通り氷塊をアルテミスIIに向けて放て」

ウオーリック、ケスラー艦隊の各艦はそれぞれ小氷塊群をモールゲンにむけて投射した。氷塊は仮にモールゲンに突入したとしても、大多数が蒸発しきるサイズに最初から分割されていた。

その上でアルテミスII 12基のそれぞれに向けて投射されたのだった。

アルテミスIIはありとあらゆる兵器でこれを迎え撃った。

秒速10 km程度で近づく氷塊群は攻撃の格好の的であった。

ミサイルやレーザガンは小氷塊群を粉々に砕いた。熱線砲や中性子ビームは砕かれた氷片を水蒸気に変えた。水蒸気は再度氷結し、雲となった。

砕ききれなかった氷塊も、アルテミスIIの自動回避システムによって回避された。

アルテミスIIが破壊されることはなく、その周囲に雲が形成されるだけに終わった。

モールゲンとアルテミスIIを覆う、宇宙空間に広がる巨大な雲を。

この雲によって太陽光は遮られた。

これがウオーリックの狙いであった。

アルテミス之首飾りは太陽光で半永久的に動力を得るシステムである。太陽光によつて各種兵器の動力を得ており、動力を失えばレーザーもレールガンも放つことはできなかつた。

無論バッテリーは存在したが、それは今や氷塊への攻撃のために消耗し尽くした。ミサイルなら少ない動力で放つことも可能であつたが、それも全て氷塊への攻撃で消費されていたのだつた。

動力を失つたアルテミスIIはここに無力化された。

ウオーリックは副官のツエーザー・フォン・ヴァルター少佐に命じた。

「同盟軍八千隻とモールゲン基地に降伏勧告を行え。断られたら攻撃だ。慌てる必要はないさ。それだけの時間は十分にある」

キャボット少将はモールゲンを見捨てることなく勇敢に戦つた。だが、それだけだつた。残艦艇が一千隻を切つた時、キャボット少将は自決し、副官が連合軍に降伏の意思を伝えた。

ウオーリックは降伏処理をケスラー艦隊に任せて、自身は惑星モールゲンに引き返し、再度降伏勧告を行なつた。アルテミスIIは無力化されたままだつた。

セレブレツゼは基地司令官として降伏勧告を受諾した。

フォーク中將は、連合軍がキャボット少將と戦つている間に少数の將兵とともに脱出

用艦艇に乗って、イゼルローン回廊方面に逃走していた。

ウオーリックはそれを些事として見逃した。その乗員までは把握できていなかったのだ。

ウオーリックはセレブレツゼに依頼した。

「ファルスター星域で戦う同盟軍に、モールゲン占領と連合軍がファルスター星域に進軍中という事実を伝えてくれ」

ウオーリックは、フォイエルバツハ艦隊と連れてきたローゼンリッター第一連隊を含む陸戦隊に基地占領を任せ、麾下の一万隻を率いてファルスター星域に向かった。

モールゲンはアルテミスⅡとともに連合の手中に落ちた。

モールゲン占領の報は、ファルスターで戦う帝国軍と同盟軍に伝わることになった。

連合軍、モールゲン占領！

さらにファルスター星域に向かって移動中！

その報が入った時、ビュコックは耳を疑った。

理由の一つは連合軍が帝国軍と連携することを想定していなかったこと、もう一つは仮に連合軍の攻撃を受けたとしてもモールゲンにはそれに対応するのに十分な戦力を

置いていたこと、であつた。

ラインハルトは安堵していた。

「遅いと思つていたが、ファルスター星域で直接援軍に来るのではなく、モールゲンの方を攻撃していたとは。方法やタイミングは一任していたとはいえ……アリストター・フォン・ウオーリック、食えぬ奴だ」

ラインハルトは事前に連合軍のウオーリック総司令官と連絡を取り、連携することを約束していたのだ。ラインハルトにとつて勝負は既に戦場の外で決していたと言える。

ラインハルトは諸将に指示を出した。

「皆、ここまでによく耐えた。同盟軍は撤退に移るだろう。同盟軍に損害を与える機会を逃すな。追撃を行なう」

ラインハルトの読み通りビュコックは撤退を決断した。

「連合と帝国が連携する可能性を軽視し過ぎたか……古い常識に囚われすぎていたかの。いや、今更言つてもしょうがないな。補給線を絶たれ、帝国、連合に挟撃を受ける前に撤退しよう。問題は大人しく撤退させてくれるかじゃが……」

撤退の指令は艦隊司令官に伝達された。諸将も勝つ前に補給が絶たれることを理解

し、指示に従った。

交戦しながらの撤退は難事であった。

本隊に関しては各司令官の熟練の指揮の元、撤退を成功させつつあった。

問題はホーランド艦隊であった。

「ビュコック提督、我々に助けは無用。本隊も苦しいところでしよう。それに我々が不用意に退けば、自由になったミッターマイヤー、ピッテンフェルトが本隊の退路を断つ可能性があります」

「何?では貴官は本隊の犠牲になるのか?」

「犠牲になるつもりはありません。我々は我々で撤退を成功させるつもりです。あのライアル・アッシュビーには無理でしたが、このホーランドは成功させてみせます」

ホーランドは自信に満ちた笑顔を見せた。

「貴官……いや、わかった。貴官の武運を祈る」

「ビュコック提督!」

ホーランドはビュコックを呼び止めた。

「何じゃ」

「万一小官が戻らなかつた場合には、ぜひ覚えておいて頂きたい。我が先覚者の戦術は十分に有効であつたことを。そしてホーランドは未来に知己を求めに行ったのだと」

「う、うむ……。貴官以外に同じことが出来るかは疑問じゃが」

「はっはっは。そうでしょうとも！」

面食らったビュコックを尻目にホーランドは通信を切った。

ホーランドは獰猛な笑みを見せつつ檄を飛ばした。

「さてここからが、我々の本領発揮の時だ。諸君、我々は英雄になるぞ！」

ホーランドは、全軍に芸術的艦隊運動を指示をしつつ、限界に至った艦から順に離脱、撤退を命じた。

撤退の指揮はモートンに任せ、自身は最後まで敵中に踏み止まった。

芸術的艦隊運動の嵐が過ぎ去った時、ホーランドの旗艦エピメテウスは単艦敵中に孤立していた。

しかしこの時には、本隊は追撃を受けつつもファルスター星域から撤退を完了していたし、ホーランド艦隊もエピメテウスを除き大多数が撤退していた。十分に役目を果たしたと言える。

ホーランドはこの戦いで還らぬ人となった。

撤退する同盟軍を見ながら、ラインハルトは感嘆の気持ちを禁じ得ないでいた。

「メックリングガー、同盟軍の撤退は敵ながら見事だな。それに、我々がここまで追い込ま

れるとは正直予想していなかった。敵の指揮官の名はなんといったか」

「アンドリユー・フォーク中将です」

アンドリユー・フォーク……記憶するべき名前がまた一つ出てきたようだな。私の名前です。その男に電文を送ってくれ。

貴官の勇戦に敬意を表す。再戦の日まで壮健なれ、と」

ラインハルトは、この会戦の敵手を、最後まで勘違いし続けたままだった。

電文を送られた同盟軍も頭を悩ますことになったが、ビュコックは苦笑しただけで特に何も対処をしなかった。

後にこの電文を知ったフォーク中将だけが狂喜したという。

同盟軍は撤退を続けた。

途中、一部の艦隊はウオーリック艦隊の攻撃を受け、大きな被害を出した。

撤退の過程でアプルトンが戦死し、アル・サレムも重傷を負った。

モールゲンを失っていた同盟軍はイゼルローン回廊内のアルトミュール恒星系に設置された同盟軍基地まで退却した。

最終的に同盟軍は三万六千隻にまで艦艇数を減らしていた。半数を超える三万九千隻の艦艇を失ったことになる。

帝国軍の追撃がより徹底的であれば、より多くの人員と艦艇が失われていただろう。

しかし、帝国軍には大きな問題が発生していた。

リッテンハイム大公の反乱であった。

リッテンハイム大公派の動きは迅速を極め、オーディンは既に制圧され、リヒテンラーデ公は処刑された。

皇帝エルウィン・ヨーゼフ2世、アンネローゼ・フォン・グリューネワルト、キルヒアイス副司令官らの安否も不明となっていた。

リッテンハイム大公は自派閥に加えリヒテンラーデ公の改革に不満を持つ一部貴族とともに軍を興した。

その総司令官の名は、

オスカー・フォン・ロイエンタール。

第三部 7話 ある男の矜持

時間を遡ること宇宙暦797年／帝国暦488年1月、

リッテンハイム大公は、ローエンングラム侯とリヒテンラーデ公に対して恐怖を抱いていた。

ブラウンシュヴァイク公は死んだが、自らの勢力も、ローエンングラム侯によって弱体化させられた。ブラウンシュヴァイク派領邦での狼藉を理由に。

それをリヒテンラーデ公も黙認したということは、いつか自分のことも誅するつもりなのではないか。

そうなる前にどうかしないといけない……

実際それは被害妄想とは言えなかった。

しかしリッテンハイム大公には手駒が少なかった。

自派の威勢の良い貴族将校は、大半が処刑や流刑となっていたからである。

ラムズドルフ元帥やミュッケンベルガー退役元帥は中立派であるし、オツペンハイマー大將は日和見主義者であることを露呈している。

誰かいないのか。

そう考えるリッテンハイム大公の元を訪れた人物がいた。

ブラウンシュヴァイク公の腹心で行方不明となっていた人物……

アンスバッハ准将であった。

彼はリッテンハイム大公に語った。

「小官もローエンングラム侯とリヒテンラーデ公に恨みを抱いております。小官が反乱の手筈を整えましょう」

リッテンハイム大公は関心を隠せなかったが同時に不安も抱いた。

「何、しかし露見したら私の身が危ないではないか。それに軍を誰が率いるのか？ローエンングラム侯に勝つ必要があるのだぞ」

「露見した場合、リッテンハイム大公と他の方の間に不和を招くために私が勝手にやったことにすれば良いのです。ブラウンシュヴァイク公の忠臣と呼ばれた私のやったことであれば、納得されるでしょう。それに軍を率いるのに適した人物には心当たりがあります」

「なるほど、わかった。ぜひやってくれ」

リッテンハイム大公には自分に都合の良い面しか見えていなかった。自分もアンスバッハの復讐の対象だとは考えていなかったのだ。

アンスバッハはあえてローエンングラム陣営に人材を求めた。

有能な人材がそこに集まっていたからである。不穏な発言が多く、私生活にも隙が多いと噂されていたロイエンタールが第一候補となった。

アン斯巴ツハはロイエンタールの自動車に細工をして交通事故を引き起こさせた。ロイエンタールは軽傷だったが、アン斯巴ツハ率いる盟約軍残党の手で気絶させられ、事前に掌握済みの病院に運び込まれた。

ここまでの出来事はリッテンハイム大公には知らせずに行われた。リッテンハイム大公が秘密を守れると考えていなかったからである。

強いられた事とはいえロイエンタールは出征可能な負傷であるのに、出征しなかった。

少なくともローエングラム侯に釈明が必要な状況となった。

ロイエンタールは自らが進んでサボタージュしたわけではないと証明する必要があったが、そのような証拠はアン斯巴ツハの手で消され、ロイエンタールが自ら指示したと見えるように工作がなされていた。

アン斯巴ツハはロイエンタールに拒絶された場合に備え、グリューネワルト伯爵夫人を人質にしてキルヒアイスにラインハルトを裏切らせることも考えていた。

女性を人質に取るのはアン斯巴ツハの好みではなかったが。

しかしロイエンタールはアン斯巴ツハの誘いにあっさりに乗った。脅す必要もない

程に。

ロイエンタールはリッテンハイム大公に対し、サビーネとの婚約を協力の条件に出した。

ロイエンタールの女癖の悪さを聞いていたリッテンハイム大公は当初は渋ったが、アンスバッハの説得により最終的には承諾した。

ラインハルトがオーディンを出発した頃、ロイエンタールは郊外の病院で、アンスバッハと面会していた。

「今更ですが、よかつたのですか？主君を裏切ることになつて」

「ほう、卿がそんなことを言うとはな。卿にとつては俺が裏切つた方が都合がよかろう」
「……私はブラウンシュヴァイク公に忠誠を誓つた身。主君を裏切る人間の気持ちかわからないのですよ」

その人物、アンスバッハはロイエンタールの本心を確かめようとしていた。

「近くで忠誠を誓うよりも、離れた方が主君の為になることもあるだろうよ。卿の行動もそうではないのか？」

「それは……その通りですな。すると卿は……。いや、ローエングラム侯に対して謀反を起こす意志自体は確かなようだ。それだけ確認できれば別に構いません。ひとまず今回の件でリッテンハイム大公とローエングラム侯、リヒテンラーデ公、この三人の

うち幾人かがブラウンシユヴァイク公の元に旅立つでしょうから」

「ふむ、ひとまずはお互いの目的のために利用し合おうじゃないか。……そうだ、一つ言っておこう。俺はここに至ってはローエングラム侯と本気で戦うつもりだ。もし俺がローエングラム侯に勝つた場合、返す刀でリッテンハイム大公を討つつもりだ。なおさら卿には都合がいいだろう」

「ほう、その場合はぜひ協力させて頂きます」

「うむ、では準備に動くでしょうか」

決行はロイエンタールの決定で3月5日となった。

その3月5日、まず新無憂宮とリヒテンラーデ公の邸宅がオツペンハイマーの憲兵隊に押さえられた。リッテンハイム大公とロイエンタールに協力を強要された末のことである。

リヒテンラーデ公は捕らえられ、先走った貴族將校によって処刑された。

エルウイン・ヨーゼフ2世も、丁重には扱われたがロイエンタール自らの指示で軟禁状態とされた。国璽もロイエンタールの確保するところとなった。

キルヒアイス、アンネローゼの行方に関しては全く不明であった。とはいえ、艦隊戦力はロイエンタールが掌握しており、事実上無視して構わないと考えられた。

同日、リッテンハイム大公は、国政を壟断するリヒテンラーデ公を君側の奸として排

除したことを公表し、銀河帝国正統政府の成立を宣言した。さらに自らを帝国宰相とした上で、銀河帝国正統政府軍総司令官に元帥に二階級昇進させたロイエンタールを任命した。

近衛兵総監にはラムズドルフ元帥を留任させ、憲兵総監もオツペンハイマー大将を元帥昇進の上留任させた。

ローエングラム侯には速やかに兵権を正統政府に返すことを要求し、従わざる時は実力をもって排除すると伝達した。

無論ローエングラム侯が従うとは誰も考えていなかった。

ロイエンタールは、リッテンハイム大公にキフオイザー星域への移動を提案した。既にリヒテンラーデ公は殺し、エルウイン・ヨーゼフ2世と国璽は手中にある。もはやオーディンに用はないため、この上は戦いやすい星域に移動すべし、と。

キフオイザー星域にあるガルミッシュユ要塞は先の内乱の際オフレッツサーの部下に爆破されたまま放置されていた。

しかし一部の機能は生きており、拠点としての活用は可能と考えられた。

しかし、キフオイザー星域が戦いやすいとはどういうことか？現に先の盟約軍は負けているではないか、と怪訝に思うリッテンハイム大公とアン斯巴ツハにロイエンタールは策を披露した。

最終的にリッテンハイム大公はキフオイザー星域への移動を了承した。

3月15日、銀河帝国正統政府軍のキフオイザー星域への集結が完了した。

ロイエンタール麾下の正規軍艦隊に加え、リッテンハイム大公派貴族と、リヒテンラーデ公、ローエングラム侯の改革に不満を持っていた守旧派貴族、軍人がこれに参加した。

総数は五万隻にもなった。

これはファルスター星域会戦で損害を受けているラインハルトの軍勢を上回る数であった。

3月17日、急行して来たラインハルトの軍勢がキフオイザー星域を強襲した。しかし、正統政府軍は既にそこを去っていた。

両軍はキフオイザー星域に隣接するアルメントフーベル星域で戦うことになった。

第三部 8話 フェザーンの戦い

宇宙暦797年／帝国暦488年3月3日、同盟軍とルビンスキー派フェザーン軍は、機動要塞ファルケンルストと共にフェザーン本星への進軍を開始した。

同盟軍第二艦隊、第十艦隊、第十一艦隊、第十三艦隊の計五万一千隻とフェザーン艦艇二千隻がその内容であった。

総司令官はパエツタ中將であったが、実質ユリアン・ミンツ大尉が指揮を取ることには暗黙の了解となっていた。

ファルケンルスト要塞の司令官は改修作業を担当したルフエーブル中將が務めた。

同盟軍の歩みはゆっくりとしたものになった。

連合軍が回廊の広範囲に機雷を散布していたためである。

艦隊であれば指向性ゼツフル粒子で通路を作れば良いが、要塞が通るとなるとそれでは十分ではない。

また、ワープ位置に機雷が存在する可能性も考えると不用意なワープもできない。

このため、移動先の機雷の有無を確認し、ファルケンルスト要塞主砲ファルケンシユ

ナーベルや指向性ゼツフル粒子により大まかに機雷を吹き飛ばした後、要塞の移動砲台や掃宙艇で取り零しの機雷を片付けるといふ、非常に地道な作業を行いながら前進することになった。

しかしながらこれが時間稼ぎに過ぎないことは同盟軍も連合軍も承知していた。

連合軍の総指揮を任されたヤンは懊悩していた。

ファルケンルスト要塞がこのまま進軍し、その主砲がフェザン本星を捉えたとしたら……今はそれなりに従順なフェザン人も、連合を見限つて反乱を起こすだろう。

フェザン本星に派遣された連合軍情報部ヤーコプ・ハウプトマン少佐の報告もそれを裏付けていた。

フェザン人が敵に回れば連合軍はフェザン回廊から叩き出されることになる。

結局のところ、ファルケンルスト要塞をフェザン本星に近付けさせた時点で負けなのだ。

ヤンとしてはその前に要塞を撃破なり占領なりしないといけなかった。

しかし、そのファルケンルスト要塞を守るのは、同盟軍でも最優秀のボロディン、ウランフ両提督と、頭は少し固いが実力は確かなヤンの元上司パエツタ提督である。

要塞抜きであつても、ヤンは彼らに対して勝てるかと断言できなかつた。

さらになかなかの知恵者と思われるユリアン・ミンツが黒幕として控えているとなれば、ヤンとしては有効な対処の方法を思いつけずにいた。

「とりあえず機雷で時間稼ぎはしてみたが、本当にどうしたものか」

例えば、航行中の要塞のエンジンを一部破壊すれば、無秩序な回転を始めさせられるだろう。

しかしそれを行おうとしても、優秀な提督達がそれを阻むだろう。

また例えば、氷塊にバザードラムジェットエンジンを装着して亜光速に加速し、要塞にぶつけるということもヤンは考えてみてはいた。

しかし不用意にそれを行なっても、きっと簡単に対応されてしまうだろう。

悩んでいるヤンに、ローザが紅茶を持ってきた。

「ヤン提督、少し休憩なさってはいかがですか。今よい茶葉が切れていて申し訳ないですけど」

「いや、ありがとう、ラウエ少佐。……茶柱だ。茶柱が立つと来客があると言うけど、同盟軍のことだったら嫌だなあ」

「緑茶で有名な古代日本では、茶柱が立つのは縁起がよいこととされていたんですよ」

「へえ、そういうものか」

まあ茶柱に関しては男女に関するもう少し恥ずかしい話もあるのですけどね、と言い

ながらローザは何故か赤くなっていたが、ヤンの意識は茶柱に集中していた。

「そうだ、これは使えるかもしれない。ありがとう、ラウエ少佐。おかげでアイデアが浮かんだ。すぐに検証したいのでリンクス技術大佐を呼んでくれ」

「え、あ、はい。承知しました！」

リンクス技術大佐はヤンのアイデアに驚いたものの、ポジティブな答えを返した。

「いま少し検証しないと確実なことは言えませんが、おそらくは可能です」

「そうか。では実行計画を詰めた後、再度連絡してくれ。フェザーン当局の許可を得るから。ちょうど明日の午後、連絡役のボリスが来ることになっているから奴に仲介を頼もう。それまでに計画をまとめられるか？」

「厳しいですが、なんとか間に合わせます」

「ありがとう。よろしく頼む」

翌朝リンクスは約束通り、実行計画をまとめて来た。

ボリス・コーネフは独立商人であったが、ヤンと旧知の仲であるという情報を当局に掴まれ、強制的に連絡役にさせられていた。本人は不平たらたらであった。

また、以前もルビンスキーによって、ヤンに対する情報工作員として連合に派遣された経験があった。

本人の意思と適性はともかくとして、フェザーンの情報網に精通し、なおかつ信用で

きる人物として、ヤンはボリスを重宝していた。

「ボリス、この計画にはフェザーン当局の許可が必要だ。しかし事前に同盟のシンパに知られてはいけないんだ。なんとか頼むよ」

「まあ、しようがない。ボルテック、いや、ケッセルリンクの野郎がいいか。なんとか話を通してみるさ。だがこの貸しは高いからな」

「わかつているさ」

「しかしこれは一種の悪戯だな。一緒に悪さを働いた昔が懐かしいぜ」

ケッセルリンクは、ヤンの依頼に面食らいつつも背に腹は代えられぬと最終的には承諾した。

必要な作業は連合軍のみで秘密裏に行われることになった。

3月13日、ついにファルケルスト要塞はフェザーン本星のある宙域に到達した。

この宙域にも機雷が散在していた。しかも機雷それぞれが様々な速度でゆっくりと場所を移動していた。

ウランフが零した。

「ヤン・ウエンリーめ、やはりここにも機雷をばら撒いていたな。後々の掃宙の苦労が思いやられる。ボルテックもよく許可したものだ」

ユリアンは落ち着いていた。

「グラスノフ補佐官の事前の情報通りですね。補佐官によると、彼らは氷塊にバザードラムジェットエンジンを装着して加速することで質量兵器にしようとしています。それをファルケンルスト要塞に激突させるつもりです」

ポルテックの補佐官グラスノフはルビンスキーに通じており、彼らはそこから直接情報を得ていたのだ。

なお、連絡手段の確保はバグダツシユが担当していた。

ユリアンの説明は続いていた。

「氷塊攻撃に対抗するには、無人艦を加速してぶつけるのが効果的です。ヤン・ウエンリーの狙いは、我々のその対応を無数の機雷で阻害することでしょう。

先方は事前に機雷の座標を把握しているので機雷を回避する軌道を選択できますが、我々は機雷の情報の収集から入らないといけませんからね。

実際事前に情報を得ていなければ、我々も対応に苦労したでしょう。

しかし彼らは我々の情報解析能力と即応能力を甘く見た。

事前にわかっていれば、この第十三艦隊ならば対応できます」

第十三艦隊は、通信能力、索敵能力が強化され、相互にデータリンクされた無人艦によって構成されていた。

無人艦は個艦の対応能力が有人艦に劣るが、運用方法によってはそれ以上の能力を発

揮できると同盟軍の技術将校達は考えていた。

第十三艦隊はそれを立証するための艦隊であった。

防衛戦争の記憶も遠くなり、兵士の成り手の不足に悩む同盟軍ゆえの選択だった。

シヴァはその高い通信能力で艦隊を統制していた。

各艦の収集した機雷情報はシヴァに集められ、短時間のうちに統合され解析された。

各無人艦にはシヴァから適切な移動座標と対応アルゴリズムが伝えられた。

予測されるどの方向からの氷塊攻撃にも、機雷に阻害されずに対応可能な体制が即座に整えられたのだ。

この対応システムを短期間に構築したのはシンシア・クリステイン中尉であった。

彼女は無人艦の運用に特化した才能を有していたのだ。

30分後、複数の氷塊がファルケンルストに向かって発射され、なおも加速中であることが、先行した偵察艦によって観測された。

その情報は超光速通信で第十三艦隊に伝えられ、機雷の影響を受けない適切な座標の無人艦が迎撃を行なった。

無人艦自体が加速し、氷塊とぶつかり、相殺したのである。

連合は様々な方向から氷塊を放った。その数は三十を越えたが、いずれもファルケン

ルスト要塞に打撃を与えることは叶わなかった。

ユリアンはパエツタとルフエーブルに連絡した。

「ヤン・ウエンリーの策はつぶしました。早急に前進しフェザーン本星を要塞の射程に収めましょう」

ユリアンとしては、想定通りに事態が動いたことに安堵したが、同時に落胆もしていた。ヤン・ウエンリーはこの程度だったのか、と。

同盟軍が前進速度を早めたその時、何かがファルケンルスト要塞に衝突した。

第三部 9話 運命の糸

ヤンは旗艦パトロクロスで事態の推移を見守っていた。

「いやあ怖い怖い。やっぱ氷塊攻撃の情報は漏れていたか。でも、奥の手の方には気づいていなかったみたいだな」

ヤンは二つの策を考えていた。そしてその一つ、機雷と氷塊攻撃のコンビネーションについては情報統制を甘くしていたのだ。

策を秘密にしていると、ヤン・ウエンリーには秘策があると同盟軍は考え、意地になってそれを暴きに来るだろう。

そうなれば情報漏洩の可能性は高まってしまう。ヤンは同盟軍を安心させ油断させるためにブラフの策を用意したのだ。

本命は、まともな艦隊司令官が思いつかないような手段だった。

リンクス技術大佐はその時、フェザーンの地表から約3万km上空にいた。

彼はフェザーンの静止軌道、そして軌道エレベータにいたのである。

今フェザーンの軌道エレベータはケッセルリンクの命令によって封鎖されていた。表向きの理由は同盟軍の侵攻に備えるためであり、ボルテックもそれを信じていた。その本当の理由はボリスを通じてケッセルリンクにしか知らされていなかった。

軌道エレベータ、それはハイネセンにもオーデインにも存在しない、フェザーン固有の宇宙到達手段であった。

フェザーンの軌道エレベータの本体は、格子欠陥のない先細り構造の炭素クリスタル繊維による長い綱である。太いところでも2 m程度の単繊維の「糸」が、さらに千本集まって巨大な綱となっていた。

末端にカウンター質量の付いた長さ3万5000 kmを越える果てしなく長い綱、それが軌道エレベータの本体であり、その周囲を覆う構造物はあくまで飾りであった。

軌道エレベータはフェザーンの静止衛星軌道を中心として、引力と遠心力によって常に地表側と宇宙側に引っ張られていた。

静止軌道にあたる3万 kmの位置に重心があり、その5000 km先にカウンター質量を兼ねた管制センターがあった。

仮に炭素クリスタル繊維の「糸」をその重心位置で上下に切断したとしよう。するとどうなるか。

下側は引力によって地表に向けて落下する一方、上側の「糸」は遠心力に従って宇宙

に向かって放り出されることになるのだ。

リンクス技術大佐が行なっていたのはまさにその、「糸」を適切なタイミングで切断する作業であつた。

フェザーンの軌道エレベータは安全を見込んで必要最低限の二倍の炭素クリスタル繊維の「糸」から構成されていた。リンクス技術大佐は「糸」のうち、軌道エレベータを壊さないで済むだけの量である約4割、400本を切断した。

切断された「糸」は今回の目的のために管制センターに開けられた穴から放出された。地表に落下する側の「糸」を、地表に被害を及ぼさないよう、いかに迅速に燃え尽きさせるか。

「糸」切断後も軌道エレベータ自体を維持するためにカウンター質量をいかに調整するか。技術課題は多数存在したが、リンクス技術大佐率いる技術チームは見事にやり遂げた。

結果、直径最大2m、長さ5000km以上の長大な「糸」が天翔けることになった。その数400本。向かう先はファルケンルス要塞の予測位置であつた。

ヤンはファルケンルス要塞の通常航行エンジンを破壊しようと考えていた。それ

を実現するために重要なポイントは

- ・ 事前に同盟軍に意図を気づかせないこと
- ・ その手段が十分な破壊力を持つこと
- ・ 破壊が実現するまでにその手段が感知されないこと、あるいは感知されても対処が難しいこと

の3点であった。

最初の二点はまだしも、最後の一点が問題であった。それが小惑星であれ氷塊であれ、艦隊であれ、同盟軍の総力を上げた護衛体制に気づかれないわけにはいかないだろう。

しかし、宇宙空間を高速で飛ぶ長さ5000kmの「糸」であれば？

それはレーダーにも検知困難な細さであり、仮に検知できたとしても、ノイズとして処理されてしまうだろう。

いや、仮に検知されたとして長さ5000kmもある「糸」をどうやって迎撃すると言うのか。

そして細いとはいえ、太いところで2m、長さは5000kmもある構造物が高速で飛来すれば銀河最大の要塞とはいえ損傷は免れないだろう。

かくして軌道エレベーターそれ自体を兵器とする、史上初で、おそらく以後誰も実行し

ないだろうその作戦が実行された。

ヤン・ウエンリーはこの作戦を「茶柱作戦」と名付けたかったが、ローザ以外の賛同を得られず、無難に「アリアドネ作戦」と呼ばれることになった。

ちなみにヤン・ウエンリーもケツセルリンクも気づいていなかったが、今回の作戦で消費された「糸」の総製造コストはフェザーンの国家予算の半年分に相当した。

この作戦を後で知ったボルテックは卒倒したと伝えられている。

さて、軌道エレベーターから解き放たれた400本の「糸」のうち、

約90%は同盟軍とは無関係な位置に飛び去った。位置予測を一箇所に絞り切れなかったためである。

6%はファルケルスト要塞周囲の艦艇に衝突し、何らかの被害を与えて飛び去った。最大で10隻の艦艇に衝突し、撃破した「糸」も存在した。

そして残り4%がファルケルスト要塞に接触したのだった。

ファルケルスト要塞にとってそれは、打ち据える鞭であり、拘束する縄であった。

ある「糸」はその先端を要塞にぶつけて衝撃を与えた。

ある「糸」は塊として要塞にぶつかり、その装甲を破壊した。

またある「糸」は中央から要塞にぶつかり、そのまま巻き付いた。

そして何本かの「糸」はファルケンルスト要塞に設置された通常航行用エンジンのいくつかを歪め、破壊したのだった。

エンジンを破壊されたファルケンルスト要塞は、バランスを失い、制御不能の回転を始めた。

ここに至っても同盟軍はヤンの攻撃手段を特定できていなかった。

しかし、起きた出来事自体は明確だった。

ユリアンは指示を出した。

「ファルケンルスト要塞から距離を取ってください！このままでは巻き込まれます！」

各艦隊は急いでファルケンルスト要塞から距離を取った。しかし周囲には機雷が存在し、少なくとも艦艇がその犠牲となった。また、間に合わず要塞に激突した艦艇も多数存在した。

「糸」に打ち据えられ、艦艇を巻き込みつつ激しく回転するファルケンルストは、装甲の各所に亀裂が入り、満身創痍だった。

そこに再度の氷塊攻撃が行われた。

致命傷であった。

ファルケンルストのエネルギー炉が暴走を始め、大爆発を起こした。

多数の艦艇が巻き込まれた。

残存の同盟軍艦隊に対し、今まで遠方に待機していたヤン、クロプシュトック、シュ
タインメッツ、フォイエルバッハの艦隊、四万隻が襲いかかった。

同盟軍の提督達は絶望的な状況下でも態勢を立て直し、勇戦したが、戦局は変えよう
もなかった。

共に行動していたフェザーン艦艇は既にいずこかへと逃げ去っていた。

もはや大勢は決したと誰もが考えていた。

しかしただ一人、ユリアン・ミンツだけは諦めていなかった。

第三部 10話 求めるもの

ファルケンルスト要塞が破壊され、戦況が悪化の一途を辿る中、バグダツシユはユリアンに呼びかけた。

「これは負け戦です。さっさと撤退しましょう！」

「パエツタ提督には撤退を検討するよう伝えてください。しかし第十三艦隊にはまだやらないといけないことがあります」

バグダツシユは耳を疑った。

「何ですって！切り札だった要塞が破壊されたじゃないですか」

「ファルケンルスト要塞が破壊されたこと自体は別にいいんです」

「どういうことですか？」

「表立っては言えませんが、フェザーンの奪回は今回できなくても良かつたんです。

連合に要塞を防衛拠点として利用させないことが、最低限果たすべき目標だったので

す。
同盟の、連合に対する方針は消耗戦を強いることです。

盾となる要塞を失ったことで連合は同盟と消耗戦を続けられないといけなくなりました。だからそれはいいのです。

問題は、黙って引き下がるには損害があまりにも大きくなり過ぎたことです。

同盟は既にイゼルローン方面で負けました。ここでも惨敗で終わると流石に有権者が黙っていないでしょう。

トリューニヒト議長のために、我々は有権者にわかりやすい成果をつくらないといけません。この命に代えても」

バグダツシユは、啞然とした。

しかしバグダツシユが言葉を発する前にシンシアが問いかけた。

「何故、そこまでできるんですか？」

「え？」

「議長のため、議長のため。神でもないただ一人の人間のために命をかけるなんて、理解できませんよ！」

ユリアンは呟いた。

「……期待してくれました？」

「？」

「母は早くに死んだ。父は連合領での軍務で滅多に家に戻って来なかった。その間一緒

に暮らした祖母は僕を憎んでいた。

トリューニヒト議長だけだったんだ。小さい頃から僕に目をかけて期待してくれたのは。

皆、知らないんだ。価値を見出してもらえないつらさを。期待されることの有り難さを。

トリューニヒト議長の期待に応えられなければ僕は生きていく意味がないんだ」

バグダツシユの声は諭すようだった。

「そんな深刻になる必要はないと思いますがね。別に議長に限らず、みんなあなたに期待していますよ。私だって、クリステーン中尉だって」

「ええ、そうですね。ユリアン君が知らないだけで、期待している人はたくさんいます」

「……ありがとう、二人とも。でもやっぱりまだやれることがあるんだ。もう少し付き合って欲しい。マシユンゴ准尉も」

三者は三様に答えた。

「しようがないですね」

「私は保護者役ですからね。まあいざとなったらすぐ降伏しますけどね。」

「人は運命には逆らえませんか」

バグダツシユが尋ねた。

「で、何をやるんです?」

「ヤン・ウエンリーの旗艦パトロクロスに乗り込みます。そしてヤン・ウエンリーを捕縛するか、無理なら殺害します」

沈黙が艦橋を包んだ。

「……今すぐにも連合に降伏したくなってきましたよ」

「お願いしますよ。この作戦のためには、バグダツシユ少佐の情報、クリスティーン中尉の艦隊運用、それに陸戦隊の力が要るんですから」

シンシアは意を決して言った。

「お願いがあります」

「何ですか?クリスティーン中尉」

「一つ、危ない橋を渡るからにはちゃんとヤン・ウエンリーを殺、もとい、倒してくださいね」

「は、はい、それは勿論です」

それから、とシンシアは続けた。

「二つ、私のことをこれからはシンシアと呼んでください。三つ、この戦いが終わったら一緒に地球を観に行きましょう。二人だけで」

「……いいですよ。それで協力してくださいるなら」

お熱いすなあ、とバグダッシュユが茶々を入れた。

「まあ、パトロクロスに突っ込んで降伏した方が生き残れる確率が高いかもしれないしな」

深刻な戦況の中、シヴァの艦橋は妙に明るい空気に包まれていた。歪だが、それはユリアン・ミンツがずっと求めていたものかもしれない。なかった。

突入部隊のメンバーはすぐに決まった。

第十三艦隊の有人艦は旗艦シヴァと副司令官デッシュユ准将の乗るムフウエセだけであつたから。

ユリアンは今回のような事態を想定してシヴァの人員のうち3割を陸戦隊に占めさせていた。

この陸戦隊と一部志願者の合計400人が突入メンバーとなつた。陸戦隊を率いるジャワフ大佐は諦めの境地であつた。

「パトロクロスに突っ込むということは、ローゼンリッターの隊員と戦うことになるんでしような。まあ司令官の命令とあらば仕方ありませんが。全滅する前にどうかしてくださいよ」

陸戦隊員達はもう少し陽性の反応を示した。今まで何ら戦況に寄与できず悶々とし

ていた彼らに、ようやく出番が回って来たのだから。

その時、ヤン艦隊はパエツタの艦隊と戦闘中であつた。

クリステイン中尉は第十三艦隊の残存艦を掌握した。分散していた艦艇を集めて艦列を整え、ヤン艦隊に対して突撃を仕掛けた。

ヤンはアツテンポローの分艦隊に対応を命じていた。

アツテンポローはよく制御された砲火で第十三艦隊を押し留めようとした。

だが、無人艦隊は損害を気にせず前進を続け、ゼロ距離に至つたところで次々に自爆した。アツテンポローは一時部隊の統率を失つた。

シヴァと残存部隊はその間にヤンの本隊に突入した。

さらに多くの艦が失われたが、シヴァはついにパトロクロスと邂逅を果たした。

シヴァはパトロクロスにぶつかつて、停止した。

シヴァには揚陸機能も搭載されていた。パトロクロスに突き刺されたシリンダーから400人が荒々しく突入を果たした。

場違いなほど陽気な声がパトロクロスに響いた。

「くたばれ、ヤン・ウエンリー！」

「ペテン師に死を！」

ゼツフル粒子が散布され、火器の使用は不可能になった。パトロクロスの艦橋は騒然となった。

ワルター・フォン・シェーンコップ准将が対応を指示した。

「ロイシュナー・ドルマン！ハルバツハ！迎撃部隊を組織し、対応にあたれ。ゼ布林！俺の装甲服を持って来い。俺も出る。クラフト！リンツに連絡を取れ！」

パトロクロスにいた陸戦隊は、ローゼンリッターより派遣されたシェーンコップ直属の50人のみであった。これに陸戦経験のある乗員150名を加えて、防衛の指揮に当たった。

しかしこれで勢いに乗る400名に対応するのはなかなか難しいと言えた。

シェーンコップは一つ、大胆な指示を出した。

艦隊後方で待機中だったカスパー・リンツ率いるローゼンリッター第二連隊の強襲揚陸艦に連絡を取り、パトロクロスに強襲接舷させたのだ。

これにより、侵入者排除の目算は立ったが、この時には既に敵に前進を許してしまっていた。

抵抗が激しくなる中、ジャワフ大佐はユリアン達を先行させた。

「ここは本職の我々に任せてください！四人ならこの先もなんとかなるでしょう！」

バグダツシュ、シンシア、マシユンゴ、ユリアンの即席カルテットは、結果的にうま

く機能した。

パトロクロスの構造を把握しているバグダツシユが先導し、残りの三人が敵を排除した。ユリアン、マシユンゴは優れた闘士であつたし、シンシアも外見に似合わず十分に戦うことができた。

「エンダースクールのバトルゲームが懐かしいですね！」

「あちらの方が難易度は高かつたですね」

エンダースクール出身者にだけ通じる会話をしながらユリアン達は前進した。

突如、横から戦斧が飛来した。間一髪で、マシユンゴはそれを弾くことに成功した。

「ほう、今のを防ぐか」

シンシアがその名をさげんだ。

「ローゼンリッターのシェーンコップ！」

シェーンコップは芝居掛かった一礼をした。

「私のことをご存知とは光栄です。お嬢さん。ここが戦場でなければぜひディナーにお付き合い頂きたいところです」

マシユンゴがシェーンコップの前に立ちはだかつた。

「ここは私に任せて、先に行ってください」

「マシユンゴ准尉、死なないで！」

ユリアン達は先を急いだ。

「ルイ・マシユンゴ。貴官のことは知っているぞ。交流試合でローゼンリッターの隊員が何人か世話になったからな。だが、俺の相手が務まるというのは思えば上がりかもしれないぞ」

マシユンゴは首を振って戦斧を構えた。

「人は運命には逆らえませんか」

ついにユリアンは艦橋に辿り着いた。

だが艦橋には多数の人員が武器を持って待ち構えていた。

一際高いところにある指揮卓の上に、黒髪 of 学者のような風貌の男が行儀悪く座っていた。

ヤン・ウエンリー!!

「待て!降伏する!!」

艦橋にバグダツシユの大きな声が響いた。

何事かと驚く衆目の前で、バグダツシユは小声で付け加えた。

「俺だけね」

一同が理解に至る前にユリアンとシンシアが動いた。

ヤン・ウエンリーのもとへ！

その時、艦橋を走り抜けるユリアンに向けて、突如白刃が閃いた。

シンシアが咄嗟にユリアンを突き飛ばした。

それはローザの炭素クリスタルブレードの練達の一撃だった。

ユリアンを狙ったそれは、代わりにシンシアを切り裂いた。

「シンシアさん！」

「呼び捨てでいいって言ったでしょ……」

もはや生きているのが不思議な状態だったが、シンシアはローザの足にしがみついて離さなかった。

「離せ！」

「ユリアン、早くヤン・ウエンリーを！そして私の代わりに地球に！」

突如艦橋の重力が失われた。

ユリアンは、突入部隊の攻撃目標の一つに、艦にとって致命的ではないが重要なもの、重力制御装置を加えていた。

突入部隊の一部は、警備の薄い重力制御装置のコンロール室に辿り着き、参加メンバーの中の工兵隊員がその機能を停止させたのだった。

艦橋員は混乱の中に叩き落とされた。

その中でユリアンは水を得た魚となった。

バトルゲーム、そしてフライングボールで培った動きで、艦橋を一気に移動し、ついにヤンの前に到着した。

「君がユリアンか……」

「ヤン提督……」

二人は奇妙な感覚に囚われていた。お互い、何か場違いなところにいるように思えたのだ。

「ユリアン、早く!!」

「ヤン提督逃げて!!」

ローザが、シンシアの拘束を振りほどき、驚くべき速度でユリアンの元に向かっていった。

ユリアンは我に返ってヤンに戦斧を向けた。

「覚悟!!」

「させない!!」

ユリアンの刃がヤンに届くのと、ユリアンにローザの刃が届くのは同時であった。

OGの中、血の玉に囲まれて浮かぶヤンにローザが駆け寄るのを見ながらユリアンの

意識は消え去った。

「ヤン提督、どうして……」

それがユリアンの最後の言葉となった。

第三部 11話 日記

2月9日

今日から新しく日記をつけ始めることにした。

フェザーンを脱出してファルケンルスト要塞に着くまで、日記を書くような余裕はなかった。

ようやく心と時間に余裕ができたので、自分の生きていた証を書き残そうと思ったのだ。

いつまで続けられるかはわからない。

自分の継続力次第でもあるが、次の戦いで戦死する可能性だってあるのだから。

ぼくが学校をやめて軍人になると伝えた時、担任のブッシュ先生はしつこく引き止めてきた。

「ユリアン君、そんなに早く人生を決めることはない。もう少しハイネセンで見聞を広めたらどうだろうか。君ならプロのフライングボール選手にだってなれるだろう。選択の幅を若いうちから狭める必要はないんだ」

学校も部活も休みがちな不良生徒のぼくだったが、フライングボール部の顧問である

ブツシュ先生は価値を見出してきてくれたらしい。

てつきり試合の時だけやって来て好き勝手に点を獲って去っていく問題児だと思われる。これらは新鮮な驚きだった。

しかしぼくには新しい保護者のトリユーニヒト議長の方が重要だった。

ブツシュ先生は「トリユーニヒト議長は政治家としては立派な方だ」と繰り返し返した。勿論その通りだ。保護者として立派であることなんてぼくも求めていないのだから。ぼくは父親によって初等学校の頃からエンダースクールに行かされることになった。一般の学校とエンダースクールの二重生活が僕の日常だった。

まともに友人もできず、日々エンダースクールの生徒と競争に明け暮れる日々。バトルゲームと呼ばれる戦闘訓練の数々。教師達は粗探しに終始し、褒められることなんてなかった。

時々見学に来る、当時は若手の国防委員だったトリユーニヒト議長だけが僕を褒めてくれたのだ。

議長だけが気にかけてくれた。

ぼくはそれを励みに今まで生きてきた。

母は死に、祖母も死に、父も死んだ。でもトリユーニヒト議長が新しい保護者になってくれた。

ぼくは議長の期待に応えなくてはいけない。議長の期待だけがぼくの生きる糧なのだから。

長くなったので今日はここで止めておく。

2月10日

ウランフ提督、ボロディン提督に挨拶に行った。先の作戦では二人とも僕の指示に従ってくれた。

二人とも気さくな人達だった。本当はこんな青二才の指示を受けるなんて嫌なんだろうけど、そんな様子はまったく見せなかった。

とはいえ、ウランフ提督には

「貴官の指示に何百万もの将兵の命がかかっていることを忘れないで欲しい」

と言われた。

肝に銘じておくことにしよう。

2月11日

第二艦隊がファルケンルスト要塞に到着した。

ぼくは艦隊司令官のパエツタ提督とお会いした。

表向きはパエツタ中将が今後の作戦の指揮を執ることになっている。

実績豊富な提督だ。頑固な人とも聞いていたので、プライドを傷つけないように気をつけなければと思っていたが、実際お会いしてみるとそんな印象はまるで受けなかった。

パエツタ提督はヤン・ウエンリーの上司だったことがある。

ヤン・ウエンリーのことを尋ねてみたところ、次のような答えをもらった。

「とにかく勤務態度は最悪だった。だが、やる時はやる男でもあった。私は最後まで彼を見誤っていた。私がアルマイルで彼の進言を容れていれば、今こんな状況にはなっていないかっただろう。」

私はもう失敗する気は無い。だからユリアン君、君のことを色眼鏡で見る気はないし、議長閣下の支持する君を支持するつもりだ」

ありがたいことだ。ヤン・ウエンリーのおかげ、ということになりそうなのが不愉快だけれど。

2月12日

ヤン・ウエンリーのことを書きたい。僕は彼の名前を聞くと平静でいられないのだ。どうしてだろう？

卑劣な策略を用いるから？

それによつて父が死んだから？

式典で議長に無礼を働いたことがあるから？

祖国を裏切つたから？

議長の期待を裏切つたから？

皆の期待を裏切つたから？

きつとどれもが理由なのだろう。

だけどぼくがヤン・ウエンリーを討つのは私怨ではない。

祖国と、そして議長の為だ。そうありたい。

2月13日

トリューニヒト議長と超光速通信で会話した。前から話のあつた新艦隊について
だつた。

議長からは激励を受けた。

期待してくれていることを実感できた。頑張ろう。

2月14日

ぼくに対して昇進と第十三艦隊司令官任命の辞令が出た。

議長の期待に応えなければ。

第十三艦隊は二日後に到着する。

発表よりも大分前から準備は進んでいたのだ。

少し落ち着かない。

ぼくの幕僚になってくれる人たちはどういう人たちだろうか。

議長のためにこころよく働いてくれる人たちだったらいいなと思う。

2月15日

参謀長となったバグダツシユ少佐と打ち合わせ。

バグダツシユ少佐とは既にフェザンで一緒に仕事をした。少し不真面目な感じのする人だけど悪い人ではないし、仕事は着実にこなす人であることも知っている。

艦隊幕僚の経歴情報の共有を行なった。知っていたし希望したことだがやはり工兵畑の人間が多い。それ以外の士官も工学的素養のある人が多い。議長は希望を叶えてくれた。頑張らなければ。

2月16日

ついに第十三艦隊がやって来た。ぼくの艦隊だ。

旗艦のシヴァはハリセンボンのようで少し格好悪いが機能性を追求しているから仕方がない。

クリステイン中尉がエンダースクール出身だったのは驚きだった。議長も知らせてくれればよかったのに。

副司令官のデツシュ准将は物静かな人だった。若造の下で働くことを嫌がっていたらどうしようかと思っていたけど杞憂に終わりそうだ。

シヴァ艦長のニルソン中佐はヤン・ウエンリーと一緒に戦ったことがあるらしい。

どんな人かと尋ねたところ、こんな返事をもらった。

「何を考えているのかわからない人でした。隙あらば昼寝していましたし。ただ、必要な行動を取れる人でもありませんでしたね。正直同盟の敵になってしまっただけです。あとは……三次元チェスは弱かったですな」

勤務中に昼寝をするなんて、ヤン・ウエンリーは軍務をなんだと思っただけだろう。ヤン・ウエンリーほどの能力のある人間なら、その昼寝の時間を有効に使っていけば一体どれだけのことができただろうか。

議長とヤン・ウエンリーが組めば、今頃全銀河を同盟が解放することができていたかもしれない。

自らの能力を生かさなない人間は、能力を持たない人よりも罪深いとぼくは思う。

2月17日

クリステイーン中尉が必要以上に構って来る気がする。自意識過剰かな。

2月18日

司令官会議があつた。

スケジュールに大きな遅れはなく、順調だったので、

先に決めた方針の再確認で終わった。

2月19日

やっぱりクリステイーン中尉は距離感が近過ぎる気がする。

からかわれているのだろうか。

マシユンゴ准尉に相談してみたが「人は運命には逆らえませんか」としか言ってくれない。

決して嫌というわけではないのだけど。

姉がいるとこんな感じなのだろうか。

クリステイーン中尉のようなお姉さんがいたらぼくの今までの人生はもう少しマシなものになっていたかもしれない。

2月20日

クリステイーン中尉が地球教のデグスビー主教と話していた。道を教えていたと言っていたけれど、クリステイーン中尉の様子は少しおかしかったと思う。

フェザーンの要人リストに加わっていたあの人はいったい何者なのだろう。それに、地球教という存在も少しだけ気になる。

この戦いが終わったらバグダツシユ少佐に調査してもらおう。

クリステイーン中尉、マシユンゴ准尉と三人で仮設のカフェに行った。ケーキは美味しかったが紅茶はそれほどでもなかった。

紅茶の淹れ方を習ったのが父親との殆ど唯一の思い出。だから少しだけ紅茶には思い入れがあるのだ。

トリユーニヒト議長もクリステイーン中尉も紅茶が好きだ。

紅茶が好きな人には悪い人はいないとぼくは思っている。

せつかくのティータイムなのにクリステイーン中尉は元気がなさそうだった。少し心配だ。デグスビー主教に何か言われたせいだとしたらさらに心配だ。

今度紅茶を淹れてあげようかと思う。クリステーン中尉にはそれは私の仕事だと怒られそうだけど。

後日訂正、ヤン・ウエンリーも紅茶が好きらしい。紅茶好きに悪い人はいないと思っ
ていたが間違いかもしれない。

2月21日

早速クリステーン中尉にお茶を淹れてあげた。でも「美味しい、私が淹れるより美味しい」と逆に落ち込んでしまった。

失敗した。

午後、議長から超光速通信が入った。状況の確認と共有のためだ。

イゼルローン方面では、同盟軍は予定通りファルスター星域で戦うつもりらしい。

議長は内緒の情報と言いつつ、フォーク中将が倒れたことを教えてくれた。

お飾り扱いされたのがショックだったらしい。

フォーク中将に実権を持たせない方がいいと議長に助言したのはぼくだが、まさか倒れるとは。

議長のためとはいえ、悪いことをしたかもしれない。

差し入れに超光速通信販売でチョコボンボンを贈っておこうと思う。

2月22日

よくお菓子をくれる女性下士官の人から、部屋に來ないかと誘われた。僕が動揺していると、どこからかクリステイン中尉がやって來た。

「二人で話をするのでミンツ大尉は先に艦橋に戻っててください」

と言うと、その通り二人でどこかに行つてしまった。

クリステイン中尉は笑顔だったが、その笑顔がなぜかとても怖かった。

クリステイン中尉はそのうち艦橋に戻つて來て小声でぼくに話しかけた。

「ユリアン君は騙されやすいんだから、ああいう女の人に引つかかっちゃダメですよ」

そして何故か真面目な調子でこう続けた。

「ユリアン君はこれからもいろんな人に騙されるかもしれません。でも騙されたとしても私はあなたの味方ですから、忘れないでくださいね」

後で思ったのだが、ぼくが騙されやすいってどういうことだろうか。

誰かに騙された覚えもないし、これからも騙されるつもりはないのだけだ。

2月23日

ファルケンルスト要塞の改修は順調。

クリステイーン中尉は今日も元気がない。

2月24日

クリステイーン中尉は、ぼくによく地球の話をする。

クリステイーン中尉の話を聞くと地球がとても魅力的な場所に思えてくるから不思議だ。

地球教のように宗教にまでなると理解できなくなるが、クリステイーン中尉のように憧れるというレベルの話であれば、ぼくにもわかる。人類発祥の地、たしかに一度は行ってみたい気がする。

「ぼくも一度行ってみたいです」と言うときクリステイーン中尉は不思議なほど喜んだ。

「この戦いが終わったらぜひ一緒に行きましょう!」

地球は帝国領だから(もしかしたら今は同盟の占領地域に含まれていたかもしれないけど)フェザーンの戦いが終わっても簡単には行けないはずだ。

ちよつと気が早いなと思いつつ、せっかく喜んでいのに水を差すのもよくないと思つて

「ぜひ行きましょう」

と言ったら、さらにいい笑顔になった。

「マシユンゴ准尉やバグダツシユ少佐も誘って」と続けたら、

笑顔が曇ってしまった。

どうしてだろう。

2月25日

クリステイーン中尉からファーストネームで呼んでほしいと再三言われるので、これからは日記上ではシンシアさんと呼ばせてもらうことにする。直接は呼ぶのは無理だ。

シンシアさんは今まで以上に僕に構って来るようになった気がする。元気になったのはよいことだけど。

近くで見ていたバグダツシユ少佐が「あざとい」と呟いて、シンシアさんに睨まれていた。

マシユンゴ准尉に相談してみたが、「人は運命には逆らえませんか」としか言ってくれない。最近マシユンゴ准尉のこの口癖がただの逃げ口上なんじゃないかという気がしてきた。

バグダツシユ少佐も「青春ですなあ。大いに悩むとよいでしょう」と言って逃げてしまった。

シンシアさんは僕のが好きなのだろうか。

いや、きつと弟のように思っているだけなんだと思う。

9歳差だし。

僕があと5歳も歳上だったら、また少し違ったのかもしれないけれど。

正直ぼくにはまだ恋だとか愛だとかいうものがわからない。

ブルース・アッシュビーの最初の結婚相手、アデレード夫人はまだ存命だが、ライアル・アッシュビー提督のことをブルース・アッシュビー本人だと思い込んでいるらしい。

アデレード夫人はライアル・アッシュビー提督をソリビジョンで見て、

「ブルース、あなたはやっぱり私の元に戻って来てくれたのね」と言つて涙を流したという。

そしてライアル・アッシュビー提督宛に、会いに来るようにと何度も手紙を書いて出しているのだとか。

これが愛というものだとするとぼくにはまだ早すぎる気がする。

2月26日

艦隊対抗のフライングボール大会が行われた。

第十三艦隊は人数が少ないためファルケンルスト要塞との混成チームになる。

僕は個人得点王になったが、残念ながらチームは準優勝に終わった。

女子の部では、なんと第十三艦隊／フアルケンルスト要塞チームの勝利となった。

シンシアさんと航法士官のドールトン大尉が活躍していた。シンシアさんも個人得点王にも選ばれた。

バグダツシユ少佐が意外と運動神経が良いことがわかったのも収穫だった。

2月27日

補給計画をためにキャゼルヌ中将がフアルケンルスト要塞にやって来た。

キャゼルヌ中将はヤン・ウエンリーと付き合いが深かったと聞いた。

キャゼルヌ中将に、紅茶を振る舞いながらヤン・ウエンリーのことを尋ねてみた。

回答はこうだった。

「冴えない学者が軍服の仮装をしているような奴だったよ。風貌も、中身も。……ヨブ・トリユーニヒトのことは嫌っていたよ。自分は安全な場所において戦争を煽っている、とな」

不快な気持ち顔に出してしまったのだろう。キャゼルヌ中将は慌ててフォローを入れた。

「まあ、ヤンが嫌っていたのは主戦論者全員だったけどな。そのくせ自分は誰よりも戦

争が得意なんだから不思議なやつだよ。でも、世間では卑劣漢呼ばわりをされているが、自発的に同盟を裏切るようなやつでも、自分の艦隊の兵士を人質に取るようなやつでもなかったよ。どう考えてもヨブ……いや、何でもない。そうそう、三次元チエスが異常に弱かったな」

キャゼルヌ中将は一度言葉を切って、ぼくを見てから話を再開した。

「ヤン・ウエンリーの奴は今のお前さんと同じぐらいの頃に父親をなくして天涯孤独になつているんだ。立場抜きで話したとしたら、もしかしたらお前さんとも気が合ったかもしれないな。紅茶好きだし」

ヤン・ウエンリーと気が合うだって？

冗談じゃない。

最近浮かれ過ぎていたかもしれない。

キャゼルヌ中将の話を聞いて、ぼくは自分のなすべきことを再確認した。

議長のためにヤン・ウエンリーを討つ、ただそれだけだ。

そのためにぼくと第十三艦隊はここにいる。

2月28日

ファルケンルスト要塞のワープ実験が成功した。これでヤン・ウエンリーを倒す準備

が整った。

実のところ大戦略に則れば、今回の戦いではファルケンルスト要塞の無力化ができれば最低限それで良いのだ。

だから負けたとしても大敗しなければよいのだが、ぼくとしてはこの機会にヤン・ウエンリーを倒してしまいたい。

彼はトリユーニヒト議長最大の障害だ。

ここで倒さないと、後々禍根を残すことになる。そう考えている。

3月1日

回廊内の広範囲にわたって機雷が散布されていることがわかった。予想はしていたが、フェザン奪還計画は後ろ倒しになるだろう。

第十三艦隊も機雷除去を担当する。

無人艦隊だから万が一の事故を考えても適任なのだ。

3月2日

司令官会議があつた。

機雷除去の役割分担に関しての話し合いだ。

3月3日

ファルケンルスト要塞と艦隊は進軍を開始した。

しかしまず行なうのは機雷除去だ。

バグダツシユ少佐には、ヤン・ウエンリーの作戦情報の収集をお願いしてあったが、まだわからないらしい。

ヤン・ウエンリーが何も考えていないということはないだろう。いくつか思いつくものもあるけど、それが確定しない限りは安心できない。

そろそろイゼルローン回廊側でも同盟と帝国がぶつかるとは思えない。

戦況が気になるが、もはやできることはない。こちらはこちらの作業に集中するのみだ。

3月4日

今日も機雷除去だ。シンシアさんが、ドーナツと、少し珍しい産地の紅茶を淹れてくれた。前回の補給で手に入ったそうだ。

シンシアさんの紅茶の腕はどんどん上がっている。ドーナツもシンシアさんの手づくりだ。

3月5日

今日も機雷除去だ。あまり書くことがない。

3月6日

今日も機雷除去だ。ルーチン業務以外にやることが少ないので、マシユンゴ准尉を誘って陸戦隊の戦闘訓練に参加した。

訓練は試合形式で、1G環境下ではマシユンゴ准尉に負けたが、0・15Gの低重力下ではぼくの勝ちだった。

マシユンゴ准尉には

「さすがフライングボールジュニア級の年間得点王ですね」

と言われたが、むしろこちらの方がぼくの本領だ。

エンダースクールのバトルゲームで行なっていた、0Gでの戦闘訓練は厳しいものだった。それに比べるとフライングボールのジュニア級の試合など子供の遊びに思えたものだったから。

訓練にはシンシアさんも参加した。意外と言うと失礼だが、相応に格闘戦もできるところがわかった。

油断した陸戦隊の何人かが負けて悔しがっていた。

エンダースクール出身だし、士官学校でも課程にあるそうだから当然か。

陸戦隊員の實力もわかったし、これで万一の事態に備えることができる。収穫の多い

一日だった。

3月7日

ファルスター星域における同盟と帝国の決戦は、同盟の敗北で終わった。

戦場では同盟が勝っていたのだが、連合がモールゲンを強襲して占領してしまったのだ。

これもヤン・ウエンリーの差し金なのだろうか？

まだ撤退戦が続いている。

同盟軍の被害は甚大だろう。

帝国軍も大分消耗したようだが、果たして割に合うかというと厳しいだろう。

少なくとも有権者は絶対に納得しない。

フェザーンの戦いの重要性がさらに高まった。

議長の期待に答えなければ。

3月8日

ヤン・ウエンリーの作戦が判明した。

いくつか想定していたうちの一つだった。

だけど、対処するには相応の準備が必要になる。

シンシアさんをはじめ、皆の協力も必要だ。

しばらく日記を書く余裕がなくなるかもしれない。

3月12日

ようやく準備が整った。シンシアさんには大分無理をさせてしまった。

明日にはフェザーン星域に乗り込むことになる。どうなるにせよ、そこで運命が決まるのだ。

もちろん勝つつもりだが。

3月13日

ヤン艦隊に突入するまでの最後の時間でこの日記を書いている。

操艦はニルソン艦長に、艦隊運用はシンシアさんに任せて、今は装甲服を着て陸戦部隊と待機している。

やはりヤン・ウエンリーはすごい。

何をされたのか未だにわからない。

ぼくはヤン・ウエンリーに複雑な気持ちを抱いていたが、それが何なのかわかった気がする。

単なる八つ当たりだった。甘えといつてもいいかもしれない。

そんなにすごいのに。

何でもできるだろうに。

どうしてその力をもつと同盟のために使わなかったのか

どうして同盟市民の期待を裏切ったのか

どうしてもつと早く戦争を終わらせてくれなかったのか

どうして父は死んだのか

どうしてぼくはこんな目にあっているのか

どうしてぼくを救ってくれないのか

自分でも理不尽だと思う。彼にも彼の事情がきつとあるのだろう。

ぼくは自分の抑圧された不満をぶつける対象にヤン・ウエンリーを選んでいただけだった。

今更だが、できるなら一度ヤン・ウエンリーと話がしてみたい。

何を考えているのか、そして、なぜどうして、と八つ当たりとはわかつているが訊いてみたい。

今になって少し後悔している。

接舷攻撃自体ではない。

シンシアさんを初め皆を巻き込んだことを、だ。

この一か月ぐらいぼくはしあわせだったのかもしれない。

ぼくにとって第十三艦隊は家族みたいなものだったのだろう。

引き合わせてくれたトリユーニヒト議長には感謝しかない。

シンシアさん、マシユンゴ准尉、バグダツシユ少佐、ニルソン艦長、艦隊のみんな。

こんな無謀な作戦に巻き込んでごめんなさい。

巻き込んだからには命に代えても絶対に成功させます。

でも生き残って、またみんなと一緒に笑いあえる日が来ることを望んでいる自分がある。

死なせたくない。

シンシアさん、みんな

時間だ、行かなければ

生きたいよ

第三部 12話 忠臣たちの宴

リッテンハイム大公によるオーデイン占拠、ロイエントール謀反、それに続く銀河帝
国正統政府成立の報を受けたラインハルトは、

同盟軍に対する追撃戦を切り上げ、事後処理をルッツ、ミュラーに任せ、オーデイン
に急行した。

途中、キフオイザーへの敵軍集結の情報により、進路はキフオイザーに変更された。
無論アンネローゼとキルヒアイスの安否は気になったが、既に事態が進行した今、彼
らがオーデインにいる保証もなかった。

既にもぬけの殻となっていたキフオイザー星域に到着したロイエングラム軍であつ
たが、彼らはそこでベルゲングリユーン少将の乗る緊急脱出ポッドを発見した。

ベルゲングリユーン少将に面会したラインハルトは尋ねた。

「卿はキルヒアイスの部下であるはずだが、何故ここにいるのか」

「私はオーデインでロイエントール閣下の手勢に捕縛されたのです。そしてロイエ
ントール閣下は私をローエングラム元帥閣下へのメッセンジャーとして解放されました」
ラインハルトはベルゲングリユーンがロイエントールに敬称を付けたことを咎めな

かった。

「なるほど、それでメツセージとは何だ？」

「二つあります。一つは「アルメントフーベル星域での決戦を希望する」とのこと」

「ほう、アルメントフーベル星域か……。よかろう、そのぐらいはかつての部下に胸を貸すつもりで乗り込んでやろうではないか。それで二つ目は？」

ベルゲングリューンは緊張を見せた。

「一言一句変えずに申し上げます。「グリューンネワルト伯爵夫人とキルヒアイス上級大將は無事だ。後顧の憂いなく、決戦に集中されたい。私に勝てば二人の居場所をお教えする」とのことです」

ラインハルトは数瞬沈黙した。同席していたメックリングガーには、その顔に単純ならざる感情が渦巻いているように見えた。怒り、安堵、疑念……

ラインハルトは口を開いた。

「私の心配をしてくれるとは。姉上とキルヒアイスの身の安全を保証してくれるとはいい身分じゃないか。……なあ、ベルゲングリューン少将、ロイエンタールは一体何がしたいんだ？ そんなに私の風下に立つのが嫌だったのか!？」

後半は叫び声になっていた。

メックリングガーが口を挟んだ。

「元帥閣下、ロイエンタールの本心はロイエンタールにしかわからないでしょう」
「……取り乱した。すまない、ベルゲングリューン少将」

「いいえ、元帥閣下。しかし、私の目には、あの方は閣下との対戦を本当に望んでいるように思えました」

途端にラインハルトの放つ気配が一変した。

メックリンガーは声に出さず呟いた。

……ラインハルト・フォン・ローエングラム、その人となり、戦いを嗜む。

「そうか、ならばロイエンタールの望み通りにはやろうではないか。私も奴がどんな策で臨むつもりか、せいぜい楽しみにしておくでしょう」

ここで、脱落した艦艇を待ち、艦列を整えてアルメントフーベル星域へと突入した。
この時の艦隊構成は下記の通りであった。

ラインハルト艦隊 八千八百隻

ミッターマイヤー艦隊 八千五百隻

ビットェンフェルト艦隊 八千隻

ワーレン艦隊 七千五百隻

合計約三万三千隻

同盟軍との戦いは帝国軍にも多大な損耗を強いていた。また、長い航行に耐えられない損傷艦は予めルツツ、ミュラーに預けてきていた。

宇宙暦797年／帝国暦488年3月18日、ラインハルト率いる銀河帝国宇宙艦隊（ローエンングラム軍）と、ロイエンタール率いる銀河帝国正統政府軍（ロイエンタール軍）はアルメントフーベル星域で激突することになる。

しかしアルメントフーベル星域でも、ラインハルトはしばらく敵を発見できなかつた。

この時事態はロイエンタールの筋書き通りに進んでいた。

アルメントフーベル星域は連合との境に位置していた。長年連合との係争が続いている星域であり、可住惑星もあるが現在は無人である。

各所に艦艇の残骸が残り、それが引力で引き寄せられ、各所に大規模なサルガッソーが形成されていた。

連合の主張する国境線ではアルメントフーベル星域も連合領であり、帝国からすればそもそも連合領すべてが帝国のものなのだ。

とはいえ、軍同士の休戦後は暗黙の了解で暫定ラインが形成されていた。

ロイエンタールはラインハルト到着の前に麾下のディッターズドルフ少将に一千隻を預け、連合領との暫定ラインを越えさせていた。

この時連合は帝国の内紛の詳細を把握できていなかった。現地の司令官であれば尚更であった。

連合は、殆どの艦艇をフェザーン方面、イゼルローン方面に回していた。

軍同士休戦条約を結んでいる帝国に向けて、大兵力を置いておく余裕は連合にはなかったのだ。

しかしその休戦条約はあくまで帝国軍とであり、銀河帝国正統政府軍と結んだものはなかった。

帝国艦艇一千隻が暫定ラインを越えたとの報が現地警備艦隊司令官ミルコ・ヴァイラフ准将の元に入った。

この時、ヴァイラフの手元には八百隻の警備艦隊しか存在しなかった。彼は急ぎ近隣星域に援軍を求め、寄せ集めながら数としては二千隻を集めることができた。

デイツターズドルフの一千隻は、暫定ラインを踏み越えたところに留まっていた。現地司令官は警告を発しつつ、デイツターズドルフの部隊を射程に納めた。

睨み合いが続くとデイツターズドルフは砲撃を行なった。その砲撃は有効打を与えなかったが、警備艦隊を恐慌に陥れるには十分だった。

反撃を受けたデイツターズドルフの部隊は後退した。

警備艦隊は前進した。

「ディッターズドルフはするすると後退を続けたが、連合軍警備艦隊が前進を止めると反撃し、再度前進すると後退して、ついには連合軍を暫定ラインの帝国側に引きずり込んだ。」

警備艦隊は退がり時を失ってアルメントフェーベル星域にまで踏み込むことになった。アルメントフェーベル星域のサルガツソーで彼らは一時敵影を見失った。

「敵はサルガツソーに隠れたか」

「司令官、今のうちに撤退しましょう。中央の許可を得ずに帝国軍とこれ以上ことを構えるのは避けるべきです」

「撤退したいのは山々だが、敵の逆撃を受けてはまずい。索敵せよ」

しかし、彼らは程なく敵を発見することができた。再度攻撃を加えた彼らであったが、ヴァイラフは敵の様子がおかしいことに気づいた。

「反撃が来ないのだ。まるで戸惑いを感じているかのように。」

そしてさらに重大なことには敵が千隻どころではないことだった。

サルガツソーに紛れて気づかなかつたが、ヴァイラフの目の前にはいつの間にか万を越える大艦隊が展開していた。

ローエングラム軍の先鋒を務めていたのは、ミッターマイヤーであった。

彼はラインハルトを恨まずに済ませるために、ロイエンタールを自らの手で討つつもりだったのだ。

しかし彼は目の前に現れた敵への対処に迷っていた。

旧式の帝国艦艇に同盟艦艇が混ざるこの小規模な艦隊は、明らかに連合のものであった。

何故ここに連合軍がいるのか？

連合はロイエンタールと組むことにしたのか？

実は組んでいないとしたら攻撃を加えることで連合を敵に回してしまうのではないか？

その迷いがミッターマイヤーの鋭敏な指揮を常になくにぶらせていた。

そこにラインハルトから通信が入った。

「ミッターマイヤー提督は何をしているか。賊軍が現れたというが、何を迷う必要がある。攻撃してくるなら撃ち破るまで。仮にそれで休戦が終わるとしても、責は彼らにある。その暁には全力をもって彼らを滅ぼしてくれよう」

ミッターマイヤーは命に従った。

「俺としたことが何を迷っていたのか。全軍、攻撃開始！」

しかしミッターマイヤー艦隊が攻撃を開始したその瞬間、サルガツソーの中に隠れて

いた艦隊が姿を現した。

ロイエンタール率いる正規軍二万隻がローエンングラム軍の右から、リッテンハイム大公派私領艦隊三万隻が左から突き進んで来た。

連合軍を囿として挟撃が成立しようとしていた。

リッテンハイム大公派私領艦隊を率いるのはアーベントロート中将、リューデリッツ中将、モーデル少将、ハルナイト准将らであった。

いずれもリッテンハイム大公派で、戦鬪よりもデスクワークを中心に階級を上げてきた軍人であったが、それでも素人の貴族に率いらせるよりはマシ、というのがロイエンタールの判断だった。

自ら指揮を執りたいと望むような自己主張の強い貴族はラインハルトによつて大方粛清されていたことから、リッテンハイム大公としても反対する理由はなかった。

アーベントロート中将率いる一万隻はミッターマイヤー艦隊に向かつていた。

一方でリューデリッツ中将率いる残余の二万隻は左翼にいるビットェンフェルト艦隊に向かった。

この時私領艦隊と当たる左翼に位置していたのはビットェンフェルトであった。

彼はラインハルトに通信を入れた。

「左翼は小官にお任せください。貴族の私兵ごとき私が蹴散らして見せます」
ラインハルトは一瞬迷った。

「いくら質に劣る私兵とはいえ、数は二倍以上。できるのか？」

「はい、私には策があります。同盟軍との戦いで味わった屈辱、晴らす機会をお与えください」

「わかった。卿に任せる。ロイエンタールにはワーレンと私で当たる。ミッターマイヤーは速やかに敵を倒せ。その後の行動は己の判断で行動せよ」

ビットエンフェルトは八千隻で二万隻に挑んだ。

「ハルバーシユタツト、オイゲン、あれをやるぞー！」

ビットエンフェルトは敵二万隻の面前で進路を変更し、その右側面から突入を果たした。突入後は艦隊を分散させ、黒色槍騎兵隊の速度を活かして四方八方に暴れ回った。

ビットエンフェルトは自らが屈辱を受けた敵将から学んでいた。

それは、まだ未熟ではあったがホーランドの芸術的艦隊運動の再現であったのだ。

ホーランドの未来の知己は案外近くにいたことになる。

ホーランドの編み出した芸術的艦隊運動はビットエンフェルトという模倣者を得たことで、個人の芸術から「新戦術」に昇華を果たしたのだ。

ビットエンフェルトは二交代戦術まで模倣していた。艦隊の半数には敵艦隊の牽制を

命じ、その統括は分艦隊司令官に転身したオイゲンに任された。その冷静な性格を見込まれてのことだった。

ビッテンフェルト艦隊は先の一戦で溜まった憤懣を解放するかのように存分に暴れ回った。芸術的艦隊運動に、黒色槍騎兵隊本来の破壊力が合わさり、敵は壊乱状態に陥った。

未だ数が多いが烏合の衆に陥った敵を見て、ビッテンフェルトは敵を拘束するだけでなく、打ち破れるという確信を持った。

ミッターマイヤーは速やかに連合軍を蹴散らしたものの、アーベントロート中将に側面を取られ、まずは態勢を整えることに集中しなければならなかった。

ロイエンタールはラインハルト、ワーレンと当たった。

艦艇数ではロイエンタールが有利だが、ワーレンの助力が得られる点ではラインハルトが有利だった。

ラインハルトは、ワーレンにロイエンタールの攻撃を受け止めさせ、その間に側面から攻撃を仕掛けようとしたが、その行動は予測されており防がれてしまった。

ローエンングラム軍は長期戦に不安を持っていた。長駆してきたことで補給物資が不足していた。また、連戦となり将兵も消耗していた。

このため、ラインハルトは短期戦を挑むつもりだった。敵戦力を諸將に足止めさせた

上で自らの戦力でロイエンタールを討つというのが、ラインハルトの基本方針だった。

ロイエンタールもそのことは予測していた。本来ならば攻勢をかわしつつ長期戦に誘い込むことが勝利への常道だっただろう。

しかし、ロイエンタールはそれをしなかった。

一つは私領艦隊の実力が信頼できず、勢いで実力を補える間に事を終えたかったためであり、もう一つはロイエンタール自身がラインハルトとの直接対決を望んでいたからだった。

ロイエンタールはゾンネンフェルス少将、シユラー准将に一万隻を預けワーレンの相手を任せた。

そして自らはラインハルトに真っ向勝負を挑んだ。

ロイエンタール一万隻対ラインハルト八千八百隻、互いに策を読み、牽制し、陽動をかけ、要所に攻撃を仕掛けあった。

ラインハルトは自らが高揚していることを感じた。そしておそらくは相手も同じであるだろうことも。

均衡が続いた。

ミッターマイヤーは既に態勢を整え、アーベントロート中将に対し反撃に出ていたが、まだ圧倒するとまではいかなかった。

ビッテンフェルトは二倍以上の敵に勝ちきる勢いを見せていたが、なおも敵の数は多かった。

ワーレンは兵力差を熟練した用兵で補ったが、それ以上ではなかった。

しかし時間が経つにつれ、均衡が少しずつ崩れていった。ロイエンタールの戦術が先読みされ始めたのである。

「さすがローエンングラム侯、このような形で差を味合わされるとは」

ロイエンタールは、ローエンングラム侯の凄みを、戦略的優位を事前に確立してから戦場に臨むこと、その上で戦場では常人の常識を超えた戦術を創出することにあると考えていた。

だからこそ今回ロイエンタールは、卑怯者の汚名に甘んじてでも背後から不意をうち、戦略的優位をつくらせなかった。

さらに戦場でも事前に準備の限りを尽くし、泥臭い正面对決に持ち込んだのだった。

真つ向勝負であればローエンングラム侯と互角の勝負ができる、その自負は、しかし打ち砕かれた。

当初は互角だったはずが、時間が経つほどに差をつけられていった。

ラインハルトはロイエンタールという敵手からも学び、それに合わせて自己の戦術を進化させた。ロイエンタールはそれができなかつた。少なくともラインハルトほどに

は。

ロイエンタールは徐々に押し込まれていった。

「悔しいが、ローエンングラム侯との戦術勝負は俺の負けか。ならば戦う相手を変えるか。ゾンネンフェルスに連絡を入れろ」

ロイエンタールはゾンネンフェルスと呼応して艦隊を徐々に後退させた。擬似突出と要所をとらえた砲撃によって隙をつくらなかつたが、徐々に押し込まれていくかに見えた。

不意に前線に一隻の巨大戦艦が姿を現した。ロイエンタールの旗艦トリスタンであつた。

トウルナイゼン少将、グリルバルツアー少将、クナップシュタイン少将ら、ラインハルト直属の提督達は色めきたつた。武功を挙げる絶好の機会であつたからである。

彼ら少将級の提督は焦つていた。

中将級、大将級は未だ若く、長期間現役でいるだろう。ではその間自分達は一個艦隊を指揮する立場になれないのではないか。

既にミユラーには抜け駆け駆けされた。大きな戦功を挙げる以外にもはや艦隊司令官の席を手に入れる手段はないのではないか、と。

ロイエンタールは彼らの心理を日頃からよく洞察していた。ラインハルトはそうで

はなかつた。それは能力の差ではなく、立場の違いによるものだった。

彼らはトリスタン目がけ殺到した。相互の干渉で前進速度は逆に鈍った。その間にトリスタンは後退したが、彼らはそれを追いかけた。ラインハルトの制止すら聞かずに。

気づけば、彼らはロイエンタールの構築した縦深の中に囚われていた。

全滅の危機に瀕した彼らを救ったのはワーレンであった。ワーレンは少なくない犠牲を払いつつ、ゾンネンフェルス艦隊を後退させ、側撃を受けるのを承知でロイエンタールの縦深を崩しにかかった。

ラインハルト直属の少将達は危機を救われた。しかし払った犠牲は大きく、戦況はロイエンタール側に傾いたかに思われた。

だがこの時ロイエンタールはラインハルトの本隊を見失っていた。

ラインハルトは、少将達の救援にはいかず、戦場を大きく迂回していた。

ラインハルトはロイエンタールが少将達の相手で拘束されている隙に、本隊五千隻を率いてロイエンタール艦隊の後背に出たのだった。

そのような思い切った行動に出られたのはワーレンを信頼していたためである。

ロイエンタールは一転、挟撃を受ける形となった。

ロイエンタールは迷わず艦隊に前進を命じた。

「後背には目をくれるな。前進して眼前の敵を駆逐し、時計回りに旋回してワーレン艦隊の背後を衝け。ゾンネンフェルスにはローエングラム艦隊を攻撃するように伝えろ」少将達は再度ロイエンタールによって圧迫され、追い散らされた。程なく奇妙な構図が生まれた。

ロイエンタールはワーレンを、ワーレンはゾンネンフェルスを、ゾンネンフェルスはラインハルトを、ラインハルトはロイエンタールを攻撃した。

それはかつてラインハルトがヤンにしてやられた互いの尾を喰い合う蛇の円環を、四つの艦隊で再現したものになった。

将官の力量の差から損害はロイエンタール側の方が多かったが、ラインハルト側は補給に限界が訪れかけていた。

消耗戦はラインハルト側の補給の限界で終わりを迎えるものに思われた。

しかし、そうはならなかった。

ミッターマイヤーが遂にアーベントロート艦隊を破り、ロイエンタール艦隊を襲ったのである。

戦力差は逆転した。

トリスタンも危機に陥った。周囲では爆散する艦艇が続出していた。

ロイエンタールは眩いた。

「時間切れか。楽しい夢もこれでお終いだ」

ミッターマイヤーからロイエンタールに通信が入った。

「もうやめろ、ロイエンタール」

「遅かったじゃないか、ミッターマイヤー。おかげで長く良い夢が見られた」

「降伏しろ。俺と一緒に頭を下げてる。何なら俺と卿の今までの功績を引き換えにしてでも、お前を死なせはしないさ」

「ありがたい言葉だが、ウォルフガング・ミッターマイヤーの頭はそんなことのためにあるのではない」

真面目な顔でそう言った後、ロイエンタールは親友に笑いかけた。

「卿には俺が居なくなっただ後も閣下を支えてもらわないとな」

ミッターマイヤーはロイエンタールが死ぬつもりであることを理解しつつも説得をやめなかった。

「死に急ぐな、ロイエンタール。一時の恥辱には耐えて、再び俺とともにローエングラム侯をお支えするのだ」

「それは俺の矜持が許さぬ。生まれてきてはいけなかった身にも関わらず、俺はもう十分楽しんだ。卿という親友を得、ローエングラム侯という主君を得た。さらにはそのローエングラム侯と戦い、なおかつローエングラム侯のために道を整えることができ

た。もう十分だ」

ミッターマイヤーはロイエンタールの言ったことを理解できなかった。

「どういうことだ？ ローエンングラム侯のために道を整えた、だと？」

ロイエンタールは構わず続けた。

「ロイエンングラム侯にお伝えしてくれ。「このロイエンタールが露を払いました。どうぞ皇帝におなりください。ロイエンタールからのせめてものお祝いの品として連合領を献上いたします」と。侯ならわかるはずだ」

「ロイエンタール?？」

「あと、グリューネワルト伯爵夫人とキルヒアイス上級大将のことだが、俺が先に逃していた。内乱が終わるまではローエンングラム侯と連絡を取らないという約束でな。この会戦の結果が伝われば連絡があるだろう」

「ロイエンタール、もしや今回の戦いは……」

「ミッターマイヤー、俺が言うのもおかしいがローエンングラム侯を頼む」

「おい！」

「友よさらばだ。最後に話せてよかった」

通信は切れた。ミッターマイヤーはスクリーンに向かって叫んだ。

「ロイエンタールの大ばか野郎！」

ロイエンタールは全艦隊に降伏を命じ、誰も来るなど言い残し、司令官室に戻った。
「アンスバッハの主君はワインで自裁したと聞く。俺もそれに倣うか」

……薄れゆく意識の中で彼は呟いた。

「マイン・カイザー……ミッターマイヤー……ジーク……死……」

トリスタンに最初に乗り込んだのはミッターマイヤーだった。

彼は友を発見した。

安らかな顔で永遠の眠りについた友を。

リッテンハイム大公は百隻ほどの艦を引き連れ、遠方から事の次第を見ていた。

彼の顔は蒼白であった。

「ロイエンタールの役立たずめ、なんのために引き立ててやったのか……」

「彼は彼の信じたことを成しました。私もそうするとしましょう」

アンスバッハはそう言うのとブラスタターを取り出した。

リッテンハイム大公は後ずさった。

「なに!? どういうことだ? アンスバッハ、そうか、自殺するつもりなのだな」

「いいえ、あなたを殺すつもりなのですよ。ブラウンシュヴァイク公のために」

「馬鹿な! これまでの恩を仇で返すつもりか?」

「恩? 逆でしょう。せつかく生き延びられる可能性を提供してやったものを無駄にしましたな」

「誰かおらぬか。アンスバッハが乱心した!」

「誰もおりませんよ。少なくとも閣下のお味方はね。私に乗員の手配までお任せになるからですよ」

オストマルク、そして周囲の百隻の乗員の殆どはアンスバッハの「協力者」だったのだ。

「それではおさらばです。まあ慰めに言いますが、サビーネ様とクリステイーネ様を手にかけるつもりはありませんのでそこはご心配なく」

ブラスタターの一撃がリッテンハイム大公の脳天を貫いた。

アンスバッハは無主となったオストマルクで独語した。

「これで二人目。さて、ひとまずはロイエンタールの望み通りにしてやろう。まずは利

害も一致することだし。

ブラウンシユヴァイク公、臣が新たな主にお仕えすることをお許しください。何年か
かろうと公の復讐は必ず遂げますゆえ。

ラインハルト・フォン・ローエングラム！それまで、せいぜい一時の栄光を愉しんで
おけ！

この後、アンスバツハは歴史の闇に再び姿を消すことになる。

ローエングラム軍にリッテンハイム大公が発見されるまでには少し時間がかかった。
虚空を漂う緊急脱出ポッドに、彼の死体が押し込められていたのだ。

一ビットンフェルトと戦っていた私領艦隊もロイエンタールの命に従って降伏した。
彼らは既に大分前から戦意を喪失していた。しかし荒れ狂う黒色槍騎兵隊の前に降伏
のタイムミングを失っていたのだった。

こうして、後に宇宙暦797年／帝国暦488年の乱と呼ばれる内乱はいちおうの終
結を見た。

だが、まだ片付いていない問題があった。

一つはエルウィン・ヨーゼフ2世の行方が不明であることだった。このまま不明で
あつたとしたら……

そして残る問題は……

ラインハルトはミッターマイヤーからロイエンタールの伝言を聞いた。アンネローゼとキルヒアイスに関する情報はラインハルトを安堵させた。

問題は、ラインハルトのために露払いをしたという話である。

ラインハルトは得心がいった。

「そうか、そういうことか、ロイエンタールの奴め！」

リヒテンラーデ公、リッテンハイム大公、エルウイン・ヨーゼフ2世……

ラインハルトが皇帝となるための障害が全てとり除かれていたのだ。

ミッターマイヤーはラインハルトに問うた。

「ロイエンタールは連合領を献上するとも、申しおりましたが」

「連合軍とは一年の休戦期間を設けている。本来はしばらく手出しができないはずだった。だが、ロイエンタールの画策によって連合軍は帝国軍に自ら攻撃を仕掛けてきた。休戦は破られたのだ。」

そして、連合軍の主力はすべてイゼルローン方面かフェザン方面で拘束されている。

そして、このアルメントフォーベルから連合の現行政府キツシンゲンまでは指呼の距離だ。今なら労せず連合の中枢を落とせるのだ」

「ロイエンタール、お前はやり遂げたのか……」

ミッターマイヤーは友の真意を知った。彼の友は、みずからの野心、そして主君への忠誠を二つながら遂げて散ったのだ。

「ミッターマイヤー、ロイエンタールは最後まで私の忠臣だった。彼がここまで状況を準備してくれていたなら、受け取らぬわけにはいかぬ。さらに連戦となるが、キツシンゲンを陥とすぞ」

宇宙暦797年／帝国暦488年3月20日、ラインハルト率いる一万八千隻が、連合に侵攻した。

第三部 13話 連合存亡の時

ラインハルトは、アルメントフーベル星域で、ロイエンタールの残した補給物資を用いて最低限の補給と艦艇の補修を済ませた。

その後、ワーレンに後事を託し、ミッターマイヤーを先頭に、ビッテンフェルト、ラインハルトと続いて連合領に侵攻した。

ラインハルトは命じた。

「時間との勝負だ。ミッターマイヤー、卿は振り返らず、ただキツシンゲンの連合政府のみを目指せ」

連合は、常に帝国の侵攻に晒されてきた。このため、行政、工業、商業、軍事、教育等、国家の中核機能をワーブ機能を持った複数のスペースコロニーに分散させて持たせていた。

それらは、連合50年の歴史の中で戦況に応じて場所を変え続けた。

時には多数の星系に分散させていたこともあったが、周囲をすべて敵に囲まれた状態の現在では、すべて連合行政府と共にキツシンゲンに集中していた。

特に艦艇新造の軍需工廠は連合領中、今はキツシンゲンにしかなかった。

これらが押さええられてしまえば、連合は弱小諸侯が分立するだけの地域と化してしま
うだろう。

電撃的に連合行政府とそれに付随する各種首都機能さえ潰せば、連合は軍事的にも経
済的にも著しく弱体化し、後はいつどのようになっても併呑できるだろう。

それが、ロイエンタールの、そしていまやラインハルトの考えであった。

ミッターマイヤーは急いだ。

主君と友のために。

連合のイゼルローン側の戦力は、ルッツとミュラーが拘束してくれている。

フェザーン側の戦力が戻って来ても距離的に間に合うまい。ましてヤン・ウエンリー
は意識不明の重体と聞く。

休戦条約によって帝国からキツシンゲンまでの道程はガラ空きに等しく、

その休戦条約は連合側の攻撃によって破られた。

ローエンングラム侯の信義に傷をつけることなくこの状況を作り出した友の知略を、決
して無駄にしてはならない。

その思いがミッターマイヤーを急がせた。

ミッターマイヤー率いる優速の艦艇五千隻は、若干の落伍を出しつつも、キツシンゲ

ンまでの行程を踏破した。

途中百隻程度の小艦隊の妨害も受けたが、すべて蹴散らし、通常八日の行程を六日ですべて着いた。

ミッターマイヤーの疾風の異名がここに確立した。

このワープが終われば、そこはキツシンゲン星域である。

ミッターマイヤーはオペレーターを聞いた。

「ワープ完了、キツシンゲン星域です」

連合の命運、ここに尽きたり！

が、ミッターマイヤーのその考えは激烈な砲火によつて撃ち碎かれた。

四方八方から、いや、艦隊の内側にも既に入り込まれ、攻撃されていたのだ。

ミッターマイヤーは叫んだ。

「何だこれは！」

オペレーターが報告した。

「敵の砲撃拠点の至近にワープしてしまったようです！それに艦隊接近中！」

「連合にまだ艦隊があったのか!?何者の艦隊だ!?!」

確認が行われた。

「旗艦確認、この艦影はまさか……」

「誰だ!?まさか、療養中と聞いていたメルカッツか!?!」

だが、ミッターマイヤーのその予想は裏切られた。

「旗艦はハードラック! ブルース・アツシユビー、ブルース・アツシユビーの艦隊です
!」

少し、時を遡り、視点は連合に移る。

ラインハルトによる侵攻の報に、連合は騒然となった。

暫定国境ラインで小競り合いが起きたことは連合の中枢にも伝わっていたが、帝国の内乱と関係した不幸な事故に過ぎず、交渉で終わるものだと考えていたのだ。

この時、連合軍の正規艦隊はすべてキツシンゲンから遠隔の地にいた。

ウオーリック、ケスラーはモールゲンに留まっていた。

モールゲンの占領統治と、残存する同盟軍への対応のためである。

イゼルローン回廊出口に近いアムリツツア星域にビュコック艦隊が留まり、味方部隊の撤退の援護を行なっていたのだ。

さらに、北部地域に留まっていたルツツ、ミュラーがモールゲン近縁に進出し、連合軍と睨み合う状態となったため、キツシンゲン救援を行なうことは不可能となった。

一方のフェザンでは、双方の事実上の指揮官が相撃つ形となった後も戦いが続いた。

ヤン艦隊の指揮はフィツシャー少将が引き継いだ。その間にパエツタ艦隊は息を吹き返し、劣勢となった。これに後方で待機していたボーメル提督率いるフェザン艦隊が救援に入った。

クロプシュトゥック艦隊、シユタインメツツ艦隊、フォイエルバツハ艦隊はウランフ艦隊、ボロデイン艦隊への攻撃を続けていたが、ヤン提督危篤の報で動揺したところをつけ込まれ、戦線を再構築されてしまった。

全体として同盟軍が劣勢であることには変わりはないが、双方に被害が増大する形となった。

パエツタ提督はシヴァ救援を考えていたが、ここに来て不可能と判断し、撤退を決断した。

連合軍も追撃の余力を失っており、追撃戦は行われなかった。

最終的に同盟軍の損害は全軍の六割を超える三万二千隻に及んだが、連合軍も一万五千隻を失っていた。

戦いから六日が経過した後もヤンは意識不明の重体が続いていた。

連合軍は、戦いの後処理に従事していた。

星域全体に広がった機雷原と軌道エレベーターの停止はフェザン経済に悪影響を及ぼしており、連合軍としてはフェザン市民の反感を最小限に留めるためにその解消に力を入れる必要があったのだ。

そのような状況で帝国軍侵攻の報と救援の命令が入った。

ヤンの代わりに現地総司令官となったクロプシュトックは、即座に行動した。

現地の指揮権をフォイエルバッハに預けた上で、損傷艦、鈍足の艦を中心に七千隻を残し、一万八千隻を率いてキツシンゲンに急行した。

艦隊の運行計画は名人と謳われたヤン艦隊副司令官フィツシャー少将に一任する等、できる限りの努力を払ったが、距離の暴虐の前にはどうしようもなく、キツシンゲン到着は帝国軍到着の三日後と予測された。

すべての状況が明らかになった時、クラインゲルト伯は慨嘆した。

「独立諸侯連合、50年の節目に終わりの時を迎えるか。まさかこのような形で終わるとはなあ」

軍務卿カイザーリング男爵はまだ諦めていなかった。

「連合の政府はそれ自体ワープが可能です。キツシンゲンから移動させれば時間を稼げましょう」

統帥本部総長アーベントが反論した。

「軍艦ではないですから、一回のワープには相応の準備が必要です。それぞれのスペースコロニーのワープ準備で五日はかかりましょう。次のワープを行うには時間が足りず、結局は一星域を移動して、運命の時をせいぜい一日延ばせるかどうかです」

「それでは周辺星域から艦艇を集めるのはどうか」

「既に手配しておりますが、期日までに四千隻をなんとか集められるかどうかとところです。四倍以上の戦力差で、誰が天才ローエングラム侯に、勇将ミッターマイヤーに勝ちうるというのか。私として武人、必要があればやりますが自信はありません」

「行政府防衛指揮官のアイゼナツハ少将はどうか」

皆、ある渾名を思い出した。

「沈黙指揮官ですか……有能で堅実な男だが全く喋りません。流石にそれでは士気が上がりますまいし、有能程度では四倍以上の戦力差は覆せないでしょう」

カイザーリング男爵はため息をついた。

「メルカッツ元帥がこの場に居ればなあ」

メルカッツは既に故郷の惑星に療養に戻っていた。

「だが、最終的に敗れるとしても、何もしないで降伏というのは、先祖にも人民にも申し訳が立たない。最後までやれることはやるべきだ」

良い方策は出ないものの、皆が覚悟を決めた。

その時、長いわりになかなか結論の出ないその討議を、表情を変えずに聞いていたその男が初めて発言した。

「一つ思案がないでもありません」

アーベントが尋ねた。

「何か策があるのか、オーベルシュタイン少将」

「策というよりは、この状況をどうにかできる可能性がある者に心当たりがあります」

「一体誰だ？」

「帝国最大の敵の名を受け継ぐ者……」

オーベルシュタインは一旦言葉を切った。

「すなわち、ライアル・アッシュビー提督です」

第三部 14話 英雄はいつも遅れてやって来る

ライアル・アツシユビー

かつての難敵であり、いまや連合軍の捕虜となったその名が出た後、一瞬沈黙が訪れた。

皆、意表を突かれたのである。

カイザーリング男爵が代表して尋ねた。

「毒をもって毒を制するようなものか。たしかに彼なら可能性はあるかもしれない。だが、協力してくれるのか？」

「おそらくは喜んで協力するでしょうな。少なくとも現在の軟禁状態よりは、はるかに性にあつているでしょうから」

「信用はできるのか？」

「どういう立場であれ、戦場で手を抜く御仁ではありませんまい」

クラインゲルト伯は決断した。

「それが最も可能性が高いなら、致し方なかりう。オーベルシユタイン少将、彼の説得を頼む」

「承知しました」

カイザーリング男爵が興味深げに尋ねた。

「卿も少し変わったか？」

「？」

「このままローエングラム侯が勝つても、ゴールデンバウム朝はおそらく滅びるだろう。にも関わらず連合のための献策をしてくれるとは」

「……お好きにご想像を」

オーベルシュタインはライアル・アツシユビーとすぐに面会した。

ライアル・アツシユビーは要請を快諾した。

「ちようど暇でしようがなかった。ここにおいてもグリーンヒル中尉をくどくぐらいしかやることがなくてな」

ライアル・アツシユビーはフレデリカ・グリーンヒルを伴って、会議の場に来た。

「キツシンゲン強襲か、ローエングラム侯も思い切ったことをする。今と状況が違うとはいえ、俺もやってみてもよかったかもな。……すまん、失言だ」

フレデリカに足を踏まれて、ライアル・アツシユビーは謝罪した。

「話を戻すが、まあなんとかなるだろうな」

カイザーリング男爵は身を乗り出した。

「本当か!？」

ライアル・アッシュビーは頷いた。

「一万八千隻全軍同時に来られたら困ったところだったが、ローエングラム侯も焦っているようだ。三集団に別れて来ているなら、各個撃破が可能だ」

「各個撃破……」

皆、感嘆とも呆れともつかぬ気持ちを抱いた。

アルタイルで我が軍がやられたことだが、この男は、ミッターマイヤー、ビッテンフェルト、ローエングラム侯の三人にそれをやりきるつもりなのか。

ライアル・アッシュビーの話は続いていた。

「まあ戦場でのことは私に任せてもらおう。だが、その為の準備には協力をお願いしたい。」

まずは行政府だが、ワープさせた方がいいだろうな。これで一日稼げる。ワープ先は、分散させるもよし。集中させるもよし。そこはお任せする。その上で、戦場をキツシンゲンに設定したい」

皆異論はなかった。

「次に艦艇だが、四千隻とのことだが、これ以上は無理か？」

アーベントは無理だと答えた。

「軍需工廠もこの周辺には集中しているだろう。修理中の損傷艦でもいい。かき集められないか」

アーベントは部下に確認をとった。

「損傷艦五百隻、解体間際の老巧艦一千隻が利用可能だ。それと、敵の先鋒の到着には間に合わないが、その後の補充という形であればもう少し周辺からも集められる」

「ふむ、それでなんとかするしかないな」

カイザーリング男爵が口を挟んだ。

「しかし、連合の老朽艦というと本当に年代物だぞ。それこそブルース・アツシユビーの時代のものだ。古い操艦システムや機関を扱える人間が足りないのではないか」

アーベントが答えた。

「国家の危機です。近在の予備役の中でも高齢の将兵、それと、退役軍人にも声をかけましょう。よいでしょうか、クラインゲルト伯」

「よかろう。だがまずは希望者を募ってくれ。散々国家のために働いてくれたものにさらに働かせるのは心苦しい」

議論がまとまったのを確認して、ライアル・アツシユビーは話を先に進めた。

「よし、艦隊はそれでよいか。あとは小細工の話だ。流石に何の工夫もなく三連戦するのはつらいからな」

その小細工についても、皆の同意が得られた。

その後は限られた時間で急速に準備が進められることになった。

だが、進めていくうちにいくつか新たな問題も発覚した。

ライアル・アッシュビーはアーベントから連絡を受けた。

「艦艇の人員が足りない？」

「そうだ。各艦の人員を減らすことも可能だが、各艦の対応能力が減少してしまう。ただでさえ質で劣るというのに、それでよいものかと思つて連絡したのだ」

二人は同年代であり、気安く話ができる仲になっていた。

ライアル・アッシュビーはフレデリカに話を振った。

「どうにかならんか？」

フレデリカはライアル・アッシュビーにヘイゼルの瞳を向けた。

「確認しますが、閣下は連合に全面的に協力するつもりですか？ 同盟に帰れなくなるかもしれないのですよ」

「あまり気にしていなかった。元より根無し草だしな」

「アデレード夫人が悲しみますよ」

「……中尉、冗談でもその名前は出さないでくれ」

「失礼しました」

「いずれにしろ、この俺は戦いに関して手抜きはしない。それに……」

「それに？」

「俺にできなかつたことをローエングラム侯にやられるのは業腹だ」

フレデリカは溜め息をついた。

「なるほど。あなたらしいですね。でも、わかりました。同盟艦に関する人員効率化に
関しては、私が協力しましょう。同盟の無人艦運用システムの開発には、私も携わりま
したからね」

そう言つて、フレデリカは打ち合わせに向かつた。

ライアル・アッシュビーはフレデリカを見送つてから気が付いた。俺はよかつたが、
グリーンヒル中尉はよかつたのだろうか？ 今回のことで父親に会えなくなる可能性も
あるのではないかと。

もう一つは人によつてはそこまで重大事ではなかつたかもしれない。

艦隊の陣容に関して確認していたライアル・アッシュビーはあることに気付いた。

「旗艦級戦艦が、ない」

ライアル・アッシュビーはアーベントに連絡した。

アーベントは首を横に振って答えた。

「ないものはしようがなからう。幸か不幸か艦隊規模は増強分艦隊程度だ。通信機能を強化した標準型戦艦で十分だろう」

「俺の乗って来たニュー・ハードラックはどうなった？」

「旗艦は戦力価値が高いからな。さつさと修理して前線に送つてある。……そんな顔をしてしないでくれ。連合は貧乏なんだ。接收したものは有効活用せざるを得んのさ」

不機嫌になったライアル・アッシュビーはごねた。

「しかし、旗艦がないのでは艦隊の士気に関わる。何かないのかこのアッシュビーに相應しい艦は？」

こいつは聞き分けのない子供かとアーベントは思った。

「そんなものはない。……いや、待ってくれ。あると言えばある」
「本当か!?!」

「ああ、ブルース・アッシュビーの旗艦、初代ハードラックだ」

ライアル・アッシュビーは数瞬アーベントの言葉を反芻した。

「冗談だろう？連合行政に繋留されているとは聞いていたが、あれは記念艦じゃない

か。動かんだろう！他の艦に綱でも付けて引つ張ってもらえなくても言うのか！」

アーベントは大真面目だった。

「いや、それが動くのだ」

「何？」

「今年、独立諸侯連合が国家成立五十周年なのは知っているか？」

「そう言われればそうだな。それが何か？」

「五十周年記念事業でな、同盟と連合の英雄、ブルース・アツシユビーとウォリス・ウォーリックの旗艦に、連合領の各惑星を巡業させる計画があつたんだ」

「つまり、その計画のためにハードラックは稼働状態に整備された、と」

「そうだ。しかも単に動くだけじゃない。アツシユビー時代の艦艇のエンジンは今の時代より大型だったのは知っているだろう？」

「ああ。性能が悪かったからな」

「今回の事業のために同サイズの現代のエンジンを積んだんだが、下手な高速戦艦よりも優速になったし、ビームも光学式ながら異常なほど大出力になった」

「つまり、下手したら並の旗艦級戦艦より性能が良いということか？」

「その通りだ。装甲も新調している。エネルギー中和磁場を後付けすれば、現代でも十分以上に通用する。エンジンがでかくて、被弾率が高くなりそうなのが、玉に瑕という

ところだが」

ライアル・アッシュビーは機嫌を直した。

「いいじゃないか。高速というところが特に気に入った。ぜひ使わせてくれ！」
こうしてライアル・アッシュビーはハードラックに乗ることになった。

準備は進められた。

ミッターマイヤーの神速のせいで、予想よりも準備期間が短縮されるという笑えない話もあったが、なんとか、すべての準備を整えることができた。

ブルース・アッシュビーのかつての旗艦に搭乗したライアル・アッシュビーは既視感を覚えた。

「ふん、当然か。エンダースクールで何度も見せられたからな」

「アッシュビー提督！」

不意に声をかけられた。

老人というべき年齢の男達がそこに立っていた。

白髪の老人は、敬礼しながら語った。

「ゴッドハルト・フォン・ボーデヴィヒ大尉であります。閣下と再び一緒に戦うため予備役から復帰しました。幼年学校を飛び出して故郷のために戦った日々が懐かしくあり

ます」

禿頭の男も、感激といった態度で話しかけてきた。

「チャン・タオ伍長です。ウオリス・ウオーリック提督の従卒を務めておりました。お目にかかれて光栄です！この老骨でも何かしら再び閣下のお役に立てるのではないかと思います、馳せ参じました」

彼らは私とブルース・アツシユビーを混同しているのか？

訂正しようとした、ライアル・アツシユビーであったが、フレデリカの咳払いがそれを止めた。

アツシユビーは考えて、口を開いた。

「皆さん、ありがとう。このアツシユビー、必ずや帝国からこの連合を救うと誓おう！」
歓声の嵐が巻き起こった。

「アツシユビー閣下万歳！」

「軍神アツシユビー万歳！」

「独立諸侯連合万歳！」

「帝国を倒せ！」

「……何だったんだあれは？俺はブルース・アツシユビーではないぞ」

艦橋に移ったライアル・アツシユビーは、参謀長補佐を務めることになったバーナビー・コステア退役准将に尋ねた。

「皆、あなたのことをブルース・アツシユビーの生まれ変わりだと思っっているんです。最近増えているんですよ。」

アデレード夫人の発言が大きかったのでしょうな。アデレード夫人は事あるごとにあなたのことをブルース・アツシユビー本人だと主張していますから。

元々ブルース・アツシユビーは神様みたいなものでしたからね。ブルース・アツシユビーは死なない、とあなた、あ、いや、本人も言っていましたし。連合の危機に転生して来てもおかしくはないと皆思ったのでしょ

「転生だど？そんなオカルトがあつてたまるか！」

フレデリカが真顔で尋ねた

「本当に生まれ変わりでありませんの？肉体的には転生しているようなものでしょ。もしかして、前世の記憶があつたりしません？」

「ないー！」

ライアル・アツシユビーは断言した。

とはいえ、エンダースクールでの擬似記憶移植処置を受けたせいで、仮に記憶があつたとしても、それが本物かニセモノか区別なんてつかなくなっているのだが……

コステア准将がライアル・アツシユビーを宥めた。

「まあいいではありませんか。それで士気が上がるのだし。

宗教のようなものだと思います。軍神アツシユビーを祀るアツシユビー教です。……そういうえば、アツシユビー霊廟をつくるなんて話もありましたな。危機の度にホログラムでアツシユビーが語りかけてくるような仕掛けをつくるとかなんとか」

「やめてくれ！」

ライアル・アツシユビーはめまいがしてきた。

「まあそれはともかく、今年は連合建国五十周年、この記念すべき年に、ブルース・アツシユビーの末裔と共に帝国と戦うことが出来るなんて。私みたいな過去しか残されていない年齢の者には、まるで夢のような話ですよ。お祭りです。みんなそういう気持ちで参加しているのではしよな。」

私も、アツシユビー提督が死んでから熱意を失い、惰性で……いや、はつきり言つて墮落した生き方をしていたようなところがあつたのですが、ここに至つて青春時代の熱情が蘇るようです」

そう語るコステア准将の目は、まるで少年のように輝いていた。

こいつ、いや、こいつら、俺が敵だったことを忘れてるんじゃないか。ハードラックか、このハードラックが時空を歪めて不運を招いているんじゃないのか。アツシユ

ビーはそら恐ろしさを隠せなかった。

フレデリカが補足した。

「実際退役軍人の志願者の数がすごいことになってるようです。若い者は席を譲れとばかりの勢いで。最新の機器は使えない人が多いので、旧式艦艇中心に配置しています。それでも多過ぎるぐらいで。それに、同盟軍の捕虜の中にまで志願者がいるとか」

ライアル・アッシュビーは珍しく弱気を見せた。

「グリーンヒル中尉、この状況、俺はどうしたらいい？」

フレデリカは答えた。

「士気が高いのはよいことです。乗っかるしかないんじゃないやありませんか。それに、ブルース・アッシュビー提督はたしかに英雄でしたが、英雄として自分を魅せるのがうまくいったとの評もあります。」

閣下にもお出来になるのではありませんか？ブルース・アッシュビー本人になるのもかく、「ブルース・アッシュビーが演じていた英雄」になることは」

フレデリカの言葉には心に響くものがあつた。

ライアル・アッシュビーは覚悟を決めた。

「そうだな、やるしかないか。グリーンヒル中尉、艦隊に向けて演説する。準備してくれ」

演説の準備が整った。

何を話すのか艦隊全体が目をつけていた。

「諸君、私はアツシユビーである。

諸君を率い、帝国と戦う。そのために私はここにいる。

私が真に英雄であるか、

また、諸君が英雄であるかどうか、

それはこの戦いが明らかにするだろう。

連合が建国五十周年を迎えられたのは諸君らの努力の賜物である。

この節目の年に、

連合を守るため、

帝国の侵略者を倒すため、

諸君らと共に戦えることを誇りに思う。

どうか私に力を貸して欲しい。

私と諸君らの力が合わされば、恐れるものはない。

アツシユビーは常に勝ってきた。今回もだ。

さあ、連合の五十周年に華を添えに、出撃だ！」

艦隊全体に歓声が響き渡った。

「アツシユビー提督万歳！ 連合万歳！」

「アツシユビー！ アツシユビー！」

「帝国の圧制者に鉄槌を！」

こうして、「ブルース・アツシユビー最後の戦い」とも、「連合建国五十周年祭」とも異称される、キツシンゲン星域の会戦が始まった。

第三部 15話 連合建国五十周年祭

ライアル・アツシユビーはミッターマイヤーのワープ位置を把握していた。

かつて、連合に対してやったようなフェザン派地球教徒のネットワークはもはや使えなかったが、オーベルシユタインを通じて、連合と連合派地球教徒の諜報網から一定の情報を入手できていたのだ。

この情報に、ミッターマイヤーが最短最適な経路でワープを繰り返していることを勘案すれば、グリーンヒル中尉ならばワープ位置を相当の確度で絞り込むことができた。ミッターマイヤーの神速の航行が仇になった形である。

アツシユビーは、連合行政府と首都機能を担うスペースコロニーをワープさせて退避させる一方、防衛機能を担う拠点群をキツシンゲンに残させた。そして、ミッターマイヤーの予測出現位置にパルスワープさせていたのだ。

これによってキツシンゲン星域にワープしたミッターマイヤーは、自ら敵の防衛拠点に突っ込む形となり、艦隊内部から砲撃に晒される形になった。

一回限りの策であることから、拠点からの砲撃は苛烈を極めた。

参加したある退役軍人は「アッシュビー復活を祝う花火のつもりで撃ちまくった」と証言している。

ミッターマイヤーは統制を回復しようとしたが、その前にベイオウルフに衝撃が走った。連合伝統の接舷攻撃であった。特殊揚陸艦戦隊、通称斬り込み部隊指揮官ジーグルト・アスタフェイ少将自らベイオウルフに乗り込み暴れたため、ミッターマイヤーは指揮を取ることができない状態となった。

アッシュビー率いる艦隊も、離れては近づき、近づいては離れながら砲撃を行い、戦力を削いでいった。

旗艦ベイオウルフは、司令官自ら戦斧を持って奮闘し、占領をかるうじて免れていたが、指揮などできる状態ではなく、艦隊としての行動は既に不可能となっていた。

「後は彼らに任せておいて大丈夫そうだな。よい演習になった。次の艦隊が来るまでに急ぎ補給を行え」

アッシュビーはこの一戦で艦隊の練度向上すら成し遂げていた。

コステアがアッシュビーの注意を喚起した。

「いつものあれはやらないのですか？」

「あれとは？」

コステアは、アッシュビーは当然わかっているだろうという風であった。

「あれ、です。皆期待しています」

フレデリカが耳打ちしたことで、アツシユビーは得心がいった。

「あれか……本当にやるのか？」

コステアは目を輝かせた。

「勿論です！」

「わかった……」

アツシユビーはやけくそ気味にマイクを取った。

「帝国軍に告ぐ。お前たちを叩きのめした人物はブルース・アツシユビーだ！次に叩きのめす人物はブルース・アツシユビーだ！忘れずにいてもらおう」

ブルース・アツシユビー往年の決め台詞に、艦隊が沸いた。

「これだ、これが聞きたかったんだ……」

「冥土の土産によいものが聞けた。ありがたい。ありがたい」

涙ぐんでいる者までいた。

一人真顔のままのライアル・アツシユビーが、傍の副官に尋ねた。

「グリーンヒル中尉、何だこれは。ここは俺の為に用意された地獄か」

グリーンヒル中尉は笑いをこらえるのに必死だった。

「士気を上げるのも艦隊司令官の務めです。頑張ってください」

ミッターマイヤーから一日遅れて、ビットンフェルトがキツシンゲンに到着した。ミッターマイヤー艦隊の惨状はビットンフェルトにも伝わっていたから、直前でワープ座標を変更するなど対策を行っていた。

アッシュビーも、二度も同じ手を使う気はなく、完全な正面からの決戦となった。アッシュビー五千五百隻、ビットンフェルト六千隻であった。

当然ながらすべて高速戦艦からなるビットンフェルト艦隊の方が戦力は高かった。

アッシュビーとビットンフェルトは共に正面から突撃をかけた。

「アッシュビーか何だか知らんが黒色槍騎兵に正面から突つ込む等良い度胸だー」

アッシュビーは本隊の前に二百隻ほどの無人艦艇を先行させていた。

その二百隻と黒色槍騎兵がまず会敵した形となったが、まさに鎧袖一触、蹴散らされた。

だが、アッシュビーは冷静だった。

「よし、わかった」

ビットンフェルトは直進し、今度はアッシュビーの本隊に砲撃をしかけた。しかし、アッシュビーは直前で制動をかけることで躲し、その上で砲撃後の隙について逆撃をかけたのだった。

アッシュビーは先の二百隻にビットンフェルトが攻撃をかける様子からタイミング

を盗んでいたのだ。

ビッテンフェルト艦隊の先頭が崩れ、前進速度が鈍った。

アツシユビーはその隙にビッテンフェルト艦艇を真ん中にして円筒を形成し、側面から攻撃をかけた。

ビッテンフェルトは指示を出した。

「周囲が敵ばかりならそれもよし。敵は旧式艦艇ばかり。防御力も攻撃力もこちらが上だ。撃って撃って撃ちまくれ」

だが、アツシユビーにはそれも織り込み済みだった。

アツシユビーは近接攻撃力と速力で選抜した五百隻ほどの直衛部隊を引き連れ、ビッテンフェルト艦隊の前方に留まっていた。

そこから、ビッテンフェルト艦隊が詰まったこの円筒の片側から入り込み、反対の出口に向けて駆け抜けたのだった。

通常であれば同士討ちとなるところである。しかし味方の攻撃はビッテンフェルト艦隊が壁となり、防いでくれた。

アツシユビーは味方の攻撃力が低いことすらも利用して、この突撃を成功させたのだ。

ビッテンフェルト艦隊は守勢に弱いという弱点を露呈して壊乱した。

ビットテンフェルトは旗艦以下八隻まで撃ち減らされ、撤退した。

オイゲンらが必死で止めなければそのまま退かずに文字通り全滅していただろう。

アツシュビーは、嘯いた。

「見所はあるがまだまだ甘い」

この後、アツシュビーはコステアに促され、アツシュビーの煽り文句を再度マイクの前で実演する羽目になった。

なお、この時ミッターマイヤーもバイオウルフを捨て、少数の艦艇と共に死地を脱出して撤退していた。

アツシュビー艦隊は再度補給を行なった。ビットテンフェルト艦隊との交戦では相応に被害も出ていた。

千隻ほどが破壊もしくは戦闘続行不可能になった一方で、五百隻ほどが新しく間に合い、補充された。

アツシュビーは性能に劣るこの五千隻で、ローエングラム侯ラインハルト率いる七千五百隻と戦うことになるのだった。

ビットテンフェルト艦隊からさらに一日遅れて、ローエングラム侯ラインハルトが戦場に到着した。

その戦列と陣形を確認したアツシユビーは険しい面持ちになった。

「これはまずいかもしれんな。隙がない。ビツテンフェルトとは役者が違う。小手先でどうにかなる相手ではなさそうだ」

一方のラインハルトは、ミッターマイヤー、ビツテンフェルトを立て続けに破った難敵に興味を引かれていた。

「ブルース・アツシユビーの旗艦に乗り、アツシユビーを名乗る敵か。ライアル・アツシユビーが連合の捕虜になったと聞いたが、奴が連合に協力しているのか？」

いずれにしろ、ミッターマイヤーとビツテンフェルトを倒したとなれば、その実力は本物だ。倒すに値する」

アツシユビーとラインハルトは艦隊を共に前進させた。

アツシユビーとラインハルトの戦い、連合五十周年記念祭の最終演目がここに始まった。

第三部 16話 英雄の戦い

アツシユビーとラインハルトの戦いは、当初アツシユビーが先手を取り、ラインハルトが守る形となった。ラインハルトとしては敵手に興味があり、見極めたい心理が働いたからだ。

アツシユビーの放つ手は殆どがラインハルトに未然に防がれつつも、いくつかはラインハルト艦隊の艦列を揺るがした。

だが、そこから攻撃を拡大しようとするアツシユビーの試みが成功する前に、その揺らぎは素早く修復された。

アツシユビーは唸った。

「やはり難敵だ」

ラインハルトも感嘆した。

「この戦力差でよくやるものだ」

だが、同時に弱点も発見していた。

「前列、敵に接近し圧力をかけよ。その間に後列はワルキューレ発艦の準備だ」
アツシユビーは接近して来る艦列を見てラインハルトの意図に気づいた。

「早いな、もう来るか」

アッシュビーの艦隊は多くが旧式艦で構成されていた。旧式艦の欠点は砲撃力や防御力よりも、戦闘艇搭載能力の低さだった。

単座式戦闘艇が普及し始めたのが五十年ほど前であり、戦闘艇の有効性が認識されるにつれ、艦艇は徐々に戦闘艇の搭載数を増やしていったのだ。

旧式艦中心のアッシュビー艦隊は単座式戦闘艇搭載数が極端に少なかった。

ラインハルトはそのことに気付き、ドッグファイトでアッシュビーに打撃を与える作戦に出たのだ。

アッシュビーは艦隊を後退させた。それは整然としつつも素早い後退だったが、ラインハルトの速度の方が優っていた。

アッシュビー艦隊は喰いつかれた。

ワルキューレが発艦し、敵に向かって突き進んだ。

アッシュビー艦隊はそれを砲撃で狙い撃ちしたものの、すべてを撃ち落とすことはできなかった。

ワルキューレの刃が艦艇に迫った。

ラインハルトが呟いた。

「これで終わりだ」

アツシユビーも眩いた。

「そうはならんさ」

アツシユビー艦隊は後退の末、目的の宙域に到着していた。

そこは、先にミッターマイヤー艦隊の撃滅に貢献した防衛拠点のある宙域だった。

アツシユビー艦隊の艦艇の単座式戦闘艇搭載数は少ないが、キツシンゲン星域の軍需工廠には一定数の単座式戦闘艇が存在した。

アツシユビーはそれを防衛拠点に潜ませていたのだった。

拠点から発進した連合の単座式戦闘艇、リントヴルム部隊がワルキューレに向かった。ワルキューレ部隊は次の攻撃も考えていたが、リントヴルム部隊には次の機会はなく、後先考えずに攻撃を行なった。推進剤が切れても構わないと考えていた。

この差がキルレシオの差に現れ、ワルキューレ部隊は大打撃を受けた。

「これを想定して戦場を設定していたか。やるじゃないか」

ラインハルトはワルキューレ部隊に撤収を命じ、宙域を移動した。

アツシユビー艦隊はそれを追わざるを得なかった。

ラインハルトにワープを許して行政府を襲わせるわけにはいかなかったからである。

ミッターマイヤーは先陣として最低限の仕事をこなしていた。キツシンゲンに到着した際、アツシユビーの攻撃に晒され撃ち滅らされたが、残艦を斥候部隊として周辺星

域に送り出すことに成功していたのだ。これにより帝国軍は既に連合行政政府の転移した星域を突き止めていたのだ。

戦いは仕切り直しとなった。

この時までには、アツシユビの艦隊は四千二百隻に減っていた。

ラインハルトは七千百隻であった。

旧式艦艇ばかりにしては健闘していたが、このままではアツシユビの負けであった。

だが、アツシユビの顔にはまだ余裕があった。

予定ではもうすぐ奥の手が到着するのだ。

「さあ、勝負はこれからだー！」

本人は意識していなかったが、この発言にまたも艦橋が沸いた。

アツシユビとラインハルトが再び砲火を交わし始めた時、星域に新たな艦隊が出現した。

旗艦ブリュンヒルトのオペレーターが絶叫した。

「新たな艦隊出現、その数一万隻以上！」

メックリンガーが身を乗り出してオペレーターに問うた。

「まさか？どの方面からだ!？」

「南方、フェザン方面からだと思われませう」

馬鹿な、早過ぎる。まさかヤン・ウエンリーの魔術か!? しかし、フェザン方面に出した斥候からの報告はなかった……

ラインハルトは欺瞞と断じきれないでいた。ヤン・ウエンリーというイレギュラーの存在こそがラインハルトを焦らせ、ミッターマイヤーを先行させた一因でもあったのだから。

ラインハルトでさえそうなのだから、麾下の将兵はさらに混乱していた。それは艦列の乱れ、艦の行動の乱れにもなって現れた。

アッシュビーはそれを見逃さなかった。

「今がチャンスだ……」が運命の分かれ目だと思え! 前進! 突破せよ!」

ラインハルトも内心を隠して檣を飛ばした。

「あれは欺瞞だ。一万隻もの艦隊がこのタイミングで出現するはずがない」

仮にあれが本物だとすると、その時点でこの作戦は失敗であり、ならば欺瞞である方に賭けざるを得ない。それがラインハルトの考えであった。

アッシュビーはラインハルト艦隊に突入を果たした。

前へ、前へ。

だがラインハルトの防衛は固く、その前進は中途半端なものになり、包囲殲滅の危険

すら生じた。

しかしその時には詳細不明の艦隊が近づいて来ていた。

オペレーターが再度絶叫した。

「艦隊接近！数は一千隻。一万隻と見えたのは牽引する小惑星によるものです！」

一千隻の小艦隊はラインハルト艦隊の至近で小惑星を投擲した。これにより、ラインハルトの艦列は引き裂かれた。

この小艦隊はヤン・ウエンリーによるものでもフェザーンから来たものでもなかった。ガイエスブルク要塞所属のもので、帝国軍侵入の報が入った後、要塞司令官ケンブが配下のアイヘンドルフ准将に託して派遣したものだつた。

帝国軍の到着には間に合わないが、アツシユビーが粘って時間を稼いでいればきつと助力できるだろうと考えたのである。

そしてアツシユビーはアイヘンドルフと事前に連絡を取り、この仕掛けを実行させたのだつた。

ヤン・ウエンリーなら奇跡を起こしかねないという帝国軍の不安に乗じた策であり、アツシユビーとしては他人の威を借りることになり甚だ不本意ではあつたのだが。

アツシユビー艦隊は息を吹き返した。

「前進！突撃だ！」

彼らは一本の矢のように艦列を貫き、つき進んだ。

ハードラックのオペレーターが叫んだ。

「正面の艦影、ブリュンヒルト！」

ハードラックとブリュンヒルトはお互いを正面に捉えた。砲撃は、互いのエネルギー
中和力場に遮られ、二艦はそのまますれ違った。

ラインハルト、アツシユビーともに相手を倒す絶好機を逃した形である。

アツシユビー艦隊はそのまま後方に突き抜けた。

アツシユビーが艦隊を反転させた時、ラインハルトは既に艦隊再編を完了しようとしていた。

アツシユビーは急ぎ再突入を図ろうとしたが、さらに戦況が急変した。

今度は五千隻程度の艦隊が出現したのである。

率いるのは撤退したと思われたミッターマイヤーとビッテンフェルトであった。

ロイエンタールの残軍の編入を果たしたワーレンが、ヴァーゲンザイル少将に五千隻を預け後続として派遣したのである。

ラインハルトはこの艦隊にミッターマイヤーとビッテンフェルトを合流させ、キツシンゲン星域に急行させたのだ。

アツシユビーはラインハルト艦隊を牽制しながら、アイヘンドルフの一千隻と合流

し、態勢を整えた。この時点で合計四千隻である。

ミッターマイヤーとビットェンフェルトはラインハルトと合流し、合計一万隻となった。

戦力差は拡大した。しかし、アッシュビーに撤退の選択肢はなかった。

アッシュビーとラインハルトは再度正面からぶつかった。

アッシュビーとその将兵たちはよく戦った。復讐に猛るビットェンフェルトの鋭鋒を躲し、反撃し、再反撃されるもそれに耐えた。

ミッターマイヤーの機動によって包囲される前に後退し、なおも急速に迫る敵艦隊を、無人艦の自爆によって押し留めた。

だが、戦力は徐々に削られていった。

戦闘可能な艦艇が三千隻を切った時、アッシュビーの最後の手札が切られた。

キッシンゲンの工場にあったものの、今まで戦闘に参加させていなかった非戦闘艦艇計五百隻をこの土壇場で出撃させたのだ。

輸送艦、工作艦からなるその五百隻は無人であり、フレデリカの事前のプログラムに従ってラインハルト艦隊の四方八方から襲いかかった。

これに対しミッターマイヤーが千隻を割いて迎撃に向かわせた。輸送艦は液体ヘリウムを満載していた。

工作艦は指向性ゼツフル粒子発生装置を搭載していた。

攻撃を受けた輸送艦は火球となりつつ、慣性によって帝国軍につっこんだ。

工作艦からは火の柱が伸びた。

いずれも帝国軍の表層の部隊を叩いただけに終わったが、それでも艦列には乱れが生じた。

アツシユビーはビツテンフェルト艦隊に突入し、打撃を与えて突破し、その後背にいたラインハルトの艦列に突入を図った。

しかしその意図は艦隊の結節点を見極めて行われたラインハルトの攻撃によって挫かれた。

帝国軍は混乱からすぐに回復した。

最後の余力を使い切ったアツシユビーは半包围され、さらに艦数を減じた。

その過程でアイヘンドルフ准将は戦死した。

ここに至ってアツシユビーは部隊を逃がすことに決めた。

アツシユビーの直衛部隊が最後まで踏み止まり、敵の攻撃を引き付けた。

だがそれも撃ち減らされ、もはやハードラック以外数艦を残すのみとなった。

ラインハルトは降伏勧告を行ったが、ハードラックからの返答はなかった。

手こずらされたが、ハードラックを撃沈すれば戦いは終わる。

その後はワープ準備だ。

ワープが完了した時こそ連合の命運が尽きる時だ。

ラインハルトはそう考え、讃えるべき強敵に対して最後の攻撃を命じようとした。そこに、多数の艦がワープアウトして来たと、オペレーターが報告を入れてきた。

「散開しており、一定の陣形を取っていません。……全て民間船舶のようです」

民間船舶の群れは、薄く散らばりラインハルト艦隊を取り囲んだ。

帝国軍に向けて次々に通信が入った。

「ユニマラ船長ステッティンだ。侵略者ども今すぐ帰れ！」

「マオルエーゼル船長プリッツァーだ。アッシュビーを殺すなら、俺たちが黙っていない。」

「クラインゲルト伯には恩がある。帝国のエセ貴族に用はない！」

「専制主義者、帰れ！」

「誰もお前達なんか歓迎しないぞ」

「帰ってガキの皇帝のお守りでもしてろ！」

「アッシュビー万歳！連合万歳！」

「これは……」

帝国の諸将は呆気にとられた。

ラインハルトも困惑を隠せないでいた。

「二度の内乱では門閥貴族のために平民が動くなどあり得なかったが、連合の諸侯達は人心を得ているということか」

実のところこれは、オーベルシュタイン率いる情報部の扇動によるところも大きかったのだが、彼らは少なくとも自由意志でここに来たのだった。

メックリンガーがラインハルトに進言した。

「ハードラックを撃てば、彼らが襲いかかってきそうですね。しかし、ワープの為には彼らがいずれにしる邪魔です。向かって来た時点で彼等は敵。非常な判断も必要になるかと」

ラインハルトの判断は異なっていた

「いや、もう時間切れだな。彼らを排除する時間的余裕はない。撤退だ。勝利以外のことを優先した私のミスだ。……ロイエンタールには詫びねばならぬな」

果たしてその通りだった。

ミッターマイヤーの放った斥候部隊のうち、フェザン方面奥深くに入り込んだ艦が連合行政府への大艦隊接近を報告して来たのだ。

民間船舶を排除してワープしても、髪一重で先行されるだろう。

帝国軍は速やかに撤退した。

それを見た連合の将兵、民間船舶の乗組員は歓喜した。

「連合万歳！」

「アツシユビー万歳！」

「なんとか勝ちましたわね」

喜びに包まれる艦橋を眺めながら、フレデリカは上官に話しかけた。

「彼が俺に興味を持つてしまった時点で防衛成功は確定したも同然だった。まあ、ここまで追い込まれるとは思わなかったが。俺など無視すれば彼はいつでも連合に勝てんだ」

そう、ラインハルトは、極端な話、連合行政府の転移先が判明した時点で、いつでも勝てたのだ。

艦隊の半数を別働隊にして星域離脱のそぶりをさせれば、アツシユビーはそれを追わざるを得ない。ラインハルトとしてはその隙に本隊をワープさせてもよかったし、別働隊とアツシユビーを挟撃してもよかった。

あるいは最初からキツシンゲン星域を避けて連合行政府の転移先に直行するということも考えられたのだ。

ラインハルトはそれをしなかった。ラインハルトは、連合の征服よりも、アツシユ

ビーを名乗る大敵との一期一会の勝負を優先してしまつたのだ。無論、戦つて勝つた上で目標を達成できるという自負に基づいてのことだつたが。

「閣下はそこまで読んでいたのですね」

「……多分立場が逆だつたら俺も同じことをして、同じように失敗していただろうからな。……訂正、俺なら成功していた」

「似た者同士の戦いだつたというわけですか」

「でも、結局この戦いの主役は、彼ら連合の人民だつたのかもな」

ライアル・アツシユビーは喜びに沸く兵士達を眺め、感慨を込めて呟いた。

「英雄とは言つても、一人では何もできない。それを支える者達がいて、ブルース・アツシユビーという存在が形作られるんだ」

フレデリカは少し驚いた。

「そういうことにお気づきになる方だとは思っていませんでした」

失礼な発言ではあつたが、ライアル・アツシユビーは気にしなかつた。

「いや、貴官にはいつも助けられてきたから前から気づいていたさ」

「……」

「なあ、中尉。いや、フレデリカ」

「はい」

「俺はアツシユビーの姓を捨てるつもりだ。俺はブルース・アツシユビーではない。少なくとも一人ではな。ライアル・アトキンソンに戻ろうと思う」

「どのような選択をされようと閣下の自由です。その通りブルース・アツシユビーとは違う人生があるのですから」

アツシユビーは意を決して言った。

「フレデリカ、その人生を俺と共に歩んでくれないか？」

アツシユビーは言葉を重ねた。

「要するに、要するにだ。結婚してほしいんだ」

フレデリカはヘイゼルの瞳をみはり、頬を熱くした。

そして、フレデリカは微笑んだ。最初から笑おうと決めていたのだ。

「ノーです。ノーですわ、閣下」

フレデリカはさらに笑みを深くした。

「私はアデレード夫人になりたくありません」

コステア准将がその時のアツシユビーの表情を目撃していた。

戦場では臆病であったことなど一度もないアツシユビーが、うそ寒そうな表情を隠し切れなかったという。

アツシユビーのその表情は、コステアが決め台詞を促すまで消えなかった。

連合建国五十周年祭は、何かを吹っ切るようなアツシユビー三度目の決め台詞披露でお開きとなった。

なお、アツシユビーの姓を捨てるといふ話は立ち消えとなった。

艦隊がキツシンゲン星域を脱した後、ラインハルトは一人自室に戻り、椅子に身を投げ出した。

「すまぬ、ロイエンタール。すまぬ、ミッターマイヤー。俺は宇宙を手に入れるより、雄敵との戦いを優先した。戻ったら姉上とキルヒアイスにも怒られるか……いや、二人なら俺らしいと笑うかもな」

既にアンネローゼとキルヒアイスの無事は、ワーレンから報告があり、確認できていた。ロイエンタールに対する申し訳なさはあったものの、不思議と無念さを感じなかった。

この時、ラインハルトは自分には宇宙よりも大事な人間が二人もいることを実感して

いたのだから。

とはいえ、ラインハルトが諦めることもまたあり得なかった。

「ヴァルハラで見ていろ、ロイエンタール。連合領は与えられるのではなく、いずれ自らの手で掴み取ってやる」

アツシユビー、ヤン・ウエンリー、フォーク、お前達を倒して俺が宇宙を手に入れるのだ。

しかし、今すぐではない。

帝国は傷を負いすぎた。

俺は皇帝となる。俺が数年かけて帝国を新生させる。キルヒアイスと共に。

……だが、まずは姉上のつくるケーキが食べたい心境だ。

ラインハルトは、やるべきことと大事な人達が待っている自らの帝国へと帰っていった。

第三部 17話 こんな夢を見た

……………真つ暗だ

……………これは夜か？

……………傍にいるのは誰だ？

……………

「ねえ、提督」

……………

「いま、提督と、僕と、同じ星を見てましたよ。ほら、あの大きくて青い星……」

……………

「何ていう星です？」

……………

ヤンは目を覚めました。ベッドの上、目の前には綺麗なプラチナブロンドの髪……

「前も同じことがあったな」

「ヤン提督！ 気づかれたんですね！ よかった……」

ローザは目に涙を溜めていた。

「やあ、ラウエ中佐、心配かけたね」

「申し訳ありません、私が守れなかったせいでヤン提督が……」

「いや、生きているんだし、大丈夫さ。生きているよね？」

「はい、生きています。でも左肘から先が……それが盾になったのですが……」

言われてヤンは気がついた。

「本当だ。ない」

「私のせいです！」

泣き出したローザに、ヤンは慌ててフオローを入れた。

「大丈夫！大丈夫だよ！昔から、首からは不要とか、クビにしたいとかよく言われていたから片腕ぐらい……」

「……誰ですか？ヤン提督にそんなことを言う人は。手討ちにしてくれます」

目が据わったローザに、ヤンは再び釈明することになった。

「いやいや、昔の、同盟の話だから！」

とはいえ前半は今の不正規艦隊の誰かだったような……

ヤンは医師の診察を受けつつ、落ち着きを取り戻したラウエ中佐から状況の説明を受けた。

ヤンが倒れた後も戦いが続いたこと、同盟艦隊が撤退したこと、帝国で内乱が起こり、

その後ラインハルトが連合に攻め込んだこと。それをライアル・アツシユビーと愉快な仲間達が防いだこと。

「ラウエ中佐、夢を見ていたよ」

「どんな夢ですか？」

「あのユリアン・ミンツと一緒に星を眺めていたんだ。何か大きくて青い星を、一緒に……。私とユリアン・ミンツはまるで親子のようだった。そんなことあるわけがないに……」

「ヤン提督……」

ヤンの声には悲痛な響きがこもっていた。

「彼はまだ子供だった。そんな子供が戦って死ぬことになるなんて。こんな世界、狂っている。ラウエ中佐、私がかもって努力すれば何か違っていたのだろうか……？」

「ヤン提督。ヤン提督のルーツの古代国家のお話に、胡蝶の夢というのがあつてさうですね。この世界とかの世界、いずれが夢か？」

「ラウエ中佐？」

「人は夢を見ます。様々な願望から、あるいは後悔から。神だつて見るかもしれない。こうあつてほしい、これはおかしい。そんな想いが、様々な夢を、可能性の世界を生み出すのです。」

……この世界もそんな夢の世界の一つなのかもしれないですね。

とある英雄が何も残せず倒れた世界もあったかもしれない。あなたが死んだ世界もあったかもしれない。それで嘆き悲しんだ人がいたかもしれない。

……私はたとえユリアン・ミンツが不幸になっても、あなたが生きていてくれたよかったですと思っています」

ヤンの目には、一瞬ローザが常ならぬ存在に見えた。

だが、次の瞬間にはいつものローザに戻っていた。

「そうだ。ヤン提督、私の説明が悪くて勘違いなさってそうですが、ユリアン・ミンツは生きていますよ」

「えっ?」

「死んだとしたら、私が殺したことになるわけで、ヤン提督の話を平静に聞けるわけじゃないですか。いや、殺すつもりだったのですが、ヤン提督の声で手元が狂いました。私もまだまだですわね……」

「そうか……生きていたか……」

「傷の方はヤン提督より深くて後遺症も残りそうなのですが、流石若いですね。先に意識を取り戻していますよ。ご希望ならそのうち話す機会もできるかと」

「そうだな、一度話してみたいな」

「わかりました」

「ところで、ヤン提督、術後ですからしばらくアルコールもカフェインも控えないといけないのですが……」

「ええ!？」

ヤンはこの世の終わりとはばかりの顔をした。

「ご安心ください！カフェインフリーでも美味しい紅茶を淹れる練習をしました！」

思えば連合に来てから助けられてばかりだ。

得意げに語る副官を見て、ヤン・ウエンリーは気持ちが悪くなった。

……ジェシカはラップが幸せにするだろう。

「ラウエ中佐」

「はい」

「……いや、ローザ」

「?!、はい」

「こんな寝たきりの状態で言うのも締まらないし、上官という立場を利用するようで卑怯な気もするのだが」

「はい」

「これからも私と一緒にいてほしい。君の紅茶をずっと飲み続けたいんだ」

ローザは満面の笑みになった。

「勿論ですわ！今、紅茶を淹れてきますね！」

走り去って行った副官を見ながらヤン・ウエンリーは頭をかいた。

「あの様子だと、ちゃんと伝わっていないかな……？」

ユリアンはフェザーンの軍病院でバグダツシユと面会した。

「ヤン・ウエンリーは目を覚ましたそうですよ」

「そうですか」

ユリアンは残念さと安堵の両方を覚えていた。

「ところで少佐、捕虜なのになぜ自由に動いているんですか？」

「おや、言っていないませんでしたね。私もヤン不正規艦隊に入れてもらったんです。おかげで大尉待遇に格下げされてしまいました……。そんな顔しないでください。パトロクロスではきちんと役目を果たしたでしょう？」

そして周りを確認しつつ唇だけで語った。ユリアンが読唇術を使えることを知っていたから。

「それに……ただの話、私はグリーンヒル大将に娘さんのことを頼まれているんですよ」
「少佐、いや、大尉が生きていてくれただけでぼくは嬉しいですよ。マシユンゴ准尉も大

尉が全体に降伏命令を出してくれたおかげで助かりましたし」

皮肉のつもりのないユリアンの言葉にバグダツシユは反応に困った。

「……今日ここに来たのはクリスティーン中尉から手紙を預かっていたからです」

ユリアンの顔が強ばった。

「彼女が死んでいて、ミンツ大尉が生きていたら渡してくれ、と。……職業柄、中は見せてもらいましたが何が書いてあるかわかりませんでした。ミンツ大尉にはわかりますか？」

ユリアンは手紙を受け取った。

それは、トリユーニヒトとユリアンの間で使用されていたカスタマイズされた警察式暗号文であった。何故、彼女が？

それにはこのように書かれていた。

「親愛なるユリアン君、この手紙をあなたが読んでいるということは私はもういないのでしょう。でも気落ちしないでください。私はあなたを騙していた悪い女なのです。しかも二重にね。

ユリアン君は多分気づいていなかったでしょうけど、私は地球教徒です。

デグスビー主教のことを覚えていますか？

私は彼にあなたを籠絡するよう頼まれていたんです。

八年前、私は地球に憧れるだけのただの世間知らずな少女でした。そこを地球教につけ込まれたんです。弱味を握られ、彼らのために働くように仕向けられました。

私は絶望しました。

しかしそれを救ってくれたのがトリユーニヒトさんでした。少なくとも当時は、救ってくれたと思っていました。

トリユーニヒトさんは私のことを守ると約束してくれました。地球教の状況を探るための手駒になる代わりに。

トリユーニヒトさんの計画では、フェザーンでの戦いの後、ユリアン君は私と一緒に地球に行く予定でした。トリユーニヒトさんはあなたに地球教を内部からコントロールして欲しかったんです。私とマシユンゴ准尉をサポート役にして。

土壇場まで本人に知らせないなんて私もトリユーニヒトさんも悪い大人ですね。

……大人を信じられなくなりましたか？

ユリアン君は頭はいいのに騙されやすいので、少しは人を疑うようになった方がいいです。

私のことも。トリユーニヒトさんのことも。

状況が変わったから、ユリアン君が地球に行くことはきつとないですね。

ユリアン君と地球に行けなかったのは残念です。これは本心です。

私が語ったほどには地球はいい場所ではありません。荒れ果ててしまっていると思います。人類の故郷がそんな状態でいいわけがない。私は今もそう思っています。

ユリアン君が地球教を支配してくれたら、地球を美しい青い星に戻してくれるんじゃないか、そんな期待を持っていたのです。

ユリアン君、あなたはいいい子なので、いろんな人がこれからも助けると思いますが。そこにいるだろうバグダツシユ少佐も。

きつと家族もできるでしょう。だから、孤独だなんて思わず強く生きてください。ユリアン君が嫌でなければ私も空の遠くから見守っています。

私はあなたを弟のように思っていました。それ以上はあなたを困らせるだけなので何も書きません。

もう時間がないのでここまでにしておきます。

さようなら、ユリアン。

強く生きてください」

ユリアンは泣いた。

バグダツシユはそつと部屋を出た。

しばらく後、ユリアンはヤンと面会する機会を得た。

戦術論で盛り上がり、紅茶の話で意気投合し、トリユーニヒトのことで口論になったが、それはまた別の話とする。

同盟は二方面における大敗に大きく揺れ動いた。

純戦力的には連合も帝国も相応に消耗したため、同盟が著しく不利になったわけではなかった。トリユーニヒトがレペロに語った戦略は、状況が早まっただけでまだ有効であつたが、問題は戦死者、捕虜の数であつた。

戦死者、捕虜は一千万人の大台を超えていた。また、モールゲンは疎開が進んでいたものの未だ三千万人の同盟市民がいて、連合の占領統治を受けていた。

開戦から半年で一千万人が失われた。民間にも被害が出ている。これは、同盟市民に戦争の現実を思い出させるのに十分であつた。

また半年後には同じだけの被害が出るのではないか、いや、自分も巻き込まれているのではないか……

実際軍部は、全軍の2割を超える一千万人の損失の埋め合わせのため、予備役の招集だけでなく、徴兵の強化を提案しようとしていた。

イゼルローン方面の敗北はフォーク中将の突発的な精神疾患発症が原因とされた。

フオーク中將は、入院加療の上予備役編入となった。

フェザーン方面の敗北は、パエツタ提督が自らに責任があると発言した。

「私がミンツ大尉の発言を無視したのが敗北の原因である。責任はすべて私にある」

そのような事実はなかったのだが、パエツタ提督は才能ある若者のために自らが泥を被るつもりだった。

このように敗北の原因は軍部にあり、議長の責任ではないという論調がメディアの大勢も占めたが、それでも支持率は大きく下がった。トリユーニヒトの議長辞任を求める声も強まった。

トリユーニヒトはその日、演説をとちるといふ常であればあり得ない失態をおかした。しかもそれはこの一週間で二度目だった。

トリユーニヒトとしても流石に自分の変調に気づかざるを得なかった。

初めは同盟軍の大敗のせいかと考えた。しかしその程度の逆境で自分が参ってしまったなど信じられなかった。

しかしユリアン・ミンツ生存の報を受けた時によく腑に落ちた。気持ちが軽くなったのだ。

なんだ、自分も人並みにあの少年に情が湧いていたのか、と。

子のいないトリユーニヒトには、それが子を想う父親と同じ気持ちと同じだと分から

なかったのだ。

生きているならそれでいい。何年か経てば捕虜交換で彼も帰ってくるだろう。敗北を糧に成長して。

その時こそ同盟の覇権確立の時だ。

先々彼が政界を望むなら私の後継者にしたっていいかもしれない。

地球への派遣計画は白紙に戻そうじゃないか。

トリユーニヒトの思案は進んだ。

ひとまずはレベロに議長を押し付けるか。交換条件として私が国防委員長になれば十分に影響力は確保できる。

責任を取って自ら軍部に対するシビリアンコントロールに務め、同盟軍を再建する、とでも言えば、市民の納得もそれなりに得られよう。

連合とフェザンには嫌がらせ程度の攻撃を行っていれば、1年もすれば彼らから音を立てて講和を求めてくるだろう。ひとまずはそれで満足してやろう。

そして、三年後にその実績をもって議長に返り咲き、ユリアン・ミンツと共に今度こそ連合を征服するのだ。

そんな計画を立てつつ、会議場を出たトリユーニヒトに声をかけてきた人物がいた。

「トリユーニヒト議長、私です、フォークです。現役復帰のお願いに来ました」

……結局トリューニヒトの計画が実施されることはなかった。
トリューニヒトは銃撃により重傷を負い、長期療養に入った。
評議会は一度解散し、衆望によりレベロが暫定議長を務めることになった。
同盟はレベロ議長のもと、連合との講和に向け動き出した。
戦いの季節は終わりを迎えようとしていた。

第三部 18話 見果てぬ夢

レベロ議長の前、同盟軍は改革が進んだ。艦隊数は以前の水準に削減された上、ゆつくりと再興されることになった。

グリーンヒル統合作戦本部長とドーソン宇宙艦隊司令長官は退任し、それぞれクブルスリーとビュコックが大将昇進の上、後任となった。

宇宙暦797年／帝国暦488年5月、同盟と連合は講和条約を結んだ。

モールゲンは同盟に返還されたが、アルテミスIIは連合が戦利品として接収した。

フェザンに関しては同盟側フェザン回廊出口を非武装地帯とした上で、連合とフェザンの関係を同盟は黙認することになった。

ヤン不正規艦隊の乗員には、自由意志での帰還が許された。

捕虜の帰還も順次進められることになった。

通商も再開される予定である。

帝国では、帰還したラインハルトが内乱の收拾を行なった。

まずは行方不明だったアンネローゼとキルヒアイスに再会した。

二人はロイエンタールの用意した一隻の駆逐艦で辺境星域に逃げ延びていたのだ。

ラインハルトは二人の無事を喜んだ。以前より二人の距離が近いように感じることを訝りつつも。

オーディンではここまで中立を保っていたラムズドルフ元帥によつてオツペンハイマー大將をはじめとするリツテンハイム大公派の拘禁が行われていた。

彼を動かしたのは中立を保っていたマリーンドルフ伯とその娘ヒルダであった。

マリーンドルフ伯は残っていた貴族をまとめ、ラインハルトへの恭順の意向を示した。

二度の内乱で貴族の数も少なくなっていたことから、ラインハルトとしてもこれを受け入れた。

その後、未だ行方不明のエルウィン・ヨーゼフ2世が廃帝とされ、先々帝オトフリート5世の第3皇女が擁立された後、ラインハルトへの帝位禅譲が行われた。

ゴールデンバウム王朝はここに滅び、ローエングラム王朝による新帝国が始まった。

皇帝となったラインハルトにより内政改革と軍の再興が急速に進められることになった。

連合と帝国の間にも、再度休戦が成立した。

今回は国家同士であった。

ゴールデンバウム王朝が滅んだことで、お互い形式に縛られる必要がなくなったのである。

講和条約の締結や通商条約の検討も進められることになった。

同盟と帝国の間にも休戦の機運が高まり、水面下での接触が図られていた。

お互いすぐには軍を動かすつもりがない以上、望まない事態が発生しないよう何らかの取り決めを結んでおくべきだったからだ。

通商の検討さえ行われていた。フェザーンが連合に与した状態では、それがお互いのためであったから。

フェザーンは、連合に与せざるを得ない立場であった。

ヤン・ウエンリーによる機雷散布と軌道エレベータ損壊はフェザーンの経済活動に深刻な悪影響を与えた。

だが、これは連合や現フェザーン当局への悪感情には発展せず、批判はもっぱらヤン・ウエンリー個人に向けられた。

ケツセルリンクとオーベルシュタインがそのように仕向けたのだ。

ボルテックは、傷の癒えたヤン・ウエンリーと面会して笑顔で言った。

「もう来ないでください」

この発言はフェザーン市民の知るところとなり、彼らは溜飲を下げた。

ヤン・ウエンリーの不名誉二つ名リストに、新しく「出禁のヤン」が加わった。

オーベルシュタインは自らフェザーンに赴いていた。

エフライム街40番地にあった地球教徒の拠点が制圧され、武器弾薬、麻薬、様々な資料が秘密裏に押収された。

同時にフェザーンの行政、軍事の資料もケツセルリンクの協力の元、集められた。

フェザーン派地球教徒のこれまでの活動を調査するためである。連合派地球教徒やオーベルシュタインでも完全には把握できていなかったのだ。

オーベルシュタインは、フェザーンの軍需物資の流れに不審を抱いていた。

明らかに輸出用や正規軍や傭兵軍が利用する以上の軍需物資がフェザーンに集められ、どこかに消えていたのである。

表向き戦いは終わったが、火種はまだまだ燻っているようであった。

しかしながら銀河は一時の平和を得たようであった。連合とその人民が五十年をかけてようやく得た平和。

これが永遠ならざるまでも長いものになるかどうかはまだ誰もわからない。

ウオーリックはクラインゲルト伯と面会した。

「ウォーリック元帥、いや、ウォーリック男爵、決意は固まったか?」

「ええ、盟主を目指します」

ウォーリックは元帥に昇進していたが、退役し、次期盟主となる決意を決めたのだ。

クラインゲルト伯は微笑んだ。

「わかった。次の諸侯会議で私は引退を表明する。後は頼むぞ」

「はい。クラインゲルト伯は今後どうされますか?」

「クラインゲルト領の領民の面倒を見なければならぬ。彼らは故郷の惑星を追われ、今は根無し草だ。彼らと共に惑星を開拓して新たな故郷をつくるさ。……本当は北部を奪回できればよかったのだが、戦略上そうもいかないからな」

「奪回はともかく、戻ることにはできるようになるかもしれないからな」

「何?」

「同盟、帝国、連合の平和が長く続けば、北部地域は交通の要衝となります。無人の地とはしておけないでしょう。平和裏に領民が故郷に戻り、再開拓を行なえるようになる道が開かれるかもしれません」

「なるほどな。私が生きているうちは無理かもしれないが、それでも期待しておるよ」

「……クラインゲルト伯、私は平和になった後の諸侯の生きる道をこう思うのです。新たな星域の開拓こそが、諸侯の新たな高貴なる義務になるのではないかと」

「ほう？」

「銀河連邦衰退期から500年以上が経ちました。しかし人類の活動領域はオリオン腕とサジタリウス腕に限定されたまま、人口に至っては減少する一方です。

このままでいいはずがない。

新たな星、新たな世界を開拓する、それはハイネセンの例を出すまでもなく危険な行為です。戦争にも劣りません。誰かが率先してそれを行うべきなのです。

それを独立諸侯連合とその諸侯が行なっていくべきだと私は考えています」
クラインゲルト伯をあるイメージが襲った。

新たな宇宙開拓期、

熱情と狂騒の中時代の先頭に立つのは、

連合の諸侯と人民たち。

まだ見ぬ危険、まだ見ぬ誘惑、まだ見ぬ存在の蠢く中、オリオン腕、サジタリウス腕を越え、遍く宇宙に広がり行く人類

建国五十周年祭の熱狂を思えば、

連合には十分にそのポテンシャルがあるのではないか。

同盟と帝国の人民もそこに加われば、

狭い領域で争うことなど馬鹿馬鹿しくなっていくだろう。

クラインゲルト伯は身震いした。

これは、引退どころではないかもしれない

「ウォーリック男爵」

「はい」

「心が踊るな！」

「はっ！」

「未知の星域で誰もいない惑星を少人数で開拓する。かつて少年だった者なら皆夢想する、そんな願望も叶う世界だ。

もしその時に私がまだ生きていたなら、私もその一員になろうじやないか」

「はい、ぜひ！」

彼らの前には見果てることのない夢が広がっていた

.....

「ヤン提督」

連合行政府で行われた会議の後、ヤンは中將に昇進したオーベルシュタインに呼び止められた。

「何でしよう?」

「内密に相談が」

「出禁のヤンに一体何の相談でしようか」

ヤンはフェザーンの一件を少し根に持っていたが、オーベルシュタインは意に介さなかった。

「永遠ならざる今の平和が、一瞬で終わるかもしれぬのです」

「……話してください」

「帝国内の連合派地球教徒の拠点が襲われ、壊滅しました。十中八九フェザーン派地球教徒の仕業です。そして連合派の大物ゴドウィン大主教も襲われて死にました。地球教内の連合派に対して肅清が進んでいるとみていいでしょう」

「それは……しかし地球教内の内輪揉めで済むならばらくは監視するに留めてもよいのでは?」

「いや、まだあるのです」

「続けてください」

「フェザーンでの調査の結果、多数の艦艇用、拠点用の物資が何処かに横流しされている

ことがわかったのは報告した通りですが、同じ動きがどうやら同盟や帝国でもあったよ
うなのです。

モールゲンやガイエスブルク要塞にその痕跡がありました。

さらに帝国では内乱時に多数の貴族や軍人、艦艇が行方不明となったが、その行き先
は未だ不明です。連合にもフェザーンにも行き着いていません。フェザーンを脱出し
たルビンスキーや一部艦艇も同様です」

「オーベルシュタイン中将、あなたは今挙げたそれらが集まって一大勢力を構築すると
思っているのですか？」

「そうです」

「しかし」

オーベルシュタインはヤンの言葉を遮った。

「彼らがまとまるに足る旗印がない、そう言いたいのではありませんか？」

「はい」

「エルウィン・ヨーゼフ2世。彼が行方不明です」

「それは……ですが彼は子供ですよ」

「ユリアン・ミンツ少年に痛い目にあわされたあなたがそう言うとは」

「……」

「失礼しました。ですがそういうことです。それに別に今すぐである必要もない。時間が経てば彼も成長するでしょう」

「いや、それでもエルウィン・ヨーゼフ2世が有効な旗印になるかという疑問を持たざるを得ません」

オーベルシュタインは唐突に話を変えた。

「前回の内乱である人物が連合に亡命して来ました」

ヤンは戸惑った。

「オーベルシュタイン中將、何の話をしているんですか？」

「関係があるのです。その人物の名はエルフリーデ・フォン・コールラウシュ。リッテンハイム大公派の肅清を逃れたりヒテンラーデ公の血縁です。彼女が無視できない話をしてくれました。十分に傍証のある話です」

ヤンは続きを促した。

「父親であるはずのルートヴィヒ大公が死んで一年以上経ってからエルウィン・ヨーゼフ2世が生まれていることは帝国における公然の秘密でした。本当の父親はフリードリヒ4世だと考えられていましたからな」

「……同盟でもその噂は知られていました」

「フリードリヒ4世の子供が立て続けに夭逝したのはご存知の通りですが、実はこれは

遺伝子疾患によるものです。連合への亡命者ヘルクスハイマー伯も同様の情報を持っていましたから、これは確かです。ゴールドンバウム王朝の血脈が汚れきっていることに気づいたりヒテンラーデ公は、フェザーンの力を借り、秘密裏に抜本的解決に出たのです。

かの、エンダースクール、ライアル・アッシュビーと一緒にすよ。

すなわち、遺伝子疾患を発症していない過去のゴールドンバウム王朝の皇帝のクローンをつくったのです。秘密を守るため、事はリヒテンラーデ公の一族の女性とフリードリヒ4世の何人かの寵姫の腹を借りて行われたのです。

ブルース・アッシュビーの時と一緒に、出来のよい赤子のみが選抜されたようすな。シユザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人の悲劇もこれが原因のようす。

そしてルートヴィヒ大公の死から2年経った帝国歴479年、エルウィン・ヨーゼフ2世と名付けられた子供が生まれました」

「オーベルシユタイン中将は、エルウィン・ヨーゼフ2世が英邁な君主の資質を持っていると言いたいのですね」

「ヤン提督、あなたは既におわかりのはずだ」

「……わかつていても、認めたくない事はあります」

「ならば言いましょう。エルウィン・ヨーゼフ2世は、かの男のクローンです」

オーベルシュタインはついにその名を口に出した。憎み続けたその男の名を。
「銀河帝国初代皇帝、

すなわち、

ルドルフ・フォン・ゴールデンバウム」

連合、同盟、新帝国、すべてにとつて忌まわしきその名が、
ヤン・ウエンリーには遠雷の音を伴って聞こえた。

幕間劇その1 あるいは、永遠ならざる平和

宇宙暦797年／新帝国暦1年9月 独立諸侯連合

ライアル・アツシユビーは連合の客将として、連合建国五十周年記念事業を手伝って
いた。

計画されていた通り、人民慰撫のためにハードラックで連合領の諸惑星を巡回して
いたのだ。

フレデリカはアツシユビーの求婚を拒絶したものの、副官を辞めることはなかった。

「あなたの副官なんて、他に誰ができますか」というのがフレデリカの答えだった。

期間内により多くの有人惑星を回るにはどうしたらよいか。フレデリカがその問題
の解決のためにその知力を使ったため、結果的にアツシユビーの負担は増大した。

アツシユビーは各地で熱狂的な歓迎を受けた。特に往時のブルース・アツシユビーを
知る高齢者から。

「帝国軍に告ぐ！」とやると異常に盛り上がるのだ。

「なあ、フレデリカ中尉、いや、今は大尉待遇だったか」

「はい、何でしょうか」

「同盟の地方惑星の寂れた保養地のホテルで、たまにダイナショーをやっていたのを知っているか？」

「ありますね。エル・ファシルに行った時に見たことがあります」

「そこで、往年の歌手や俳優のそっくりさんが出てきて、歌ったり踊ったりするじゃないか」

「そうですね。私の祖母も、そっくりさんでも喜んでいましたね」

「それと、俺のやっていることはどれだけ違うんだ？」

「……気づかない方が幸せなことってありますよ。みんな喜んでるんだからいいじゃないですか」

「君もか？」

「わたし、実はブルース・アッシュビーのファンなんですよ。知りませんでした？」

「……俺の？」

「ブルース・アッシュビーの、です」

「……」

「もうすぐ次の巡ぎ、いや巡回先に着きますよ。準備してください」

「今、巡業って言おうとしたな」

そう言いながらも、髪型を確認するなど準備に余念のない、仕事には手抜きをしない

ライアル・アッシュビーだった。

同じ頃、アリストター・フォン・ウオーリックも、忙しい職務の間を縫ってウオリス・ウオーリックの旗艦ルーカイランを駆って地方巡回を行なっていた。諸侯会議に向けての根回しも兼ねてのことだった。さらには、この巡回行事自体が国内の地球教徒対策のカモフラージュでもあった。

「アッシュビーの方がよかった、という声をチラホラ聞くんだが、少し凹むぞ。建国はアッシュビーでもその後連合の独立を守ったのは親父だぞ。結局ウオーリックは二番手なのか」

ヴァルターの後任の副官、ドレッセル少佐が慰めのつもりで言葉をかけた。

「あちらの方がそっくりさん度合いが上ですからね」

「フォローになっていないぞ」

「……話は変わりますが、企画部からアッシュビー提督と組んで730年タッグイベントを開催して欲しいとの依頼が来ています」

「絶対に嫌だ。俺までそういう扱いをする気か」

宇宙暦798年／新帝国暦2年 1月13日 自由惑星同盟

ビュコックは意外な相手から信書を受け取っていた。

連合の客将となったヤン・ウエンリーからのものであった。

地球教徒それ自体と、同盟軍にも浸透している彼らによるクーデターへの注意喚起だった。

これがヤンの何らかの策だと考えるのは無理があつた。同盟軍内の相互不信を助長するのが目的だとしてももつとやりようがあるだろう。

ビュコックはヤンへの悪評を聞いてもいたが、それを鵜呑みにするつもりもなかつた。ヤン・ウエンリーほどの男がわざわざ送つて来た信書に書かれていることは十分に考慮するに値する。それが宇宙艦隊司令長官としてのビュコックの判断だった。

ただ、事は統合作戦本部の管轄するところでもある。ビュコックはクブルスリーの了解を得た後、査閲部長に降格していたドワイト・グリーンヒル大将を呼び出した。

「ゆゆしき情報ですな。本当であればですが」

「じやろう。ひとまずは可能性だとしても、相応に備える必要がある。軍は先の戦争で無能扱いされた上、現在では肅軍にも晒されている。不満を持つ将兵も多い。クーデターへの備えはしておく必要があるだろうよ」

「小官にお話頂いたということとは、信頼して頂いているということですか」

「本当のところを言うと、これは貴官へのクギ刺しも兼ねているんじゃないよ」

グリーンヒルは眉を顰めた。

「どういうことでしょうか？」

「無論わしは貴官が地球教徒だなどとは思っておらんよ。」

しかし、貴官は人望もあるし、部下を見捨てられん男だ。一方で清濁併せ飲める男でもある。先の戦争の末期にもいろいろ動いていたらしいな」

「何のことでしょうか」

「別にそれについてとやかく言うつもりはないさ。だが、部下がクーデターを行おうとしたら見捨てられんのではないかな」

「否定……してもしようがないですな。先にクギを刺しておけば、暴走しないだろうというわけですか」

「まあそういうことじゃよ。その上で人望もあり、中枢から外れた立場となった貴官にはいろいろ情報も集まってくるだろうから適任というわけじゃ」

「せいぜい期待を裏切らないようにしましょう。同盟軍のすべての将兵のためにも」

「お願います」

ところで、とビュコックは話題を変えた。

「娘さんはその後どうかな。捕虜交換での帰還を断つたと聞くが」

グリーンヒルの表情が急に暗くなり、反抗期の娘を持つ父親のそれになった。

「しばらく帰るつもりはない、と伝言をもらいました」

「そうか……向こうに好きな男でもできたのかのう」

ますます絶望的な表情になったグリーンヒルを見て、ビュコックは慌てて撤回した。

「あ、いや、冗談じゃ。余計なことを言った。反抗期はまだ続いておるのか」

「はい……。妻の死後、娘のためと思ってやったこと、軍のためと思って反対しなかったこと、全部裏目に出たようです。士官学校に入った時も、本当は軍人になんてなりたくなかったと言っていましたから」

「そうか、それはつらいな……貴官も、娘さんも」

ビュコックはエンダースクールのことを知っていた。

「ですが、バグダツシユ少佐からの連絡によれば、あれは向こうで明るくやっていたそうです」

「ほう、それは良いことだな」

これは本当に好きな男でもできたのかとビュコックは思ったが無論口には出さなかつた。

「私から離れた方が娘にはよかつたのかもしれない。情けないことですが」

ビュコックはグリーンヒルを慮った。

「たまには家に遊びに来るといい。うちも家内と二人だけじゃからな。歓迎するぞ」

「ありがとうございます」

グリーンヒルは笑った。寂しげに。

宇宙暦798年／新帝国暦2年 2月4日 自由惑星同盟

アレックス・キャゼルヌ中将、ムライ少将、フォードル・パトリチエフ大佐、アウロラ・クリスチアン中尉の四名が、ビュコックに呼び出された。

待っていたのはビュコックとグリーンヒルであった。

グリーンヒル大將が説明を行なった。

「貴官らに新艦隊の編成を頼みたい。

編成完了後はムライ少将、パトリチエフ大佐、クリスチアン中尉はその幕僚も兼ねることになる」

パトリチエフ大佐は驚いた。

「このご時世に新艦隊ですか。よく話が通りましたな。それに艦隊編成は統合作戦本部の管轄ではないのですか」

「クブルスリー本部長には話を通っている。人選の承認も無論統合作戦本部でなされる。正規艦隊ではなく、昨今増加した宇宙海賊対策用の特務艦隊だ。規模も小さい。表向きはな。実際は、有事のための部隊だ」

ムライ少将が聞き返した。

「有事ですと？」

「その通りだ。将来起こり得るクーデターを防止する、あるいはクーデター発生後に鎮圧を行うための。昨今軍部内で不満が高まっているのは承知の通りだ。それを使惑する集団が同盟軍内に潜んでいる可能性すらあるのだ」

「集団ですか？一体どのような？」

「地球教徒。聞いたことぐらいはあるだろう」

皆、衝撃を受けた。

「今の話は外部に漏らしてはならない。二つの理由からだ。一つは勿論その集団を用心してのことだが、もう一つはこれがあくまで可能性に過ぎないからだ。軍内での相互不信を助長し、なかったところに火種を作る可能性すらある」

皆の理解が及んだことを確認してグリーンヒルは話を続けた。

「無論、憲兵隊、情報部という正規のルートでも内偵は進める。

だが貴官らのことは彼らにすら秘密だ。貴官らはビュコック司令長官と私が信頼できると判断した者達だ。実質的に、我々と貴官らが地球教の対策メンバーということになるな。

人事情報の確認はキャゼルヌ中將を介して、情報部への照会はクリスチアン中尉を介

して行なつてほしい」

ムライ少将が皆を代表して答えた。

「承知しました。ところで、司令官はどなたになるのですか？まさか私ということはないでしょうか」

「貴官が向いていないというわけではないが、我々としても司令官として実績のある人物を当てたいと考えている」

ビュコックがそこで説明を代わった。

「うむ。だが、さすがに正規艦隊の司令官が海賊対策部隊の司令官に転任するのは人目を引きすぎる。適任と思われたホーウッド提督やカールセン提督は前回の異動で正規艦隊の司令官に就任したし、パエツタ提督は退官してしまった。

そこで、二人で話し合つたのだが、ちょうど帝国から捕虜交換で戻つて来る将官がいてな。その者に任せようと思う。まだ戻つて来ていないため、君達にそれ以外の人選を頼むのだ」

こうして、同盟軍におけるクーデター対策部隊が秘密裏に組織された。

半年後、海賊対策部隊が小規模ながら発足した。表向きの役割である海賊退治に活躍することで、徐々に規模を拡充していった。

ただ、「服を着た秩序と規則」と異名を持つムライが生来の生真面目さを發揮したこと

によって、立ち寄り先の地方基地で横領などのいくつかの不正が暴かれ、実は内部監査部隊なのではないかと、真の目的とは少しずれた形で警戒され、恐れられるようにもなってしまった。

宇宙暦797年／新帝国暦1年 10月10日

ボリス・コーネフは不満だった。

ヤン・ウエンリーが出禁となったことで、コーネフもお役御免で独立商人に戻れたまでは良かったのだ。

だが、ケツセルリンクから極めて命令に近い頼みごとをされてしまった。

独立商人に戻るなら、同盟やフェザーンの地球教徒を地球まで運ぶ仕事をして欲しい、そのついでに地球教徒と地球の情報収集を欲しい、と。

「独立商人が、商売を他人に決められるなんてあり得ないだろうが！」

マリネスクがコーネフを宥めた。

「まあいいじゃないですか。今日はやけに臨検が多いですが、ケツセルリンク氏の名前を出したらすぐに終わりましたし。業績は安定していますし、これで文句言ったらバチが当たりますよ」

「安定を望むなら独立商人なんてやってないぜ。これでどうやって一攫千金を狙うんだ

「よ」

「案外、お客さんの中に商売の種が転がっているかもしれないですよ」

「船内どこもかしこも辛気臭い顔の奴らばかりじゃないか」

と言いつつも、コーネフは一人の乗客の顔を思い出した。

茶色の長髪で、端正な顔の妙齢の女性……ユリヤ・トリュシナと言ったか。

あの若さで地球教徒とは。どこかで見た顔な気もするのだが。あんなに美人なら人生いくらでも楽しめるだろうに。片腕が少し不自由そうだったが、何か不幸なことでもあったのかねえ。

この日、フェザーンの捕虜収容所から一人の少年が姿を消していたことなど、彼らには知る由もなかった。

宇宙暦797年／新帝国暦1年 6月 銀河帝国

皇帝に即位したラインハルトのもとで編成された内閣の構成員はつぎの十一名だった。

國務尚書マリーンドルフ伯爵

軍務尚書キルヒアイス元帥

財務尚書リヒター

外務尚書ゲルラツハ伯爵

内務尚書オスマイヤー

司法尚書ブルックドルフ

民政尚書エルスハイマー

工部尚書シルヴァーベルヒ

学芸尚書ゼーフェルト博士

宮内尚書ベルンハイム男爵

内閣書記官長マインホフ

宰相はおかれず、皇帝自身が最高行政官を兼ねた。

旧帝国になかった民政省と工部省は、連合の制度を輸入したものである。外務省も同様で、旧帝国と異なり、新帝国が同盟と連合を国家として認める立場を取ったことを象徴するものである。同盟と連合の二国との利害調整は重要事であり、二度目の内乱における肅清を生き残った老練の政治家ゲルラツハ伯爵がその任に就いた。

連合、同盟との休戦、講和交渉は外務省と軍務省の協力、あるいは主導権争いの元、進められた。

公平な税制度と公正な裁判、それが民衆の求めるものだと言ハルトは考えてい

た。

ラインハルトとその閣僚の下、治安の回復、経済の再建、そして社会改革が急速に進んだ。その原資は二度の内乱における門閥貴族からの没収財産で十分にあった。

貴族特権の廃止、荘園の解放、民法の制定、税制改革、農民金庫の新設、病院、学校、福祉施設の新設、いずれも民衆に喜びをもって迎えられたのだった。

軍事力の再建はゆっくりと進められた。まずは国内の立て直しを優先するというのがラインハルトの方針だった。

統帥本部総長にはラムズドルフ元帥が、宇宙艦隊司令長官にはミッターマイヤー上級大将がそれぞれ就任した。総参謀長はメックリンガー大将である。

その下でルッツ、ビッテンフェルト、ミュラーの各大将が艦隊司令官を務めた。

ワーレン大将が憲兵総監を、キルヒアイス元帥が近衛兵総監を軍務尚書と兼任で務めることになった。

内乱鎮圧、建国の功臣達が軍の中枢を占める形となったが、徐々に世代交代も進むだろうと思われた。

幕間劇その2 あるいは、蠢く者達

宇宙暦798年／新帝国暦2年 2月 独立諸侯連合

独立諸侯連合を、一つの事件が震撼させた。

長期療養中のメルカツツ予備役元帥が、その家族とともに失踪したのである。

軍を退役して新たに盟主となったウォーリック伯が、対応のための会議を招集した。

主な参加者は、ウォーリック伯、新たに憲兵総監となったケスラー大将、情報局長オーベルシユタイン中将、客将から正式に連合軍所属となったヤンであった。

ケスラーが捜査状況の報告を行なった。

「捜査の結果、地球教徒関与の痕跡が発見されました。急ぎ彼らの隠れ家を押さえましたが既に撤収した後でした。残念ながら現時点でメルカツツ元帥及びご家族の消息は不明です」

オーベルシユタインが補足した。

「この捜査と関連してゆゆしき事態がわかりました。この数年、将兵や軍事関係の技術者の失踪事件が増加しているのです。メルカツツ元帥ほどの要人が失踪したのは初めてですが。」

地球教徒に関して今まで直接的な破壊工作ばかりを警戒し、このことに気づいていなかったのは情報局の失態です」

ウォーリック伯が尋ねた。

「過ぎたことは仕方がない。で、情報局としては地球教徒の仕業と見ているわけだ。あのユリアン・ミンツの失踪もそれか？」

「ユリアン・ミンツに関しては書き置きのようなものが残されており、自発的に地球に向かったものと思われれます。他の件に関しては、確たる証拠がないものもありますが大半は恐らく」

「目的はなんだろうな」

「対立相手を抱えた勢力の目的というものは、基本的に敵勢力の弱体化か自勢力の強化に大別されます。今回失踪したことが判明した軍閥係者はいずれも、連合を弱体化させるといふほどではありません。だからこそ明るみに出なかつたというのもあります。」

となると、自勢力の強化、でしょうな。軍事力の整備とそれを指揮する者の確保。地球教は今回、第一級の軍事司令官を得たことになりました」

「妥当なところか。しかし、メルカッツ元帥は長時間の指揮等できぬお体。たとえば家族を人質に取られたとしても、無理なものは無理だろう」

「メルカッツ元帥ご自身に直接の指揮は無理でも、顧問として後進の指導にあたらられ

ばそれだけで脅威です」

「なるほど、烏合の衆も少しはマシになるか」

「ところで、失踪には宇宙海賊が絡んでいるケースも多いことがわかりました」

「宇宙海賊が地球教徒と組んでいるのか」

「あるいは地球教自体が宇宙海賊を行なっているのかもしれませんが」。

昨今増加している宇宙海賊による被害も、戦争の長期化に伴う治安の悪化とばかり考えていましたが、どうやら地球教徒の関与もあると考えるべきでしょう。実際、逮捕された宇宙海賊の中に地球教徒だと自白した者が複数人おります」

「そうなる宇宙海賊対策にも力を入れるべきか」

ヤンが発言した。

「客将のアッシュビー提督に、宇宙海賊対策を任せてはいかがですか。昨年五十周年記念行事においても治安改善効果があったということですし」

「ああ。警備部隊を連れて、あれだけ多数の有人惑星を巡回していればな。よくまあ、あれだけ回ったものだ」

「まあ今年もそれを続けてもらえばよいのです。海賊対策を兼ねて」

ウオーリック伯は思案した。

「ふむ、妙案かもしれないな。だが、アッシュビー提督だけに任せるのもどんなものか。ヤ

ン提督にお願いしてもよいと思っっているのだが」

ヤンは頭をかいた。

「勘弁してください。私はアツシユビー提督ほど勤勉ではありませんから」

「まあいいか。ヤン提督にはその間に早くラウエ伯継承問題を解決してもらわんとな。ラウエ大佐をいつまでも待たせるわけにも行くまい」

「……はい、わかってはいるのですが。あのシェーンコップ少将にまで諭されるようになるとは思っていませんでしたし」

「まあ、相談には乗るさ」

「退役の相談に乗って頂けませんか」

「それは統帥本部総長に言ってほしいが、貴官としても貴官を慕って残留した者達を放っておけまい？」

「……」

結局ずるずると退役できないでいるヤンであった。

「まあともかく、捜査は継続してくれ。宇宙海賊対策はアツシユビー提督に任せよう」
こうして本人不在のままアツシユビー提督の巡回事業の継続が決定された。

宇宙暦799年／新帝国暦3年 1月 銀河帝国

ラインハルトは不機嫌だった。

秘書官のヒルデガルド・フォン・マリィンドルフの願いでキュンメル男爵邸に行幸に行つたまではよかつた。

だがそこでキュンメル男爵に道連れで殺されかけたのだ。それ自体も不愉快ではあつたが、それも一つの挑戦の形ではあつたから我慢できた。

問題は、キュンメル男爵との会話の途中でラインハルトが倒れてしまったことだつた。ラインハルトとしては命をかけたやり取りの最中に倒れるなど、不覚なことこの上なかつた。

キュンメル男爵がこれに動揺した際にキスリングが取り押さえたことで、この事件は未遂に終わった。

医者の見立てでは過労による発熱とのことだったが、言い訳にもならない。

ラインハルトの自らへの怒りは、黒幕と判明した地球教徒に向けられた。

連合領侵攻の際にも連合に協力した地球教徒による情報漏洩があつたということだが、またしてもか。

地球教徒に関する情報自体連合軍情報部、オーベルシュタインからのリークでわかつたことから、ラインハルトは今回の件が連合の仕業とは考えていなかった。

ラインハルトは、キュンメル男爵とマリィンドルフ伯、そしてヒルダの罪は問わぬと

明言した。

これによつて帝国に残る貴族達とラインハルトとの間に生ずるかに見えた亀裂は回避された。少なくとも表面上は。

だが、黒幕である地球教に対しては別であつた。

ラインハルトはルッツに地球討伐を命じた。

ルッツは迅速に太陽系に侵攻した。

だが、地球教の手の者が旗艦に入り込んでいた。

ルッツはその者に毒の塗られたナイフで斬りつけられ、死の淵を彷徨つた。彼は意識を失う前に藤色に染まつた瞳で副司令官のホルツバウアーへの指揮権の移譲と遠征続行を指示した。

ホルツバウアーは親交の深かつた上官の復讐に燃え、地球の制圧に成功した。

だがそれは苛烈の一言に尽きた。

地球教本部は瓦礫と土砂に埋まり、大量にいたはずの地球の民や巡礼者は生き埋めになり、死者数も数えられない有様であつた。

一部の地球教徒は宇宙船での逃亡を図つたが、ルッツ艦隊の追跡に追い詰められ、遂

には船ごと自爆して果てた。

この出来事は「地球の大虐殺」と呼ばれ、帝国中を震撼させた。

艦隊による惑星への無差別爆撃など、門閥貴族でもやらなかつた暴挙であつた。

ホルツバウアーは実際には少数のミサイルを撃ち込んだだけだつたし、無差別に行なつたわけでもなかつた。地球教本部は地球教徒の自爆が主な原因で埋まつたのだが、噂に尾鰭がついたのだ。

死者数も、実際には不明であつたが、五千万人以上、いやいや一億人以上だと過大に噂された。判明している地球上の居住人口はこの数字よりも大幅に少なかつたし、巡礼者を含めたとしても実際にはここまでの人数はいないはずであつた。

ラインハルトが直々に皆殺しを命じたのだとも噂された。そう誤解されかねない発言をしたのは事実だが、ラインハルトにその意図はなかつた。

悪意のある噂が広がつたその背後に、地球教徒の生き残りがいたのは間違いない。ルツツ、ラインハルトは虐殺者の汚名を着ることになつた。

民衆は不安を持つた。

地球教徒が暗殺を企んだからといって惑星ごと爆撃する必要はなかつたのでは。地球教徒の殆どに罪はなかるうに。結局ローエングラム朝もゴールデンバウム朝と同じ

か。いや、ローエンングラム朝は、始まったばかりでこれだ。今後はさらに酷いことが起きるのではないか。現にオーディンでは地球教徒狩りが行われているらしい。内国安全保障局長に復帰したラングが張り切っているらしいな。共和主義者の次は地球教徒か。何でも科学技術総監のシャフト大将が地球教徒として拘禁されたとか。それに帝国大図書館の司書長もだとか。逮捕されたのかもわからぬ行方不明者も出ているとか。我々もいつ地球教徒と見なされるか。おそろしや、おそろしや。ローエンングラム朝は何が起こるか予測がつかぬ。おそろしや。ゴールデンバウムの御代が懐かしや。

この事件は、順調であつたはずのラインハルトの帝国統治に影を落とすことになつた。

テロが続発した。

貴族私領艦隊の解体が進んだことで、宇宙海賊の活動も活発化した。

これに対する治安維持活動、警備体制の強化は、民衆には監視と統制の強化、恐怖政治の始まりと映り、さらに不安を抱かせた。

この一件が心身に影響を及ぼしたのか、ラインハルトは体調を崩すことが多くなつていた。

口さがない者は地球教総大主教の呪いとも噂した。

ラインハルトにとって唯一の救いは、アンネローゼとキルヒアイスという理解者がいることだった。

「俺はそんなつもりじゃなかった。虐殺を命じてもない」

「わかっているわ、かわいそうなラインハルト」

「わかつております、ラインハルト様」

「……姉上とキルヒアイスは二人でお見舞いに来てくださることが多いですね。待ち合わせでもされているのですか」

「何を言っているの、ラインハルト」

「何を言っているのですか、ラインハルト様」

宇宙暦799年／新帝国暦3年 3月 独立諸侯連合

新帝国による地球教総本部の攻撃、壊滅は、オーベルシュタインの意図通りのことであつた。だが、彼は不満だった。

地球教総本部が埋まったことで、彼が追っていた者達がそこにいたのか、わからなくなつたのだ。

オーベルシュタインは確信していた。

彼らは地球にこだわって、それと心中するような者達ではない。今もこの広大な銀河世界の深淵に潜み、力を蓄えているのだと。

「フェルナー准将」

「何でしょうか？」

「この辺りで夜中でも上等な鶏肉を売っている店を知らぬか？」

「知りませんな。閣下は鶏肉がお好きで？」

「私ではない。私の犬がな、生の鶏肉を柔らかく煮たものしか食べぬのだ」

「犬！ああ、オーデイン訪問の際、閣下の脚を噛んだというあの……まだ飼っていたのですか？」

「そうだ。で、夜もやっていた近所の肉屋が潰れてしまつてな。困っているのだ。まあ、私の夕飯にもなっていたから私も困るのだが」

「肉屋は知りませんが、夜中もやっているペットショップは知っていますな。そこでカエルを買って、食べさせれば良いのではないですか。似たような味がするらしいですよ」

「それはよいことを聞いた」

しかしフェルナーは知らなかった。犬が食に関して味よりも臭いを重視する生き物

であることを。

結果、オーベルシュタインの家には、餌となることを免れたカエルが二十四、新しく棲みつくことになった。

幕間劇その3 あるいは、小夜啼鳥

宇宙暦801年／新帝国暦5年 6月 フェザーン自治領

ケツセルリンクは軍を離れ、ボルテック自治領主の首席補佐官となっていた。

無論、この時既にケツセルリンクはフェザーンの実質的支配者であったから、表向き
の話ではあつたが。

ボルテックはこの5年、行政においてはますますの手腕を見せ、同盟とヤン・ウエン
リーによる経済的打撃から、フェザーンは持ち直していた。

連合のフェザーンに対する経済開放政策、再開された同盟及び帝国との通商が多分に
それに寄与していた。

永遠ならざる平和は、フェザーンにも十分に恩恵を与えていたと言える。

ケツセルリンクはその日、母親の墓参りに来ていた。

先客がいたようで、墓前にはまだ瑞々しい花束が置いてあつた。

「誰だ？母の死を悼んでくれる者など俺の他にいないだろうに」

まさか、あいつが？とケツセルリンクは考えかけたが、すぐにそれを否定した。あいつがこんなことのためにリスクをとってフェザーンに戻ってくるわけがない。

「私が置いたのよ」

ケッセルリンクの疑問は不意にかけられた声で解消された。

「ドミニク・サン・ピエール！」

そこには美貌の歌手、女優にしてルビンスキーの情人がいた。

「久しぶりね。ルパート」

「驚いたな。てつきりルビンスキーと一緒にだと思っていた」

「一緒に居たわよ。ついこの前までね」

「ほう、もしかや、ルビンスキーを見限って、その居場所を教えに来てくれたというわけか

？」

「まさか。あの男が、居場所を知られるようなヘマはしないわ。私がここに来ていた時点で、あの男に不利になる情報を私が持っていないことはわかるでしょう？」

「奴はそう考えたかもしれないが、俺からするとそうでもないかもしれないぞ。体に訊いてやってもいいんだぞ？」

ドミニクは溜め息をついた。

「母親の墓前で言うこと？そういうところが父親に劣るのよ」

ケッセルリンクはかっとなつたが、この数年の経験が、それを抑制させた。

「先に問うべきだったな。何をしに来たんだ？」

この男も少しは成長したのかしら、そう思いつつドミニクは答えた。

「オーデインでは皇帝が危篤ね。知っているでしょう?」

「ああ」

「あなたの父親も、もうすぐ死ぬわよ」

それはケッセルリンクに対し、効果的な不意打ちとなった。

言った当人も驚くほどの。

「……そんな顔になるなんて思わなかった。あの男が見たらきつと喜ぶでしょうね」

ケッセルリンクは思わず手で顔を隠した。

「何を言っている。そうか、あの男が死ぬか。いい気味だ。そうだ、いい気味じゃないか

！」

「ここには私しかいないのだから、取り繕う必要もないじゃない。あなた、私とどうい

仲だったか忘れたの?」

人生という領域では、ケッセルリンクはまだまだドミニクに敵わなかった。

「くつ、で、どういうことだ。あいつが死ぬことを俺に教えるのが目的だったのか?」

「そうよ。それにルビンスキーに頼まれたのよ。遺言と助言をね」

「……どんな遺言だ?」

「素直になつたじゃない。遺言はね、「人生を楽しめ、ルパート。再び狂乱の時代が来る。

きつと楽しくなるぞ」だつて」

「ふん！言われなくとも」

「あとは、私をこのまま見逃してくれるなら助言の方も教えてあげるけど」

「見逃してやるから、さつさと見え」

「しばらく自治領主府には近づくな、だつて。まあ、この二週間くらいかしらね」

「ほう……。わかった。さつさと行け」

「じゃあね、ルパート。もう会うこともないでしょうね。あなたのこと、嫌いじゃなかったわよ」

去ろうとするドミニクに対し、ケッセルリンクは少し逡巡した後、声をかけた。

「ドミニク」

「何？」

「母の墓参りをしてくれてありがとう。礼を言う」

ケッセルリンクの顔は、年相応の青年のそれであった。

ドミニクは目を見開いた。そして、優しい顔になった。

「ルビンスキーには言うなど言われていたんだけど、実はあなたの母親とは面識があったのよ。私がああの子の愛人になってから、様子を見に行ってくれと何度か頼まれたか

ら。あなたのこともあったから、ルビンスキーは援助するつもりだったみたいね。あなたの母親には頑なに断られたけど。だからあなたのことも、ずっと前から知っていたわ」

ケッセルリンクは不意に知らされた情報を、すぐに咀嚼できなかつた。

「だからかしら。私はあなたと関係を持ったけど、愛人というよりは、反抗期の子供の母親になつたような気分だったわ」

ドミニクはケッセルリンクに歩み寄つて、彼の左頬に手を触れた。

「ルパート、私からも助言よ。親父のことなんか忘れて、あなたはあなたの人生を生きよ。……まあ、結果的に似たような人生になつたとしても、それはあなたの勝手なのだけ」

そして右頬に口づけをした。

「じゃあ、今度こそささようなら」

ドミニクは去つた。

ケッセルリンクはしばらくの間立ち呆けていた。

ドミニクを追跡する指示を出すつもりだったことも忘れて。

……それが、かつて母が自分にしてきてくれた行爲にあまりによく似ていたから。

ケッセルリンクは、今更ながら、自分が、そして父親が、ドミニクに惹かれたその理

由を知った。

一週間後、ルビンスキーは死亡した。フェザーンから遠く離れた惑星の病院で、自ら手で生命維持装置を切ることで。

それから少しだけ時間がずれて、フェザーン自治領主府の一角が爆発を起こした。それは自治領主の執務室だった。

ルビンスキーは自らの脳波の停止に合わせて、爆発するように自治領主府に爆弾をセツトしていたのだ。

脳波停止の信号は、何隻かのフェザーン船籍の艦艇を經由して超光速通信でフェザーンにまで届いたのだ。

フェザーン自治領主ニコラス・ボルテックは、この爆発に巻き込まれて死亡した。フェザーン復興の実績を残して。

ケツセルリンクは難を逃れた。

その爆音は、フェザーン市民にとって、動乱の時代の再開を一足早く告げる号砲のようにも聞こえた。

第四部 1話 プロローグ：悪夢の只中で

宇宙の深淵、忘れられた世界の地下、忘れられたその場所で、地球教大主教ド・ヴィリエは地球の立体映像を見上げていた。

それは、在りし日の地球の姿と現在の地球の姿を映すための儀式用の祭具であった。数年の忍耐の時を経て、ようやくド・ヴィリエの望んだ機会が来たのだ。

もうすぐだ。もうすぐ皇帝ラインハルトが死ぬ。

ラインハルトの容態については逐一情報を入力していた。ド・ヴィリエが手を下す必要もない状態だった。

だからこそ、彼はここまで時期を待ったのだ。

若干のイレギュラーもないではなかったが、ここまでの展開は概ねド・ヴィリエの想定通りであった。

……ルビンスキーの死には驚いたが、それでも奴は地球教の経済基盤を確立して、俺の役に立ってから死んだのだ。

そして、ラインハルトが死んだその時こそ、宇宙は地球教の、否、このド・ヴィリエ

のものになるのだ。

「地球は我が故郷。地球を我が手に」

ド・ヴィリエは自らが信じてもない聖句を唱えながら、片手を上げ、立体映像の中の地球を掴み取った。

宇宙暦801年／新帝国歴5年7月 地球教根拠地

青い空の下、花々が彩る庭園が広がっている。だが、よく見るとその空が映像であることがわかる。

サビーネ、クリステイーネ、エリザベート、アマーリエがそこにいた。

閉じた地下世界に構築された、人工の庭園。それが現在の彼女らの暮らす世界であった。

アンスバツハが彼女達に報告を行いに来た。

「帝位篡奪者ラインハルトが危篤です。この数日というところかと」

アマーリエは、感慨深げに呟いた。

「報いというものじゃな。リヒテンラーデは死に、ラインハルトも死んだ。オットーの願いはこれで果たされるが、おぬしはこれからどうする気じゃ？」

「無論、これからもアマーリエ様をはじめ、ゴールデンバウムの血を引かれる方々にお仕

え申し上げます」

「そうか。頼むぞ」

「はっ！」

「でも、わたしあのエルウィン・ヨーゼフは嫌いよ」

サビーネが口を挟んだ。

「あの子、私やお母様をいつも睨んでくるもの。いつか私たち、お父様のように殺されるのではないかしら」

「これ、サビーネ！」

クリステイーネが咎めたが、サビーネはやめなかつた。

「アンスバツハ、私たちがあの子に殺されそうになったら助けてくれる？」

サビーネもクリステイーネもアンスバツハがリッテンハイム大公をその手で殺した
ことなど知らないのだ。

「まずそのようなことは起こりません。このアンスバツハが保証しますのでご安心を」

とは言ったもののアンスバツハもエルウィン・ヨーゼフの行動に確信は持てなかつた。

正当な理由がないでもないとはいえ、既に何人かの貴族が粛清されていたのだから。

サビーネが遠くから、近づいて来る人影を見つけた。地球教の主教服を来たあの人影は。

「ユリアン！」

サビーネの顔に、十代の乙女のような笑顔が咲いた。

「アン斯巴ツハ、私、エルウィン・ヨーゼフなんかよりユリアンが好きよ。彼が皇帝になつたらいいのに。そのためには、私、結婚してあげてもよくてよ」

アン斯巴ツハは少し強い調子で否定した。

「サビーネ様、お戯れもほどほどに。ゴールデンバウムの血を引かぬ者が皇帝など、あり得ぬことです」

「わかっているわ。冗談よ」

でも、私が女帝で、彼が女帝夫君ならよいかしら、などとまだ呟き続けるサビーネを嘆かわしく思いながら、アン斯巴ツハは近づいて来るその青年のことを考えていた。

ユリアン・ミンツ。

いつの間にか、我々の中に入り込んで来た青年。

その端正な容姿、柔和な笑みと優しい態度で、たちまちのうちにゴールデンバウムの血を引く女性達を虜にし、ルドルフ2世の覚えも目出度い、その青年。

彼が何を考えているのか、アン斯巴ツハはいまだはかりかねていたのだ。

「皆様、こんにちは」

ユリアンは、彼女達に会釈をした。

「遅いわ、ユリアン。シロン産の紅茶、持って来てくれた？」

「ごめんなさい。あいにく調達が上手くいっていないようです。代わりにアルーシャ産の紅茶を手に入れました。味は私が保証します。私が淹れますから、少しお待ちください」

少し不自由な片手も器用に使って、ユリアンは紅茶を淹れていった。

「皆様、どうぞ」

「ありがとう。飲む前に聖句を唱えないといけないのですわよね？」

サビーネの問いにユリアンは首を振った。

「構いませんよ。紅茶のひと時に集中できるよう、私が皆様の分も唱えましょう。地球に恩寵のあらんことを」

「おいしいわ、ユリアン」

「本当、おいしい」

寡黙なエリザベートもユリアンの紅茶を飲むその時だけは表情を緩めた。

口々に褒める、女性達に、ユリアンはその爽やかな笑顔を向けた。

「お褒めに預かり光栄です」

その笑顔を見て、アマリーエやクリステイーネまでもが顔を赤らめていた。

アンズバツハもユリアンの勧めに応じて紅茶を頂いていた。

ユリアンは彼にすら笑顔を向けるのだ。

アンズバツハはその笑顔を見ると何故か不安になるのだった。

紅茶の腕は本物だ。

ストレスの溜まるこの環境で彼女達に笑顔が見られるのも彼のおかげだ。

だが、簡単に人の心に入り込む人好きのするこの青年の本心は一体どこにあるのか？

ヤン・ウエンリーがユリアンのその笑顔を見たら、きつと嘆くようにこう言っただろう。

彼の保護者であつたあの男の笑顔によく似ている、と。

ゴールデンバウムの女性達の元を辞したユリアンに声をかけてきた少女がいた。

「相変わらず気持ち悪い笑顔ね」

「クロイツェルさん、アマリーエ様達のお側にいらなくていいの？」

彼女はアマリーエ達の侍女を務めているはずだった。

「あなたがいたから近づけなかつたのよ。サビーネには、あなたに近づくなと言われたわ。本当に女を誑かすのがうまいのね。まるで……」

「まるで?」

「何でもない。それより、いつまでそんな笑顔を貼り付けているのよ」

「別に貼り付けているつもりはないのだけど」

「あなた、いつか本心をどこかに置き忘れるわよ」

ユリアンは返答に窮した。一瞬その笑顔にもひびが入ったようだった。

「ありがとう。心配してくれて」

カーテローゼはユリアンをその青紫色の瞳で睨みつけた。

「なに言ってるの、心配なんかしてないわよ。歯がゆいだけよ」

立ち去っていく薄く淹れた紅茶色の髪の少女を見送り、ユリアンは自らも歩き出した。

カーテローゼ・フォン・クロイツェル、メルカツ提督の家族と共に地球教徒に誘拐された少女。

病身となり、途方に暮れた彼女の母親は、頼ってはならぬ相手に頼ってしまった。親切顔をして近づいて来た地球教徒を頼ったのだ。母親と彼女が不審を覚えた時には手遅れだった。母親が死んだ後、彼女は正式に地球教に勧誘された。否、男を籠絡し、地球教の信者を増やすように強要されたのだ。

カーテローゼは、母親が旧知の間柄だったメルカツの娘に相談した。

ここから、運命はさらに転回した。

カーテローゼが相談したことで地球教を刺激したのだ。

元々企まれていた話ではあったが、メルカツツ提督誘拐計画が前倒しで実施され、カーテローゼも巻き添えとなった。

カーテローゼは自責の念を覚えた。意地を張らずに自らの父に助けを求めべきだったのではないかと。メルカツツ元帥が、カーテローゼに危害が加わらぬよう強く要求してくれたことには胸が痛んだ。

地球に連行されたカーテローゼは、その瞳の色と器量のよさから、総大主教の侍女見習いとされた。総大主教は、地球の空の色をした瞳を好んでいたのだ。

侍女見習いの生活は決して楽ではなかったが、そうなっていなければカーテローゼに待っていたのは、きつとより過酷な運命だっただろう。

カーテローゼのことに思いを致していたユリアンの顔からは、自然と笑みが消えていた。

カーテローゼと会話している時、ユリアンは素の自分に戻れる気がしていた。

だが彼にはやるべきことがあった。

そのためにここまで来たのだった。

笑顔は彼の鎧であった。

彼は敬愛するかつての保護者の笑顔を思い出し、模倣して、再び歩き出した。永遠ならざる平和の成立から5年、ユリアンやカーテローゼが何故ここにいるのか、まずはそこから物語を始めたい。

第四部 2話 彼の旅・彼らの旅

宇宙暦797年／新帝国暦1年 10月

変装し、性別を偽ってフェザーンを脱出したユリアンは、連合領を抜け、帝国領に入つて少し経つた時点でベリヨースカ号を降りた。

おそらくは親切心から引き留めようとするコーネフ船長に、遠い親戚がこの惑星にいて一度会つてから地球に向かうのだと伝えて。

帝国に入った時点で帝国軍がベリヨースカ号に臨検を求めて来た。移乗してきた若い中尉が船内に妙齡の女性はいるかと思ねるのを物陰から聞いた時には、身の凍る思いがした。コーネフ船長が、その中尉に紙幣を握らせてくれなければ、それだけでは済まなかつただろう。

そのようなこともあつて、ユリアンとしては性別を偽つたまま旅を続けるのに限界を感じていたのだ。

帝国の辺境惑星で、ユリアンは旅を続けるために路銀を稼いだ。

未だ15歳、身元も不確かで、戦傷の後遺症の残る体でできる仕事は多くはなかつたが、ないわけではなかつた。

世慣れないユリアンは騙されることもあった。かつてのユリアンであればまったく縁のなかつたであろう仕事も含め、それはユリアンにとって得難い人生の経験となつた。

本来は得る必要のない経験でもあつたが、ユリアンは最貧層の人々の生活や思いを知ることができたのだつた。宗教に縋る人達のことにも。

後遺症の残る腕の扱いにも慣れた。

半年が経ち、それなりに頼り合える知己もできた頃、必要な資金は溜まつた。

後ろ髪をひかれつつも、ユリアンはその惑星を後にして地球に向かつた。

宇宙船のスクリーンから見た初めての地球は無秩序な濁つた色調の球であつた。

シンシアさんが見たらさぞがっかりするだろうな、そう思い、ユリアンはチクリと胸の奥が痛くなつた。

ここまで旅をする要因となつたその女性の名を、ユリアンはまだ痛みなしに思い出すことができなかった。

地球でユリアンに気づく者はいなかつた。偽名を使っていたのもそうだが、髪を染めていたし、成長期のユリアンは身長も容貌も、少しずつ変わっていたからである。

ユリアンは地球教の修行に参加した。

ユリアンはすぐに食事にサイオキシンの麻薬が混ぜられていることに気づいた。

以前のユリアンであれば気づかなかっただろうが、とある撃墜王の言うところの青春の苦悩というものを、今のユリアンは十分に経験していたのだ。

ユリアンは食堂の厨房に乗り込んだ。何事かと色めき立つ料理人の前で、彼は自らの料理の腕を披露した。

次の日、ユリアンは食堂の厨房係となっていた。サイオキシンの麻薬入りの食事を食べさせられる心配はなくなった。自らの料理に薬物が加えられるのを看過するのは心が痛かったが。

ユリアンはしばらく修行を続けた。

灰色の日々が続いたが、ユリアンは黙々と修行を続けた。

ただ一つ、明確に残念に思ったのは、地球教本部の近くにかつて紅茶の名産地があった筈が、今や影も形もなくなっており、よい茶葉の入手ができないことだった。

宇宙暦799年／新帝国暦3年 1月

転機が訪れたのは、地球到着から半年以上が経った頃だった。

ユリアンのよく知る人物が地球を訪れたのである。

高い背を持つその黒人はよく目立った。

ルイ・マシユンゴ准尉である。

懐かしさに逸る気持ちを抑え、ユリアンは機会を待った。

機会はマシユンゴがすぐにつくつてくれた。彼が廊下でユリアンとすれ違い際に倒れたのだ。ユリアンは彼を医務室に連れて行くべくおぶった。マシユンゴはユリアンに話しかけた。

「お久しぶりです。ミンツ大尉」

「お久しぶり、マシユンゴ准尉。今も准尉でいいのかな？」

「ええ。それよりも早く逃げてください。ここは危険です」

「どういふことです？」

「帝国軍がここに來ます。地球教は皇帝暗殺を企み、失敗したのです。地球教本部は壊滅するでしょう」

「……マシユンゴ准尉はそれを伝えにここに來たんですか？」

「はい。ヤン提督が、私を伝言役としてここに來させてくれたのです」

ヤン・ウエンリー！

ユリアンに苦い敗戦と挫折を味あわせ、トリユーニヒトを嫌う紅茶好きのその男に、ユリアンが向ける感情ははまだ単純ではなかつた。

「ヤン提督は何と言つていたの？」

「君が地球に向かつた理由はわからないが、我々と対立する目的ではないと考えている。決して命を無駄にしないでほしい」とのことです」

「……」

「ヤン提督は、帝国の地球征伐を予想し、事前に私を地球に派遣してくれました。だから間に合ったのです。ミンツ大尉、これを」

マシユンゴは一枚の記録ディスクを取り出した。

「これは？」

「帝国の地球遠征決定に関する証拠情報です。ミンツ大尉なら有効に活用するだろうとヤン提督が」

「そうですか」

ユリアンは考えた。

マシユンゴ准尉の協力もあれば、自分一人逃げるのは容易いだろう。

ヤン・ウエンリーが自分に証拠情報を渡した意図は想像がつく。

ならば自分はさらに上を行こう。

マシユンゴの言葉はまだ続いていた。

「それと」

「何でしょう？」

「わたしをここまで運んでくれた船の船長から頼まれたんですが、ユリヤ・トリユシナという妙齢の美しい女性が来ているはずだから、見つけたら一緒に逃げてくれ、と。ご存

「知らないですか？」

「……」

ユリアンは、総大主教謁見室に乗り込んだ。

阻止しようとする警備係はマシユンゴに任せ、ユリアンは総大主教と対峙した。

謁見室には司祭、主教、地球教の幹部級がいた。

「無礼者……は軽々しく足を踏み入れてよい場所ではない！」

詰めていた老主教が非難の声を上げた。

ユリアンは慇懃に答えた。

「失礼しました。ですが、ことは緊急を要します。帝国軍が攻めてくるのです」

「馬鹿な！ド・ヴィリエはそんな報告、寄越していない！」

「ド・ヴィリエ大主教のことは直接は存じておりませんが、信をおける方なのですか？」

大主教を疑うという、地球教の根本を否定するかのような問いであったが、彼らは言葉に詰まった。彼らの多くがド・ヴィリエを信用できず距離を置いていた者達だったからだ。

ユリアンはさらに畳み掛けた。

「ここに、記録ディスクがあります。帝国から連合、同盟への軍事行動通知の記録です」

「まさか」「本当なのか」

室内は騒然となった。

「ド・ヴィリエのことはおくとして」

重々しく、それでいて年月による磨耗を感じさせる声が響いた。総大主教が初めて口を開いたのだ。

「そなたは何者だ。なぜそのような物を持っている」

「私はユリアン・ミンツです。それで納得頂けるでしょうか」

「ユリアン・ミンツ、あのトリユーニヒトの……」

その名は地球教徒の間でも知られていた。

彼らは思った。

我々の協力者であるトリユーニヒトの懐刀……ならば、帝国軍の情報を持っていることも、地球教に味方することも当然か。

だが、総大主教は納得しなかった。

「はぐらかしはやめよ。トリユーニヒトの命で来たのなら最初から堂々とやって来たはずだ。今まで隠れていたのはそなた自身の目的があるからだろう。それを申してみよ」

ユリアンはダーク・ブラウンの瞳を総大主教に向けた。

「ある地球教徒がいました。その人は私にとって姉のような存在でした。その人が言っ

たのです。人類の故郷である地球を再び美しき青き星に戻したい、と。私はその意思を継ぎに来ました」

壮年の主教がいきり立った。

「貴様、今の地球が汚いと申すか」

「少なくとも。在りし日の姿ではありません。教典の第三章にもあります。

「我ら努めん、地球の丘々に緑が溢れ、大海原が紺青に照り映えるまで。同胞はその日にこそ地球へと還らん。」

虚空の非情に倦み疲れし同胞が、闇夜の遙かに見出すは、懐かしき緑に輝く地球なり」と。地球をあるべき姿とするのは我ら地球教徒の神聖な義務であり、そうなつてこそ、人類同胞は地球に回帰するのだと考えます」

幹部達は反論できなかった。教典解釈としてそれは正しいものだったからだ。

地球教が外部工作を活発化させるにつれ、徐々に軽視され、忘れられていた地球教の教えに、ユリアンは光を当てたのだ。

ユリアンの、先人の教えを理解し、自らのものとする才は、地球教に対しても発揮されていた。

総大主教はこれに反応した。束の間、生気が戻ったようであった。

彼はユリアンの目を見つめて問うた。

「母なる地球を再び青き星に戻すというのか。それができると、そなたはそう言うのか」
ユリアンは改めて答えた。

「はい。そのために私はここに来ました」

しばらくの沈黙の後、総大主教は呟いた。

「わが生をうけし地球にいまひとたび立たせたまえ。わが目をして、青空に浮く雲に涼しき地球の緑の丘に、安らわせたまえ」

ユリアンは尋ねた。

「それは？ 浅学にして、その聖句は存じ上げません」

居並ぶ幹部は驚くことになった。

総大主教が声を出して笑ったのである。

「聖句ではない。ただの古い詩だ。宇宙開拓時代初期の、古い、古い、忘れられた詩人の作だ」

総大主教はおもむろに立ち上がった。

「ユリアン・ミンツ、そなたは地球教徒であるのだな」

「はい」

「修行歴は？」

「半年余りになります」

「よかろう、そなたを司祭に任ずる。此処にいる者達は皆ユリアン・ミンツの指示に従い、地球を脱出せよ。地球の復権を諦めてはならぬぞ」

幹部達は再度驚くことになった。未だ少年と青年の境目にいるユリアン・ミンツが、下級とはいえ地球教の幹部となつたのだ。

壮年の主教が反対の声をあげた。

「猥下、^ゴ再考を！」

「何を再考することがある。青く生命力に溢れた惑星に戻つた時にこそ、地球は自然と人類同胞の拠り所となり得る。若きユリアン・ミンツが老いて近視眼となつていた私に気づかせてくれたのだ。

司祭を任せるのに不足はないし、脱出行に關しても彼以上に経験のあるものはここにはいないだろう。それとも、そなたにはできるといふのか」

壮年の主教は何も言えなくなった。

総大主教は続けた。

「だが、私はここから離れない。私はもはや過去に生きる人間だ。二度と戻れぬかもしれぬ旅に出て、地球に還れぬのは耐えられぬ。同様の心境の信徒も少なくはなからう。そのような老齡の者達のためにも私は残ろう」

ユリアンは説得を試みた。

「猥下が行かぬとなれば信徒達が不安を抱きます。そのことにもご配慮ください」

「地球教の原典を持って行け。この老人などより、地球教にとつてよほど重要なものだ。

……それに、地球教の手は長い。帝国軍を退けることを諦めたわけではないのだ」

ユリアンは、その言が虚勢でないことを理解した。

ならば仕方がない、自らは自らのやるべきことをなすまでだ、そう、ユリアンは自分を説得した。

行動に移ろうとしたユリアンに総大主教は声をかけた。

「ユリアン・ミンツ司祭、私は残るが、私の世話をしてくれていた侍女達は連れて行ってくれ」

「承知しました」

「私はそなたに地球教の新しい可能性を見た。地球教をよろしく頼む」

「……過分なご期待ですが、努めさせて頂きます」

「うむ、では皆の者、ユリアン・ミンツ司祭と共に行け」

ユリアンは行動に移った。まずは侍女室に向かった。

そこには様々な年齢の女性がいた。共通しているのは見目が良く、そして青い瞳を持つていることだった。

一際若い少女に目が吸い寄せられた。

青紫の瞳に、薄く淹れた紅茶色の髪、世のすべてを拒絶するかのような硬い表情をした少女。ユリアンは後にその少女がカーテローゼ・フォン・クロイツェルという名だと知った。

マシユンゴ准尉が呼びかけた。

「総大主教の命により、一時避難します。慌てず指示に従ってください。信者達の避難誘導へのご協力もお願いします。それと、ユリヤ・トリユシナという女性をご存知の方はおられませんか？」

当然ながらユリヤ・トリユシナは見つからなかったものの、脱出準備は順調に進んだ。総大主教の命となれば、多くの者は従順であった。

ただ、残る者はいた。総大主教と同様に高齢の者、総大主教と共にいることを選択する者、帝国軍に地球を穢されることを自らの手で防ごうとする者達であった。

これに関してはユリアンの力ではどうしようもなかった。

脱出に関してはヤンのように独創的な手段は使わなかった。

ユリアンは、帝国軍が来る前に船団を率いて地球を脱出し、近傍の星域に身を隠した。船には、地球教所有のもの、他、タイミング悪く地球に到来していた商船が使われた。

太陽系には事前に近傍の帝国軍基地から偵察艦が派遣されていたが、これには地球教徒が潜入しており、総大主教の命によって自爆させられ、脱出の事実を悟られることは

なかった。

さらに、帝国軍に別の逃亡者の存在を疑わせぬよう、あえて自動操縦の宇宙船を数隻、帝国軍到着後に脱出させ、自爆させたのだった。

帝国軍撤退後、ユリアンはド・ヴィリエ他、数名の大主教、主教に連絡を取った。救援を求めるために。

……

総大主教は、地球教本部全体が信者達の自爆によって埋まった後もしばらくは生きていた。謁見室は旧地球統一政府のシエルターの中心にあり、特に頑丈だったのだ。

だが、いずれ電気も空気も尽き、死ぬことになるのは明らかだった。

非常灯の薄明かりの中、総大主教はひとりごちた。

「力及ばずか。ユリアン・ミンツの脱出が間に合ったのが唯一の慰めだな」

総大主教にとって意外だったのは、年少の信者も総大主教と地球に残ることを選択しようとしたことだった。総大主教は地球教の未来のため、やむなく三十歳以下の信者は地球脱出を厳命しなければならなかった。

ある二十代の司祭が泣きながら残留を希望した。

「猥下、私もお伴します」

「残念だな。三十以下の未成年を今回同行することはできない。これは大人だけの殉教だ」

そのようなことが何度か繰り返され、総大主教は、地球のことだけを考え、信徒を疎かにし、ド・ヴィリエが来てからは駒のようにさて扱っていた筈の自分が、意外なほど慕われていたことに気づいたのだった。

「総大主教様」

一人の老主教が総大主教に声を掛けた。

「そなたも生き残ったか」

「運良く、あるいは、運悪く」

「そなたとも長い付き合いだったな」

「ええ、時流に乗れず、私は結局主教で終わりましたが」

「私の権限で死ぬ前に大主教にしてやろうか」

「はは、軍人の特進のようなものですか。いや、遠慮しておきます、猊下。それより、もうすぐ空気中の残留酸素濃度が危険域に入ります。決断が必要かと」

「わかった。なるべく醜態を見せずに済む手段がよいが」

「私もそう思い、ワインと毒薬を用意しました。ブルーワインです」

「地球の色のワインか」

二人は、お互いのグラスにワインを注ぎあつた。

総大主教は感慨深げに呟いた。

「思えばワインも自由に飲んだことはなかったが」

「最後に後を任せられる人物を見つけたのですから、この時ぐらいは肩の荷を下ろして楽しんでよいでしょう」

「うむ、そうだな。では……美しく青き地球に乾杯」

「はい。美しく青き地球に乾杯」

総大主教の人生は怨嗟に満ちたものであつたが、最後に別の要素を加えることができた。

母なるものと信じた地球に抱かれながら、地球を託すに足る人間を見つけた満足を抱きながら、総大主教はその長い人生の帰着点に辿り着いた。

地球脱出組より救援要請の連絡を受けたド・ヴィリエは迷つた。

ド・ヴィリエにとつてラインハルトによる地球攻撃は想定内の範囲内だつた。彼は、地球攻撃を利用してラインハルトの統治にヒビを入れるとともに、総大主教をはじめとす

る、彼にとって不要な者達をまとめて処分するつもりだったのだから。

このため、地球に残していたのは、ド・ヴィリエが無能と見なした者達だった。地球教の真の根拠地も知らされていなかった。

だが、一応は幹部連中も含まれており、ド・ヴィリエや他の幹部との連絡手段を持っていたのだ。

ド・ヴィリエにとっては、さっさと死んで欲しい連中ではあったが、他の幹部の手前、無理はできなかった。

帝国軍に彼らの居場所をリークすることも考えたが、帝国軍が彼らを懐柔して地球教を分裂させる策謀を巡らせる可能性を考えると、それも難しかった。

結果、救援部隊が組織され、派遣された。

そして救援に向かった先で、ユリアン・ミンツを見出したのである。

ユリアン・ミンツ、同盟の年若い俊英、協力者トリユーニヒトの懐刀、デグスビイによる籠絡工作対象だった少年。

ユリアン・ミンツがフェザンから失踪したことは彼らも把握していた。

地球教としてもユリアンの才能は大いに利用すべきものであり、優先取り込み対象であつたからだ。

そのユリアンが、自ら地球に来ていたとは。

その報告を受けたド・ヴィリエは大いに警戒した。しかし脱出を主導したユリアンは今や地球教の英雄であった。司祭ですらあった。その才能も消すには惜しい。

ド・ヴィリエは迷った挙句、

結局真の根拠地に案内することに決めた。

根拠地への移動は帝国軍に見つからずに行われた。

総大主教には知らせていなかったが、地球近傍の基地司令官ヴィンクラ―中將は既にド・ヴィリエの掌中であつたから。

ド・ヴィリエはユリアン・ミンツと面談した。その意図を探るために。ユリアン・ミンツはド・ヴィリエに二つの目的を伝えた。

一つ目は、地球を青く美しい惑星に戻すこと。二つ目は、ヤン・ウエンリーへの復讐であつた。

ド・ヴィリエは、デグスビイのシンシア・クリステイーンを使った籠絡工作を思い出し、納得した。

ユリアン・ミンツの目的は、ド・ヴィリエの目的とは対立しない。人類の中心に据えるのに今の地球の見栄えが悪いのはド・ヴィリエも感じていたことだつたし、ヤン・ウエンリーはド・ヴィリエの敵でもあつた。

ユリアン・ミンツはド・ヴィリエへの協力を表明した。

地球を脱出してきた幹部や信徒の一部はド・ヴィリエに不信感を持つており、日が経つ毎にユリアン・ミンツに頼るようになっていった。ド・ヴィリエとしてはユリアン・ミンツを通じて、彼らをコントロールすることができた。

ユリアン・ミンツは半年後、反ド・ヴィリエ派の積極的賛成とド・ヴィリエの黙認により主教に位階を進めるとともに、総書記補佐となつていた。

ド・ヴィリエは総大主教を空位とした上で総書記代理から総書記となつた。

地球教は事実上、ド・ヴィリエをNo. 1、ユリアン・ミンツをNo. 2とする体制になつたのだつた。

ド・ヴィリエとしては、まず満足すべき結果であつた。

仮にユリアン・ミンツが今以上の地位を求めたとしても、年の差から禅譲という穏健な手段が取れるし、それを待てないような為人でもないだろうと考えていた。

ただ一つ、ユリアン・ミンツが主教として活動する時、自分と会う時、常に笑顔しか見たことがないことは気になつていたが。

ユリアンはメルカツツにも会つた。

ユリアンはメルカツツの前では自然と顔が引き締まつた。

ユリアンにとつてもメルカツツの戦歴は尊敬に値するものだったし、いざ戦つたとし

て勝てるかと断言できない人物の一人だった。

メルカッツは戦傷によって、杖を手放せぬ生活になっていたが、その姿からは重厚さと生真面目さが伝わってきた。

ユリアンはいたわりの言葉をかけたが、

「軍人にとって戦傷はつきもの。お互いに気遣いは無用でいきたいものだ」

と返され、恥じ入るばかりだった。

ユリアンは人工庭園の滝の前を面会場所としていた。

周囲に誰もいないことを確認して、彼はメルカッツに尋ねた。

「私は自分の目的があつてここにいますが、メルカッツ提督はそうではないと聞いております。失礼ながら心穏やかならぬ日々をお過ごしではないですか？」

「実のところ、自殺を考えたこともあつた。だが、私が死んでも家族の安全は保障されないからな。望まぬ任務に就くのは軍人としてはよくあることだ。今はそう割り切つて、
（トク）におるよ」

「しかし、連合と戦うことになれば」

「私は私の次の世代を信じている。元々長時間の指揮などできぬ体ゆえ、彼らにとって
はわしなど障害にはなるまい」

「そうですか。そうお考えならよいのです」

「ただ……」

メルカッツの表情が曇った。

「エルウィン・ヨーゼフ2世陛下にはお会いされたかな」

「いいえまだです」

「お会いすればわかるが、あの方はやはり口に出すのを憚られる人物の血を引いていると言える。怖ろしいほどの才能と、精神の苛烈さを同居させている」

「才能ですか？」

「私は軍人なので、政治については何も語れないが、戦略・戦術に関して言えばそうだ。特に戦術では、あのような才の持ち主には会ったことがないな」

「ライアル・アツシユビーよりもですか」

ユリアンはメルカッツの現役引退のきっかけとなった人物の名前を出した。

「彼のことを十分に把握できているとは言えないが、正面から戦えば、おそらくは」
「それほどですか」

「エルウィン・ヨーゼフ2世陛下は私の弟子でもある。私の戦術を、すべて吸収している。正直なところ、陛下がどこまで強くなるのか、師として教えるのが恐ろしくも楽しくなってしまう部分もあるのだ」

エルウィン・ヨーゼフ2世との面会の機会はすぐに訪れた。

ユリアンがメルカッツと会話を終えた後、本人から呼び出しがあったのだ。

エルウィン・ヨーゼフ2世はヨッフエン・フォン・レムシャイド、アルフレット・フォン・ランズベルクと共にいた。

「よく来たなユリアン・ミンツ。今の余とそう変わらぬ齡で戦場の第一線で活躍した男に一目会いたいと思っていたのだ。だが、想像していたより、柔和な顔立ちだな。懦弱というわけではないが」

そう評するエルウィン・ヨーゼフ2世は、端正な容貌でありながら、その目の力強さが柔和とは対極の印象を相手に与えていた。

「ユリアン・ミンツ、いきなりですまぬが、余と一戦交えてもらえぬか」

エルウィン・ヨーゼフ2世はユリアン・ミンツと戦術シミュレータでの対決を所望したのだった。

ユリアンは、戦術シミュレータでの対決をエンダースクールで何度も経験し、敵なしだった。仮にライアル・アッシュビーやラインハルト・フォン・ローエングラムと戦ったとしても一方的に負けを晒すことにはならないという自負もあった。

しかし……

結果はエルウィン・ヨーゼフ2世の圧勝だった。

ユリアンの自負など粉々に砕かれてしまった。

ブランクなど言い訳にはならなかった。

最初の接触で劣勢となり、それを逆転できずそのままずると負けまで引つ張り込まれたのだ。

最初は意表をつく手を使い、それによって優勢を確保した後は正統な戦術でそれを維持された。

何度かこちらにも奇策を弄してもみたが、いずれも見透かされ、かわされた。

最初の一手がなくてもエルウィン・ヨーゼフ2世の優勢勝ちになっただろう。

詭道と正道の見事な融合。とても12歳の用兵とは思えない、というのがユリアンの正直な感想であった。

メルカツの言ったことが今のユリアンにはよくわかった。

大勝したエルウィン・ヨーゼフ2世はしかし、ユリアンを褒めた。

「時間内に全滅させられなかったのはメルカツ以外では久々だ。実戦ならばおそらく取り逃がしただろうな。策にも危うく何度か引つかかりそうになった。期待通り、いや、期待以上だ。」

実のところ、所詮共和主義者の子孫など大したものではあるまいと思っていたのだが、それが偏見であることがよくわかった。どんな遺伝子プールにも優良なものはいるものだな」

「恐縮です」

ユリアンとしてはそれしか言えなかった。

「許せよ。フォークとリンチのせいだ、余の中で共和主義者の印象が悪くなっていたのだ。今後は色眼鏡では見ぬ。ユリアン・ミンツ、そなたは戦術眼だけでなく戦略眼もあると聞く。余は戦略に関してはまだまだ経験不足だ。メルカツと共にその面でも余を助けてくれ」

「仰せのままに」

これが若干一歳の少年の発する覇気だとは。そう思いながらユリアンは頭を下げた。

「なあ、レムシャイド伯、余はユリアン・ミンツに元帥号と爵位を授けようと思う。威勢だけの凡俗な輩共より、よほどユリアン・ミンツの方が、余が築く新時代の貴族に相応しい。ひとまずは伯爵でどうか」

レムシャイド伯は冷や汗を浮かべながら答えた。

「ご慧眼畏れ入るばかりですが、臣としてはいくつか提言をさせて頂きたいです」
「言ってみよ。まともな提言なら余は怒らぬぞ」

エルウィン・ヨーゼフ2世は笑みを浮かべていたが、空気には緊張が生じていた。

ユリアン・ミンツは知らなかったが、エルウィン・ヨーゼフ2世に対して返答を誤つ

たばかりに肅清対象となつた貴族も既にいるのだ。

「恐れながら。まず元帥号ですが、現在我が帝国で元帥号を持つ者はメルカッツ元帥のみ。メルカッツ元帥の声望も含め、軍を率いることに反対するものはおりません。ここでユリアン・ミンツ大尉に元帥号をお与えになれば、メルカッツ元帥と同格の存在がうまれることになり、いざという時、指揮命令系統に支障が発生する可能性があります。ミンツ大尉もそれは望まれますまい。さらには新参の者に即座に元帥号をお与えになると、陛下のご賢慮を理解せず、表面だけを見てコルネリアス元帥量産帝を想起する輩も出てくるやもしれません」

「なるほど、一理ある。残念だが、ひとまずは、そうだな、大将あたりに留めておこうか。ひとまずは、だが」

「恐れ入ります」

「伯爵号に關してはどうか」

「武勲を立てたもの、能力のあるものを新しく貴族に取り立てると布告すれば、将兵も奮い立ちましょう。臣としてもミンツ大尉は爵位に値すると考えます。

ですが、ミンツ大尉はまだ帝国軍人としてまだ武勲を上げておりません。今ここで大将に任じただけでなく、さらに爵位を与えれば、ミンツ大尉への嫉視が発生し、軍の士気への悪影響も発生する可能性があります。叙爵の時期は慎重に考えるべきかと。

急ぐ必要はありませんまい。ミンツ大将であればすぐに武勲を挙げることでしよう」

張り詰めた空気が緩んだ。エルウイン・ヨーゼフ2世は納得したようだった。

「ふむ……なるほどな。ユリアン・ミンツ、いやミンツ大将、余としては残念だがしばらくは我慢してくれ。

このようにレムシャイド伯は余に意見してくれる得難い存在なのだ。理のある意見をな」

ユリアンは答えた。

「御配慮頂いただけで十分でございませう」

ユリアンとしてはこの短時間のやり取りだけで十分に察することができた。

臣下への配慮もでき、直言を受け入れる度量もある。一方で不要と判断した臣下は容赦なく切り捨てるのだろう。

今回のこともレムシャイド伯を試しつつ、自らも貪欲に学ぼうとしている節が伺われた。

それによって臣下に威を示すことに成功している。

そして戦場ではおそらく臣下の誰よりも強い。

まさに帝王という存在の体現者が生まれつつある。

これは怪物だ。成長する怪物だ。

地球教、旧帝国残党、そしてメルカッツ、

彼らはなんとという怪物をつくり出し、成長させつつあるのか。

これからはおそらく自分も彼の成長に貢献し、彼の帝国が立てる戦略に協力することになるのだろう。自分は自らの目的のため、それを拒めない。

果たして新帝国は、そして連合は、彼に勝てるのだろうか。

ユリアンは、二人の男に思いを致さずにはいられなかった。

ヤン・ウエンリー、彼の智謀ならばこの怪物のつくる帝国を打ち破れるのではないか。

ヨブ・トリユーニヒト、彼だったならば自分などよりよほどうまく、自らの目的を達成するのではないか。

ユリアンは悪夢のようなこの世界で、いまだにもがき続けていた。

第四部 3話 黄昏に揺れる黄金獅子旗

宇宙暦801年／新帝国暦5年7月 新銀河帝国 首都オーデイン

新銀河帝国皇帝ラインハルトは死の淵にあつた。

「キルヒアイス、あとは頼んだぞ」

キルヒアイスは去来する思いを振り切り、答えた。

「お任せください。アンネローゼ様のこと、この銀河帝国のこと」

ラインハルトは頷き、アンネローゼに話しかけた。

「姉上、先立つことをお許してください。どうかキルヒアイスと幸せになつてください」

アンネローゼは目に涙を溜めていた。

「ええ、なるわ、ラインハルト。だから安心して」

ラインハルトは事前にアンネローゼ、キルヒアイスと話し合っていた。

そして、キルヒアイスを副帝に任じた上で、アンネローゼとの婚姻を発表したのだつた。

ラインハルト死後はキルヒアイスが皇帝となることが事実となっていた。

アンネローゼが女帝、キルヒアイスが女帝夫君となる案もあつたが、アンネローゼが

固辞したことからこの形となった。

キルヒアイスはローエングラム家に養子に入った形となり、正式にはジークフリード・フォン・ローエングラムとなっていた。

軍部では、ミッターマイヤー元帥を後継者に推す声もないではなかったが、大きな声にはならなかった。

貴族も、取りまとめ役であるマリンドルフ伯がいち早くキルヒアイスの副帝就任を支持したことから、表立って反対する声は少なかった。

「フロイライン・マリンドルフ」

ヒルダはアンネローゼの次にラインハルトに呼びかけられたことに動揺した。

「はい、陛下」

「姉上以外の女性で、あなたほど会話が楽しい人はいなかった。いや、女性に限らずだ。もう少し早く出会っていれば、あなたとは違う関係もあり得たのではないかと思う。……いや、益体もない話をした。瀕死の病人のたわ言と忘れてくれ」

「いいえ、陛下。いいえ、忘れませんわ」

ヒルダは、ここに至って自分の気持ちに気づいた。もう少し早く出会っていれば。いや、私が少し勇気を出していれば。涙が溢れ出ていた。

アンネローゼがヒルダを気づかずに、隅の椅子まで連れて行った。

ラインハルトはその様子を優しい顔で眺めていた。

彼はヒルダの父親にも声をかけた。

「マリーンドルフ伯、フロイラインを泣かせてしまつてすまない。あなたのおかげで私は帝国をまとめるのが随分楽になった。キルヒアイスの代でもよろしく頼む」

「ヒルダに対する長年のご厚情感謝いたします。これからも微力ながらも尽くさせて頂きます」

「ミッターマイヤー」

「はっ！」

「卿より先にロイエンタールに会つてくる。何か言つておくことはないか」

「大馬鹿野郎、と。失礼しました。ですがそうお伝えください」

「わかつた。だが卿はまだ来るなよ。卿にはキルヒアイスを支えてもらわねばならぬ」

「お任せください。このミッターマイヤー、陛下にお仕えするつもりで、キルヒアイス帝をお支え申し上げます」

「ビットェンフェルト、ワーレン、ルッツ、ミュラー、卿らも頼むぞ」

「はっ！」

諸将らは、それぞれの形で感情を表した。ビットェンフェルトは号泣し、ミュラーはただ耐え、ワーレンは目を閉じ、ルッツは義手を抑えた。

ラインハルトは全体を見渡した。

「ここに集まった皆に伝える。キルヒアイスはこの帝国を担うに足る統治者だ。俺などよりもな。で、あるからには皆のキルヒアイスへの忠誠を期待する」

「はっ！」

次の日を待たずにラインハルトは死んだ。

最後の言葉は、

「宇宙を手に入れたら……みんなで……」

であったという。

帝国の未来に希望を持つ者も、不安を抱く者も、皆無感動ではいられなかった。

好悪の感情はそれぞれながら、ラインハルトが常勝の英雄であり、偉大な統治者であったことは誰にも否定できなかったのだから。

だが、悲しみの感情には微妙な濃淡があった。ラインハルトの臨終に立ち会いながらも、名を呼ばれなかった者達は特に……

ラインハルト帝崩御後の宇宙暦801年／新帝国暦5年8月1日、副帝キルヒアイス改め、ジークフリード・フォン・ローエングラムが新銀河帝国第二代皇帝として即位した。

同時に新体制の発表もあったが、大方は予想通りの人事であった。ミッターマイヤーは元帥に昇進した。ワーレン、ルッツ、ミュラー、ビッテンフェルト、メックリンガーらは上級大将に昇進し、要職を担った。その下でベルゲングリューン、ビューロー、ジョンツァーら、旧来のキルヒアイス麾下の将が実務上の重要な役職に就いた。ヒルデガルド・フォン・マリィンドルフは引き続き新皇帝の補佐を務めた。ヒルダ自身はアンネローゼへの遠慮、先帝への義理立て等から辞退したが、アンネローゼの強い勧めによつての留任となった。

波乱の要素がないとは言えなかった。

急激な変革への不安、地球教徒弾圧や内国安全保障局の活動に象徴される恐怖政治への不安、ラインハルト帝病状態悪化による混乱から、ゴールデンバウム王朝の御代を懐かしむ声もあった。

だが、抵抗勢力となり得る門閥貴族の多くは滅ぶか貴族位を剥奪されるかしており、残る貴族に反乱を起こすような気骨のある者はいないと思われた。

だが、それは起きた。

ハルテンベルク伯カール・マチアスの反乱である。

能吏であつたエーリツヒ・フォン・ハルテンベルクが不慮の死を遂げた後、妹エリザベートの夫カール・マチアス・フォン・フォルゲンがハルテンベルク伯爵位を継いだ。

出身であつたフォルゲン伯爵家はガルミツシュ盟約軍に参加したことで取り潰しとなつたが、カール・マチアスは二度の内乱のいづれにおいてもラインハルトを支持し、取り潰しを免れていた。

とはいえ、カール・マチアス自身には軍官僚としても貴族としても才覚はなく、マリィンドルフ伯が何かと目をかけているためになんとかその地位を保っているだけだと言われていた。

そのカール・マチアスが反乱を起こしたのである。

名目はゴールデンバウム王朝の復権であつた。

自らローエングラムに与みしておきながら今更何を、と思う向きが多かつた。

カール・マチアスが反乱のために集めた戦力は千五百隻ほどと見られ、すぐに鎮圧されるものと考えられた。

ジークフリード帝は軍三役を招集した。

軍務尚書にはラムズドルフ元帥が就き、統帥本部総長にメックリンガー上級大将、宇宙艦隊司令長官にはミッターマイヤー元帥が就いていた。

会議ではヴァーゲンザイル中将が派遣されることが決定された。

艦隊規模は五千隻であつた。

不十分と思う者はいなかつた。ジークフリード帝自身、より少数の艦艇でより多数の

カストロプ公軍を鎮圧していた。

だが、ヴァーゲンザイル中将は完膚なきまでに敗北した。

逃げ延びたヴァーゲンザイルは報告した。敵は千五百隻ではなく、五千隻だったと。

帝国は騒然となった。

ハルテンベルク伯はどうやってそれだけの艦艇を集めたのか、と。

程なくハルテンベルク伯領周辺の貴族も、この反乱に参加したことがわかった。

人々は疑心暗鬼に陥った。

曰く、他にも反乱に参加する貴族がいるのではないか。

曰く、実は目をかけていたマリィンドルフ伯が黒幕なのではないか。

人々の不安はハイドリツヒ・ラングがジークフリード帝に、マリィンドルフ伯反逆の証拠なるものを持ってきたことで加速した。

ラングは、マリィンドルフ伯が娘のヒルデガルド・フォン・マリィンドルフを通じてラインハルト帝に毎日微量の毒を飲ませていたのだと主張した。ラインハルト帝に代わり、帝国を主導するために。

キルヒアイス帝は自らもヒルダを補佐官に任じて信頼しており、これを信じなかったが、マリィンドルフ伯は混乱を収めるためにヒルダとともに「憲兵隊の」捜査を受けることを表明し、自ら事実上の拘禁状態となった。

マリーンドルフ伯の意図とは反対に、この措置は不安を払拭する前に、一時的に貴族の不安を増大させることになってしまった。

ジークフリード帝は並行してトゥルナイゼン中将に一万五千隻を預け、派遣した。

流石に今度こそ鎮圧されるだろうと見られたが、その予想は再度裏切られた。

トゥルナイゼン中将は敗北し、戦死した。

トゥルナイゼン中将の部下は報告した。

敵は三万隻規模だと。

この報告は帝国を震撼させた。

先帝ラインハルト及びローエングラム朝は勝ち続けることで将兵と臣民の信頼を得て来た。それが新皇帝が即位してから立て続けに敗れたのだ。

さらには反乱勢力が一国家に匹敵する勢力を持っているなどというのは多くの者の予測を超えた事態だった。

ここで、ハルテンベルク伯領より、帝国全土に演説が行われることが布告された。

演説を行う者の名は、

エルウィン・ヨーゼフ・フォン・ゴールデンバウム

宇宙暦801年／新帝国暦5年 10月7日、帝国全土、いや、銀河全体が注目する

中、その演説は行われた。

鋭い眼光を持った、少年に成長したかつての幼帝の姿がそこにはあった。

「余はエルウイン・ヨーゼフ2世である。余はここにゴールデンバウム王朝の再興を宣言する。

だが、ゴールデンバウム王朝末期の混乱に戻るわけではない。

私は臣民のため、調和と公正に満ちた政治を目指すのだ。

余はここに告白しよう、余の父はルートヴィヒ大公ではない。

余の真の父は、ゴールデンバウム王朝の開祖、ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムである。

余はフリードリヒ4世の意思の元、大帝ルドルフの凍結精子から生まれたのだ」

「そう来たか」

ヤン・ウエンリーはヤン独立艦隊旗艦。パトロクロスにて一人呟いた。エルウイン・ヨーゼフがルドルフのクローンであると告白するのはリスクの大きな行為であった。クローンは禁忌技術であり、抵抗感を持つ者も多いのだ。

凍結精子から生まれた子供ということにすれば、そこまでの抵抗感はない。

不妊治療の一環として、軍役に就く貴族のお家存続の手段として、特に連合では相応に行われていることであった。

そして、エルウィン・ヨーゼフは幼さを残しつつも、端正さと剛毅さを併せ持つ、ルドルフの息子であると見る者に納得させる少年に成長していた。

連合がエルウィン・ヨーゼフをルドルフのクローンと主張するのも難しかった。明確な証拠はなく、さらにはそれを主張した時の効果も予測し難かったからである。

下手をすれば銀河帝国の臣民の大多数がルドルフのクローンを支持する可能性だけであるのだ。

そして、帝国臣民にとってルドルフの息子という存在は大きな意味を持つ。

演説は続いていた。

「知つての通り、我が父ルドルフは男子を残さなかつた。それがためにルドルフの目指す真の理想、公正と調和の中で臣民が平和と繁栄を謳歌する社会の実現は、道半ばで忘れ去られたのだ」

既にラインハルトの元行われた史書編纂事業でゴールデンバウム王朝の醜聞、悪行は白日のもとに晒され、その威信は損なわれた。

だが、直系の男子を名乗れば旧来のゴールデンバウム王朝のあり方を否定した上で、ルドルフの権威を利用することができるのだ。

「余は父ルドルフの真の理想を実現する。臣民に永遠なる安寧と繁栄をもたらすのだ。

臣民よ、我々はそのために二つの根源に立ち戻らねばならぬ。

一つは、我が父にして帝国の開祖、大帝ルドルフであり、もう一つが、我ら人類の故郷、地球である」

ついに来た、とヤンは思った。

「正統なる地球秩序の元、安寧と繁栄が実現した地球時代、汚辱に塗れた銀河連邦政府によつて否定されたそれこそが、ルドルフの目指した理想の社会であった」

ヤンは思索する。

たしかに人類が地球のもとに繁栄したと言える時代もあった。

だがそれは一時期だけだ。

歴史を紐解けばわかる。地球統一政府時代は他のすべての時代と同様に、失敗と成功の繰り返しであり、数々の愚行の堆積によつて終焉を迎えたのだ。

歴史を知る者は少ない。

ローエングラム朝に失望しつつあった帝国の大衆にとつて、あの少年の言は魅力的に映るだろう。

銀河連邦に失望した市民達がルドルフを支持したように。

「その理想の守護者こそが、地球教であった。だからこそ帝位篡奪者ラインハルトは地球教を弾圧し、地球の臣民を虐殺したのだ。

余はここに宣言する。

地球教を国教とする神聖銀河帝国の成立を。

余は誓う。ルドルフ大帝と地球の名のもとに臣民に永遠の安寧と繁栄をもたらすことを。

この誓いのために余はここに名を変えよう。

すなわち、ルドルフ2世・フォン・ゴールデンバウム、と。

余の想いに共感する者は余の元を集え。

余は篡奪者ジークフリードより地球を奪還し、オーデインを奪還し、帝国を奪還する。

集え臣民！

地球はわが故郷、地球をわが手に！」

エルウィン・ヨーゼフあため、ルドルフ2世の演説は帝国全土を動揺させた。

臣民の中にも、ローエングラム朝に失望し、神聖銀河帝国に期待する者が相当数現れた。

冷遇されていた貴族、旧貴族は不穏な動きを示し始めた。

演説より一週間後、レムシャイド侯爵より、

ルドルフ2世がルドルフ・フォン・ゴールデンバウムの正統な後継かつ地球に祝福された存在として神聖銀河帝国を統治することが改めて表明され、同時に神聖銀河帝国の

主要閣僚が発表された。

帝国宰相兼教部尚書 ド・ヴィリエ大主教

同じく帝国宰相 レムシャイド侯爵

国務尚書 マリーンドルフ侯爵

軍務尚書 メルカッツ元帥

財務尚書 ゲルラツハ伯爵

内務尚書 ラートブルフ男爵

司法尚書 ルーゲ伯爵

民政尚書 シャイド男爵

工部尚書 ハルテンベルク伯爵

学芸尚書 ランズベルク伯爵

宮内尚書 カルナツプ男爵

内閣書記官長 デグスビイ主教

経済顧問 ブレツェリ

メルカッツ元帥の軍務尚書就任は、連合市民を驚かせ、動揺させた。

一方、新帝国の上層部をより驚かせたのは、新帝国の閣僚であるはずのマリーンドル

フとゲルラツハが神聖銀河帝国の閣僚に名を連ねていたことだった。

マリンドルフはこの時、憲兵隊の捜査でラインハルト暗殺の証拠なしとなり、ヒルダと共に政務に復帰していた。マリンドルフは否定したし、ジークフリード帝もマリンドルフ父子を信じた。しかし疑いを深めた者も多くいた。

ゲルラツハの方は既に姿を消しており、神聖銀河帝国に実際に参加したものと思われた。

新帝国で要職を務めた者の造反により、官僚の中にも神聖銀河帝国に与する者が現れ始めた。

神聖銀河帝国はこの時既に地球を占領し、北部一帯に勢力圏を築き上げていた。これを放置すれば、さらに勢力を拡大するばかりか、他の地方にも反乱が飛び火する可能性がある。

ジークフリード帝は急ぎ皇帝親征を行おうとした。

しかしミッターマイヤーがこれを止めた。

「帝国の要たる陛下が軽々に動けば、帝国はさらに動揺します。ラインハルト帝ですら、皇帝となられてからは自重され、親征は行わなかったではありませんか。敵の情報も不明なことが多いことですし、ここは宇宙艦隊司令長官である私にお任せください」

ジークフリード帝としては、ラインハルトには親征の機会がなかっただけだと思つて

いたし、おそらくミッターマイヤーもそれはわかつていての発言だっただろう。だが、その言自体に理があることは認めざるを得なかった。

こうして、ミッターマイヤーによる帝国軍四万五千隻による討伐が計画された。

ハルテンベルク伯領に展開していると思われる敵艦隊三万隻を、オーデインを進発したミッターマイヤー率いる三万五千隻が先に攻撃・拘束し、その間に北部国境地帯に展開していたミュラー上級大将一万隻がハルテンベルク伯領まで移動し、挟撃を図る作戦であった。

しかし、その作戦を遂行することは叶わなかった。進軍中、ミッターマイヤー麾下であったグリルパルツァー中将与クナップシュタイン中將が裏切り、ミッターマイヤー本隊を攻撃したのである。

次代の双壁と言われ続けながら、ミュラーと差をつけられ、中將に留められてきた男達の不満と野心が時機を得て爆発した形である。

旗艦バイオウルフも損傷し、ミッターマイヤーも負傷したが、それでも彼は艦隊の立て直しに成功した。

その時にはグリルパルツァーとクナップシュタインは既に合計一万隻の艦隊を率いてその場を離脱していた。

バイエルライン中將らが怒りに震え、追撃を主張するも、ミッターマイヤーとしては

作戦の中止を決定せざるを得なかった。

この時、神聖銀河帝国軍は、その戦力をミュラー艦隊に向け移動させていた。ミュラーは鉄壁の名に恥じず善戦したが、三倍の敵の前に、ついには降伏を余儀なくされた。

この裏切りと敗戦が新帝国に与えた衝撃は大きかった。

卑劣な裏切りによるものとはいえ、現在の帝国軍の象徴といふべきミッターマイヤー元帥が敗れ、ミュラー上級大將が捕虜となつたのである。

北部に限らず全土で大小の反乱や離反が続発した。新体制で冷遇された貴族や将兵が。ブラウンシュヴァイク公派、リッテンハイム大公派の旧領の遺民達だ。

ジークフリード帝即位時八万隻まで回復していた帝国軍正規戦力は、ここまでの敗戦と裏切りで、近衛艦隊を含めて既に四万五千隻ほどとなつていた。

一方、神聖銀河帝国の戦力は少なくとも四万隻であつた。

新帝国が各地の反乱に対処しないといけなことを考えれば、既に神聖銀河帝国が優勢と言つてもいい状況であつた。

正面对決であればこうはならなかつただろう。

この時新帝国は、情報と策謀において神聖銀河帝国に大きく劣つていたので。

新帝国においてそれを担つていたのはラングとメックリンガー、ワーレンであつた。しかし、ラングは能力を向ける方向が自己の榮達を優先して偏つていたし、メックリン

ガー、ワーレンは能力はともかく性格が向いていなかった。

中枢を担う人材で最も適性があったのはヒルダであったかもしれないが、自らと父に降りかかった疑惑のため不用意に動けない状況となっていた。

追い詰められたジークフリード帝は、ここに至って独立諸侯連合への支援要請を決定した。

第四部 4話 Goldenbaum of the Earth

宇宙暦801年／492年 11月1日 神聖銀河帝国根拠地

ジークフリード帝が独立諸侯連合に支援要請を出した頃、神聖銀河帝国では今後の軍事作戦に関して会議が開かれていた。

神聖銀河帝国の軍組織は、ゴールデンバウム王朝のそれに則っていた。
新帝国からの離反者を加え、主要メンバーは以下の通りであった。

最高司令官（統帥本部総長兼宇宙艦隊司令長官）

ルドルフ2世・フォン・ゴールデンバウム

軍務尚書

メルカツツ元帥

軍務省次長

フレーゲル男爵

統帥本部次長

アンスバツハ中将

総参謀長

ユリアン・ミンツ大将

副参謀長

シュトライト少将

親衛隊隊長

モルト大将

憲兵総監

クラーマー上級大将

艦隊司令官

エルラツハ中将

ノルデン中将

コルプト少将

グリルパルツァー中将

クナツプシュタイン中将

ゾンバルト中将

クーリヒ中将

アンドリユー・フオーク中将

アーサー・リンチ少将

ブルガーコフ少将

基地司令官

ヴィンクラー中将

ザーム中将

他

陸戦部隊指揮官

キルドルフ准将

ヘルダー准将

他

軍情報局長

ド・ヴィリエ大主教（上級大将待遇）

軍情報局長代理

クリストフ・フォン・バーゼル中将

軍情報局長補佐

レオポルド・シューマツハ准将

オールデイス主教（准将待遇）

ベンドリング准将

帝国の内乱で行方不明となった者や、同盟、連合から失踪した者が神聖銀河帝国には多く含まれていた。

この他にもメルカツ失踪後に自ら地球教に接触し、現在はメルカツの補佐官を務めるシユナイダー大佐、オフレッツァー上級大将の部下だったゼルテ大佐、リッテンハイム大公の死後部下とともに反ローエングラム活動に身を投じたラウディッツ大佐、父親の仇を討つために志願したコンラート・フォン・モーデル少尉、ユリアンの護衛役を自認するルイ・マシユンゴ少尉等、佐官、尉官クラスにも多数の人材を擁し、しかもローエングラム朝の弱体を見て、その数は増える一方であった。

ただ、その根拠地は未だ限られたメンバーのみにしか知らされておらず、仮の拠点としてハルテンベルク伯領にその戦力の多くが集中していた。

作戦会議に出席したのは、ルドルフ2世、メルカツ、アンスバッハ、ユリアン、シユトライト、ド・ヴィリエ、バーゼル、それに純粋な文官としてレムシャイド、ブレツェリであった。

旧ゴールデンバウム朝門閥貴族・軍人、フェザーン地球教派、地球教の各派の代表者

が参加しており、事実上の意思決定機関、利害調整機関の役割も果たしていた。

この少人数の会議での決定事項が、全体の既定路線となるのだ。

ルドルフ2世が、まず諸将を褒めた。

「皆、ここまですぐよくやつてくれた。特にミンツ大将、卿の読み通りになったな」

「勿体無いお言葉。ですが、私は皆様の案にさらに一筆加えただけに過ぎません。何より、ここまですぐよく運んだのは運がよかったからに過ぎません。問題はここからです」
前半は気配りが多分に入った言葉だったが、後半はまさしくユリアンの本心だった。策がうまくハマり過ぎたのだった。

ハルテンベルク伯領で反乱を起こし、そこを起点として神聖銀河帝国の成立を宣言することはド・ヴィリエが事前に準備していたことだった。

しかし、新帝国が神聖銀河帝国の戦力を把握していないことを利用して、帝国の戦力を最大限削るとともに、ルドルフ2世に貴重な実戦経験を積ませることを画策したのはユリアンだった。

また、事前にバーゼルらと接触して内応していたグリルパルツアーとクナツプシュタインに関して、その裏切りのタイミングをコントロールしてミッターマイヤーの作戦を頓挫させたのもユリアンだった。

これにレムシャイド侯が実施したゲルラツハ伯爵の内応工作や、ド・ヴィリエらによ

るラングへの誘導が加わり、今の状況が生み出されていた。

ユリアンとしては、何らかの阻止工作が行われることを想定していたのだが、全てうまくいってしまったのだ。

ユリアンの想定以上に帝国の諜報能力は低下していた。

二度の内乱によって帝国の諜報組織は一度崩壊した。

ワーレンが憲兵総監になり、ラングが再任用されるなど立て直しの努力も行われてはいたが、それ以上に現神聖銀河帝国勢力の浸透が激しかった。

さらにはラインハルトの体調悪化、後継者のキルヒアイスの性格からこの問題は放置されていた。

帝国にとつてはそのツケを払う形になったわけである。

また、ユリアンは連合、特に悪名高いオーベルシュタイン率いる情報局の介入を想定していたのだが、それも行われなかった。

新銀河帝国が弱体化した上で、内乱への介入の口実を得たこの状況は、連合にとつて好都合でもあった。

それを考えると、オーベルシュタインに泳がされた気もしてくるユリアンであった。

新銀河帝国と神聖銀河帝国だけの争いであれば、帝国を南北に分割する形での講和が早期に成立する可能性もあったはずだった。

だかもはやこの戦いは、それでは終わらないだろう。

ド・ヴィリエの考えも同様であったようだ。

「その通り。ここまでは上手くいったが、ここからが問題だろう。うまく行き過ぎたせいで、かえって連合の介入を引き起こすことになりそうだ。まあ、同盟で事が起きれば連合も我らだけに集中できぬとはいえ、脅威は脅威。これにどう対処すべきか」

レムシャイド侯が意見を述べた。

「連合と偽帝国は同盟を結んでいるわけではない。偽帝国を上回る利を示すことができれば連合と組むことも可能ではないか」

新銀河帝国を偽帝国と呼びつつ、自由惑星同盟、独立諸侯連合を現実に即して独立勢力として認めるのが、神聖銀河帝国の方針であった。

ユリアンがこれに応じた。

「我々が提供でき、連合が利だと感じるものは何でしょうか？メルカッツ元帥はいかが思われますか？」

「うむ。北部旧連合領は戦略上、現時点で連合に回収の意志はない。となれば、短期的には、南部における帝国領の分割、それと二国間の不戦条約でしような。しかし……」

ユリアンがメルカッツの言葉を継いだ。

「連合は神聖銀河帝国を信用できない」

メルカッツは頷いた。

ルドルフ2世が問いただした。

「どういふことか？余は自分から約束を違うつもりはないぞ。不戦条約も独立諸侯連合が臣下の礼を取るなら検討の余地はあるだろう」

メルカッツが答えた。

「第一に、地球教というものが連合にとつては信用し難いのです。第二に、それをおいたとしても、ゴールデンバウム王朝の後継国家を任ずる存在を連合は信用し難いのです。連合の諸侯と民は、ゴールデンバウム王朝、特にその権威を嵩にきた門閥貴族への敵対心と恨みを募らせて来ました。度々侵入してきては暴虐の限りを尽くす存在、高貴なる者の義務などないかのように振る舞う存在。神聖銀河帝国がそのような存在を保護する限り、信用などできない」

メルカッツの積年の想いのこもった言葉にその場が凍った。

ルドルフ2世もユリアンも一瞬言葉を挟むことができなかつた。

それだけに、メルカッツの言うことが事実だと居並ぶ者達に実感させた。

少してメルカッツが言葉を継いだ。

「失礼。年甲斐もなく力が入り過ぎたようです。それに一般論としてはお話しいした通りですが、個別の方々まで信用できないというわけではないのです。誤解なきようお願いし

たい」

後半は、顔色を失っていたレムシャイド侯に向けての言葉だった。

ルドルフ2世が口を開いた。

「メルカッツ元帥、余は欲望に任せて民に狼藉を働く輩を貴族と認めるつもりはないぞ」
その言葉は事実だった。

実際、地球教徒の女性に乱暴を働いたとある貴族士官と、それを見ていながら放置したヒルデスハイム伯を、ルドルフ2世は自らの手で処刑していたのだ。

この一件は、ルドルフ2世の大帝もかくやという苛烈な一面を知らしめたし、門閥貴族もその行動を多少は律するようになった。

「存じております。ですが、連合の民がそれを理解するには長い時間が必要でしょうな」
ユリアンは補足した。

「一定の領土割譲は、偽帝国も認めるところでしょうし、不戦条約の締結についても偽帝国の方を連合は信用するでしょう。それに……連合はおそらくメルカッツ元帥の帰還を求めて来ます」

「そうか、それはそれで困るな。……余は正直なところ連合の諸侯達を買っておつただがな。協調出来ぬとあらば仕方あるまい」

だがレムシャイド侯はあえて連合への特使の派遣を提案した。

「こちらから選択肢を狭める必要もないでしょう。交渉の姿勢を見せておくこと自体は、今後の布石となり得るか」と

ルドルフ2世はこれに賛成し、人選はレムシャイド侯に任されることになった。メルカッツが議論を進めた。

「さて、ひとまずは連合が敵となる前提で戦略を考える必要があると思いますが、その場合、偽帝国と連合の二勢力を相手に我々はどうか戦うべきでしょうか」

シユトライトが補足した。

「単純な戦力は我が軍の二倍になります。策なしで挑んだ場合、まず勝利は難しくなるでしょう」

ルドルフ2世が提案した。

「二勢力が合流する前に各個撃破すべきだろうな。幸い我らの根拠地は知られておらぬ。連合が侵攻してきても侵攻先には迷うことだろう。つまり、時間が稼げる。」

その間、先にオーデインを落とすことも選択肢として考えられると思うが」

メルカッツはこれに賛成しなかった。

「各個撃破という方針自体は間違っておらぬと思いますが、オーデインを戦場とすることは賛成しかねます。敵に有利となり過ぎる」

ルドルフ2世はメルカッツに説明を促した。

「今まで我々は敵が首都星オーディンをがら空きにできないことを利用して、戦力の各個撃破を図つて来ました。オーディンあるいはその近郊を戦場とするということは、敵に戦力を集中させてしまうことを意味します。さらにはジークフリード帝、ミッターマイヤー、ワールン、ルッツ、ビッテンフェルトら有能な将帥全員と同時に戦うことにもなりません。負けぬとしても、戦いの長期化は避けられません。その間に侵攻して来た連合によつて挟撃を受けることになるでしょう」

「では、オーディンまでは攻め込まず、先に漸減を図るとして、偽帝国、連合それぞれの戦力はどの程度となるか」

ユリアンが答えた。

「偽帝国が三万隻、連合は四万隻前後というところですね」

「対するに我らは現時点で五万隻強。今のところ根拠地を攻撃される心配がないゆえ、全軍での出撃が可能だが……シユトライトの申す通り、単純に七万隻を相手にするのは流石に博打に過ぎる」

神聖銀河帝国に鞍替えする者はその後も増え、今や戦力は五万隻を超えるまでになつていた。

シユトライトが進言した。

「やはり「アポローン」システムを使うべきかと」

だがルドルフ2世は洩った。ハードウェアに頼る戦いは、ルドルフ2世の好みではなかったのだ。

「あれに頼るのはよいが、それでももう少し工夫はできないものか。やはり敵がはじめから分断されている状況は活用すべきだろう」

ユリアンが少し考え込んだ末に提案した。

「ここはフォーク中将に活躍してもらいましょう」

ルドルフ2世は耳を疑った。

「アンドリユー・フォーク!?……いや、臣下を無闇に悪く言うつもりはないが、この戦いで彼が活躍できる余地があるのか?」

アンドリユー・フォークは同盟の地球教徒が精神病院から誘拐、保護していたのだが、その不安定さからいささか持て余されていた。それをルドルフ2世はフォークがライオンハルトに高く評価されていたという噂を聞き、これを呼び寄せたのだが、実態を見て失望してしまっていたのだ。

「偽帝ジークフリードに対しては大いに活躍できましょう」

ユリアンは、詳しく説明した。

ルドルフ2世は、フォークの効用には最後まで半信半疑ではあったが、アン斯巴ツハヤド・ヴィリエ、メルカツツらが賛同したこと、仮に策が失敗しても致命的な事態には

ならないことから最終的にはこれを了承した。

最後にルドルフ2世がド・ヴイリエに確認した。

「同盟の方は問題ないな」

ド・ヴイリエはちらとユリアンを見つつ答えた。

「万事順調です。トリューニヒト派も協力の姿勢を示しており、この二週間以内には事が起こせるかと。気がかりなのはトリューニヒト氏本人の居場所がわからないことです。ミントツ主教、何か聞いてないかね？」

ユリアンはこれに笑顔で答えた。

「いいえ。残念ながらトリューニヒト氏とは数年来連絡を取っておりませんので。しかしトリューニヒト氏は一度襲撃を受けていますから、何かと用心深くもなるだろうとは思いますが」

会議終了後、ユリアンは自己嫌悪に陥っていた。無論サボタージユするつもりはなかったがそれにしても積極的に提案し過ぎた、と。ユリアンの目的にとって、神聖銀河帝国の勝利は必要ではなかった。

にも関わらず、戦略のグランドデザインをユリアンが提案することになってしまった。

どうやらあの少年皇帝にうまく乗せられてしまったようだ。

立案した戦略のペテンふりと、戦略を考えた後に自己嫌悪に陥る様子。ユリアンは気づいていないが、ヤンに近しい者、アッテンボローなどが見ればこう言っただろう。ペテン師の後継者がここにいる、と。

ユリアンは思う。

ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムもこのように他人の意見を多く容れる人物だったのだろうか。ルドルフにも連邦議会での協力者や頼れる臣下はいたようだから、否定はできない。それでもここまで柔軟ではなかったのではないか。

リヒテンラーデ公、アンスバツハ、シユーマツハ准将、ランズベルク伯、ド・ヴィリエ、レムシャイド侯、メルカッツ……

思想や方向性はともかく、有能な人物に囲まれて育ったことが影響を与えたのだろう。

ルドルフ2世は個人として才を持つだけでなく、確実に将に将たる人物に育っている。

ユリアンは、そのような人物の下で能力を発揮することに喜びを見出しつつある自分に戸惑いを隠せないでいた。

「ミンツ主教」

そのユリアンに声をかけてきた者がいた。ド・ヴィリエだった。

ユリアンは笑顔を向けた。

「これは大主教殿下。地球の恩寵のあらんことを」

ド・ヴィリエは聖句を無視した。

「我らの間でそのような挨拶は無用だ。ミンツ主教、そなたは随分とルドルフ2世陛下に肩入れしているようだから一言クギを刺しに来たのだ」

ユリアンは思わず聞き返した。

「クギ、ですか？ 臣下が忠誠を尽くすのは当たり前ではありませんか」

「我らは臣下である前に地球教徒だ。いや、もつと正直に言おう。地球の名の下に宇宙を手に入れようとする者だ。あの少年皇帝など手駒に過ぎぬ」

それはユリアンも知っていることではあった。だが一言言い返したくなかった。

「大主教のお考えは存じております。しかし私の見るところルドルフ2世陛下はまさしく帝王の器に思えます。要職をゴールデンバウム王朝の貴族が占めておりますし、このまま行けば地球教が彼に飲み込まれることになりはしませんか？」

「その下で働く者たちは地球教徒だ。すべては地球教がその首を押さえている。少年皇帝も例外ではない」

ユリアンは聞き咎めた。

「どういうことですか？」

ド・ヴィリエは一見関係ない話を始めた。

「かつての地球統一政府、いや、銀河連邦時代も含めて、今の文明が劣っているものか一つ明確にある。何かわかるか？」

突然の質問にユリアンは混乱しながらも答えた。

「何でしょうか？人口のコントロールでしょうか？」

ユリアンの答えにド・ヴィリエは少し感心した。

「ふむ……それも確かに一つではあるな。だが正解は、生命科学だ」

言われてみればその通りかもしれないとユリアンは思った。行き過ぎた遺伝子工学の濫用は銀河連邦時代の悪徳の典型としてルドルフに厳しく弾圧された。劣悪遺伝子排除法は、自然に生じたものだけを排除の目的にしていたわけではないのだ。人類を種として弱めるがごとき要素の排除……ルドルフからすれば、遺伝子工学は人類に種としてのタガを外れさせ、ゆくゆくは消滅させる危険性を持つものに映ったのだ。

これにより、生命科学全般の発展が阻害され、その知識は忘れ去られたまま今日に至るのだ。

「生命科学は衰退した。侵すべからざる禁忌となった。ただ一つ、歴史から無視された地球はそれを意図的に保持した。だからこそ、フェザーンはアッシュビークローン、ル

ドルフクロオンを生み出せたのだ」

「大主教猊下、話が見えませんか」

「まあ聴け。かつて生命科学が可能とした技術にゲノム編集というものがあつた。日々摂取するだけで徐々に体中の特定の遺伝子を改変していく薬物。それがゲノム編集技術の到達点だつた。サイオキシン麻薬もその亜種だ。使われている技術は大分下等だかな」

ユリアンにはまだ話の行き着く先がわからなかつた。

話は続いていた。

「この薬物は知識のないものにはまず検出は不可能だ。そしてこれを日常的に食物や飲み物などから摂取していけば、いずれ生殖細胞を含めて体中の特定の遺伝子が改変されるのだ。……ある専制君主の家系に遺伝子疾患を入れたり、ある青年を若くして死ぬ不治の病としたりな」

ユリアンは衝撃を受けた。

「それはつまり、ラインハルト帝も……」

ド・ヴィリエは笑つた。

「想像に任せる。だが、少年皇帝はあらゆる意味で我らの掌中にある。役に立つうちは役立たせ、いずれば、な。……だからミンツ主教も忠誠の対象をゆめゆめ間違えないこ

とだ」

ド・ヴィリエは去って行った。

ユリアンはこの悪夢の世界の闇が、どこまでも深いことを知った。

数日後、独立諸侯連合への特使としてレムシャイド侯の補佐官の一人、ウド・デイター・フンメルが派遣された。

二週間後の11月15日、自由惑星同盟で事が起こった。自由惑星同盟軍内の主戦派によるクーデターであった。

第四部 5話 波及する動乱

宇宙暦801年 11月16日 独立諸侯連合 キツシンゲン星域

盟主ウオーリック伯は、銀河帝国と自由惑星同盟における事態への対応のため、会議を招集した。

参加者は、以下のメンバーであった。

連合盟主ウオーリック伯爵

外務卿クレーフェ伯爵

軍務卿ディレンブルク男爵

統帥本部総長アーベント・フォン・クラインゲルト元帥

宇宙艦隊司令長官クロプシュトック元帥

宇宙艦隊総参謀長兼第一特務艦隊司令官ヤン・ウエンリー元帥

軍情報局局长オーベルシュタイン中将

この数年で連合の中枢メンバー、艦隊司令官もいくらか交代があった。

ウオーリック伯は、参加者に対して会議の目的を説明した。

「皆知つての通り、銀河帝国の内乱に関して、新銀河帝国、神聖銀河帝国の双方より連合

に対して、協力要請があった。両国の特使がキツシンゲンに来ている。

また、昨日の話だが、自由惑星同盟においてもクーデターが起きたようだ。未だ決着はついておらず、全土が混乱状態に陥っていることは確かだ。この二つの事態への対応を皆と協議したい」

オーベルシュタインが同盟のクーデターに関して説明を加えた。

それは以下の通りであった。

・首都ハイネセンでクーデター勢力の決起があったが、同盟の首脳陣は無事であること。一方で決起勢力も鎮圧されていないこと。

・正規艦隊の駐留する複数の地方基地がクーデター勢力に占拠され、身動きが取れない状況となっていること。

・二個艦隊がクーデター勢力に与したこと。

・クーデター勢力の首班がロボス退役元帥であり、挙国一致救国会議を名乗っていること。

・地球教が関与していることがほぼ確実なこと

・旧トリューニヒト派の参加からトリューニヒトが背後で関与している可能性が高いこと

クラインゲルト元帥はオーベルシュタインに確認した。

「念のため確認したいが、フェザーンは無事なのだな」

「はい、先日のボルテック自治領主死亡後は混乱が見られましたが、ケッセルリンク補佐官が暫定領主に就き、現在は安定を取り戻しています」

「連合内は？」

「連合派地球教徒残党と協力して、領内のそれ以外の地球教徒の一掃、隔離に成功しております。また、バルトバツフェル伯のご子息が不穏な動きをしていた件、既に本人及びその取り巻きを拘束しております」

ウオーリック伯が話を一度まとめた。

「連合にとって最悪の事態は、連合の周囲がすべて地球教勢力となることだ。連合は狭み撃ちされることになるだろう。」

状況によっては同盟への介入も考える必要がある。その前提で帝国への介入方針を考えてほしい」

ヤンがウオーリックに確認した。

「その話だと、新帝国側に立つての介入が既定路線になるように思いますが、それでよいのですか？」

「無論だ。神聖銀河帝国は、帝国南部の分割譲渡、北部旧連合領への通行権、連合が臣下の礼をとる前提での不戦条約の締結を持ち出している。条件自体は悪くないが、それを

出して来た神聖銀河帝国という存在自体が信用できない以上、まず無理だ。そもそもメルカツ元帥を拉致しておいて何を言うかという話だ」

オーベルシュタインも尋ねた。

「あえて神聖銀河帝国に味方をするふりをして、両者を争わせ、両者が疲れたところで両国とも滅ぼすということも考えられますが」

「連合には無政府状態に陥った帝国領の面倒を見る余裕はないし、その状態で地球教に乗っ取られた同盟に攻められれば滅亡は必至だろう。第一、相争わせるつもりなら劣勢な新銀河帝国の味方をするのが普通だ」

「御意……」

ウオーリック伯は逆にオーベルシュタインに訊いた。

「オーベルシュタイン中将、卿はこれまであえて新銀河帝国を助けず、事態を放置してきたな」

ウオーリック伯は何か言いかけたオーベルシュタインを手で制した。

「いや、いいんだ。わかってて俺も放置していた。俺も卿と同じ気持ちだ。神聖銀河帝国など滅ぼしてやりたい。介入の口実が得られるならその程度の不作為、容認するさ」

外務卿クレーフェ伯がウオーリック伯に尋ねた。

「では、神聖銀河帝国の要請は断り、新銀河帝国を支援するということでよろしいです

な。支援の条件はいかがしましょう。係争地の割譲と南部諸邦の連合への合流容認は求めてよいと思いますが」

非公式ながら、南部を中心に何人かの貴族が連合への鞍替えを希望して既に接触して来ているのだった。

ウオーリック伯は答えた。

「そうだな。ひとまずは、それでよかろう。それと、神聖銀河帝国の特使は丁重にもてなして引き止めておいてくれ。信用できないとは言ったが、戦況次第では何らかの妥協が必要となる可能性はある。交渉の窓口は保持しておくべきだろう」

議論は派遣艦隊の規模と司令官に移った。

クロプシュトック元帥が口火を切った。

「複数艦隊規模になるだろうが、総指揮はヤン提督を推薦したい。同盟情勢が未確定なこの情勢で私が連合を離れられぬというのものもあるが、この介入作戦には臨機の才が求められる。私などより彼が向いているだろう」

ヤンが何かを言う前にアーベントもこれに賛成した。

ウオーリック伯は笑った。

「統帥本部総長と宇宙艦隊司令長官が揃って推薦するならヤン提督に行って頂くということですよ。次に規模だが、連合の正規戦力は現在六万隻。これと別にフェザー

ン艦隊一萬隻。同盟への介入も考えると三万五千隻ほどがひとまずは派遣可能な戦力ということになるか。オーベルシュタイン中将、敵の戦力規模は？」

「未だ確定できないことを予めことわっておきますが、新銀河帝国からの離反者も加わり、おそらくは五万隻程度には膨れ上がっているかと」

アーベントが、意見を述べた。

「同盟への介入を行なう場合は急ぎ呼び戻すことにすれば四万隻までは派遣可能かと思えます。また、予備戦力の再稼働も進めましょう」

クロプシュトックが派遣艦隊案を出した。

「ではヤン提督の第一特務艦隊に、フォイエルバッハ大将、シュタインメッツ大将、シャウディン中将の艦隊を加えた四万隻でいかがか」

ウオーリック伯はこれに同意した。

「これでも数で劣る以上、新銀河帝国軍との連携は欠かせないな。よろしく頼む、ヤン提督」

「承知しました」

決まってしまった以上ヤンも受けざるを得なかった。

ところで、とディレンブルク男爵が注意を喚起した。

「同盟への介入を行なう場合は、誰が行くのです。その人選には細心の注意が必要かと」

思いますが」

クレーフエ伯も同意した。

「同盟は民意で動く国。連合軍が自国に侵入したとなれば、世論がかえってクーデター勢力に傾く恐れがあります」

ウオーリック伯がこれに答えた。

「うってつけの人物がいるじゃないか。大将待遇で未だ客員提督のまま。同盟軍をやめたわけではないのも都合だろう。俺が何のために彼をこれまで連合に引き止めていたと思っているんだ。ドサ回りさせるためではないぞ」

皆、納得した。

最後にウオーリック伯が全員に語った。

「今回の戦いを乗り切れれば、連合の、新帝国、同盟に対する立場は以前より強くなるだろう。私は、これを契機に新帝国と同盟に新たな国際機関の設置を提言したい。戦争によらずに各国の利害を調整し、銀河の秩序を維持するための機関を」

それは、ヤンがウオーリック伯とこの数年のうちに話し合ってきたことだった。

かつて人類が地球に留まっていた時代にも、同様の組織があった。大国の思惑に左右される側面はあったが、それがうまく機能している間は、大国間の戦争は起こらなかった。

ヤンとウオーリック伯はこれを銀河規模で再現するつもりなのだ。

地球とゴールデンバウムの亡霊を生贄にして、銀河により長い期間の平和をもたらす。それこそが狙いだった。

これはこれで血塗られた道ではあったが、ヤンは歩みを進める覚悟を決めていた。

宇宙暦801年 11月17日 自由惑星同盟 ハイネセン

発生したクーデターにおいて、最高評議会議長ジョアン・レベロをはじめとする主要閣僚は、宇宙艦隊司令長官ビュコック大将に保護されていた。

レベロはビュコックに情勢について問い質した。

本来は国防委員長も同席して良いはずであったが、この事態に自失状態となっており、レベロは一人でこの事態に向き合えないといけない状態となっていた。

ビュコックは副官のスーン・スールズカリッター中佐に説明をさせた。

「クブルスリー本部長は、クーデター派に捕まりました。同盟軍の正規艦隊のうち、稼働状態にあった七個艦隊のうち、四個艦隊が駐留基地ごとクーデター勢力に押さえられ司令官が拘束されました。また、残ったうちの二個艦隊がクーデターに与しました。今我々の手元にある正規軍戦力はハイネセンの第一艦隊のみです。これがアルテミスの首飾りとともに我々の手に残ったことが救いですな。また、グリーンヒル査閲部長も感

星ウルヴァシーに査閲に向かったまま消息を絶っています」

レベロ議長がビュコックを問い詰めた。

「ロボス退役元帥がクーデターの首班となるとは。軍はこのような事態になる前に何故対処できなかったのだね」

ビュコックは冷静に答えた。

「ご批判は甘んじて受け止めます。実はかのヤン・ウエンリーより地球教とクーデター勢力の存在への注意喚起があり、事前に調査は進めていたのですが、なかなか証拠が出てこなかったのです。まさか、情報部長までがクーデター派だったとは」

チユン・ウー・チエン中將が呑気な声を出した。

この土壇場に過労で倒れたオスマン中將の後任として総參謀長代理となっていた。

「おそらくは、軍縮への不満を地球教にうまく使われた形ですな」

もしかしたら軍を後回しにしてきたレベロへの批判が含まれていたのかもしれないが、口調からは何とも判断できなかった。

ビュコックがレベロに逆に問いかけた。

「最高裁長官は、未だに声明を出してくれんですか」

レベロの声にさらに苦いものが混ざった。

「あの男、事は重大で慎重を期する、国民の総意がわからなければ動けない、としか言わ

んだ。司法の長が聞いて呆れる。元々生きているのかどうかもわからん男だとは思っていたし、彼がまともに仕事を果たさぬから増長する輩が増えたのだ。本来私が働かかける筋の事ではないとはいえ、ここでの不作為は国家と民主主義への裏切りだぞ」
あるいは、とレベロは続けた。

「あの男、元はトリユーニヒトの繋がりが深くてな。今も切れていないのかもしれない」
ビュコックも思い当たることがあった。

「クーデター派の将校にもトリユーニヒト氏と繋がりの深かった者の名が何人もいますな。彼がこのクーデターの背後にいるのかもしれないな」

レベロは嘆息した。

「そうかもしれないと考えている。民主主義を捨てるほど腐った男だとは思いたくなくかつたが」

レベロの雰囲気には非生産的なものを感じたビュコックが話を戻した。

「間近に迫る危機への対処について話しましょう。ハイネセンはいまだクーデター勢力を鎮圧できておらぬとはいえ、少なくとも我々が敵の手に落ちる可能性は低い状態です。問題は、ハイネセンの外です。ハイネセンはその消費を自星系で賄い切れず、多くの生活に必要な物資を外部に頼っています。今その星間航路が使えなくなっているのです」

星間警備艦隊の約三分の一がクーデター勢力に与しただけでなく、宇宙海賊の跋扈も激しくなっており、ハイネセンへの星間航路は封鎖状態となっていた。あるいは海賊すらも地球教の手のうちかもしれない。

「このままではハイネセン市民の生活は破綻し、餓死者も出る恐れがあります」
レベロは尋ねた。

「我々はハイネセン市民を人質に取られた状態というわけか。保つてどのくらいだろうか」

「一ヶ月でしような」

「その間にクーデターを鎮圧できる目算はあるのか」

「残念ながらありません。少なくとも独力では」

「独力では？」

ビュコックが身を乗り出した。

「だからレベロ議長にお願いしたいのです」

「何を？」

「独立諸侯連合への支援要請を、です」

「国内のクーデターに外部勢力を関わらせるのか!？」

チュン・ウー・チェンがやけにのんびりした声で答えた。

「私だって情けなく思います。ですがやはりパンは体面より大事です。新銀河帝国のジークフリード帝も決断しましたしね。それに同盟が体面を保つのに丁度いい人材もいるではないですか」

レベロは尋ねた。

「誰だ？」

「ライアル・アツシユビー提督ですよ。彼は形式上は未だ同盟軍人です。彼を戻してくれるよう、連合に掛け合うのです。相応の艦隊とセットでね」

レベロの顔に生気が戻った。

レベロはその日のうちに連合に対してライアル・アツシユビー提督の帰還要請を行った。

同日、フェザーン自治領 首都星フェザーン

暫定自治領主となったケツセルリンクは、同盟のクーデターと帝国の内乱の情報を補佐官より聞き、思案していた。

状況次第では身の振り方を考える必要があるかもしれない。フェザーンも、俺自身も……

ケツセルリンクとしては連合を必要もなく裏切る気もなかったし、そう望んでもいな

かった。

だが状況によっては地球教に与する事も考えるべきであった。

ルビンスキーのように平時に乱を起こすつもりはないが、必要であるならばあらゆる方策を取って乗り切るだろう。

その自信と覚悟がケツセルリンクにはあった。

第四部 6話 行く者来る者

帝国領への出征を控えたある日、ヤン艦隊の幕僚達は少し浮き足立っていた。戦いが近いからではなかった。

兵士達が噂していた。

「ラウエ大佐の後任が今日来られるそうだ」

「そもそもなんでラウエ大佐は辞めたんだ？ヤン提督と喧嘩したのか？」

「いや、そういうわけではなくて実は……」

「へえ！」

「で、後任の士官なんだがこれがまた……」

ラウエ大佐の後任となる士官の凜とした声が、司令官室に響いた。

「マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマー大尉、着任しました」

金髪の、凜々しいという表現のよく似合う年少の女性士官がそこにはいた。

挨拶を受けたヤンの目は人事ファイルと本人とを何度も行ったり来たりしていた。

……たしかに後任の副官が欲しいと言ったが、人事担当者は何か勘違いしたのだから

うか。女性で貴族令嬢で妙齡の副官の後任が欲しいという意味ではなかったのだが。

とはいいえ、そんなことは口に出せず、ヤンは型通りの質問をしてお茶を濁すことにした。

「ええと、ヘルクスハイマー大尉。幼年学校卒業後、准尉として任官、数年のうちに大尉まで昇進。立派な経歴だ。しかし、何でまたこんな愚連隊のような艦隊を希望したんだい?」

「当代随一の用兵家であるヤン提督の元でぜひ学ばせて頂きたいと思つたからです。

……それに」

「それに?」

マルガレータはクスツと笑つた。

「お世話になつたラウエ大佐からお願ひされたんです。自分の代わりにヤン提督のことを頼む、と」

ヤンは思わず頭をかいた。

「参つたなあ」

マルガレータはあらためてヤンに敬礼した。

「マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマー、非才の身ながら、ヘルクスハイマーの家名を汚さぬよう精一杯努めますのでお見捨てなきようお願いいたします」

慌ててヤンも敬礼を返した。

「こちらこそよろしく頼む」

マルガレータ退出後、しばらくしてポプランとアッテンボローが連れ立って司令官室に入ってきた。

ポプランが軽口を叩いた。

「ラウエ大佐の後任もまた、えらい美人ですね。これもヤン提督のマジックですか？」

「ポプラン中佐、何を言いたいのかよくわからないが、彼女の方からの希望だ」

「そうなんですか。ヤン提督は何もしなくても美女が寄ってきますね」

アッテンボローがポプランをからかった。

「なんだ、ポプラン中佐、お前さん、ひがんでいるのか。それならヘルクスハイマー大尉を狙ったらいじやないか」

「うーん。19歳、守備範囲ではあるんですが。伯爵令嬢となるとね。ヤン提督の二の舞にはなりたくないですよ」

「あれだけ美人なのに、お前さんにも爵位の壁は厚いか」

「アッテンボロー中将こそどうなんです？これを機に独身主義を返上しては？」

アッテンボローは考え込んだ。半ばまで本気にも思えたが、最終的にその首は横に振られた。

「いや、やめておくさ。俺も先輩のようにはなりたくない」

「そんなことを言っていると、またヤン提督に搔つ攫われますよ」

アッテンボローは何故か焦って応えた。

「何だ、またって!？」

そんな騒ぎを聞き流しながらヤンは、六ヶ月前に姿を消した、この騒ぎの中心にいてもおかしくないはずの男のことに思いを致していた。

「しばらく艦隊を離れたい?」

ヤンは思わずその男、シエーンコップに聞き返した。

「ええ」

「何があつたんだ?この艦隊が嫌になつたのか?」

シエーンコップのことは最近噂になつていてヤンとしても心配していた。口数が減つたとか、女性の部屋から出勤する回数が半分になつたとか、ポプランの軽口に反論しなかつたとか……

「まさか。ここより居心地のいい場所はなかなかありませんよ。問題は私の方にあります」

「聞かせてくれ」

「……娘がいたのです」

「娘!？」

ヤンは思わず呆然とした。

奇襲に成功したシェーンコップは、しかしそれを誇る様子ではなかった。

「母が死んだと、それだけの内容の手紙が来ました。その時は、娘がいたのか、養育費もかからない出来の良い娘だなどと、その程度にしか考えていなかったのですが、実は地球教徒と関わりを持ってしまっていたようなのです」

「地球教徒!？」

予想外にも出現したその単語にヤンは思わず声を上げた。

「地球教徒に迫られて、娘は困っていたようです。しかし娘は私にはなく、メルカッツ元帥の娘さんに相談をした。その結果かどうかはわからぬのですが、彼女はメルカッツ元帥の誘拐に巻き込まれたようです」

「そんなことがあったのか。もっと早く言ってくれていれば……」

「事態に気づいたのがごく最近のことなのです。娘のことなど全然気にしていなかった。笑ってください。そのツケがこれですよ」

その顔はいつもの皮肉げな男のものではなかった。

「遅まきながらも事態に気づいた娘の父親は、これから犯人の隠れ家に単身乗り込もう

と、そう考えているのですよ」

「無茶をするな。地球教の根拠地はまだ判明していないんだ。今オーベルシュタイン中将も調べているところだ」

「待てませんな」

「何?! 一人で何ができる?」

「できるできないではなく、これははじめの問題です。いや、そうですね、オーベルシュタイン中将には連絡を取りましょうか。シエーンコップが潜入工員になる、と」

ヤンはもう何も言えなくなつた。この男は覚悟を決めたのだと。

だからヤンは尋ねた。

「娘さんの名前と、母親の名前を教えてください」

「何ですか?」

「こちらでもいくらかつてを使って調べることにする。可能な状況であれば、定期的に連絡を取り合おう」

「……ありがとうございます」

「いや、いいさ。貴官にはなんだかんだで世話になっている。で、名前は?」

「娘の名前はカーテローゼ、カーテローゼ・フォン・クロイツェルです」

「母親の方は?」

シエーンコップは彼らしくなく、固まってしまった。

「シエーンコップ中将？」

怪訝な顔になったヤンに対してシエーンコップは絞り出すように答えた。

「ローザライン……」

「ローザライン・フォン・クロイツェルという名なのか」

「いや、エリザベート……」

「ん？エリザベート・フォン・クロイツェルなのかい？」

「いや、もしかしたらエリザベート・ローザライン、あるいはローザライン・エリザベートだったような気も……」

ヤンは別の意味で呆然となった。

「シエーンコップ中将、貴官、娘の母親の名前を覚えていないのか？」

「いえ……はい……。女性など星の数ほど付き合いましたからな。しかし、エリザベートかローザラインかその組み合わせのどれかではあつたと思います」

ヤンはいっぴくもなく真面目な顔でシエーンコップ中将を見た。

「シエーンコップ中将、シエーンコップ中将。悪いことは言わない。娘さんに会う前に

母親の女性の名前を思い出すんだ。手遅れかもしれないが、娘さんに嫌われる要素は減らした方がいいだろう」

シエーンコップもいつになく真面目な顔で答えた。

「^ヤ諾」

兎にも角にも、シエーンコップ中將は地球教徒に対する潜入任務のため、帝国領に旅立ったのだった。

シエーンコップの最後に残した言葉が

「あなたが皇帝になるつもりなら、玉座の周りを掃除して待っていますよ」だったことを考えると、少しは調子を取り戻していたのではないかと思うヤンであった。

第四部 7話 深くなる闇の中で

宇宙暦801年 11月18日、クーデター勢力から、ロボス退役元帥の代理としてコーネフ中將より、声明があつた。

「我々は、挙国一致救国会議の成立を宣言する。

かつて自由惑星同盟は、国民の熱意と不断の努力、優れた将兵の力によって、軍事力においても経済力においても銀河に冠たる存在であつた。

しかしレベロ議長による緊縮財政と度重なる軍縮の結果、不景氣が蔓延し、軍事力は低下した。

無能な政治家のせいで自由惑星同盟の国力は低下し、今も低下を続けている。もはや彼らには任せておけない。

我々が指導者ロボス元帥は決意した。

我ら軍が国家を指導し、この国に栄光を取り戻すと。

この目的のため、我々は同盟市民の自主的、率先的協力を期待するものである」
続いて、挙国一致救国会議の基本方針が発表された。

一、銀河における自由惑星同盟の指導的地位を復活させるための、挙国一致体制の確

立

二、国益に反する政治活動および言論の秩序ある統制

三、軍人への司法警察権付与

四、全国に無期限の戒厳令を布く。また、それにもなつて、すべてのデモ、ストライキを禁止する

五、恒星間輸送および通信の全面国营化。また、それにもなつて、すべての宇宙港を軍部の管理下におく

六、反戦・反軍部思想をもつ者の公職追放

七、挙国一致救国会議協力団体への公職優遇措置。挙国一致救国会議協力団体による全同盟市民の段階的組織化

八、議会の停止

九、良心的兵役拒否を刑罰の対象とする

十、政治家および公務員の汚職には厳罰をもつてのぞむ。悪質なものには死刑を適用

十一、同盟憲章の一時的停止。人類共通の普遍的原則に基づく新たな憲章の制定

コーネフ中將は最後に告げた。

「我々は同盟の大半を掌握したが、いまだに我々の崇高な目的に賛同しない抵抗勢力が

いる。そのために、ハイネセンの流通は著しい遅滞をきたしている。我々としても努力を続けているがこのままでは餓死者が発生する可能性がある。抵抗勢力は無益な抵抗をやめ、同盟市民の生活の正常化に協力せよ」

これがレベロやビュコックへのメッセージであることは明白であった。

この頃の特選軍の編成は以下の通りであった。

第一艦隊　ホーウッド中将

第二艦隊　マリネスク中将

第三艦隊　モートン中将

第四艦隊　アル・サレム中将

第五艦隊　カールセン中将

第六艦隊　ワーツ中将

第七艦隊　ボロディン中将

第八艦隊　ウランフ中将

第九艦隊　ルグランジュ中将

第十艦隊　コナリー中将

レベロ議長の特選軍の緊縮財政の元、一個艦隊の規模は定数一万三千隻に縮小され、第二艦隊、第四艦隊、第十艦隊は未だ帳簿上の存在に過ぎなかった。

残る七個艦隊が稼働状態だったが、今回のクーデターでは、そのうち四個艦隊が動けない状態にされた。

ビュコック司令長官も相応に警戒していたはずであったが、数年が経過しても、クーデターの動きがなく、警戒を緩めてしまっていた。その隙をつかれた形であった。

まず惑星ネプティスなど複数の惑星で反乱が起こった。

ウランフ提督は惑星ネプティスで起きた反乱の鎮圧に向かったが、味方と考えていた基地司令官ハーベイに裏切られ、捕縛された。

ボロディン提督はウランフ提督の危難を知らせに来た伝令将校と面会した際、その将校に撃たれて危篤状態となった。その混乱の際にクーデター勢力に与したルグランジュ提督の第九艦隊に包囲され、艦隊は降伏することになった。

モートン提督、カールセン提督は補給基地に滞在中、主要幕僚とともにその身柄を拘束された。その補給基地は既にクーデター勢力の手に落ちていたのだ。

第六艦隊を率いるワーツ中将は、クーデター勢力に与した艦隊参謀長マルコム・ワイドボーン少将に拘束され、今やクーデター勢力の掌中となった。

第九艦隊は司令官のルグランジュ提督がクーデター派であった。

今や正規艦隊ではホーウッド提督の第一艦隊が、自由惑星同盟政府の元に残るのみであった。

連合は、同盟の要請を即日受諾しており、ライアル・アツシユビーが同盟への帰還準備に入っていた。

これを加えても、実働戦力はようやく拮抗するかどうかといふところである。だがもう一つ、同盟政府には動かせる部隊があつた。

表向きは対海賊、実際は対地球教、対クーデターに組織された特務警備艦隊である。

その規模は一万隻にもなり、正規艦隊に匹敵する戦力を備えていた。

特務警備艦隊司令官ウイレム・ホーランド中將は不機嫌だつた。

彼はここに至るまで、自らの部隊が対クーデター部隊であると知らされていなかったのだ。

帝国軍の捕虜から戻つて来たら正規艦隊に彼の席はなかつた。困つていた彼に海賊退治とはいへ、新しい艦隊を任せてくれたビュコックに彼は相応に恩義を感じていた。それなのに、と。

「ビュコック閣下もお人が悪い。知らせてくれればこのようなクーデターなど起こさせなかつたものを」

「ホーランド閣下であれば言わずとも動いてくれるという信頼の証でしょう」

と、パトリチエフ准將は、適当なことを言つても何となく人を納得させてしまう特技を發揮して宥めた。

ムライもパトリチェフも、実のところホツとしていた。

ホーランドがクーデターに加わると言い出すのではないかと内心ヒヤヒヤしていたのだ。

「だが、我々は海賊退治のため、モールゲンまで来てしまっている。ハイネセン救援に向かうにも急がねばならんな」

特務警備艦隊は、海賊の大規模な活動が予測されるとの情報に基づきモールゲンまで来ていたのだが、情報部から来た情報であることを考えると、不確定要素を事態に関わらせないためのクーデター勢力の策謀とも考えられた。

ホーランドに対しムライが指摘した。

「ワイドボーン少将に掌握された第六艦隊がエル・ファシル近傍にあります。彼らと戦って勝つのはなかなか骨ですぞ。彼らの方が戦力は大きいですからな」

「まあ、俺に考えがある。ところで、ワイドボーン少将とはファルスターと一緒に戦っているな。たしか、あだ名があったはずなのだが」

ワイドボーン少将と同期の作戦参謀、ラップ大佐が答えた。

「十年に一人の逸材と呼ばれていました。欠点もありますが、総じて優秀な男ですよ」

ホーランドはニヤリと笑った。

「十年に一人の逸材と、英雄ホーランドの戦い。これは全銀河が注目することになるぞ」

「そうですかねえ」

パトリチエフは独り言のつもりだったが、その張りのある声はやけに響いてしまい、ホーランドに睨まれることになった。

ラップ大佐はそれを見つつ、遠方の二人に思いを馳せていた。

一人はハイネセンに在るはずの妻であり、もう一人は連合にいる旧友であった。

ラップはヤンに約束していた。いつか休暇を取ってジエシカと一緒に連合に遊びに行く、と。その約束が果たされる前に、銀河は再び動乱に包まれることになった。

「死ぬなよヤン、俺もお前もまだまだこれからだ」

ラップの呟きは、誰にも聞かれることなくホーランドの大演説に紛れて消えていった。

宇宙暦801年11月20日、自由惑星同盟某宇宙基地

挙国一致救国会議の主要メンバーがそこには集まっていた。

彼らは首都占拠に失敗するや、少数の艦艇でハイネセンを脱出していたのだ。

ロボス退役元帥、ロックウエル大将、ブロンズ中將、コーネフ中將、エベンス准將、ベイン准將の他、コーネリア・ウインザー元議員、ヴァンス地球主教が主要メンバーであつ

た。

これに、超光速通信で、遠方のルグランジュとワイドボーンが加わり、今後の方針が話し合われていた。

会議はウインザー元議員の主導で行われた。ロボス退役元帥が万事無気力で、ウインザーの発言を追認ばかりするのだ。

軍人達はウインザーのことを忌々しく思っていたが、彼女の発言が地球教の意向に沿ったものだど気づいているものは少なかった。

本来は、軍人による集団指導体制を目指していたはずのこの組織は、協力者である地球教の影響により、最初から変質を余儀なくされていた。

「イゼルローン回廊側からはホーランド提督が、フェザーン回廊側からはアツシユビー提督が向かって来ているようですが、これにひとまずはどう対処するのかしら」

コーネフが答えた。

「ホーランド提督にはワイドボーン提督が、アツシユビー提督にはルグランジュ提督が当たります」

ルグランジュは力強く答えた。

「かならず、アツシユビーを屠るか、降伏させてごらんにいれましょう」

ウインザーはスクリーン越しにルグランジュに笑いかけた。

「期待していますわ」

会議が終わり去りかけた面々にウインザーは改めて呼びかけた。

「ルグランジュ提督は必ず勝つと言っていたけれど、皆さんそれを信じておいでですか？」

皆、顔を見合わせた。アッシュビー提督の異常な実力はよくわかっていたからだ。エベンス准将が口を開いた。

「ルグランジュ提督は歴戦の勇士です。その彼の言ならば、我々は信じて待つのみです」
頷く面々にウインザーが投げたのはただ一言であった。

「無理でしょ」

「は!？」

エベンス准将は耳を疑った。

この女、今何を言った？

内心を必死で押し隠しながら、エベンスは聞き返した。

「無理と言われましたか？」

「ええ、無理よ。皆わかつているでしょう？アッシュビー提督クラスをpushさえるには、それこそヤン・ウエンリーか、せめてビュコック提督、ウランフ提督ぐらいに出張つてもらわないと。あら残念、みんな我々の敵ね。ルグランジュ提督程度じゃあ足止めにもな

らないわ」

ブロンズ中将も流石に聞き咎めた。

「同志であるルグランジュ提督を愚弄する気ですか？」

「愚弄する気はないわ。事実を言ったまでだから」

今にも激昂しそうなエベンス准将を手で制し、コーネフ中將が尋ねた。

「では、どうすればよいとお考えですか」

その問いこそウインザーの待っていたものだった。

「確認だけど、我々は時間さえ稼げればいいのよね」

コーネフは突然の問いにも丁寧な答えた。

「はい、今少し時間が稼げれば、奥の手が使えるようになりますし、さらに時間が経てばハイネセンで物資やエネルギーの不足が発生し、レベロ氏も降伏せざるを得なくなりますから」

「だったらルグランジュ提督の役目も足止めよね。それさえできそうにないから困るのだけど。でも、それは常識の中で戦うからであって、常識の外で戦えばどうかしら」

そうね、とウインザーは続けた。

「死を恐れず味方ごと敵を撃ち抜く軍隊、決して疲れず戦い続ける軍隊、一人一殺の自爆攻撃を艦隊規模で行う軍隊……アッシュビー提督もそんな敵は予想できないでしょう」

し、わかってもしどうにもできないでしょう。策など関係無く突っ込んでくるんだから。対処に困っているうちに、気づけば周りは全滅した敵と味方の残骸ばかり。そしてタイムアップ。アッシュビー提督も途方に暮れるかもしれないわね」

コーネフは目を剥いた。

「そんな軍隊はあり得ない。いや、献身は美徳かもしれんが、それを命令で行うなどあり得ん話だ」

「あら、命令なんてしないわ。ルグランジユ提督や将兵の皆さんが自発的に行ってくれるわよ。薬物で朦朧となった頭でね」

コーネフは理解が追いつかなかった。

「どういうことだ?」

「第五次アルメントフリーベル星域会戦。皆様ご存知でしょう?」

ヴァンス主教が初めて口を開いた。

第五次アルメントフリーベル星域会戦、それは連合、同盟、旧帝国の三国とつて等しく悪夢のような戦いだった。

帝国軍のある分艦隊が突如暴走し、同盟駐留艦隊の艦列に無謀な突撃をかけたのだ。

その分艦隊は一昼夜戦い続けた末に全滅した。ほぼ同数の敵を道連れにして。

部隊でわずかに生き残った者の一人、分艦隊参謀長クリストフ・フォン・バーゼル大

佐はこう述懐している。

「皆、狂気に囚われたようだった。これが集団心理というものと震撼した。将兵は元々司令官に心酔していたが、この戦いで彼らの熱狂は異常だった。止めても無駄だった。彼らは司令官の自己犠牲的、自己陶酔的な突撃の命令に最後まで嬉々として従ったのだ」

彼らがそうだった理由は不明だった。以降この戦いは戦場の七不思議の一つに数えられることになった。

「無論知っている。たしかにあの戦いの帝国軍は異常だ。ウインザー女史の言われるような戦いだったかもしれない。……あれが薬物によるものだと言いたいのか？」

ヴァンス主教は感情を失ったかのような平板な声で答えた。

「ええ、知られている話ではありませんが、あれはサイオキシンの麻薬の気化によるものでした。それも意図的な。戦場における麻薬の効用を調べるためのね」

「馬鹿な……」

旧帝国軍はそこまで腐っていたのかとコーネフは思った。だが、気づいた。腐っているのもっと別の存在だと。

「今回ルグランジュ艦隊の各艦には一人以上の地球教徒が配属されています。大量の麻薬と一緒に。より戦場に特化したサイオキシンの麻薬の亜種です。彼らにはそれを戦

闘開始とともに散布してもらいます」

ウインザーが補足した。

「無論、自主的にね」

コーネフは絞り出すように声を出した。

「そんなことは許されない。我々にそんな権利はない」

ウインザーは笑った。

「まあ、綺麗ごとを」

「よいではないか」

掠れた声が聞こえた。

今まで黙っていたロボスが口を開いたのだ。その目は焦点が定まっておらず何を見ているのかわからなかった。

「ルグランジュ中將は二階級特進で元帥だ。喜ぶだろう」

ウインザーはまた笑った。嗤った。

「ルグランジュ提督とその将兵には祖国のために身を捧げてもらいましょう。彼らも涙を流して喜ぶことでしょう。ああ、流すのは血だったわね」

ウインザーは思った。

あなた達など所詮私のための捨て駒なのよ。

私が、地球教に取り入って最高の地位を得るための。トリユーニヒト、あなたが臆病にも姿を隠しているうちに、私があなたからすべてを奪ってやるわ。…、あなたが私にしたようにね。立場も、あなたの秘蔵っ子も。…、かわいいユリアン坊や、私が同盟の議長になったら、トリユーニヒトの代わりにたくさん可愛がってあげるわよ。

エベンスは思った。

同盟のため、軍の将兵のために決起したはずが、この悪夢は何だ？ 将兵は今まさにゴミのようにすり潰されようとしている。そして自分はそれを止められない。どこで間違えたのだろうか。

彼は、大恩のあるグリーンヒル大将をこの決起に誘わなかった自分の判断は正しかったと、改めて感じていた。

宇宙暦801年11月27日、イゼルローン回廊側とフェザーン回廊側の二箇所、同盟の命運を決する戦いが始まった。

第四部 8話 回廊の戦い 前哨戦

宇宙暦801年 11月27日 イゼルローン回廊内

挙国一致救国会議、マルコム・ワイドボーン少将は一万三千隻の艦隊を率いてイゼルローン回廊に進入した。

ホーランド艦隊もその時、回廊内に進入していた。

ワイドボーンも、ホーランドも、お互いに相手が回廊内に進入しているものと考えていた。

問題はどこでぶつかるか、であった。

ワイドボーンは艦隊のうち三千隻を副司令官ギデオンのオーツ准将に任せて伏兵として回廊の航行不能領域ぎりぎりに配置した。その上で一定の宙域に留まってホーランドを待ち構えた。

ワイドボーンとしては焦る必要はまったくなかった。ハイネセンの方が時間切れとなれば挙国一致救国会議の勝ちなのだから。

彼は、敵が焦って攻撃を仕掛けてくるのを待ち受け、伏兵による側面攻撃によって敵が混乱したところを本隊で攻撃して殲滅しようと考えていた。

ワイドボーンが回廊内に布陣して十時間後、五十隻程度の部隊が回廊内を直進して来た。

伏兵部隊司令官オーツはこれをやり過ぎした。

斥候部隊だろうが、本隊が発見される分には別に構わないからだった。

しかし、本隊を発見したその部隊は、同盟軍にあるまじき醜態を見せた。混乱し、我先にと回廊内を逆進したのだ。彼らが戻らぬうちに、さらに五十隻ほどの部隊がやって来た。彼らは先にやって来た部隊とぶつかり、今度は回廊内をあらゆる方向に狂ったように逃げ回り始めた。そして何隻かは伏兵のいるところまで来たのだった。

オーツとしては見つかったからには攻撃せざるを得なかった。

そうしてうちに、大艦隊接近の報が入った。ホーランド艦隊本隊であった。ワイドボーンもオーツも、ホーランド艦隊が先の小部隊を当然回収するものだと考えていた。そして伏撃は成り立たなくなったものの、回収のタイミングこそが攻撃のチャンスだと考えていた。

しかし、

ホーランド艦隊は先の小部隊ごと、ワイドボーンとオーツの艦隊に攻撃を始めたのだった。

実は先に現れた小部隊は宇宙海賊であった。ホーランドはイゼルローン回廊近郊の複数の海賊の根拠地を襲撃して、回廊内まで艦隊で後ろから追い立てたのだった。

ホーランドにとって彼らは非常に役に立った。伏兵は発見できたし、ワイドボーンを混乱させることにも成功できたのだから。

ホーランドはしばらく暴れ回った。しかし、その場所はイゼルローン回廊内でも特に狭く、得意の芸術的艦隊運動は十分に発揮できなかった。

ワイドボーンは十年に一人の逸材の名に恥じない冷静さで艦隊を立て直した。

未だにワイドボーン艦隊の方が数が多く、ホーランドは徐々に押され始めた。

ワイドボーンはここぞとばかりに攻勢に出た。

ホーランド艦隊は後退を続けた。

勝てると思ったワイドボーンであったが、ここで彼の艦隊を衝撃が襲った。

側面からミサイル攻撃を食らったのだ。

ホーランドは本人の攻撃重視の嗜好と、警備艦隊としての大型艦数の制限から、ミサイル艦ばかり二千隻を自らの艦隊に集めていた。

それを副司令官ザーニアル少将に任せて回廊の航行不能領域ギリギリに潜め、集中運用したのだ。

ワイドボーン艦隊への全力攻撃を実施しつつ、それと気づかせないで一部艦艇を移動

させ潜ませる艦隊運動の妙は、その気があればフィッシャーに並ぶ艦隊運用の名人であるはずのホーランドの真骨頂であった。

ホーランドが「火力の滝」と名付けたその攻撃は、ワイドボーン艦隊を大いに削った。このままいけば、ワイドボーン艦隊を殲滅できると考えたホーランドだったが、ここで事態が急変した。

ワイドボーンがあっさりと降伏したのである。

「なぜだ？なぜ降伏するのだ？これからなのに！」

勝ったはずのホーランドの方が悔しがっていた。彼は戦史に残る殲滅戦を行いたかったのだ。

「勝敗が見えたのに同盟軍同士無益な争いをする必要はないとの賢明な判断でしょう」
「敵司令官が冷静で助かりましたなあ」

ムライと。パトリチェフは上官を宥めるために言葉をかけた。

見方によっては上官批判ととれなくもなかったが。

ホーランドが言葉の毒に気づく前に、パトリチェフは話題を変えた。

「しかし、ホーランド提督、よくこのような緻密な作戦を考えつきましたなあ」

この発言にホーランドの機嫌は回復した。

「ふふふ、まあな。捕虜になっている間、考える時間だけはあったからな。芸術的艦隊運

動の使えない狭い宙域でも勝てる戦術を考えておいたのだ。帝国を滅ぼす者、それは俺だ！」

「勢い余って同盟を滅ぼさないでくださいよ」

ひとまずは気を取り直して降伏を受け入れたホーランドであったが、数時間後、彼と彼の幕僚達は愕然とすることになった。

ワイドボーンの手によって回廊内の広範囲に大量の機雷が散布されていることが判明したのだ。

ワイドボーンにとって目的はあくまで時間稼ぎであり、艦隊戦の勝敗はおまけに過ぎなかった。

士官学校でのヤンに対する敗北、ファルスター星域会戦で最終的にラインハルトにしてやられたこと、そのようないくつかの経験が、長い時間をかけて逸材を一流の提督に成長させていたのだ。

ホーランド艦隊は指向性ゼツフル粒子発生装置など持っていないかった。ワイドボーン艦隊は保有していたが、降伏前に破壊していた。

このため、短期間で機雷原を片付けることは不可能であった。

同盟の命運はライアル・アッシュビーの肩にかかることになった。

第四部 9話 回廊の戦い 本戦

ホーランドの戦いは、玄人を唸らせる要素を多分に持っていたものの、ホーランドが賞賛を受けたかった肝心の一般大衆からは、地味な戦いとして忘れ去られることになった。

戦いの結末もさることながら、同日に行われたもう一つの戦いの方があまりに衝撃的だったからだ。

ホーランドの戦いは、まるでその戦いの前哨戦のようにも扱われた。

それは、ホーランドとワイドボーンの戦いとは真逆だった。戦術の観点では余人の参考に全くならない戦いだったが、一般大衆の記憶には強烈に残るものだった。

ライアル・アツシユビーという男が積み上げてきたものが問われた戦いだったと言えるかもしれない。

後にその戦いは伝説として語り継がれることになった。

宇宙暦801年 11月27日 フェザーン回廊出口

ライアル・アツシユビー率いる同盟軍臨時艦隊一万隻はフェザーン回廊を同盟側出口

まで急行した。

彼らは連合軍第三防衛艦隊がベースとなっており、同盟から要請を受ける前からある程度の準備を済ませてガイエスブルク要塞に待機していた。このため最低限の時間口スで出発することができた。

イゼルローン回廊における戦いのことは超光速通信で既に知っていた。彼らは自分達に同盟の未来がかかっていることを自覚した。

ルグランジュ提督率いる同盟軍第九艦隊一万三千隻は、フェザン回廊の同盟側出口で待ち構えていた。

「何か妙だ。対峙したにも関わらず、敵に動きが見られない」

ライアル・アッシュビーの異常な戦場勘が、危険を察知していた。

だが、待つについても始まらないと前進の命令を出そうとした矢先にルグランジュ艦隊に動きがあった。

最初はゆっくりりと、徐々に先を争うように艦艇が前進を始めたのである。

ルグランジュ艦隊は、有効射程に入る前から砲撃を始めていた。

アッシュビーの違和感は募るばかりであった。

フレデリカも気づいた。

「ルグランジュ提督は、歴戦の提督です。こんな素人のような砲撃をする筈がありません

ん」

敵が有効射程に入ったところでアッシュビーも砲撃を指示した。

整然としており、しかも的確に要所を衝く砲撃によって、ルグランジュ艦隊の前線部隊には損害が蓄積した。

しかし、彼らは構わず前進を続け、ついにはアッシュビー艦隊に食らいつき、手当たり次第に攻撃を始めた。

今や損害は同程度に発生するようになった。

「やはりおかしい。まるで……。フレデリカ中尉、敵艦数隻の拿捕と、医療班、技術班に調査の指示を出してくれ。乗員の心身の状態を確認するんだ」

第九艦隊旗艦レオニダスⅠでは、意識の朦朧としたルグランジュ提督に対し、ガスマスクを付けたヒルマ大佐が繰り返して語りかけていた。

「いいですか、敵は悪逆非道の専制君主です。尊ぶべきは献身と犠牲。最後の一兵になるまで我々は戦い抜くのです。前進、前進、前進です」

「ああ、前進、前進、前進だ……」

勢いに任せた攻撃にアッシュビーは正直辟易していた。相手の行動に違和感しか抱けず、対応も珍しく後手に回ってしまった。

それでもアッシュビーは艦隊をゆつくりと回廊内まで後退させて、敵艦の艦列への浸

透と損害を最低限に抑えた。

その間に、拿捕した数隻の艦について分析が進められた。

フレデリカがアッシュビーに報告を入れた。

「いずれの艦も内部に気化した薬物が充満していました。全員極度の興奮状態で、暗示もかけられているようです」

アッシュビーは天を仰いだ。

「やはりか。挙国一致救国会議の奴ら、味方になんて事をしやがるんだ」

自らの生い立ちも思い出し、アッシュビーの中に抑えられない激情が生まれた。

「なあ、確認するが、暗示にかかっているし、かかりやすい状態になっているんだな」

「はい。敵は悪逆非道の専制主義者だ。奴らを倒せ、くたばれ皇帝、などと叫んでいきます。各艦にガスマスクを付けた者が少数おり、その者達が暗示を繰り返していたようです」

「なるほど。なあ、同盟軍士官の平均年齢はどのくらいだろう。佐官以上の」

「佐官以上となると四十歳です」

「ふむ、となるとやはりあれだな」

「あれ、ですか？」

「なあ、フレデリカ中尉、二つほど頼まれてくれないか？」

「何でしょうか」

「敵艦隊全体への緊急通信回線を、拿捕艦から至急割り出して欲しい」

「承知しました。もうひとつは、これですね」

アツシユビーは驚いた。準備に時間がかかると思われた自分の欲しかったものが、既に用意されていたのだ。

「何で持っているんだ!？」

フレデリカは微笑んだ。

「こんなこともあろうと、前々からつくっておいたんです」

「……なあ、やっぱり結婚しないか？」

「ノーです、閣下。冗談言っていないで早く準備してください。その間に一つ目の方は片付けておきますから」

「いや、冗談じゃなくて……」

三十分が経過した。

その間にもルグランジュ艦隊は個艦ごとに猛り狂い、彼我双方の損害は加速度的に増加しつつあった。

そんな時、突如ルグランジュ艦隊の全艦に警告音が鳴り響いた。フレデリカの手によ

り、艦隊の緊急通信回線がオンになったのだ。

次に歌が流れてきた。

それは、ある世代以下の同盟市民なら、特に軍人を志すような者ならば忘れられないメロディーであり歌詞だった。

いつしか、ルグランジュ艦隊は、アツシユビー艦隊の隊員達さえも、その歌に聴き入っていた。

）

少年の頃は宇宙をこの手に掴めた

永遠の夜の中だって

黄金の翼背負って

どこまでも行けたはずだった

忘れずにいてもらいたい

誰もが心の宇宙船乗り

君がいればどこまでだって行ける

どちらを見ても銀河 果てまで翔んでも銀河

闇が深くなるのは夜が明ける前触れだから

さあ、勝負はこれからだ

）
……ポスト・アツシユビー時代の防衛戦争意識の薄れた同盟において、軍志願者数の減少傾向に歯止めをかけるため、同盟軍全面協力の元につくられた立体TVがあった。

その立体TVの名は

「銀河の英雄 キャプテン・アツシユビー」

） 歌が終わると今度はナレーションが流れてきた。

時は宇宙暦730年、ところはサジタリウス腕。

空間すら歪む果てしなき銀河へ、愛機ハードラックを駆るこの男。

将来、史上最年少の元帥にして議長となるブルース・アツシユビー。

だが人は若き日の彼を、キャプテン・アツシユビーと呼んだ。

） それは、

若き日のブルース・アツシユビーが、730年マファイアの愉快な仲間達、星間警備隊の頑固な老提督ギャレット・ギネス、美人諜報員にしてアツシユビーの義理の妹フリーダ・アツシユビーらと共に、

同盟の専制国家化を目論む宇宙海賊や、マッドサイエンティスト、果ては外宇宙からの侵略者たちと戦いを繰り広げる、

という設定の宇宙冒険活劇だった。

広大な宇宙の中で心踊る冒険、ハードラック号のデザイン、アッシュビーの格好のよさ、フリーダのちよつとエッチな服装……

国策でつくられたはずのそれは、当初の意図を大きく越えて、当時の少年少女の心を掴んだのだった。

そして、同盟軍を志した者であればなおさら、誰しもが心の中にかつての憧れを残していた。かつての少年、かつての少女が残っていた。

ナレーションが終わるとともにスクリーンがオンになった。

そこには男が立っていた。

派手な赤色のパイロットスーツに、大ぶりの光線銃を構えて立っていた。

彼らが少年少女の頃に憧れた赤毛の英雄、キャプテン・アッシュビーその人が。

アッシュビーはスクリーンを通じて語りかけた。

ルグランジュ艦隊の隊員それぞれの心の少年少女に。

……やあ、みんな。聴こえているか？

いま、みんなの心に直接語りかけているんだ。

みんな、久しぶりだな。

俺のことを覚えてるかな？

皆覚えていたら、俺の名を呼んでくれ。

……そうだ、アツシユビー、キャプテン・アツシユビーだ。

今、俺は自由惑星同盟乗っ取りを企む非道な宗教団体と戦っている。

だが、どうにも困った事態に陥っているんだ。

なあ、みんな、俺に力を貸してくれないか。

安心しろ。みんなが一緒なら、俺は誰にも負けはしない。

……ありがとう。

やって欲しいことは簡単だ。

まずは艦内の換気速度を最速に設定して欲しい。

その後十分に深呼吸してくれ。

やってくれるな？

……ありがとう！

……さあみんなで歌を歌おう！

それが済んだらみんなが悪の宗教団体を倒しに行こうじゃないか！

さあ歌おう！

どちらを、みいてもぎーンがー
はてまで、とんでもぎーンがー……

宇宙を、虚空を、皆の心を、歌が駆け抜けた。

その時、ルグランジュ艦隊の隊員の心は少年少女に戻り、キャプテン・アツシユビーと共に確かに宇宙を羽ばたいていたのだった。

……戦意を喪失したルグランジュ艦隊の隊員達をアツシユビーは一時的に拘束した。多くの者は気絶していた。抵抗を続ける者はごく少数であり、すぐに鎮圧された。旗艦レオニダスⅠではヒルマ大佐を拘束し、薬物漬けとなっていたルグランジュ提督を救出した。

「なあ、フレデリカ中尉」

「はい」

「俺はこの数年、連合でドサ回りを続けるうちに気づかされたんだ」

「はい」

「……ある一定年齢以下の層には、アツシユビー本人よりも、キャプテン・アツシユビー

の真似の方がウケるってことをな」

今回のことはライアル・アツシユビーの下積みの賜物であった。

「私もキャプテン・アツシユビー、大好きでしたよ」

「……なあ、フレデリカ中尉」

「何でしょう？」

「なんで君までそんな格好を、美人諜報員フリーダ・アツシユビーの格好をしているんだ？」

「一回着てみたかったんです」

「そうか……」

一時間後、ルグランジュ提督は、アツシユビー艦隊旗艦ハードラックの医療ベッドで目を覚ました。

彼は虚脱状態だった。

俺は、気を失っていたのか

……なんだ、この俺が涙を流しているじゃないか

ひどい悪夢を見ていた気がする

だけど途中からはとても楽しい夢になった

艦隊のみんなで一体となって、何かとても大事なことを思い出していたようなあれは一体なんだったのか

とてもとても大切な、忘れてはいけなはずの何か

そこで部屋に男が入ってきた。その赤毛の男を見た瞬間、ルグランジュはすべてを思い出した。己のやるべきことを。

「アッシュビー！」

ルグランジュは拘束具をひき千切ってベッドを脱出し、一瞬のうちにアッシュビーの至近に到達した。

軍医が叫んだ。

「拘束が甘かった。誰か止めろ！」

だが、ルグランジュの行動の方が早かった。

ルグランジュは、アッシュビーにおもむろに手を伸ばし……

お手本のような敬礼をした。

「キャプテン・アッシュビー！ このルグランジュ、悪の宗教団体を倒すため、キャプテンのお供をさせて頂きます！ 何なりとお申し付けを！」

ルグランジュの瞳は、夢見る少年のようにキラキラと輝いていた。

ライアル・アツシユビーは、黙って軍医の顔を見た。

軍医は首を横に振った。

「とても強力な暗示がかかっています。ルグランジュ提督だけでなく第九艦隊員全員です。しばらくはこのままでしょう」

……こうしてアツシユビーは、悪の宗教団体を倒すための新たな仲間を手に入れた。少年少女の心とキラキラした瞳を持った、頼もしい仲間達を。

「どうしよう、これ」

歌で一個艦隊を止め、一瞬で味方にしてしまったこの戦いは、「キャプテン・アツシユビーの戦い」として長く語り継がれることになった。

第四部 10話 安息日

宇宙暦801年12月1日 神聖銀河帝国根拠地

その日、ユリアンは人工庭園の滝の前に佇んで、考え事をしていた。

神聖銀河帝国の今後のこと、少年皇帝のこと、地球のこと……

もうすぐ出征がある。新帝国及び連合と、雌雄を決する戦いがある。そうなれば考える時間はあまり取れないだろうから……

「ミンツ大将」

不意にユリアンは声をかけられた。

「メルカッツ元帥」

「考え事ですかな？」

「はい。これからどうしていくべきかと。この国も、自分自身も」

メルカッツは前振りなどなく核心に触れた。

「少年皇帝に情が移りましたな」

「それは……いえ、そうですね」

「私もなのです。いつの間にか愛弟子になってしまった。それに、海千山千の大人達の

なかでも真つ直ぐに成長している。彼はルドルフ・フォン・ゴールデンバウムにはならないかもしれない。いや……わたしはさせない」

明確な決意の表明にユリアンは驚いたが、納得もした。

メルカッツは笑みを見せた。

「私がいる。ミンツ大将もいる。そして、しごき抜いた結果、頼りなかつた諸将もそれなりに戦えるようになった。今度の戦い、神聖銀河帝国が勝つてしまいかもしれません」

ユリアンも笑つた。

「そうなつたら、ぼくも協力しますよ。ルドルフ2世を名君にするために」

……そう、自分はきつとそうするだろう。ユリアンは笑いながらそう思つた。

「ところで」

メルカッツが珍しく言い淀んだ。

「何でしょう」

「娘がな……」

「ご息女がどうされたのです?」

「ミンツ大将をまた家に連れて来てほしいと言つてきかんです。あれもここでの生活でストレスが溜まっている。迷惑だとは思いますが、また一度家に遊びに来てくださらんか

「？」

「迷惑だなんてそんな。ぼくでよければいつでも伺います」

「ありがたい。娘も喜びます」

「メルカッツは相好を崩した。これが父親の顔というものなのかと、ユリアンはメルカッツの娘のことが少しだけ羨ましくなった。

「何か考え事か？」

「メルカッツが去ってしばらく後、ユリアンは再度声をかけられた。

「振り向くとそこには少年皇帝の姿があった。

「陛下！ 供もお連れにならずにいらつしやったのですか」

「何か危険なことでもあるのか？ ここは我らの根拠地、地下深く閉じた空間ではないか」

「そうは言われなくても……」

「ルドルフ2世は意地の悪そうな顔をした。

「地球教徒の誰かが余を害するとしても？」

「！ 何を仰いますか」

「冗談だ、今はな。余と地球教団はお互いを利用する関係だ。お互いに利用価値がある限りは滅多なこととはななかりうよ。別に彼らに限らない話だがな。……そうか、卿も地球

教徒だったか」

「はい」

わかっけていて言っているのだろう、とユリアンは思った。

聡明な少年皇帝に、ユリアンはド・ヴィリエから聞いたあの話を打ち明けたくなった。だから今それをして、神聖銀河帝国内に亀裂が生まれるだけで何の益もない、そう考えてユリアンは思いとどまった。

ルドルフ2世がユリアンに尋ねた。

「ユリアン大将ともあろう者が何をそんなに悩んでいるんだ？」

顔に出したつもりはなかったが、ルドルフ2世には伝わってしまったようだ。そのようなどころにも彼の異常な聡明さは現れていた。

「恋の悩みか？」

思わぬ方向に話が向いたが、本当のところを探られるよりは、むしろユリアンは考えた。

「そうかもしれない」

「余は経験がないから相談には乗れぬが、相手にミンツ大将と結婚するよう命じることが出来るぞ」

女性の意思など無視した発言だったが、ルドルフ2世は善意からそれを言っているの

はユリアンにもわかった。

「ありがとうございます。お気持ちだけで嬉しく思います」

「ふむ。ところでミンツ大將は、たくさんの女性から思いを寄せられているようだが、その中に本命はいるのか？」

「どなた達のことをおっしゃっているのかわかりません」

「そうか？ エリザベートやサビーネはわかりやすいだろう？ 多少年上だし、我の……いや、我が父の血を継いでいるとは到底思えぬ者達だが、まあ、ミンツ大將が望むなら婚姻を許すぞ。どちらとでも。何なら両方とでも」

「お戯れを。アンスバツハ中將に私が殺されてしまいます」

「ははは。それともあの侍女がユリアンの好みか？」

「まさか。カーテローゼは私のことを嫌っておりますから」

「誰と言ったつもりはないのに、名前が出てきたな。語るに落ちると言うやつか？」

ルドルフ2世にしてやられたとユリアンは思ったが、彼自身、カーテローゼに向ける感情が何なのかはよくわからないのだった。それに……。

「私にはよくわからないのです。かつて、家族のように思っていた女性がいました。その人に対する感情も恋なのか、家族愛なのかわからないまま彼女は死にました。そこから私の時は止まってしまった気がします。地球教に入ったのも……」

それきりユリアンは黙ってしまった。

ルドルフ2世はそんなユリアンをしばらく見つめていた。

「喋りたくなければ無理強いはいしないさ」

ユリアンはルドルフ2世の気遣いが心にしみたが、年下に気遣われたと考えると、少し言い返してもみたくなかった。

「陛下はどうなのですか？ 気になる女性はい？」

「余か？ 余こそ、まだ恋だの愛だのはよくわからぬ。ルドルフ1世は結婚もして愛妾もいたのだから余もいずれはするのだろうが、おそらくは政略的なことを考えて、貴族の娘あたりと結婚するのだろうか」

13歳の少年の発言にしてはあまりに枯れた発言にユリアンは思えた。

……ユリアンは自分のことは柵に上げていた。

「しかし、それでは陛下の御意思がないではありませんか。正室はそれでよいとしてもです。誰かいないのですか？」

「強いて言えば、メルカッツ元帥の娘御か。メルカッツ元帥に教えを乞うている関係で、度々世話になっているからな。姉のように思っているだけかもしれないが」

メルカッツと会話した直後のため、ユリアンは動揺した。

「他……他にはいらっしやいませんか？」

「……それこそカーテローゼかな。十分美しいし、正直余は気の強い女性が嫌いではない」

ユリアンの表情を確認して、少年皇帝は笑った。

「冗談だ。余はミンツ大将と恋敵になる気はないぞ」

「ははは……」

複数の理由から、ユリアンは自分の笑みが引きつっていないか心配だった。

ルドルフ2世と別れた後、ユリアンはふと思いついて、捕虜收容区画に赴いた。地球教根拠地の場所はまだ秘されており、そこに收容される捕虜となると佐官以上の重要人物しかいなかった。

そこにはミユラー上級大将が收容されていた。

ユリアンは彼に会いに来たのだった。

だが、先客がいた。

カーテローゼ・フォン・クロイツェル

カーテローゼは笑顔を浮かべてミユラーと話をしていた。

ユリアンの姿を認めると、カーテローゼは一瞬ばつが悪そうな顔になって、そのまま去って行ってしまった。

ユリアンの中を様々な感情が渦巻いた。

……カーテローゼは、あんな笑顔を浮かべるのか。いつも睨みつけられてばかりだから知らなかった。ミュラー上級大將には笑顔を見せるんだ。ぼくではなくて。

それが嫉妬であると、ユリアンにはまだ分からなかった。

ユリアンは、ミュラーの元に向かうのに少しだけ時間を要した。心の平静を取り戻す為に。

「ヘル・ミンツ、どうされたのです？しばらく立ち止まっていたようですが」

「失礼しました、ミュラー提督。少し考え事をしていました。……ところで、侍女といつの間にか仲良くなられていたのですね」

「そういうわけではないのですが。彼女は不思議とよくここに來るのです」

ユリアンは湧き上がる感情を必死で抑えた。彼は話題を変え、ミュラーと世間話に興じた。ユリアンは、ミュラーと、正確には新帝国とのコネクションをつくるために収容区画に來たのだった。

ミュラーとの会話の後、彼はもう一人の人物と会った。ごく最近、この収容区画に入つて來た人物、バグダツシユ中佐だった。

「いやあ、ミンツ大尉、捕まつてしまいましたよ。ここの防諜は鉄壁ですね。ああ、今は大將でしたか」

同盟の、いや連合の諜報組織にすら地球教の内通者がいることをユリアンは知っていたが、バグダツシユ中佐には伝えなかった。

「お元氣そうで何よりです」

「ミンツ大將も。でもなかなか来てくれませんでしたね。つれないじゃないですか。マシユンゴ少尉すら来てくれていたのに」

当然のことではあったが、ド・ヴィリエの監視があるから、ユリアンはここで不用意なことは言えなかった。

ユリアンはバグダツシユの手に触れた。

「私も多忙ですから、旧知というだけではなかなか来られません」

「本当につれないですなあ。クリスティーン中尉が見たら泣きますよ。……あ、いや失礼。まだ気にしておられたのですね」

「……いえ、ところでバグダツシユ中佐は今、同盟と連合のどちらの所属なんですか？」

「同盟ですよ。おかげさまで中佐に上がれました（両方です）」

「へえ。同盟の手も長くなつたものですね。捕まったら意味ないですが（ヤン提督から伝言などは）」

「面目ない（協力する気があるならいつでも連絡してくれ、と）」

「で、バグダツシユ中佐としてはこれからどうしたいんですか（監視があるからしたくて

も無理です)」

「ミンツ大将の部下にしてもらうってのは駄目ですか？お役に立ちますよ（あとひとつ、カーテローゼ・フォン・クロイツェルという少女がそこにいたら、父親が心配しているから保護しておいてもらえないか、と）」

ユリアンはその名前に驚いた。

「うーん、駄目ですね。バグダツシユ中佐はまたすぐ裏切りそうですから（わかりました。ですが彼女なら元気です。先ほどミュラー提督と話していたのが彼女です）」

「なんとまあ」

ユリアンは同盟式指話術での情報交換を終え、バグダツシユの前から歩き去った。

「ヘル・ミンツ」

見ると勇気では人後に落ちないはずのミュラーが、怯えた表情をしていた。

ユリアンは驚いた。

「どうしたのです？」

「あちらの捕虜の方と手を合わせて見つめ合っていらつしやいましたね。失礼を承知で訊くのですが、まさか、そういうご趣味があたりですか」

「違います！」

大きな声が捕虜収容区画に響いた。

第四部 11話 明けぬ夜が待つ

拳国一致救国会議のメンバーは、その報告に耳を疑った。

ルグランジユ提督率いる第九艦隊がまるごと敵に寝返つたなど、到底信じられる話ではなかった。

詳細が判明すると、彼らの困惑はさらに深まることになった。

『……だが人は若き日の彼を、キャプテン・アッシュビーと呼んだ……』

会議の間では、アッシュビー艦隊から発せられた緊急通信の内容が繰り返し流されていった。

コーネフ中將は吐き捨てた。

「キャプテン・アッシュビーだと。ふざけた真似を！」

それに応じたエベンズ准將の声は冷ややかだった。

「ですが、それに見事にしてやられたのも事実です。ウインザー女史、あなたの仕掛けは見事に裏目に出ましたな。將兵に多大な負担を強いておいてこのざま。何か一言くらいあつてしかるべきでは？」

当のウインザー女史は平然としていた。

「裏目？ルグランジュ提督は十分に役目を果たしたじゃない。まあ、想定とは少し違った形にはなったのは認めるけれど。まるごと降伏したルグランジュ艦隊の面倒を見るためにアツシユビーは貴重な時間を浪費したわ。お陰で次の手が間に合いそうでしょう？ねえ、ロツクウエル大将？」

ロツクウエル大将は渋々といった態度で答えた。

「まあ、それはそうだが」

「それに次の手は將兵への負担などないし、アツシユビーに手玉にとられることもないわ。それなら文句ないでしょう？」

だが、今度もまた狂った作戦であるのには変わりがないではないか。その思いを、居並ぶメンバーはなんとか飲み込んだ。

「ハイネセンを目前にして絶望に歪むアツシユビーの顔が見ものね。あは、あははははははは」

サデイスティツクな本性を隠しもせず、ウインザーは笑い出した。

諸將の目には彼女が精神の均衡を失っているように見えた。

ヴァンス主教は、その無表情の仮面の下で思った。

サイオキシンを摂取させ過ぎたか。この女に利用価値があるのも、せいぜいこのクレーターが終わる時までだな、と。

「後方は私におまかせください！」

目がキラキラしたままのルグランジュ提督とその幕僚達に不安を覚えたが、何かあればホーランド提督がどうにかするだろうとアツシユビーは自分自身に言い聞かせた。

「よろしく頼む。……君達も今日から730年マファイアだ！」

「「光荣です！キャプテン・アツシユビー！」」

ルグランジュ達の歓呼の声から逃げるようにして、アツシユビーはバーラト星系に向けて出発した。

ルグランジュ提督は、アツシユビーの後方支援とともに、挙国一致救国会議によって占拠された基地の解放を進めることになった。

バーラト星系への途上、アツシユビーは意外な来訪者を迎えることになった。

戦艦ユリシイズとその搭乗者ドワイト・グリーンヒル大将である。

「グリーンヒル大将、消息を絶たれたと聞きましたが、今までどうされていたのですか？」

「救国会議派の部隊の襲撃を受けそうになったのだが、救国会議に世話をしたことのあ
る旧知の者がいてな。逃げるよう事前に知らせてくれたのだ。難を逃れるためにしば
らく近在の小惑星帯に身を潜めていた。君達が近くに来たことを知ったので、こうして
出て来たというわけだ」

「そうでしたか」

アッシュビリーは多少不審に思ったが、ドワイト・グリーンヒルが地球教対策チームのメンバーであることは知っていたため、警戒するほどとは思っていなかった。

「ところで」

ドワイト・グリーンヒルは急にそわそわし出した。

「娘……フレデリカ・グリーンヒル中尉の姿が見えないようだが」

「中尉は、体調を崩していて自室で休んでいます」

「そうか。中尉に伝えて欲しい。体調が回復したら一度会いたい。いや、娘に嫌われているのはわかってはいるのだが」

「承知しました。ではひとまず部屋にご案内します」

この時、アッシュビリーは後ろを向いていたため、気がつかなかった。

アッシュビリーを見るドワイト・グリーンヒルの目に、殺気がこもっていたことを。

ドワイト・グリーンヒルを案内した後、アッシュビリーはフレデリカの部屋に寄った。

「仮病は治ったか？」

「たっただいま悪化しました」

「……フレデリカ中尉、お父上が会いたがっていたぞ」

「私は会いたくありませんわ」

「そんな。一つ間違えたらお父上は死んでいて、もう会えなかったかもしれないんだぞ。会えるうちに会っておくべきだ。男手一つで育ててくれたんだらう？」

フレデリカは珍しく感情をむき出しにした。

「育てた？あの人か？あの人をやったことは、エンダースクールに放り込んだことと、その後続けて士官学校に押し込んだこと、その二つだけよ！親らしいことなんて何もしてくれなかったわ」

「それをお父上にぶつけたらいいじゃないか。お父上にはお父上で言いたいことがあるだろう。陳腐な言い草と思うかもしれないが、お父上なりの事情があったかもしれない。話せる機会を無駄にすべきではない」

「あなたに何がわかるのよ！」

そう叫んでからフレデリカは気がついた。この人には父親も母親もないのだ、と。

「あ……ごめんさい」

「いや、いいさ。まあそういうわけで、せつかく父親がいるんだから、話せるうちに話しておくべきだと思う。いますぐじゃなくてもいいから少し考えてみてくれ」

フレデリカは逡巡した挙句、頷いた。

2日後、散々迷った挙句、フレデリカは父親に会うことにした。

フレデリカは父親に思っていたことをぶつけた。

私を散々放置しておいて今更父親面するな、と。

ドワイト・グリーンヒルは娘に謝った。多忙を理由に父親らしいことを何もして来なかったことを。

だが、こうも言った。

「初等学校の頃からお前は私に急に冷たくなつたじゃないか。これが反抗期というものなのかとずっと思っていた。お前自身私なんかとは関わりたくなかつたのだろうか？」

この発言はフレデリカをひどく怒らせた。

「あなたが私をエンダースクールなんかに入れたせいでしょう。学校の放課後、休日すべてが苦しい訓練や怪しげな実験に費やされる、その生活がどれだけつらかつたか。あなたにはわからなかつたの？」

ドワイト・グリーンヒルはただ謝るだけだつた。

「すまない。そこまでつらく思っていたなんて知らなかつたんだ」

「そもそも私をなぜエンダースクールなんかに入れたのよ！素質のある子供を入学させ

ることが、軍人で栄達を望む者には限りなく強制に近いことだったと今では知っているけど、それでも私は断つて欲しかった！」

ドワイト・グリーンヒルは驚いて答えた。

「キャプテン・アッシュビーが大好きで、義理の妹フリーダのような美人諜報員になりたいて言っていたじゃないか。そういう学校があるみたいだと言ったら、ぜひ行きたいと答えたのは、フレデリカ、お前だろう？」

フレデリカは固まった。

「え……私、そんなこと言ってた？」

彼女の父親は頷いた。

「ああ。だから入れたんだ」

フレデリカは自分の記憶を辿ってみた。フレデリカの驚異的な記憶力は幼少の記憶もぼんやりとだが保持していた。

そうしてみると、たしかにそんなことを言っていないくもなかったような気がしてきたのだった。

自分は、その頃からアッシュビーに惑わされる運命だったのかとも思った。

「ということは、私は自分でエンダースクールに行くことを希望しておきながら、お父さんをずっと逆恨みしていたということになるの？」

「……そうなるのかもしれないな。しかし、幼い娘の発言を鵜呑みにすべきではなかったし、エンダーズスクールの実態をよく調べもしなかったのは明らかに父さんの落ち度だ。だから恨まれても仕方がない」

「そんなことない……お父さんが私にひどいことをするはずがなかったのに……。私、お父さんに相談すればよかった。勝手に信じられなくなつて相談できなくなつていたのは私よ」

フレデリカは泣いていた。

「いや、わかつてあげられなくてすまなかつた」

「ごめんなさい。ごめんなさい、お父さん。大好きだつたのに……」

「フレデリカ!」

父は二十年前ぶりに抱きあつた。二人とも涙を流しながら。

もつれた糸は、案外簡単に解きほぐすことができたのだつた。

様子を見に来たライアル・アッシュビーは仲直りした父娘を見て安堵した。

「なんだ、仲直りできたのですか」

父娘は、話す機会をつくつてくれた男に対して揃つて答えた。

「あなた（君）のおかげです（だ）」

「それはよかった。訊いていいのかわからないが、こんな簡単に解決するとは一体何が問題だったんですか？」

二人は顔を見合わせた。

父娘は、いたいけな少女に道を誤らせた元凶に対して揃って答えた。

「あなた（君）のせいよ（だ）！」

「そんな馬鹿な!？」

場が落ち着いた後、ドワイト・グリーンヒルは、アッシュビーに話しかけた。

「訊きづらいのだが、それでも私はフレデリカの父親として訊かねばならない」

アッシュビーはあらたまって応えた。

「なんででしょうか？」

ドワイト・グリーンヒルはしばらく言い淀んでいたが、意を決して訊ねた。

「信じたくはないのだが、君が立場を利用して娘にセクハラをしているという噂は本当なのか？この艦の乗員から聞いた最新の情報だと、娘に美人諜報員フリーダ・アッシュビーのコスプレをさせて、夜な夜な変態的な行為に及んでいるということなんだが」

「そんなことしていない（わ）！」

フレデリカとアッシュビーの声が重なった。

ドワイト・グリーンヒルは安堵した。

「そうか、そうだよな。私としたことが噂を鵜呑みにしてしまっていた。すまなかった。それでは公衆の面前で嫌がる娘に何度も結婚を迫っているという噂も嘘だったんだな」

「……」

アッシュビーは、無言で目を逸らした。

「……おい、まさか本当なのか!？」

「……フレデリカ中尉」

「何でしょうか？」

「お父上がさつきからずっとブラスタースの手入れをしている気がするのだが」

「……気のせいでしょう」

「俺はブルース・アッシュビーのように味方に撃ち殺されたくはないぞ。どうにか取りなしてくれないか」

「父が迷惑をおかけして申し訳ないですが、一方で自業自得だとも思います」

「このままでは仕事に差し支えるため、ドワイト・グリーンヒル大將には早々にユリ

シーズにお引き取りを願うことになった。

第四部 12話 失われたもの

アッシュビーがフェザーン回廊同盟側出口からバーラト星系に向けて出発した頃、盟政府はようやく一息つくことができた。

挙国一致救国会議の艦隊戦力が無力化、離反したことで、ハイネセン防衛に残していた第一艦隊を動かせる余地が生まれたのだ。

ビュコックは、第一艦隊の半数を使ってハイネセンで不足する生活必需品、医薬品、食料を近在の星系から運び込んだ。航路の安全は確保されていなかったが、正規艦隊であれば輸送が可能だった。

これによって一ヶ月と思われたリミットに、追加で二十日弱の余裕が生まれた。

しかし、二度目に艦隊を派遣した時、第一艦隊は大規模な艦隊の強襲を受けることになった。

司令官のホーウッド提督も決して油断していたわけではなかったが、未だに挙国一致救国会議が動かせる艦隊があったとは思っていなかったのだ。

第一艦隊は、散々に打ち据えられ、輸送物資を投棄し、バーラト星系に撤退した。

ホーウッドの指揮によって全滅するような事態は避けられたが、それでも艦隊の1／

4を失った。

「挙国一致救国会議に新たな戦力の存在が確認できた以上、第一艦隊は不用意にハイネセンを離れられなくなった。」

しかし、第一艦隊を襲った艦隊の正体は不明であった。構成艦から第五艦隊を中心とした戦力であることは判明していたが、それを指揮する司令官が不明だった。

第五艦隊のカールセン提督が寝返ったとはビュコックには信じられなかったし、艦隊運動のくせもカールセンとは異なっていた。さらに言えば正規艦隊の誰とも異なっているようにビュコックには思えた。

謎の艦隊への不安をそのままにして、同盟の命運は再びアツシユビーに委ねられることになった。

だが、話はしばらく、神聖銀河帝国との戦いの方に戻ることになる。

宇宙暦801年12月6日、ヤン・ウエンリー元帥率いる連合軍派遣艦隊四万隻が帝国領に向けて出発した。

同盟へのアツシユビー艦隊派遣を優先したため、編成と準備に時間を要した形であ

る。

ヤン元帥率いる第一特務艦隊、フオイエルバツハ大将、シュタインメツツ大将、シャウデイン中将の第一、第二、第五防衛艦隊各一万隻、合計四万隻が派遣艦隊の全容であった。

クロプシュトック元帥率いる第四防衛艦隊一万隻が国内に残り、万一の事態への対応にあたる。

連合軍の国外派遣としては5年前のフェザーン派兵と並び最大規模である。

同盟との講和成立以後、同盟に帰還した者も多かつたが、ヤン艦隊はなおも三割が同盟出身の將兵で構成されていた。

主な幕僚は数年の間に異動があり、以下の通りであった。

副官：マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマー大尉

旗艦。パトロクロス艦長：アサドーラ・シャルチアン大佐

副司令官：エドウィン・フィツシャー中将

参謀長：オルラウ少将

副参謀長：ハルトマン・ベルトラム准将

作戦主任参謀：ラオ大佐

情報主任参謀：ヤーコプ・ハウプトマン大佐

分艦隊司令官：ダステイ・アツテンボロー少将

分艦隊司令官：アデナウアー少将

分艦隊司令官：マリノ准将

陸戦部隊指揮官：カスパー・リンツ准将

空戦部隊指揮官：ポプラン中佐

地球教の根拠地は未だに判明していなかったが、連合、新帝国の情報担当部署は、その解明に全力を挙げていた。

ヴェガ星域周辺に大規模な艦隊集結の動きありとの情報があったため、ヤンは新帝国の艦隊と合流した上でヴェガ星域に向かうつもりであった。

しかし……

ヤンは紅茶を飲みながら口を開いた。

「まずいな」

「申し訳ありません！ラウエ大佐のように上手にできなくて……」

マルガレータは恐縮した。

「あ、いや、紅茶の話じゃないよ。十分おいしい。……ブランデーを足してもらえるかな？」

「ブランデーは控えるよう、ラウエ大佐から伝言されておりますので」

「あ、そう」

新任のベルトラム准将が、ラオ大佐に尋ねた。

「なあ、いくら副官とはいえ、毎日毎回司令官にお茶出しとは、まるで従卒ではないか？同盟ではこれが普通だったのか？」

「いえ、ヤン提督が特殊なだけです」

「聞くとここでは私室の掃除や洗濯までやっているとか」

「いえ、ヤン提督が特殊なだけです。ラウエ大佐が甘やかし過ぎていたせいかもしれません」

「貴族としての地位と特権を維持するためには、女性といえど軍役につかないといけなのが大連合の法。だが、司令官の生活の世話が貴族のご令嬢のやるべき軍役なのか」

「ラウエ大佐にヤン提督のことを任されているからと本人もはりきっているようです」

「そこまでは任されていないんじゃないか？職権濫用と言われる前に誰かが止めないといかんだろう」

それはつまり俺に止めろと言いたいのか、というかこの人単純に羨ましいだけなんじゃないか、などとラオ大佐は思ったが、答える前にオルラウ少将の咳払いが聞こえてきた。

「卿ら、私語は慎め」

会議が再開された。

オルラウ少将が議題を確認した。

「議題はジークフリード帝からの連絡の件です。オーディンに向かいつつある反乱勢力の一個艦隊あり。その司令官はフォーク中将。新帝国としてはこれを撃退後に合流したいとのことです。予定変更になりますが、我々はこれにどう対応すべきでしょうか？」

アッテンボローが疑問を呈した。

「ヴェガ星域に敵の主力がいることが確かな以上、その一個艦隊は陽動なんじゃないでしょうか？ 敵の目的がそれなら、新帝国はそれに乗せられるべきではないでしょう」

ヤンが答えた。

「陽動の可能性が高いのは新帝国もわかっているだろう。それでもそうせざるを得ないのは相手がフォーク中将だからだ」

皆不思議そうな顔をした。

ベルトラムが代表して尋ねた。

「一個艦隊であつても警戒しなければならぬ男なのですか？ フォーク中将とは？」

「よくわからない」

「は？ あ、いや、すみません。しかしよくわからないから警戒が必要というなら、フォーク中将に限らぬ話ではありませんか」

ヤンは頭をかいて苦笑いした。

「彼の實力のほどは正直よくわからない。だけどこの場合重要なのは、實力自体よりも、帝国で彼がどう見られているかだ」

「どういふことでしょうか？」

「同盟ではファルスター星域会戦敗戦の責任者扱いだが、彼がそこで何をしてきたのか、いまいちわからないんだ。その一方で、帝国ではラインハルト帝から高く評価されていた」

ベルトラムは驚いた。

「あの常勝の皇帝から……」

「そうだ。ラインハルト帝が倒さねばならぬ敵として常々公言していたのは、ライアル・アッシュビー提督とこの私と、フォーク中将だったらしい。ラインハルト帝が直々に電文を送ったことがあるのも、私とフォーク中将だけだ。ラインハルト帝の遺臣達もジークフリード帝も意識せざるを得ないだろうな。さらにはオーデインには王妃にして先帝の姉君が残されるわけだし、万一の事態を避けたくなる心理はよくわかる」

黙ったベルトラムの後をオルラウが引き継いだ。

「ヤン提督クラスだと考えればたしかに一個艦隊でも警戒するのはわかりますな。ではその上で、我々がどうするかですが」

アッテンボローが尋ねた。

「新帝国の戦力は四万五千隻ほどのはずです。ジークフリード帝に連絡して、せめて二万隻ほどはこちらに回してもらうわけにはいかないですか」

ヤンが答えた。

「残念なことには二万隻程度しかないとすると、ヴェガ星域の位置関係上、我々と合流する前に各個撃破を受ける可能性がある。そうなれば結局我々と合流できない。もつと戦力があれば挟撃も凶れたんだけどね。」

つまり、我々はしばらく単独で神聖銀河帝国の相手をしないとイケないわけだ。だから、まずいと言ったんだよ」

「同数程度同士の戦いになるとはいえ、少し厄介ですね」

皆、考え込んだ。

「ヘルクスハイマー大尉、何か思うところがあるのかい？」

何か言いたげに見えた副官にヤンは話を向けた。

「あ、いえ、敵は本当に一個艦隊をオーデインに差し向けたのかと思ひまして」

ヤンは興味深そうな顔になり、続きを促した。

「陽動とはいえ、神聖銀河帝国としては貴重な一個艦隊を遊軍とすることになります。その結果、我々と同数程度にしなければならぬとなれば、いまし工夫が足りないのではないかと。合流されるよりははるかにましだとはいえ」

ヤンは微笑しながら尋ねた。

「では貴官ならどうする？」

「小官であればですか……。そうですね、小官であれば一個艦隊は使いません。一個艦隊に偽装した小部隊を派遣するだけで十分事足りますし、連合の四万隻に対して優勢な戦力を確保できるでしょうから」

皆、驚いた。言われてみればその通りだが、思いつくことができなかつた。

それを弱冠19歳の、未だ少女にも見える副官が指摘するとは。

ヤンは出来の良い生徒を持った先生のように副官を褒めた。

「きつとそうだろうね。よく考えたね」

マルガレータは頬を上気させて答えた。

「ありがとうございます！」

一部の会議参加者はその様子を見て、

先輩が無自覚にまた……、

とか、

厄介なことにならないければいいが……、

などと思っていた。

「まあそういうわけだから、我々は不利な戦力で戦う前提で考えた方がいい。まあ、最大限努力はしてみるが、最悪そのまま撤退もあり得るだろうね。敵が小部隊で陽動を凶っている可能性とともに、その旨もジークフリード帝に伝えておこう。それで彼らが早めはこちらに向かつてくれればよいのだけだね」

諸将は厳しい戦いになることを予想した。だが自分達の司令官が勝算のない戦いをしないこともまた知っていたのだった。

アデナウアー少将が話を変えた。

「ところで敵の根拠地はいまだわからないのでしょうか？それが判明しない限り、我々は常に後手に回らざるを得ませんし、この戦争自体終わらせることができないと思うのです」

情報主任参謀のハウプトマンが答えた。

「情報局も新帝国と協力して最優先で取り組んでおります。ですが、いまだにつかめておりません。根拠地まで辿り着いた者はいるようなのですが、出てくること、情報を伝える事ができない状況のようです」

マリノがあまり考えたようでもなく呟いた。

「地球教が母体ならばやはり地球が根拠地なのではないか？」

「地球は一度帝国軍に壊滅させられていますし、帝国軍の調査では艦艇を整備できる軍事施設などありませんでした。敵の規模から考えて大規模な艦艇整備施設、艦艇新造施設を、根拠地は備えていると思われるのですが」

「何の手がかりも掴めていないのか？」

「今のところ、諜報員が連絡を絶った場所から、ソル系近傍の半径百光年以内の領域のどこかにおそらくあるだろうと考えられています。これは地球統一政府時代の旧植民地領域、かつて、光世紀世界と呼ばれた領域と重なります。戦いがひと段落すれば、しらみつぶしに探すことも不可能ではないでしょうが」

「それらの世界は今どうなっているんだ？」

歴史家志望であったヤンが答えた。

「銀河連邦成立前の戦乱、ゴールデンバウム朝成立期の混乱の中、放棄され、無人化した星系、惑星も多いようだ。ある調査記録では、犬が生態系の頂点に立って人類の代わり

に君臨していた惑星もあつたとか。ゴールデンバウム朝時代は流刑地として使われた惑星もあるようだが」

そういうえばハイネセンの故地、アルマイルも光世紀世界の一部だったなとヤンは思った。

「これからの戦いのためにも、神聖銀河帝国の根拠地を押しえるためにも、歴史資料をさうらう必要がありそうだな。ヘルクスハイマー大尉、手伝ってくれるか？」

名前を呼ばれたマルガレータは勢い込んで応じた。

「はい、勿論です！」

ヤンはこの会議の後、他の艦隊司令官とも打ち合わせを行い、今後の方針を決定した。

宇宙暦801年12月10日、

ジークフリード帝は親征の準備を整え、出発の前に皇妃であるアンネローゼに会いに来ていた。

「アンネローゼ様、行って参ります」

アンネローゼは微笑んだ。

「ジーク、あなたはすぐに昔の呼び方に戻ってしまうのね」

「すみません、アンネローゼ様……いや、アンネ」

アンネローゼは少し逡巡した後、口を開いた

「ジーク、フロイライン・マリーンドルフを側妃に迎える話は」

「アンネ、それはあり得ません」

「ジーク、でも、国内の不安を抑えるためにもいまや帝国筆頭の貴族と言えるマリーンドルフ家との繋がりには重要よ。フロイライン・マリーンドルフも、そのことはわかっておいでよ」

「フロイライン・マリーンドルフは素晴らしい女性だと私も思います。しかし、私がお慕いするのはアンネローゼ様のみです。……きっとフロイライン・マリーンドルフも同じでしょう。ラインハルト様に対して……」

アンネローゼの瞳が悲しい色を漂わせた。

「あなたは帝国の安寧より私のことを優先するとうの？」

「はい。それがラインハルト様との約束です」

ジークフリード帝の目は、皇位に就く前も後も、結婚する前も後も、いささかも変わらなかった。

しかしかつてはラインハルトとアンネローゼを見ていたその瞳は、今、帝国全体よりもアンネローゼ一人のことを見ていた。

それがアンネローゼにとっては嬉しくあったが、同時に悲しいことでもあったのだ。アンネローゼは意を決した。

「ジーク、この戦いが終わったら大事なお話があります。だから……絶対に死なないで戻って来てください。私のかわいいジーク」

「……はい、必ずや」

キルヒアイスは決意を新たにした。

まずは、ラインハルト様が警戒していた男、オーデインに迫るフオークを撃ち破り、アンネローゼ様を安心させよう、と。

第四部 13話 逃げ出した先で

ヴァルハラ星域に隣接するヴィーンゴールヴ星域で、ジークフリード帝は三万五千隻を率いてフォーク艦隊を待ち受けた。

一万五千隻をジークフリード帝が率い、ルッツ、ビットェンフェルトが残りの一万隻ずつを率いている。ジークフリード帝の直下でベルゲングリューン大将が参謀長、ザウケン大将、ジンツァー大将、ブラウヒツチ中将らがそれぞれ艦隊司令官を担当した。

また、この戦いにはヒルデガルド・フォン・マリンドルフもジークフリード帝の首席秘書官として中佐待遇で同行している。

ジークフリード帝は、安全のため彼女をオーディンに待機させておきたが、本人の希望とアンネローゼからの願いで、最終的には承諾した。

未だに残るマリンドルフ伯への疑念を払拭し、人心を安定させるためにヒルダの同行が有効であったのだ。

さらにヴァルハラ星域ではワーレンが未だ負傷の癒えぬミッターマイヤーと共に一万隻を率いて待機しており、不測の事態に対応することになっていた。

宇宙暦801年 12月15日、フォーク艦隊接近の報が入った。

艦数は、事前の情報通り一万五千隻ほどと推測された。

ジークフリード帝は、全軍で一万五千隻に当たろうと、三個艦隊でフォーク艦隊に接近した。

しかし、接近するとともにフォーク艦隊の実態がわかり、困惑を深めることになった。その艦隊は一千五百隻ほどの艦艇以外は牽引する小惑星、欺瞞装置などからなっていたのだ。

困惑しながらも、攻撃を仕掛けると、フォーク艦隊は牽引してきた小惑星群を投棄して、蜘蛛の子を散らすように逃走を開始した。追撃しようとした帝国軍だったが、小惑星群に邪魔をされているうちに距離を取られてしまった。

後に残されたのは牽引されて来た小惑星群のみであった。

ビッテンフェルトは憤慨した。

「戦わずに逃げるとはどういうことか。まさか本当にただの陽動だったのか?」

ルッツは自身腑に落ちないながらもビッテンフェルトに反論した。

「逃げたと思って油断したところを今度こそ一個艦隊で襲う算段かもしれぬ。それに、この小惑星群にも警戒が必要だろう。ファルスター星域で痛い目にあつたのを忘れたのか?」

各艦隊でも幕僚達が議論をしていた。

だが、敵のあつさりとした逃げっぷりに、毘だど考える意見が大勢を占めた。

とある士官は「敵が戦意もなく、ただ逃げているように思われます」と発言したが、賛同は得られなかった。

ベルゲングリーンがジークフリード帝に尋ねた。

「どうなされますか？」

「別に一個艦隊がいる可能性があります。警戒を怠らぬよう全艦艇に連絡してください」

「陛下」

ヒルダが呼びかけた。

「なんででしょうか？フロイライン・マリンドルフ？」

「連合のヤン提督からも連絡があつたように、これは陽動である可能性が高いと考ええます。一個艦隊などどこにもおらず、いるとすれば連合艦隊に向かつている最中ではないでしょうか？オーディンには一万隻が待機していることも考えれば、我々は一刻も早く連合艦隊と合流すべきかと」

「しかし、そうでない可能性もある。斥候を放ち、一個艦隊の不在を確認してからでなければ動けません」

「陛下！」

「我々が優先するのは、連合艦隊よりもオーデインです」

ヒルダはなおも言いかけたが、今は何を言っても無駄だと思い直した。

……ジークフリード帝の頭には、一人の女性のことしかないのだから。

ヒルダにはそれが悲しかった。だが、何を悲しく思っているかについては、彼女自身よくわかっていなかった。

新銀河帝国軍は貴重な時間を浪費することになった。

フォーク艦隊の副司令官、アーサー・リンチ少将は、呑みだくれながらも、無事に新帝国軍から逃げ出せたことにほっとしていた。

司令官のフォークは徹底抗戦を叫んだが、ルドルフ2世からの撤退命令書をユリアンがリンチに預けていたことで、全艦速やかに逃走に移ることができたのだった。

今、フォークは司令官室に閉じ込められていた。

フォークとリンチは、事前にユリアンから指示を受けていた。

戦力を偽装しつつオーデインに向かい、帝国軍と接触したらすぐに逃げろ、と。

ユリアンから笑顔でチョコ・ボンボンの包みを渡されたフオークがその場で卒倒したため、指示を聞くのはリンチの役回りとなった。

酒瓶を片手に酒気を漂わせながらリンチは尋ねた。

「戦わないでいいのかわ？」

ユリアンは笑った。

「一千五百隻で戦えなんて無茶は言いませんよ。しかし、絶対に捕まらないでください。お願いしたいことはそれだけです」

「それだけか？」

「ええ、それだけで敵は勝手に自縄自縛に陥ります」

リンチは自嘲した。

「それだけのことですらできないかもしれないかもしれんぞ。エルランゲンで民間人を見捨ててまで逃げ出したのに結局帝国軍に捕まった男だぞ？」

ユリアンは笑みを引つ込めて、少し真面目な顔になった。

「エルランゲンであなたがあつさり捕まったのは、ヤン提督の策略があつたからでしょう」

「何だつて？」

「あなただつて逃げられる算段を立てた上で逃げたはずだ。ヤン提督としては、帝国軍

にあなたが逃げたことを気づいてもらわなければいけなかった。だから、確実に気づくように仕向けたんです。帝国軍に密告するとかしてね」

証拠のある話ではなかった。自分がヤン提督の立場ならそうしただろうというだけの話だった。

だが、リンチ少将には思い当たる節があつたようだ。

「ヤン・ウエンリー、あの男……」

酒で濁り切っていたリンチ少将の目に少しだけ生気が戻つたようだった。恨みという名の生気が。

ユリアンは心の中で少しだけヤンに謝つた。

「民間人を置き去りにしたあなたの行為は到底褒められるものではない。ですが、ぼくはあなたの能力自体は疑っていません。同盟軍でも将来を嘱望されていたあなたの能力は。だから、お願いします」

「わかつた……」

リンチはなおも考え込みつつも、返事だけはしっかりとユリアンに返した。

そして今に至るのだった。

「さて、これからどうしたもんかねえ」

リンチは酒瓶片手に一人艦橋で呟いた。

ユリアンは、逃げた後は好きにしていっていいと言っていた。ルドルフ2世にはうまく言うておくから雲隠れするつもりならそれでもいい、とも。

根拠地の場所は教えられていないのでそこに行くことはできない。

神聖銀河帝国軍のどこかの部隊と合流するか、逃げてほとぼりの冷めた頃に同盟に帰還するか。いや、帰っても家族が迷惑するだけだろうから、いつそ海賊になるか。

フオーク艦隊の構成員は、エルランゲンでリンチと共に捕虜になった者、同様に帝国軍捕虜となった同盟軍人で、何らかの理由で同盟に帰れず、それでいて軍隊にしがみついて生きざるを得ない、そんな者たちだった。

彼らはまともな司令官の元ではやっていけない。司令官がフオークやリンチのような人間だったから、ついてこられた者たち。

リンチとしては彼らのことも考える必要があった。歪んだ形ではあったが、リンチに責任感というものが戻ってきていた。

「まあフオークの大將にも意見を聞いてみるか……いちおう」

人生の負債が清算できたわけではない。それはリンチにもわかっていた。

それでも今回は逃走に成功したせい、心なし軽くなった足でリンチは司令官室に向かった。

第四部 14話 アルジャナフ星域会戦

宇宙暦801年12月14日、連合軍派遣艦隊は帝国領に入り、ひとまずは新帝国軍との合流を優先してヴァルハラ星域に向けて航行を続けた。

その間にフォーク艦隊と新帝国軍が接触したとの報も入った。ヤンはジークフリード帝に、連合軍との合流を優先するよう、再度の要請を入れた。

12月17日、アルジャナフ星域を航行中の連合軍に、神聖銀河帝国軍接近との報告が入った。

ヤンはアルジャナフ星域で神聖銀河帝国軍を迎え撃つことに決めた。

アルジャナフ星域は、アルジャナフ、かつてはくちよう座イプシロンとも呼ばれた恒星を中心とする星域であり、地球統一政府時代の植民領域の外縁に存在した。かつてテラフォーミングが行われた惑星は放棄されて久しく、今や大気が希薄となり居住不能となっていた。

連合軍派遣艦隊は、既に神聖銀河帝国の領域に足を踏み入れていたとも言える。

12月18日、アルジャナフ星域に布陣した連合軍四万隻に対し、神聖銀河帝国軍五

万隻が接近して対峙した。

ここにアルジヤナフ星域会戦が発生した。

独立諸侯連合軍の布陣は、

左翼から順に

ヤン元帥 一万隻

シュタインメッツ大将 一万隻

フオイエルバツハ大将 一万隻

シャウデイン中将 一万隻

であつた。

神聖銀河帝国軍の布陣は、

右翼から順に

ルドルフ2世 一万二千隻

エルラツハ中将 一万隻

ノルデン中将 一万隻

グリルパルツアー中将 六千隻

クナツプシュタイン中将 六千隻

コルプト少将 六千隻

であつた。

ルドルフ2世は皇帝座乗艦イズンに搭乗し、自ら艦隊を指揮しており、その傍らにはメルカツツ元帥とミンツ大将が控えていた。

互いに横陣を敷いており、正面からのぶつかり合いとなつた。

戦闘は、オーソドックスな砲撃戦から始まつた。自軍に比べ、攻撃が弱いことを見て取つたルドルフ2世は前進を指示した。

メルカツツ元帥仕込みの近接戦闘に移行する構えであつた。

自らの指示に従い、順調に近接戦闘に移行しようとしている各艦隊をスクリーンで確認していたルドルフ2世は違和感を感じた。

「メルカツツ元帥、敵からの妨害が少ない。これははめられたか？」

「その可能性が高いですな。しかし中止命令は間に合わないでしょう」

果たして、神聖銀河帝国軍が雷撃艇などを中心とした近接戦闘に出たそのタイミングで、新しく前線に出てきた連合軍の艦艇が前進し、自爆したのだつた。

多数の雷撃艇、駆逐艦が破壊され、近接戦闘は頓挫した。

「やられた。近接戦闘に出るのを読まれていたか」

これまでの対帝国の戦闘では近接戦闘を多用して来た。敵に読まれて、攻撃を誘われるのも考えてみれば当然だつたのだ。

ルドルフ2世は笑った。

「だがそう来なくては面白くない。敵の艦列は今の自爆で乱れている。これは好機だ！」

神聖銀河帝国軍の攻撃が苛烈さを増した。その攻撃は確かに連合軍に一定の打撃を与えた。だが一方で神聖銀河帝国軍の損害も予想以上に大きかった。

艦列の局所に飽和的な攻撃を受け、艦列が裂かれたところをさらに砲撃で傷口を広げられた。

長距離ミサイル、大出力光学レーザー、荷電粒子ビームなどからなるその飽和攻撃は、艦艇のものではなかった。

同盟軍人であったユリアンには、それが何によるものか判断できた。

「アルテミス之首飾りです！」

先の対同盟戦で接收されたアルテミスIIを、ウォーリック伯がアルテミスIIIと同様に航行可能にした上で、ヤンに押し付けたのだ。

ヤンとしては使い勝手が悪い兵器に思えたが、押し付けられたからには有効活用を考えてみたのだった。

だが、アルテミス・システムは既にラインハルトによって攻略されていた。

「アルテミスにはミサイルが有効です。雷撃艇を……」

言いかけてユリアンは気づいた。

既に雷撃艇の大半は自爆に巻き込まれて破壊されてしまっていたのだ。

ユリアンは感嘆せざるを得なかった。

「ヤン・ウエンリー、ここまで考えていたのか」

神聖銀河帝国軍は損害を積み重ねた。

そこに、さらなる凶報が舞い込んだ。連合、偽帝国間の通信を傍受した結果、ジークフリード帝の艦隊がアルジャンフに接近しつつあるとの報告があったのである。

各艦隊の司令部は浮き足立った。

ルドルフ2世も、一瞬冷静さを失った。

「フォークメーやはり役に立たなかったではないか！ミンツ大将、どうしてくれる!」

だが、ユリアンは涼しい顔をしていた。

「心配いりません。偽帝国軍が最短経路で接近しているなら事前に配置した我が軍の斥候が知らせてくるはずですよ。最短経路を通らないならば、短期間でここに来られるはずがありません。これはヤン・ウエンリーお得意のペテンですよ」

ルドルフ2世は落ち着きを取り戻した。

「その通りだ。しかしよくわかったな」

ユリアンは事もなげに答えた。

「ヤン・ウエンリーのペテンには痛い目を見させられましたし、いろいろと学ばせてもらいましたから。彼の考えるところはある程度まではわかります」

ルドルフ2世は笑った。

「なる程、似た者同士か」

微妙な顔になったユリアンを尻目に、ルドルフ2世はメルカッツに問いかけた。

「さて、どうすべきだと思う？」

「アルテミスの攻略の目処が立たない以上、ここは焦らず、一旦後退すべきでしょうな。敵が偽電を流して来た目的は、我々を焦らせて無理な攻勢を行わせるか、撤退させてその際に損害を強いるか、その両方です。どちらに転んでも敵に損はありません。ですが、後退なら、敵に逆撃をかけることが可能です」

「ふむ、我が艦隊司令官達は、戦術バリアチオンRエテを実行できるな？」

「きつちり仕込んであります。新参のグリルパルツァー、クナツプシユタインの二人は少し心配ですが、なんとかするでしょう」

メルカッツは、旧門閥貴族の将兵達に、多数の死者が出るほどのしごきを行なっていた。

新帝国の目を盗んで行う必要があっただけに、一度の教練の密度は実戦さながらだった。メルカッツにとって、門閥貴族は仇敵であり、死んでも構わないとさえ思っていた。

「役立たずが死ぬ、まさにルドルフ大帝の望むところだろう。教練について来られないならゴールデンバウム朝の藩屏として喜んで死ぬがいい」

脱落した貴族将校の中には、実際にルドルフ2世より死を賜った者もいたため、皆必死となった。

兵士層には初めて銃を手取るような素人の地球教徒も多かったが、彼らは彼らの信じるところに従い、喜んで教練に参加した。

結果、かつてローエングラム軍に惨敗した貴族軍とは比べ物にならない精兵部隊が出現していたのだった。

ルドルフ2世は指令を出した。

「よかろう。全軍に戦術バリアチオンRを指示せよ」

神聖銀河帝国軍は後退を始めた。艦列には乱れが生じ、付け入る隙が多々あるように見られた。

連合軍の艦隊は前進し、攻勢を強めようとした。

だが、艦列の乱れと見えたものは、多段に再構築された巧妙な防陣であった。

連合軍は攻勢に出た際の艦列の乱れを逆に衝かれ、損害を出すことになった。

その隙に、神聖銀河帝国軍は大した損害を出さずに後退を果たしてしまった。双方補給のため、戦いは一旦水入りとなった。

「まずいな」

副官が焦ったので、ヤンは言葉を足した。

「ああ、紅茶の話ではなくて戦況の話だよ。……ブランデー足してもらえるかな？」
「駄目です」

ベルトラム准将が聞こえないように小声で吐き捨てた。

「コントか」

マルガレータは不思議に思った。

「何がまずいのですか。敵は攻めあぐねて後退しましたが」

「用意していた手品のタネが切れてしまったんだよ。あそこで無理な攻めを続けてくれたらよかったのだが、敵は冷静だな。偽電を見抜いたのはユリアン・ミンツかな。それにあの鮮やかな後退はメルカツツ元帥の指導の賜物か。厄介だなあ」

「ルドルフ2世はどうですか？」

ヤン艦隊はルドルフ2世の艦隊と直接対峙し、戦術レベルでの鏖迫り合いを行なっていた。

「強い。隙あらば策に引つ掛けようとしてくるし、こちらの策には対応が早い。まったく気が抜けない。これでまだ13歳の少年だというのが……未恐ろしいね」

ヤンは早めに引退しておくべきだったと思ったが、自分に期待している副官の前では、なかなかそんなことは言えなかった。

「この戦い、今後のために見届けさせて頂きます」

「今後？」

マルガレータは臆することなく言った。

「ええ、状況次第では、今後連合が何度も戦う相手になりそうですから。ヤン元帥が引退された後も安心して見ていて頂けるように、私も早く一人前になってルドルフ2世と対等に戦えるようになりたいと思います」

ヤンは引退を考えていたことを見透かされたかと思った。しかし、そうではないことに気づいた。

彼女は三十年後を見据えていたのだ。そんなに長く戦い続ける気なのかとヤンは思ったが、確かに戦況によってはそうなるのだ。

ヤンは一瞬、

旧銀河帝国領をすべて支配下に置き、連合までも併呑しようと攻めよせる鋼鉄の巨人と、それに毅然として立ち向かう美しい女提督の姿を幻視した。

だが、それはヤンの願うところではなかった。連合の新しい世代にまでこの悪夢を味合せたくはなかった。

ヤンはマルガレータに微笑みかけた。

「そうならないように、今頑張ろうか。私も微力を尽くすから、ぜひ助けてほしい」

マルガレータは花のように微笑んだ。

「はい！ヤン提督！」

ヤンは幕僚達に声をかけ、次の戦いへの準備に入った。

「ヤン・ウエンリー、首から下がもげればいいのに」

一人だけ不穏なことを呟いてはいたが。

一方の神聖銀河帝国軍の方ではユリアンがルドルフ2世に、ヤンと戦った感想を尋ねていた。

「ヤン・ウエンリーのペテンがどういうものか実感できた。しかも、ペテンだけではなく、戦術指揮官としても恐ろしく手強い。余の一番の障害となる男だと卿が言った理由がよくわかった」

「よい経験が得られたようですね。これからどうなされますか？アルテミス・システム

が敵にある限り、優勢の確保はなかなか難しいですが」

ルドルフ2世は、悪戯を思いついた子供そのものの笑みを見せた。

「あれに関しては、余に試してみたいことがある」

ルドルフ2世はその作戦を説明し、その準備が急ぎ進められることになった。

ユリアンは再度尋ねた。

「これがうまくいって、ようやく戦力上は優勢を確保できるわけですが、ヤン・ウエンリーが問題です。彼を遊ばせておくと優勢など簡単にひっくり返される恐れがあります。すがいかがいでしょうか？」

「やはり余が抑えるしかなかろう。ミンツ大将、その間に他の艦隊を壊滅させて欲しい。ヤン・ウエンリーになくて、余にある最大の優位点は、メルカッツ元帥とミンツ大将がいることだ。だから、ミンツ大将に任せる」

ユリアンは頼まれることに弱かった。

「大任ですが、承知しました」

こうして両軍、二日目の戦いに臨むことになった。

第四部 15話 弟子たちの戦い

ユリアンは用意された旗艦アース級戦艦5番艦コアトリクエに搭乗し、各部隊から抽出した三千隻を直卒とした上で左翼の指揮を執ることになった。

ユリアンは、コアトリクエの艦長に驚くことになった。メルカツの娘、ゲルトルード・フォン・メルカツ中佐が艦長を務めていたからだ。

貴族階級に対して厳しい連合の法に従い、メルカツの一人娘のゲルトルードもまた軍人となっていた。ゲルトルードは美人であったが、それ以上に女傑という言葉が似合う女性であった。

「ゲルトルードさん、いえ、メルカツ中佐、神聖銀河帝国に協力する気になったのですか？」

「そうよ、ミンツ大将。父が、あの少年皇帝や新しい弟子達に絆されて、やる気になってしまったからね。退役して以来ずっとつまらなそうな顔をしていたから、父にとつては案外よかったのかもしれない。……そうでなければ、こんな腐ったところ、父と母と、あと、カリンを連れてすぐに逃げ出してやったんだけど。望むならあなたも連れてね」

その開けっぴろげな発言にユリアンの方が焦ってしまった。彼女の後ろには地球教徒の監視役兼護衛が数人付いていたからだ。

「大丈夫よ。父に対する大事な人質を、不穏な発言一つで処分することなんてないわ。でしよう？ ミンツ主教？」

「そうでしょうけれど」

「ははは。まあ、あなたや少年皇帝をからかうのも楽しいのだけど、そればかりでもストレスが溜まるからね。でも帝国では女が艦長をやる船に乗りたくない人なんていないよ。でね。だから無主の旗艦級戦艦の艦長になっていただけ、あなたが乗ることになるなんて奇遇ね」

「そうですね。……ゲルトルドさん、先に一つ」

「何？」

彼女が艦長を務める以上、ユリアンには予めことわっておくべきことがあった。

「今回の戦いでぼくがとる策は、ゲルトルドさんにとって不愉快かもしれないわ。ですが、勝つために必要なんです」

ゲルトルドは笑った。

「あなた達のやり口は常に不愉快極まりないわ。だから今更ね」

ゲルトルドは少し意地の悪い顔になった。

「私からも今のうちに一つ」

「何でしよう？」

「カリンが、最近あなたが会いに来ないと寂しがっていたわ。避けられていると思っ
ているようよ。……嫌っていいなし、むしろその逆なんでしょう？この戦いが終わった
ら、会いに行つてあげて」

ユリアンはこの奇襲に狼狽えた。

「彼女が？むしろ、ぼくが嫌われているのかと思っていました」

「あの子、感情表現が下手くそだから。……まあ、私もだけど」

雑談の時間は終わり、お互い、軍務に戻った。

独立諸侯連合軍の布陣は、

左翼から順に

ヤン元帥 九千隻

シュタインメツツ大将 九千隻

フォイエルバツハ大将 九千隻

シャウデイン中将 九千隻

であった。

神聖銀河帝国軍の布陣は、

右翼から順に

ルドルフ2世 一万一千隻

エルラツハ中将 九千二百隻

ノルデン中将 九千隻

グリルパルツアー中将 四千四百隻

クナツプシユタイン中将 四千四百隻

ユリアン大将 三千隻（クナツプシユタイン艦隊の後方）

コルプト少将 四千七百隻

であつた。

ユリアン以外は、双方前日と同じ布陣だつた。

神聖銀河帝国は左翼側の戦力を若干厚くしていた。対する連合のフォイエルバツハ、シャウデインの両提督は、いずれもメルカツツの麾下で勇名を馳せた歴戦の提督であり、連合の将らしく不利な兵力での持久戦にも長けていた。仮にヤン自身であっても両提督相手には容易に均衡を破ることはできないだろう。ヤンとしては帝国左翼の敵を彼らに任せ、自らはルドルフ2世への対応に集中するつもりだつた。

双方有効射程距離から少し間を取って布陣し、相手の出方を見ているようであった。しかし、突如、神聖銀河帝国軍から同盟軍に伸びる火の柱が出現した。

それは、連合軍艦隊内に散在するアルテミスII、十二個の衛星のそれぞれに向けて伸びていくようだった。

シユタインメッツは正体に気づいた。

「指向性ゼツフル粒子！それでアルテミスIIを破壊するつもりか！」

参謀長のナイセバツハ中将は冷静に指摘した。

「いえ、ゼツフル粒子は探知されておりません。アルテミスまでは届かないかと」

その通りだった。もし火柱が連合軍艦隊まで届くものであったなら既に探知されていたはずだった。

果たして、火柱は連合軍の手前で止まった。

だが、消えゆく火柱を通路として、帝国軍は、残存の雷撃艇や駆逐艦を同盟軍至近まで送り込んでいた。

そして動揺する同盟軍艦艇を置き去りに、そのままアルテミスIIまで突入し、ミサイルを放ったのだった。

雷撃艇、駆逐艦に搭乗していたのは地球教徒の決死部隊であり、躊躇いは存在しなかった。

十二個の衛星のうち、半数がミサイルで、残り半数が艦艇による体当たり攻撃で破壊された。

神聖銀河帝国軍はアルテミスⅠの破壊を確認する前から前進を開始しており、動揺し、艦列も乱れた連合軍に対して先制の砲撃を仕掛けた。

無論連合軍も反撃したが、機先を制されたのは事実であった。

そんな中、左翼のフォイエルバツハ艦隊、シャウデイン艦隊は協調して前進を開始した。

フォイエルバツハ艦隊が一時的に敵の圧力を引き受ける間に、シャウデイン艦隊が、敵の側面に回り込み、近接攻撃を仕掛けたのだ。

フォイエルバツハ、シャウデインはメルカッツ元帥麾下の提督であった。メルカッツの薫陶を受けたのが神聖銀河帝国軍ばかりではないことを彼らは証明した。

コルプト、クナツプシュタイン艦隊は後退した。

今や、火球と化する艦艇は帝国軍の方が多くなっていた。

しかし、そこにユリアン率いる高速艦三千隻が戦場を大きく移動し、外縁からシャウデイン艦隊側面に攻撃を仕掛けた。

気づけば、シャウデイン艦隊はユリアン、コルプト、クナツプシュタインに半包囲されてしまっていた。

ユリアンは事前にコルプト、クナツプシュタインと示し合わせており、タイミングを図っていたのだ。

フオイエルバッハ艦隊が自身も攻撃を凌ぎつつ、救援部隊を差し向けることでシャウデイン艦隊は戦力を削られつつも窮地を脱することができた。

しかしこの時にはユリアン・ミンツの悪辣なベテンは既に始まっていた。

一方の連合軍右翼側ではヤンとルドルフ2世が熾烈な戦いを繰り広げていた。

表向きは左翼と比べて静かと言ってもよいかもしれなかった。

お互いに相手を倒すよりも、時間稼ぎを目的としていたからだだった。

ルドルフ2世はユリアン・ミンツを信じて。

ヤンはジークフリード帝の合流に望みを託して。

だが、それだけに互いの策の読み合い、潰し合いは熾烈だった。

ヤンの智謀と経験、ルドルフ2世の才気と活力が拮抗した。

相手が疲れを知らぬ少年であるというだけでも、ヤンにとつては大きな脅威だった。

お互いに自艦隊だけでなく、隣接するエルラツハ、シュタインメッツの両艦隊を支援した。エルラツハ、シュタインメッツ両艦隊の戦いはさながらヤンとルドルフ2世の代理戦争の様相を呈し、壮絶な消耗戦となっていた。

この時ヤンは一瞬の気も抜けない策の読み合いに集中せざるを得ず、右翼を気にする余裕を失っていた。

また、神聖銀河帝国による通信妨害が激しく、右翼に通信で指示を出すことはできない状態となっていた。

だが、マルガレータが注意を喚起して来た。

「右翼の様子がおかしいです」

この時ヤンには余裕がなかった。

「劣勢なのはわかっている。おかしい、だけでは何を言いたいのかわからない」

マルガレータは消沈しつつも答えた。

「申し訳ありません。わからないのです。しかし、敵の攻撃に対する味方の反応がとにかくおかしいのです」

ヤンは自らの副官が無駄な情報を伝えて困らせてくるような人物ではないことを思い出した。

「記録を見せてくれ」

「たしかに反応が過剰で、そのために損害が増しているように思える。だがそのような理由がわからない。……ヘルクスハイマー大尉」

「はい」

「目下司令部には余裕がない。だが右翼を放置してはおけない。伝令も出してみるし状況によっては後退させるが、事は急を要する。だから君に頼む。右翼の動きがおかしい理由を説明してくれ」

尊敬する提督からの思わぬ大任にマルガレータは緊張しつつも高揚した。

「承知しました！」

マルガレータは右翼のこれまでの戦闘推移と現在の戦況を確認し、思考した。

おかしいのは、やはり敵ではなく味方の動きだ。だが、その理由がわからない。シユタインメッツ艦隊、シャウデイン艦隊の両方がおかしいという事は属人的な理由ではなからう。だが宙域にもその理由は見当たらない。

ではやはり敵にその理由があるのか？

マルガレータは改めて敵の動きを確認した。

そして気づいた。

その理由に。そして、その悪辣な策略に。

それに気づいたマルガレータは、怒りを抑えられなかった。

思わず帝国で暮らしていた頃の言葉遣いに戻って叫んだ。

「妾たちを愚弄するのも大概にするがよい！この、卑しい性根のペテン師が！」

その言葉は、彼女の尊敬する提督に見事に突き刺さった。

艦橋の人員は皆、何事かと振り向いた。

とある副参謀長は「いい気味だ」と呟いていた。

マルガレータはヤン提督が一部で何と呼ばれていたかを思い出して慌てた。

「ああつ！ペテン師と言ってもヤン提督のことではないのです！敵のことです」

「わかっているから。その言葉も余計だったかな……」

ヤンは気を取り直して尋ねた。

「それで何がわかったんだい？」

「敵は、その戦術を模倣することでメルカツツ元帥の振りをしています！フオイエルバツハ提督、シャウデイン提督、それにその配下の多くの将兵はメルカツツ元帥の麾下、戦術上の弟子でした。彼らは自らの対峙する相手がメルカツツ元帥本人だと思い込まされ、本来の実力を発揮できなくさせられているのです！本人達にはそのつもりはないかもしれませんが、どうしても影響が出てしまっているのです！」

メルカツツが重傷で長時間指揮を執れないことを考えればメルカツツではなく、メルカツツの振りをした誰かであることはマルガレータにとって明白に思えた。

しかし、フオイエルバツハやシャウデインにとって、メルカツツはそのような状態でも指揮を執りかねない上官であったのだ。

あるいは無理に執らされているかもしれないと考え、冷静でいられなかった。メルカツツを高精度に模倣できる人間がいるなど想定もできなかった。

ヤンが気づかず、マルガレータが気づけたことにも理由があった。メルカツツ元帥の戦術、艦隊運用術は連合では教本にも載っており、学生ですらよく知っているものだった。ヤンも知らないわけではないにしろ、彼女達ほどには馴染んではいなかったのだ。

マルガレータは感情が昂り、涙を我慢しているようだった。

「家族を人質に取られて無理矢理協力させられた上、自らの信望までもが作戦に利用される。こんな無念がありませんか！こんな、こんな悪魔のような策略を考え、実行できるのは一体どの誰でしょうか？」

「……おそらくユリアン・ミンツだろうね」

「ユリアン・ミンツ、この外道めが。妾はそなたを許さぬぞ……。あ、いえ、失礼しました」

本人が知らぬ間に不倶戴天の敵をつくってしまったことに、ヤンはユリアンに少しだけ心の中で謝った。

そして、自分がユリアンの立場だとしたら同じようなことをやり兼ねないということ、ヘルクスハイマー大尉には絶対に黙っておこうと思った。

「ヘルクスハイマー大尉、全艦隊に連絡を。メルカツツ元帥がルドルフ2世の座乗艦に

同乗していることを確認、と」

「確認できたのですか!？」

「できていないよ。肝心なのはフォイエルバッハ中将与シャウディン中将に自分達の相手がメルカッツ元帥ではないことを確信させることだから」

「そういうことですか。まるでペテンの掛けあ……いえ、承知しました!」

その情報は伝令用艦艇によって全司令官に伝えられた。

ユリアンは、メルカッツがルドルフ2世や他の将兵に戦術シミュレーションで指導を行なうのをずっと見てきたし、直に何度も対戦もしていた。弟子とさえ言えたかもしれない。

ユリアンの模倣の才は、メルカッツの戦術の再現すら可能としていた。実際は本人に及ばないにしても、メルカッツの戦術をよく知る人間がメルカッツだと考えるだろう戦術を採るという意味では、本人すら凌駕していた。

ユリアンはフォイエルバッハとシャウディンがメルカッツの麾下にいたことを知っており、このようなペテンを思いついたのだった。

尊敬する元上官、師匠が、理由はわからないが、自由に動かぬ体をおして自分達に直

接攻撃をかけてきている。その無意識の怯みにつけ込んで、ユリアンは優勢な戦力で敵を大いに削った。

ユリアンは敵が調子を取り戻したことに気づいた。

「ペテンに気づかれてしまったようですね。でも、もう十分です」

たしかに持ち直しはしたが、もう、形成の挽回が難しいほどに連合軍右翼は削られていた。

既に戦闘は24時間を経過し、日付も変わっていた。

連合軍左翼側はこう着状態であり、右翼も立て直すことができたため、完全に一方的な戦いにはなっていないが、このままいけばずると敗北の坂を転がり落ちるのは確実に思われた。

ヤンは撤退のために考えていた策の実行を本気で考え出していた。

しかし……

「偽帝国艦隊アルジヤナフ星域に向けて接近中！」

ルドルフ2世の元に斥候部隊からその報告が入った。

「何?! 予想より大分早いではないか。偽帝ジークフリードも流星にただの愚物ではなかったか」

だが、連合軍と戦って消耗した状態で新帝国軍と戦うのは分が悪かった。

ルドルフ2世は撤退を決意した。

「もう少し削りたかったが、欲を出して失敗してもしようがない。次の楽しみとしよう」
神聖銀河帝国軍は最後の攻勢に出た後、整然と水が引くように撤退して行った。
残されたのは満身創痍の連合軍艦隊だった。

第四部 16話 いざ決戦へ

ジークフリード帝はヴィーンゴールヴ星域で、神聖銀河帝国の一個艦隊の探索を行ったが、その姿を見つけることはできなかった。

宇宙暦801年12月17日、ヤン艦隊からアルジャナフ星域で神聖銀河帝国軍と遭遇との報が入った。

次の行動になお迷っていたジークフリード帝のもとに、オーデインより超光速通信が入った。アンネローゼからであった。

アンネローゼは戦いの最中に無用な連絡を入れるような人ではない。

ジークフリード帝はこれを仕組んだだろう人物を睨んだ。

「アンネローゼ様……カイザーリンに連絡を入れましたね」

その人物、ヒルダは頭を下げながら答えた。

「今、陛下が耳を傾けてくださるのはカイザーリンのお言葉のみですので。越権と思われるならどうぞ何なりとご処分ください」

ジークフリード帝は無言で通信室に移動した。

ヒルダも迷惑がられるのを承知で同席した。

画面に映ったのは、アンネローゼと、負傷をおして出仕したミッターマイヤーであった。

オーデインに連絡を入れていたのはヒルダだけではなかった。ヤンもまた、ジークフリード帝を動かすため、ミッターマイヤーを介してアンネローゼに要請を入れていたのだ。

ジークフリード帝はわざと素っ気ない態度をとった。

「カイザーリン、今は戦いの最中です。通信は手短にお願ひします」

「承知しています。ですが、その敵はどこにいますか？今その敵と戦おうとしているのはヤン提督ではないのですか？」

「しかし、フオーク提督の別働隊が隠れている可能性があるのです。ここを離れるわけにはいきません」

アンネローゼの顔に浮かぶ哀しげな色が濃くなった。

「いいえ、あなたはヤン提督と合流すべきです。万一の時にはミッターマイヤー元帥、疾風ウオルフがいます。万一オーデインが失陥したとしても、我々は脱出します。……以前あなたとそうしたように」

ジークフリード帝はリッテンハイム大公の内乱のことを思い出した。

ミッターマイヤーも言上した。

「陛下、どうか我々を信じてお任せください」

「しかし」

「ジーク」

アンネローゼは悲しげにその名を呼んだ。

「あなたが私を大切に思ってくださるのはよくわかっています。それがラインハルトとの約束であることも。ですが、このままでは弟の成し遂げたことのすべてが無に帰してしまいます。ゴールデンバウム王朝が復活するのですよ」

ジークフリード帝は、かつて黄金の髪を持つ友と結んだ約束を思い出した。

ゴールデンバウム王朝を倒し、アンネローゼ様を助ける、と。

アンネローゼ様をお救いすることはできた。これからも自分は彼女を守り続けるだろう。だが、ゴールデンバウム王朝が復活すれば、また第二第三のアンネローゼ様が生まれる可能性があるのだ。

ヒルダにはジークフリード帝の目に火が灯ったように感じた。

まるで、彼の友が乗り移ったかのように。

ジークフリード帝の声に覇気が宿った。

「ミッターマイヤー元帥」

「はっ！」

「オーデインのこと、カイザーリンのこと、お願いします。私は連合軍艦隊と合流します」

「御意！」

ジークフリード帝はアンネローゼを見つめた。

「アンネローゼ様」

「はい」

「今一度あなたの元を離れることをお許してください。ラインハルト様の成し遂げたことを守るため、行ってまいります」

「ジーク、お願いします。私は待っていますから」

「はい！」

ジークフリード帝が去った後、アンネローゼは去ろうとするヒルダを引き留めた。

「ヒルダさん」

「はい、皇后陛下」

「ジークのこと、お願いしますね。私は待つことしかできないけれどあなたなら」

「ご安心ください。このヒルダ、皇帝陛下を微力ながらお支え申し上げます」

「……ヒルダさん、もう少しご自分を出されてもいいのですよ。私などに遠慮なさる必要はないのです」

「皇后陛下、仰つてゐる意味がわかりません。……いえ、失礼いたしました」

ヒルダはスクリーン越しにアンネローゼの瞳を見つめた。

「皇后陛下、偽りを申し上げました。仰りたいことはわかります。ですが、皇后陛下もご自身のお気持ちに正直になられてください。そして皇帝陛下のお気持ちに対してもそうされれば、私などが入る余地はないことがわかるはずですよ」

ヒルダはそれだけを伝えると、一礼して去つて行つた。

残されたアンネローゼは、哀しげな瞳で誰もいないスクリーンをしばらく見つめていた。

ジークフリード帝は艦隊に指示を出した。

「ビッテンフェルト艦隊に連絡、アルジヤナフ星域に先行して連合軍艦隊を支援せよ、と」

実のところジークフリード帝も何もしていないわけではなかった。

ビッテンフェルト艦隊をヴィーンゴールヴ星域から事前に近隣の星域に移動させていた。フォーク艦隊が発見されれば即座に戻る事が可能である一方、発見されなければアルジヤナフまで先行できる体制を準備していたのだ。

ビッテンフェルト艦隊は疾風ウォルフも舌をまく速度で急行した。

神聖銀河帝国軍の哨戒網に引っかけたのはこのビッテンフェルト艦隊であった。

宇宙暦801年12月21日、ビッテンフェルト艦隊は連合軍艦隊と合流した。

さらに、12月23日、ジークフリード帝率いる本軍と合流を果たした。

四万隻を数えた連合軍艦隊はその数を二万二千隻に減じていた。

これに新銀河帝国軍三万五千隻が加わり、五万七千隻が神聖銀河帝国軍に対抗する戦力となった。

一方の神聖銀河帝国軍は四万隻の戦力を維持していると考えられた。

ルドルフ2世はヤンに対し「ヴェガ星域で待つ」との通信を残していた。

彼らは実際ヴェガ星域方面に撤退しており、言葉通りそこで待ち受けていることが推測された。

ジークフリード帝はまずヤンに謝罪した。陽動に引っかけられ合流が遅れたことに対してである。その上で改めて協力を要請した。

ヤンはこれを受け入れた。

無論連合軍内でもジークフリード帝への怒りの声はあったが、ジークフリード帝は連合の各艦隊を自ら回って頭を下げ、改めて協力依頼を行なった。

この行為は連合軍将兵に驚きをもって迎えられた。かつて神聖にして不可侵であったはずの銀河帝国皇帝が連合に頭を下げたのだ。

あるいは皇帝としての権威を損なう行為であり、臣民への裏切りですらあったかもしれない。

しかし、ジークフリード帝には優先すべきものがあつたのだ。

少なくともこの行動によって、連合軍内の新帝国への反感は収まった。

ヤンはジークフリード帝と今後の方針を話し合った。

神聖銀河帝国の根拠地がわからない以上、ルドルフ2世のいるヴェガ星域を攻撃せざるを得ない。時間をおけば連合と新帝国が敗北したとの印象を内外に与え、さらなる離反が発生する可能性がある。ならば、敵も戦力を消耗し、その位置が判明しているこの機会を逃すべきではない、というのが二人の結論であつた。

根拠地が不明というその一事が、二人から戦略上の選択肢を奪っていた。

連合軍派遣艦隊は、新帝国が連れてきた補給艦と工作艦によって補給と艦艇整備を済ませて、新帝国軍とともにヴェガ星域に出発することになった。

ヤンはアルジヤナフでの会戦の後、めっきり口数が減つた。

マルガレータは恐る恐る尋ねた。

「提督、どこか調子がお悪いのでは」

「どうして？」

「いえ、あの、いつもより紅茶を頼まれる回数が少ないので」

「ああ。いや、そうではないのだけど。ただ、腹を立てていたんだ」
「小官にですか!？」

心当たりのあつたマルガレータは震え上がった。

ヤンは慌てて訂正した。

「いやいやまさかまさか。自分自身にだよ。アルジヤナフでの戦い、もう少しやりようがあつたように思えてね」

「よかつた!ああ、いや、そんなことはありません!ヤン提督は最善を尽くされました。むしろ不甲斐ないのは私です。私が敵のペテンにもう少し早く気づいていれば」

「いや、貴官のおかげで右翼は持ち直すことができました。右翼の危機も含めて私の責任だ。連合の将兵を無為に死なせてしまった。あんな拙い戦いをするぐらいなら、帝国の事など捨ておいて撤退した方がよかつたかもしれない」

「それは、我々將兵と、ヤン提督ご自身を馬鹿にしたご発言です」

マルガレータの思わぬ反論にヤンは驚いた。

「我々が撤退すれば新帝国からの離反者はさらに増え、神聖銀河帝国に帝国領全土を併呑されていた。そうなれば困るのは結局連合です。撤退するなど將兵の殆どが納得しなかつたでしょう。」

連合の將兵は貴族階級を除き志願制です。多かれ少なかれ、私を含めてゴールデンバ

ウム王朝とその門閥貴族に恨みを持つものが多いのです。ゴールデンバウム王朝復活など到底許せない、その思いで皆この遠征に来ているのです。その思いを馬鹿にしないでください」

マルガレータは息を継いだ。その目はヤンを真っ直ぐ見つめていた。

「連合は何度もヤン提督に救われています。宇宙暦796年の帝国軍の大侵攻では小官も死を覚悟しました。今回の戦いでもヤン提督でなければ全滅すらあり得た。それをすべてヤン提督が救ってくださったのです。そして、そんなヤン提督だからこそ、皆命をかけてついて来たのです。」

小官が自らの力不足を棚に上げてヤン提督に負担をおかけしているのはわかっています。ですが、どうか。将兵の死を悼まれる気持ちがおありなら、自らの為したことに胸を張り、これから何ができるかを、お考えください」

言い終えて、マルガレータは急に慌て出した。

「すみません！ つい興奮してえらそうなことを喋ってしまいました。ヤン提督もお分かりのことを長々と」

恐縮した様子の子のマルガレータを見て、ヤンはローザが彼女に後を任せた理由がわかった気がした。

どこまでも真っ直ぐな彼女の言葉だからこそ、ひねくれ者のヤンの心にも響いたの

だった。

ヤンはマルガレータに微笑みかけた。

「ありがとう。ヘルクスハイマー大尉。おかげで私の守護天使も勤労意欲に目覚めたよ
うだよ」

思わぬ感謝の言葉にマルガレータは驚いた。

「そんな、こんな身の程知らずに勿体無いお言葉です」

ヤンの笑みに少し意地悪な色が加わった。

「だけどこれから何ができるか考え、それを実行するのは君も一緒だ。ちようどいくつ
かやるべきことを思いついていたんだが、予定の戦場到着時間まで時間が足りないと言
めかけていたんだ。ちよつと特殊なスキルが必要なんだが、君は確かできたはずだ。一
緒に頑張ろうか」

マルガレータは、勤労意欲と使役意欲に目覚めたヤンと共に三日三晩殆ど不眠不休で
働く羽目になった。

この後。パトロクロスでは、青い顔で彷徨い歩くマルガレータが目撃されるようになった。

心配して声をかけた者に、マルガレータが働かない頭で「ヤン提督と夜通し……」な
どと答えたことで、艦内にあらぬ誤解が広まり、とある副参謀長がダークサイドに墮ち

かける事態ともなったが、その話はひとまず割愛する。

ヤン提督はこの間に新帝国軍及び連合軍各司令官との作戦計画の調整も済ませていく。

ヤン提督の準備はヴェガ星域到着の一日前に終わり、ヤンもマルガレータも「敵襲以外起こすな」の貼り紙をタンクベッドにして、戦いの前になんとか睡眠を貪ることができた。

宇宙暦801年12月25日　ヴェガ星域　神聖銀河帝国軍

ルドルフ2世が戻った時、ヴェガ星域ではカール・フォン・メッゲンドルファー技術中將の指揮のもと、「アポローン・システム」の最終調整が行われていた。

メッゲンドルファーの下ではバウンズゴール技術中將ら捕虜收容施設から拉致されて来た同盟技術チーム、シユムーデ技術准將ら帝国技術チームが共同で作業にあたった。

ルドルフ2世はメッゲンドルファーに下問した。

「メッゲンドルファー技術中將、アポローン・システムの状況はどうか？」

メッゲンドルファーは甲高い声で答えた。

「万事、万事順調でございます！母なる地球を照らす光輝なる神アポローン。その弓か

ら放たれる黄金の矢が、篡奪者、離反者の軍を打ち破る日も近うございます！」

「そ、そうか。頼むぞ」

「お任せあれ！」

ルドルフ2世はメツゲンドルフアーが少し苦手であった。彼は才気あふれる男が好きたが、メツゲンドルフアーはその才を向ける方向に少しばかり偏りがあり過ぎたのだ。

神聖銀河帝国軍は、ヴェガ星域に待機させていた三千隻と合流し、その戦力を四万三千隻としていた。

この艦隊戦力とアポローン・システムによつて、新帝国・連合共同軍、五万七千隻を迎え撃つことになる。

ヴェガ星域は奇しくも地球統一政府が二度にわたつて屈辱の敗戦を経験し、その覇権を失つた星域であつた。

この星域が決戦の場となつたのには複数の理由があつたが、ルドルフ2世、そして地球教団は、この星域で勝利を収めることで、地球の屈辱の歴史を栄光で塗り替えようと考へていた。

宇宙暦801年12月31日、地球―旧王朝勢力と連合―新王朝勢力によるオリオン腕の覇権をかけた決戦、史上三度目のヴェガ星域会戦の幕が開いた。

第四部 17話 博士の異常な愛情、または……

カール・フォン・メツゲンドルフアー、

地球統一政府時代の重力工学の権威を遠い先祖に持ち、ゼツフル粒子の開発者と同じ名で生を受けたこの男は、自らが科学者になることを疑ったことはなかったし、自らの開発した技術で叛徒どもとの戦争を終わらせ、臣民を戦争という地獄から解放できるのだと信じていた。

彼は当然のごとく物理学、それも重力工学を専門とし、軍科学学校を首席で卒業の後、科学技術総監部に所属した。

彼は自らと理想を同じくする仲間達と共に、技術による戦争の革新、そして戦争の終結に邁進するつもりだった。

だが……

アントン・ヒルマー・フォン・シャフト、

その男によって科学技術総監部は政争の場、阿諛追従の場と化していた。

軍事科学者として頭角を現しながら、派閥の論理を理解しないメツゲンドルフアーを、シャフトは自らの立場と既得権益を侵す敵だと見なした。

メッゲンドルフアーは科学技術総監部で、ある兵器の開発を提案していた。

その提案はシャフト閥によって邪魔され、通ることはなかった。

高価なだけで艦隊攻撃には役に立たない兵器だときき下ろされ、別の用途として考えられた機雷原の掃滅も、シャフトの推進した指向性ゼツフル粒子で事足りるとして却下されたのだ。

メッゲンドルフアーは閑職に回され、心身の健康を害した。

彼は失踪し、歴史の表舞台から姿を消した。失意の中自殺したのだと噂された。

だが、彼は地球教団の下で軍事研究を続けていたのだった。

歴史の闇に消え去ったはずの存在が、地球教団によってまた一つ、復活しようとしていた。

メッゲンドルフアーはルドルフ2世に向けて、演説めいた講義を行なっていた。

「母なる地球を照らす光輝なる神アポローン。ざんねんながらその眷属たる禿鷹ガイエ、鷹ファルケ、

白鳥キユクノスは既に落ちた。だが見よ！禿鷲ツエガに抱かれて鴉イダは健在である。哀れなる連合よ、偽帝

国よ。無数の鴉が形作る「アポローンの弓」の必殺の一撃が、汝らを破砕するであろう。

……ねえ、陛下も、そうお思いでしょう？」

「え、いや、うん」

「陛下あ……」

メツゲンドルフアーのこのノリを、ルドルフ2世は苦手としていた。早熟の少年皇帝は中二病の時期をとうに卒業していたのだ。

だが、自らの科学の教師も務めているメツゲンドルフアーが意気消沈するのを見て、ルドルフ2世は堪らずランズベルク伯を頼った。

躁鬱の変化の激しいメツゲンドルフアーにやる気をなくされては、戦いまでに準備が終わらなくなる可能性もあったのだ。

ルドルフ2世はほぼこのためだけにランズベルク伯を戦場に連れて来ていた。

ランズベルク伯は技術のことなど何も理解していなかったが、アポロンの眷属、詩神ミューズの導きに従い、すらすらと言葉を紡ぎ出した。

「お見事！お見事！まさに芸術神アポロンにふさわしき戦争芸術の極致です。このランズベルク伯アルフレット、感服仕りました！陛下は感激のあまり言葉も出ないようですが本当はこう仰りたいのです。「見事なりメツゲンドルフアー。遠矢射る神のアガナ・ベレア慈悲の拳により、連合も偽帝国も余の元に必ずやひれ伏すであろう。我が臣民よ、かつて臣民であつた連合の民よ、想起せよ。光明神アポロンの光輝を、地母神ガイアの慈悲を！アガナ・ベレアはそのためにこそ放たれん！」と。ですよね、陛下？」

「そうだ、アガなんとかだ！」

メツゲンドルファーは自らの理解者の存在に感極まつてむせび泣いた。

「まさしく、まさしく、その通りです。皇帝陛下万歳！陛下の御為、人類の未来の為、このメツゲンドルファー、やり遂げて見せましようぞ！」

「う、うむ、よろしく頼むぞ」

ルドルフ2世はルドルフ大帝のように臣下を選ばなかった。好むと好まざるとに関わらずアクの強い大人たちに囲まれ、為政者として日々精神的に鍛えられているのだ。た。

連合、新銀河帝国合同艦隊はヴェガ星域に到着した。

ヴェガ星域は、恒星を中心とした星域である。恒星の周囲、半径百天文単位以上を分子雲が取り囲んでおり、非常に視界の悪い星域であった。

神聖銀河帝国の艦隊の姿は見えないことから、その分子雲の中に隠れているものと思われた。

想定していたことではあったが、連合、新帝国の合同艦隊は潜んでいる敵を探しながらの戦いをする事になった。

合同艦隊は斥候部隊を先に分子雲内に送り込んだ。

合同艦隊主力が散開しつつ、分子雲外縁に到達した時、斥候部隊からその報告が来た。「分子雲内に高エネルギー反応確認！」

数分後にそれが来た。

それは虚空を薙ぐプラズマ粒子ビームの奔流だった。

多数の艦艇がその奔流に巻き込まれた。エネルギー中和磁場は一瞬で飽和した。一瞬で500隻を超える艦艇が消滅したのだった。

しかもそのビームは一本ではなかった。

今や十本を超えるビームが連合と新帝国の艦隊を襲っていた。

そのビームは無照準であるようで、必ずしも艦隊には当たらなかったが、絶えずランダムに放射位置と角度を変え、しかも途切れることがなかった。

ビームの奔流は艦隊を縦横無尽に切り刻んだ。

数十分のうちに二千隻を超える艦艇が失われた。

ビッテンフェルトが喚いた。

「こんな高威力で途切れることのない攻撃があつてたまるか！オーデインよ、宇宙の法則はどうなつてしまったのだ！」

だがその正体こそが宇宙の法則の産物だった。

この時になって漸く、分子雲の内部に潜入した斥候艦がその攻撃の正体を捉えた。

報告を受けた旗艦。パトロクロスのオペレーターがその正体を叫んだ。

「攻撃源の正体は多数の小型ブラックホール。粒子ビームの正体は宇宙ジェット、ブラックホールから発生した亜光速のプラズマジェットです！」

メツゲンドルフアーが構想したのは、大艦隊への攻撃に利用可能なブラックホール兵器であった。

帝国科学技術総監部で彼が提案したのはブラックホールを爆弾のように利用することであった。しかしブラックホールの発生装置が大規模過ぎてコストパフォーマンスが悪く、さらにその移動速度の鈍重さのせいで艦隊攻撃には向かなかった。この点は実のところシャフト達の指摘通りだった。

このため、メツゲンドルフアーは発生させたブラックホールを継続的に兵器として利用することを考えた。

この時点でブラックホールという一手段の目的化が発生しているのだが、メツゲンドルフアーは気にしていなかったし、指摘できる人間は当時の地球教団にはいなかった。

メツゲンドルフアーはまず、回転するブラックホールに降着円盤を形成し、ブラックホールに吸い込まれる際に物質から解放される膨大なエネルギーが転換した亜光速ジェット噴流、通称宇宙ジェットを兵器とすることを考えた。

ブラックホールに宇宙ジェットが発生する条件、メカニズムは、この時代でも完全には解明されていなかったが、メツゲンドルフアーの天才は小型ブラックホールにおいてそれを人為的に発生する方法を見出していた。

しかし、ブラックホール周囲から出る宇宙ジェットの向きは上下それぞれ一方向に固定されていて、その方向を変えることは困難であった。このままでは一度避けられればそれで終わってしまう。

メツゲンドルフアーが散々悩んだ挙句に思いついたのは、小型ブラックホールの多重連星系をつくることだった。

ブラックホール発生装置を自転させ、加速することで、自転し高速で動く小型ブラックホールを作り出し、それを作成済みのブラックホール群に加えることを繰り返して多重連星系は完成した。

その上で各ブラックホールに降着円盤をつくり、亜光速プラズマジェットを生じさせたのだ。

こうすれば各ブラックホールから出るジェットは常に大きくその位置を変化させることになり、敵艦隊に逃げ場を失わせることができた。

外部から艦艇によって小惑星をブラックホール群に投入すれば潮汐力で小惑星はたちまちバラバラになり、降着円盤を形成し、宇宙ジェットの材料とすることができる。

このため宇宙ジェットが途切れることはなかったし、小惑星投入のタイミングでいつも宇宙ジェットの放射を開始できた。

当然ながら、複雑な多体問題となったブラックホール多重連星系の軌道はまさしくカオスで、敵だけでなく味方にとっても予測し難いものとなるはずだったが、メツゲンドルフアーはシミュレーションを重ねてブラックホール質量、公転距離、速度、自転速度等々に関して特殊な条件を見つけ出し、その条件限定で各ブラックホールの軌道、そして宇宙ジェットの放射位置を予測することに成功していた。

これによって敵は様々な方向に暴れ回る宇宙ジェットの暴威を受けることになる一方、味方はメツゲンドルフアーの予測に基づき宇宙ジェットの未来位置を知って避けることができるのだった。

このシステムの構築には、同盟の、帝国より高度な艦隊運動制御技術、天体シミュレーション技術、多数の天体を同時に運用する「アルテミス・システム」のノウハウが非常に役に立った。

地球教団は、メツゲンドルフアーのため、ファルスター星域において帝国軍捕虜となったバウンズゴールら同盟の技術将校を拉致して協力させたのだ。

こうして生まれたのが「アポローン・システム」、通称「アポローンの弓」であった。

多数の小型ブラックホール（メッゲンドルフアーはこれを鴉と呼んだ）の多重連星系と、それに物質供給源の小惑星を継続的に投入する自動化艦艇群がその正体で、敵にとってはランダムに位置を変えるように見える、途切れることのない亜光速プラズマジェットがその攻撃手段だった。

メッゲンドルフアーはブラックホール群の近傍で、その運用を統括していた。

彼は戦況から、自らの長年の考えが正しかったことを知った。

「見よ。ブラックホールこそが至高の兵器、人類の未来を切り拓く存在。私の人生が今花開いた……」

彼は今恍惚の中にいた。

宇宙ジェットによって合同軍艦隊が撃ち崩され、混乱しているのを確認して、分子雲の中から神聖銀河帝国の艦隊がついに姿を現した。

亜光速のプラズマジェットは一見ランダムに見えるものの、神聖銀河帝国側はメッゲンドルフアーの計算でその攻撃位置が予測できていた。

このため、宇宙ジェットを避けた上で合同軍に攻撃を仕掛けることができた。

今や戦況は一方的に見えた。

亜光速プラズマジェットの一撫でごとに連合新帝国共同軍は多数の艦艇を失った。

その上で神聖銀河帝国艦隊の攻撃を受けているのだ。

各艦隊では幕僚団が議論を重ねていた。

「どうにかならんのか!？」

「ブラックホールに突入して攻撃を仕掛けてはどうか?」

「ブラックホールなんてものをどうやって破壊する?すべて飲み込まれて終わりだ!」

その通り、メッゲンドルフアーの構想した兵器は絶対の防御力をも持ちあわせる究極兵器とも呼べる代物だったのだ。

「敵は宇宙ジェットを避けているようだ。宇宙ジェットの位置は予測可能なんじゃないか?」

「どうやって予測する?個別のブラックホールの正確な位置情報すらまだ得られておらんぞ。それに予測シミュレーションをしている間にこの会戦が終わるのではないか?」

「では、敵の位置取りを見て追隨するのはどうか?」

「それは既にやっている!だが、どうしてもワンテンポ遅れてしまうし、敵に移動位置を気取られて有利な位置を占められて終わりだ!」

結局結論は出ず、宇宙ジェットと神聖銀河帝国艦隊の攻撃の前に損害を積み重ねた。

このまま神聖銀河帝国の勝利に終わるかと思われた。

だが、プラズマジェットの位置が神聖銀河帝国軍の予測とずれ出した。

今や神聖銀河帝国軍と連合／新帝国は等しくアポロンの弓の餌食となっていた。

「こんな、こんな馬鹿な!!」

メツゲンドルフアーは呻いた。

それはメツゲンドルフアーの目の前で起こっていた。

小型ブラックホール群の近傍に、敵艦艇數十隻ほどが侵入し、防衛部隊が反応して攻撃を仕掛ける前に、突如ワープしたのだ。

当然時空震が発生した。

大質量周辺でのワープが危険なこと、巨大な時空震が発生することは知られていた。だが、今回発生した時空震は極めて大きかった。それこそ小型ブラックホール群の軌道をずらすほどに。

軌道をずらされた小型ブラックホール群はメツゲンドルフアーの予測不能な存在に変じた。当然宇宙ジェットの放射位置も予測できなくなった。

メツゲンドルフアーは目前で起こったことの正体を理解した。

「時空震相乗現象か!」

通常烈しい時空震が発生している最中にはワープはできない。しかし、艦隊が行なっているように、ワープのタイミングを同期させれば同時ワープは可能である。その際発生する時空震の規模はワープした艦数に比例したものになる。

一隻のワープでもブラックホール周辺で行えば巨大な時空震が発生するのに、それが数十隻分ともなれば、小型ブラックホール軌道をずらすのに十分であった。

「なんとかなつたようだ。よくやってくれたね、ヘルクスハイマー大尉」

ヤンは。パトロクロススの指揮卓上で息を吐いた。

ヤンにとつても多数のブラックホールを用いた兵器など想定範囲外であった。

だが、敵が根拠地不明の利点を捨ててまで待ち受けている限りは、何かしらの罠が用意されているとは考えており、自らの想像できる範囲でその対応手段も用意していた。

マルガレータとともに用意したものが、ブラックホール兵器にも有効に働いたのだ。

連合は、無人艦運用技術において同盟に大きく遅れをとっていた。このため、同盟との講和の際に無人艦運用技術の供与を条件に含めており、フレデリカ・グリーンヒル中尉が、連合軍将兵への技術指導にあたった。

マルガレータはその一期生にあたり、前の職場では無人艦運用技術の連合艦艇への適用を任務としていた。このため、連合軍派遣艦隊では貴重な無人艦運用技術を持つ士官であったのだ。

百隻規模の無人艦の同時運用と、同期ワープの実現を、マルガレータはリンクス技術准将らの助力を受けて短時日のうちになしとげていた。

攻撃の正体が判明した後、マルガレータはヤンの指示のもと、無人艦艇百隻に、分子雲に突入後別個の経路を経てブラックホール近傍で合流するようにプログラムした。

数十隻は敵の哨戒に引っかけたり、宇宙ジェットに巻き込まれるなどで失われたが、残る艦艇はブラックホールまでたどり着き、無事に役目を果たすことができたのだった。

このままでは、敵味方問わない無差別殺戮になる。ブラックホールの新しい軌道予測は間に合わない。

メツゲンドルフアーは断腸の思いでブラックホールへの物質供給を停止し、宇宙ジェットを終わらせた。

戦場に残ったのは、数を減らした連合／新帝国の合同艦隊と、神聖銀河帝国艦隊であった。

ヤンは敵艦隊を見据えて呟いた。

「さあ、第2ラウンドの開始だ」

第四部 18話 チェスゲーム、銀河の

第三次ヴェガ星域会戦の後半戦の前に、一旦同盟に話を戻す

アツシユビー艦隊がフェザーン回廊出口からバーラト星系に向けて出発した後、いくつかの星間警備部隊や星系政府から接触があり、アツシユビーと同盟政府に協力する旨を伝えてきた。

彼らのいくらかは日和見を続けていたが、回廊での戦いの顛末を見て同盟政府、反クーデター側につくことを決意したのだった。

また、アツシユビーの進路を妨害したり、補給路を寸断しようとする小部隊との戦闘も発生した。だが、それらの多くを星間警備部隊やルグランジュ第九艦隊から派遣されたストークス少将（キラキラ星の住人状態）率いる分艦隊が担当してくれたおかげでアツシユビーは順調に航程を進むことができた。

また、シトレ退役元帥など、幾人かの著名人が同盟政府とアツシユビーへの支持表明を行なった。

だが、挙国一致救国会議に与する部隊や星系政府、公然と支持を表明する著名人も依然存在していたし、日和見を続ける者も多かった。

挙国一致救国会議によって封鎖されたバーラト星系が解放されるか、救国会議に降伏するまで、大勢は決まらないように思われた。

そのような時、アツシユビーの元に同盟政府側のホーウッド提督の第一艦隊が司令官不明の艦隊に襲われたとの報告が入った。

挙国一致救国会議の正規艦隊戦力はすべて無力化したものと考えていたアツシユビー一行は衝撃を受けた。

まだアツシユビー艦隊に正面から対抗し得る戦力がいるという事実の前に、その前進速度を落とし、警戒を強くしながら進まざるを得なくなった。

宇宙暦801年12月29日、アツシユビーがようやくバーラト星系から3・6光年の地点、バーミリオン星域に到着した時、オペレーターが大規模な艦隊の存在を報告して来た。

「20光分から30光分の距離に艦隊規模二万隻以上、ですが、薄く散開しているようで、実数は確定できません」

その規模にアツシユビー艦隊の幕僚達は驚いた。

アツシユビー艦隊は第九艦隊から合流したストークス少将の部隊五千隻を加えて約一万四千隻強になっていた。

しかし、それを大きく超える戦力が展開していたのだった。

ライアル・アッシュビーは素早く決断した。

「敵が分散しているうちに各個撃破を図る。全艦円錐陣に再編の上、最大戦速、敵艦隊に
向け前進！」

敵戦力は横列陣を形成していた。

だが、アッシュビー艦隊の円錐陣は強力であり、さらにはアッシュビーによる艦列の
ウィークポイントの的確な見極めによってその威力を増していた。

艦艇の集中ポイントに対する的確な集中砲火によって、横列陣は容易に突破された。
しかし、アッシュビーは叫んだ。

「薄過ぎる！次が来るぞ！」

その通り、半時間もたたないうちに再度正面に横列陣が現れた。

それもアッシュビーの指揮の元容易に突破できたが、さらに次が現れた。

「次から次にやって来るな。しかもまったく歯ごたえがない」

アッシュビーは困惑していた。

第九艦隊の時には敵の支離滅裂で滅茶苦茶な攻撃に違和感を感じたが、今回の敵は逆
に無機質に過ぎたのだ。

何の創意工夫もなく、アッシュビーの目にはただやられるに任せているように見え

た。

さらに四度出現した横列陣をことごとく突破した後、アツシユビーはどうとう気づいた。た。

「これは嵌められたか。奴ら重ねた大量の薄紙で水のように我々を吸収しきるつもりらしい」

アツシユビーの比喻表現に、幕僚の大半が首を傾げたが、フレデリカは理解を示した。「突破したはずの横列陣が次から次へと後ろに戻り、再度我々の前に向かって来ているんですね」

「そうだ！それで我々を疲れさせる作戦のようだ。だが、その手には乗らない！アツシユビー・ターンだ！」

アツシユビーは次に現れた横列陣の手前で左旋回し、横列陣を後背に置き去りにした。

そうすることで敵の横列陣群全体を俯瞰し、攻撃ポイントを定めようとしたのである。

だが……

方向を変えたアツシユビー艦隊の前にも横列陣が出現したのである。

そればかりか、後背に置き去った横列陣群が一つの部隊に再編され、後背からアツ

シユビー艦隊に向けて殺到しようとしていた。

「まさか……敵戦力は二万隻よりもはるかに多いのか!?」

そうでなければ、進行方向を変えたアツシユビーの前にすら横列陣が出現した理由が説明できなかった。

「前進を続ける！後ろの敵に食いつかれてはどうにもならなくなるぞ！前面の部隊を食い破つて、その艦列を後背の敵への盾としろ！」

アツシユビー艦隊はその指示通り、出現した横列陣を素早く突破した。後背の敵は味方であるはずの横列陣に阻まれ、アツシユビー艦隊には届かなかった。

だが、一息つく間もなく、アツシユビーの前に再び横列陣が現れた。

「ふん、ならば我慢比べと行こうか！我々が敵艦隊ごとごとくを粉碎するのが先か、我々が疲れて倒れるのが先か。心配するな！勝機はある！」

艦隊の士気はいまだ非常に高かった。

艦隊メンバーは皆ライアル・アツシユビーの才と、その存在の特別さを信じていたから。

バーラト星系近傍の軍事基地で、コーネリア・ウインザーはその様子をモニターで眺めていた。

「ふふふ、どこまで足掻けるか見ものね。それにしても、自分が相手にしているのが三倍以上の四万五千隻もの大艦隊だとアツシユビーが気づいたらどんな顔になるかしら。大胆不適な英雄の顔が絶望に染まる様子が早く見てみたいものだよ。それにそれを指揮しているのがどういった者たちなのか知ったら……」

ウインザーの言うとおり、挙国一致救国会議はアツシユビーに対して四万五千隻もの艦艇を用意していた。

だが、それを運用する人員は確保できていないはずであった。正規艦隊の多くの将兵はクーデターに賛同していなかったのだから。仮にサイオキシン等で洗脳したとしても、アツシユビーの前では逆効果となるのは既に第九艦隊で証明された通りである。

挙国一致救国会議はまったく違った手段でこの問題を解決した。

志願兵不足に悩む同盟が長年推し進めて来たもの。

艦隊の完全無人化対応である。

試験艦隊であった第十三艦隊で既にデータは蓄積されていた。あとはこれを適用するだけでよかった。

現段階でも有人艦艇に比べ対応能力では劣るが、補助戦力としては十分に有用であったし、有人艦艇ではできない戦術も実施可能であった。

だが、レベロの推進する軍隊のスリム化によって人員問題が優先解決事項でなくなっ

たこと、予算の削減等で、無人化の実施は凍結されてしまっていた。

これを挙国一致救国会議は、司令官を捕縛して接収した四個艦隊の全艦艇にたいして一挙に推し進めたのだった。

これにはエンダースクール出身の情報工学特化型の士官が活躍した。

それでもアッシュビーの進軍速度の前に適用が間に合わない恐れがあったが、ルグランジュが想定とは違う形ながら時間を稼いだことでどうにか間に合った。

とはいえ、全体を統括する司令官、司令官の意思を艦艇に伝達するための担当士官はそれぞれ必要であった。

担当士官はトラヴィス・ロイド少尉ら、エンダースクール出身士官が務めた。

そして司令官は……

「エーン（１）・アッシュビー、トワ（２）・アッシュビー、スリー（３）・アッシュビー……ブルース・アッシュビー並みの才を發揮できずライアル・アッシュビーになれなかったアッシュビー・クローン達。非合法だけど冷凍睡眠で保管してきたのが役に立たわね。一人一人はライアル・アッシュビーほどではないけれど司令官としては十分に優秀。睡眠中の刷り込みで従順さも十分。それが合計15体。ライアル・アッシュビーが奇策を使ってくるでも十分対応してくれるでしょうよ。しかもみんな、いい男」「ずいぶん楽しそうですね。まだ勝ってもいないのに」

エベンス准将がウインザーの饒舌に水を差した。だが本人は意に介さなかった。

「あら、楽しいわよ。戦う前に、勝つための準備はきっちり整えた。あとは結果を待つだけ。戦術とは戦略を補う手段に過ぎないのよ。そんな基本的なこともわからないから、あなた達、連合や帝国に体良くやられてきたんじゃないの？」

同盟軍を馬鹿にした発言に何人かのメンバーが立ち上がったが、効果的な反論を思いつかず、結局無言で坐り直す羽目になった。

ヴァンス主教はその騒ぎを無感動に眺めていた。

地球教団にとっては、実のところこの戦いで救国会議が負けても構わないのだった。

無論救国会議が勝てばそれでよし。だが、万に一つながら負けるとしたら、その時には同盟正規艦隊の中核であった四個艦隊はアッシュビーによってすり潰されている筈だった。

そうなれば神聖銀河帝国が同盟を飲み込むことが容易になるのだ。同盟内の地球教勢力がバックアップすれば尚更である。

真の必勝の戦略とはこういうものだ、彼は心の中で独語した。

自らが考えた策ではないにも関わらず。

「さあ、15体のポーン対1体のキングによる銀河の詰めチェスゲーム、チェックメイト

第四部 19話 第三次ヴェガ星域会戦の決着

再び連合／新帝国と神聖銀河帝国の戦いに戻る。

既に日付は変わり、宇宙暦802年1月1日となっていたが、両軍共に新しい年を祝う余裕はなかった。

ここまでの戦いで連合／新帝国合同軍は約四万隻にまで戦力を減らしていた。

内訳は連合一万八千隻、新帝国二万二千隻である。

新帝国の方が損害が大きいのは、彼らが積極的に矢面に立ったためである。

連合軍がアルジャンアの会戦で消耗したことに配慮してのことであった。

また、宇宙ジェットによってジークフリード帝直卒のザウケン大将が命を落としていた。

これに対して神聖銀河帝国軍は、いくらか損害を被ったもののいまだに約四万隻の戦力を維持していた。

当初の戦力差が、アポローン・システムの暴威によって埋められた形になった。

「メッゲンドルフアーもよくやってくれたが、最後はやはり純粋な艦隊決戦か。まあそう来なくては面白くもない。メルカツツ元帥！ミンツ大将！」

ルドルフ2世はスクリーン越しに二人に呼びかけた。

ユリアンは引き続き旗艦級戦艦コアトリクエで全体の約半数、二万隻の指揮を執っていた。

アルジャンナフの会戦と異なるのはコアトリクエに随伴する旗艦アース級6番艦ネルトウスにメルカツツ元帥が搭乗していたことである。

メルカツツ元帥は今回自ら、前線での指揮を願っていた。

メルカツツ元帥は長時間の指揮を執れない体であるが、ごく短時間であれば往時の戦術のキレを見せることができた。

このため、随時ユリアンと代わる形で指揮を執ることになった。

ユリアンであれば、メルカツツの意図を汲む形で指揮を交代できたし、独自の戦術を展開することも可能だった。二万隻の艦隊を二人で指揮する変則的な方式は敵手を混乱させる効果もあると考えられた。

何故今になって指揮を執る気になったのか、そして何故娘が艦長を務めるコアトリクエには同乗しなかったのか、ユリアンにもルドルフ2世にも老将の心境は分からなかった。

だが、神聖銀河帝国軍にとっては心強いことだった。
ルドルフ2世は二人に方針を伝えた。

「メルカッツ元帥とミンツ大将には連合軍の相手をしてもらいたい。現在の艦隊位置を考えるとそうなるだろう。ヤン・ウエンリー相手に勝ちきる必要はない。時間を稼いでくれればよい。……メルカッツ元帥には、つらい思いをさせるかもしれないが」

メルカッツは表情も変えずに答えた。

「構いません。弟子たちの成長ぶりを確認したいと思っておりますし、武人たるものヤン・ウエンリーとは一度戦ってみたかったので。しかし、そうすると陛下は」

「ああ。私は面前にいる新帝国軍と当たる。私が奴らを片付けるまで耐えてくれ」

ユリアンの代わりに参謀役となったアンズバツハ中將が、ルドルフ2世に忠告した。

「偽帝ジークフリードも、麾下の將兵も、歴戦の強者です、ゆめゆめ油断なさらぬよう」
これは彼自身がジークフリード帝と戦った経験に基づく発言だった。

「無論軽視する訳ではないが、ヤンより上ということはなからう。ならば余が勝つき」

それを聞いたメルカッツやユリアンは若干の不安を覚えたが、ジークフリード帝の艦隊戦の実績がすべて門閥貴族との内戦でしかなかったのも事実であった。

ラインハルト帝ならいざ知らず、負けることはなからうというのがメルカッツ、ユリアン、そして殆どの帝国將兵の認識でもあった。

ここまでの新帝国の失態も、その認識を補強していた。

結局のところジークフリード帝は神聖銀河帝国に侮られていたのだった。

戦いが再開された。

神聖銀河帝国軍は恒星ヴェガの周囲を覆う分子雲を後背にして、連合、新帝国の両軍を迎え撃つ形になった。

宇宙ジェットンの暴威によってヴェガを覆う分子雲はその多くが吹き飛ばされていたが、なおも斑らには残っていた。

ルドルフ2世は二万隻を率いて新帝国軍に積極的に攻勢を仕掛けた。

新帝国軍は一万五千隻でその攻勢を受け止めた。その間にビットエンフェルト率いる黒色槍騎兵五千隻に、ルドルフ2世の艦隊の左側面を衝かせようとした。

しかしこの攻撃をルドルフ2世は読んでいた。

黒色槍騎兵の勇名と特性はルドルフ2世も知っていたからだ。

黒色槍騎兵が攻撃をかける直前、後方で待機させていた雷撃艇二千隻を黒色槍騎兵のさらに側面に突入させたのだった。

ルドルフ2世もまたメルカツの弟子であった。

これによって黒色槍騎兵の攻撃は頓挫し、強かな打撃を被って後退を余儀なくされた。

その隙にルドルフ2世は攻勢を強めようとした。

だが、その瞬間、ルドルフ2世は後背から攻撃を受けることになった。

分子雲の中から高速巡航艦二千隻が突如出現し、ルドルフ2世の艦隊の右後背から突入したのだった。

それはジークフリード帝直卒の部隊だった。

ジークフリード帝は、「アポロンの弓」停止前の最後の混乱を好機ととらえ、ルッツに艦隊を預けて直卒部隊と共に分子雲に潜んで機会を伺っていたのだった。

ルドルフ2世はこれに見事に引つかかった。

仮に相手がヤンであればルドルフ2世は旗艦の不在に気づき警戒しただろう。

すべてはルドルフ2世の油断、相手を舐めてかかったことが招いた結果だった。

聞こえないことを承知でジークフリード帝は、少年皇帝への助言を呟いた。

「勝利するための秘訣は世の中を甘くみないことです」

ジークフリード帝は、旗艦バルバロッサを先頭に敵艦隊を突き崩して左側面へ抜けた後、そこに留まっていた雷撃艇部隊に一撃を加えて、再度分子雲の中に姿を隠した。

艦列の乱れたルドルフ2世の艦隊に対して、再編を終えた黒色槍騎兵とルッツ率いる新帝国軍本隊が総攻撃に出た。

このままでは再度姿を消したジークフリード帝と、黒色槍騎兵、新帝国軍本隊によって包囲される。

ルドルフ2世は損害を承知で全軍に対して新帝国軍本隊への浸透と突破を指令した。精兵となっていた神聖銀河帝国軍將兵はこの命令をやり遂げた。多大な損害と引き換えに。

危地を脱したものの、ルドルフ2世の戦力は一万三千隻にまで減っていた。

一方のジークフリード帝は一万九千隻。

彼我の差は大きく拡大した。

ジークフリード帝は今も亡き友に向かつて語りかけた。

「ラインハルト様、私にはもう一つやり残したことがあります。それは、ラインハルト様の最強を証明することです。」

ラインハルト様は誰にも負けなかった。フォークにも追い詰められたとはいえ勝利したし、ライアル・アツシユビーにさえ艦隊戦では勝利していた。ですが、ヤン・ウエー、ンリー、ルドルフ2世の二人とは、ついに勝つ機会を得られなかった。彼らはアルジャナフで互角の勝負を演じたという。ならば、私がルドルフ2世に勝てば、私より強いラインハルト様の最強を証明できるでしょう」

ジークフリード帝は、どこまでも人の為にこそ実力を発揮できる人間だった。

一方の連合軍艦隊とユリアン、メルカッツの戦いはどうだったか。

連合軍艦隊は、この時、大きな不安に襲われながら戦いに臨んでいた。

すべての原因は、ヤン・ウエンリーの全艦への演説にあった。

「今回の作戦は三次元チェスみたいなものだ。勝つための計算は済んでいるから、みんな気楽に戦ってくれ」

この演説は、ヤン艦隊に未だかつてない司令官不信を引き起こした。

マルガレータさえもが尊敬する司令官を不安の目で見ていた。

その不安が艦隊運動にも出てしまったのか、連合軍の動きは、当初著しく積極性を欠いた。

連合軍はユリアンとメルカッツから距離を取ろうとした。ユリアン、メルカッツに与えられた命令はヤン・ウエンリーと連合軍艦隊を拘束しておくことだったから、このヤン艦隊の行動は渡りに船だった。

お互い、主砲の射程範囲外で睨み合う状態となった。

ユリアンは不審に思った。

現在の状況は、我々にとっては好都合だが、この積極性の無さはどういうことか？ 新帝国の行動のせいで甚大な被害をこうむったことから、連合軍はもはや積極的に戦うつもりがないのか？

この時、ルドルフ2世はまだジークフリード帝と戦端を開いたばかりだった。

このまま睨み合いながら時間が過ぎるかと思われた矢先、一千隻ほどの艦艇が連合軍本隊から分派された。

ユリアンとメルカツツは当初側面を衝かれることを懸念したが、その一千隻は連合軍からも新帝国軍からも遠ざかるばかりであった。

このため彼らはひとまずは注視するに留めることに決めた。

だが、その一千隻は少しずつ数を減らしているようだった。そしてその代わりに数十隻単位の小艦艇集団が次々に様々な位置に出現した。出現した小集団はしばらくするとまた姿を消し、別の新たな位置に小集団が出現した。

ユリアンは彼らが何をしているのかようやくわかった。

「小集団ごとに短距離ワープを繰り返しているのか」

その意図が何なのか、ユリアンはそれを想像していくうちに恐ろしい可能性に気がついた。

このときはメルカツツが指揮を執っていた。ユリアンはメルカツツに連絡した。

「急いで連合軍艦隊と距離を詰めてください！あの小集団群は我々の艦隊内部にワープしてこようとしています！」

その通りだった。

ワープによって敵のど真ん中に出現して攻撃を加えたり、爆弾を放り込むなどというのは、一見実現可能に見えるが、多くの場合は机上の空論であった。

短距離にしる長距離にしる、ワープの目標座標と実際の出現座標の間には大きなずれが発生する。

このため、短距離ワープで敵のど真ん中を狙って出現するなどということは通常不可能だった。下手をすれば味方の艦隊の中に出現しかねなかった。

ワープミサイルのようなものも兵器としては存在した。だがこれは目標座標とずれが発生してもその後の通常空間の巡航でそれを修正可能な場合や、あるいはワープの精度に対して目標が十分に大きい場合に用いるもので、コストの割に艦隊戦で大きな効果を上げる兵器ではなかった。

だが、恒星間の長距離ワープと比較すれば、短距離ワープはエネルギー消費の少なさから短時間のインターバルを挟んで連続で行うことも可能であった。特に恒星間ワープを想定している正規軍艦艇であれば。

ヤンはこれを利用することを思いついた。

ある艦隊が目標座標を定めて短距離ワープを行なった場合、目標座標を中心とした推定出現領域の半径はそのワープ距離に比例する（超長距離ワープが不可能とされるの

も、ワープに必要なエネルギーの問題とともに、これが大きな理由となっている)

敵艦隊のみを推定出現領域に含むようなワープ距離と目標座標の設定で短距離ワープを繰り返せば、味方艦隊内にワープしてしまうことなく、いつかは敵艦隊内に辿り着くことができるのだ。

マルガレータがヤンに徹夜で準備させられたのも、短距離ワープを繰り返すための艦艇自動化プログラムであった。

「アポローン・システム」対策のために用いられた無人艦艇のプログラムも、このためのものを転用していたのだった。

ユリアンはこのことに気づいた。

ユリアンから連絡を受けたメルカツツは、前進命令を出そうとした。

ヤン艦隊と混戦状態に入れば、それだけでこの作戦は頓挫させられるのだ。

だが間に合わなかった。

連合軍艦艇の小集団が艦隊内にワープしてきたのである。

艦隊内に時空震が発生し、艦列に揺らぎが生じた。

各艦艇はミサイル、火砲を乱射し、最後には自爆した。

さらに他の小集団も立て続けに艦隊内にワープを果たし、同様の行動を取った。

神聖銀河帝国艦隊は内側から大きな損害を受けた。

メルカツツは、ゾンネベルク准将に命じて千隻ほどの部隊を残余のワープ部隊の殲滅を派遣した。だが、ワープを繰り返して薄く散らばるワープ部隊の殲滅には時間がかかることが予想された。

メルカツツは指示を出した。

「メルカツツ戦法Nr. 3、スニマードライ『円は直線を包む』」

艦隊に輪形陣への再編を命令したのだ。

中心が空洞となり円周上に薄く艦艇が配置される輪形陣であれば、艦隊内へのワープによる損害を最小限に留められるし、中空内にワープしてしまった艦艇集団を殲滅することもできる。その上で連合軍本隊にも対応し得る、ほぼ最適に近い陣形であると言えた。

だが、どのような対処を取ろうともメルカツツがワープ部隊への対応を強いられた時点でヤンの作戦は成功していた。

連合軍からは巨大な光の輪が形成されていく様子がよく見えた。

その様子を確認したヤンは輪形陣の一部の弧に向けての前進と攻撃を指示した。

神聖銀河帝国軍はその輪形陣のせいで一部の部隊しか連合軍艦隊を有効射程に収めることができなかった。

この時点でメルカッツは指揮をユリアンと代わっていた。

ユリアンは輪形陣を歪めて連合軍艦隊を半包囲しようとした。

だが、連合軍の行動の方が早かった。

フォイエルバッハ大将、シャウデイン中将直卒の各二千隻の近接戦闘部隊がそれぞれ輪形陣に突入した。

「メルカッツ元帥に我らの成長を見せる時だ！　メルカッツ戦法Nr. 1、『獲物は逃すな』！」

ユリアンの頭には敵から近接戦闘を仕掛けてくるという選択肢は抜け落ちていた。ワープ部隊の攻撃に自ら巻き込まれることはするまいという思い込みだった。

だがこの時ワープ部隊は既にワープ行動をやめていたのだ。

輪形陣の円弧の中を突き進む彼らの攻撃の前に、神聖銀河帝国軍はなす術がなかった。

フォイエルバッハ大将の攻撃を受け、クナップシユタイン中将が戦死した。

コルプト少将は麾下の將兵を叱咤した。

「メルカッツ元帥の教えを思い出せ！　敵の攻撃は柳のごとくいなすのだ！」

だが、同じくメルカッツ直伝の近接攻撃は簡単にいなせるものではなかった。

メルカッツは心の中で独語した。

見事な攻撃だ。もう連合は私のような老兵を必要としないだろう。

メルカッツはユリアンに連絡を入れた。

「大勢は決した。陛下も今危機に陥っている。ミンツ大將はグリルパルツァー中將の部隊とともに、陛下をお救い奉れ」

「元帥はどうされるのです!?!」

「私はここで連合軍艦隊を抑える。短時間しか保たぬだろうが。その間にどうにか撤退してくれ」

ユリアンはメルカッツの覚悟に気づいた。

「死ぬおつもりですか?」

「ここまで神聖銀河帝国に荷担しておいて、今更おめおめと連合に戻れまいよ」

「しかし元帥は脅されていました!」

「最初は、な。だが、いつの間にか、陛下を含めて自分の育てた者たちがどこまでやれるのか、見るのが楽しみになってしまっていた。私も陛下を利用した一人だ。子供を利用した大人としての責任を取らないといけないのだ」

「父上!母上を置いて死なれるのですか!?!」

「たまらずゲルトロードが話に割り込んだ。」

「軍務中だ、中佐。艦長の責を果たせ。……だが、お前から伝えておいてくれ。苦勞をか

けて済まなかった、この数年一緒にいる時間を多く持てて楽しかった、と。まあ、わかってくれるだろう。メルカツツ家のことは頼んだぞ。早く婿を取れ」

「な……」

慌てたゲルトロードを放って、メルカツツはユリアン

「ミンツ大將、後のことはすべて任せろ」

ユリアンは敬礼して応えた。

「承知しました。お任せください」

「うむ。ではな」

メルカツツは敬礼して通信を切った。

メルカツツは残余の部隊を再編して砲陣を築き、連合軍艦隊と対峙した。

少数の兵力でたくみに構築した光と火の壁が、連合軍の猛攻を阻んだ。

「さあ、最後の試験だ。この陣を抜くことができるか、儂が試してくれよう」

ユリアンは五千隻ほどの部隊を率いてルドルフ2世の救援に向かった。

ルドルフ2世はジークフリード帝の攻撃をよく凌いだ。だが、それだけだった。万全のジークフリード帝に対して一度生じた戦力の差を覆すことはルドルフ2世であつても難しかった。

迫る砲火によって皇帝座乗艦イズンを防御する四隻の盾艦のうち既に二隻までが失われていた。

ルドルフ2世にとってはジークフリード帝の戦才がこの戦い最大の計算違いであった。

「純粹な戦術能力ではもしやヤン・ウエンリー以上か!？」

そのジークフリード帝に加えてルッツ、ビットェンフェルトの猛攻すらどうにか凌いでいたルドルフ2世の方が異常と言えたかもしれない。

ユリアンの救援によってルドルフ2世は死地を脱した。だがいまだ窮地に変わりはなかった。

もはや撤退すべき状況であった。

だが、ジークフリード帝とその麾下の良将達から撤退することはなかなか困難な道のことと言わざるを得なかった。

メルカッツの砲陣は連合の突破を許さなかった。敵の砲撃の集中ポイントからは巧みに兵力を移動させて攻撃をいなし、逆に敵の攻撃の要に砲火を集中して敵の勢いを削いだ。一方で敵の誘いには乗らなかつた。

最後に、メルカッツはその戦法の防御の真髓を世に示したのだ。

だが、ついに限界が訪れた。

メルカツツの搭乗する戦艦ネルトウスは被弾し、艦橋にも損傷が生じた。

シユナイダーが忠誠を誓った上官の下に駆け寄った時、メルカツツは重症を負いつつもまだ生きていた。

「ミンツ大将達は、陛下をお救いできただろうか？」

「どうやら成功したようです。それより、閣下、今軍医を……」

「それならば思い残すこともないな」

「閣下！」

メルカツツは軽く片手をあげた。

「もう立つこともあるまいと思っていた戦場で、しかも名将ヤン・ウエンリーとの戦いで死ねるのだ。せつかく満足して死にかけているのに、いまさら呼び戻さんでくれんかね」

シユナイダーは絶句した。

「それよりも、卿はこの艦をミンツ大将達と早く合流させよ。卿は神聖銀河帝国の真の根拠地の場所を知っている。まだ捕虜になって貰うわけにはいかぬし、地球教徒達が許さぬだろうよ」

その通り、地球教の宣教将校が、二人の前に来ていた。メルカツツは構わず続けた。

「シュナイダー大佐、ゲルトルードのことを頼む。あれは、お主のことを好いておる」
シュナイダーは驚いた。

「まさか！フロイラインはミンツ大将にご執心かと思つていました」

「ははは。ミンツ大将のことも嫌つてはおらぬだろうが。まあ、あれもなかなか不器用な娘だからな。卿も、わざわざ神聖銀河帝国まで参加しに来たのは儂だけが理由ということもあるまい。頼むぞ」

「はっ、はい！」

シュナイダーは動揺しつつも力強く応えた。

独立諸侯連合の宿将は、神聖銀河帝国の一員として、副官に看取られながら逝った。

メルカツツの防御がついに突破された時、ジークフリード帝の猛攻を前にいまだルドルフ2世は撤退の機会を掴めないでいた。

このままではメルカツツの部隊を突破したヤン・ウエンリーがやって来て撤退が絶望的になる。

だが、そこに忘れていた人物から通信が来た。

ルドルフ2世は苛立った。

「メツゲンドルフアー、この忙しい時に何の用だ！ 卿の役目は終わった。早う離脱せよ！」

「他の者は離脱を済ませました」

「何？」

「鴉は落ちましたが、まだアポロンの眷属として「雄鷄」が残っております」

「……卿が以前説明してくれた、あれか」

「はい。即席ながら用意しました。15分後に「暁の鷄声」がそちらまで到達しますので撤退にご活用ください」

「メツゲンドルフアー、卿はどうするのだ？」

「私は結果を観察する仕事がありますのでここに留まります。偽帝国に捕まるぐらいならブラックホールに飛び込みますのでご安心を」

「……そうか。卿を元帥に任命する。此度の功績に基づくものだ」

「メツゲンドルフアーはいまいちピンと来ていなかった。」

「……はあ。光栄であります」

「もつと喜べ。三階級特進など、皇帝の勅命でもなかなかあり得ぬことだぞ」

私は七階級特進させられたのですが、と通信を共に聞いていたユリアンは思ったが何も言わなかった。

ルドルフ2世は続けた。

「これで卿はゴールデンバウム朝初の軍事科学者の元帥だ。その事實は、卿がブラックホールの軍事利用という新しい領域を開拓したことの偉大さを、臣民が理解するのに役立つだろう」

メツゲンドルファアは感極まった。

「ご配慮、ありがたき幸せ！」

「雄鶏」とは、ブラックホール生成装置それ自体のことだった。

ブラックホール生成装置は当然ながらブラックホール生成のために莫大なエネルギーを必要とする。その莫大なエネルギーを賄うためのエネルギー源に使われているのが、これまたブラックホールであった。移動速度が鈍重になるのも当たり前だった。

エネルギー源は、電荷を持ち超高速で回転するブラックホール（カー・ニューマン・ブラックホール）を、アルテミス・システムに使われている準完全鏡面装甲の球殻で覆ったものだった。ブラックホールは高密度でサイズ自体は非常に小さいため、天体でありながら常識的なコストで覆うことが可能なのだ。

超高速で回転するブラックホールに電磁波を照射すると、鏡面装甲によって反射している間にブラックホールの膨大な回転エネルギーの一部を獲得できる（スーパーラディ

エンス現象)。

この電磁波を回収することで小型ブラックホールの生成のためのエネルギーとしていた。

そのように大量のエネルギーを生み出せるならもつと効果的な兵器を生み出せる可能性もあつたが、髪一重のメツゲンドルフアーはどこまでもブラックホールに拘つていた。

目的にかなうカー・ニューマン・ブラックホール自体を作り出すことは、エネルギーの問題からメツゲンドルフアーにはできなかつた。

これがブラックホール兵器化にあつた最大の問題でもあつた。

しかしメツゲンドルフアーは諦めなかつた。恒星から離れた広大な宇宙空間のどこかに天然のカー・ニューマン・ブラックホールが存在する可能性は地球統一政府成立以前から知られていた。

そして地球教団には、地球統一政府時代に蓄積された半径百光年の宇宙空間のものとしては最も緻密な宇宙空間の調査データが残されていた。

メツゲンドルフアーはこの記録に残るワープ事故多発地帯などの異常ポイントと実地調査を執拗に繰り返すことで、ついに超高速で回転する天然のブラックホールを恒星ベガから0.02光年の地点に発見した。

このブラックホールに、電荷を注入してカー・ニューマン・ブラックホールに変化させて移動可能な状態にして、恒星ヴェガを巡る軌道に移動させたのだった。

人類はブラックホールをワープさせる技術を持っていなかった。ブラックホール自体がワープにとって危険な大質量の物体なのだから当然でもあった。

だからこそ今回戦場が、ブラックホールの発見されたヴェガ星域に設定されたのだった。

さて、高エネルギーを持った電磁波の形でエネルギーを取り出すことが可能なカー・ニューマン・ブラックホールであったが、電磁波を反射させ続け、鏡面装甲が耐えられなくなるまでエネルギーを溜め込むことも可能であった。鏡面装甲が耐えられなくなった時に解放されるのは超高エネルギーを持った光の全方位への放射である。

メツゲンドルフアーは鏡面装甲球殻を多重にして限界までエネルギーを高め、さらに最も外側の球殻には予め光が放射用の穴を設けておくことで光の放射を一定の領域に絞り込んだ。

この一定の領域として設定されたのは、今まさに連合、新帝国との戦場になっている領域であった。

この準備（球殻の多重化のための鏡面装甲設置作業とスーパーラディエンスの開始）をメツゲンドルフアーは完了して、ルドルフ2世に連絡したのだった。

そしてメツゲンドルフアーの発言通り15分後にそれは来た。

解放された「暁の鶏声」、それは宇宙の暗黒を消し去る光明神の光であり、戦場全体を覆う莫大な光の奔流であった。

宇宙ジェット出現後にも残っていた分子雲に、その一部は吸収されたが、光の大部分は戦場まで届いた。

光は戦場に届くまでにある程度拡散していたため、艦艇を一撃で破壊するほどの威力はなかった。

だが、エネルギー中和磁場に負荷をかけ、一時的に索敵を不可能にする効果はあったし、艦艇の後背から光を受けた場合、中和磁場に守られない航行用エンジンに損傷を受ける艦艇が出現した。

ジークフリード帝率いる新帝国軍艦隊は、「雄鶏」に対して背を向けていたため、攻撃や方向転換は可能ながら長距離移動に支障のある艦艇を多数抱える状態となつてしまった。

光が戦場を支配している間にルドルフ2世とユリアンは撤退に移った。

撤退は成功するかに見えた。

だが、ヤン・ウエンリーは甘くはなかった。

彼はこの時既にメルカツ率いる部隊を突破していた。

「暁の鶏声」が戦場を支配する中でも、ルドルフ2世の未来位置を予測して移動を開始していた。

そして光が消えた時、ヤン直卒の艦隊は、神聖銀河帝国艦隊の撤退進路を妨害するよ
うにフィツシャー提督の神速の機動で急速に迫っていたのだ。

ヤンとしてはここでルドルフ2世を逃すわけにはいかなかった。

神聖銀河帝国の根拠地が判明していない以上、現状ここでその戦力を殲滅し、ルドル
フ2世を捕らえることが、戦争終結への最短の道なのだ。

このため、不測の事態が生じて、彼らを逃さぬようフィツシャー提督に事前に指示
を出していた。

ユリアンは自らが残つてもルドルフ2世を逃すべきか、自らの目的との間で迷いを
生じた。しかしその迷いの間にヤンは目前まで迫つて来ていた。

このままヤンがルドルフ2世を捕捉するかと思われたその時、再び事態が急転した。

ヤン艦隊はその側面に攻撃を受けたのである。

それは千隻ほどの部隊であつた。

撤退のために予備戦力を伏せていたのかとヤンは一瞬疑つた。

だが、そのような戦力が存在するならもっと前の段階で投入していたはずであった。
何故今頃……

その答えはすぐに判明した。

その部隊から連合軍、神聖銀河帝国軍の双方に通信が入ったのである。

「ヤン・ウエンリー！よくも俺を嵌めてくれたな。エルランゲンの恨み、ここで晴らしてくれ！」

アーサー・リンチであった。

「ユリアン・ミンツ！真の英雄たるこの私が愚図なお前を救けてやる！這いつくばって感謝しろ！」

アンドリユー・フォークであった。

ヴィーンゴールヴ星域でジークフリード帝から逃走した後、

リンチはフォークに今後の方針に対する意見を求めた。

リンチとしてははみ出し者ばかりの将兵とともにこのまま逃げて海賊でもやるつもりになっていた。だが。

「悔しくないのか」

「何？」

フォークからの思わぬ問いにリンチは困惑した。

「このまま逃げてどうする？海賊になつてどうする？」

「まあ……楽しくやるさ」

「今でも罪悪感と挫折感で酒が手放せない貴官が、それでも楽しくやれるのか？同盟で家族が卑怯者の家族と罵られているのを気にせず楽しくやれるのか？」

年少で、しかも精神的におかしい中將からの問いはリンチの胸に刺さった。

その通りであつたからだ。

いくら同じようなはみ出し者の面倒を見ることで誤魔化そうとしても、結局はそこに戻ってしまうのだ。

リンチは叫んだ。

「だつたらどうしろつて言うんだ!？」

フォークは瘦せこけた顔で、そんな彼の眼を真つ直ぐ見つめてニヤリと笑った。

「ちようど私も思い上がりをしてやりたい奴がいる。この真の英雄たるフォークが、策を授けてやろう」

フォークが提案したのは、ヴェガ星域への殴り込みだった。

逃げ出したはずの部隊が急遽出現して、戦局を決定する。それがフォークの目論見

だった。策と呼べるものではなかった。

だが、リンチはやる気になった。

「たしかにこれはヤンに復讐し、ユリアン・ミンツに目にも物を見せるチャンスだな」

「だろう？ それに誰も貴官のことを逃げるだけの卑怯者とは呼べなくなるだろう？」

「まあな。卑怯者が、悪党になるだけの違いな気もするがな」

だが、それだけでも大分マシだとリンチは思った。

リンチは將兵に希望を尋ねた。三分の一の將兵は逃走を望んだ。だが三分の二はフオークの提案に乗った。彼らも人生の最後にひと花咲かせることを望んでいたのだ。

彼らは離脱希望者に二百隻ほどの艦艇を任せ、残余の部隊でヴェガ星域を目指した。途中中心変わりをした者達が出現し、彼らの離脱のために戦場への到着は遅れた。

ヴェガ星域最外縁に目立たぬようにワープした彼らは、宇宙ジェットが吹き荒れる様子に度肝を抜かれた。

リンチはフオークに尋ねた。

「どうする？ 俺たちの出る幕があるのか？」

「たとえば味方に地の利があり、想像を絶する新兵器があるうと、それを理由に怯むわけにはいかない！ 高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対処するのだ」

「なるほど、要するに行き当たりばったりというわけだな」

「おいー！」

その後も突入のタイミングを逸して今に至ったのであった。

皆、予想外の者達の乱入に混乱した。

ルドルフ2世は何故彼らが戻って来たのかわからなかった。

ヤンはリンチに十年越しでそこまで恨まれていることに衝撃を受けていた。

ユリアンが混乱から最も早く回復した。

「陛下、今のうちに全速離脱です！フォーク中将、助かりました！この恩はいつかチヨコボンボンで返します！」

「キョエエエ」

スクリーンから奇声が聞こえた気がするがユリアンは構わず撤退に移った。

ヤン艦隊が混乱から回復し、フォーク達が進退窮まっついに降伏した時には、神聖銀河帝国軍はヴェガ星域からの離脱を果たしていた。

ヴェガ星域の決戦は連合と新帝国の勝利に終わった。

だが、ルドルフ2世は逃走し、神聖銀河帝国の根拠地はいまだに不明であった。

第四部 20話 見せよ!! ?幻の超必勝戦術!! ?の巻

宇宙暦802年 1月1日 午前10時 自由惑星同盟パーミリオン星域

ライアル・アッシュビー達は異常な疲労の中で新年を迎えた。

既に連続戦闘時間は60時間を超えていた。

気を抜けば包囲されて殲滅される、一つのミスも許されぬそのストレスの中、将兵はよく戦っていた。

横形陣は既に五十層も破り、既に二万隻を超える敵艦艇を屠っていた。

だが、敵は依然二万隻以上、アッシュビーの二倍以上の戦力を擁していた。

フレデリカは、短時間で艦艇の、自動化とまではいかぬまでも効率化のための制御プ

ログラムをつくり、将兵の交代スケジュール、艦艇の補給の効率化を実施した。

これによって継続戦闘可能時間は飛躍的に伸びた。

ストークス少将達、目がキラキラ部隊は疲労を物ともせずには戦った。

しかし皆、数の暴力の前に疲労自体は確実に蓄積していた。

特にアッシュビーは交代する者がいないため不眠不休だった。フレデリカもアッシュビーに付き合っていた。

「なあ、中尉」

「はい」

「休める時に休むべきだぞ」

「提督を置いて休めません」

「気にするな」

「はい」

「ん？」

「はい」

「フレデリカ中尉？」

「はい」

「さつきから、はい、しか言っていないぞ」

「はい」

「フレデリカ中尉……」

「はい」

「結婚してくれ」

「は……ノーです！」

「ちっ！」

「まだ余裕があるようですね」

ジトツとした目で見てくるフレデリカに、ライアル・アッシュビーはニヤリと笑って見せた。

「秘策があるからな」

怪訝な顔をするフレデリカと、疲労の中でも興味を引かれた艦橋の幕僚達に対し、アッシュビーはその秘策を披露した。

「ドラゴニア会戦におけるアッシュビー・ターン、第二次フォルセテイ会戦におけるアッシュビー・インフェルノ、そしてイゼルローン回廊出口の会戦におけるアッシュビー・タッチ。ブルース・アッシュビーの必勝戦術は数あるが、一つ、幻と呼ばれた必勝戦術がある」

「それはまさか……」

「知っているのかライデン中尉！」

合いの手が入ったことは意に介さず、ライアル・アッシュビーは続けた。

「そう！ブルース・アッシュビーが味方の凶弾に倒れたシャンタウ星域での決戦、あの時アッシュビーが披露すると豪語していた秘策、その名も、アッシュビー・スパークだ！」
ライデン中尉が叫んだ。

「それを使えば一瞬で三万隻の艦艇を消滅させられたはずと伝えられている、あのアッ

シュビー・スパーク!?しかし、あれは披露される前にブルース・アツシュビーが銃撃されてしまい、結局誰もその中身を知りません!」

「俺にはわかる!」

アツシュビーの名を継ぐ男は言い切った。

「ブルース・アツシュビーが何をしようとしていたか。当時の戦況を見れば、この俺ならばたどころにそれを理解できた!だから今日、それをお目にかけてよう!敵がいま少し消耗すればそれが使える、使えるんだ!だからあと少しだけ頑張ってくれ!さあ、勝負はこれからだ!」

「イエツサー、アツシュビー!!」

この蓄積された疲労の中で、アツシュビーは士気を上げることに成功した。あの幻の秘策をこの目で見るまでは死ねない、皆その思いで自らの役目を果たした。

ハインセンの物資欠乏期限も間近に迫っていた。

果たして将兵が疲労で倒れるのが先か、アツシュビー必勝の策が炸裂するのが先か……それとも……

同じ頃、アツシュビー・クローン達はライアル・アツシュビーを追い詰めながら互いに連絡を取り合っていた。

「ライアル・アツシユビーの狙いがわかるか？」

「ああ、おそらくは」

「アツシユビー・スパークだな」

「わかりやすい奴だ」

「俺、俺たちが同じアツシユビーだということに気づいていないのだろうか」

「ここまであえてアツシユビーらしい戦術の使用を避けて来たからな」

「追い詰められた奴は必ず最後に大技を狙ってくる」

「俺、俺たち、アツシユビーにはわかる」

「奴の必勝の策を逆手に取り、奴を屠つて、俺、俺たちこそが真のアツシユビーだという

ことを証明する」

「それが俺、俺たちの望み」

「だが、奴の選択がアツシユビー・スパークだとは」

「幻の秘策といえどアツシユビーである俺、俺たちにはわかる」

「アツシユビー・スパークは穴のある不完全な策。その穴さえ衝けば、逆に殲滅は容易」

「アツシユビー・スパーク返し。これこそが真の必勝の策」

「ライアル・アツシユビー、お前を叩きのめす人物こそがアツシユビーだ。次に叩きのめす人物もその次に叩きのめす人物もアツシユビーだ。忘れずにいてもらう必要はない。」

お前は死ぬのだから」

アツシユビー・クローン達の声が重なった。

「さあ、勝負はこれからだ！」

日付は1月2日に変わった。アツシユビー艦隊の隊員はよく戦った。

一人倒れては別の者が交代し、その者が倒れば先に倒れた者が叩き起こされて代わりを務めさせられた。

横列陣はさらに15層を破っていた。

横列陣攻撃中に、左右から挟撃を受ける危うい場面もあったが、アツシユビー・ターンによってそれを回避した。

極限状態でアツシユビーの指揮はさらにキレを増しているかのようだった。

艦橋の幕僚は徐々にその姿を減らしていた。

倒れた者、他部署の支援に向かった者……

フレデリカも途中で倒れかけた為、アツシユビーが強制的に休息に入らせていた。

補給物資も不足が顕著になり始めた頃、敵の攻撃も少しずつ弱まり始めた。

アツシユビーは、頃合いと判断した。

「皆、よく耐えてくれた。ここから俺の言う通りに戦えば勝てる。さあ、勝負はこれからだ！アツシユビー、超必勝戦術、アツシユビー・スパークのお披露目だ！」

「イエッサー……アツシユビー……」

待ちに待ったその瞬間に、皆、最後の力を振り絞った。

アツシユビーが陣形を変化させようとしたその時、彼のもとに超光速通信が届いた。

同盟軍宇宙艦隊司令長官アレクサンドル・ビュコックがライアル・アツシユビーに戦闘停止を命令してきたのである。

あまりの事態に呆然とするライアル・アツシユビーのもとに、ビュコック司令長官から続けて映像通信が届いた。

無然とした表情のビュコックの隣には、その男が立っていた。

「やあ、ライアル・アツシユビー君。久しぶりだね。わたしだよ」

怪我の後遺症を感じさせない、若々しい顔に爽やかな笑顔を乗せて。

「君達の議員、君達のヨブ・トリユーニヒトだよ」

第四部 21話 僕たちは信じている

戦闘停止命令から少し時間を遡る。

宇宙暦802年 1月1日 午後三時 自由惑星同盟 首都星ハイネセン

統合作戦本部ビル地下の作戦会議室に集まっていたジョアン・レベロ、ピュコック達は難しい選択を迫られていた。

物資の不足がいよいよ深刻化して来ていたのである。

ハイネセンの物資はあと七日ほどは保つはずであった。

しかし、挙国一致救国会議の仕業かどうかは不明ながら、生活必需物資、医療用医薬品を収めていた配給用倉庫の一部が火事となり、失われてしまったのだ。

無論、物資は他の場所にも保管されていたため、直ちに物資が欠乏するという事はなかったが、それでも三日以内に、先天性代謝異常症患者等を中心に餓死者が発生する恐れが出て来ていたし、医薬品の不足による病死者が出る可能性も高まっていた。

他星系からの物資輸送の時間を考えれば、もはやリミットと言ってもよかった。

救国会議の要求を呑むべきか、何らかの妥協をするべきか、彼らは難しい選択を迫られていたのである。

ビュコックはレベロに伝えた。

「我々は軍人です。ですから政府の決定に従います」

レベロは再び精神的な余裕を失いつつあった。

「わかっている。今ここでクーデターに屈して同盟に悪しき前例をつくるわけにはいかない。議長としては苦渋の決断だが、たとえ餓死者が出たとしても我々はクーデターとの対決を続けなければならない」

ホアンがレベロに話しかけた。

「まあそれもわかるんだが、市民のために政府があるのであって、政府のために市民があるのではない。その総参謀長の言い草ではないが、市民には民主主義の原則よりパンの方が大事かもしれないよ。一部だけ要求を呑むなど妥協してでも、彼らに民需物資の提供を求める余地はあるんじゃないかね」

「妥協とはどこまでを指すのか。それは我々の退陣、彼らの意のままになる者の議長就任を表すのではないか。クーデターによる政変、それは絶対に許すわけにはいかない。同盟からルドルフを出すわけにはいかないのだ」

「それはそうだがね……。我々の支持率は元々そんなに高くないじゃないか。我々の首が飛ぶだけで、その後の正当な選挙が保証されるなら、妥協を検討する価値はあると思うかね」

「奴らはそんな約束を守るまい！」

レベロとホアンの論争を、他の閣僚達は黙って見ていただけだった。

チユン・ウー・チェンはシニカルな考えを抱がざるを得ない。レベロとホアン以外誰も責任ある決断をしようとしていない。これがこの国の民主主義の真の姿か、と。ルドルフの温床がまさにここにあるではないか。

論争が続く中、会議室の前で最初は静止の声、次に悲鳴が聞こえた。

参加者は何事かと扉の方を見た。

「誰じゃ!？」

ビュコックが厳しく、誰何の声を出した。

程なく、その男が姿を現した。

四十代後半、杖をついてはいるが未だに活力に満ち、秀麗な容貌のその男が。

「誰だとはひどいな。君たちの議員、君たちのヨブ・トリューニヒトじゃないか」

トリューニヒトはその爽やかな顔で会議室を見まわして現最高評議会議長の顔を見つけた。

「レベロ、元気そうでよかった。ハッピーニューイヤー！今年こそ勝利による平和を！」

レベロは新年の挨拶を取り合わず、トリューニヒトを睨みつけた。

「トリューニヒト、今までどこにいた!？」

「ああ。私の熱烈な支援者に匿ってもらっていたんだよ。紹介するよ。来てくれ、クリスチアン大佐。それに、みんな」

扉からぞろぞろと入って来たのは、特徴のある甲冑服とメンバーに身を包んだ男達だった。

「憂国騎士団！ トリユーニヒト、ついに、隠す気もなくなったのか！」

レベロの詰問にもトリユーニヒトは平然としていた。

「何をだい？ 彼らが私を支持しているのはみんな知っている話じゃないか。それとも私が彼らを組織しているとしても言いたいのかい？ そんな訳ないだろう。」

話が進まないのを見てホアンが尋ねた。

「それで、そんな物騒な方々を連れて何をしに来たんだい？」

トリユーニヒトは笑みを深くした。

「勘違いしないで欲しい。彼らはボディガードさ。ほら、近頃何かと物騒だからね」

ジョークへの反応を待つようにトリユーニヒトは言葉を切ったが、誰も反応を返さなかった。

彼は肩を竦めて話を続けた。

「決まっているじゃないか。交渉に来たんだよ」

その場にいる者達にはその男の笑顔が悪魔のように見えた。

レベロは身構えた。

「それはクーデターに屈しろということか？そんな脅しには屈さない」

「では、この状況、どうにかなると思っっているのかい？」

「今アツシユビー提督がバーラト星系目前まで来ている。彼らが敵艦隊を突破してくれば、我らの勝利だ」

「ほう、だが、苦戦しているようだね。少し前の数字だが、残存艦艇数八千隻対一万七千隻というところか、戦力差は大分縮まったようだが、敵が二倍以上という状態が長く続いているね。このままだとライアル・アツシユビー達はすり潰されて終わりじゃないかな」

「それでもアツシユビーならばー」

「個人の軍人の才幹に過大な期待をするのは民主共和政治家としてあるまじき行いではないかね」

「どの口が言うのか！」

激昂するレベロをホアンが宥めた。

「なあ、レベロ。降伏勧告ではなくて交渉に来たと言っているんだ。中身だけでも聞こうじゃないか。どんな交渉をしようと言うんだい？」

トリューニヒトの反応は意外なものだった。

目を見開いたのだ。

「降伏勧告……?」

そして笑った。

「ああ、なるほど。変な誤解をさせてしまったようだね。私が交渉と言ったのは、君達に手を貸してあげるということだよ。私は挙国一致救国会議のメンバーじゃないよ」

その場の皆が愕然とした。

ホアンは確認せざるを得なかった。

「おい、トリユーニヒト、本当か? 君のシンパの軍人達だって、救国会議に参加してんじゃないか。それに君だって救国会議が勝ちそうだと判断しているんじゃないかね」

「ああ、ロックウエル君たちのことかな。ロックウエル君はレベロ、君とも仲良くしたがっていたようだけどね。まあ、彼らが救国会議側についてのはまったく悲しいことだね」

トリユーニヒトは大げさに嘆いてみせた。

「それで、もう一つのほうだが、救国会議が勝ちそうだって? まあ同盟は一時的に彼らのものになるかもしれないが、大局的には彼らの負けになると思うがね」

皆が驚いた。

「何だって!」

「だって、つい先ほどだけど、ヴェガ星域で神聖銀河帝国が負けたからね。君達だって救国会議のバックに地球教勢力がいるのだと気づいているんだろう？パトロンがいなくなつて、はてさて彼らだけでやっていけるのかねえ」

それは最新の情報だった。在野の政治家に過ぎないはずのトリユーニヒトがその情報を持っていることだけでも驚くべきことだった。

そして。

レベロはトリユーニヒトがこのタイミングでここに来た理由に気づいた。

「トリユーニヒト、貴様、神聖銀河帝国が負けた結果を見て、こちらに味方することに決めたのか!？」

「まさかそんな訳ないじゃないか。私は民主共和制の政治家だよ。軍人に権力を持たせる企てに加担する訳ないじゃないか」

心外という言葉をそのまま貼り付けたかのようなトリユーニヒトの顔を見て、レベロはそれ以上追及する気も失せた。

「それで、交渉の条件とは何だ？最高評議会議長の座を譲れということか？」

「いやいやそんな大それたことは望まないよ。二つほどほんのささやかな願いを叶えて欲しいんだ。私と、私の被保護者の、それぞれの願いを一つずつね」

「もつたいぶらずに早く言え」

ホアンがレベロを止めた。

「いや、待てレベロ。トリユーニヒト、先に君が提供できるものを聞こうじゃないか。話はそれからだ」

「私が提供できるのは実にささやかなことだ。だが、このような時に政治家が持てる唯一の武器でもある」

自らの言わんとすることを誰も理解してくれていないことに気づき、トリユーニヒトは肩を竦めて言った。

「演説さ。信じようじゃないか。言葉の持つ力を」

四時間後、トリユーニヒトはハイネセン・スタジアムにいた。

八時を回っていたが、スタジアムは今回の演説を聞きつけた聴衆でごった返していた。

スーツ姿の男性もいれば、酒瓶片手の男性もいた。年配の女性もいれば、女学生もいた。憂国騎士団と一目でわかる姿の男性までもがいた。

トリユーニヒトはこの群衆の前で同盟全土への演説をするつもりなのだ。

トリユーニヒトは臨時で用意された演説台の前に移動した。

そして手放せなかったはずの杖を置き、自らの脚のみで立った。かつてのように。

演説は彼の人生であり、勝負の場であるとも言えた。

そのような場所に立つ時には、彼は自らの脚のみで立つと決めていた。

「同盟市民の諸君、私の話を聞いて欲しい。

同盟軍将兵の諸君、どうか私の言葉に耳を傾けて欲しい。

クーデターに反対する者、怯える者、共感する者、参加する者、立場はそれぞれだろう。

だがどうか、私の話を聞いて考えて欲しい。

まず先に明言しよう。私はこのクーデターに反対の立場である」
会場がどよめいた。

「トリユーニヒトが主戦論者であることは誰もが知っていたからだ。主戦論者であることが民主主義のルールの否定につながるわけではないことは皆知っていたが、それでも意外には思ったのだ。

トリユーニヒトは人々の心を読んだかのように続けた。

「意外に思われたのも無理はない。だが私がクーデターに反対するのは私が民主共和政治家であるからだけではない。

私はもはや主戦論者ではない」

今度こそ聴衆のほぼ全てが驚いた。

主戦論者の首魁、トリューニヒトが主戦論を捨てるとはどういうことなのか。

「私は愛国者だ。だがこれはつねに主戦論にたつことを意味するものではない。

五年前、私は確かに主戦論者だった。これは時代の要請であった。

ゴールデンバウム王朝が強大な圧政者として存在した。連合も民衆を抑圧していた。

だからこそ、私は自由と祖国のため主戦論者として彼らと対決する道を選んだのだ。

だが今やゴールデンバウム王朝は滅び、開明的で融和的なローエングラム王朝が興つた。連合も同盟の声に耳を傾け民衆の権利拡大を進めている。

今や積極的に戦う理由はない。彼らの自助努力を支援し、逆戻りさせないことが今の同盟の取るべき道なのだ」

連合が民衆への権利拡大を行なったのは事実である。だがそれは長きに渡る戦争への協力への褒賞としてであり、同盟の働きかけによるものではなかった。新帝国も監視国家、統制国家としての側面を見せ始めているとの指摘もあった。だが、トリューニヒトはあえて同盟市民の耳に心地よい解釈をしてみせたのだ。

トリューニヒトの演説は続いていた。

「市民諸君、これは最新の情報であるが神聖銀河帝国を名乗るゴールデンバウム王朝の

亡霊は、ヴェガ星域の戦いで敗れ去った。もはや戦うべき敵は外にいないのだ。

クーデターに与した者達よ、共感する者達よ。私には君達の気持ちがわかる。

私も君達と同じなのだから。

この急激な情勢の変化を理解できず、それでも、と敵を探す気持ち。長きにわたる戦乱の中で蓄積された無念の思い、恨み、復讐心、そのやり場を探す気持ち。

それこそが今や我々の敵である。

我々の心の中の、内なる敵である。

君達よ、

戦うのだ。この内なる敵と。

それこそがこれからの我々の戦いである。

今からでも遅くはない。

レベロ議長は私に約束してくれた。

我々の元に戻って来た者達の罪は一切問わないと。

だから、君達よ、私とともにこの心の中の内なる敵と戦っていきましょうか」

この時、耳障りな音と共に一条の光が夜の闇を切り裂いた。

一人の若い女性がブラスターを手にしていた。

震えながらもその銃口はトリューニヒトに向けられていた。

「トリューニヒト、この裏切り者！」

人垣が割れた。

トリューニヒトと女性を遮るものがなくなった。

慌てて寄つてくる警備員達をトリューニヒトは手で制した。

「どうかこのお嬢さんに言いたいことを言わせてあげてほしい」

女性はブラスタアを手放さなかったが、トリューニヒトを睨みながらも話し始めた。

「わたしの婚約者は帝国との戦いで死んだわ。あなたの主導した戦いで。そのあなたが今更戦いを捨てろと言うの？」

「その通りです」

女性は叫んだ。

「それじゃあ、あの人の、ロバートの犠牲は何だったのよ！」

「お嬢さん、お気持ちはわかります。ですが」

「よくもそんな嘘を！あなたに私の気持ちなんてわかるわけはないわ！いつも壇上で演説しているだけのあなたに！」

トリューニヒトは真摯な顔で乱入者を見つめていた。

「これが私の戦いの場なのです、お嬢さん。戦場だけが戦いの場ではないのです。現に

私は一度撃たれている。そしてたとえ今あなたに向けられていようと、同盟市民に伝えなければいけないことがあるのです」

女性の声はもはや悲鳴に近かった。

「それでも！あなたに私の気持ちなんてわからないでしょう！」

「わかりますよ。私もあなたと同じだ。私にもかつて恋人がいた。軍人の女性だった」

突然のトリューニヒトの告白に皆が意表をつかれた。

「彼女は笑顔が素敵で、亜麻色の……美しい髪を持った女性だった。だが、死んだ。ゴルデンバウムとの戦いで死んだんだ！」

トリューニヒトは急に激情を見せた。

「その日、私は誓ったのだ。このような戦いは早く終わらせなければならぬと。しかし私には軍人としての才能がなかった。私にあるのは弁舌の才能のみだった。」

だからこそ私は誓ったのだ。この弁舌の才能を活かし、彼女のような軍人達を支えよう。そしてゴルデンバウム王朝、あの圧制者達を滅ぼして、この戦いの日々を終わらせよう！」

女性は呆然としていた。

「だが、いまや戦いの日々は終わったのです。私が目指した形ではなかったがゴルデンバウムは倒れた。もう、外なる敵と戦う必要はないのです。あなたの婚約者や、私の

恋人のような人が出る必要はないのです。

私も戸惑いました。この内に残る激情をどうしてくれようかと。ですが、それを理由に新たな戦乱を呼び込むわけにはもういかないのです。このような悲劇は繰り返してはならないのです」

トリユーニヒトは彼女に微笑みかけた。

「お嬢さん、共に戦いましょう。心の中の激情、内なる敵と」

今や女性は一瞬手を放し、泣いていた。

彼女は警備員に連れられて去って行った。

ざわめきの残るスタジアムで、トリユーニヒトは演説を再開した。

「私はここに提言したい。同盟、新帝国、連合、フェザーンによる国際協調組織の設立を。それによる恒久的平和の実現を。その先の未来には、銀河連邦復活の可能性すら存在するでしょう！」

トリユーニヒトは奇しくも連合の盟主ウォーリック伯と同じ構想を持っていたのだ。あるいは、その先までも見据えていた。

「私はそのために内なる敵と戦う、戦いつづける！心の中の圧政者からも自由を獲得するのです。市民諸君、兵士諸君、どうかこのトリユーニヒトと共に戦って欲しい！」

「トリューニヒト議員！」

聴衆の中から声がした。中年の男性だった。

「レイモンド・トリアチと申します。私も主戦論者です。いや、主戦論者でした。私もあなたのことを裏切り者だと思っていた。ですが、違った。あなたが、違った。あなたこそ真の愛国者だ！私はあなたを支持する！どうか共に戦わせてほしい！」

トリューニヒトは微笑んだ。

「勿論だとも！」

彼を皮切りに、次々に賛同の声が上がった。

私も！俺も！

「内なる敵と戦おう！」

「恒久平和万歳！」

「自由惑星同盟万歳！」

「トリューニヒト万歳！」

トリューニヒトはその様子を満足気に見つめて言った。

「ありがとう、皆さん。さあ、国歌の吹奏だ。共に歌おう！」

スタジアムが歌声に包まれた。

同盟市民は一体となった。

演説が終わり、市民も熱狂の余韻と共に帰路に着いた。

トリユーニヒトは壇上を降り、スタジアムの控え室に戻っていた。

彼は立ち上がれないほどに消耗していた。

フォークから受けた銃撃は、トリユーニヒトからかつての体力を奪っていた。彼が表向き政治の第一線から退いていたのにも相応の理由があったのだ。

レベロは彼に声をかけた。労りの色はそこにはなかった。

「やってくれたな。私が出る幕などなくなってしまったじゃないか」

トリユーニヒトの後にはレベロが演説するはずだった。だがトリユーニヒトが引き起こした市民の熱狂により、そんなものを行う状況ではなくなってしまったのだ。

トリユーニヒトは座ったまま答えた。立ち上がれなかったのだ。

「すまないね。レベロ。久しぶりの演説で熱が入り過ぎた」

「ふん。あそこまで茶番に徹されると逆に感心してしまうな」

すべては事前の仕込みだった。

ブラスターを持ち込んだ女性は今からトリユーニヒト支持者だった。婚約者を失ったのは本当だったが、トリユーニヒトはその彼女を事前に説得して今回の演説に協力さ

せたのだった。スタジアム入場前には嚴重な身体検査が行われていたのだから、そうでなければブラスターなど簡単に持ち込めるわけがなかった。

レイモンド・トリアチは選挙で落選した新人政治家だった。次の選挙で当選したいがためにトリユーニヒトに協力したのだ。

「お褒めに預かり光栄だね」

トリユーニヒトに悪びれる様子はなかったし、レベロもそんなことは期待して居なかった。

「戦死した恋人というのも虚構だろうか？」

婚約者ならともかく恋人であればいくらでも捏造できるし、後で追及されてもどうにでもなった。演説でも心配なく語れるだろうというのがレベロの思うところだった。

「ははは。そう思うかい」

だが、いつもと異なるトリユーニヒトの少し寂しそうな笑みをレベロは意外に思った。

そういえば恋人の説明はいやに具体的だった。後の詮索を避けるためにはもう少しぼやかしてもよかっただろうに。

「……まさか、実話か？」

「ご想像にお任せするよ。君の想像する私は、實在、架空に関係なく恋人の死も政治に利

用するような悪徳政治家なんだろうと思うがね。……まあ、私も疲れた。早く統合作戦本部ビルに戻って事態の推移を見守ろうじゃないか」

トリユーニヒトの演説は、同盟市民の中の救国会議への共感を少なからず揺さぶった。救国会議に参加した兵士の中にも同盟政府に投降する者が現れた。

だが、固い覚悟で参加している救国会議の主要参加将校の心までは動かさない、そのはずだった。

しかしトリユーニヒトの演説は、かつてトリユーニヒト派と呼ばれた将校には別の意味を持っていた。

つまり、行動を起こす合図であった。

ロツクウエル大將はクーデター派各基地の将校に指示を出した。

転向、捕縛した反救国会議派将兵の解放、基地司令の捕縛や基地乗っ取りを。

ベイ准將はバーミリオンで戦っている艦隊にある言葉を送信した。

「祖国と自由、民主主義と平和、パンと紅茶」

それは艦隊無人化プログラム開発初期に、トリユーニヒト派シンシア・クリステイーン中尉によって仕込まれていた緊急停止コマンドだった。

アッシュビークローンの指揮する挙国一致救国会議艦隊は、旗艦を除いてその動きを停止させた。

ハイネセンでも、各地でも、救国会議内での裏切り、転向が相次いだ。ネプティスで、カツファアで、パルメンドで。

救国会議は急速にその勢力を衰えさせていった。

後世に「トリユーニヒト演説」と呼ばれるようになるその演説は、たしかに言葉の力で同盟の命運を変えたのだった。

……関係者に釈然としない思いを残しながら。

第四部 22話 年貢の納め時

アツシユビーはビュコックからの戦闘停止命令を受諾した。

アツシユビーにこれ以上貴重な艦隊戦力を破壊されてはかなわないというのが、ビュコックが早急に戦闘停止を命じた正直な理由だった。

救国会議艦隊の動力停止処置など、最低限の対処を行ない、バーラト星系から派遣された第一艦隊に引き継ぎを行なった後は、アツシユビー艦隊の全員が皆泥のように眠った。

中にはエレベーターに乗って降りるまでに寝てしまった者もいた。

約12時間後、目を覚ましたアツシユビーのもとに救国会議艦隊の司令官達の情報が届いた。

彼らがエンダースクールで生み出されたブルース・アツシユビーのクローンであったこと、三人がM I A(戦闘中行方不明)となった以外、残る十二人は皆自殺したこと、アツシユビー・クローンの情報は今後も軍機として秘匿されること、である。

ライアル・アツシユビーは彼らの死体を確認することにした。

同じ出自の者としての義務感もあったが、確認すべきことがあったのだ。

彼は救国会議艦隊の総旗艦であったマグナ・マーテルの死体保管室に向かった。

フレデリカもマグナ・マーテルまでは同行していたが、心配する彼女を置いて保管室には一人で向かった。

そこには十二個の棺が安置され、十二個の同じ顔が並んでいた。

……何故お前だけ生き残っているのか？

ライアル・アッシュビーは、そう問われている気分になった。

彼は十二個の棺を一つずつ巡った。

8 個目の棺を確認した時、

死体の目が開き、その手がライアル・アッシュビーの腰のブラスターに伸びた。

だが、ライアル・アッシュビーはその手を避け、逆に眉間にブラスターを突きつけた。

「なぜ気づいた……」

それが彼の最後の言葉になった。光条が彼を貫いた。

「俺ならやりかねない、そう思っていたからな。……そう恨めしそうな顔をしなさんな、

兄弟。俺もいつかはそこに行くんだから」

「それなら、今行け」

ライアル・アッシュビーの首に、後ろから手が巻きついてきた。

生きているクローンはもう一人いた。

体格も力も互角。不意をつかれた分、ライアルの方が不利だった。

抵抗する力を失いかけたその時、鈍い音がして首を締める力が弱まった。

距離を取って振り向いた彼が目撃したのは、倒れ伏したクローンと、ブラスターを持ったフレデリカだった。

「油断し過ぎです！」

フレデリカのブラスターには血がついていた。彼女がクローンの頭を銃把で殴り倒したのだ。

「フレデリカ中尉、助かった。しかしやけに手慣れているな。前にも誰か殴ったことがあるのか？」

「……気のせいです。それより早く縛りましょう」

「これ、生きているのか？」

「このくらいでは死にません」

「……やっぱり誰かを殴ったことがあるんじゃないのか？」

その時になって騒ぎを聞きつけて、ようやく人が駆けつけて来た。

「検死したのは誰か？」

「ヤマムラ軍医中佐です」

「救国会議派の疑いがある。至急身柄を拘束しろ」

気絶したアツシユビークローンが引き取られ、死体保管室にはライアル・アツシユビー、フレデリカの二人と、11体の死体だけになった。

再び部屋が静けさを取り戻した。

二人とも無言のまま時間が過ぎた。

自らがそこに加わっていたかもしれない死体達。

自分だけが生きてここに立っている。

エンダースクールで同じ顔をした者達とさせられた殺し合いの記憶、抑えこんでいたはずのその記憶がライアルの中でフラッシュバックしていた。

ふと、右手に温もりを感じた。

フレデリカが両手で彼の手を握ってくれていた。

「フレデリカ中尉……」

「震えていらつしやいましたから。気分はどうですか？」

「最悪だな。こんな最悪な気分は……」

ライアルはフレデリカの顔を見た。

「何でしようか？」

「貴官に求婚を断られた時以来だ」

「……………」

「いや、貴官が手を握ってくれているからその程度で済んでいるんだぞ」

「そうですか」

「そういえば、私と他の……アツシユビーが争っていた時、よく俺の方がライアル・アツシユビーだと気づいたな。同じ軍服だったのに」

「とりあえず殴ってから考えようと思っていました」

「おい！」

フレデリカは笑った。

「冗談です。あなたのことをずっと見てきたのだから、さすがにわかりますよ」

「……そうか。もう少しだけ手を繋いでいてくれないか」

「今だけですよ」

場違いな時間を過ごしてハードラックに戻った二人を待っていたのはドワイト・グリーンヒル大将からの呼び出しだった。

バーラト星系近傍某基地、挙国一致救国会議の中枢メンバーの多くは、まだそこに留まっていたが、ロックウエルとベイは既に基地から姿を消していた。

「裏切者ども」

コーネフはそう吐き捨てたが、その声には力がなかった。
ヴァンス主教は沈黙していた。

ロボスは事態を把握しているのかしていないのか、相変わらず無反応だった。
「エベンス准将はどうした？」

やって来たブロンズが部屋を見回しながら尋ねた。
コーネフが答えた。

「少し前に出て行った。自室に戻ったのではないか？」

腰を下ろしたブロンズはウインザーに尋ねた。

「これからどうする？クローン部隊は敗れた。ロツクウエル達が逃げた今、ここに敵の手が迫るのも近いぞ」

「まだまだこれからが楽しいのに、あいつら裏切るなんて馬鹿よね」

「は？」

ブロンズはウインザーの言葉に耳を疑った。

「これ以上何があるというんだ？」

ウインザーは噛んで含めるように説明を始めた。

「いい？この基地は、エンダースクールの秘密施設よ。ここにはアッシュビークローン

達の頭が保管されているわ。保管スペースの都合で、体を廃棄する必要があったけれど頭部だけでまだ生きているわ。実験に使われて大分数を減らしているけど、まだ百体以上残っているわ。……いや、百頭というべきかしら」

「……それがどうした？」

「この基地には無人化対応済みの戦闘艦艇が千隻残っている。無人化艦艇の制御を人工知能ではなくアツシユビーブレインが担当したらどうかしら？百頭のアツシユビーブレインが率いる千隻の艦隊。もう緊急停止コマンドは受け付けない。数を減らした第一艦隊と疲弊したアツシユビー艦隊で果たして太刀打ちできるかしら？」

「もうやめるべきだ」
そう言ったのはいつの間にか戻っていたエバンス准将だった。

「何ですって？」

「アツシユビーブレインによる艦艇運用など妄想に過ぎない」

「そんなことないわよ」

「たとえ可能だとしても、もはやそれは悪足掻きに過ぎない。トリユーニヒトの演説とロックウエル達の裏切りで趨勢は決まった。まとまった艦隊戦力もこの基地の千隻のみ。なあ、もう降伏しよう。それが同盟のためだ」

「そんなことないわ！……そうだわ。この基地にはハイネセンから連行してきた政府要

人が何人かいるわ。彼らを人質にすれば……」

「彼らなら既に逃した」

「なっ!? 貴重な交渉材料を! なんてことをしてくれたの!？」

エベンス准将は皆の顔を見回した。

「なあ、いつまでウインザーに付き合うんだ? もうやめようじゃないか」

コーネフはうな垂れて何も言わなかった。

ブロonzは弱々しく呟いた。

「そうだな……」

だが、ウインザーは認めなかった。

「そんなこと許さないわ。これ以上、世迷いごとを言うなら拘束するわよ」

ウインザーの意向に従って、どこからともなく兵士達が現れた。ウインザーの意に従う、より正確には、ヴァンス主教の意に従う地球教の兵士達が。

「世迷いごとを言っているのは誰だ。だがもう埒があかないな。この基地の自爆装置を作動させた。機密破棄シーケンス完了後に爆発する。あと三時間だ」

コーネフもブロonzも驚いた。

「何ですって?」

「この基地は同盟の恥部だ。同盟の大義を汚すものを残してはならない。もつと早くこ

うするべきだった」

「何を言っているの?」

「同盟のため、専制主義者どもを倒すため、軍を強化するはずが、その戦力をゴミ屑のようになり潰してしまった。同盟の将兵も使い捨てにした。あげくの果てが人の最低限の尊厳すら無視した兵器の登場か。これでは我々はまるでキャプテン・アッシュビーに倒される敵役ではないか。もはや、耐えられん。本当は正義の味方になりたかった。だが、そうなれないなら、悪役としてでも最後は潔く身を処したい」

ウインザーが兵士達に命じた。

「こいつを捕らえて、自白剤で停止コマンドを吐かせなさい!」

エベンスは笑った。

「無理だな」

ウインザーは不思議に思った。

兵士達の動きが異常に緩慢だった。それだけでなく自分の体の自由も効かなかった。体がいやに熱かった。

エベンスはいつの間にかガスマスクを着けていた。

「高純度のサイオキシンを気化させた。放っておいたら死ぬ濃度だが、まあ、あと三時間は保つだろう。その間にこれまでの行いを悔いておけ」

ブロンズもコーネフもヴァンスも倒れ伏していた。

常用していたせいか、ウインザーはなおも口を動かした。

「エベンス、卑怯よ……自分だけ……そんなマスクを……」

「ああ、心配するな。まだ俺には連絡を取らなければならぬ人がいるからな。それが済んだら貴様と一緒に死んでやる。お互い嬉しくも何ともなかるうがな」

エベンスはコンソールを操作し、超光速通信を始めた。通信先は戦艦ユリシーズだった。

「お久しぶりです。グリーンヒル大将。エベンスです」

「エベンス！今どこだ!？」

「バーミリオンから2日行程、L131廃棄基地です。救国会議の本拠地です」

「連絡をくれたという事は投降してくる気か？」

「残念ながら参加者の同意は得られませんでした。なので、基地ごと自爆するつもりです。捕らえていた要人は既に脱出させましたのでご安心を」

「早まるな！今、第一艦隊がそちらに向かっている。自爆する必要なんてない」

「いいえ。今更どうしようもありません。閣下が私にクーデター参加を思い留まらせようとしてくださっていたのはわかっておりました。閣下は正しかった。私はそのお気

持ちを無駄にした。お許しください」

「許すことなんて何も無い。貴官は私に危険を知らせてくれたではないか。君もベイやロックウエルと一緒に。私の命令が来るまで裏切る機会を待っていた。そうだろう?」

「……お気遣いには感謝します。しかし自分に嘘はつけない。私は様々なものを見誤った。同盟に回復しようのない傷を負わせた。この上はせめて潔く死ぬのみです」

「君にはまだ生きてやれることがある。私のような老いぼれよりも遥かに」

「いいえ。ですが、その言葉嬉しく思います。最後に、ライアル・アッシュビー中将に変わって頂けませんか?」

「……すまん。今彼は投降した救国会議艦隊旗艦に視察に行っており、通信には出られない」

「そうですか。一度話をしてみたかったです。残念です。グリーンヒル大将、このクォーターに参加した将兵は生命と名誉をかけていた。そのことは覚えておいて頂きたい。それでは。自由惑星同盟万歳!」

「おい! エベンス准将!」

エベンスは通信を切った。

グリーンヒル大将は第一艦隊が向かっていると云っていたが、この基地までハイネセ

ンからもバーミリオンからも2日行程、到底間に合わないだろう。

エベンスは自爆30分前になって、マスクを外した。急激に力が失われていくのがわかった。目の前のコンソールのランプが超光速通信の受信を要求して点滅していたが、エベンスはそれを無視した。

他のメンバーは、もはや動けない状態だった。一箇所に定まらない目の動きだけがまだ彼らが生きていることを示していた。

自爆15分前

5分前

2分前

大きな振動が部屋を包んだ。

エベンスは最後にもう一度思った。

俺は、みんなを救うキャプテン・アッシュビーのようなヒーローになりたかったんだ

……

自爆時刻が過ぎた。

だか、爆発は起きなかった。

サイオキシンでぼやけた頭でも、エベンスは不思議に思った。

自爆の設定を間違えたか？

通常通信を知らせるランプが点滅していた。

超光速通信ではなく、通常通信？この基地の近傍から？まさか？

エベンスにもはや出る気はなかったが、

緊急通信回路が作動し、強制的に通信画面が起動した。

そこに映ったのは、彼が憧れたその男の姿だった。

「キャプテン・アッシュビー！」

「やあ、君がエベンス准将か。自爆装置は俺が破壊した。もう心配はいらない」

「なぜ……ここまで2日はかかるはず……」

「ハードラックは銀河最速、そしてハードラックの陽子砲は銀河最強。知っているだろう？」

バームリオンから2日行程というのは、艦隊の場合の話だった。単艦であれば、位置や速度を同期させる必要もないため移動時間は短縮される。

さらに、ハードラックはライアル・アッシュビーの連合内巡業のために、ワープ性能向上などの改装が施されていた。

表向きは次世代艦艇開発のための試験艦扱いとなっていたが、技術者達の趣味によって、採算度外視の装備が開発、追加されていた。

一つが銀河最速を目指すための二連装大型ワープエンジンである。ハードラックは

旧時代の設計のため、船体に対してエンジン部が異様に大きかった。このため、小型化の進んだ最新のワープエンジンであれば、二つ積載することが可能となっていた。

二連装ワープエンジンによって、インターバルなしで二度のワープを連続して行うことがハードウェア上は可能となっていた。

さらに、艦艇座標の迅速算出アルゴリズムをハードラック専用フレデリカが開発したことで、ワープ後の座標算出のタイムラグを最小にして次のワープに入ることができるようになった。

……おかげでライアル・アッシュビーは地獄のような巡業スケジュールをこなす羽目になったが。

これによってハードラックはバーミリオンからL131廃棄基地まで二時間で到達することが可能だった。

もう一つの新装備、陽子砲はキャプテン・アッシュビーに登場したハードラックの代名詞とも言える装備であった。

これは巨大なサイクロトロン加速器をハードラックの船体に押し込むことで実現された。居住性は大いに犠牲となったが。

出来上がったのは、一艦艇が持つものとしては最長射程の高威力ビーム兵器、陽子砲だった。

L131 廃棄基地の自爆装置は、基地中央に存在した制御装置と、それに制御される基地各所の爆弾からなっていた。

ライアル・アッシュビーは、L131 廃棄基地近傍に到着後、遠距離から陽子砲で基地内の自爆制御装置のみを打ち抜き破壊したのだった。

L131 基地はライアル・アッシュビーにとつて長期にわたつてエンダースクールの訓練を受けた忌まわしき場所であり、その内部構造は知悉していた。それ故にできた芸当である。

アッシュビーはエベンスに笑いかけた。

「エベンス准将、協力ありがとう。グリーンヒル大将から話は聞いている。お陰で悪党どもを一網打尽にできそうだ」

エベンスは息を呑んだ。キャプテン・アッシュビーは勘違いをしている。憧れのヒーローに嘘はつけない。

「違います！ 私はその悪党の一員です。私は最後にはじめをつけようとしただけです！」

アッシュビーは笑みをおさめた。

「エベンス准将、誰にも間違いはある。重要なのは今の貴官の心だ。いや、今だけではない。貴官はずっと善意で動いていたのだろうか？ 世の人はその拠って立つところに従つ

て貴官を否定するだろう。だが、俺は否定しない。貴官が善意で動いていた限り、君の心は英雄そのものだ」

俺などよりずっと。いや、その言葉はエベンスが望む言葉ではない。アツシユビーはその言葉を口に出す寸前で飲み込んだ。

他のアツシユビー・クローンを見たことが彼の精神に影響を与えていた面もあるが、アツシユビーの語ったことは彼の本心だった。善意と信念で動いた彼が否定され、状況に流されて英雄を演じ続けるこの自分が肯定される。そのことが、アツシユビーにはただ堪え難かったのだ。

偽物に過ぎない自分が、まるで本物のように扱われる。

……妙齢の女性にはまったくモテないが。

後ろ暗い過去を背負った自分が、まったくそれを指摘されない。

……何故かフレデリカ中尉へのセクハラだけが誇張されて広まっているが。

物思いから立ち戻ったアツシユビーは、エベンスが泣いていることに気づいた。

エベンスは、彼の憧れたキャプテン・アツシユビーから、今彼が一番欲しかった言葉を貰ったのだ。サイオキシンは彼に感情を解放させていた。

「エベンス准将、君が望むなら、君も730年マフィアの一員だ」

それはとどめのひとことだった。

「はい！光栄です！キャプテン・アッシュビー！」

涙を流して敬礼するエブンスとそれをスクリーンから眺めるアッシュビーを、ブロンズやコーネフ、ヴァンスは虚ろな目でずっと見ていた。

三時間後、機密服装備のハードトラック乗員によって救国会議の中枢メンバー、基地内の将兵は拘束された。

サイオキシンの排気が完了した後、アッシュビーはフレデリカとともに基地に降り立った。

見ておくべきものがあつたのだ。

基地の入り口で連行されるウィンザー達とすれ違った。

「きやふてんあつしゆびー、ばんぎーい、ぎやひやひやひやひやひや」

哄笑を続けるウィンザーと、ギラギラした目でアッシュビーを見てくるコーネフとブロンズ、ヴァンス、そして無反応のロボス。

軍医がアッシュビーに耳打ちした。

「彼らは正気を失っています。サイオキシンを吸引し過ぎています」

「元に戻るのか？」

「わかりません」

「エベンス准将は？」

「彼も手遅れです。協力者とのことなので、拘束はしておりません。もうすぐこちらに来るのでわかると思います」

ほどなく、廊下の先にエベンス准将と思しき姿が見えた。

彼はアッシュビーに向かって一直線に突進して来た。そしてアッシュビーの前で急制動をかけて、見事な敬礼を見せつつ停止した。

「キャプテン・アッシュビー！お会いできて光栄です！どうぞご命令を！」

その瞳はキラキラと綺麗に輝いていた。

アッシュビーは黙って軍医を見た。

軍医は悲しげに首を振った。

「最近、軍医の間で病名が定められました。キャプテン・アッシュビー症候群、今のところ治療法は見つかっておりません」

ライアル・アッシュビーはようやくその場所に辿り着いた。

彼はフレデリカに確認した。

「もう皆死んでいるんだな？」

「……ええ、自爆シークエンス実行の際に動力供給が停止したようですから」

「貴官は見なくてもいいんだぞ」

「また襲われていたら心配ですから、ついて行きますよ」

彼は素直に答えた。

「……そうか。ありがとう」

その部屋には百以上の透明な球体が並んでいた。

中に入っているのは、アッシュビーの首、首、首、首、首、首……

百以上のアッシュビーの首、百対以上のアッシュビーの目がライアル・アッシュビーを見ていた。

……やあ、久しぶり

同じ訓練を受けていたな

同じ釜の飯を食べたな

俺を途中で抜かしていったな

俺を殺してくれたな

ところで、何故君だけそこにいるんだ？

君のいるべき所はこちらじゃないのか？

君も疲れただろう？

スペースはまだあるぞ

さあここに……

……手を引つ張られていた。

気づくとフレデリカがまた手を握ってくれていた。

「あなたのいるべき場所はわたしの隣です」

「すまん、また助けられた」

フレデリカはライアルを見つめた。その目には真摯な色があった。

「あなたはあなたですよ。ブルース・アツシユビーでも他のアツシユビー達でもない。キャプテン・アツシユビーでもない。わたしの放っておけない上官の、ライアル・アツシユビーです」

ライアルは瞬きした後、苦笑した。少し照れ臭くもなった。

「そうだな。俺はブルース・アツシユビーほどモテないしな。……俺は、なんでこんなにモテないんだ？」

「……それは私が悪い噂を流しているからです」

フレデリカの衝撃の告白にライアル・アッシュビーは目眩を覚えた。アッシュビーはレインのことも頭からとんだ。

「貴官は俺をどうしたいんだ!?!」

「アデレード夫人がつい最近亡くなられたそうですね」

フレデリカの急な話題転換にアッシュビーは戸惑った。

「……そうなのか」

「知っていたでしょう? 私はあなたがアデレード夫人の手紙に律儀に返信していたのを知っていましたよ」

「何で知っているんだ!?!」

「私のところにもアデレード夫人から手紙が来しましたもの。アッシュビーは私に今も愛情のこもった手紙を送ってくれる、お前の入り込む余地なんてない、この泥棒猫云々とそれも一通や二通じゃありません」

「……愛情を込めていた覚えはないが、それはまた巻き込んですまなかつたな」

「どうやらあなたに少しでも近づいた女性には見境なく手紙を送っていたようですわ」

衝撃の事実にあっしゅビーは再度目眩を覚えた。

「……つまり、俺がモテなかったのは貴官とアデレード夫人のせいだったのか」

「そうなりますわね」

「そうか、そうだったのか……」と、うそ寒そうな顔でブツブツと呟き始めたライアルを見ながら、フレデリカは一つ深呼吸をした。

そして呼びかけた。

「提督」

「何だ？」

「いえ、ライアル……」

「……何だ？」

フレデリカは言葉を探しているようだったが、ついに言った。

「あなたの後妻の座はまだ空いていますか？」

まったく相応しくない場所で、なんともまずい言葉ではあったが、フレデリカが言わんとしたことはアツシユビーに伝わった。

「中尉、いや、フレデリカ、それはつまり……」

フレデリカは微笑んだ。

「イエスですわ。閣下」

アツシユビーも普段の彼らしくなく言葉を探した。

「ありがとう。なんと言うか……なんと言ったらいいのか……なんと言うべきか……」
フレデリカはその様子を見て、だんだん恥ずかしくなってきた。

「そういえば父が」

「お父上がどうかしたのか？」

「一度あなたを家に連れて来い、と」

「えっ？ いや、そうだな。ご挨拶に伺わねば」

「首を洗って来いと伝えておくように、とのことでした」

ライアル・アッシュビーはグリーンヒル大将の殺気に満ちた目を思い出した。

「俺、君の家に行った日には、この首達の一員にされてしまうんじゃないか!？」

個人的な問題はともかくとして、同盟の状況は急速に解決に向かっていた。

救国会議から離脱したロックウエル大将は、救国会議に陰ながら協力していた同盟国内要人の名前を公表した。

そのリストはトリューニヒトにとって障害となる人物にいくらか偏っていた。

その多くは地球教と繋がりがある者達だったが、地球教の名前自体は巧妙に隠されて発表された。

トリューニヒトとレベロの交渉の一部には、この軍事クーデターへの地球教の関与を隠すことが含まれていたのだ。

それは道義上の問題を除けば、多くの者にとつて都合のよいことではあった。

シャンプールなどの一部軍事施設ではなおも頑強な抵抗が続いていたし、警備艦隊などの一部は逃げ回っていたが、やがてはそれも解決するものと思われた。

だが、神聖銀河帝国の方はまだ決着がついてはいなかった。

第四部 23話 残された者、残された謎、探索の始まり

神聖銀河帝国艦隊は撤退の途にあつた。

根拠地の判明を避けるために航行不能となつた艦をまとめて廃棄したことで、残存艦艇は一万余を切つていた。

ルドルフ2世は意気消沈振りはこれまでにないほどだつた。

それでも事後をアンスバツハに任せざるまでは気丈に振る舞い、艦橋で弱い姿を見せなかつたのは彼の矜持だつたのだろう。

ランズベルク伯から連絡を受けたユリアンは、父親を失つたゲルトロードのフォローをシユナイダー大佐に任せて皇帝座乗艦イズンに移乗した。

ルドルフ2世は供も連れずに自室に籠もつていた。

「陛下」

ユリアンは声をかけた。

顔を上げたルドルフ2世は泣いていた。

その姿は銀河を統べる皇帝ではなく、ただの少年そのものだつた。

「ミンツ大將、余は負けた。余の油断が敗因だ。メルカツツも死んだ。ただの屑だと

思っていたフォークとリンチに命を救われた。将兵を無為に死なせた。このままでは誰に対しても申し訳が立たぬ。余はどうすればよいのか」

その瞳にはユリアンに縋る色さえあった。

ユリアンは、年相応の少年に接するように慰めてやりたくなかった。抱え込むべき責任などない、と。

だが、神聖銀河帝国は依然健在であり、その限りにおいてルドルフ2世には一介の少年として生きることができないのだ。

ならばユリアンの言うべきことは決まっていた。

「陛下が生きていている。そのことが重要なのです。この敗北も、最悪に近くはありませんが、想定されていた可能性の一つです。陛下は健在。諜報網も健在。帝国の真の根拠地も未だ秘されたままで、経済・工業基盤も健在です。メルカツツ元帥も、他の将兵もこの状況を作り出すために死にましたのです。我々はこれから、いくらでも挽回できませう」

ルドルフ2世は目を見開いた。

ユリアンは続けた。

「陛下は同じ相手に二度負けるとお思いですか？」

「……いや。次は油断などしないし、彼らのやり口も学んだ。負けはしない」

ルドルフ2世に持ち前の不敵さが徐々に戻って来た。

ユリアンは微笑んだ。

「ならば、次は我々の勝ちです。20年、いや、10年あれば艦隊は再建できます。その時、再戦を挑みましょう。時間は我らの味方なのですから」

ルドルフ2世も、ユリアンも十代だった。ヤンもジークフリード帝も老いた時、彼らはいまだ現役を続けているだろう。かつては持ち得なかつた経験を積んだ上で。

時の女神の恩寵は彼ら若者にこそ与えられていた。

ルドルフ2世の目に力が戻った。

「そうだな。それに、連合の行動次第ではもつと早く再戦の機会が来るかもしれん。艦橋に戻る。呆けている場合ではなかつた。ついて参れ」

「はっ！」

ルドルフ2世は艦橋への道すがら、ユリアンに伝えた。

「ユリアン・ミンツ、汝をこれまでの功績によつて帝国元帥に任ずる。その上でメルカッツの後任として軍務尚書を務めよ。総参謀長職はシュトライトに引き継いでもらう」

メルカッツの後任となることはユリアンの予想どおりだった。

しかし元帥とは。

「敗戦の中、上級大将を飛び越して元帥とは、恐れながら信賞必罰のバランスを欠くか

と。下の者への示しがつきません」

「既にメツゲンドルフアーに元帥号をくれてやったのだ。卿の実績を考えたら誰も反対できまい。それに、そのくらいしなければメルカツの穴は埋まるまい」

メルカツが死んで、そのまま元帥不在では土気に関わるといふことは理解できた。

「それに、別に卿だけの話ではない。一旗上げようと神聖銀河帝国に来た者は多いのだ。今回を機に功績を挙げた者は昇進させるつもりだ。無論、滅びそうな国家ほど気前がよくなるという故事は知っているが、それを理由にやめることでもあるまい」

「ご存知の上でのことであれば、もはや言うことはありません。謹んでお受けいたします」

「うむ。では早速で悪いが、アン斯巴ツハと諮って、昇進者の候補選定と、人事面での再編案を急ぎつくって貰えるか？」

「承知しました」

こうしてユリアンは帝国元帥となった。

艦橋に戻ったルドルフ2世は精力的に指示を出した。

ユリアンはアン斯巴ツハと軍の再編について話しながらも、思った。

ヤン・ウエンリーは果たして神聖銀河帝国の、地球教団の真の根拠地を見つけられるだろうか？

「地球の対極」にして「星界の頂き」たるその場所を。

見つけて欲しくないという思いも、今ではユリアンの中で大きくなっていった。

第四部 24話 「今度はわかったな」

神聖銀河帝国軍の撤退後、連合軍と新帝国軍はヴェガ星域で事後処理を行なっていた。

損傷艦を用いた偽装工作によって、ワープ先の探査はうまくいかなかった。

その一事でも神聖銀河帝国が敗北すら想定に入れて事前には作戦立案を行なっていたことが伺えた。

このまま神聖銀河帝国の根拠地が不明のままでは、彼らに再起の機会を与えてしまうことになる。

それに、連合の将兵は連戦で消耗が激しかった。

現艦隊で長期にわたる帝国駐留は難しかった。連合が代替の艦隊を派遣する可能性もあったが、それはウォーリック伯とジークフリード帝の交渉次第であり、現状では不透明だった。

いくら遠征費用の多くを新帝国が肩代わりしているからといって、長期の国外遠征を今まで経験しておらず、経済規模も小さい連合にとって、それは大きな負担だった。現状、軍隊共有化の名目でフェザーンにも軍事費の負担をさせていたが、その負担が大き

くなればなるほど、将来的にフェザーンの離反を招くりスクも高くなるのだった。仮に連合が撤退すると新帝国に残るのは、二万五千隻程度の艦隊戦力のみであった。神聖銀河帝国軍はいまだ一万隻、場合によってはそれ以上の艦隊を残している。ルドルフ2世やユリアンの戦才を考えると、この程度の戦力差はひっくり返される恐れもあった。

結局のところ、神聖銀河帝国の根拠地が見つからない限り、戦争は終わらないというのがヤン・ウエンリーとジークフリード帝の認識だったし、帝国の他の地域で反乱を起こした者達の思うところでもあった。

自然と、降伏した部隊や損傷艦からの情報収集に力が入れられた。

だが、殆どの参加将兵は根拠地の場所など知らされていなかったし、知っていたと思しき者達は、艦ごと自爆、あるいは遠隔で爆破されているケースが殆どで、そうでない場合も先に機密保持のために自殺するか殺されるかしていた。

航路データも多くが消去されており、根拠地の場所は特定できなかった。徹底された機密保持に神聖銀河帝国と地球教の執念が感じられた。

唯一得られた情報は、一部の地球教徒の漏らした言葉、

「根拠地は地球の対極、星界の頂きにある」という一言だった。

末端の地球教徒は何も知らなかったが、ド・ヴィリエがふとした拍子に漏らした一言を憶えていた者がいたのだ。

だが、その一言だけでは結局何も分からなかった。

ヤンは、マルガレータに運んでもらった歴史資料の山に埋もれて、不謹慎な至福に浸りながら考えていた。

地球の対極の場所、それはどういうことか？過去の遺物たる地球に対する、輝ける未来となる場所？

例えばフェザーン？

いや、そこまでルドルフ2世が逃げ延びられると考えるのは無理があつたし、ケツセルリンク自治領主が裏切っているという情報もなかった。

あるいはオリオン腕に対するサジタリウス腕の中心地、ハイネセン？

最新の情報ではクーデターが解決に向かつていたし、そこまでの道のりは尚更遠いと言えた。

いや、そのような規模で考えるのに無理があるのかもしれない。

彼ら地球教徒の歴史は地球統一政府時代で止まっているのかもしれない。

それに事前情報である、太陽系から半径百光年、光世紀世界のどこかという情報も加えて考えれば、人類がその狭い領域にいた時代、銀河連邦成立前の混乱時代までに地球

と対極に位置した存在を想像すべきなのかもしれない。

そこまで思考を進めていた時、神聖銀河帝国の根拠地に関する情報が、二方面からヤンの元に入った。

一つは、ジークフリード帝からだった。内国安全保障局ハイドリツヒ・ラングの調査によって手がかりらしきものが得られたのだ。

彼は帝国図書館の司書長が地球教徒であったことに注目した。帝国図書館には銀河連邦期まで遡れる過去の記録が蓄積されていた。

地球教が長期にわたって帝国図書館に関わっていたとしたら、おそらくは地球教にとって都合の悪いデータを消している、あるいは改竄しているのだろうと考えたのだ。

その調査は難航したが、確かにデータが消されている痕跡は存在した。実のところ光世紀世界全般に関して記録の抹消やすり替えが行われており、絞り切れることは難しかった。例えば、殆どの者が気にしていなかったとはいえ、銀河連邦の首都星であったアルデバラン星系第二惑星テオリアの記録のかなりの部分が失われているなどという事態に陥っていたのだ。

しかし、一つ意外な記録が消されていた。ラングはこれに注目した。

ジークフリード帝を介してラングからもたらされたのは、ハイネセンがアルマイル第

7惑星を脱出した後の逃走経路に関する記録が消されているという情報だった。

ハイネセンはアルマイル脱出後、「無名の惑星」の地下に姿を隠し、八十隻にもなる恒星間宇宙船を建造したと伝えられる。

考えてみればおかしな話である。アルマイルは地球から17光年、人類によつて最も高密度に開発が行われた領域、初期開拓領域「光世紀世界」の一員だった。そして性能が高いはずもないイオン・ファゼガス号が辿り着けたその場所も、光世紀世界であるはずだった。

そうであるならば、そこにある惑星と呼べる存在は、すべて名がつけられていたはずなのだ。無数の小惑星ならいざ知らず、惑星であるならば。

それが「無名」ということは、どこかで失われたのだ。あるいは帝国図書館で行われていたように、意図的に。

一方で、ハイネセン一行がその惑星の名や場所を明らかにしなかったことにも意味があるように思えた。

イオン・ファゼガス号を建造するだけの知識を持っていたとはいえ、工業基盤を欠いた状態で八十隻もの恒星間宇宙船をつくれるものだろうか？

ハイネセン達に協力した者達がいたのではなからうか？

銀河帝国ともハイネセン達とも別の意志で動いていた者達が。

そう、過去の亡霊、地球教団。

そしてその根拠地であったならば。

もしかしたら親地球勢力構築のため、地球教の司祭も長征一万年に加わっていたのかもしれない。

だが、望郷の念を持たれては逃避行が失敗する恐れもあった。

新天地に着くまでは布教を控えている計画だったのかもしれない。

そして長征一万年の異常な死亡率。

司祭は死に、地球教が早期に同盟に広まることはなかった。

すべてはヤンの想像に過ぎなかったが、筋は通った。

では、その無名の惑星とは一体どこなのか？

実のところ、アルタイルを出発してからの移動日数、ワープ回数、その方向など、同盟には長征一万年の参加者が遺した断片的な記録情報が存在した。

その記録が、相互にいくつかの矛盾を含んでいたために一つには定まらなかったが、その惑星が存在すると思われる星域は何箇所か推定されていた。

そして、もう一つの情報がさらに候補を絞り込むのに役に立った。

その情報は、オーベルシュタインからだった。彼は過去のフェザーン船の寄港地のう

ち、経済上の重要性が低いにも関わらず、立ち寄ることの多い星がフェザンと協力関係にあった地球教団の拠点だと考えた。フェザンにとつての航路データはその経済覇権のために何よりも大事な門外不出のものだった。このためオーベルシユタインはケツセルリンクに5年以上前のフェザン船の航路データの収集と、解析それ自体を依頼した。解析結果のみならば、秘密情報を含まないからだ。

ヤンはオーベルシユタインからこの依頼のことを前々から聞いていた。

解析結果が出るまでここまですべて時間がかかったのは、ケツセルリンクが我々と神聖銀河帝国を天秤にかけており、先の決戦でようやく決心がついた、ということなのかもしれないとヤンは思った。

だが、それを背信と考えるのは間違っているだろう。ケツセルリンクもフェザンの命運を一身に背負っているのだから。

ともかくも、解析結果は得られた。

オーディンなど主要星系を除けばやはり、地球それ自体に向かう航路が圧倒的に多かった。しかし、廃棄されたも同然の星域ながら、妙にフェザン船の立ち寄りが多い場所も存在した。

その場所にはフェザン商人だけに知られた高付加価値資源の鉱山を持った小惑星が存在するのかもしれないし、宇宙海賊などとの何らかの秘密の取引が行われている場

所なのかもしれない。

だが、そのうちの三つが、ハイネセン達が身を潜めた無名の惑星の候補地と一致した。それは、プロキオン星域、シリウス星域、プロキシマ星域だった。

「そうか！わかったぞ！」

ヤンは思わず叫んだ。

司令官室内に散らばった資料との終わらない格闘を続けていたマルガレータは驚いた。

「ヤン提督？」

ヤンは興奮していた。あつげにとられているマルガレータの両手を取って部屋中を踊りまわった。

マルガレータは振り回されながらすぐに理解して叫んだ。

「閣下！神聖銀河帝国の、地球教の根拠地がわかったのですね！」

「ああ、わかった！たぶん！」

咳払いの音が聞こえた。

ヤンは踊るのをやめてそちらを見た。

フィツシャーとオルラウとベルトラムの三人がまじまじと司令官を見つめていた。

ヤンはマルガレータの手を離すと、三人に向き直った。

「喜んでくれ。神聖銀河帝国の根拠地がわかった。この戦いを終わらせられそうだ」

ヤンは、彼の後ろでマルガレータが赤くなつた顔を手で隠していることに、ついに気づくことはなかった。

「セクハラだろ、これ……」

ベルトラムの眩きにも気づかなかつた。

会議室に幕僚を集めたヤンは、彼の考えを披露した。

「神聖銀河帝国の根拠地はシリウスにある。おそらく」

オルラウが皆の疑問を代弁した。

「根拠の薄い二つの情報からいささか性急に結論を導き出しているように思えるのですが」

ヤンは軽く頷いた。

「それは認める。だが、これに地球の対極、星界の頂きという地球教徒からの情報を加えると信憑性が増すんだ」

「シリウスが、地球の対極で、星界の頂きなのですか？」

「そうだ。それを理解するには地球教徒の立場に立つて考える必要がある。彼らの時間は地球統一政府時代で止まっているんだ。地球統一政府時代、シリウスは彼らの公然の敵だった。彼ら自身がそう定めたんだけ」

オルラウは理解した。

「なるほど。地球のライバル、反地球の旗頭。つまり、地球の対極たる存在ということですか。ですが、星界の頂きの方はどうなるのです？」

「これも、地球からの視点を考える必要がある。シリウスの語源は光り輝くものを表す古代ギリシア語から来ている。地球から見た場合、シリウスは太陽を除いて最も明るい恒星なんだ。つまり、星界の頂きに立つ存在なんだ。そして地球から8・6光年と非常に近い。地球に設置された地球教総本部との連携も容易だっただろう」

皆、納得せざるを得なかった。

アッテンボローは少しかいを込めて言った。

「ヤン提督の歴史趣味が、役に立ったようですね。それにヘルクスハイマー大尉の献身も」

ヤンは抗議した。

「趣味じゃない。歴史家志望だ。ヘルクスハイマー大尉に助けられたのはその通りだが」

当のマルガレータは何か考え込んでいるようだった。

しかし、とヤンは思った。

よりもよってかつての敵の牙城シリウスを根拠地に選ぶとは、地球教団のかつての指導者はなかなかひねくれた精神の持ち主だったのだろうか。

いや、もしかしたらシリウスに対する復讐の一環だったのかもしれない。

元々はシリウスも地球の植民地だったのだ。

地球を衰亡させた怨敵の星系を乗っ取り、自らの拠点として活用する。

あえてロンドリーナを放置し、別の、名を捨てさせられた惑星を根拠地とした。

来るべき地球再興の日には、シリウスは再び打ち捨てられる。

遠大なる復讐。

そういうことなのかもしれない。

ヤンはジークフリード帝に連絡を入れ、急ぎシリウス星域に向かった。

第四部 25話 「しかもわかっていなくもある」

ヤンとジークフリード帝はそれぞれ一万隻の艦隊を率いてシリウス星域に到着した。ヴェガ星域における事後処理は、それぞれフォイエルバッハ、ルッツらに任せていた。

シリウス星系

シリウス戦役において地球統一政府を滅亡に追いやった反地球統一戦線の中心。

ごく短期間ながらも人類の中心地であったこともあるその星系は、いまや無人も同然の場所となっていた。そのように見えた。

かつての首都星、第6惑星ロンドリーナは、いまや野生化した犬が生態系の頂点に立っており、人類にとつては危険な場所であった。

この星系に本当に神聖銀河帝国の根拠地があるのだろうか？

存在するとすれば、大気圏降下能力を欠いたイオン・ファゼガスでも容易に着陸可能な、大気を持たない小型の惑星である可能性が高いとヤンは考えていた。

ヤンとジークフリード帝は、観測された七つの惑星のそれぞれに偵察部隊を派遣した。

第1から第7惑星までのそれぞれに人工構造物が発見された。

偵察部隊は惑星上に降下して綿密な調査を続けた。

そして、第1、第2惑星のそれぞれに、最近動いた痕跡の残る構造物と、入念な偽装の施された巨大なサイロを発見した。

「単一惑星ではなく複数惑星上に拠点を整備していたのか」

ヤンはあり得ることと納得した。

また、あえてシリウス主星に近く、過酷な環境の第1、第2惑星を選んだのも、発見リスクを低減するためののだろう。

一般的に、現在の光世紀世界の各星系は人口が希薄な上に過去に資源開発が進み過ぎた経済上の旨味が少なかった。内惑星となれば尚更であったから、事情を承知しているフェザーン船以外には訪れる船も少なかっただろう。

仮に歴史的興味からシリウスを訪れる酔狂な艦船があつたとしても、地球教団の活動の痕跡は、シリウス主星の激しい放射光の中に紛れて発見されることはまずなかっただろう。

物思いに耽っていたヤンにオペレーターが警告を発した。

「第1、第2惑星に派遣した偵察部隊、すべて通信が途絶しました」

ヤンは表情を引き締めた。

「何かしら動きがあるはずだ。警戒しつつ、第2惑星軌道まで前進せよ」

そして30分後、オペレーターが再度警告を発した。

「第1、第2惑星それぞれから艦隊出現、その数千隻を超えてさらに増えています！」

最終的に一万一千隻の艦隊が出現し、ヤンとジークフリード帝の艦隊と対峙した。

想定より艦艇数が多いのは、拠点に残っていた艦船まで動員したからだろう。よくよ

く観察すれば非戦闘艦艇も混ざっていた。

ジークフリード帝が出した降伏勧告は無視された。

ジークフリード帝は顔を曇らせていた。

「最後まで抵抗を続けるようですね。残念ですがしやうがありません。戦闘を開始して

ください」

ヤン、ジークフリード帝二万隻と、神聖銀河帝国軍一万一千隻は戦いを開始した。

神聖銀河帝国軍は死兵となって戦った。味方が巻き込まれても気にせずには砲撃を行

い、敵を倒すためなら体当たりも辞さなかった。まさに狂信者の攻撃と言えた。

その勢いは当初連合軍、新帝国軍を圧倒するかのようだった。

さらに第1惑星からは激しいビーム攻撃があった。

シリウス主星の強烈な光のエネルギーをビームに転換して攻撃に利用していたのだ。

しかし、ヤンもジークフリード帝も落ち着いて対処を行なった。

第1惑星からのビーム攻撃は、別働隊を派遣して恒星光発電設備を破壊することで無力化した。

敵の死にもぐるいの突撃には、緊密な砲陣で対処した。

勝敗はジークフリード帝の投入したビッテンフェルトの黒色槍騎兵隊によって決した。

死兵とはいえ、艦が破壊されれば宇宙空間ではそこで終わりである。細かな戦術を使つてこない分、黒色槍騎兵隊には非常にやりやすい相手だったのだ。

結果、ヤンとジークフリード帝は、少なくとも損害を出しつつも、神聖銀河帝国の殲滅に成功した。

生き残った者は殆どいなかったし、いたとしてもその殆どが自殺していた。

まさしく全滅であった。

ほどなく、第1、第2惑星上に震動が検出された。

それぞれの拠点が自爆したものと考えられた。

ヤンは嘆いた。

「彼らはなぜ自爆なんてことをするのだろうか。彼らは本当に大切なものをわかっていない」

マルガレータは敵の命まで惜しむ司令官の心根に感動した。司令官としては不適切かもしれないが人間としては尊いものだ。

「もう少しで、長征一万年のミッシングリンクの発見者として歴史学に名を残せたのに！」

……違ったらしい。

自爆によって第1惑星、第2惑星の内部は完全に埋もれ、その内部構造を調べるのに長い時間と費用がかかりそうであった。

当然生き埋めとなった者達の救助など望むべくもなかった。

旧門閥貴族も、地球教団幹部も、かつての地球統一政府の支配者層の末路と同じく、各惑星の地下奥深くで死を待っているのだろうか。

ルドルフ2世の座乗艦は第1惑星の表面で発見された。

その艦橋ではルドルフ2世と思われる少年が、地球教徒達とともに服毒して死んでいた。

「簡易遺伝子検査の結果は、エルウィン・ヨーゼフ2世のものと一致しました。つまり、ルドルフ2世であることは間違いないようです」

「そうですか」

ジークフリード帝は黙祷を捧げた。ルドルフ2世、かつてのエルウィン・ヨーゼフ帝は形式上のこととはいえ、自分の主君であったこともあるのだ。

彼は、自分も含めた大人達の都合によって皇帝を務めさせられ続けただけなのかもしれない。

そう考えると不憫にも思えた。

これで神聖銀河帝国、そして地球教団との戦いが終わった。

……本当に？

ヤンは引つかりを感じていた。

悠久の時を怨念とともに過ごした地球教団が、こうもあっさり終わるのか？

ユリアン・ミンツはどうなった？ 戦いの中で死んだのか？ 生き埋めになったのか？

シリウスは本当に神聖銀河帝国の本拠地だったのか？

ふと横を見ると、マルガレータがスクリーンに映る星々を見つめて不思議そうな顔をしていた。

ヤンはマルガレータに尋ねた。

「何か腑に落ちないことがあるのかい？」

「常々疑問に思っていたんです。何故地球教なのだろうって」

「どういうことだい？」

「ソル教、太陽教であつてもよかつたのではないでしょうか。地球を我が手に、なんて言つていても、このシリウスから見えるのは太陽じゃないですか。見えない地球より、輝く太陽の方が崇める対象に相応しいようにも思います」

即物的過ぎるようにも思えるマルガレータの疑問は、ヤンに思索のきっかけを与えた。

ヤンも常々疑問だったのだ。

「地球は我が故郷、地球を我が手に」とは、地球教徒でなくても知っている地球教の聖句である。

それは初代総大主教の言葉であると伝えられていた。

しかし、総大主教が地球にいたとしたら地球は足元に、抱えきれない大きさで存在するのだ。それを「我が手に」とは一体どういうことなのか。

仮に総大主教がシリウスに来ていたとしよう。マルガレータの言う通り、見えるのは太陽だけだ。

果たして「地球を我が手に」などと言う聖句が出てきただろうか？

地球の対極

星界の頂き

地球統一政府の歴史

シリウス戦役

地球を我が手に……

ヤンの中で、様々な事柄に関連が付き始めた。

そうか、そういうことだったのか。

いまだ確証はない。

だから確かめる必要があるが……

「ヘルクスハイマー大尉！」

「は、はい！」

ヤンはマルガレータに笑いかけた。

「貴官が副官でよかった！私ほとんどでもない考え違いをしていたのかもしれない！」

「な、なんですって!?!」

動揺するマルガレータを尻目に、ヤンは艦橋の人員に指示を出した。

「ジークフリード帝に連絡を入れてくれ！我々はこれより、神聖銀河帝国の真の根拠地に向かう！」

第四部 26話 探索の終わり、星々の果つる時

ジークフリード帝にシリウス星系を任せ、ヤン艦隊約八千隻はその星域に向かった。新帝国軍からはジンツァー大將率いる二千隻が同行した。

ジークフリード帝が来なかった、あるいは来られなかったのは、いまだヤンの考えが仮説に過ぎず、シリウスの方も疎かにできなかったからだった。

ヤンが赴いたそこは、ソル星域、太陽系外縁^{ソル}だった。

ヤンはそこでアテナウアー少將に天体の組成調査を命じた。

幕僚達は噂し合った。ヤン提督は何を考えているのだろうか、と。

ヤンはブツブツと呟いていた。

「メタンが多い……。やはり難しいか……」

「そうか……」

ベルトラム准將が急に遠い目をした後に、手を手を打ち鳴らして言った。

「よし！わかった！」

ラオ大佐が尋ねた。

「何がわかったんです?」

ベルトラムはニヤリと笑った。

「ヤン提督のお考えがわかってしまったんだよ。地球の対極、それはつまり太陽系の中心たる地球に対する太陽系の果て。太陽系外縁の天体のことだったんだ!」

「なるほど、それでは星界の頂きとは?」

「ふふふ。地球教の奴らは太陽系の枠内で物事を考えているんだ。星界とはつまり太陽系のこと。太陽の重力を考えればわかることだ。太陽が重力井戸の底、外側ほど高い位置の場所ということになる。この太陽系外縁こそが太陽系の頂きというわけだ。すなわち、神聖銀河帝国の根拠地は、最外縁惑星の——」

「えっ?! いや、違うよ。水やメタンばかりの天体は拠点としては使いづらいんじゃないかな」

ベルトラムが言い終わる前にその声に気づいたヤンが否定してきた。

ベルトラムはずっこけた。

ヤンは幕僚達に指示を出した。

「太陽系のもつと内側に行こう」

そこは、太陽系第5惑星木星だった。

ヤンはアツテンボロー少将に命じて木星の衛星の調査を行わせた。ガニメデ、カリスト、エウロパ……ミニ太陽系とも呼べる多彩な衛星群……

かつてそこには定住地も設けられていたが、今やそれも打ち捨てられ、無人の地と化したようだった。

ヤンはブツブツと呟いていた。

「これなら……いや……」

「そうか……」

ベルトラム准将が、再度遠い目をした後に手を打ち鳴らして言った。

「よし！わかった！」

ラオ大佐が少しうんざりしながらも尋ねた。

「何がわかったんです？」

ベルトラムはニヤリと笑ってスクリーンを指差した。その先にはスクリーンの大部分を占める巨大惑星の姿があった。

「アレを見た瞬間、俺はすべての謎が解けた!!」

ラオは冷静に続きを促した。

「それで？」

「う、うむ。この木星系こそが神聖銀河帝国の根拠地だったんだよ！」

「な、なんだってー!? ……じゃなくて、その理由は？」

「かつてのシリウス戦役。この木星系は黒旗軍の最前線拠点となっていた。小惑星帯を挟んで地球と対峙するための拠点。つまり、地球の対極だ！」

ラオはベルトラムの話を聞いて、そんな気もしてきた。

「では、星界の頂きの方はどうなんです？」

「木星は太陽系最大の惑星。つまりその頂点たる存在なんだ。それにこの大きさだ。地球から見ればシリウスよりも輝いて見えるだろう」

「なるほどー！」

ラオの納得の声に気を良くしたベルトラムは続けた。

「俺が思うに奴らは黒旗軍の設置した基地を——」

「えっ!?! いや、違うよ。まあ、否定はできないからいちおう調査はさせていたのだけど、やっぱり違ったみたいだね」

ヤンに再び否定されてベルトラムはまたずっこけた。

その様子を見てヤンは頭をかきながら続けた。

「それに、地球から見たら第2惑星の金星の方が明るいよ」

「よし、わかった！それじゃあその金星が」

「いや、違うよ。環境が悪過ぎるて拠点にはしづらいかな」

ベルトラムはついにしやがみ込んでしまった。

マルガレータがたまらずヤンに声をかけた。

「ヤン提督！ベルトラム准将の心が折れそうです。そろそろ神聖銀河帝国の根拠地がどこか教えてください！」

ベルトラムは体育座りをしながら昏い目をして「あきらめない……それが俺たちにできる唯一の闘い方なんだよ……」などと呟き始めていた。

ヤンは目を見開いた。

「そうか、そういうえば言っていなかったか。ごめん。それじゃあ説明しよう。だけどその前に艦隊を移動させようか」

ヤンは艦隊に命じた。

「移動目標は、地球だ」

アッテンボロー少将とジンツァー大将、合計三千隻の艦艇を木星系に残して、ヤン艦隊は地球に向かった。

小惑星帯を越え、火星軌道を越えた。

かつてテラフオーミングされ、多くの人口を抱えていた筈の火星も、この九百年のうちに大気は薄くなり、再び以前の姿を取り戻しつつあった。

ヤンは艦隊に、散開しつつ地球に接近することを命じた。

あらためてラオが尋ねた。

「ヤン提督、一周回って結局地球が神聖銀河帝国の根拠地なんですか？」

ヤンは答えた。

「いや、違うよ」

艦橋の片隅に移動して体育座りを続けるベルトラムを多少は心配しつつ、ラオは質問を続けた。

「では、どこでしようか？」

ヤンは艦橋を見回した。

「そろそろわかっている人もいると思うのだけど……」

皆、息を潜めてヤンの話を聞こうとするのみだった。

マルガレータが皆の気持ちを代弁した。

「続けてください。わかっている人もいるかもしれませんが、皆、ベルトラム准将の二の舞いになりたくないんです」

気づくとベルトラムがヤンを恨みがましい目で見ていた。

ヤンは苦笑いしつつ話を続けた。

「様々な惑星に進出した人類が地球について語る時、忘れている存在がある。そもそも地球のことすら忘れがちなのだから当たり前なだけだね。でも、皆本来なら知っていておかしくないんだ。同盟出身者なら特に」

皆黙って聞いていた。

「それは、他の惑星では殆ど見られない、ある意味で地球特有のもの。巨大衛星の存在さ。それは女神アルテミスが司る星でもある」

マルガレータがその名を呟いた。

「月^{ルナ}」

ヤンは頷いた。

「そうだ。地球の衛星にして最近傍の天体、月こそが神聖銀河帝国の根拠地だ」

ラオ大佐が到底信じられないとかぶりを振った。

「しかし、神聖銀河帝国は蜂起まで、数万隻単位の艦隊を隠していたはずですよ。可住惑星の衛星がそんな規模の艦隊を収容できるなんて。しかも、新帝国軍による地球攻撃の際にも見つからないだなんて信じられません」

「我々だって、それとわかってよくよく調査しなければシリウスにあった神聖銀河帝国

軍の拠点を見つけれなかったじゃないか」

「それはそうですが……」

「月の直径を知っているかい？」

「いいえ」

「約3500kmだよ」

「そんなに大きいのですか!？」

下手な惑星より、それこそシリウスの第1、第2惑星より大きかった。

直径45kmのガイエスブルク要塞だって、それこそ何千何万と収容できてしまう大きさだった。

「だから隠れる余地は十分にあるんだ。

それに、月からは天然の放射熱も発生しているから人類の活動など容易に紛れてしまふのさ。

実際、古代の人類は、宇宙に進出をはじめて以降もそこに異星人が基地をつくつていたりとか、その地下に異星人や、地球上で負けた敗軍の末裔が隠れ住んでいるとか、長らくそんな可能性を完全には否定できなかったぐらいだからね。

調べきれないし、何かあっても疑いの域を出ないんだよ。

あと、艦隊について言えばシリウスにも駐留させていたと思うよ。ヴェガで捕虜に

なった者が神聖銀河帝国の根拠地を知らなかったんだから」

「ラオも納得せざるを得なかった。」

「な、なるほど」

「ヤンは続けた。」

「それに、神聖銀河帝国、そしてその母体であった地球教の根拠地が月だというのは、考えてみれば当然なのかもしれない。」

「なぜなら限られた一時期を除き、月こそが地球統一政府の中核だったのだから。」

「地球統一政府宇宙省、そして宇宙軍、いずれもその本部は月面だった。」

「こんな当時言葉があつた。」

『ブリスベーンは地球の首都だが、月面都市は全太陽系の首都だ』

「これはそのことを指した言葉だ。」

しかし月面都市に関する情報は、こんにち殆ど伝わっていない。私も、古い歴史書を読んだことがあるから知っているだけだ。アルテミスにしても、処女神としては知られているが、月の女神だということは広まっていない。皆、月のことを知っていたか？ 何かの記述で読んだことがあるか？」

「殆どの者が首を横に振った。」

「奇妙なことだろうか？ 地球に関する宣伝は、地球教によつていやというほどなされてき

たのに。このことにも真の根拠地に意識を向けられなくなかった地球教の意向が関わっているのかもしれないな」

ヤンの話は続いていった。

「考えてみれば月にあることが合理的でもある。

地球上の総本部との連携を考えたら距離は近いほどよい。地球教団の幹部クラスの中でも限られた者にしか月の根拠地のことには知らされていなかったようだ。総大主教が根拠地まで行って姿が見えなくても不審に思われない期間で行き来できるという点でも月がいい。

それに月は資源の宝庫でもある。軍民間問わず多くの資源を月の中で確保できるだろう。そして、足りないもの、資源、人材、工業製品などは地球行きの船に紛れ込ませて輸送させることも可能だ」

それに、とヤンは続けた。

「何だかんだ言って、彼らは地球への執着心がある。なるべくなら離れたくはないだろう?」

オルラウが話をまとめて、その上で疑問を呈した。

「歴史的なある種の必然性と、合理的な理由についてはわかりました。あるいは感情的

な理由も。しかし、地球の対極、星界の頂き、という言葉と月の関係がわかりません。司令官閣下はそこにもお考えをお持ちと思うのですが」

ヤンは話を進めやすくしてくれたオルラウに軽く感謝した。

「ありがとう、オルラウ少将。

地球の対極については簡単だ。

皆、他の可住惑星を思い浮かべてもらえばいいんだが、惑星と衛星のバランスを考えた場合、地球に対して月は異常に大きいんだ。直径で惑星の四分の一以上の衛星なんて、少なくとも可住惑星では聞いたことないだろう？ 現代の天文学の連星の定義から言っても、地球は月との二重惑星だと言っても間違いではない。

地球と月を、共通の重心を回る連星系、『地球系』と捉えるなら答えは出たも同然だ。一方の極は地球、もう一方の極は月。対極というわけさ。

まあ、地球を絶対視している筈の地球教徒のくせに随分と斜に構えた言い方にも思えるが、それを言う本人が月の側にいたと考えれば、それほど不思議でもないと思うよ」なるほど、と納得の呟きがあちこちで起きた。オルラウは続きを促した。

「わかりました。では、星界の頂き、の方は？」

「一つはとても簡単な理由なのだけどね。

地球から見た時一番明るい天体は何か？」

無論太陽が一番明るいんだが、太陽が隠れ、星々が姿を見せる夜となればどうか？

恒星としてはシリウスが、惑星としては金星が一番明るい。

しかし、真に最も明るいのは、最近傍の天体、月なんだ。

月は複数の古代宗教で夜を統べる神に擬されてきた。天界の頂きと呼ばれるに十分だろう？」

でも、とヤンは続けた。

「私としては別の理由があるように思う。「星界の頂き」などという言葉を考えて人は随分と詩的な感性を持った人だったんじゃないかとね。

地球統一政府の時代、すべての星々は地球に通じていた。

星々からの船は、太陽系に入り、地球統一政府の宇宙における中枢たる月面都市に辿り着いた。当時はそこが旅の終着点だった。

月こそは当時の人類にとって星々の果つるところだったんだ。

そして月の「表側」にある月面都市から常に仰ぎ見ることになるのは、人類の母なる故郷、地球教にとっての至高の存在、地球だった。

当時の未熟な重力工学では、低重力に馴染み過ぎて1G環境である地球に戻れなくなっていた人も多かっただろうから、狂おしい望郷の念とともに月から地球を眺める人も多かっただろうね。

遍く銀河に散らばった人類は、来た道をさかのぼっていつか月に辿り着く。月こそは星界を登りきって辿り着くことのできる頂きである。そしてさらにその上に輝くのが、至高の存在たる美しく青き星、我らが故郷、地球、というわけさ。

これこそが、地球中心主義に基づく地球教的宇宙観テラリアンコスモロジー、そのかつての本質だったのではなからうか？

地球教の聖句を思い出してほしい。

『地球は我が故郷、地球を我が手に』

その聖句を考えた者はどこにいたか？

月面だったんだ。

黒旗軍に破壊され尽くした地球を、その人は心の痛みに耐えつつ月面から仰ぎ見た。

その人は、その頭上に存在する、取り戻すべき故郷たる天体に向かって手を伸ばした。いつか取り戻すべき我が故郷、地球を我が手に、と」

皆、2秒スピーチのヤンと呼ばれた男の長広舌に引き込まれ、いつしか沈黙していた。あるいはこれが歴史家志望だったヤンの本当の姿だったのかもしれない。

ヤンは息を整えた後、照れくさそうに頭をかいた。

「まあ、全部私の憶測に過ぎないんだけどね。だけど、この説が正しければ、そろそろあ

ちらさんから反応があるはずなんだ」

その通りだった。地球、そして月から20光秒の距離に近づいた時、それは来た。

これあるを予期して艦隊を散開させていたにも関わらず、一瞬で百隻以上の艦艇が失われた。

大威力の硬X線ビームの一撃だった。

オペレーターが叫んだ。

「月面！月面からの攻撃です！ガイエスブルク要塞の三倍以上の射程距離からの大威力の一撃！信じられません！」

どよめく艦橋の中でヤンが口を開いた。

「くそつ、予想以上の攻撃だな。だがこれで決まりだ。神聖銀河帝国の根拠地は月だ！」

そしてヤンにしては珍しく声を張り上げた。「皆、これが最後の決戦になる！最後のひと踏ん張りだ！」

ルドルフ2世は月の大深部の管制室にいた。

月面からの一撃が、ヤン艦隊の一部を宇宙の藻屑としたところをそのスクリーンから

見ていた。

ド・ヴィリエ大主教、レムシャイド侯、ユリアン・ミンツ、その他、神聖銀河帝国の主要メンバーがそこに揃っていた。

ルドルフ2世はド・ヴィリエに話しかけた。

「余の兄弟たるクローンを使つてまで行なつたシリウスでの偽装も、無駄に終わったようだな」

ド・ヴィリエは恭しく頭を下げた。

「まことに残念ではございます。この場所が明らかになつてしまつたことは。私としても無駄な戦いは避けたかったです。しかし、ここを陥とすことは、いくらヤン・ウエンリーといえど不可能です」

ルドルフ2世は頷いて、遠くにいる敵手に語りかけた。

「さあ、ヤン・ウエンリー、最終決戦といこうじゃないか。銀河最古にして最強最大の恒久要塞。この大衛星そのものがおまえの相手だ。そう、この、大天体要塞『月』^{ルナ}が」

ヤンは自ら虎の尾を踏んだようなものだった。

地球教団と神聖銀河帝国、最後にして最強の切り札が、ヤンに牙を剥いたのだ。

ルドルフ2世は覇気に満ちた笑みを見せ、叫んだ。

「その貧弱な艦隊でここに飛び込んで来たことを後悔させてやる！ヤン・ウエンリー！

「この太陽系がおまえの墓場だ！」

第四部 27話 還るべきその場所へ

大要塞「月」^{ルナ}は、地球統一政府時代の月面都市と宇宙軍月面基地の遺構を再生・拡張する形で構築された。

黒旗軍の侵攻によってそれら月面施設はことごとく破壊されたが、大深部区画までは完全には破壊しきれなかった。

大深部において黒旗軍による地球大虐殺を傍観せざるを得なかった者たち。

彼らが地球教団の主要母体となった。

彼らは月に潜みつつ、黒旗軍撤退後の地球に起こった戦乱に介入し、ついには統一に成功して地球教団を作り上げた。

名目上の総本部は地球に置かれたが、その根拠地は月のままであった。

しかしそのことは地球の総本部の一部メンバーには知らされることはなかった。

いつ何時地球が再び侵攻に晒されるかわかったものではなかったからだ。

彼らは地球防衛のため、捲土重来のため、月面地下の開発に力を入れた。そのために地球の復興が遅れるのも承知の上で。

その青写真は地球統一政府時代に作り上げられていた。シリウス戦役における地球

圏防衛の最終ラインとして月を要塞化する計画が立てられていたのだ。

予算も、資源も、時間も、何もかもが足りず、黒旗軍の攻撃を受けるまでに実現はされなかった。しかし、いまや時間だけはいくらでもあった。

九百年の時と、地球教徒達の献身によって、月の要塞化は完成した。

それは史上空前規模の工事となった。

月の地下、合計で百万立方キロメートルを超える空間が開発された。

完成した月要塞は恐るべきものとなった。

最大収容人員一億人、最大収容艦艇十万隻。

その人員を賄うだけの食糧生産プラントと、艦艇整備のための物資を賄い得る工業プラントを兼ね備え、大規模艦艇の新造能力まで保有していた。

さらに、そのために必要な資源も、エネルギーも、その殆どを月内で自給することが可能だった。

単独で、半永久的に、戦争を続けることが可能な真の恒久要塞がそこに実現していたのだ。

ガイエスブルク要塞の三倍以上の射程の攻撃は、ガイエス・ハーケン同様の、硬X線レーザー砲群によるものだった。

月要塞の硬X線レーザー砲は、月面の八箇所にそれぞれ十二門ずつ設置されていた。各レーザー砲はそれぞれガイエス・ハーケンのそれを凌駕する出力を持つていた。その実現には、溶融した月コアと月面の温度差による無尽蔵のエネルギーが利用されていた。

それぞれ固定砲台であるため、射角は制限されるが、神聖銀河帝国はこれを月軌道上の鏡面装甲を持った反射衛星で反射させて死角をカバーしていた。

単独の硬X線レーザーでは流星に射程距離20光秒を超える攻撃は実現できなかつた。

しかし彼らは、多数のレーザーを対象の位置で重ね合わせて強めることで、通常では実現し得ない遠距離をも有効攻撃範囲に収めたのだった。

彼らはこのシステムを「アルテミスの弓」と呼んだ。

月の周囲をいまや百二十個の衛星群が取り巻いていた。

六十個の反射衛星と、六十個の防衛衛星。

防衛衛星は「アルテミスの首飾り」のそれと同等のものだったし、反射衛星にもアルテミスの首飾りの装甲技術が使われていた。

多数の衛星から成る防衛システムの基本構想は、元々地球統一政府の月要塞構想にま

で遡るものだった。

あくまで構想のみで終わっていたそれを実現させたのは、フェザーンの支援を受けた同盟であった。

過去の知識はあっても、それを構築する技術力、運用ノウハウを持たなかった地球教団は、フェザーンを介して同盟から技術を盗み、バウンズゴールら技術士官を拉致して運用ノウハウを手に入れることで、アルテミスの首飾りの真の姿、原構想時の姿を実現したのだった。

反射衛星「アルテミスの弓」と、防衛衛星「アルテミスの首飾り」を備えた月要塞支援衛星システム「アルテミス」、それが九百年の時を越えて顕現していた。

ヤンは艦隊に指示を出した。

「後退しつつ、散開。さらに作戦Dを実施」

後退を始めたヤン艦隊を眺めながらルドルフ2世は呟いた。
「無駄なことを。我々はお前達を十分に引きつけてから攻撃したのだぞ。早う降伏するがよい」

アルテミスの弓による攻撃は最大で35光秒まで有効だった。

これは艦砲の有効射程のはるか外から攻撃が可能であることを意味するし、ヤン艦隊

がその範囲を抜ける時には艦隊の殆どが失われているものと思われた。

だが、ユリアンはさらに進言した。

「ヤン・ウエンリーの旗艦。パトロクロスを狙い撃ちしてください。そうしなければこの戦いは終わらないでしょう」

ルドルフ2世はその進言を容れた。

アルテミスの弓がパトロクロスに向けられていくのを見ながら、ルドルフ2世はユリアンに尋ねた。

「本当によかったのか？」

ユリアンは少年皇帝の問いの意味がわからなかった。

「どういう意味でしょう？」

ルドルフ2世は言い淀んだ。

「ヤン・ウエンリーについて卿が話すところを見ると、その、まるで師匠について誇らしげに語っているように思えてな。余にとつてのメルカツのような……」

ユリアンは自問した。

そうなのだろうか？ そうかもしれない。

「そうかもしれません。ですが、同時に仇敵でもあります。小官はこの戦いに私情を挟むつもりはありません。旗艦を狙うよう進言しましたのは、ヤン・ウエンリーを倒すま

では、安心できないからです」

「安心？」

「はい。ヤン・ウエンリーという男は勝算のない戦いはしない男です。そして、我々が何も用意していないなどとは思っていませんでした。であるならば、何らかの策を用意してははずです。それが実行に移される前に彼を倒すべきです」

「ふむ、やはり信頼しているのだな」

「……敵手としては尊敬しています」

「ふむ、では余はその男を打倒して卿から君主としての尊敬を得ようか」

ユリアンは返事に困って黙って一礼をした。そうしつつも、思った。

ヤン・ウエンリーがこの程度でやられるようなお人好しだったなら、ぼくもこんな苦勞はしていないのだけど、と。

彼らが話をしている間にも、パトロクロスは追い詰められていった。アルテミスの弓の照準の甘さと、パトロクロス自体の回避行動によって、二度までは砲撃を避けることができた。しかし、三度目の砲撃を避けることはできなかった。

パトロクロスは旗艦としての意地か、一瞬だけ耐えた後、跡形もなく消滅した。

「やっぱり旗艦を変えていてよかった」

ヤンは息を吐いた。

パトロクロスは、同盟軍連合領駐留艦隊司令官をパエツタの代わりにヤンが務めるようになって以来、ヤンの乗艦であり続けた。しかしそろそろ全面改修の時期を迎えており、それに伴って艦隊旗艦が変更されるはずだったのだ。

慣れている同盟製がよいというヤンの希望によって、同盟から新造の旗艦級戦艦が輸入され、ヤン艦隊に既に配備されていた。

しかし、ヤンが持ち前の怠け癖を發揮して引越し時期が遅れてしまっていたのだ。

……このような時に困として使うための深慮、遠謀だったと考えるのは鼻屑目が入り過ぎだろう。

いまや旗艦機能は新鋭戦艦ヒューベリオンに移管されていた。

この艦は、軍縮を進めていた同盟において廃艦となった旗艦級戦艦の名を引き継いでいた。

旗艦級としては小型の船体に、従来の旗艦級と同等の攻撃力、同等以上の機動力を備えた最新鋭艦である。

月の父親とされる神の名を冠した艦で月と戦う羽目になったことに、ヤンは皮肉を感じていた。

「しかし、これは勝てるのですか!？」

ラオ大佐がヤンに尋ねた。

ヤンは頭をかいた。

「予想より少しばかり強烈だったけど、まあなんとかなるさ」

いつも通りの気の抜けたその返答に古参の幕僚は安心し、一部の新参は不安を新たに
したようだった。

ヤンは隣の副官を見た。

「貴官も不安かい?」

マルガレータの返答はいつも通り真っ直ぐだった。

「いいえ。ヤン提督は勝算のない戦いをなさいません」

「……ありがとう」

マルガレータの信頼に満ちた目を眩しく感じて、ヤンはスクリーンに目を移した。

ヤン艦隊は、アルテミスの弓の猛威に晒されつつも後退を続ける一方、一千隻ほどの
部隊を前進させていた。

前進した部隊はアルテミスの首飾りの攻撃を受け、月面に到達するまでにすべてが失
われた。

だが、その部隊が消滅した後には、一定の靄のようなものが出現していた。

それは鏡面装甲材の小片群だった。

それはヤン艦隊と月面の間に広がった。

レーザーはその霧を通過する間に散乱し、威力を減じた。

レーザーにも、光学照準にも障害が生じた。

ルドルフ2世は舌打ちした。

「ヤンめ、最後の最後に小細工を残しておって」

ユリアンが冷静に指摘した。

「ヤン・ウエンリーがやられたにしておは艦隊の混乱が少ない。おそらく予め旗艦を変えており、パトロクロスを囷に使ったものと思われます。申し訳ありません。してやられました」

「いや、よい。アルテミスの弓が完全に無効化されたわけでもないしな」

事実、ヤン艦隊はいまだにその数を減らし続けていた。

アルテミスの弓の有効射程から外れた時には残存艦艇は一千隻程になっていた。

月に近づいた艦艇のうち8割以上が既に失われていた。

しかし、彼らはなおそこに留まっていた。

「あそこまで数を減らして一体何が出来るというのか？今頃になって援軍を待っている

のか？数を頼めば陥せるほど月要塞は容易くないぞ」

ルドルフ2世の言葉から、ユリアン自身も疑問を生じた。

たしかに、強大な月要塞を前に戦力が二万隻でも三万隻でも結果に違いはないだろう。

ヤンは集めようと思えばジークフリード帝に掛け合つて、そのぐらいの戦力は事前に集められたはずだ。それを集めなかつたということは、艦隊の規模によらずに、我々を降伏させる手段をヤンが持っているということではないか？勿論、ヤンがただ油断していたという可能性も完全には否定はできないが……

その時オペレーターが警告を発した。

「亜光速で月に接近する物体あり！巨大な氷塊です！」

ヤン艦隊の散布した鏡面装甲材によって攪乱を受けつつも、月面から発進して宙域を監視していた無人偵察機がその姿を捉えていた。

アルテミスの首飾りがミサイルやレーザーで迎撃を行なつたが破壊には至らなかつた。

数十秒後、それは月面に衝突した。その振動は大深部の管制室にまで届くものだった。

アン斯巴ツハが被害状況の確認を急がせた。

月面には新たに巨大なクレーターが出現していた。

それだけでは終わらなかった。

オペレーターがさらに警告を発した。

「同様の氷塊が多数接近中！」

この時ヤン艦隊の人員の殆どは木星にとどまっていた。

旗艦ヒューベリオン以下少数の艦のみが有人艦で、それ以外は無人で運用していた。

だからこそ気前よく神聖銀河帝国に破壊させたのだった。

アッテンボロー率いる部隊とジンツァー率いる新帝国の部隊は木星の衛星から一個あたり10億トンの氷塊を切り出し、それにバサード・ラム・ジェット・エンジンを取り付けて加速させた。

氷塊は亜光速まで加速して、月に衝突したのだった。

ヤンはこのような氷塊を百個以上用意し、木星系から月に向かって次々に加速させたのだった。

木星ではさらに同様の氷塊を準備中であつた。

事態を把握したルドルフ2世は、驚いたものの、特段慌てはしなかつた。

「この程度の攻撃で、月を陥とすことは叶わぬ」

実際その通りだった。

月表面に近い区画には流石に損傷が見られたものの、その主要区画は、大規模な攻撃や、小惑星の衝突も想定して、より深部に設けられており無傷のままだった。

フレーゲル男爵が尋ねた。

「アルテミスの弓や首飾り、X線レーザー設備は無事か？」

技術少将に昇進したシユムーデがこれに答えた。

「一部破壊されたものの、殆どが無事です。攻撃の来る方向が木星方面に限定されていますから、元々破壊可能な目標は限られています」

シユトライトが別の懸念を表明した。

「氷塊から溶け出た大量の水が施設内に浸入してくる恐れはありませんか？ かつての地球侵攻においてジョリオ・フランクールが行なった水攻めの再現を狙っているのでは？」

その指摘には動揺する者も出たが、シユムーデはこれにも冷静に答えた。

「その教訓は月要塞に既に活かされています。水が深部に浸入しにくい構造になっている上に何重もの防壁を設けてありますし、貯水槽も2000億トンを超える十分な余裕があります。実際上問題は生じないと言っているだけでしょ？」

ド・ヴィリエも同意して薄く笑った。

「これはいよいよヤン・ウエンリーの智略の泉も尽きましたかな」

ルドルフ2世が管制室を見渡して言った。

「どうやらこの戦いは我々の勝ちだな。ヤン・ウエンリーを捕らえるなり、殺すなりできなかつたのは残念だが」

グリルパルツァーがすかさずルドルフ2世に進言した。

「今からでも遅くはありません。シリウスで殆どの艦艇を使い潰したとはいえ、この月要塞にはまだ戦闘艦艇が二千隻ほど残っております。命じて頂ければヤン・ウエンリーを捕えてご覧にいれましょう」

「うむ。だが、ひとまずはこの攻撃が一段落してからだな。現状では港を開くことでもできぬ。この攻撃、嫌がらせとしては効果的かもしれんな」

管制室には安堵の空気が漂っていた。

やはり、この月要塞は無敵である。

だが、ユリアンだけは厳しい表情を崩さず、しきりに何かを調べていた。

同じ頃、ヤンはヒューベリオンの指揮卓に胡座をかいて、ブランデー入りの紅茶を飲んでいた。

「どうやら成功したみたいだ」

マルガレータが懸念を表明した。

「ですが、神聖銀河帝国が気付かなければ少し困ったことになりはしませんか？」

「大丈夫さ。向こうにはユリアン・ミンツがいる。きつと気づくさ」

「……」

マルガレータとしては、ヤンがユリアンに向ける妙な信頼が気に入らなかつた。ユリアンなど、人の心に取り入るのが上手いだけの詐欺師ではないか。

マルガレータの心の動きには気付かずヤンは続けた。

「気付かない時はこちらから知らせてやるだけさ。手品を自ら解説する羽目になったマジシャンみたいな状況は、なるべく避けたいけどね」

そうしている間も氷塊攻撃は続いていた。

ヤンの期待どおり、ついにユリアンが恐るべき事態に気づき、ルドルフ2世に警告を發した。

「このままでは月が破壊されます！」

ルドルフ2世は最初ユリアンが下手な冗談でも言ったのかと思った。

しかしその深刻な表情を見て、詳しく話を聞くことにした。

「ミンツ元帥。氷塊程度では月は破壊はできぬぞ」

「直接の攻撃としてはその通りです。しかし、陛下。陛下が、質量兵器のみで、惑星の軌道にある天体を排除することを考えた場合、直接破壊すること以外にどのような手段を思いつきますか？」

ルドルフ2世はその問いにしばし考え、思いついた回答に驚愕した。

「まさか、ヤン・ウエンリーは!?!」

ユリアンは頷いて、成り行きを見守っていた者達に説明を始めた。

「ヤン・ウエンリーは亜光速まで加速した氷塊を月に一定の向きからぶつけ続けることでその角運動量を失わせようとしています。月の角運動量が低下すれば、月と地球の距離が近づきます。つまり……」

ユリアンは一旦言葉を切って唾を飲み込み、続けた。

「ヤン・ウエンリーは月を、地球に落とそうとしています」

第四部 28話 去りゆく者、残る思い出

月が地球に落とされる！

皆、理解が追いつかなかった。あるいは、理解はできても感情が追いつかなかった。

アンスバツハがユリアンに確認した。

「理屈はわかる。しかし、そんなことが現実に可能なのか？」

「可能です。現に月はわずかず地球に近づいています。このまま攻撃が続けば遠からず……」

ユリアンの言葉をシムムーデも追認した。

皆、現実のことだと認めざるを得なかった。

「なんと冒瀆的な！」

デグスビー主教が呻いた。ド・ヴィリエとユリアンを除き、地球教徒は皆同様の反応を示した。

「星落とし。そんなものが実際に戦術として使われるのを見る日が来ようとは」

居並ぶメンバーの中で最高齢の武人であるクラマー憲兵総監が感慨深げに呟いた。

シウトライトはユリアンに確かめた。

「そんな事態になれば月はおろか、地球も壊滅して熔岩の塊と化すでしょう。ヤン・ウエンリーはそれを許容するような悪逆非道な人物だったのですか？」

「地球には偽帝国の侵攻のせいでもや殆ど民がおりませんし、月に民間人や捕虜がいることをヤン・ウエンリーは知りません。そもそもヤン・ウエンリーが人民への損害を気にしないことはフェザーンでの戦いで私がよく知っています」

ヤンが経済的な損失に無頓着なだけで民間人の生命の無事を非常に気にする人物であることをユリアンは知っていたが、あえてそう言った。

「ヤン・ウエンリー、もはや人間ではない」

「悪魔め……」

地球教の主教、司祭が口々に呟いた。

悪鬼ヤン（ヤン・デア・デーモン）、星落としのヤン（ヤン・デア・シユテルンファールン）という新たな二つ名が生まれた瞬間であつた。

グリルパルツァーが進言した。

「攻撃は木星方面からです。なんとか艦隊を出撃させてこれを止めればよいでしょう」
アンズバッハがこれに反対した。

「木星方面には相応の数の部隊がいるでしょう。別にヤン・ウエンリーの本隊もいることですし、二千隻程度の我らの艦隊では逆に壊滅させられるリスクが高いかと。そんな

れば我らの選択肢はさらに狭まります」

結論が出つつある様子を見て、ユリアンはルドルフ2世を促した。

「我らの負けです。ヤン艦隊が退路を塞ぎに来る前になにとぞ脱出を」

ルドルフ2世は決断した。

「余がここを離れば、奴らも氷塊攻撃をやめるだろう。脱出し、再興を図る。皆の者、定めてあつた脱出計画の通り行動せよ」

彼らは月要塞の不落を信じてはいたが、万一のための脱出計画も怠りなく準備していた。計画を作成したのは地球教徒の地球脱出も主導したユリアンだった。

脱出準備は効率よく進められた。

脱出者は神聖銀河帝国の主要メンバーを中心としており、殆どの兵士、労働者、その家族は置き去りにされる計画だった。

脱出のため、百隻の高速戦艦の準備が完了した。

乗り込むだけとなったこの時、一つの騒動が起きた。

「何だと。ミンツ元帥、卿は行かぬと申すか?」

ユリアンの残留表明に、ルドルフ2世は戸惑いを隠せなかつた。

「はい。残される者の面倒を見る者も必要と思ひます」

「それを、卿がやると申すか」

「はい。それに、私にはここでなすべきことがありますので」

ド・ヴィリエがユリアンに尋ねた。

「結局、そなたの目的とは何だったのだ？」

「前にもお話しした通り、地球を人類の故郷として誇れる、青く美しい星に戻すことです。それは本来、ある女性の望みでした。それを私は代わりに叶えたいのです。そして……私の言う地球には、地球教徒のことも含まれています」

ド・ヴィリエはユリアンの言わんとすることを理解した。

「なるほど、地球教徒の穏健化と、地球を青く美しい星に戻すことで人類の故郷としての尊敬を平和裡に取り戻すことを同時に行なうというわけか」

ルドルフ2世は暫くユリアンを見つめていた。ユリアンにはその目の中に縋るような色を僅かに見て取った。ユリアンは決心がぐらつくのを感じたが、それを行動なり言葉なりに移す前に、ルドルフ2世が口を開いた。

「わかった。後のことはミンツ元帥に任せる。余の元で卿の目的を達成させられなかったのは残念だ。余の不徳だ」

絶対君主からの思わぬ言葉に、ユリアンはすべてを投げ出してついでに行きたい衝動に駆られた。だが、寸前で思い留まった。

「勿体無いお言葉。しかしすべて臣の力不足のせいにごさいます。これまでのご恩、返

せぬままとなること、忸怩たる思いです」

「返せぬと思うのは間違いかもしれぬぞ」

ユリアンは目をしばたいた。

「どういうことでしょうか？」

「余はいつの日か帝国を再興するつもりだからな。再興の暁には余の右腕としてまた働いてもらおうとしよう」

ユリアンは、この少年皇帝には敵わぬと思った。

「仰せの通りに！」

ド・ヴィリエはその様子を黙って見つめていた。そして少し考えた後にユリアンに告げた。

「臨時の大主教会議を今開く。といつても、もはや私しかおらぬがな。大主教会議の規程に基づき、賛成多数により、卿を大主教とし、総書記補佐から総書記代理に昇格させる」

ユリアンは驚いた。ド・ヴィリエは言い訳のように続けた。

「ここに残す信徒達に恨まれるのは私の本意ではない。私の代わりにまとめ役なり糾弾の矛先なりになってくれるなら、願ってもないことだ」

「ド・ヴィリエ大主教。今までご指導頂きありがとうございます」

それはユリアンの本心だった。実務において有能なこの男に学ぶことは非常に多かったのだ。

ド・ヴィリエは目を見開き、そつぽを向いた。

照れたのかもしれない。

「そなたの手に余りそうな狂信の者どもは私が連れて行ってやる。だから、ミンツ大主教。私も地球に思うところはある。地球を美しき星に戻せるといふのならやってみせよ」

「総書記代理として、承知いたしました」

レムシャイド侯も逡巡の後、ユリアンに言葉をかけた。

「ミンツ元帥、叙爵の話が留め置かれていたが、卿の実績を鑑み伯爵に推薦してもよいと考える。そうだな、宮内尚書」

急に話をふられたカルナツプ男爵は、肯定する他なかった。レムシャイド侯はルドルフ2世に確認した。

「陛下、ミンツ元帥を伯爵に叙した上で宰相代理としたいと思います。よろしいでしょうか？」

ルドルフ2世は悪戯を思いついた子供のよう目目を輝かせていた。

「勿論だ。ミンツ元帥、要らぬと言うかもしれないが、断ることは許さんぞ」

ユリアンとしてはこう答えるしかなかった。

「慎んでお受けいたします」

レムシャイド侯は言いにくそうにユリアンに告げた。

「では、ミンツ伯、早速の仕事となるのだが……サビーネ様、エリザベート様達が、急に流浪の旅はもう嫌だと仰り出したのだ。ここに留まるつもりのようなのだ。……というよりも、ミンツ伯が行かないなら行かない、どうやらそういうことらしい。我々はルドルフ2世陛下について行かねばならぬし……」

ユリアンはレムシャイド侯の言いたいことが理解できた。

「レムシャイド侯、承知いたしました。このミンツ伯、宰相代理として、また、帝国の藩屏として、皇族の方々をお守り申し上げます」

レムシャイド侯は救われた顔になった。

「うむ、うむ。頼むぞ」

ランズベルク伯は無邪気にユリアンの叙爵を祝福した。

「武名名高いユリアン・ミンツ殿が帝国の貴族に加わること、このランズベルク伯アルフレット、大変嬉しく思いますぞ。ですな、フレーゲル男爵」

フレーゲル男爵はランズベルク伯ほど素直ではなかった。

「ふん、平民上がりの孺子め。せいぜい帝国貴族の名を汚さぬように……うっ」

フレーゲル男爵はルドルフ2世に睨まれ、最後まで喋ることはできなかった。ユリアンは、フレーゲルの言葉も激励と解釈した。

「帝国貴族の名誉を汚さぬように精進いたします」

「ふ、ふん、わかつているならばよい……よいです」

その話の間に、ルドルフ2世は書き付けをしていた。ルドルフ2世はそれをユリアンに手渡した。

「余の全権委任書だ。最高司令官に任ずるとともに余が置いて行かざるを得ない臣民達と領土、財産に関して、一切の権限を委任する。あとは頼むぞ」

ユリアンは言葉に詰まった。ユリアンは自らの目的のために動いていたはずだった。彼らには裏切り者と罵られてもよいはずだったのに、彼らはユリアンの欲していたものを次々に提供してくれたのだ。

たとえ彼らなりの目論見があつてのことでも、ユリアンとしては感謝するしかなかった。

彼らは後世に大悪人として名を残すことになるかもしれない。そう呼ばれるに値することを彼らがやってきたことも事実だった。

だが、彼らが「ただのテロリスト集団」として歴史で扱われることには、ユリアンは

耐えられなかった。

よい思い出ばかりでは決してなかったが、彼らと生きることになったこの数年を、ユリアンはそれだけ貴重なものと感じていたのだ。

彼らのためにもユリアンは決意を新たにしました。

「陛下、承知いたしました。陛下ならびに皆様。このユリアン・ミンツ、これまでのご厚情に感謝申し上げます。決して皆様に対して悪い結果はもたらさぬと約束いたしますので、後顧の憂いなく脱出くださいますよう、お願い申し上げます」

そして深々と頭を下げた。

彼らは次々に去っていった。

ある者は無言で。ある者は言葉を残して。

「皇族の方々のこと、お頼み申し上げます」

モルト大将だった。

「なかなか上手くやりおったな」

バーゼル中将だった。

次々に去っていく中で、ルドルフ2世が最後に残った。ランズベルク伯を供にして。

正確には一度立ち去ったにも関わらず、戻って来たのだった。

ユリアンは驚いた。

「陛下、早く船にお乗りくださいー！」

ルドルフ2世はどこ吹く風だった。

「そう急かすな。やっぱり最後に一言、言つてやりたくてな」

そう言うどルドルフ2世はユリアンを睨んだ。

ユリアンは身構えた。主君を見捨てたようなものだから何を言われても仕方がないと思つた。

ルドルフ2世は不意に少年らしい笑顔になつて言つた。

「またな！ユリアン！」

少年皇帝はそう言い残して走り去つた。

ランズベルク伯も慌ててその後を追いかけた。

ユリアンはあつけに取られた。

ルドルフ2世はユリアンのことを、最後の最後に名前前で呼んだのだつた。

思えば今まで大人ばかりに囲まれて生きて来たユリアンにとって、ルドルフ2世は初めての友達だったのかもしれない。

それはルドルフ2世にとつても同じだつたようだ。

ユリアンの胸に彼との思い出が去来した。

「またな！エルウィン！」

ユリアンはルドルフ2世のかつての名を叫んだ。

ルドルフ2世、エルウィン・ヨーゼフの姿は既に見えなかったが、ユリアンはその声
が彼に届いたと信じた。

第四部 29話 混乱の中で

氷塊の衝突が止まぬ中、その間隙を縫って二千隻の艦艇が月要塞から出撃した。

各艦艇はそれぞれバラバラの方向に飛び去った。そのうち高速戦艦百隻以外は囿であり、百隻の逃走方向を隠すための出撃だった。

ヤン艦隊が追撃を行おうとすればそれを止める役目も担っていたが、ヤン艦隊は全く動かなかった。

ルドルフ2世達は太陽系からの逃走に成功した。

オルラウ少将がヤンに尋ねた。

「追わなくて本当によろしかったのですか？あの中にルドルフ2世がいた可能性は高いと思うのですが」

ヤンはこともなげに答えた。

「無駄なこととはしない主義なんだ。彼らのことは別の者に任せるさ。それより、多分まだあの月要塞の中には厄介な人物がいると思う。月要塞から何らかの通信があるまで、氷塊攻撃、「ジャン・ピエールの帰還」作戦は継続だ」

ヤンは、西暦時代の伝説の宇宙の放浪者、いつか地球に辿り着くことを願っていたと

いう男の名を作戦名に冠していた。

神聖銀河帝国の中樞の人員のうち、月要塞に残った者はごく一部だった。

軍人としてはアンスバツハ、シュトライト、ベンドリング、シューマツハ。

ユリアンの護衛役としてマシユンゴも残っていた。

地球教団の司祭、主教は反ド・ヴィリエ派改めミンツ派の者達が軒並み残っていた。彼らはそもそもド・ヴィリエ派によつて要職からは排除され、現場において民の教化と民生の安定化に努めていた。ユリアンによつて食事へのサイオキシン混入はやめさせられており、今や地球教団の比較的健全な活動を担う存在となっていた。

他にもキルドルフ准将など何名かが残つてはいたのだが、既に月要塞のどこかに姿を消していた。

アンスバツハ、シュトライトはかつての主人の家族を守るために残つたことが推察された。マシユンゴも言わずもがなだった。

ユリアンはシューマツハとベンドリングに理由を尋ねた。

シューマツハは部下を見捨てて行けないと答えた。

ベンドリングは、自暴自棄になつた軍人達の中で犯罪に走る輩が出るかもしれず、それを誇りある帝国軍人として抑えたい、と答えた。

実際、月要塞内部では主が姿を消したことを感じ取った兵士達の中に、不穏な動きが生まれようとしていた。

一刻も早く対処する必要がある。ユリアンは彼らに矢継ぎ早に指示を与えた。軍人には将兵の統制と臣民の保護を。司祭、主教には人心の慰撫を。彼らは行動に移った。

自らも移動を開始しようと思った時、ふと、もう一人残っている者がいることに気づいた。

ド・ヴィリエ派であるはずのデグスビイ主教だった。

よりにもよって、とユリアンは思った。

内心を隠してユリアンは彼に笑顔を向けた。

「デグスビイ主教、あなたも残ったのですか？ド・ヴィリエ大主教について行かなくてよかったですか？」

「地球を捨てるなどあり得ぬこと。ユリアン・ミンツ、いや、ユリアン・フォン・ミンツ。私は前々からあなたに期待していた。いまや大主教。そして帝国の全権まで手に入れた。私の目に狂いはなかった。地球教存続のため、そして銀河を地球の治めるところとするため、何かまだ策があるのでしょうか？私も協力しましょう」

期待。

思えばその言葉に振り回されて来た。しかし、これから行うことは自分で自分に任じ

た義務だ。ユリアンは自らにそう言い聞かせた。

「デグスビー主教も過去の亡霊に囚われている。囚われ過ぎている。自分の計画の障害となる存在だ。躊躇う理由はない。躊躇うべきではない。」

ユリアンは笑みを顔に貼り付けたまま呼びかけた。

「デグスビー主教」

「デグスビーも笑みを深くして答えた。」

「何ででしょうか？」

ユリアンから出てきたのはデグスビーが想像もしていなかった問いだった。

「かつて自由惑星同盟で地球教浸透工作に従事していましたね？その功績で主教となった」

「そうですが、それがどうかしたのですか？」

「サイオキシンの麻薬を広め、使った者の弱みを握り、手駒とした。必要であれば婦女暴行を含む、同盟の法に触れるあらゆることを行なった」

「デグスビーは話が行き着く先が見えぬまま答えた。」

「その通りです。地球のために必要なことでした。いや、無論すべて現地の手下に任せ
てのことで、私自身は地球教の禁欲の戒律を破ってはおりませんよ」

「デグスビーはさらに笑顔で付け加えた。ユリアンの問いの意味を誤解したのだ。」

「必要ということであれば、また行いますがいかがですか？」

その言葉は、ユリアンに最後の決断をさせた。

ユリアンはマシユンゴの方を見た。

「マシユンゴ中尉、いや、自由惑星同盟軍マシユンゴ准尉。証人となってください」

「はい」

ユリアンはデグスビイに向き直って話を再開した。

「当然ながら同盟で過去に罪になることを行なっている、神聖銀河帝国で罪になるわけではありません」

「勿論そうですな」

「しかし、挙国一致救国会議は同盟軍人への司法権付与を認めました。そして神聖銀河帝国はそれを追認し、神聖銀河帝国内においても過去の同盟における犯罪への同盟軍人の司法権を認めている」

「……」

「私が少し前に司法尚書に働きかけて実現したことです」

デグスビイは後ずさった。

「ミンツ大主教、いったい何を言っているのです……？」

「デグスビイ大主教、あなたはド・ヴィリエ大主教とともに脱出すべきだった。そうして欲

しかった」

ユリアンはブラスターを抜き放ち、銃口をデグスビイに向けた。

「ミンツ大主教!」

「自由惑星同盟、挙国一致救国会議所属ユリアン・ミンツ大尉としての司法権を行使する。デグスビイ主教の、同盟国内における薬物使用の強要、婦女暴行教唆、そしてサイオキシシ取締法違反を認定し、この場で死刑を執行する」

「はあ!」

ユリアンは自らの内にある躊躇いの気持ちを見捨てずにデグスビイを撃った。

ブラスターの光条はデグスビイの肩を貫いた。

「があ!」

デグスビイは左肩を押さえて転げ回った。

ユリアンが直接人を撃つのはヤンの乗るパトロクロスに乗り込んだ時以来だった。丸腰で、相応に付き合いのあった相手を撃つのは無論初めてだった。心臓を狙って撃とうとしたのだが、手が震えて狙いが外れてしまった。かつての怪我の後遺症もあったが、多分に心理的な要素によるものだった。

そうでなければユリアンは一撃でデグスビイの命を奪っていただろう。

これは、シンシア・クリスティーン中尉に対してデグスビイ主教が行なったことに対

するユリアンの個人的な復讐だった。

誰を許せても、どうしてもデグスビイだけは許せなかった。あるいは、そう思い込もうとした。

本来ならば地球教団自体が許せなかったはずだった。しかし、地球教徒全員を憎むことなどユリアンには出来なかった。そうするには、ユリアンは彼らに深く関わり過ぎていた。

ユリアンは、地球教団を叩き潰す代わりに内から変えていくことを選んだ。

しかし、負の感情はどうしても残り、歪な形でユリアンの中で大きくなっていった。

メルカツが死に、ルドルフ2世が去り、マシユンゴ以外誰もいなくなった状況でデグスビイに過去の記憶を刺激されたことで、ユリアンの負の感情は決壊寸前となつてしまったのだ。

デグスビイ主教は、ユリアンが壊れないための感情の捌け口に今使われようとしているのだとも言えた。

ユリアンは混乱した感情のまま、デグスビイを殺そうとしていた。既に復讐のためなのか、自らの心の安定のためなのかもよくわからなくなつていた。

デグスビイは必死でユリアンを止めようとした。

「ユリアン・ミンツ！地球はこんなことを許さぬぞ！あなたを主教とするようにド・ヴィ

リエに働きかけたのは私だぞ！やめろ！やめてください！許して！」

ユリアンは泣いていた。泣きながら、自らが殺そうとしている相手に懇願した。

「すみません、デグスビイ主教。お願い。死んで。死んでください」

ユリアンはもう一度デグスビイを撃った。

「ぎゃあー！」

今度はデグスビイの左腕に当たった。

また撃った。

今度はデグスビイの脇腹を掠めた。

「ああああー！」

継続する死の恐怖と、激痛にデグスビイは失禁していた。

ユリアンの目は虚ろだった。

「あれ。おかしいな……うまく殺せないや。シンシアさんのために殺さないといけないのに」

マシユンゴがユリアンの腕を掴んで止めた。

「もうやめましょう」

ユリアンは泣きながらマシユンゴを睨んだ。

「どうして止めるんだ。彼は死に値することをやったんだ」

マシユンゴは冷静だった。

「私は、彼に死んで欲しくなくて止めるのではありません。彼は殺されて当然の人間です」

「それなら！」

「でもあなたは、そんな人間も本当は殺したくないのでしょうか？あなたは優しいから」

マシユンゴはユリアン本人が無視することに努めていた気持ちを言い当てた。

ユリアンは一瞬固まった。デグスビイは逃げ出すことも考えつかずに事の成り行きを見守っていた。

「……でも、殺さないといけないんだ。これ以上彼が目の前にいることに耐えられない」「殺さないことにも耐えられないかもしれないですが、彼を殺したとしても、それはそれで、あなたの心は壊れてしまうでしょう。私はそれが心配なのです」

ユリアンは何も答えられなくなった。

「……」

マシユンゴは自らのブラスターを抜いた。

「どうしてもというなら私が代わりに彼を殺しましょう」

「ひいー！」

デグスビイは恐怖に表情を凍らせた。

マシユンゴはデグスビイに近づきブラスターを側頭部に押し当てた。
「やめて！マシユンゴ中尉！」

ユリアンは思わずマシユンゴを止めた。止めてしまった。

マシユンゴはブラスターをデグスビイから離れた。

マシユンゴはデグスビイに顔を近づけ冷徹な口調で囁いた。ユリアンには聞こえないように。

「よかつたな。ミンツ大主教が慈悲を示してくださいださつたぞ。彼の気が変わらぬうちに何処へなりと消えてしまえ。忘れるな。お前が生きていられるのはミンツ大主教のお陰だ。次にお前の姿を見たら、ミンツ大主教のいないところで、俺が、お前を、必ず、殺す。人は、いつの日にか来る、死という運命には逆らえない。この俺こそが、お前にとつての運命だ。その到来が遠い先であることを、これからは祈りながら生きていくんだな」

「ひいひいひい！」

デグスビイは叫びながら、血と尿を撒き散らしながら、どこかに走り去って行った。それきり、月要塞内で彼を見かけたものはいなかった。

ユリアンとマシユンゴだけが残った。

静寂が訪れた。

デグスビーが去ったことで、ユリアンの中で吹き荒れた感情の嵐は一時的に沈静化したようだった。

ユリアンは涙を拭って、マシユンゴに言った。

「ありがとうございます。マシユンゴ中尉。あのままだと確かにぼくは壊れていたかもしれない。いや、もう壊れているのかもしれないけど、まだ、ここに立って、やるべきことをやる事ができる。……本当はデグスビーを殺すこともやるべきことだったはずなのに！」

再度自責の念に苛まれたユリアンに、マシユンゴは首を振った。そして笑顔で言った。

「きつと、今日、彼を生かしたことをよかつたと思える日が来ます。人は運命にはさからえませんか」

相変わらず、最後の言葉の意味はよくわからなかったものの、ユリアンはマシユンゴに救われたと感じていた。

マシユンゴは思った。

ユリアン・ミンツは歪みを抱えたまま成長してしまった。その才能の巨大さ故に、歪んだまま今や銀河を左右する存在になった。彼の歪みはいつの日か人類を滅ぼすかもしれない。

人は運命には逆らえない。既にユリアン・ミンツこそが、自分自身の運命だと見定めている。全人類にとつてもユリアン・ミンツの歪みこそが運命ならば、自分はそれをも感受しよう。しかし、願わくば。

彼がこれから進めようとしている地球再建と地球教徒穏健化の計画が、彼自身にも良い影響を与えて欲しいとマシユンゴは願わずにはいられなかった。

なんとか気持ち落ち着けた後、ユリアンはマシユンゴを伴って、管制室に戻った。要塞全体に放送を行なうために。

「ミンツ元帥です。ルドルフ2世陛下より全権を委任されました。心配はいりません。私の指示に従ってくれば助かります。各自別に指示するまでは現場の秩序維持に努めてください」

この放送は、ルドルフ2世に見捨てられ、氷塊の衝突による揺れに怯える人々を安心させた。

略奪や暴行に走りかけた者達のいくらかを思い留ませた。しかし、全てではなかった。

既に何箇所かで暴動が始まっていた。その多くは門閥貴族に無理矢理連れて来られて見捨てられた元私領軍の兵士達や領民だった。彼らは労働力として要塞に連れて来られ、何年も閉鎖空間の中で働かされて鬱屈していたのだ。

ユリアンは放送後即座に、捕虜区画に向かった。不思議そうな顔をしているマシユンゴ中尉に、ユリアンは言った。

「あそこには自暴自棄からは一番程遠いはずの人達がいいます。秩序維持に貢献してくれそうなものは何でも利用しましょう」

ユリアンはミュラー上級大将とバグダツシユ中佐に事情を話して協力を求めた。

彼らは協力を快諾した。

ミュラーの元に新帝国軍の捕虜が、バグダツシユの元に同盟と連合の捕虜が臨時の治安維持部隊として編成された。收容者の構成上、殆どが高級将校だった。

ユリアンは要塞の地図と武器、ベンドリング達との通信手段を彼らに与えて、再び管制室に戻った。彼のなすべきことをなすために。

氷塊の衝突は続いていた。

ミュラーの元に編成された新帝国軍部隊は治安維持に動き出そうとした。

そのタイミングで、一人の士官がミュラーに話しかけてきた。

「ミュラー閣下。申し訳ありませんが、私は別行動をさせてください」

ミュラーは彼に見覚えがなかった。

「失礼ですが、貴官は？」

その士官は少し考えてから名乗った。

「フォン・ラーケン少佐です」

その名には聞き覚えがあつた。連合との戦いを覚えている帝国軍人ならば負の方向に感情を刺激される名だつた。ミュラーは事情を察した。

「卿は余程要塞と縁があるようですね。了解しました。別行動を許可します」

その士官と同房であつたドレウエンツ中佐がミュラーに注進した。

「彼の名前は、フォン・ゲスナーで、中佐だつたはずですよ」

ミュラーは平然としていた。

「よいのです。彼がそう名乗るならフォン・ラーケン少佐ですよ」

自称フォン・ラーケン少佐は敬礼と、不敵な笑みを残して走り去つた。

ユリアンは管制室で超光速通信を起動した。

通信先はヤン艦隊だつた。

ここからが正念場だ。シリウス戦役における地球統一政府の特使のようになってはならぬとユリアンは気を引き締めた。

スクリーンにヤンの顔が映つた。

ユリアンは凶らずも懐かしさがこみ上げてしまった。それを表情に出さないために

は一定の努力を要した。

その間にヤンの方から挨拶の言葉があった。

ヤンの方も、この数年で大分変わったとはいえ、かつて話をした少年の名残りを、その青年の中に見ていた。

「独立諸侯連合軍派遣艦隊総司令官ヤン・ウエンリー元帥です。随分と久しぶりだね」

その顔には交渉に対する緊張よりも再会への喜びがあった。

だからユリアンも笑顔で返した。

「神聖銀河帝国宰相代理にして全権、神聖銀河帝国軍元帥にして最高司令官、並びに地球教団大主教にして総書記代理、ミンツ伯ユリアンです。本当にお久しぶりです。ヤン元帥」

長い沈黙の後、ヤンが口を開いた。

「……ええと。ごめん、もう一度言ってもらえないか？……というか、君、本当にあのユリアン少年だよな!?!どうやったらそんなことになるんだ!?!」

ユリアンは交渉の前に、ここまでの経緯の説明をする羽目になった。

第四部 30話 最後の対決

ユリアンはヤンにこれまでの経緯をなるべく手短かに説明した。

「説明ありがとう。いろいろ納得出来ないが、とりあえずわかった。本題に戻ろう。要件は何だい？」

「そうしてもらえるとありがたいです。要件は単刀直入に言つて、講和の条件交渉です」
ヤンは途端に態度を硬化させた。

「講和？今更そんな話を通ると思うのか？今君達が置かれている状況をわかっているのか？地球教団のやつて来たことを考えれば、滅亡するか、滅亡させられるか選べと言われても仕方がない立場だと思いがね」

ユリアンは動じなかった。ヤンの見せた態度がただのポーズだと理解していた。伊達に海千山千の曲者達に揉まれて来たわけではなかった。

「私は神聖銀河帝国の全権として、話をしています。ですから、その中の一集団である地球教団のことは別に話をさせてください」

「……とりあえず、続けてくれ」

「神聖銀河帝国の置かれた状況ということであれば、今神聖銀河帝国は根拠地である月

要塞に攻め込まれている状況です。既に指導者であったルドルフ2世陛下は逃亡され、月要塞は質量攻撃によって徐々に地球との距離が近づいていつていっている」

ヤンは、ユリアンが氷塊攻撃の効果に気づいていたことを確認できた。

「その通りだ。追い詰められているな」

「そうですね。まあ、ゆつくり紅茶を飲みながら話をしていられる状況を追い詰められていると表現するならばですが」

「図らずも二人の手元には共に紅茶が用意されていた。」

ヤンは司令官室でマルガレータの淹れたブランドー入り紅茶を。ユリアンは自ら淹れた紅茶を。

スクリーンを挟んで優雅なティータイムとでも言った趣きだった。お互い、余裕を見せるための演出だった。

「人間、銃を突きつけられたってその気になれば紅茶ぐらい飲めるさ」

「半年経つてもこうやってお茶を飲んでいられる気もしますけどね」

ユリアンの何気ない発言に、ヤンはティーカップを揺らさないようにするのに苦労した。

ユリアンがそこまで気づいていたことは、ヤンにとって計算違いだった。

ヤンは多少苦労して笑みをつくりながら答えた。

「いや、そんなに余裕はないと思うよ」

ユリアンは悠然と答えた。

「そういうことにしておいてもいいですよ。ところで、それもふまえて、私があえてヤン提督、そして独立諸侯連合に話を持ちかけた意味はおわかりですか？」

「新帝国では話をして、講和など許してもらえないと思つたからだろうか？」

「私はジークフリード帝の人柄を考えればそうとも限らぬと思つていますよ。ミュラー上級大将に特使になつてもらう手もあると考えていますし」

「では、どうして？」

「連合が主導でこの戦いを終わらせるということが、連合にとつて利益になると思つたからです。戦後を考えた時にね。そして、連合にとつてそれが可能なタイミングは今しかない。そしてそれならばささやかな条件交渉に乗つてもらふこともできると思つているのです。講和という言葉が問題でしたら、条件付き降伏と言い換えても構いません」

「……一介の軍人には手に余る話だな」

ユリアンは笑つた。

「ご冗談を。連合軍からも、さらにその上のウォーリック伯からも、一定の裁量権を与えられているでしょうに。それに、英雄ヤンの言葉なら、ウォーリック伯も、ジークフリー

ド帝も耳を傾けるでしょう。両国の首脳に話を通せるという点でもあなたを交渉の相手に選んだのです」

ユリアンは状況をほぼ正確に把握していた。

独立諸侯連合にとって、自分達主導で短期間で終戦を図れることが、連合の国力的にも、戦後のパワーバランス的にも、もっとも望ましかった。

一方で、氷塊攻撃を続ければ月が地球に落ちること自体は事実だった。より正確には、ロシユの限界により、地球に落ちずとも地球から約2万km弱の距離まで近づいた時点で、強まった地球の潮汐力によって月は破壊されてしまう。

しかし、そのためには、氷塊攻撃を長期間続けなければならない。必要な氷塊とラムジェットエンジンの数は五千を超える。そして、それだけの数のラムジェットエンジンを、ヤン艦隊は持っていなかった。

つまるところヤンの氷塊攻撃はブラフだったのだ。

無論、五千個のラムジェットエンジンを用意すること自体は可能だった。しかし、そのためには新帝国の協力が必要であつたし、相応の準備期間が必要となる。

月要塞の破壊に長い期間がかかることになるのだ。そうなると神聖銀河帝国側にも対応策を準備する余裕を与えることになるかもしれない。

ヤンも準備の時間さえあれば事前にそれだけの数のラムジェットエンジンを用意していただろう。しかし、月が神聖銀河帝国の根拠地だと気づいたこと自体が直前だったのだから準備のしようがなかった。

そのことを神聖銀河帝国の面々は知らなかったわけだが、ユリアンにだけは読まれてしまっていた。

その時点で連合にとって最も望ましい、連合主導での短期終戦の望みは少なくなっただけだった。それにも関わらず、ユリアンはそれを受けようと言っているのだ。

ヤンは苦笑して言った。

「私が悪かった。妙な腹の探り合いはやめにしよう。君が提供できるのは、連合主導での早期終戦というわけだな。それに対して君は何を要求するんだ？」

ユリアンも苦笑した。

「助かります。ヤン提督相手の心理戦は疲れますからね。まず前提としてお伝えしておきたいのは、神聖銀河帝国の臣民のことです。この月要塞には八千万人の臣民がいます。門閥貴族の所領の元領民もおりますが、その多くは元々は地球教団に属する者達です」

ヤンは流石に驚いた。

八千万人。この時代、惑星でもそれだけの人口を抱えているところは少ない。

商工業の基盤を担い得る人口である。

そして、兵士の供給源としても……

「驚くことではないと思います。シリウス戦役終結時の地球人口が10億人。その殆どが内乱で死亡したり、あるいは、太陽系外に流出したと考えるのも逆に不自然ではありませんか？ 太陽系内の、より近い場所に逃げ延びた者達が相当数いてもおかしくないでしょう」

「そうかもしれないが」

「また、元々の月面都市の生き残りの子孫の中には含まれています。彼らや、古い時期に地球から月に移住した者達は月の低重力環境に適応してしまっており、1G環境では生きていけません。彼らの今後の扱いも大きな問題となりましょう」

その通りだった。月要塞に集団で留め置くのも危険である。しかし、移住させるとしても、通常の可住惑星では彼らは生きていけないのだ。

「まあここまでが前提情報です。私が要求するのは、第一に、同盟、連合、フェザーン、そして新帝国の四国による神聖銀河帝国の国家承認です」

ユリアンはヤンの表情に気づいて付け加えた。

「これは国家の存続を保証せよということではありません。降伏前に神聖銀河帝国という国家が存在し、その参画者、臣民はその国家の国民であったということにして頂きた

いのです。……新帝国の中のただのテロ加担者、反乱加担者という扱いではなく」

ヤンはユリアンの意図を理解した。

テロ、反乱の加担者ということであれば犯罪者である。しかし別の国家に所属し、国家の意思に従っていたとなれば、少なくとも犯罪者という扱いではなくなるのだ。ユリアンは八千万人に明日への希望を与えるつもりなのだ。

実際のところ、八千万人の犯罪者など、どの国家でも到底扱いに困る数だった。

また、ヤンは気づいていないが、ユリアンはルドルフ2世やその他の神聖銀河帝国の中枢人員についても、テロリストではなく国家の指導者として後世に伝えるつもりだった。

「連合は既に我々の特使であるフンメル氏を国賓待遇でお迎えくださっているし許容可能ではないでしょうか」

連合が特使をもてなしたのは失着だったかもしれないとヤンは思った。

「……一考に値する。だが、先に他の要求を聞こうか」

「あと二つです。四国監視下での地球の自治と地球再建事業の推進です。形式にはこだわりません。何らかの形で現神聖銀河帝国臣民八千万人と、地球教団のコミュニティを残し、穏健化を進めるのです。」

月の八千万人だけではありません。銀河全土には億単位の地球教徒がいます。彼ら

の拠り所を潰して、かえって先鋭化させるような真似は避けるべきかと思えます」

「穏健化などできるのかな？」

「僕ならできます」

「へえ」

我ながら大きく出たものだどユリアンは思いながらも話を続けた。

「穏健化のために必要なことが、地球再建です。地球が今の荒れ果てた姿から人類の故郷として思慕されるに相応しい姿を取り戻し、さらにその再開発事業によって注目され、自然と一定の尊敬を集めるようになれば、彼らの中の怨念もゆっくりとですが解消されていくでしょう。……人に認められないということは人を大きく歪ませるものですから、その要因を取り除きたいのです」

その言葉は妙に実感がこもっているようにヤンには思えた。

「最後の一つは？」

「神聖銀河帝国の指導者層に対する処分の軽減。特にルドルフ2世陛下に関してです。いかに神聖銀河帝国が国として認められようと、指導者層は私も含めて何らかの形で戦争の責任を取らされることはあり得ると思っております。しかし、ルドルフ2世はまだ子供です。彼の出自がどうあれ、そのことは変わりません」

ヤンはすべての要求を聞いて考え込んだ。その末に答えた。

「二つ目の降伏前の国家承認、これは連合はまあ許容出来るだろう。連合を国家として認めたことを考えれば、新帝国も許容する可能性はある。しかし、同盟はわからないな」
ユリアンはここで一つ手札を切った。

「すみません、言っておりませんでした。既に同盟からは内諾の返事をもらっています。無論挙国一致救国会議ではなく、同盟政府からです。先に挙げた三条件、いずれも同盟は反対しないでしょう」

ヤンは衝撃を受けた。だが、不愉快なことながらも納得はできた。ヨブ・トリューニヒトの演説のことはヤンも知っていた。トリューニヒトが同盟で影響力を増大させている今、トリューニヒトとユリアンに繋がりが維持されているとすれば、あり得る話だった。

実はユリアンの語ったことは事実ではなかった。同盟から内諾を得るような時間はなかったし、同盟政府とは連絡も取れていなかった。しかし、トリューニヒトが影響力を増大させた以上、そうなるだろうと予想しており、それを確定した事実ということにしてヤンに伝えたのだった。

「二つ目はわかった。次に二つ目だが、新帝国がそれを認めると思うか？この地球は新帝国領だ。それに新帝国では各地で反乱が起こっている。ここで甘い顔を見せることは新帝国にはできないだろう」

「新帝国は反対するかもしれませんが、連合、同盟にはそれをすべき理由がありません」

「どういうことだ？」

「地球教原典」

「何だつて？」

「正確には地球教原典を起動キーに設定された、月要塞内の地球アーカイブ。そこには人類が失ったはずの知識が残されています。それだけでなく、貴重な植物の種子や動植物の細胞標本、古代地球の工芸品、美術品まで。ちなみに、最後の一つは、貴重な地球教の収益源ともなっていたのです。銀河に流通する古美術品の多くがこの地球アーカイブ由来です。以前お話頂いたヤン提督所有の万暦赤絵もこのアーカイブ由来かもしれませんね。それに、貴重な歴史書も大量に」

ヤンは食指が動いたが、危ういところで立場を思い出した。

「貴重なものが納められているのはわかった。だが、それは月を落とすのを躊躇う理由にはなっても、新帝国による接収を否定する理由にはならないのでは？」

「失われた科学技術、特に軍事技術」

「む……」

ヤンの顔が険しくなった。

「地球統一政府が所有しており、今や失われた様々な技術も地球アーカイブには納められています。特に生物兵器の知識は脅威かもしれません。当時より生命科学のレベルは低下していますから。それを新帝国が独占する危険を、連合は許容できますか？」

「なるほど。四国管理にできるならその方が無難だね。しかし、そうすんなりといくものかな。新帝国は難色を示すだろう」

ユリアンはさらに手札を切った。

「四国合同の国際協調組織」

「……」

「公表されたものとしては同盟での提案が初めてですが、連合でも考えられていたようですね」

ユリアンはトリユーニヒトの名前を出さないようにした。ここでヤンを不快にするメリットはないからだ。

しかしヤンは舌打ちしたくなかった。連合とフェザーンの上層部のみで議論されていたはずのその話が神聖銀河帝国に漏れていたからだ。

「その本部はどこに置くべきでしょうか？ できるなら四国のどこかではない方がよいでしょう。新たに中立地帯をつくった方がよい。候補となるのは、無人の地となっている北部旧連合領一帯。それに今や難治の土地となった旧神聖銀河帝国領、特に地球周辺地

域。そこに含まれるアルデバランなどは銀河連邦への郷愁を誘う意味でも、本部に適しているのではないでしょうか？この辺りを新銀河帝国から切り離すことができれば、長期的に見て連合と新帝国の国力比も大分変わるでしょうね。新帝国にしても余裕のない現状で統治コストのかかる地域を切り捨てられるメリットがあります。同盟と共に、新帝国に圧力をかけてでも実現すべきだと思いますか？」

「……ひとまず三つ目に移る。これは連合には何の利益にもならない話だ。再び乱を招くことになる危険性もあることを考えればデメリットも大きい」

「今までの話は双方にメリットのある話でした。三つ目が、降伏にあたっての条件とお考えください。それに死刑になるところを終身刑にしてほしいとかその程度のことです。大それたことをお願いしようというわけではありません」

「ヤンは考え込んだ。だがほぼ結論は出ていた。ユリアンの提案は理にかなっていた。多少無理が発生する部分も連合の利益という点では積極的に進める意味はあった。それに、同盟の同意を得られている時点で外堀が埋められているのも同然なのだ。」

しかし、ヤンは即答を避けた。

「ウォーリック伯と相談する。しばらく時間をくれ」

ユリアンは同意した。

「いいでしょう。そう言えば氷塊攻撃が止まりましたね」

「止めたんだよ」

「そういうことにしておきましょう」

通信は一旦終了した。

ヤンは息を吐いた。

「いやあ、参った。参った。数年前はもう少し可愛げがあつたんだが。一体誰の影響を受けたんだか」

アツテンボローあたりがいれば、「先輩の影響も大きいと思いますよ。でもその前に、自分の腕を斬り飛ばした相手を、可愛げがあると表現するなんて、先輩、マゾですか？」などという言葉が飛んできたかもしれないが、あいにく司令官室には、ヤンと副官のマルガレータしかいなかった。

そのマルガレータは黙り込んだままだった。マルガレータはユリアンに嫉妬していた。ヤンと心が通じ合っているように見えたし、マルガレータと同年代にも関わらず、ヤンと対等に交渉を行なえるだけの力量を備えていた。

ユリアンがヤン艦隊の一部の者の間でペテン師ヤンの一番弟子と呼ばれる理由がよくわかった。

マルガレータは自分こそがヤンの一番弟子と呼ばれたかった。その感情を自覚した。

「負けぬぞ……」

マルガレータの中でユリアンが明確にライバルだと認識された瞬間だった。「どうしたんだ？ヘルクスハイマー大尉？」

ヤンがマルガレータの様子を心配して尋ねた。

「妾、あ、いや、小官は、あのユリアン・ミンツなどには負けません！」

ヤンはマルガレータの気迫に圧された。

「そ、そうか。いや、もう戦いは終わる気がするけど、頑張つて」

「はい！」

これが、後の世に「金色の女提督」と謳われることになるマルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーと、「黒衣の宰相」ユリアン・フォン・ミンツの長い因縁の始まりだった。

少なくとも、マルガレータは後にそう思ったが、ユリアンがマルガレータのことを意識するのはもう少し後の事であった。

ヤンは、マルガレータに紅茶のおかわりを頼んだ後、ウオーリック伯に連絡を入れた。

ヤンはウオーリック伯にユリアンの提案を説明した。受け入れるべきという個人的見解と一緒に。

ウオーリック伯は無然としていた。

ヤンは尋ねた。

「気に入りませんか？」

「気に入らない」

意外な答えにヤンは驚いた。連合の利益になるという点ではヤンよりもむしろウオーリック伯の方が賛成すると思っていたからだ。

「しかし……」

「誤解しないでほしい。提案自体は多少の条件をつけた上で、基本的には受け入れるべきだと考える。気に入らないのは同様の提案が同盟からもあったことだ。ついでにフェザンからも。ヨブ・トリューニヒトとユリアン・ミンツ、あいつらに謀られたかもしれないぞ」

トリューニヒトの名前が出てきたことでヤンは急に不快になった。

そしてウオーリック伯から同盟の提案の詳細を聞き、さらに不快になった。

ウオーリック伯は嘆息した。

「特に気に入らないのが、これが連合の利益にかなうことだということだ。受け入れざるを得ない。ヤン提督、連合は同盟の提案を受け入れる。ミンツ……伯及び新帝国との交渉はヤン提督に全て任せる」

「承知しました」

ヤンはジークフリード帝に連絡を入れた。

神聖銀河帝国の条件付降伏とその条件、終戦後の銀河体制に関する同盟、連合、フェ

ザーン三国の共同提案を説明した。

ジークフリード帝は当初当然ながら難色を示した。しかし、各国が結託した提案という名の要求をはねのけるのは今の新帝国には難しかった。

首席秘書官ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフを加えた話し合いの結果、内乱集結への各国の協力、軍事的経済的支援と引き換えに提案を受け入れることになった。

ヤンはユリアンに回答を伝えた。

一点目と二点目はほぼ提案通りだったが、三点目、神聖銀河帝国指導層の処分の減免については、死刑にはしないということだけが約束された。

ヤンは回答と同時にユリアンに訊かずにはいられなかった。

「君は最初からトリューニヒトと組んでいたのか？」

ヤンの声には不良になってしまった息子を嘆く父親のような響きがあったため、ユリアンは何故か弁解しないといけない気持ちになった。

「組んでいたというのは少し違います。たしかにトリューニヒトさんには大分前に自分の考えていることを伝えていました。しかしあの人がどう動くかなんて僕は知りませんでした。だから暗黙の連携という方が正しいです」

そう伝えてもヤンの表情は一向に改善しなかったため、ユリアンは言葉を重ねた。

「それに、暗黙の連携ということでは、ヤン提督と僕だって連携していたと言えますよ。

早期終戦が可能になったのも僕がヤン提督のご協力によって、神聖銀河帝国の中枢の一員になれたからです。言いそびれておりましたが、マシユング中尉を地球に派遣してくださってありがとうございました。お陰で地球で死なずに済みましたし、この場でまたヤン提督に会うことができました」

ヤンは少し照れた。後ろで何か骨の軋むような音がしたがヤンは気づかなかった。

「いや、お礼を言われるようなことは。しかし、そうなるのか？ 私は君と連携していたのか？」

ユリアンはヤンを言いくるめられる機会を得て、ここぞとばかりに同意した。

「そうですよ。僕とヤン提督は連携していたんです。間違いありません」

ヤンは何やら考えていたが、一つ嫌な可能性に気づいてしまった。

「待ってくれ。そうなるまゝで私が、君を介してトリューニヒトと連携したみたいになるじゃないか！ 断固否定する！」

それをヤンの後ろで見ていたマルガレータはぼつりと呟いた。

「なんだかんだで、仲がよさそうじゃのう。羨ましいことじゃ」

ともかくも、ユリアンはヤンからの回答に納得し、正式に降伏を伝えた。

宇宙暦802年1月17日のことだった。

ここに、2ヶ月を超えた神聖銀河帝国との戦いが終結した。

2月後半に太陽系木星において、正式な終戦条約の締結が予定された。

しかし、1月17日の前後では、複数の場所でさらに複数の事態が発生していた。

第四部 31話 和解のとき

月内部では、一部兵士達が暴動を起こしていた。

貴族将校に対する平民兵士の不満が爆発した形である。

ルドルフ2世の方針と厳罰により、貴族の横暴は表向きは減ったが、より陰湿な形となつて残っていた。

それに加えて、貴族階級全体への積年の恨みが爆発した形である。

主要なターゲットとなつたのは取り残された下級貴族とその家族、それに皇女達とその侍女達だった。

さらに、一般の地球教徒に対しても略奪や暴行を働く輩も現れていた。

シューマツハ、ベンドリング、ミュラー、バグダツシュ達は、まず非軍人への略奪や暴行の制止、鎮圧に努めた。

一方で、アンスパツハ、シュトライトは貴族や皇女達の保護に動いた。

彼らは皇女達を、暴行に及ぼうとする輩から間一髪で救い出し、管制室まで辿り着いた。

ユリアンはヤンとの1回目の会談を終えたところだった。

「ユリアン！怖かった！」

サビーネはここぞとばかりにユリアンに駆け寄り抱き着いた。

ユリアンはいきなりすることに驚いた。そしてアンスバツハ達の目を気にして、サビーネを引き離しながら言葉をかけた。

「サビーネ様。ご無事で安心いたしました。しかし、このようなどころにお残りになられて……」

「ユリアンのいないところに行くなんて考えられないわ！」

サビーネは自らの発言にユリアンが動揺したのを見て、先手必勝とばかりに畳み掛けた。

「ユリアン！結婚しましょう！」

場の空気がおかしくなった。

アンスバツハ、シュトライトは頭を抱えていた。

サビーネの母親、クリステイーネは期待の目でユリアンを見ていた。

アマールエはサビーネの抜け駆けに焦りを隠せない様子で、しきりにエリザベートの背を押していた。

当のエリザベートは顔を蒼白にしていた。

ユリアンはこれまでも地球教徒の女性や貴族令嬢、貴族夫人、侍女の幾人かから言い

寄られてきたが、聖職であることを理由にすべて断わってきた。

だが、結婚などと言われたのは初めてで、戸惑ってしまった。

サビーネはここが勝負所と判断して言い募った。

「二人でゴールデンbaum王朝を再興しましょう！私が皇帝、あなたが女帝夫君。いいえ、あなたが皇帝でもいいのよ！」

現状を認識していないサビーネの言葉に、ユリアンは目眩がした。

ユリアンが返答できないでいるのを別の理由だと解釈して、サビーネはさらに言葉を続けた。

「私だけを選べないということなら、別に私だけじゃなくてもいいのよ。エリザベートも入れてもいいわ。それに……何だったらカリンも」

サビーネはそこでふと気づいて辺りを見回した。

「そう言えば、カリンは？」

蒼白になっていたエリザベートが声を挙げた。

「私達を逃がすために囹になったわ！ユリアン！彼女を助けて！」

ユリアンは、場所も聞かずに駆け出した。

エリザベートもユリアンの後に続いた。

アンスバッハはそれを見て、慌てて追隨した。

カーテローゼ・フォン・クロイツェルは、兵士達に捕まっていた。

彼女はエリザベートとアマリーエを逃がすために、一人、囹の役を買って出た。

囹は功を奏し、エリザベートとアマリーエは無事にアンスパッハ達と合流できたが、カーテローゼ自身は、長く逃げ続けたものの、最終的に十人以上の兵士に取り囲まれ、ついに捕まってしまったのだ。

「手こずらせやがって」

兵士の一人がカーテローゼの被っていた外套を剥ぎ取った。

「……待てよ。こいつ、皇女じゃない。侍女のひとりだ」

「構わねえよ、どうせ今まで皇女と一緒に贅沢三昧だったんだろ。それになかなか可愛
いじゃねえか」

「何でもいい。早くしろよ」

獣欲に満ちた目をした兵士達の手がカーテローゼに伸び、服を引き裂きにかかった。

ここまで悲鳴も出さなかったカーテローゼだったが、自らが暴行の対象となった恐怖
と悔しさに涙が溢れて来た。

それを見ても兵士達が止まることはなかった。

「泣くなよ。皇女じゃないなら殺しやしねえよ」

「そうさ、怖けりやサイオキシンドってあるんだ。すぐに何も考えられなくなるさ」

そう言つて一人の兵士が注射器を取り出した。

あるいは彼らなりに優しい言葉をかけたつもりだったのかもしれないが、カーテローゼの恐怖を増大させる効果しかなかった。

舌を噛んで死のうとカーテローゼは思った。

それでも死ぬ前に会いたいと思った。

思つた瞬間堪えられなくなった。

つい声が出た。

「助けて、ユリアン！助けて……お父さん！」

サイオキシンの入つた注射器がカーテローゼの肌に触れようとした瞬間、暴風が一带を包んだ。

カーテローゼはそのように錯覚した。

十人以上いた兵士達は、一瞬のうちに薙ぎ倒されていた。

兵士達は皆、トマホークで殴り倒され、控えめに言つて戦闘不能という状態だった。

「ふん、女性の前だから斬撃ではなく殴打で勘弁してやったが、少し力が入り過ぎたか」
そう言つた本人は全身血塗れであり、激戦をくぐり抜けて来たことは明らかだった。

しかし、カーテローゼの視線はその顔に集中していた。

その視線に気づき、男は優雅に一礼をして名乗った。

「遅れて申し訳ない。ワルター・フォン・シエーンコップ中將、姫君の危機に参上いたしました」

シエーンコップはヤンの元を去った後、暫く帝国内を放浪した。

しかし、攫われたカーテローゼとメルカッツ一家の行方を知ることにはできなかった。

地球教団の小さなアジトを三つほど見つけて潰してみたが、それでも何の手がかりも得られなかったのだ。

シエーンコップはその状態で、神聖銀河帝国の蜂起を傍観する羽目になった。

シエーンコップは、極端な手段に出ることにした。

ミユラー上級大將の艦隊と神聖銀河帝国軍の戦いの場に、チャーターした一隻の民間船で乗り込み、大破したミユラー艦隊の駆逐艦に潜入したのだ。

その駆逐艦はシエーンコップにとっては幸いなことに乗員全員が死亡していた。

シエーンコップはその艦の通信機能が生きていることを確認し、艦長の軍服を剥ぎ取って着込んだ上で救難信号を出した。

そしてそのまま神聖銀河帝国の捕虜となつて、ミュラー艦隊の高級士官の一人として月の捕虜収容施設に連れて行かれたのだった。

味方ならいざ知らず、敵の中にさらに身分を偽つた者がいるとは神聖銀河帝国も想定していないことだった。

ミュラーもその幕僚も、艦長全員を把握はしていなかったため、露見することはなかった。

かといつて脱走の機会もなかったが、その必要もなかった。

気まぐれで捕虜収容施設にやつて来たサビーネのお付きとして、カーテローゼがやつて来たのだ。シェーンコップは写真でカーテローゼの顔を確認していたのですが娘だとわかつた。カーテローゼの方も同様だった。

その場ではシェーンコップのことを知らぬ顔で無視したものの、以降、カーテローゼはシェーンコップの様子を見に、時々収容施設に顔を出すようになった。

シェーンコップに会いに来たことを隠すように、ミュラーに会いに来たように見せかけながら。

シェーンコップとしては娘の無事が確認できただけで十分だった。

動く機会は、神聖銀河帝国が敗北した時だと考えていたからだ。

そしてその機会が来た。ユリアンの求めに応じてミュラーが組織した治安維持部隊

から離脱し、カーテローゼを守るために行動を開始したのだった。

しかし、その道のりは遠かった。

新帝国軍の軍服を着ていたことで、侵入者と誤解され各所で攻撃を受けた。

特に厄介だったのがキルドルフ准将、ゼルテ大佐らが率いる装甲擲弾兵の一群だった。

彼らはかつての上官オフレツサー同様、戦って散るべく、要塞の内部に潜んで、このこと乗り込んで来るはずのヤン艦隊の乗員に奇襲をかけようと目論んでいた。

シエーンコップは娘を探す中で彼らに遭遇してしまったのだ。

その戦いは、シエーンコップの懸絶した武勇を示すものとなった。

とはいえ敵もオフレツサーの薫陶を受けた者達だった。娘を助けるという一念がなければ、シエーンコップは負けていたかもしれない。一人対五十人という恐ろしい戦力差を、巧みな各個撃破によって乗り越えた時には、かなりの時間が経ってしまっていた。シエーンコップ自身も満身創痍となったが、執念によって娘が襲われている現場に辿り着いて現在に至るのである。

カーテローゼは信じられなかった。收容施設に父親が収監されていることには気づいていた。だが、まさか助けに来てくれるとは思ってもよらなかったのだ。

カーテローゼは、母が父親について語っていたことが真実だったと理解した。

”地に足をつけていればシエーンコップほど頼りになる人はいない”

「……うさん、お父さん！」

カーテローゼは泣きながらシエーンコップにしがみついた。血が体に付くのも気にしなかった。

シエーンコップは戸惑いつつもその頭を撫でた。

「怖い思いをさせたな……カリン」

「ううん。お父さんが助けてくれたからもう大丈夫よ」

シエーンコップはふと、娘が自分を呼ぶ前に口に出していた人物のことが気になり出した。

「ところでカリン。お前が呼んでいたユリアンというのは……」

「カーテローゼさん、大丈夫!？」

その本人が駆け込んで来た。

ユリアンはカーテローゼの近くに立つ血塗れの人物を警戒した。

「あなたは誰ですか？」

シエーンコップは思った。やはりこのユリアンだったか。妙な男に引つかかるとこ

ろは母親に似たのだろうか、と。

「お初にお目にかかる。小官は」

「カリン！」

「エリザベート様、危険です！」

答えようとした矢先、エリザベートとアンスバッハがカーテローゼ達を見つけて駆け寄って来た。

「カリン！無事？……よかった、無事だったのね！あなたに何かあつたら私は……」

涙ぐむエリザベートを見て、緊張が緩み、出血で朦朧としてきた頭でシエーンコツプは思った。エリザベート……そうか、そうだったのか。……ここはカリンにいいところを見せなければ。

シエーンコツプは両手を広げ、いきなりエリザベートに抱きついた。

「エリザベート！死んだと聞いたが生きていたんだな！しかも、なんだか若く見えるぞ。今までカリンを育ててくれてありがとう！苦労をかけたな！」

エリザベートはいきなり男に抱きつかれて混乱した。

「え、いや、はい。えっ!？」

アンスバッハが慌てて引き離しにかかった。

「貴様、エリザベート様から離れろ！」

シエーンコップはアンスバツハに怒鳴った。

「子の前で、父母が抱き合つて何が悪い？ 貴様こそ誰だ!?」

……シエーンコップは、エリザベート・フォン・ブラウンシュヴァイクが、カーテローゼの母親ローザライン・エリザベート・フォン・クロイツェルだと勘違いしていたのだ。半端に名前を思い出していたのが災いした。それに、顔の方は思い出せていなかったのだ。

カーテローゼはシエーンコップの行動を見て、世間が父親について語っていたことが真実だと理解した。

” 軽薄な色事師 ”

カーテローゼは、アンスバツハと揉めるシエーンコップに近づいた。

そして握つた拳でその顎を思い切り打ち抜いた。

「娘の前で、若い女をナンパするな！ この色ボケ親父!!」

娘の前ではおくびにも出さなかったが、シエーンコップは満身創痍だった。軍服の血も敵のものばかりではなかった。

娘からの予想外の攻撃は、消耗したシエーンコップの意識をきれいに刈り取った。

シエーンコップはその生涯で数少ない敗北を、実の娘に対して喫したのだった。

シエーンコップは、娘との和解の最大のチャンスをふいにしてしまった……

カーテローゼは父親への怒りを抱えたまま

「行きましよう、エリザベート様、ユリアン」

皆、目の前で起きた事態に理解が追いついていなかった。

ユリアンは慌てた。

「この人はいいの?というか、結局誰なんだい?」

カーテローゼは言い捨てた。

「ただの軽薄な色事師よ!」

少し間をあけて、一言付け加えた。

「それから……わざわざ会ったこともない娘のために、こんなところまで殴り込みに来てくれた、クソ親父よ」

父親と認めてもらえただけ、シエーンコップの努力も無駄ではなかったのかもしれない。
い。

「君のお父さんなの!?!」

気絶したシエーンコップは、結局ユリアンが背負うことになった。

管制室まで移動を続けながら、ユリアンは一つの事実に気づき当惑した。

「カーテローゼさん、さつき僕のことをユリアンと呼んだ?」

ユリアンはカーテローゼに今まで姓の方で呼ばれていたはずだった。

カーテローゼもそのことに気づき、赤くなった。そして、照れ隠しのように言った。「あなたは、ユリアンでしょ。何か問題あるの？」

ユリアンはかぶりを振った。

「問題なんてないよ！」

そしてユリアンも、勇気を出して言ってみた。

「……カリン」

そむけられたカーテローゼの顔はさらに赤くなっていたようだった。

月要塞で起きた暴動は、終息に向かっていた。

第四部 32話 銀河帝国の終焉

宇宙暦802年 1月30日

ジークフリード帝は久しぶりに首都星オーデインに戻った。

各地の内乱は完全には収まっていなかったが、皇帝親征を行うべき規模でもなく、対処は大將以下の司令官に任されることになった。彼らはこれが戦功の最後の立てどころと勇躍して臨んでおり、時を置かずにすべて解決するものと考えられた。

アンネローゼは無論宇宙港まで出迎えに来てジークフリード帝の無事を喜んだのだが、ジークフリード帝とヒルダに、後で三人で話がしたいと言い残して先に新皇宮に戻ってしまった。

後に残されたジークフリード帝は、ようやく負傷の癒えたミッターマイヤー元帥から「何があつても私は陛下の味方ですから」と妙な激励を受けた。

新皇宮、シルヴァーベルヒの手によつてオーデインにようやく完成した獅子ルーヴェン・ブルンの泉で、ジークフリード帝はヒルダ、アンネローゼと余人を交えず会談する機会を持った。

アンネローゼは、ジークフリード帝に要求した。

「どうかヒルダさんを側妃に迎えてください」

ジークフリード帝は思わずヒルダの顔を見た。

ヒルダが何も聞いていないことはその表情から明白だった。

「帝国の危機は終息に向かっています。以前とは状況が違いますし、前から伝えているように私はあなた以外を妃に迎えるつもりはありません。無論フロイライン・マリーンドルフは素晴らしい女性です。しかしそれは問題ではありません」

アンネローゼは憂いに満ちた表情を見せた。

「ジーク。何故わたしがこのようなことを言うのか、わかっているでしょう？ わたしはあなたの子を産めないのよ」

アンネローゼは不妊なのだった。それも複合的な要因であり、卵子にも問題がある上に、子宮機能にも問題があった。

そのことをアンネローゼはこの機会にヒルダに説明した。

アンネローゼは元々、後宮に属する一人として、ルドルフクローン計画のための母胎となるはずであったが、不妊ゆえにベーネミュンデ侯爵夫人のような悲劇は避けられた。

しかし、役目を果たせないにも関わらず、秘密を知っているという立場は非常に危険なものだった。人知れず消される可能性もあったところを皇帝フリードリヒ4世は憐れみ、自らの寵姫であるとしてアンネローゼの身を守ったのだった。

ヒルダはアンネローゼが今まで自分にジークフリード帝を任せようとしてきた真の理由を初めて知った。

アンネローゼはヒルダに話を向けた。

「ヒルダさん、あなたの気持ちはどうなの？」

ヒルダは、自らの狡さを自覚しつつも、自らの気持ちに正直になろうと決めた。カストロプの動乱で父と自らの命を救ってくれた皇帝になってさえ温和な人柄のままであり続け、それ故に苦しんでいる青年に対する気持ちを。

「すべては陛下の御意のままに。しかし、もし陛下からお話を頂けるのであれば、一人の女として喜んでその御意に従うでしょう」

ジークフリード帝は、驚いてヒルダを見た。

初めてその心が揺れた。

時間をかけた末にジークフリード帝は答えた。

「フロイライン・マリンドルフ、あなたにそのように言ってもらえたこと大変嬉しく思います。本当に。しかし、私は二人の女性を愛せるような器用な人間ではありません。あなたと、アンネローゼを不幸にすることになります」

「ジーク」

アンネローゼはジークフリード帝をなおも説得しようとした。

「皇后陛下、もう結構です」

しかし、それをヒルダが止めた。

……先ほどの逡巡、もしやと期待してしまった。しかし彼の迷いは、私への愛ゆえのものではなかった。どうしたら私を悲しませないかを探していただけだったのだ。私
が彼の子供を産めば、アンネローゼ様の心情も立場も不幸な側にしか動かない。そうである以上、答えは最初から出ていたも同然だった。アンネローゼ様を不幸にせず、私
を妃に迎えることができるなら、彼は私を悲しませないためにそうしたかもしれない。
しかしそこに彼の愛はない。それはそれで私が惨めなだけではないか。

「既に陛下の中でお答えは出たのです。私としてはそれを受け入れるのみです。皇后陛下、無礼を承知で申し上げますが、これ以上私を惨めにしないでください」

「ヒルダさん……」

「フロイライン……」

二人ともヒルダのことを気遣っていた。

そのことがヒルダにさらに複雑な思いをいだかせた。

……自分のことよりも他人のことを優先する似た者夫婦。二人がもう少し自分自身に正直であれば、私が余計な期待をすることも、惨めな気持ちになることもなかっただろうに。

ヒルダはしばらく下を向いていた。そうしながら気持ちを切り替えた。

「皇帝陛下、ここからは首席秘書官としてお話をさせていただきます。皇后陛下、ご不快に思われることもあるかと思いますが、どうかお許しを」

二人が頷くのを見てヒルダは話を続けた。

「単刀直入にお尋ねしますが、陛下は後継者の問題をどうお考えですか？ 皇后陛下が不妊であることは事実。ならば、嫡子以外で後継者を選ぶ必要があります。フリードリヒ4世のように後継者を決めないなどという選択は最悪の事態を招きます。皇后陛下もそのことをずっと心配されております」

アンネローゼは頷いた。

「ローエングラムのご血縁のどなたかということが通常考えられますが、現在それに該当するのはアンネローゼ様以外にはおりません。残る答えを歴史に求めた場合、あり得るのは、有能かつ信望ある者への禅譲、あるいは庶子」

最後の一言にジークフリード帝が疑問を持ったのを見てヒルダは付け足した。なるべく感情を表に出さないようにしながら。

「側妃でなくとも陛下のお子は産めます。私でも構いません。陛下を諦めきれない私を憐れんで、一夜の寵愛をくださったことにすればよいのです」

ジークフリード帝は即座に拒否した。

「あなたに……いや、誰であれ、そんなことはさせられません」

「……となれば、禪譲の相手を考える必要があります。しかし、判断を誤ると内乱を招きますので慎重に選ばなければなりません。誰もが納得するような相手を」

それはそれで困難な事業だと言えた。

アンネローゼが思いつめた顔で切り出した。

「ジーク、私は決めていたことがあります」

「何でしょうか？」

「私は新皇宮を出ます。当分は会わないようにしましょう」

「アンネローゼ！」

「皇后陛下！」

アンネローゼは寂しげに笑った。

「私はあなたを愛しています。でも、皇帝としての義務よりも私のことを優先するあなたを見るのは耐えられない。それによって、弟とあなたでつくったはずのこの国が壊れていくのを見るのは耐えられない。私はあなたの傍にいない方がいいのです。私は駄目になったあなたさえ愛してしまうような愚かな女だから」

「アンネローゼ、私はラインハルト様からあなたのことと、この帝国のことを任されました。どちらも疎かにするつもりはありません」

「しているではありませんか！」

アンネローゼは珍しく感情を露わにした。

ジークはまだわかっていないのかと。

ジークフリード帝は穏やかに言葉を続けた。

「いいえ。ラインハルト様に任せられたのはローエンングラム王朝としての帝国のことではありません。この帝国に生きる人々のことです。私は彼らのために一度帝国を解体し、再編しようと思うのです」

ジークフリード帝はアンネローゼとヒルダに自らの構想を説明した。

選挙君主制。

それが、ジークフリード帝の提示したものだ。た。

帝国の地方分権を進め、各地域を貴族領、直轄領、自治領、帝国自由都市などに分けた上で、各地域の長を構成員とする帝国議会を設ける。

皇帝はその権限を大きく縮小し、名誉的地位とし、ジークフリード帝が崩御するか退位するかした後と空位とする。

その下に任期付の「王」を設け、その王を各地域の長が帝国議会における選挙で選ぶというものだった。

ヒルダはジークフリード帝の構想に衝撃を受けていた。

そのような体制があり得ることは知っていた。独立諸侯連合はまさにそのような体制だった。

しかし、それを今の銀河帝国と結びつけて考えることがヒルダにはできていなかったのだ。未だに皇帝は不可侵にして一系、万事を司るとの思い込みから、ヒルダも自由ではなかったということだ。同時にジークフリード帝の見識を甘く見ていたことも自覚した。

しかし、検討が必要な要素もあつた。

「陛下、歴史上たしかにそのような政体はありました。しかし、多くの場合は周辺諸国の干渉を招いて国が弱体化しました」

「その懸念はたしかにあります。しかし、それは世襲制で後継ぎに恵まれない場合も同じですし、地政学的なことを考えれば、新体制下で我が国にまともに干渉できるのは独立諸侯連合のみです。そして独立諸侯連合自体が選挙君主制の国なので、お互いに干渉を防ぐ手立ても考えられるでしょう」

「もう一つ。周辺諸国の干渉を受けなかった国家においては、選挙君主制は最終的に世襲制に変化することが殆どでした。それについてはどうお考えでしょうか？」

「その可能性はあります。しかし、おそらくはそうならないでしょう。なぜなら今後、銀

河全体の流れとして否応なく民衆の権利拡大が進むからです。今すぐに臣民による直接選挙を導入するつもりはありませんが、地域の長が臣民に選ばれる地域が、少しずつ増えていくでしょう。臣民の移動の自由も段階的に規制を緩めるつもりですから、民主主義が真に優れているなら、殆どの臣民が民主主義を採用する地域に居住するようになるでしょう。その先に現れるのは、君主国の皮をかぶった民主主義国家です。銀河連邦の緩やかな復活と言えるかもしれない」

自由惑星同盟が国際協組織構想を主導しようとしている現在、人権尊重の名目でジークフリード帝の言ったような状況が生まれようとしている。

それはヒルダも思い至っていた可能性であり懸念だったが、ジークフリード帝はそれを許容すると言っているのだった。

ジークフリード帝の話は続いていた。

「その流れに逆行する形で、専制君主制を実現させられるとするなら、余程の傑物でしょう。ラインハルト様、あるいはルドルフのような。しかし、それはその時の話です。私自身は敢えてそれを止めようとは思いません。私は同盟の人間のように民主主義に思い入れはありませんし、賢人政治を否定する気もありませんから。」

私はこの選挙君主制を私が皇帝を務める間に導入し、試行錯誤を見守るつもりです。

私はこの国を自ら治めてみて実感しました。この国の大きさは平凡な一人の人間の

手には余る、と。一人で満足に治められるのはラインハルト様のような特別な人間だけです。正直なところ、そういった形でラインハルト様の特別性を世に示したい気持ちもあるのです」

ヒルダはジークフリード帝がよくよく検討した上でこの構想を口に出したことを理解した。

「それと、もう一つ。私は銀河帝国という国号を変えようと思うのです」

「これもヒルダに新鮮な驚きをもたらした。

「思えばこの国号のために多くの者がその身を犠牲にしました。銀河を我が国が遍く統治しなければならぬ、他の国など認められぬ、征服しなければならぬ、と。ですが、宇宙を手に入れられるだけの實力を持っていたラインハルト様亡き今、この国号は我が国の外交に無用な束縛を与えるだけのものとなりつつあります。私はヨブ・トリユーニヒトとユリアン・フォン・ミンツの二人をある点で尊敬しています。彼らはそれぞれ、自由惑星同盟と地球教団、二つの組織を過去の呪縛から解放しようとしています。我が国だけが妄執にしがみつくことは我が国にも銀河全体にも利益をもたらしません」

「しかし、反対も多いでしょう」

「だからこそ今なのです。反乱の鎮圧されたこのタイミングであれば、ドラスティックな改革も可能なのです」

ヒルダは、一つの可能性に気づき慄然とした。

「そのために帝国の弱体を見せ、反乱を大きくしたのですか？」

ジークフリード帝はかぶりを振った。

「まさか。いたずらに民を損なうなど為政者のすべきことではありません。すべて私の不明のもたらしたものです。ですが、こうなつたからには改革の機会にすべきだと思います」

ヒルダは納得した。

……問題がないとはいえないが、それは他の制度でも同じことだった。少なくとも、陛下はこの国の行く末に関して一つの答えを出した。アンネローゼ様の幸せと両立するような答えを。

「皇帝陛下、承知しました。もはや秘書官として言うべきことはありません。皇后陛下、皇帝陛下は後継ぎの問題に一つの答えを出されました。もう、ご安心なさつていいのですよ」

アンネローゼはヒルダの言葉を聞き、涙を流した。

「本当に？ 私はジークと離れなくてもよいの？」

ヒルダはわずかな胸の痛みを無視して微笑んだ。

「ええ、勿論です」

当のヒルダ自身はジークフリード帝から離れるつもりだった。

秘書官を辞め、マリィンドルフ領の統治に力を注ぐことになるだろう。アンネローゼの慰留で務め続けていた秘書官職だったが、側妃の話も無用となった今その必要もないだろう。ヒルダとしてはジークフリード帝と議論ができなくなるのはこの上なく寂しかったが、今のままでは自分もジークフリード帝も気まずいだけだろうと考えていた。

だが、ヒルダの心を読んだかのようにジークフリード帝が声をかけてきた。

「フロイライン・マリィンドルフ、秘書官の仕事は今日までとしてください」

自ら決意していたことだったが、ヒルダは刺されたような気持ちになった。

ヒルダは平静を装って答えた。

「勿論です。陛下」

しかし、ジークフリード帝の言葉には続きがあった。

「ゲルラツハ伯爵の後任として外務尚書となつて頂きたいのです」

「私ですか!？」

女性の尚書など前代未聞だった。

「あなた以外の適任者など、私には思いつきません。ヤン提督との交渉でも随分と助けられました」

ヒルダはなおも考え込んだ。

「フロイライン・マリンドルフ。あなたは私にとって大事な人です。側妃などではなく、政治上の相談相手としてこれからも私を助けてくれませんか？」

ヒルダは運命の皮肉を感じた。

……元々世の人の言う女としての幸福より、この銀河の行く末に関わりたいと考えていた。女としての幸福を望んだ時になって、それが叶うとは。

だが、ヒルダにとってジークフリード帝と愛を語らうよりも、政治の話をするに心惹かれているのも事実だった。

結局収まるべきところに収まったのかもしれない。

そう思いながらヒルダは返事をした。意外なほど穏やかな気持ちになっていた。

「はい、陛下、おうけいたします。わたしでよろしければ……」

ヒルダが部屋を出て、次にしばらく間があいてアンネローゼが出て行った。

最後にジークフリード帝が部屋を出て、目にしたのはワインのボトルとグラスを手にしたミッターマイヤーだった。

「ミッターマイヤー元帥……」

ミッターマイヤーは苦笑いを見せた。

「どうやら余計な心配をしましてしまつていたようです。臣は退散することにします。このワインは献上させて頂きますので。410年ものです」

ジークフリード帝は、ミッターマイヤーがここにいた理由を察した。

「いいえ。ありがとうございます。少し早いです、たまには一緒に飲みませんか？ラインハルト様やロイエンタール元帥の話もしたいですし、ミッターマイヤー家の夫婦円満の秘訣を教えて頂きたい心境なのです」

ミッターマイヤーは目をわずかに見開き、次の瞬間には笑顔を見せた。

「喜んで。マイン・カイザー我が皇帝」

ミッターマイヤーは帰宅後、エヴァンゼリンに事の次第を説明した。

エヴァンゼリンは、説明を終えて雨降つて地固まつたと呑気に構える夫に言った。

「陛下も罪なお人ね」

妻の不敬発言にミッターマイヤーは驚いた。

「おい、エヴァンゼリン」

「だつてそうじゃないですか。ヒルダさん、これからも陛下から離れられなくなつてしまったわ。きっと他の人と結婚なんてしないでしようね」

恋愛はミッターマイヤーの得意とする戦場ではなかった。

「そうか。そうなるのか……」

「まあ、ご本人達がそれで満足ならよいのだけど。別に結婚したから子供をつくらないといけないわけでもなし。側妃にお迎えなさった方がヒルダさんにとっては幸せにながったのではないかしら」

「そうかもしれない。だけどやっぱりアンネローゼ様のことがあるし、陛下も頑固だからな。余程のことがない限り状況は変わらないだろうさ」

その余程のことが起こり、ミッターマイヤー家もそれに巻き込まれるのは、もう少し先の話であった。

宇宙暦802年1月25日　クライングルト星域（新帝国領、神聖銀河帝国旧勢力圏）
ホーランド艦隊

ホーランド提督はまたも不機嫌だった。

自らが同盟の内乱を解決するのだと意気込んでいたのに、回廊を塞ぐ機雷の処理に手間取っている間に、アッシュビーとトリューニヒトに手柄を搔つ攫われてしまったのだ。少なくとも本人はそう考えていた。

トリユーニヒトの演説で多くの場所で救国会議勢力は降伏、あるいは鎮圧された。

最後に残ったシャンプールで、救国会議勢力の生き残りが頑強に抵抗を続けていた。ホーランドはこれを鎮圧して、自らの名を知らしめようとしたが、宇宙艦隊司令部より別の指令があり、断念せざるを得なくなった。

「モールゲンに神聖銀河帝国軍が接近しつつあり、機先を制して神聖銀河帝国勢力圏に逆侵攻し、これを早急に撃滅すべし」

この指令にホーランドは意気込み、イゼルローン回廊を逆進し、神聖銀河帝国領土に急ぎ乗り込んだのだが、敵などどこにも見当たらなかった。

その間に、シャンプール基地は、オーブリー・コ克蘭准将が周辺諸星系の兵力を糾合して陥落させてしまった。

同盟の内乱もこれで終結を見た。

怒り心頭のホーランドは宇宙艦隊司令部に指令の正当性について抗議を入れた。イゼルローン回廊の通信状態が悪い中、ようやく返ってきたのは、そのような指令は出していないという返答だった。

さらにはシャンプール鎮圧の指示を無視したばかりか、仮にも新帝国領を無断で侵犯するとは何事かと逆に詰問する内容だった。

ホーランドとしては踏んだり蹴つたりの状況である。

「俺は帝国を滅ぼす者、ホーランド元帥のはずなのに……」

そこに、宇宙艦隊司令部より再度指令があった。

「神聖銀河帝国軍の一部隊が逃走中である。貴軍が最も近い。急行し、これを捕えよ」

パトリチエフ准将はホーランドに進言した。

「絶対にやめましょう。前と同じですよ」

パトリチエフもムライ少将も何者かの偽電と判断していた。

ホーランドは渋った。

「しかし、本艦隊専用の秘匿回線での指令だぞ。これが本当だとしたら、また命令を無視することになるばかりか、功績をつくる機会を失うことになるぞ」

ラップ大佐が妥協案を出した。

「せめて、宇宙艦隊司令部に確認してからにしてはどうでしょう」

アウロラ・クリスチアン大尉が口を挟んだ。

「イゼルローン回廊の通信状況が悪くて、確認が取れた時には敵を取り逃がしています」

この言葉がホーランドの決断を後押しした。

「よし、行こう。このままでは我々は偽電に踊らされて国境を侵犯した、ただの間抜けだ。仮に向かった先に敵がいなくても今の状況がさらに悪くなることはないからな」

ムライとパトリチエフはげんなりしつつも、ホーランドの言に従わざるを得なかつ

た。

宇宙暦802年1月28日 アルボルン星域（新帝国領、神聖銀河帝国旧勢力圏）

百隻の高速戦艦で構成される脱出部隊は隠密裡に航行を続け、旧北部連合領のアルボルン星域に到達していた。

旧北部連合領内には、地球統一政府時代に発見されながら忘れ去られた、オリオン腕の未開拓地域に抜けるための細い回廊が存在するのだ。

ルドルフ2世はそこで再起を図るつもりだった。

百隻は同型の高速戦艦で構成されていた。そのうち高速戦艦フィヨルギンに神聖銀河帝国の中枢メンバーは同乗していた。

レムシヤイドをはじめとする殆どの閣僚、門閥貴族、ド・ヴィリエ他地球教団ド・ヴィリエ派幹部、ノルデン、グリルパルツアーら軍人がルドルフ2世に付き従っていた。

ルドルフ2世は諦めるつもりはなかった。地球教団、そしてゴールデンバウムの遺民は、ユリアンが保護してくれると信じていた。

そして、いつの日か自らが再臨した時、ルドルフ2世が銀河を支配するための力に再びなってくれるものと考えていた。

再興のための道筋は、地球アーカイブの知識に基づき、既にルドルフ2世の頭に描か

れていた。後は実行するのみだった。

だが……

オペレーターが警告を発した。

「高速で接近する艦隊あり。数四千隻」

ルドルフ2世は即座に命じた。

「敵以外にあり得ん。高速で接近してくるといふことはこちらの位置もばれていると考えるべきだ。各艦散開し、全速でこの星域を離脱せよ」

百隻の殆どは囷となってルドルフ2世の乗るフィヨルギンを逃がす役割も持っていた。

しかし、やって来た艦隊は通常あり得ないほどの高速を發揮し、アマーバのごとく柔軟に隊形を変化させながら、小部隊に別れ、百隻すべてに追い縋ってその殆どを取り囷んだ。

それは高速艦で構成された同盟軍の艦隊であり、ばらばらに逃げ回る敵の追撃に練達していることが推測される動きだった。

ルドルフ2世は最後まで逃走を続けたが最終的には取り囷まれ、降伏を余儀なくされた。

この艦隊はホーランドの艦隊だった。海賊退治に慣れた彼らには、今回のような逮捕

劇はルーチンワークのようなものだった。

フィヨルギユンに乗り込んで来たホーランド艦隊の兵士に拘束されながら、ルドルフ2世は思った。

これは情報が漏れたとしか思えぬ。我々の位置を正確に掴んでいる時点で、脱出部隊内での内通を疑わざるを得ないが、一体誰が……

「内通者が誰かとお悩みですか、陛下？」

その声に顔を上げると、目の前には笑みを浮かべたグリルパルツァーが立っていた。

ルドルフ2世はその顔を見て悟った。

「卿だったのか。まさか二度も主君を裏切るとはな」

「あなたは大将にしてくださいでしたし、そのつもりはなかったのですがね。流石に月まで陥とされたとなると潮時でしょう。正直、未開拓地域の探索には地理学者として大いに興味を惹かれたのですが、今の立場だと地理博物協会誌に論文も発表できませんから。やはり、真つ当な立場を得て、自ら主導して探索を行おうと思います」

ルドルフ2世は半ば本気で心配した。

「しかし新帝国の武人どもの中で裏切り者の卿に居場所などあるのか？」

「ご心配なく。私は連合に行きます。中将待遇が保証されておりますので」

「なるほどな。まあせいぜい頑張れ」

ルドルフ2世は納得し、それきり口を開かなかつた。

グリルパルツアーも、ルドルフ2世の激励に毒気を抜かれ、決まりが悪くなって逃げるように姿を消した。

ド・ヴィリエは一連の会話を聞いて、事態を正しく洞察した。

「オーベルシュタインの差し金か」

オーベルシュタインは、グリルパルツアーとクナツプシュタインの内応について情報を得ていた。しかし、それを新帝国に伝えることはしなかつた。

代わりに、グリルパルツアーに接触し、「もしもの時の保険」として、神聖銀河帝国の旗色が悪くなった時に裏切ることを薦めたのだつた。

グリルパルツアーは、宣教師校の目もあつてなかなか裏切りに踏み切れなかつたが、最後の段階になってようやく裏切りのタイミングを得たのだ。

グリルパルツアーは脱出準備の混乱の中で、現在位置を知らせる超光速通信プログラムを脱出部隊の一艦に仕込んでいた。これによって連合軍情報部に脱出部隊の現在位置を知らせたのだつた。

連絡を受けたオーベルシュタインは、同盟のホーランド艦隊に潜り込ませていた協力者に連絡を入れた。

協力者が潜り込むことはビュコックの了解の上のことだった。

今回の裏切りに備えて、ホーランド艦隊をクラインゲルト星域まで移動させて待機させたのもオーベルシュタインだった。

万一裏切りがなく、この出動が無駄に終わっても、責任を取るのはホーランドであつたため、オーベルシュタインは気にせず艦隊を動かすことができたのだつた。無論ホーランドが動かない場合は国境に展開している連合の警備部隊を動かすつもりではあつたが結果的にその必要はなかつた。

ホーランドは、拘束した者達がルドルフ2世を含む神聖銀河帝国の中枢メンバーであることを知つて驚き、その後狂喜した。

「おい、ルドルフ2世を俺が捕らえたということは、俺が帝国を滅ぼした者というわけか？」

パトリチエフは望む答えを期待するホーランドを前に明確な否定ができなかつた。

「は、はあ。まあそうと言えなくもないかもしれないですね」

ホーランドはニカツと笑つた。

「そうだろう。そうだろう！ルドルフ2世を捕らえられたのは俺の判断と芸術的艦隊運動のお陰だ！」

これまでの鬱憤を晴らすかのように自慢を始めるホーランドとそれに呆れるパトリチエフ。ホーランド艦隊ではお馴染みのその光景を、オーベルシュタインの協力者アウロラ・クリスチアン大尉は冷めた目で見ていた。

実際にはなかった通信を偽造して、ホーランドを誘導したのはクリスチアン大尉の仕業だった。

「さて、これから私はどうしたものでしょう……」

「ふ、ふ、ふ、ふ」

ホーランドは突然妙な笑い声を発し始めた。

「ウイレム・ホーランド元帥！ 帝国を滅ぼした者！ それは、俺だー！」

指揮卓に登ってポーズをとりながら叫ぶホーランドを、幕僚達は生暖かく見守っていた。

第四部 33話 陰謀の季節

宇宙暦802年 2月1日 独立諸侯連合 キツシンゲン星域 連合行政府

ウオーリック伯のもとをオーベルシュタインが訪れていた。

ウオーリック伯は笑顔でオーベルシュタインを迎えた。

「卿が私と単独で面会とは珍しいな。とはいえ話の内容は察せられるが」

オーベルシュタインは淡々と語った。

「そうでしような。今回の訪問は私の独断であり、軍の見解でないこともお伝えしておきます。無論、クラインゲルト総長にはフェルナー少將を通じて報告が入っているとは思いますが」

「そうだろうな。それで、そうまでして卿が伝えたいこととは何かな」

オーベルシュタインの眼が鈍く光った。

「単刀直入に言います。ルドルフ2世は殺すべきです」

ウオーリック伯は険しい顔をした。

「卿は神聖銀河帝国の降伏の条件を知っているだろうか？そしてその内容は四国が共有するところだ」

「ですが、まだ終戦条約は結ばれておりません。何とでもなります」
ウオーリック伯は首を横に振った。

「何とでもなるようにするために、連合は大きな代償を支払うことになるだろう。それでも卿はそれをすべきだと言うのか？」

「はい。ルドルフ2世が生きている限りゴールデンバウム王朝復活の可能性は残りません。皇女達のことには妥協できます。彼女達は遺伝性の疾患持ちだ。しかし、彼だけは。彼はどのような境遇からでも復活する可能性がある。それだけの器のようだ。今のうちに殺しておくかねば後の世に禍根を残します」

ウオーリック伯はこともなげに言った。

「残つてもいいじゃないか」

オーベルシュタインの口が僅かに引きつった。

「何ですと？」

「この世に共通の悪というものは必要だ。世の中がまとまるために。ルドルフ2世にはその役目を担ってもらえばよい」

オーベルシュタインはウオーリック伯の顔をしばらく見つめ、やがて言った。

「ウオーリック伯、その考えが裏目に出る日が必ず来ます」

ウオーリック伯は笑った。

「まあ、実のところ、未来ある少年を大人の都合で殺したくないという気持ちも強いんだ。未来ある少年のことは、どうなるかと、同じ世代の者達に任せたい」

オーベルシュタインは溜息をついた。

「どうやら聞き届けては貰えぬようです。よいでしょう。この上は閣下のお考えに沿った上で、小官も善処することにいたします」

「ああ、そうしてくれ」

オーベルシュタインが去った後、ウォーリック伯は補佐官に伝えた。

「あれは絶対に何かを仕掛ける気だ。フェルナーに連絡して監視を強めさせろ」

翌2月2日、ルドルフ2世他神聖銀河帝国の主要メンバーはモールゲンの同盟軍基地に一時的に收容されることが内密に決まった。

また、終戦条約締結のための会議は2月28日に開催されることが正式に決まった。

宇宙暦802年2月14日、バーラトを事前に出発していた同盟の終戦会議参加者がモールゲンに到着した。

同盟からの会議参加者はジョアン・レベロ議長、シャノン國務委員長、ヨブ・トリューニヒト議員、軍の代表としてドワイト・グリーンヒル大将、その他実務担当者だった。

ホーランドは大将への昇進が決定し、会議参加者の太陽系までの護衛任務に当たるこ

ととなった。

ホーランドが行なった新帝国領国境侵犯は、終戦条約締結時に旧北部連合領が神聖銀河帝国領であったという扱いになることから不問とされることになったし、その独断行動は、事情をある程度把握していたビュコックによつて追認が与えられお咎めなしとなった。

同盟としても、連合との関わりが深過ぎるアツシユビー以外に英雄を欲しており、ホーランドはそこにうまく乗っかった形である。なお余談だがオーブリー・コ克蘭も内乱終結の英雄として少将への昇進が決定していた。

宇宙暦802年 2月24日 太陽系 月

ルパート・ケツセルリンクは武装解除の終了した月要塞で、ルビンスキーの亡骸と対面していた。

ルビンスキーの死体は、彼の死後、病院からルビンスキーだと発覚する前に回収され、秘密裏に月に運び込まれていた。

ルビンスキーの死体は本人の希望で冷凍保存されていた。息子が病み衰えた自らの姿を見て嘲笑しに来るかもしれないから、というのが本人の言だった。

だが、案内したユリアンには、ケツセルリンクがただ淡々と父親の死を悼んでいるよ

うに見えた。

ケッセルリンクはユリアンに尋ねた。

「父……ルビンスキーの晩年はどうでしたか？」

ユリアンは印象深い故人のことを思い出しながら答えた。

「病気が発覚してからも、症状を薬で抑え込んで最後まで神聖銀河帝国の経済基盤を整えるのに尽力されていました。自ら宇宙を飛び回って。根拠地の発覚を恐れて月に寄られることは少なかったですが、それでもここに立ち寄られた時には月内の経済運営も指導されていました。私も経済の何たるかをルビンスキー氏から教わりました」

ついでに陰謀の立て方も少々、とはユリアンは口には出さなかった。

ケッセルリンクは屈託無く笑った。

「名高いユリアン・フォン・ミンツが生徒になるとは、父も喜んでいるでしょうな」

ユリアンは付け加えた。

「いつだったかルビンスキー氏が零してしまいました。息子には結局何も教えてやる機会がなかった。だけど勝手に成長してしまった、と」

「まあ、あの頃の私は父に教える気があっても、聞く振りしかしなかったでしょうからな。あなたが私の代わりになってくれたなら、私は感謝すべきかもしれないね」

その言にユリアンは驚いた。

「失礼ですが、故人から聞いていたのとは全く違いますね。自治領主、あなたは故人をいまだに恨んでいるものとはばかり」

「今でも恨んでいますよ」

ケッセルリンクは少し寂しげな顔になった。

「でもまあ、やっぱり父親なのです。最近ようやくそう思えるようになりました」

それから笑った。

「父親に恨みを抱き続ける為政者なんて、それに従う民からすればぞつとしないでしょう？」

ユリアンは自らの実の父のことを考えてみた。ユリアンは父親に恨みはなかった。正の方向にも負の方向にも強い感情が湧かなかった。戦死しなければ、もう少しまでも感情を抱けたかもしれない、父親という存在を理解できたかもしれないと、それを残念に思うだけだった。自分はただ放置され、父はいつの間にか死んだ。自分の心には穴が空いているのかもしれない、それは埋める必要のあるもののだろうか？ユリアンには分からなかった。

ケッセルリンクは話を変えた。

「ところであなた方には感謝しなければなりません」

「感謝ですか？」

「ええ。あのまま平和が続けば、フェザーンは連合への従属色を強めていくことになっていでしょう。今回の動乱はフェザーンにとって同盟との関係改善、そして連合との関係対等化の契機になりました。だから感謝しているのです」

ケッセルリンクはトリューニヒトと連絡を取り、連携していたのだった。

神聖銀河帝国、挙国一致救国会議が勝てば、その勝ち馬に乗り、連合、新帝国、同盟が勝てば最初から味方であったかのように振る舞い、混乱の隙に何らかの実利を得るつもりだった。

今回フェザーンは同盟と連携して、連合に提案を行なった。終戦後の銀河新体制について。

その中にはフェザーンの独立性の保障も含まれていた。

それがケッセルリンクが今回確保した実利だった。

「それは、あなたがうまく動かれただけで我々が感謝されるべきことは何もない……」
ユリアンは言いかけて言葉を止めた。

ルビンスキーの行なったボルテック爆殺によって、フェザーンは一時的に混乱状態に陥った。それは連合の対神聖銀河帝国戦にフェザーンが積極的に協力できない十分な理由となった。さらにはケッセルリンクにとって早期に表舞台に立てる機会となり、ケッセルリンクはその機会を十分に活用した。

この父子はフェザーン台頭のために結果的に連携したことになるのではないか。

ユリアンの心の動きを読んだかのように、ケッセルリンクはニヤリと笑ってその手を差し出した。

「この世は陰謀だけでは動かない。しかし、動かせることもある。どうせなら、世の中を良い方向に動かしていきたいものですね」

その笑みは彼の父親によく似ていた。

ユリアンはその手を取り、笑顔で固く握手した。その笑顔は彼の元保護者のものに似ていたかもしれない。

「ええ、ぜひ」

ケッセルリンクにとってはこの握手こそが訪問のもう一つの目的だったのかもしれない。

これからも銀河の動静に関わることになる若き二人、ユリアンとケッセルリンクは、悪く言えばお互いに利用しあえる相手、よく言うならば同盟者、を得たのだった。

第四部 34話 会議を前に

宇宙暦802年2月25日、終戦会議の3日前に、銀河帝国皇帝ジークフリードより、国号変更と新体制に関する勅令が出された。

この時、ジークフリード帝は、終戦会議の開かれる太陽系に、皇后を伴って向かっていった。座乗艦にはバルバロッサではなく先帝ラインハルトの愛艦ブリュンヒルトが用いられた。これはジークフリード帝の意向であった。ジークフリード帝はラインハルトの魂と共に、帝国の新体制を発表し、終戦会議に臨むつもりだったのだ。

このことからこの2月25日の勅令は通称でブリュンヒルトの勅令と呼ばれた。

ジークフリード帝はこの勅令で、地方分権の推進と、選挙君主制への移行を表明した。さらに、国号を銀河帝国からオリオン連邦帝国に変更し、皇帝の下にオリオン王を置くこと、オリオン王は一年間はジークフリード帝が兼務すること、一年後に地域の首長による選挙で新しくオリオン王を選ぶこと、オリオン王に皇帝の権限を移譲することを発表した。

歴史を知る者は、古代地球におけるローマの名を冠した国家のことを想起した。

国外、同盟、連合、フェザーンからは英断を歓迎するとの声明があった。

事前に通知していた上に、その内容的にどの国も反対するべきことがなかったからだ。

国内の反対の声も小さかった。

主要閣僚や軍司令官、主要貴族にはそれぞれジークフリード帝、ミッターマイヤー元帥、マリーンドルフ伯から十分に根回しが行なわれていた。

反旗を翻すような気概を持った者は相次ぐ内乱で既に殆どが姿を消していた。

隠れた野心を持つ者もいたかもしれないが、選挙によつて帝国の支配者となれる可能性のある今回の改革は、そのような者にとつてむしろ望ましいものだった。

実際シルヴァーベルヒなどは「俺はオリオン王になる」などと公言していた。

唯一人、ラムズドルフ元帥のみが、軍務尚書を辞任し、退役することを表明した。

それが抗議の辞任であったのか、ただ新時代を悟つてのことなのかは不明であった。彼は心の内を人に語ることはなかった。

彼が軍務尚書として最後に行つたことは、連合軍宛のメルカッツ元帥に関する弔電であつた。

連合においてはメルカッツ元帥を今後どう扱うかが議論となつていた。ウォーリツク伯は、死者の名譽を守るつもりであつたし、軍人の間でもその意見が大勢だったが、有力諸侯の中には後に続く者が現れることを恐れ、元帥号の剥奪を求める者も少なからず

いた。

また、メルカツツ本人も連合で元帥として遇されることをもはや望んでいなかったのではないかとの声もあった。

帝国、ラムズドルフ元帥からの弔電は、この議論に一石を投じた形となった。

連合軍がこの弔電を受け入れたことで、メルカツツの元帥号剥奪の声は小さくなつていったのだった。

ゴールデンバウム王朝時代から銀河帝国を黙々と支え続けた武人は、時代の変わり目を前にこうして姿を消した。

後任の軍務尚書はミッターマイヤーが兼務することになった。

状況が落ち着いた後は、宇宙艦隊司令長官の座をルツツに譲り、軍務尚書に専念する予定である。

これはミッターマイヤーの政治家としての経歴の始まりとなった。

銀河帝国改めオリオン連邦帝国からの終戦会議主要参加者は以下の通りとなった。

皇帝ジークフリード・フォン・ローエングラム

外務尚書ヒルデガルド・フォン・マリィンドルフ

工部尚書ブルーノ・フォン・シルヴァーベルヒ

帝国軍統帥本部総長エルネスト・メッククリンガー

宇宙艦隊副司令長官ナイトハルト・ミユラー

この他にアンネローゼが同行している。

シルヴァーベルヒは本来会議の参加者となるはずではなかったが、会議の舞台の建設に手を挙げ、閣僚の中で誰よりも早く木星系に乗り込んでガニメデ上に黒旗軍時代の基地をモチーフとしたジオデシクドーム構造の会議場を、わずか一週間のうちに整えてしまったのだ。

これは、諸国に帝国の底力を示したという点で大きな功績であった。

オリオン王を目指すことを考えていたシルヴァーベルヒであったが、この会議場建設で注目を集めたことで彼には別の道が拓けることになった。また、帝国の閣僚の中で一番最初にユリアンとの面会も果たしている。

ちなみに第三衛星ガニメデに会議場が設けられたのは、本来最適のはずの第四衛星カリストがヤン・ウエンリーの氷塊切り出しによって無残な姿に変貌していたからである。シルヴァーベルヒ率いる会場設計チームは往路の間にカリストを想定して用意した設計図の見直しとその余波による工期縮小のために徹夜を繰り返す羽目になり、ヤンは彼らから大いに恨まれることになった。

同じ頃、独立諸侯連合からも終戦会議参加者が太陽系に向かっていった。

連合からの主要参加者は以下の通りであった。ヤン・ウエンリーは引き続き太陽系に留まり、ウォーリック伯達の太陽系までの護衛はシユタインメツツが務めることになった。

連合盟主ウォーリック伯爵

外務卿クレイフェ伯爵

軍務卿デイレンブルク男爵

派遣艦隊総司令官ヤン・ウエンリー

フォリエルバツハ、シャウデインは一足早く連合に帰還していた。

余談であるが、フォリエルバツハは彼の留守中にケスラー憲兵總監と彼の娘が恋仲となつてゐることを知り、驚愕のあまり熱を出して寝込んでしまった。それ以降しばらくの間、フォリエルバツハの前で娘の話題を出すことはタブーとなつた。

帝国内での戦いの間、連合領内も平穩無事というわけではなく、地球教残党によるテロが企てられており、ケスラーも忙しく動き回つていた。フォリエルバツハの娘ともその際に知り合うことになつたのだが、それは別の話とする。

フェザンからはケツセルリンクと共に新任の首席補佐官ワレンコフが参加する。

彼はルビンスキーの前任の自治領主の息子であり、彼を重用することはワレンコフの死の理由を察している者にとっては大きな意味を持つていた。

また、護衛兼軍代表としてフェザーン軍ボーメル司令官も会議に参加することになった。

こうして、銀河の行く末を決める会議の舞台が整えられた。

第四部 35話 終戦会議前半

宇宙暦802年2月28日 太陽系木星第三衛星ガニメデ

ガニメデは木星の強い潮汐力によつて、月同様に常に同じ面を木星に向けていた。

会議場は複数の透明なドームから成り、ガニメデの北極に設置され、太陽系最大の惑星の巨体を常に水平面上に見ることができた。

古代ローマ神話の主神ユピテル、帝国に伝わる神話においても古神にして軍神のテュールに擬される惑星の威容は、見る者を厳肅な気持ちにさせた。まるで神々に見られながら会議を行うかのような気になってくるのだ。

それこそが異才シルヴァーベルヒの狙いでもあった。参加者からすれば余計なお世話というところでもあったが。

マルガレータはそんな木星のことなど関係なく、初の国際会議参加に緊張していた。無論ヤンの副官としての参加である。

ヤンはそんなマルガレータにアドバイスを行なった。

「そんなに緊張することないよ。実のところみんな初めてなんだ」
マルガレータは驚いた。

「えっ、そんなわけないでしょう？」

「いや、驚くべきことにそうなんだよ。銀河連邦成立から八百年、まともな国際会議が開かれたのはこれが初めてのことなんだからね。誰もまともなやり方なんて知らないのさ」

ヤンにそう言われると、マルガレータにも参加者が皆、どう行動すべきか戸惑っているように見えてきた。

とはいえ、とヤンは続けた。

「会議は踊る、されど進まず、なんてことにはならないと思うよ。少なくとも今日はね」
この数ヶ月でヤンの歴史講義の優秀な聞き役となっていたマルガレータは、ヤンが引用した言葉が発せられた古代地球の会議のことを知っていた。その会議では各国の利害が衝突してなかなか話が進まなかったのだ。

「どうしてでしょうか？多数の国の利害が絡むのは同じではないでしょうか」

「今日は神聖銀河帝国との終戦条約の締結がメインだからね。条文は事前に詰められているから今更交渉の余地もあまりないし、ひっくり返ることもないのさ」

「なるほど」

「だから本番は明日以降、この銀河の体制に関する話し合いの方だね」

「ヤン提督、私は会議自体にはきつと役に立たないでしょう。しかし、今後軍同士の国際

会議も開かれると考えれば、今回の会議を今後のための経験としたいと思います」

ヤンは苦笑した。

「言いたいことをすべて先に言われてしまったな。その通り、今回の会議は貴官の経験となるだろうね」

それと、とヤンは続けた。

「会議終了後の方が、貴官にとつては大きな仕事になるだろうね」

マルガレータはそのことを思い出して気分が重くなった。

「そうですね……」

しばらくして会議が始まった。

この日の会議は神聖銀河帝国と直接交戦を行っていない自由惑星同盟のシャノン 国務委員長が議長を務めた。

ヤンの言った通り、細かい部分で意見対立と調整が発生したものの会議自体は大きな 紛糾もなく終わった。

ヤンが、会議の途中で居眠りを始めたのには、流石のマルガレータも呆れてしまった だ。

しかし、ヤンは知らなかったが、会議前のトップ同士の顔合わせの際に、ウォーリッ

ク伯が「神聖銀河帝国の戦争責任者への死刑が君も含めて不適用になるといふ噂があるそうだが、私は何も聞いていないな」と、ユリアンに対していきなりかます一幕があった。

もつとも、ユリアンは平然としたもので、「会議の場になればきつと思ひ出してくださると信じていますよ」と笑顔で返した。

同調者も出ず、ウォーリック伯も、そう簡単に思い通りには行かせないという意味表示ができたことに満足して、早々に引き退がった。

会議の場では、そんなことはおくびにも出さずに終戦条約にサインしてのけたのだからウォーリック伯の面の皮も相当だった。

なお、死刑不適用という内容は、少なくとも自由惑星同盟にとっては到底表に出せないものだったので、他のいくつかの項目とともに秘密の覚書として処理されることになっていった。

終戦条約の内容は要約すると以下のようなものになった。

・銀河四国（同盟、帝国、連合、フェザーン）は神聖銀河帝国を国家として公認する。
・神聖銀河帝国は宇宙暦802年2月28日をもって国家として消滅し、その構成員及び構成物の取り扱いは銀河四国の合議に任せられるものとする。

秘密の覚書に関しては下記の通りだった。

・神聖銀河帝国の戦争責任者の取り扱いは銀河四国の合議によって決める。ただし死刑は適用されない。

・地球及び月、その構成物と居住者に関しては別に銀河四国の合議によって定める国際協調組織の管理下とし、その管理下において一定の自治権を認める。また、居住者は地球再建事業を含む国際協調組織の業務に従事する。

結局のところ、殆どの事柄は翌日以降の銀河四国の会議に持ち越されていたのだ。た。

こうして会議の1日目は無事に終わるかに思われた。

しかしそのタイミングで会議参加者全員を動揺させる一報が入った。

ラップ大佐が会議場内に駆け込んで来て、グリーンヒル大將に耳打ちした。

グリーンヒル大將はレベロの確認を取った上で、会議参加者全員に伝えた。

「モールゲンの同盟軍基地が襲撃を受けています。襲撃者の目的はルドルフ2世の奪還と判明しました」

第四部 36話 密議

モールゲン基地襲撃という大事件に、ガニメデでは予定されていた条約締結記念パーティーが中止となった。

モールゲンの状況は予断を許さなかった。

深夜、ユリアンは銀河四国の首脳達に呼び出された。

ユリアン自身、彼らに声をかけようとしていたところだったが、機先を制されたことに不吉なものを感じた。

その四人、レベロ、ウォーリック伯、ジークフリード帝、ケッセルリンクは先に来ており、ユリアンを取り囲む形となった。

ケッセルリンク以外の3人は皆険しい顔をしていた。ケッセルリンクは何か言いたげであったが黙したままだった。

レベロが用件を切り出した。

「我々は今回の事態に、約束をどうしたものかと思っている。地球教、そして、ルドルフ2世の危険性が改めて示されたのだ。しかも襲撃とは、終戦条約を反故にされたのも同然ではないかね」

ユリアンは心臓を掴まれる思いがしたが、表情には出さないように努めた。

「過激派の残党がいることも彼らがテロを起こす可能性があることもは元々織り込み済みの話だったではありませんか？ たまたま時期が重なっただけのこと」

ジョアンは同意しなかった。

「時期が重なったことが問題なのだ。四国のそれぞれで、終戦条約に反対する者は多かったのだ。今回のことで彼らは勢いづくだろう。……ある意味よい機会だったとも言える」

ユリアンは続きを聞きたくなかった。

「危険分子を抱え込むことなど銀河と民主主義のためにするべきことではなかった。銀河の秩序を一刻も早く回復のためにやむを得ないことではあったが、そうしないで済むならそれがよい。幸い死刑の不適用も月と地球の自治も秘密の内容であることだし」

ジョアンの目は悪意と猜疑の塊のようにユリアンには思えた。これが良心的政治家と言われた男の目だとは到底信じられなかった。

ウオーリック伯も言葉を重ねてきた。

「だから、な。ミンツ伯ユリアン。君も納得して欲しいんだ。すべて白紙にして、四国の合議で決めることをね。月の民も、自治はともかくとして、あまり酷い取り扱いはしないと誓おう。あまりお金はかけられないし、どこかの惑星で農業にでも従事してもらお

うか」

それは、低重力に適應した月の民の多くにとつては死の宣告に等しかった。殺しはしない、放つておくから後は勝手にのたれ死ね、つまりはそういうことだとユリアンは解釈した。

「あとは、ルドルフ2世やその他の悪人どもがこの世からいなくなるだけのこと。それだけのことさ」

ジークフリード帝も、さらにはケッセルリンクまでもが領いた。

今回の話が銀河四国の総意であることは疑いようがなかった。

ユリアンは怒りが湧いてくるのを感じた。

「納得できません！この襲撃もあなた方が仕組んだことでしょー！」

ウオーリック伯は失望したというように首を横に振った。

「それを言つてしまつては我々の信頼関係は崩れたも同然ではないか。君の意思を確認する機会を持つてやった我々の善意を否定するのなら、我々も君の意思を無視してよいということになるのではないかな」

ウオーリック伯は意地の悪い顔になった。

「そうだ、こういうのはどうだろう。残党と交戦中、流れ弾でルドルフ2世も他のメンバーも死亡。それに抗議する地球教徒達が月で集団自殺。それが最も収まりがよいな。

そういうことにしよう」

ユリアンは不用意な発言を後悔した。

「申し訳ありません。失言でした。ですがどうか、地球と月の民に寛大な処置を！まだ道理のわからぬ少年にどうか慈悲を！私の命で替えられるならそれでも構いません！」

ユリアンは四人全員に頭を下げた。

ジークフリード帝だけは少し心を動かされた様子だったが、他の者は何の反応も示さなかった。

ウオーリック伯が残酷に告げた。

「君ごときで代わりになどなるものか。諦めるんだな」

ユリアンは心が憎悪で濁っていくのを感じた。

「それなら……」

きさま達全員、いや、銀河全土を地獄にたたき落としてでも少年皇帝と月の民を救ってやる。救えなかった時は、生まれて来たことを後悔させるようなやり方で殺してやる。何度でも殺してやる。きさまたち四人の命で償えるものか！

そう口から出そうになった時、パンパンと手を打ち鳴らす音が聞こえた。

「それまで！それまで！」

トリユーニヒトだった。

その後ろにはヤン・ウエンリーが続いていた。

レベロがトリユーニヒトを咎めた。

「何だ、トリユーニヒト。今はトップ同士の話し合いの場だ。君の出る幕はない」

トリユーニヒトは困ったように笑った。

「いたいけな青年一人を、銀河のトップが取り囲んで虐める会の間違いではないかね？
彼が心優しい青年だということは十分わかっただろう？」

ウオーリック伯が露骨に顔をしかめた。

「茶化すのはよしてくれ。今は銀河の未来を決める話し合いをしているんだ。ヤン提督、君もここに在るべきではないぞ」

トリユーニヒトは平然としていた。

「銀河の未来にとつて重要だから私もここに来たんだよ。何せ、この男、ザ・非常識男のヤン・ウエンリー君が、約束を反故にするつもりなら秘密の覚書の内容を世間にばらすと言つてきかないんだから」

「なっ!？」

皆啞然とした。ヤン本人までもが啞然としていたがそれには皆気付かなかつた。

四人が同じ思いを抱いた。

ヤン・ウエンリー、終戦会議でも居眠りをしていた歩く非常識。フェザーンの経済活動に大打撃を与え、月すらも破壊しようとした彼ならばやりかねない。政治の常識は全く通用しそうにない。

ヤンを止めるにしてもこの非常識人はもう秘密をばらす手配まで済ませているかもしれない。迂闊なことではできなかった。

トリユーニヒトは考え込みながら言った。

「あと、ヤン君はこうも言っていたな。オーベルシュタイン中将がどうか」

ウオーリック伯は内心舌打ちをした。

トリユーニヒトはオーベルシュタインが裏で動いていたことを察して、ウオーリック伯を脅しにかかったのだ。

トリユーニヒトは笑顔で続けた。

「だから、みんなですればよいか相談しようじゃないか？みんなで幸せになれる方策を考えよう」

トリユーニヒトの仕切りでどうにか話がまとまった時には既に日を跨いでいた。

終戦条約の内容は守られることになった。

とはいえ、モールゲン基地襲撃事件はまだ解決を見ておらず、基地内の状況も外部に

伝わって来てはいなかった。

2日目午前は会議がキャンセルされ、その状況が注視されることになった。

部屋にはトリユーニヒトとヤン、そしてユリアンが残された。

トリユーニヒトは疲れたと言つて座り込みながら、優しい笑顔でユリアンに向けた。

「危ないところだったね」

ユリアンはただ感謝するしかなかった。

「ありがとうございます。トリユーニヒトさん、ヤン提督。おかげで月の民と、皇帝陛下が救われました」

途端にトリユーニヒトから笑顔が消えた。

「わかつていないようだね。危なかったのは月の民でもルドルフ2世でもない」

トリユーニヒトはまじまじとユリアンを見つめた。

「君だよ」

ユリアンは理解が追いつかなかった。

「どういうことですか？」

「彼らはルドルフ2世のことも月の民のことも、厄介には思っていたものの、今どうこう

すべき対象とは思っていなかったんだ。今回まとまった解決策も、彼らは最初から思いついていたのさ。だから今、彼らが気にしていたのは君なんだ」

「何故僕なのですか？」

「ユリアン君、君は自分の特異性を理解していないんだな。まあ考えてみてくれ。とある人物が単身悪の帝国に入り込み、数年にしてその全権を掌握した。その帝国は世界を相手に戦いを挑み、その人物も戦争を主導した。にも関わらず、その人物はその帝国を生贄にしてこれからも世界の政治に関わり続けようとしている。しかもまだ若い。どう思う？」

ユリアンは素直に答えた。

「怖いですね」

「君だよ。周囲から見ただ君だ」

ユリアンは驚いたが、考えてみるとその通りだと気づいた。

「ルドルフ2世のように血統によらずにここまでのことをしてしでかした。それにまだ十代。長じれば銀河全体を滅びに導くようになるかもしれない。このまま君を自由にしておいていいのか、彼らは判断に迷っていたのだ。だからあえてルドルフ2世や月の民をだしにして君を挑発して人となりを見ようとしたんだ。ユリアン君、君は最後何を言いかけていた？ケッセルリンク君が事前に知らせてくれていなければ間に合わなかったと

ころだったぞ」

ユリアンはそのことを思い出していた。彼は激情のあまり、言つてはならぬことを言いかけていた。他人に対して自分があそこまで憎しみを抱けるとは今でも信じられなかった。

トリユーニヒトがあそこで止めてくれなければユリアンはきつと排除されていただろう。

トリユーニヒトの目は常になく厳しかった。普段の笑みは影を潜めていた。

「君は、奈落に張り渡された細い綱の上を歩いている。そのことをしつかりと自覚するんだ」

ユリアンはその情景を想像し、足の力が抜けた。ぐらついた彼の体を支えたのはヤン・ウエンリーだった。彼は優しく語りかけた。

「大丈夫だ。大丈夫。私が生きているくらいだ。なんとかなるものさ」

トリユーニヒトも表情を緩めた。

「たしかに。ヤン君なんて、私に排除されそうになったのに生き延びて、ユリアン君に殺されかけても生き延びて、フェザーン商人達に恨まれて出禁になって、木星でもいろいろな人の恨みをもって、それでも生きているんだ。……よく生きていられるものだ」

最後は真顔で問いかけたトリユーニヒトに、ヤンは返した。

「あなたにだけは言われたくない！」

トリユーニヒトはそんなヤンの叫びを無視した。

「それに君には味方がいる。私も、それにきつとヤン・ウエンリー君も味方だ」

ヤンは頷いた。

「君のことはいろいろと心配だからね」

ユリアンは涙が出そうになった。

「こんな僕のためにありがとうございます。そこまでしてもらえる資格は、僕にはないのに」

トリユーニヒトは少し傷ついた顔をした。

「何を言っているんだ。君は私の被保護者じゃないか」

ユリアン自身は、既にそのような関係ではなくなってしまったと諦めていた。だがトリユーニヒトは彼が心の奥底で欲していた言葉をかけてくれたのだ。

「僕はまだそう思っていてもうよいのでしょうか」

「駄目な理由はないし、これからも私はずっと君の保護者のつもりだよ」

「ありがとうございます」

ユリアンはその一言を返すので精一杯だった。

ヤンは溜息をつきたい心境だった。トリユーニヒトはユリアンを再び手駒としたよ

うなものじゃないか、と。

ユリアンが去り、後にはトリユーニヒトとヤンが残った。一刻も早く立ち去ろうとしたヤンを、トリユーニヒトは呼び止めた。

「ヤン君。私の被保護者のためにありがとう。恩に着る」

ケツセルリンクから連絡を受けたトリユーニヒトは、自分では事態解決に力不足と感じ、ヤンに協力を求めたのだ。頭まで下げて。

ヤンは心底嫌そうな顔をしながら引き受けた。あくまでユリアンの為だと主張して。

ヤンはトリユーニヒトの感謝の言葉には応えず、代わりに質問をした。

「これからも彼を手駒として使うつもりですか？」

「そのつもりはないのだが、そう見えてしまうことにはなるのだろうか」

ヤンは悪い方に解釈した。

「つまり、そのつもりなんですわね」

トリユーニヒトは肩をすくめた。

「その調子で、私の被保護者を気にかけてやってくれ。彼は自らの巨大な才能に振り回されているように見える。保護者として心配だ」

ヤンはさらに毒をはいた。そういう心境になっていたのだ。

「あなたが保護者じゃなければ彼ももう少し真つ当に育つたんじやないかと思ひますよ。今からでもどなたかに保護者の役割をお譲りになつてはどうですか？」

トリューニヒトはヤンの悪意を意に介さなかつた。ただ自らを省みて溜息をついた。「まつたくだ。保護者としての責任を痛感する。だが、彼の保護者の役目を降りるつもりはないよ」

「あまりに彼を都合よく利用しているようだと、無理矢理にでも引き離して差しあげますよ」

「肝に命じておこう」

トリューニヒトの言葉を利己的な野心を取り繕うものとヤンは常に解釈したし、トリューニヒトはそんなヤンにわかつてもらう努力を半ば放棄していた。ヤンは時間を無駄にしたと感じながら、出口に向かつた。

「その時は彼を頼むよ」

だが、去り際に聞いたトリューニヒトの言葉は、意外なほどヤンの胸を打つことになつた。

第四部 37話 奪還者、そして

惑星モールゲンの同盟軍基地襲撃のリーダーはフレーゲル男爵だった。

ホーランド艦隊に脱出部隊が襲われた時、フレーゲルは四部隊の指揮を執るべくルドルフ2世とは別の艦に乗っていた。ルドルフ2世と同じ空間にいるのが耐えられなかったのだ。

そして結果的に、彼の乗る高速戦艦ウルはホーランド艦隊が取り逃がした数隻の中の一隻になった。

フレーゲル男爵は、神聖銀河帝国に良い思い出がなかった。

叔父上の後を継いでブラウンシュヴァイクの栄光を復活させると意気込んでいたら、身内の何人がルドルフ2世（当時はエルウィン・ヨーゼフ2世）の粛清に遭った。

フレーゲルとしては冷や水を浴びせられたようなものだった。

以後、フレーゲル男爵はルドルフ2世に恐怖を覚え、行いには努めて気をつけるようになった。

ルドルフ2世の粛清は常に費用と効果のバランスを計算した上で行われていた。

他の肅清された貴族と違ってフレীগエル男爵が生き残れたのは、彼が旧ブラウンシュヴァイク派の有力貴族であったからだ。アンスバッハらの反対を押し切つてまで行くべきものでは「まだ」ないという判断によるものだ。フレীগエルは理解していた。

彼は実戦部隊におけるメルカツツのしごきには耐えられそうになかったため、軍務省次官の任を願ひ出た。その願ひは叶えられ、彼はしごきからなんとか逃れることができたのだ。

フレীগエルの必死の生き残りの努力を知らず、友人たるランズベルク伯はお気楽なものだった。

ランズベルク伯が生き残っているのはその邪気のない性格ゆえだったから、フレীগエルとしては真似ようがなかった。

コルプト子爵など、爵位持ちの軍人はメルカツツのしごきに耐えて別人のようになってしまい、逃げたフレীগエルに侮蔑の視線を向けてくるようになっていた。

血縁のシャイド男爵を含め、その他の爵位持ちは軍人ではなかったため、フレীগエルの苦勞に共感しなかった。

この時にはフレীগエルの取り巻きも、殆どが彼の元を去っていた。

フレীগエルの苦勞をわかつてくれたのは、あろうことかアルタイルの奴隸の子孫のほ
ずの、ユリアン・ミンツだった。

奴隷階級出身者に弱みを見せるなど貴族にあるまじきことだったが、他に相手がいるわけでもなく、時たま彼に愚痴をこぼすようになっていた。ユリアンは彼がいくら高慢な対応をしても軽く受け流すことができた。

そうこうしている間に、神聖銀河帝国は敗戦し、月要塞も陥落してしまった。

ルドルフ2世も貴族達も捕まって、フレールゲル一人だけになった。

フレールゲル男爵の乗る高速戦艦ウルには地球教兵士と宣教将校が乗っており、ルドルフ2世奪還、ド・ヴィリエ大主教救出を唱えていた。

フレールゲルは疲れ果て、どこかに落ちのびたい心境だったが、そんなことをすれば彼らにブラスターで撃ち抜かれることは明らかだった。

それに、逃げ出したところでフレールゲルにはもはや何も残っていないかった。あるのはかつての貴族としてのプライドの残滓のみ。その状態で生きていける気がしなかった。

友人であるランズベルク伯も捕まっており、それを見捨てるのも寝覚めが悪かった。もし救出作戦に成功すればルドルフ2世も自分のことを認めるかもしれない。

努めて楽観的に考え、気力を奮い起こして彼は救出作戦の計画を立てることにした。

そんな中、かろうじて連合内部に生き残っていた地球教の諜報ネットワークを通じてフレールゲル男爵に情報が入った。

モールゲン星域の警備部隊の配置、モールゲン基地の詳細な見取り図と、神聖銀河帝

国要人の收容されている部屋の情報である。

フレーゲルは神聖銀河帝国軍と地球教団武闘派の残党を掻き集め組織した。

フレーゲルは、かつてガルミツシユ盟約軍でゲリラ戦を展開していた。今回はその経験が活かされた形である。

彼は地球教が関わりを持っていた宇宙海賊にも連絡を取り、略奪の絶好機だと唆した。ホーランドがイゼルローン回廊でなした所業に復讐を誓っていた海賊もおり、多数の海賊が集まった。

モールゲン星域各所に海賊の襲撃が同時に行われ、それは絶好の陽動となった。

フレーゲルは海賊対応に警備部隊が出払った隙に惑星モールゲンに強行着陸し、同盟軍基地に奇襲をかけたのだった。

フレーゲルは知らなかった。

オーベルシユタインが間諜をあえて泳がせて情報を地球教徒に流したことを。

フレーゲルが基地に奇襲をかける少し前、ルドルフ2世はとある訪問者達と面会していた。訪問者は連合軍情報局パウル・フォン・オーベルシユタイン中将、そしてその補佐役のアントン・フェルナー少将だった。

面会は、收容所での暮らし向き等、当たり障りのない質問から始まった。

次に、オーベルシュタインは神聖銀河帝国が起こした戦争の責任の所在について尋ねた。

ルドルフ2世の回答は明快だった。

「誰に対する責任を尋ねているのかわからんが、臣民に対する責任ということであれば、すべて余にある。臣下はすべて余の意思を代行したに過ぎない」

オーベルシュタインの義眼は鈍い光を放っていた。

「あなたは自らが大帝ルドルフのクローンであることを知っていますか？」

「無論だ」

「地球教団に拉致され、御輿として担ぎ上げられた。利用されていたとは思わないのですか？」

ルドルフ2世は平然と答えた。

「それは勿論利用されたのだろうな。だが、余も彼らを利用した。お互い様というものだ」

「あなたはどのような目的のために彼らを利用したのか？」

ルドルフ2世は覇気に満ちた瞳をオーベルシュタインに向けた。

「遍くこの銀河を統治するためだ。全銀河の民はすべてこの余が統治する。余が人類を

永遠の繁栄へと導くのだ」

オーベルシュタインの中で確信が強くなった。この少年はやはり危険だ。生かしておけばやがて第二のルドルフ大帝となるだろう。それだけの野望とそれを実現する意志の強さを持っている。

オーベルシュタインは、最後にと考えていた質問をした。

「人類の永遠の繁栄のため、ルドルフ大帝が定めた劣悪遺伝子排除法を、当然あなたは復活されるのでしょうか？」

ルドルフ2世は当然といった態度で答えた。

「あれはくだらん悪法だ」

「……………は？」

オーベルシュタインは信じていた世界がずれたような感覚に陥った。

聞こえた言葉が信じられず、日頃の彼ではあり得ない、間の抜けた返事をしてしまった。

ルドルフ2世は聞き返されて気分を損ねたようだった。

「くだらないと言ったのだ！大帝ルドルフは相応に優れた男だったはずだが、よくもあのような有害無益な法をつくったものだ。到底信じられぬ！」

オーベルシュタインはその答えが未だに信じられなかった。

「大帝ルドルフは無謬の存在ではないのか？」

ルドルフ2世は苦笑した。

「それを余に訊くのか？余だつて数え切れないほど間違いを犯す。ルドルフ大帝も同じだ。記録を調べればわかる話だがルドルフ大帝の失敗も数え切れぬ。劣悪遺伝子排除法はその中でも極め付けだ！」

おかしい、この少年は誰だ？

オーベルシュタインは混乱から回復できずにいた。

「しかし、劣悪遺伝子保持者は人類にとつて排除すべき悪ではないのか？永遠の繁栄のために剪定されるべき存在ではないのか？」

「誰が誰を劣悪と決めるんだ？余には無理だな。余の臣下は皆どこかしら頭のおかしい

奴らの集まりだった。あのユリアン・ミンツにしてからが、おかしい」

ルドルフ2世はユリアンのことを思い出して自然と笑みがこぼれた。

「お人好しのくせに陰謀を巡らすせいで、いつも自らが振り回されていた。嫌いなものを嫌いと言えず、いつの間にか嫌いなものに取り囲まれている。目的があるならそのためだけに動けばよいのに、余に肩入れし過ぎて、常にぐらぐらと揺れていた。見ていて逆にどうにかしてやりたくなつたぐらいだ」

ルドルフ2世は話の脱線に気づいたようだった。

「話が逸れたな。だが、ユリアンにしろ、他の者にしろ、それぞれの領分で余を助けてくれた。余が何の役にも立たぬ屑だと断じた奴らに助けられたこともある。何が役に立つて何が役に立たぬかなど、余には決められぬし、銀河の民を遍く統治する皇帝たる者、いかなる者も受け入れて繁栄に導く度量がなくてどうする？ 度量なき者が皇帝となり続け、極端な排除を繰り返した結果が、現在の銀河の人口に現れておるわ！」

そこでふと気づいたようにルドルフ2世は言った。

「そういえば、卿の目も義眼だな。それは先天性のものか？」

オーベルシュタインはルドルフ2世の演説めいた語りに圧倒されていたが、その言葉で我に返った。

「そうですが、それが何か？」

ルドルフ2世は笑った。

「中将にまでなったのだ。劣悪遺伝子排除法が誤りであることは、卿自身が証明しているではないか。卿のことを劣悪などと誰も言えまいよ。何なら余の臣下になるか？ 歓迎するぞ？」

劣悪ではない。

それはオーベルシュタインが幼い頃に欲していた言葉そのものであった。それをルドルフのクローンが言うとは。そして己を臣下に誘うとは。

オーベルシュタインはルドルフ2世が己を懐柔するために嘘を言っていると信じたかった。

「そこまで言うなら何故ルドルフ2世を名乗った？ 間違いを犯した男の名を名乗った？ ルドルフの後継者を自ら標榜しておいて今更何を言っているのか」

ルドルフ2世は一瞬沈黙した後、顔を赤くして叫んだ。ルドルフ2世がオーベルシュタインの前で初めて見せた年相応の表情だった。

「神聖銀河帝国をまとめ、率いていくための方便に決まっているではないか！ 誰が好きこのんで、二番煎じの馬鹿みたいな名を名乗るか！ 余だつて生みの親につけてもらったエルウィン・ヨーゼフの名を捨てたくはなかつたんだ！」

オーベルシュタインは、しばし呆然とした。

もはや毒気を抜かれていた。

沈黙が続くうちに、基地が騒がしくなってきた。

ルドルフ2世が尋ねた。

「何かあったのか？」

沈黙するオーベルシュタインの代わりにフェルナーが答えた。

「今日は抜き打ちの訓練がある日のようですよ」

「そうか」

フェルナーはオーベルシュタインを促した。

「そろそろ刻限ですよ」

オーベルシュタインはゆっくりと立ち上がった。

「いろいろと興味深い話を聞きました。ありがとうございます」

立ち去ろうとするオーベルシュタインにルドルフ2世は声をかけた。

「余を殺さなくてよいのか？」

オーベルシュタインは相手を凝視した。

語った内容の深刻さに比して、ルドルフ2世の顔は平静だった。

「そのための準備をして来たのだろうか？」

オーベルシュタインは立ったまま目を瞑った。内心の葛藤を隠すように。

そして目を開き答えた。

「気のせいです。小官にそのつもりはありません。……今のところは」

ルドルフ2世はオーベルシュタインを見つめていた。

「そうか余は殺されぬのか、今のところは。ならば余の臣下はなおさら死ぬことはあるまいな。今のところは」

レムシャイド侯達貴族とド・ヴィリエ大主教達地球教徒過激派の殺害。それもオーベルシュタインが考えていたプランの一部だった。

それをもルドルフ2世は牽制して来たのだった。

オーベルシュタインは再び答えた。

「陛下及びその臣下の方々の処遇については小官の関知するところではありません」

「そうか、ならよい。引き留めて悪かった。……いや、最後にもう一つ」

「何でしょう?」

ルドルフ2世はオーベルシュタインに笑いかけた。

「臣下になる気になったらいつでも言ってくれ」

オーベルシュタインは無言で退出した。

部屋を出てフェルナーは上司に確認した。

「神聖銀河帝国の残党の襲撃が始まったようですが、本当にルドルフ2世が奪還されるようなことはないでしょうね」

「奴らには神聖銀河帝国の主要メンバーの居場所に関して偽の情報を渡してある。今頃別の場所を集中して襲撃しているところだろう。じきに鎮圧されるだろう」

「殺さなくて本当によかったのですか？」

「それを止めるために卿がついて来たのだろうか？」

フェルナーは動じなかった。

「ははは。ご冗談を。しかし、銃も持たずにどうやって殺すのかと興味を持っていたのは事実です」

オーベルシユタインは淡々と答えた。

「私の片方の義眼を、入れ替えて来たのだ。高性能の爆弾にな。私も卿も、追い詰められた地球教徒達の自爆にルドルフ2世と共に巻き込まれて死亡。そういうことになるはずだったのだ」

フェルナーもさすがにこれにはギョツとした。

「ご冗談でしょう？」

「冗談だ。……そういうことにしておいた方が卿の精神衛生上はよからう？」

「言わないで頂けた方がもっとよかったですね。それで、繰り返しになりますが、本当によかったですか？」

「殺すならいつでもできる。そうすべきか、別の道があるか、もう少し考えてみたくなった。今日のところは残党をまとめて処分できることで満足しよう」

フェルナーは面白がるような視線で上司を見た。

「ドライアイスの剣も、随分となまくらになったものですね」

挑発するようなその言にも、オーベルシュタインは反応しなかった。

オーベルシュタインはフェルナーに言わなかったことがあった。

ルドルフ2世と話すことでオーベルシュタインは、ゴールデンバウム王朝の打倒とは別にかつて抱いていたもう一つの大望を凶らずも思い出してしまったのだ。

それは、宇宙を支配する理想の君主を自らの手で生み出すこと。

オーベルシュタインさえ臣下に加えようと試みる、かの少年皇帝はその器なのではないかと、ふと思ってしまったのだ。

その考えに整理がつかないうちは、彼はルドルフ2世を積極的に殺すことができなかった。

フェルナーはさらに上司を試すようなことを言った。

「しかし、あなたの当初の目論見の一つであったように、今回のことで銀河の首脳が地球

教、ゴールデンバウムの残党勢力を危険視して死刑不適用の約束を反故にする可能性も高いのでは？」

「そのときはそのときだ。多少惜しむべきものもあるがそれ以上ではない」

少しして、オーベルシュタインはフェルナーに話しかけた。

「今回の独断行動で私への風当たりはさらに強くなるだろう。情報局のことは卿に任せた」

フェルナーは驚いた。彼の上司はまだまだ情報局に居座り続ける気だと勝手に思っていた。

「しかし、まだやるべきことは残っているでしょう。地球教の残党もこれが最後というわけではないでしょう。まだまだ不穏な動きや未解決の事案は沢山あります。引退など早過ぎる」

フェルナーとしては、補佐役の方が性に合っていた。

「勘違いしないで欲しい。引退するわけでは無い。卿の言う通り、別の場所で別の形でそれらの監視を行うだけだ。そのうちわかる」

オーベルシュタイン達は襲撃が収まるまで物陰に身を潜めることにした。

とはいえ、すべてがオーベルシュタインの計算通りというわけではなかった。

フレーゲル男爵が糾合した戦力はオーベルシュタインの予想を大きく超えていた。偽情報によつてルドルフ2世の救出は達成できていなかったが、鎮圧部隊に対しては頑強に抵抗を続けていた。

オーベルシュタインは敵を狂信者と考え、準備など気にせず攻めてくるものと思つていたのだが、実際の司令官はフレーゲル男爵であり、相応に勝つための努力をしていたのだ。

また、海賊の襲撃によつて警備部隊が出払つており、基地が手薄になつていたことも、鎮圧が思い通りに行かない原因となつていた。

事態は増援の到着によつて解決を見た。

銀河最速の艦ハードラックに乗つてライアル・アッシュビーが駆けつけたのだ。

アッシュビーは同盟の内乱終結によつて、艦隊を率いて独立諸侯連合に戻る途中であつた。

アッシュビーとフレデリカは同盟軍への復帰が決定していたが、艦隊は連合軍所属で

あり、一度は戻る必要があったためだ。

しかし、シャンプールの後処理を行っていたオーブリー・コ克蘭少将から、神聖銀河帝国残党の不穏な動向について連絡を受け、単艦で急ぎモールゲンに向かうことにしたのだった。

ハードラックにはシャンプールの鎮圧の事後処理のために駐留していた陸戦部隊が同乗しており、アツシユビーは彼らと共に基地内に突入した。

アツシユビーは、フレデリカの協力によつて基地内の監視カメラの情報を統合し、残党の動きを確認して陸戦部隊に必要な指示を出した。

そうしながら自らもコ克蘭とともに現場に乗り込み戦いに臨んだ。

アツシユビーは効率よく敵を倒していくコ克蘭に感心した。

「後方基地勤務が長かったと聞くがよくそんなに動けるな」

コ克蘭は淡々と答えた。

「訓練は欠かしませんでしたから」

敗勢を悟ったフレীগエル男爵は高速戦艦に戻り、大気圏外に離脱した。

そしてアツシユビーに呼びかけた。

「我々の負けだ。だが、最後に帝国貴族として名誉ある一騎討ちを所望する」

フレীগエルは乗員に向かって演説した。

「私は死などおそれない。この上は最後の一兵まで戦い、栄光に満ちた帝国貴族の滅びの美学を完成させるのみ！」

乗員は皆地球教の武闘派だった。帝国貴族の滅びの美学に関心はなかったが、最後の
一兵まで戦うことに反対する理由もなかった。

アッシュビーはこの誘いに乗った。さっさと逃げればよいものを、捕縛の機会を自ら
つくってくれたのだからアッシュビーとしても望むところだった。

一騎討ちは、帝国の古式に則って行われた。互いの艦に背を向け、一定距離離れたと
ころで反転し、戦いを開始する。

戦いは激しいものとなった。

連合の最新鋭技術が詰め込まれたハードラックに対し、フレーゲルの乗る高速戦艦ウ
ルもまた月要塞で新造された最新鋭艦であった。地球統一政府宇宙軍の失われた軍事
技術に現代の艦船技術が組み合わされた試作艦であり、神聖銀河帝国軍が続いていれば
次世代の量産型戦艦の雛形となるはずの艦であった。

高速の艦同士の戦いは格闘戦の様相を呈したが、ついにハードラックの陽子砲の一撃
がウルを貫いた。

フレーゲルは結局生き残って捕縛され、モールゲン基地に收容された。アッシュビー
は、そうなるように狙いを定めてウルを砲撃したのだった。

オーベルシュタインとフェルナーは、ルドルフ2世の収容場所に向かっていたコクランを発見し、合流した。

これによってモールゲン基地襲撃事件は解決を見た。

……かに思われた。

夜、ルドルフ2世が眠る個室の前に、一人の男が立っていた。

年若い少年の寝顔を見て、その男は、己がこれからやらねばならぬことに対してため息をついた。

彼は顔を上げ、鋭い視線を少年に向けた。

「何をするつもりか知らんがやめておけ」

彼に声をかけたのは、ライアル・アツシユビーだった。

声に振り向いたその男はオーブリー・コ克蘭だった。

「はじめからおかしかった。何故一介の司令官が神聖銀河帝国残党の動向に関する情報を持つていたのか。そして何故ハードラックに同乗する必要があったのか。君ははじめから何者かの意向を受けて動いていたのだろうか？」

コ克蘭は無言だった。

「で、どっちだ？逃す方か？殺す方か？」

「後者です。あなたにとつても好都合でしょう？邪魔はしないでもらえませんか？」

「そうはいかん」

「なぜ？」

「少年を見殺しにしたとあつては、ヒーロー失格だろう？」

コ克蘭はアッシュビーを睨んだ。

アッシュビーはそれを制止した。

「先に言っておくが、君が監視カメラに仕掛けた小細工は我が副官が解除してくれた。我々はしっかりと監視されているぞ。たとえ君が私を手を触れずに倒せたとしても、君が何かを仕掛けたことは丸わかりだからな」

「ルドルフ2世を放置しておくつもりですか？」

「心配なら、君の上にいる人間に伝えろ。何かあつたらこのアッシュビーがなんとかする、と。ルドルフのクローンを心配するならアッシュビーのクローンのことを評価してくれていいはずだろう？」

二人がクローンであることは知る人ぞ知る秘密であつたが、彼はコ克蘭が知っている側の人間だと判断していた。

コ克蘭は眼差しを緩めた。

「そうですか。それではやめておきましょう」

「……諦めが良いな」

「元々に合わない仕事ですから」

「ならば何故引き受けた？」

「……先祖の所為です」

「先祖？」

コ克蘭はアッシュビーの疑問には答えず、今回のことは内密に、と言い残して去って行った。

「礼を言う」

その声に振り向くと、ルドルフ2世が起き上がっていた。

ルドルフとアッシュビー、二人のクローンの視線が交錯した。

「気づいていたんだな」

「ああ。あのような者がいるとは。自分自身、闇の底にいたと思ったが、この世界はまだ闇が深いらしい」

「まったくだ」

二人は顔を見合わせて苦笑した。
ルドルフは尋ねた。

「それで、卿は余に何か用があるのか？」

「何の用もないさ。一度顔を見てみたくなつたくらいだ」

「……ならば、質問してもよいか？」

「何だ？」

ルドルフ2世は少し言葉を探したようだった。

「卿は自分のことをブルース・アツシユビーだと思ふか？」

「思わない。君は自分が初代ルドルフだと思ふのか？」

「いや、思わない。愚問だった」

そう言つてルドルフ2世は黙つた。

アツシユビーはルドルフ2世をしばらく見つめた。その姿はとても孤独に見えた。

ライアル・アツシユビーにとつて、ルドルフ2世は自らの鏡像だった。仮にゴールデ
ンバウム王朝が自由惑星同盟を統治し、そこに自分が生まれていたら、自分こそ
が迷妄なる共和主義者の首魁としてルドルフ2世の立場となつて人々に恐怖の目で見
られていたかもしれない。

ライアル・アツシユビーは人々に望まれて英雄を演じた。ルドルフ2世は今人々に怖

れられて、死ぬにしろ生きるにしろその道を絶たれようとしている。

だから彼は尋ねた。恐怖の宇宙の帝王などではない、一人の孤独で多感な少年に。

「君は何をなしたい？」

ルドルフ2世は即座に答えた。

「人民の幸福と人類の永遠の繁栄のために貢献したい」

「そうすればいいさ。人々に恐怖されたからと言ってそうしてはいけない、なんてことはない」

ルドルフ2世は少し意外そうな顔をしたが、それはやがて苦笑いに変化した。

「ありがとう。だが、卿の敵になるかもしれないぞ」

「恐怖の宇宙帝王か破壊王か何か知らんが、そうなった時は全力で止めるさ。まあその時は君も全力で来るといい」

ルドルフ2世の笑みに覇気が見えた。

「そうさせてもらおう」

「また会いに来る」

そう言い置いてアッシュビーは去って行った。

ルドルフ2世は無事に生きて翌朝を迎えることができた。

だが、警備関係者を悩ませる事態も発生していた。

一夜明けてみると、収監者の一人、クリストフ・フォン・バーゼルが、その妻ヨハンナと共に姿を消していたのだ。

第四部 38話 終戦会議後半

若干の懸念材料を残しながらも、モールゲン基地襲撃事件が全体としては解決したことで、終戦会議は結局1日遅れで再開された。

その間にも水面下で交渉は進んでおり、スケジュールの遅延は最小限で済んだ。

本日以降は銀河四国のみ参加となり、ユリアン達、旧神聖銀河帝国のメンバーは除外された。

主な議題は神聖銀河帝国の構成員及び構成物の取り扱いと、国際協調組織構想を含めた戦後の銀河体制である。議長はケッセルリンクが担当することになっていた。

まず交渉に時間がかかったのは、神聖銀河帝国領の分割だった。新帝国に復帰する地域と、国際協調組織に委任統治される地域に分かれることになるが、その線引きで交渉が揉めたのだった。

もう一つは、国際協調組織の本部の場所だった。銀河連邦の旧都アルデバラン系第2惑星テオリアを本部とする案が出たのだが、同盟からあまりに遠いことに同盟側が難色を示したのだった。

最終的にこの二つの問題は合わせて妥協案が用意されることになった。

新帝国だけでなく、同盟と連合も国際協調組織に領土を提供することになったのである。

同盟が領有するオリオン腕側の領土一帯と、連合が領有するアルマイル星域及び近傍三星域が国際協調組織の管轄下に組み込まれた。

同盟にとってモールゲンは対連合貿易の要衝ではあったものの、バーラト星域から遠く離れており、行政コストのかかる場所だった。連合にとってもアルマイル星域近辺は帝国との係争地であり、今まで満足に開発を進められなかった地域であり、失つても大して惜しくはなかった。

その上で、アルマイル星域に本部、モールゲンと地球に副本部を置くと定められたのだった。

アルマイルはアルデバランよりは同盟領に近く、かつ同盟にとつての聖地であつたため、同盟としても文句はなかった。

そして、新帝国のみが領土を失うわけではなくなることで、新帝国としても分割案を受け入れやすくなったのだった。

3日かけてその他の議題が話し合われ、3月5日に、「新銀河体制に関する四力国条約」が締結されることになった。先の神聖銀河帝国との終戦条約と合わせて「太陽系条約」と通称されるようになった。

これは銀河連邦成立以降八百年の間で初めて結ばれた多国間条約であり、太陽系の名を冠した国際条約としては九百年振りであった。

人類の故郷太陽系は銀河の新時代到来を象徴する条約の名として再び銀河の表舞台に登場したのだった。

条約の内容公表を前に、銀河四国は共同で声明を発表した。

先日のモールゲン襲撃事件に関してであり、以下のような内容であった。

モールゲン襲撃事件の首謀者が旧神聖銀河帝国軍情報局の局長代理であったクリストフ・フォン・バーゼルだと判明したこと。彼がサイオキシマフィア及びそれに協力する宇宙海賊の首魁であったこと。神聖銀河帝国の成立と開戦にはサイオキシマフィアが絡んでいたこと。サイオキシマフィアが地球教団と神聖銀河帝国を半ば乗っ取り、サイオキシン浸透のために利用していたこと。少年皇帝もクリストフ・フォン・バーゼルの傀儡であったこと。

銀河四国はサイオキシンマフィアを許さず、取り締まりを強化するとともに、サイオキシンマフィアに利用された地球教団の正常化を地球教団内の良心派の協力を得て行うこと。

逃走したクリストフ・フォン・バーゼルの逮捕に総力を挙げること。

クリストフ・フォン・バーゼルがサイオキシンマフィアの元締めであったことは事実であったが、それ以外はすべて虚構であった。

サイオキシンマフィアは地球教団に使われる立場にあったし、クリストフ・フォン・バーゼルもそのような大きな影響力を持つていなかった。

銀河四国の首脳とトリューニヒトは終戦条約の秘密条項を守り、かつそれによる弊害を最小限にするため、サイオキシンマフィアと地球教団の主従関係を逆転させることで、ルドルフ2世及び地球教団に対する世間の目を逸らし、かつルドルフ2世の持つ影響力を弱めようと画策したのだった。

当初は、バーゼルはサイオキシンマフィアの首魁として死刑になる予定だった。ユリアンは抵抗したが、彼は国家運営の責任者ではないため死刑不適用ではない、とウオーリック伯を中心とした四国の首脳は強弁して押し通した。実際、サイオキシンマフィアの元締めであればどの国の人間であっても極刑となって当然というのが世の人の常識ではあった。

だが、そのバーゼルは逃走したため、このような発表になったのだった。

バーゼルの逃走にはユリアンの様子を見かねたトリューニヒト、そしてトリューニヒトに「お願い」されたアッシュビーが関与していた。

ルドルフ2世と会話した夜、アッシュビーはフレデリカの協力によって監視カメラを

掌握し、バーゼルとその妻ヨハンナを、一隻の船に乗せて逃したのだった。

アツシユビーから状況を説明されたバーゼルは、意外にも乗り気だった。彼はどのようなことであれ、下に見られるのは絶えられないが、上に見られるのはむしろ歓迎する人間だった。妻ヨハンナもどのような形であれ、夫と共にいられることを歓迎していた。

ともかくも、そのような虚偽に満ちた声明があつた後に、条約の内容が公表された。

旧神聖銀河帝国構成員及び構成物の取り扱いについては以下の通りとなつた。

・北部旧連合領を含む地球統一政府時代の開拓領域より北西の地域一帯とその構成物を後述の国際協調組織の所属とする。

・それ以外の地域及び構成物をオリオン連邦帝国の所属とする。

・神聖銀河帝国の構成員は、国際協調組織の管理下となる。

・ただし、宇宙歴801年以前に銀河四国いずれかの国籍を持っていた者は元の国家への帰属が認められる。

・開戦時の神聖銀河帝国の国家元首及び内閣閣僚の生存者は開戦の決定に関与したものととして、銀河諸国民と自国民の利益を毀損した「平和に対する罪」を別に開く軍事裁判において問い、刑を確定するものとする。

最後の項目によって、開戦時には一介の軍人であったユリアンは責任を問われなかった。また、メルカツは軍務尚書を務めていたが、既に戦死しており、同様に責任を問われなかった。銀河四国の思惑が絡んでいたのは疑いようがなかった。

同時にユリアンは同盟に復帰する権利も与えられたが、彼はそれを行使しなかった。このことで、ユリアンは正式に同盟軍から除隊扱いとなった。

新銀河体制については以下の通りとなった。

- ・ 銀河四国の独立と対等な地位を相互に承認する。
- ・ 既存の二国または三国間の軍事同盟を解消し、以後禁止する。
- ・ 四国間の戦争を禁止する。
- ・ 国家間の利害調整の場として国際協調機関を設ける。
- ・ 自由惑星同盟はモールゲン星域を含むイゼルローン回廊回廊オリオン腕出口一帯を国際協調組織に譲渡する。
- ・ 独立諸侯連合は、アルマイル星域及び周辺三星域を国際協調組織に譲渡する。
- ・ 国際協調組織の運営に四国は協力し、応分の負担をする。
- ・ 国際協調組織に国際保安機構を設置する。
- ・ 国際協調組織の事業として地球再建事業と、銀河未踏領域開拓事業を行う。
- ・ オリオン連邦帝国は南部諸邦の独立諸侯連合への移行を認める。

・オリオン連邦帝国の戦後復興のため銀河三国及び国際協調組織は人道支援を行う。
銀河四国の対等性の確認と、二国間軍事同盟の禁止は、フェザーンの連合への従属状態の解消を意味するものであった。ケッセルリンクとしては今会議における最大の目的を達成したことになった。この時よりフェザーンは自治領ではなく、「フェザーン自治国」と名乗ることになった。

銀河未踏領域開拓事業は、ウォリック伯の提唱したもので、ウォリック伯のかねてよりの構想を具体化するための第一歩となるものであった。戦争のない時代に連合の諸侯が負うべき義務として、銀河未踏地域の開拓を進めようと考えているのである。
オリオン連邦帝国による独立諸侯連合への事実上の領土割譲は、神聖銀河帝国との戦いに協力するための条件として、帝国が飲んだものだった。それを国際条約としても確認したのである。

最後に国際協調組織の名称とその代表者の名前が発表された。

自由惑星同盟、フェザーン自治領、独立諸侯連合、オリオン連邦帝国、既知銀河の全人類国家を加盟国とする国際協調組織の名前は、

「新銀河連邦」。

代表者たる初代「主席」には、

自由惑星同盟元最高評議会議長ヨブ・トリユーニヒトが就任した。

一貫してトリユーニヒトを批判してきた一部の人々は痛憤を禁じえなかった。しかし快哉を叫んだ人の数は、より以上に多かったのである。

第四部 39話 条約成立祝賀会

式典が終わった後には祝賀会が催された。幹事は新帝国だった。

会議には参加できなかった者もこの祝賀会には参加した。新帝国の主催であるだけに、舞踏会も開催される。このため、サビーネなどは非常に楽しみにしていた。新帝国の貴族、令嬢も、何人かがこの舞踏会のために新しくやって来ていた。

マルガレータは、ウォーリック伯から、ヤンの副官ではなく、伯爵令嬢としての参加が要請された。つまり、軍服ではなくドレス姿で、舞踏会での活躍も期待する、というわけだった。

オリオン連邦帝国も、旧神聖銀河帝国も、貴婦人が多数祝賀会に参加していた。同盟、フェザーンはともかくとして、同じ貴族文化を共有する独立諸侯連合だけドレス姿の参加女性が少ないという事態は避けたいという、国としての一見栄だった。

社交界デビューより前に亡命し、幼年学校に入り、そのまま軍務に就いたマルガレータとしては慣れない事ではなさか気が重いのだった。

私ではなく、ラウエ大佐だったらもつと慣れていただろうに、などと、ここにいないヤンの元副官を少し恨めしく思ってしまったマルガレータだった。

この時、ユリアンもマルガレータと同じ目に遭っていた。旧神聖銀河帝国では、女性
は皇女達や、行儀見習いに来ていた侍女がいたが、男の方で舞踏会に参加できる者が極
端に少なかった。主だった貴族は軒並みモールゲンの収容所にいたし、残された下級貴
族の将校も、月要塞内の暴動で怪我をした者が多かった。結果ユリアンに白羽の矢が
立った。何せ伯爵なのだから拒否権がなかった。

ユリアンも、月要塞にいる間に貴族社会の最低限のマナーは学んでいたし、即席で皇
女達からダンスの作法を教えてもらっていた。彼女達がユリアンと踊りたかっただけ
の話ではあったが、怪我の後遺症で片腕が多少不自由なのに目を瞑ってもらえるなら、
とりあえず無難にこなせるレベルにはなっていた。

同盟からはレベロの他、一部教養ある者が舞踏会に参加することになった。トリユー
ニヒトも銃撃される前であれば参加しただろうが、体力の問題で不参加だった。

フェザンからはケツセルリンク及び帝国駐在経験のある者達が参加した。

連合はウォーリック伯及び夫人、クレーフエ伯及び夫人、ディレンブルク男爵が舞踏
会に参加することになった。おまけにシェーンコップも参加する。ポプランも参加し
たが、下心丸出しに思えたのでヤンに却下された。ヤン・ウエンリーも参加を要
請されたが会場には姿を見せていなかった。逃げたのである。

マルガレータは、この祝賀会の中でユリアンと一度話がしたいと思っていた。人となりを知りたいと思つたのだ。踊りたいと思つていたわけではないが、舞踏会もその一つの機会だと考えていた。

だが、ユリアンにもマルガレータにもダンスの申し込みが殺到した。

マルガレータは疲れ果ててしまった。それでもやつて来る誘いに、誰の手を取るべきか迷つていると、赤い髪の長身の男が近づいて来た。誰であるか気づいた参加者は、マルガレータの相手を彼に譲つた。

優しげな風貌のその男はジークフリード帝だった。

「一曲お相手願えますか？」

マルガレータに拒否する選択肢はなかった。

「喜んで」

踊りながらジークフリード帝は小声で助言した。

「お疲れでしょう。一度抜けて休んで来られるといいですよ」

「お気遣い感謝します」

マルガレータはジークフリード帝の気遣いがとてもありがたかった。

ジークフリード帝はまた尋ねた。

「ところで以前どこかでお会いしたことはありませんか？」

「ないと思うのですが」

マルガレータの記憶にはなかった。しかし、マルガレータもどこかで会ったことがあるような気がしていた。

「お父上はお元気ですか？」

マルガレータは、心臓が跳ね上がった。彼女は、父親のヘルクスハイマー伯がかつて帝国でジークフリード帝、というより、ラインハルト帝と対立したことを知っていた。

その後リッテンハイム、ブラウンシュヴァイクの秘密を知ってしまったヘルクスハイマー伯は、妻を殺され、マルガレータを連れて連合に亡命した。マルガレータは、ジークフリード帝がいまだに父に敵意を持っているのではないかと気になっていた。

ジークフリード帝はマルガレータの表情から察したらしく、急いで付け加えた。

「かつてのことを蒸し返すつもりはないのです。お元気であればそれで」

マルガレータは答えた。

「亡命後、病気になり、以来治療を継続しております。しかし生活は問題なく送れております」

ジークフリード帝は腑に落ちたと言いたげだった。

「それでああなたは軍務に就かれたのですね」

連合では爵位を維持するためには、原則的に当主は一定期間軍務に就いた経験が必要とする。当主がやむを得ぬ理由で軍務に就けないのならば、その家の誰かが軍務に就く必要があつた。

ジークフリード帝はマルガレータが軍人になつた経緯を知りたかつたようだ。女性にも関わらず、ということが言外にあつた。

しかし、マルガレータは答えた。

「いいえ、私の意思です。貴族は人民を守る存在であるべきでしょう」

ジークフリード帝はそのようなマルガレータを眩しく感じた。この女性は、ラインハルト様の嫌悪された貴族達とは全く違う存在のようだ、と。

「お強いのですね」

「強くありたいと思います」

毅然としたマルガレータの態度と金色の髪に、ジークフリード帝は、いつしかラインハルトの姿すら重ね合わせていた。会つたことがあるのではと感じたのはそういうことかもしれないと、そう思った。

曲が終わつた。

「ありがとうございます。フロイライン」

「(こ)ち(ら)そ(う)光(栄)で(し)た」

マルガレータはジークフリードの勧めの通りバルコニーに移動しながら、この時になつてジークフリード帝に会つたことがある気がした理由に気づいた。

そうか。大事にしていたクマのぬいぐるみと目が似ているんだ。

ユリアンも令嬢と何曲か踊つた。

「私とも踊つてくださらない?」

声の主を見ると、ヒルデガルド・フォン・マリィンドルフが立っていた。美貌の外務尚書からの誘いにユリアンは緊張した。

「喜んで」

そうとしか言えなかった。

踊りながらヒルダはユリアンに尋ねた。

「ミンツ伯。帝国にいらつしやいませんか?」

唐突な誘いにユリアンは戸惑つた。

「ミンツ伯、世の中にはあなたを危険視する人も多い。その才能を十分に活かさないかもしれない」

ユリアンもそのことは先日のでようやく理解していた。

「でも帝国ならば、ジークフリード帝も、我がマリィンドルフ家も、あなたを庇護するわ」

それは、ユリアンに帝国で働くことを勧める誘いだつた。

ユリアンは少し考えた末に答えた。

「ありがとうございます。しかし私は地球再建事業に関わりたいのです。それを軌道に乗せるまではどこであれ他に移るつもりはありません」

ヒルダは簡単には諦めなかつた。

「では、その後を考えてくれないかしら」

「しかし……」

「ミンツ伯。私はオリオン王を目指すつもりよ」

オリオン王、今後帝国の実権を持つようになるその地位に就く。

ユリアンはヒルダの野心の表明に驚いた。

「帝国で女性がトップに立つことは困難だわ」

帝国ではいまだに女性が政治や軍事に関わることに対する偏見が強いからだつた。

「だから、私がトップに立つことを助けてくれる人材が欲しいのよ」

そう言つてヒルダはブルーグリーンの瞳でユリアンを見つめた。

ユリアンは美貌の外務尚書に見つめられて恥ずかしくなつた。

しかし、求めてくれる人がいるならそれもよいかもしれないと思つた。

ユリアンは迷つた末に答えた。

「今は答えを出せませんが、考えておくようにしたいと思います」
ヒルダはその返事に微笑んだ。

「ぜひ、お願いね」

休憩のため、壁際にやって来た娘にマリーンドルフ伯が声をかけた。

彼は娘が気兼ねなく活躍できるように、遅れてやって来て祝賀会のみに参加していた。

マリーンドルフ伯は、小声で尋ねた。

「まさかとは思いますが、もしや今度はあの青年に興味を持ったのではないだろうね」

ヒルダは父親の問いを理解するのに少し時間がかかった。そのようなつもりはなかったからだ。

「興味は持っているけど、お父様の思うような意味ではないわ」

ヒルダは従兄弟であるキュンメル男爵を思い出していた。心配になる弟というのが近いかもしれない。

マリーンドルフ伯は露骨にほっとした。

「ならいいんだ。お前の好みはどうにも変わり者に偏っているから。私はもつと平凡な人と結婚して欲しいんだけどね」

ヒルダは少し遠くを見つめて言った。その先には金髪の女性と踊る赤毛の男がいた。

「私は結婚できないかもしれないかもしれせんわ。今は政治の方が面白いもの」

シエーンコップは、先日ほとんど失礼をなどと言いつつ、エリザベートをぬけぬけとダンスに誘った。エリザベートも躊躇いつつもシエーンコップに応じていた。

レベロ、ウォーリック伯はアマリーエやクリステイーネと、ケッセルリンクはサビーネと踊っていた。

ユリアンが休憩のためにバルコニーに出ると、そこには金髪の女性がいた。

バルコニーには光が射し込む仕掛けがしてあった。

光によって煌めく金髪は、漆黒の宇宙の中でよく映えた。ブルーのドレスも漆黒を背景にその白い肌と金髪を引き立てていた。

ユリアンは思わず見惚れてしまった。

しかし、相手も同様だったとはユリアンは気づかなかった。

ただ黙って見つめ合う時間が過ぎた後、ユリアンはその女性に見覚えがあるような気がしてきた。

ユリアンは記憶を辿って気づいた。ヤンと交渉していた時、スクリーンに姿が映っていた女性。少しだけ気になっていた。

「あなたはヤン提督の副官の方ですね。初めましてミンツ伯ユリアンです」
マルガレータは我に返って答えた。

「マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーです。以後お見知りおきを」
ユリアンは笑顔で話をふった。

「ヤン提督の副官は大変でしょう?」

どういう意味かとマルガレータは思った。ヤン提督の副官を務める力量がないと侮られているのか、と。

無論ユリアンにそんな気はなく、ヤンはやりたくないことは何でも下に丸投げすると
の風評に基づいての問いかけだった。

「そんなことはありません。それに日々勉強させて頂いております」

「勉強になりますか?」

ヤンに勉強になるところと言えば戦略戦術だろうが、それさえも突拍子がなさ過ぎて
余人の参考にはならないとユリアンは思っていた。

だが、一部でヤンの一番弟子とも呼ばれる青年からのその問いは、マルガレータをひ
どく刺激した。

自分はそのから学べるが、お前では無理だろう。そう言われているのだと思った。

しかし、マルガレータには反論するに足る実績がないのも事実だった。

マルガレータは、つい言ってしまった。

「ミンツ伯は私みたいに無器用ではなくて、なんでもよくおできになるそうですね」

その言葉に含まれる毒に気づかないユリアンではなかった。しかし、適切な返答はなかなか思いつかなかった。

「勉強させてもらえるような優秀な人たちが周囲にいたから、なにかと教わっただけだよ」

「犯罪者の方々に？悪党としての勉強にはなったのかもしれないですね」

マルガレータもさすがに自らの発言を後悔した。

その言葉はユリアンを刺激した。

「僕は悪党かもしれないけど、神聖銀河帝国の人達を単純に犯罪者と表現されるのは納得できないな」

「銀河に混乱をもたらして、反省の色も見せていない。罪がないなどと、どうして言えるのか。まして罪に対する正当な償いもしないで」

マルガレータは、ユリアンが降伏時に神聖銀河帝国の責任者の刑罰の軽減を求めたことを納得できないでいた。地球教徒の取り扱いもだった。

ユリアンは地球教徒達やルドルフ2世を思った。

「自らの境遇を選べない人がいる。しがらみに縛られた人がいる。自らがそれをなすべ

きと信じた人がいる。自らのしていることが正しいことと思ひ込まされて来た人達がいる。彼らを単純に犯罪者の一言で済まさないで欲しい。……君は余程立派で非の打ち所のない親の元で育つたんだね。いや、君は……そうか、だから余計に正しさにこだわるんだね」

ユリアンは言つてから後悔した。

マルガレータは傷ついた顔をしていた。

彼女とて自らの父親がかつて後ろ暗いことをしていたのは知つていたのだ。知つていてなお、父親を慕つていた。父親の分も自らが正しくあらうとしていた。

ユリアンは発言に後悔しながらも続けた。

「僕は悪と断じられた者にも、人生を失敗した者にも生きる道を与えたいんだ」

マルガレータはユリアンを睨んだ。

「それによつて他の多くの人の生が踏みじられることになつても?」

ユリアンは自分の中にあつた思いに今気づいた。

「そうだ。世の中の大多数の人は君のような人が救えばいい。僕は悪人を救う」

「つゝあなたのその考えは、いつか銀河を滅ぼすことになる!」

ユリアンは先日のトリユーニヒトの話を思い出した。銀河四国の首脳に抱いた憎悪を思い出した。自分は銀河を滅ぼすことになるのだろうか。ユリアンはそれを否定で

きなかつた。

ユリアンは正しくあろうとする少女に、少し寂しげに微笑んだ。

「その時は君が止めてくれないか？」

「え？」

ユリアンはただ静かに繰り返した。

「僕を殺してほしい」

逡巡の後、マルガレータは答えた。

「わかつた。その時は妾がそなたを倒す」

「ありがとう」

バルコニーで語り合う若い二人は、周りの人から見れば、愛を囁き合っているようにも見えただろう。しかし、実際は真逆だった。

もう話すことはなかつた。本当はあつたのかもしれないが、掛け違つてしまったボタンを二人は直すことができなかつた。

マルガレータは後悔を振り切るように、一礼して去ろうとした。

「フロイライン」

だが、ユリアンは思わず呼び止めてしまった。

マルガレータは立ち止まった。

「何でしょう？」

ユリアンは呼び止めてしまった理由を探した。そして見つけた。

「一曲踊りませんか？」

「えっ!？」

マルガレータは急な申し出に混乱した。

「そんな機会はもうないだろうから」

マルガレータは考え、返事をした。

「喜んで」

ただ喧嘩別れして殺し合うよりは、余程マシだと思ったのだ。

ユリアンも、マルガレータもそのダンスを後年様々な感情とともに思い出すことになった。

マルガレータと別れた後、ユリアンはカーテローゼに声をかけられた。

「あんな娘に頼まなくても私が止めてあげるのに」

ユリアンは驚いた。

「カリン、君、聴いていたの？」

カーテローゼは赤くなった。ユリアンのことが気になって聞き耳を立てていたとは

知られたくなかったのだ。

「たまたまよ！ たまたま。あなたが虐められているように見えたから……」

ユリアンはカーテローゼの様子を見て笑った。彼女を見てみると気持ちが軽くなつた。

「そうか。でも、ありがとう」

カーテローゼは少しの間そっぽを向いた。そしてまた顔を戻した。

「あなただけ泥を被る必要のないのね」

「あなた、地球教徒達のこと、本当は嫌いでしょ。ルドルフ2世のことだけは好きだったかもしれないけど。それなのに大人達はみんなあなたの妙な責任感につけ込んでその世話を押し付けて。何だかんだ言ってみんなずるいのよ」

ユリアンはそんな風に考えたことがなかった。でも、一つ訂正しておこうと思った。

「僕は嫌いじゃないよ」

「あなた嫌いなものも好きだと思ひ込もうとするから厄介なのよね。別に、嫌いだから救つてはいけないなんてこともないのよ」

その考えもユリアンには新鮮だった。

「そうか、そうなのかもね」

「でもあなた、彼女のことは、少し好きでしょ」

カーテローゼが爆弾を放り込んだできた。

「えっ!?!」

ユリアンは思わずギクリとしてしまった。

「だって、私に少し似ているから」

ユリアンは考えた。

そうなのか？遠慮なく指摘してくるところはそうなのかもしれない。

ユリアンが悩んでいる間に言った本人は恥ずかしくなつてまたそっぽを向いた。

そんなカーテローゼのことを可愛く思えて、ユリアンはい言つてしまった。

「僕、君のことは好きみたいだ」

「知っていたわ!」

カーテローゼはなかなか顔を戻してくれなかった。

舞踏会は終わった。だが、祝賀会は続いていた。舞踏会に遠慮して来ていなかった者達もやって来た。

ホーランドがルドルフ2世の捕縛劇に尾ひれをつけて語っていた。

グリーンヒル大将とマリンドルフ伯がお互いの娘の話題で盛り上がった。言い換えれば愚痴の言い合いであった。

トリューニヒトは、お抱えの広報担当と思われる人達と何やら打ち合わせをしていた。

ポプランは会場でナンパを試みていた。先ほどはカーテローゼに声をかけたところをシェーンコップに声をかけられ、事情を知って戦略的撤退をかましていた。

メックリンガーはクレーフエ伯と芸術談義に花を咲かせていた。

ジークフリード帝はシュトライトとアンスバッハに話しかけていた。

ユリアンはいつの間にか会場に来ていたヤンに話しかけた。

「ヤン提督、いろいろお世話になりました」

「ははは。殺しあったり、喧嘩したり、交渉したり。私達の関係も忙しいね」

「そうですね」

笑いあった後、ユリアンは真面目な顔でヤンに手を差し出した。

「ヤン提督、もしかしたらこれからも、僕のせいで殺し合うようなことになるかもしれない」

ユリアンはこれから自分がどうなるか、どうしていけるか自信がなくなっていた。

ヤンは穏やかに答えた。

「そうかもしれないね」

「でも、どうか、これからもよろしくお願いします」

殺し合うにせよ、そうではないにせよ。

「君は私にとつて何なんだろう？世話が焼ける歳の離れた弟といったところかな？喧嘩したつてまた仲良く話せる存在だ」

ヤンはそんなことを言つてユリアンの手を握り返した。

「（こちらこそ、よろしく）」

そこに乱入者があつた。

「はい！その状態で止まっていってくれたまえ。君そこから写真を撮つてくれ。ああ、トリアチ君、右端あたりに立ってくれたまえ。こういう時に存在を示しておくのが選挙で大事なんだから」

乱入者はトリユーニヒトだつた。

トリユーニヒトはユリアンとヤンが握手している間に立つて満面の笑みで手を広げた。

「戦争で殺しあつた二人の司令官が、新銀河連邦主席の元で和解する構図だ。絶好の宣伝になるぞ！さあ二人とも笑顔になつて！」

握手したまま固まつたヤンに構わず、広報担当は写真を撮りまくつた。

その写真は、この終戦会議を象徴するものとして長く歴史に残った。

死んだ目をしたヤンと、柔らかい笑みを浮かべるユリアン、そしてその間で満面の笑みを浮かべるトリユーニヒトという構図は、歴史を学ぶ者にこの戦いの勝者が誰かを考えさせる材料となった。

その後も祝賀会は続いた。

トリユーニヒトは、忙しく要人への挨拶と今後の協力の依頼のため、会場を歩き回った。

ヒルダと挨拶を交わしたとき、彼は少しだけ動揺を見せた。

「どうされました？」

「いえ、大したことはありません。外務尚書。それよりもオリオン王に関して……」

シェーンコップはミュラーに改めて挨拶した。ミュラーはシェーンコップがカーテローゼの父親であることを知り、当然ながら驚いた。

クレーフェ伯はシャノン國務委員長と親交を深めていた。

マルガレータは懊惱していた。

「随分彼と仲良くなったようだね」

その声の主はゾンビのような目をしたヤンだった。

「何があつたのですか!?!」

「ああ、いや、ちよつとね。それよりもさつきの話だけど」

マルガレータはため息をついた。

「仲良くなったように見えましたか。でも逆です。やらかしてしまいました。仲良くなるつもりもなかったんですが、それでもまずはもう少し彼のことを理解したかったです」

マルガレータはヤンに細かい部分はほかしくつも説明をした。

ヤンは笑つて言つた。

「多分大丈夫だよ。彼は言い合いになつても後に引きずるような人間じゃないさ。私だって彼と殺し合いだつて喧嘩だつてしたことあるし。でもまあ、それなりにやつているよ。つい先ほどだつて、また殺し合うかもしれないけどよろしくつて握手して来たところさ」

「それはそれで大丈夫じゃないような……」

「まあ、君は嫌でも話をする機会ができるだろうね」

「どういうことでしよう?」

ヤンはマルガレータの目を見た。

「マルガレータ大尉、君にはそろそろ副官をやめてもらおうかと思っている」

「ええっ!」

マルガレータの声は悲痛な色に満ちていた。

「誤解しないで欲しい。君は私には勿体無いくらいの副官だ」

「それならどうしてですか?」

「君の才能が副官で終わるには勿体無いからだよ。君は外で経験を積むべきだ。君はまもなく少佐になる。少佐になれば一艦を指揮できる。君には新銀河連邦の下部組織、銀河保安機構新設の独立保安官として出向してもらいたい。これからの時代、そちらの方が経験を積めるし、活躍の場も広くなるだろう」

「ありがたい話だった。マルガレータはヤンの元を離れたくない気持ちをなんとか抑えて答えた。

「ヤン提督の名を汚さぬよう、精一杯務めたいと思います」

別にヤンと一緒に仕事ができなくなるわけでもないのだ。

「私の名は他のことで汚れまくりだから、気にしないで頑張っておいで。私はそろそろ楽隠居させてもらおうよ」

マルガレータはヤンのその言い方に違和感を持った。

「あれ?でも……」

そこで、祝賀会の司会を務めるハツセルバック男爵が全体にアナウンスを行なった。

「ここで、トリユーニヒト主席より、新銀河連邦の要職を担う方々を紹介させて頂きます」

トリユーニヒトは壇上に上がり、役職名と名前を読み上げていった。

呼ばれる名前に予想外のもののは殆どなかった。

いずれも終戦会議の中で既にほぼ決まっていたからである。

「銀河保安機構長官 ヤン・ウエンリー」

その名が呼ばれた時、叫び声が上がった。

「どうして!」

ヤン本人だった。

静まり返る会場で、ウォーリック伯が怒鳴った。

「終戦会議の時に決まっただろう!やけに大人しく領くんだなど思っていたが、さては居眠りして船を漕いでいたな!」

呆れ返る会場の面々だったが、決定は覆られなかった。ヤンの性格を疑う者はいても、能力を疑う者はいなかったからである。

呆然とするヤンの服の袖が引つ張られた。見るとマルガレータが満面の笑みを浮かべていた。

「ヤン提督、これからよろしくお願いします」

ヤン提督はマルガレータのことを不覚にも可愛いと思つてしまった。

もつと情が移る前に副官をやめてもらつて正解だったかな、とヤンは思つた。

だからこの時、ヤンは気づかなかつた。会議においてヤンの名前が出された時にマルガレータがヤンを起こさなかつたことを。マルガレータが、ヤンが強硬に拒絶することを予想して、寝ている間に事を進めた面々の中の一人であることを。

祝賀会も終わりに近づいたその時、慌ただしく会場に入つて来た者がいた。ヤン艦隊の留守番役のハルトマン・ベルトラム准将だった。

「ヤン提督！緊急報告です！」

ヤンの周囲に緊張が走つた。

ベルトラムは報告した。

「お子さんが産まりました！」

ヤンはローザ・フォン・ラウエと結婚していた。

結婚にあたっての問題は、ローザが故ラウエ伯の直系で生き残っているただ一人の子であったことだった。ローザと結婚するにあたって、ラウエ伯の継承の問題が発生するのだった。

ローザはヤンがラウエ伯を継いでくれることを期待したが、ヤンは拒否した。拒否した拳句に提案したのが、ローザが伯爵家を継いで女伯となり、自らはその夫となるも伯爵は名乗らないということだった。諸侯の中にはヤンの判断に否定的な者もいたが、ヤンが伯爵らしく振舞うかというところでも疑問ということで、結局容認された。ローザも、結婚できるなら文句はなかった。

結果、ヤンは正式にはヤン・ラウエ・ウエンリーとなった。

そして、ローザは妊娠し、ワープが母体に障るとあうことで副官をやめ、後任をマルグレータに任せたのだった。

ヤンは艦隊の通信室に急いだ。スクリーンにはローザが赤ん坊を抱いて映っていた。

ヤンは嬉しくなった。

まだ小さい我が子、それでも一生懸命動いている……

ヤンは愛する我が子のためにも銀河保安機構の仕事を頑張ろうと思った。

ローザは笑顔で伝えた。

「男の子ですよ。名前考えないといけませんね」

ヤンは頭を悩ませた。

「そうだね。ユルゲン、ユリウス、ユストウス……」

「……何でJで始まる名前ばかりなんですか?」

必死で名前を考えるヤンに、ローザは笑顔のまま尋ねた。

「ところで……あなたの艦隊の、とある方から聞いたんですけど」

ローザは笑顔のままだったが、何故かヤンは恐怖がこみ上げて来た。

「マルガレータ大尉と一晩中部屋に籠っていたとか、部屋で手を取り合っていたとか……あなた、浮気してませんかよね?」

ヤンはローザの誤解を解くのに三時間を要した。

ヤンが走り去ったことで、一人残される形になったマルガレータは、少し寂しげに見えた。

淡い恋心に自覚がないまま失恋し、自分の心情をいまだ理解できない乙女。ハルトマン・ベルトラム准将にはマルガレータがそう見えた。

ハルトマン・ベルトラムはマルガレータに声をかけようか散々迷い、ついに声をかけようとした。

「大丈夫ですか？フロイライン」

その機会は、急に現れたバンドリングに掻っ攫われてしまった。

こうして、終戦会議とそれに続くイベントは無事に終了したのだった。

銀河に新しい時代が来た。

第四部 40話 連邦による平和

銀河全域図（終戦後）

祝賀会が終わり、それぞれがそれぞれの国、地域に戻ることになった。

ヤン率いる連合軍派遣艦隊も、連合領への帰路にあった。

艦橋のスクリーンには、演説するトリューニヒトが映っていた。

「新銀河連邦、その名前に込められた願いを考えると私は厳粛な思いにならざるを得ません。かつての銀河連邦時代のような繁栄と平和の時代をもう一度。そして、可能であるならば、遠い将来、再び銀河連邦の名のもとに人類が統合される日を願う。そのような祈りが込められています。その日が来た時、その人類の統合体の初代主席は私ということになります。私は自らの責任の大きさを痛感せざるを得ません。人類に恒久平和を……」

銀河保安機構への出向内定者は全員が聴くようにとのお達しがあつた演説であつたが、ヤンは耳栓をしていた。

ヤン艦隊の幕僚の多くは銀河保安機構に向向することになるのだった。ちなみにその中にベルトラム准将は含まれていなかった。

演説が終わったことをマルガレータに教えてもらい、ヤンは耳栓を外した。

「本当に聴かなくてよかつたんですか？」

「聴かなくなつてトリユーニヒトの考えていることは読んでいるよ」

「何でしょうか？」

「国家の解体さ」

「解体!？」

その過激な言葉にマルガレータは動揺した。

「今だつて同盟、連合は各地方の権限が強いんだ。戦争が終われば軍や中央政府の役割は縮小し、その傾向はさらに強くなるだろう。帝国も今まさに地方分権を進めようとしている。その先にあるのは、国家など不要、星系同士が新銀河連邦の緩やかな管理の下に交流していけばいいという考えの台頭さ。汎銀河主義とでも言うのかな？」

「汎銀河主義……」

「トリユーニヒトはそれを促進するような施策をこれから次々に行なつていくんだろね。後世において人類唯一の統一政体新銀河連邦の初代主席として自らが賞賛されるために。トリユーニヒトが初代主席になりおおせた時点で、彼は最終的な勝利に十歩も

二十歩も近づいたんだ。人類の再統一がなされたのは、トリユーニヒトのおかげだった。そう歴史書に書かれることを想像すると怖気が走るよ」

「そこまで……」

マルガレータは、ヤンが描いてみせた未来像と、ヤンのトリユーニヒト嫌いの凄まじさに圧倒されていた。

「もつと怖気が走るのは、我々が銀河保安機構の実績をつくれればつくるほどトリユーニヒトの迷惑通りになることさ。でも悔しいが、そうせざるを得ない」

ヤンがやめると言いださなかったことにマルガレータは安堵した。

ヤンは言った。

「まあ、そんな不愉快な話は一先ず置いておこう。戦いはこれで一件落着。保安機構に移る前に少し長めの休暇をもらおうとするか」

ヤンは産まれた子供にようやく会えると内心ウキウキしていた。

「本当にすべて終わったのでしようか？」

ヤンの心を知ってか知らずかマルガレータはヤンに疑問を投げかけた。

マルガレータの問いの意味がヤンにはわからなかった。

「どういふことかい？ ルドルフ2世のことかい？ それともユリアンのことかい？ 今心配してもしょうがないさ」

「いいえ、違います。宇宙は広いなと思ったのです」
「続けて」

「地球教団は月とシリウス星系の惑星の内部を拠点化していました。我々は今までそれを知りませんでした」

「そうだね」

「他にも何らかの勢力が隠れている余地はいくらでもあるなと思ったのです。惑星や衛星の内部、彗星の巣、褐色矮星系。身近なところでもシリウスのロンドリーナ」

「ロンドリーナ?」

シリウス星系の第6惑星ロンドリーナは、今や無人の惑星とされていた。人に代わり犬が生態系の頂点なのだ。

「ロンドリーナだっという無人になったのか正確なところはわかっていないじゃないですか?月のように、シリウス戦役後の戦乱を嫌った人々が地下に潜っている可能性だっという調査はされていないのですから否定できません」

「まあ、ロンドリーナはウォーリック伯の提案で再開拓が行われるようになるようだから、その時の調査でいろいろわかるさ」

地球再建事業に隠れてはいたが、シリウス星系ロンドリーナも再開拓という名の再建が進むことになっていた。

「ロンドリーナの名を出したのは例えばですから。他にも無人の惑星なんて無数にありますがからね」

「まるで陰謀論だけど……」

ヤンは否定の言葉を口にした。しかし、その陰謀論めいたことが地球教団に関しては実際に起きていたことを思い出し、ヤンは言葉を切った。そしてその代わりに言った。

「貴官の直感はよく当たるから怖いよ。予言者になるつもりかい？」

「予言じゃありませんよ」

同盟軍の某先輩の奥方のように「私は知っているんです」と言われたらどうしようかとヤンは身構えた。

「ただの可能性。ただの想像の話です。忘れてください」

マルガレータは笑ってそれきりその話は続けなかった。

ヤンは逆にその言葉に考え込んだ。

可能性。この世界ではなくても、どこかの並行世界ではそのようなこともあり得るかと想像してしまったのだ。

しかしそれこそ無意味な想像であることに気づき、ヤンは現実に戻った。

「帰り着くまでに報告書を書き終えられるのかな……。というか、何だつて元帥になつてまで報告書を書かないといけないんだ！」

マルガレータがその言葉に反応した。

「しようがありません。始末書でないだけ、よかつたと思うべきです。ラムジェットエンジンを短期間で調達するため、勝手に大量の軍票を発行していたのですから。いくら権限が与えられていたとはいえ、ちよつとあり得ない額になり過ぎましたね」

「ヘルクスハイマー大尉、何とかしてくれ……」

マルガレータも、この数ヶ月の激動の中で成長していた。

「勿論私も手伝いますが、ラウエ先輩にまた誤解を与えてはいけませんので夜は早々に切り上げさせて頂きます。何卒ご了承ください」

ヤンにとって現実には世知辛かつた。

トリユーニヒトの連邦運営は、同盟も含めていずれかの国家に肩入れし過ぎるようなことがなかつたため、意外なほどに好評であつた。

トリユーニヒトが主席を務めた期間は決して長いものではなかつたが、ケツセルリンクに二代目主席の座が引き継がれた時には、新銀河連邦の存在は銀河に揺るぎないものとなつていたのであつた。

地球再建事業は順調に進められた。

地球教団は宗教組織ではない形に再編された。地球教団という名を改め、地球財団という名になったのだった。

実のところ地球教団の最源流は、悪名高き北方連合国家宇宙軍が月面に遺した民の自治組織、互助組織にあった。それが時を経ていくうちに地球信仰と一体化し、宗教色を強め、ついには地球教団となったのである。

地球財団は、その地球教団を本来の姿に戻したものであるとも言えた。

……余談ではあるが、自由惑星同盟内の地球教団支部の一部では別の動きも生まれていた。信仰の対象を別の物に代える動きである。彼らはアツシユビー教団を名乗った。

アツシユビーは人類の危機に再臨する。アツシユビーは全てを見そなわす。アツシユビーは自ら助くる者を助く。

「アツシユビーは我らが父、アツシユビーを皆の心に」

同盟軍内にも信者を多く抱え、一大勢力を成していくのだが、それはまた別の話である。

地球財団のトップ、総書記にはユリアン・ミンツが就任した。ド・ヴィリエがない今、組織として元地球教徒、現地球財団団員をまとめられる者など、結局彼しかいなかった。

地球財団の本部は月に置かれた。地球は再建事業によって大規模な改変がなされる

為、本部などを置ける状況にはなかったからだ。

月と地球は合わせて「地球自治区」となり、新銀河連邦内での自治が認められた。ユリアンは新銀河連邦高等参事官の職を兼任し、トリユーニヒトの連邦運営に協力することにもなった。

地球と月には、綺麗な氷の破片のリング「銀環」が一時的に形成されていた。これは、ヤンの氷塊攻撃、「ジャン・ピエールの帰還」作戦が、作り上げたものだった。

そんなものは本来地球にあつてはいけないものだど、地球財団員の中には当初ヤンに對して怒りを覚える者が多かった。

しかし、この氷塊が地球再緑化に使えることがわかり、怒りの声は鳴りを潜めた。ヤンの置き土産をも有効に活用して、地球の再緑化と海の浄化が急速に進められた。

空に鳥が、海に魚影が戻る日も近かった。

銀河開拓事業もその準備が進んだ。それを担う組織として銀河開拓財団が設けられた。

そのトップの理事長には、アーベント・フォン・クラインゲルトが連合軍を辞めて就任した。

地球教団が保持していた人類未踏領域への経路の情報は、銀河開拓財団に活かされ、その経路を通じて探査と開拓が進められることになった。

理事長補佐にはグリル・パルツァーが就任した。彼は財団の探索部隊の隊長として、人類未踏領域に属する多数の星に実際に遠征を行なった。

彼は、何度目かの遠征で消息を絶つまでに、膨大な量の情報を収集、分析し、人類の知識と領域拡大に貢献することになった。

財団の事業として、無人の地となっていた新銀河連邦管轄地域の再開拓も行われ、惑星クラインゲルトにも再び人が戻ることになった。

軍事裁判の対象となった旧神聖銀河帝国の責任者は、全員が有罪となった。

主だったところで、刑罰は下記の通りとなった。

ルドルフ2世 終身刑

レムシャイド侯 終身刑

ド・ヴィリエ 終身刑

その他の内閣閣僚 二十年以下の懲役

服役囚の収容施設には引き続きモールゲンの収容所が使われた。

また、ルドルフ2世はその名を捨てさせられ、元のエルウィン・ヨーゼフの名に戻つ

た。本人も名前にはさほどの執着がなかった。

ド・ヴィリエ派の地球教団の主教、司祭は軍事裁判では裁かれなかったものの、サイオキシマファイアの一員として同盟の法律に基づき重い刑罰が下された。殆どの者は死刑だけは免れた。だが、その悪質さから死刑になった者も少数ながら存在した。

彼らを救えなかったことにユリアンは自らの力不足を痛感することになった。ユリアン以外の者にとっては当然の結果であつても、彼はそれに納得することができなかった。

デグスビイ主教とバーゼル夫妻の行方は杳として知れなかった。

多くの貴族は、軍事裁判の対象とならず、機を見て解放されたが、その後身の振り方に大いに悩むことになった。一部は連合に流れたが、多くの者はフェザーンが受け入れることになった。

ランズベルク伯は獄中で「神聖銀河帝国戦役史」を物した。

これは意外なほどの好評を持って迎えられた。ルドルフ2世と臣下の交流が美化されて書かれており、ルドルフ2世再度改めエルウィン・ヨーゼフに対する世間の目を多少なりと和らげる役目を果たしたのだった。

地球財団と銀河開拓財団はそれぞれ設立順に第一財団、第二財団と呼ばれた。

第一財団たる地球財団の任務は地球再建と、日本部における人類統合データベース事業、通称『銀河百科事典』エンサイクロペディア・ギャラクシアである。これは元々月にあつた地球アーカイブを拡張したもので、人類が銀河において生み出してきたあらゆるものを収集し、データベース化する事業だつた。

第二財団たる銀河開拓財団が人類の未来を開拓するのに対して、第一財団たる地球財団は第二財団の開拓によって得られたものも含めて全人類の過去の知を蓄積し、人類の過去の殿堂としての役割を果たした。

第一財団、第二財団は「銀河の両端」と呼ばれ、長く、人類の繁栄を支えることになつた。

また、地球アーカイブに蓄えられていた過去の知識についても再解析が進められた。その結果、人類が忘却した様々な知識が復活したのだつた。その中には災いを生み出すものもあつたが、希望となるものも確かに存在した。その一つが不妊治療に関する情報だつた。この情報が現実の治療にも活かされたことで、銀河の不妊に悩む家族に福音がもたらされた。

その中にはジークフリード帝夫妻、ミッターマイヤー夫妻も含まれていた。彼らは実子を持つことができたのだつた。

また、遺伝子治療に関する情報によって先天性の異常に対する根本的な治療も可能となりつつあった。例えば、容体の悪化していたヒルダの従弟ハインリツヒ・フォン・キュンメルに回復の可能性が出てきたのだ。

銀河保安機構は、急速にその陣容を整えた。予定通りヤンが長官に就任した。

警察組織の態をとっていたが、その構成人員の多くは軍の人間だった。

同盟のホーランド艦隊、連合のヤン艦隊、帝国の旧近衛艦隊がその中核をなした。フエザーンも小規模ながら艦隊を提供した。

ホーランド自身は同盟軍を離れなかったものの、その部下達の多くは保安機構に所属することになった。

保安機構は銀河を揺るがす有事に対応するための大規模な警備艦隊と別に、独立保安官制度を採用していた。

独立保安官は一定の裁量と、逮捕権を、新銀河連邦及びその構成国から認められていた。彼らは、銀河をまたがって行われる大規模犯罪や、テロに能動的に対応することが期待されていた。

マルガレータはこの独立保安官になった。

独立保安官のリーダーにはライアル・アッシュビーが任命された。

彼はその後、愛機ハードラックを駆つて、フレデリカ・アツシユビーを公私のパートナーに、銀河を股にかけた活躍を続けることになった。まさにキャプテン・アツシユビーを彷彿とさせる活動を。

なお、ドワイト・グリーンヒルは血涙を流しながらフレデリカとの結婚をアツシユビーに許したという。

また、長官補佐兼情報部部长にオーベルシュタインが任命された。オーベルシュタインは銀河保安機構に居場所を変えて、国をまたいで未解決の様々な問題への対応を行うことになった。

ヤンは銀河保安機構発足の際に、オーベルシュタインに一言お願いをした。

「同じ新銀河連邦所属ということになるが、ユリアン・フォン・ミンツにはあまり関わらないでくれ」

オーベルシュタインは義眼をヤンに向けた。

「小官が彼を排除すると思いませんか？」

「いや、それは心配していませんが。……心配になってきたな」

「今のところそのつもりはありません。ユリアンもルドルフ2世も。調査しなければならぬこともできましたので」

「調査？」

「果たして大したことなのかどうか。判明しましたら報告させて頂きます」

「そうか」

ヤンはオーベルシュタインに任せることにした。

「それで、そのことでないのならどういうことでしょうか？」

「トリューニヒト、ルビンスキー、レムシヤイド、ド・ヴィリエ、メルカッツ元帥……ユリアンが多少なりと師事した者達の名だ」

「少なくとも一人抜けておりますが、錚々たる顔ぶれというべきでしょうな」

「これに貴官も加わるとなると、何かが完成してしまう気がする」

「……手遅れでしょう。今更小官がどう関わろうと、もはや大して関係ないかと」

「やつぱりそうだよな……」

ユリアン更正の可能性を否定され、ヤンは項垂れた。

銀河保安機構の設けられたアルマイルと太陽系の距離は近かった。オーベルシュタインは調査のために月に立ち寄ることが多く、結局ユリアンとの関わりも相応に発生した。それはまたユリアンに学びの機会を与えることになったのだった。

エピローグ1 宇宙暦805年 未来への夢

宇宙暦805年 1月10日 モールゲン星域

人類未踏領域、人類にとつての新たなフロンティアへの開拓団がこの日、モールゲンから出発しようとしていた。

そのリーダーは独立諸侯連合前盟主のクラインゲルト伯が務めることになった。彼はかつてウォーリック伯と交わした約束を生きているうちに果たせたのだった。

グリルパルツアー率いる探検団の事前探索では、既知宇宙にない様々な驚異が未踏領域に確認されていた。

開拓団はその数々の驚異と共存し、時に敵対しながらも人類の可能性を広げて行くことになるのだ。

フランツ・ヴァーリモント元少佐は、開拓団の分団のリーダーとして、分団員の取りまとめを行っていた。

彼の夢、無人の惑星を開拓するという夢を叶えるために、彼は同盟軍を辞めてこの開拓団に志願していた。

開拓船イオン・ファゼガス11号への分団員の案内をあらかた終えたヴァーリモント

は、重い荷物を女性が一人で苦勞して運んでいるのを目にした。

「持ちましようか？」

ヴァーリモン트가声をかけると、女性は一瞬驚き、すぐに笑顔になった。

「ありがとうございます」

「私はフランツ・ヴァーリモント。この分団の取りまとめをしています。ええと、ミス……」

「テレーゼ。テレーゼ・ワグナーと申します」

ヴァーリモントはワグナーを綺麗な人だと思った。それに何故だか以前から知っていたような、そんな気もしていた。

船に向かって歩きながら、ヴァーリモントはテレーゼに尋ねた。

「お一人で開拓団に申し込まれたのですか」

「ええ。私は結婚していたのですけれど……少しトラブルがあつて離婚しました。その後はずっと父の介護をしておりました。でもその父親も死んでしまつて。何もなくなつてしまつた時に、銀河開拓団の募集のポスターを見たんです。私、誰もいない惑星を、その……どなたかと一緒に開拓するのが夢だつたんです。開拓団ならそれができるとんじやないかと思つて……。お笑いになりますか？」

ヴァーリモントは驚いた。自分の夢と一緒にだつたからだ。

「私も同じ夢を持っていました。私は、だから軍に入って農業と土木の知識を身につけたんです」

「まあ！」

いつしか二人は見つめ合っていた。もう少し、このまま話をしていたいと思った。

「出発までまだ時間があります。少し座って夢の話をしませんか？」

「ええ、喜んで」

開拓船イオン・ファゼガスIIは、二人の夢、開拓者全員の夢、人類全員の夢を載せて出発する。

夢は終わらない。

エピローグ2 宇宙暦810年 過去からの光

宇宙暦810年 8月2日 モールゲン星域

ヤン・ウエンリーは、息子と共に、ガニメデ発月面都市行きの間船に乗りこんだ。

息子であるテオ・フォン・ラウエ・ヤンは8歳となっていた。再来年には伯爵家の後継ぎとしての義務により、軍幼年学校あるいは銀河開拓者学校に入り、寄宿舎生活を送るようになる。

ヤンはその前に、見聞を広める機会を与えるために今回の地球への旅にテオを同行させたのだった。

船にはガニメデからユリアン・フォン・ミンツが同乗していた。

ヤンとその息子を地球まで案内するためにわざわざ休暇を取って。

テオ・ラウエは人見知り気味の少年であったが、柔らかなユリアンとはすぐに打ち解けた。

「ユリアンお兄ちゃん、遊ぼうよー」

船に乗って5時間、5度目の「遊ぼうよ」だった。

しかし、その無邪気な笑顔に騙されると、たまにとんでもない悪戯に引っかけられることも、この5時間でユリアンは学んでいた。流石はペテン師の息子というところだった。

「テオ様、ミンツ様はお疲れにございます。爺と一緒にあちらで遊びましょう」

連合の名家ラウ工家の跡取りであり、ヤンだけには任せておけぬと、この旅行には侍従四人がお目付役として同行していた。

ヤンが父タイロンとの船旅の思い出を楽しそうに話すのを聞いた侍従達は、ヤンに息子を任せるのに危機感を覚えてついて来たのだった。

ユリアンはようやく解放され、ヤンと二人になった。

「元氣なお子さんですね」

ユリアンは弟がいたらこんな感じだったのかと思った。

「まあね。甘え癖が抜けなくて、寄宿舎に入れても大丈夫か少し心配なんだけどね」

「なんとかかりますよ」

「本当は軍人にはさせたくないし、本人が希望しないなら開拓に従事させるのも嫌なんだけどなあ」

ヤンもユリアンも好んで軍人となったわけではなかった。

「お父上のように、お子さんを連れて逃げてみますか？僕も協力しますよ」

ユリアンとしては冗談のつもりだったがヤンは真面目に考え込んでしまい、その挙句に答えた。

「やめておく。ローザが悲しむから」

少しだけの沈黙の後、ヤンは会話を再開した。

「しかし、今更だけど、君が結局彼女と結婚することになるとはね。私はてつきり……」
「いろいろありましたからね」

そう、いろいろあったのだ。

銀河に平和が訪れたと思ったのも束の間、災禍の種は尽きなかった。

混乱があった。動乱があった。人類の危機があった。

それでも新銀河連邦と銀河四国による体制はなんとか維持された。

人類はよろめきつつも、過去と未来の間に渡された綱の上で、今もなお立ち続け、歩き続けているのだった。

「ライフロード事件の時は、ご迷惑をおかけしました」

「お互い様だよ。帝国歴490年製ワイン事件の時は正直申し訳なかったと思っているし」

ユリアン個人にしてもいろいろなことがあった。ヤンやマルガレータ、アツシユビー

と、時に敵対し、時に協力しあつた。自ら厄災となることもあれば、人類を救うこともあつた。何人もの知己が死に、また新しい出会いもあつた。苦い思い出も多くできた。良い思い出も、少しはあつた。

光と闇の境界でのたうち回りながら、なおもユリアンは生きていた。

そして、結婚もした。

「僕なんか結婚する資格なんてあつたんでしょうか？」

「私に訊かないでくれ。私だつて自分がよく結婚できたものだと思つているよ。ラウエ家の家臣団からも信用がないし……」

ユリアンも、話題を変えるべきだと思つた。

「ヤン長官の引退講演、楽しみにしています」

「ああ、ようやく私も引退だ。後はマルガレータや君に任せるよ。長かつた、本当に長かつた……」

……当事者のヤンにとっては長かつたのだ。

ユリアンはふと思いついたことをヤンに言つてみた。

「月面の人類図書館で本の寄贈を受け付けているのをご存知ですか？」

「そうみたいだね」

「ヤン長官も引退されたら回想録を書いてみてはいかがですか？ 回想録の寄贈が最近多

いんですよ」

ヤンは興味を示した。

「それはいいかもしれないな。私個人のこととはともかく、ここまでの銀河の歴史を振り返ってみたいとは思っていたんだ。ちなみに、どんな本が寄贈されているんだい？」

ユリアンは端末で確認した。

「ええと最近だと『帝国を滅ぼした者 ホーランド退役元帥回想録』とか『救国の真の英雄フオーク、銃撃事件の真相を語る。トリユーニヒト主席を改心させたのは私だ』とかですね。二つ目なんだこれ」

「……その二冊と一緒に並べられるのはちよつと遠慮したいかな」

ヤンは肝心なことを思い出した。

「そうだ。地球に着いたら紅茶を飲ませて欲しい。あの伝説の紅茶を」

「ええ、ぜひ。ヤン長官にぜひ飲んで頂きたかったんです」

ユリアンは本人が気付かないうちに満面の笑みになっていた。いつもの、トリユーニヒトのようなつくった笑みではなく。

「紅茶のシャンパン」ダージリン。

かつて地球教総本部近傍のダージリン地方で生産されていたその茶葉を、

ユリアンは復活させることに成功していた。

ダージリンは地球財団の専売となり貴重な収入源となった。かつて植民星に単一栽培^{モノカルチャー}経済を強制した地球が、今や全銀河に単一栽培作物を自発的に供給するようになっていたのは歴史の皮肉ではあった。

口さがない者は、ユリアンはサイオキシンの代わりにダージリンを利用してゐると噂したが、それだけでもユリアンの目指した健全化が進んでいる一つの証左であった。

ユリアンはさらに、伝説の三大紅茶の残り二つ、ウバとキーマンも復活させるつもりでいた。

世の紅茶好きを、ユリアンと地球財団は自らの味方に着実につけつつあった。

「君に紅茶の淹れ方を仕込んだというお父上に感謝しなきゃいけないな」

「ははは……」

幼い子供に壺を磨かせる父親と、お茶の淹れ方を仕込む父親、どちらがマシなんだろうかとユリアンは思った。

とはいえそれはユリアンにとって、父親とのほぼ唯一の思い出だった。そして貴重な財産だった。

かつてキャゼルヌに訊いたところでは父は職場でも相当な無口だったらしい。

今思えば父なりの息子との不器用なコミュニケーションだったのかもしれない。

ユリアンはようやくそう思えるようになっていた。

船はその日のうちに月面都市に到着した。

人々は月内部に隠れ住む必要がなくなり、月面に複数のドームからなる都市を構築して、その中に住むようになっていた。西暦時代の栄華が、ここに復活しようとしていた。

月面都市は重力制御された高G区画と、天然状態の低G区画に分かれていた。

宇宙港は低G区画にあった。低G環境でしか生きられない一部の月の民に配慮してのことである。

月の民の中には、北方連合国家航空宇宙軍が建設した初期月面基地の遺民にまで遡れる者達がいた。地球信仰の最源流にして、月最古の民。

宇宙港は、彼らに敬意を表してその初期月面基地を模した建築様式、新コンドミニアム様式で建造されていた。

これは、異才シルヴァーベルヒの手によるものである。

シルヴァーベルヒは、新銀河連邦の直轄地において今後多数の建設が行われることを予期し、活躍の場を帝国から新銀河連邦に移していた。

新銀河連邦行政機構長兼工部局長となったシルヴァーベルヒによって、新銀河連邦のハードウェアは急速に整えられていったのだった。

シルヴァーベルヒはその実績をもって、国家元首経験者以外で初めての「新銀河連邦主席」となることを目指していた。

その野心が叶う日も遠くはないかもしれない。

ヤンの乗ってきた宇宙船には、いかにもスポーツ選手といった趣きの面々が同乗していた。フライングボールの選手達である。

フライングボールは0・15Gで行われるスポーツである。何故0・15Gなのか？

フライングボールは、かつて0・16Gで実施されていた。それがいつの間にかキリの良い0・15Gに変化したのだ。

月面の重力は0・16Gだった。フライングボールは月面の低重力もできるスポーツとして生み出されたものだった。

銀河全土に広まったメジャースポーツの生誕の地を、人類はようやく思い出したのである。

数ヶ月後にはフライングボールの全銀河大会が月面で開催される予定であった。

ユリアンはそのような昔から月に縁があったのだと不思議な気持ちになった。そして、月の女神シンシアの名を持っていた女性のこともまた思い出していた。

ユリアンはフライングボールの選手達とすれ違った。何人かの選手は、すれ違った相手があのユリアンであることに気づいたようだった。

何かが違っていれば、ユリアンはフライングボールのプロ選手になっていたかもしれない。自らが選ばなかった、選べなかった可能性がそこにはあった。

自分がブツシユ先生の誘いに心を動かされていたら……

ユリアンは首を振った。それはあり得なかったし、考えても仕方のないことだった。

ユリアンとヤン達は宇宙港を抜け、透明なドームの中に入った。

ヤンと息子のテオは、横に並んで宇宙を見上げていた。

「ねえ、お父さん」

「何だい、テオ」

「いま、お父さんと、僕と、同じ星を見ているよ」

ユリアンは、漆黒の空を見上げる二人の姿を見て、思わず涙が溢れてきた。何故か、ヤンの隣にいるべきなのは自分である気がしてしまったのだ。

そして唐突に、実の父親に肩車をしてもらって空を見上げたことがあったと思い出した。

忘れていた思い出。父親と息子のコミュニケーション。ユリアンが望んでいたそれが、確かにそこにはあった。

テオは指を差した。

「ほら、あの大きくて青い星……」

「うん、あの星は……」

「何ていう星なの」

ヤンはテオに微笑みかけた。

「あれがね……」

ユリアンも、いつの日か自らの子供に教えてあげようと思った。

ヤン父子とユリアンの仰ぎ見る先には、人類誕生の星、青い地球が、美しく輝いていた。

銀河に広がった人の子らの未来を、その輝きで照らすかのように、ただただ美しく、輝いていた。

番外編 その1 訪問者

終戦会議後、ハイネセンに戻ったトリユーニヒトには面会希望者が殺到していた。新銀河連邦の初代主席となる人物と繋がりをも深めたいと思う人は当然ながら多かったのだ。

トリユーニヒトはその日5人目の訪問者を迎えていた。

訪問者の名はオーブリー・コ克蘭。

トリユーニヒトは彼に、いつも通りの笑顔を向けた。

「やあ、少将。わざわざよく来てくれたね。シャンプールの制圧、モールゲン基地の防衛。君の平和への貢献には感謝するばかりだ」

「恐れいります」

「それで、今日は何用かな？」

「忠告を」

トリユーニヒトの笑みがわずかに薄らいだ。

「ほう。言ってみてくれたまえ」

「地球教団……いや、地球財団に改名するのでしたな。地球財団にあまり肩入れなさい

ますな」

「肩入れし過ぎると、どうなるんだね」

「私が再度来訪しなければならなくなります」

その意味をトリューニヒトは正しく理解していた。

「……それは嬉しくないな」

「私もです」

「しかし、現状は許容するのだろうか？」

「ええ。ユリアン・フォン・ミンツの目指す地球教団穏健化の方針には我々も賛同します。我々として今更地球勢力の息の根を止めねばならぬとまでは思っておりませんから」

「穏健なことでは結構だね」

「我々がこれからも穏健でいられるよう、地球財団が勢力伸長の末に暴走を始めぬよう、しっかりと手綱を握っていて欲しいのです」

トリューニヒトは意識して微笑んだ。

「私は元々そのつもりだ。心配はいらないよ」

「そう、信じておりますよ」

コ克蘭が去った後もトリューニヒトはその笑顔を維持しながら呟いた。

「さてさてこれからどうなるものか。彼ら黒旗の末裔達が過激な動きを始めぬよう、地

球財団をしつかりまとめてくれよ。ユリアン君」

同じ頃、ウォーリック伯も、訪問者を迎えていた。

訪問者の名はツエーザー・フォン・ヴァルター大佐。かつてはウォーリック伯の元で副官を務めていた男である。

ウォーリック伯は旧交を温めるような言葉もなしに、いきなり本題に入った。

「貴官らの貢献に見合うだけの努力はしたはずだ。当然満足してくれるのだろうか？」
ヴァルターの態度も、以前の上官にして連合盟主である人物に対するものではなかった。

「仕方がないでしょうな。我ら黒旗の主も納得はしておられません」

彼、そして彼らはシリウス戦役における反地球戦線の実戦組織、黒旗軍の末裔達だった。

彼らは元々は組織など形成していなかった。しかし、地球教の台頭を様々な形で知って、彼らは危機感を持った。

このまま地球統一政府の亡霊が勢力を拡大すれば、黒旗軍の末裔、彼らにとって憎き仇の子孫である我々は果たしてどう扱われるのか？その恐怖と、あるリーダーの存在が彼らに組織化を促した。

黒旗の末裔、少なくともそのように自らを自覚する者は独立諸侯連合の下級貴族に多かった。先祖の経歴を覚え、後代に伝えている者達がどのような階級に多いかを考えれば当然のことではあった。

独立諸侯連合も完全に無縁ではなかった。

独立諸侯連合において、バルトバッフェル伯の息子の内乱計画など地球教団の蠢動の多くを未然に防げたのも、オーベルシユタイン、ケスラーの尽力だけでなく、黒旗の末裔の情報提供があつてこそのものであった。

ウオーリック伯はそれに対する報酬として、彼らの要望に沿つて、あえてオーベルシユタインのルドルフ2世に対する策動を見逃したし、終戦会議の場でも地球教団やユリアンに対して強硬な主張を繰り返したのである。ウオーリック伯自身の考えや思いとはまた別に。

ヴァルターはウオーリック伯に告げた。

「黒旗の主から一つ助言があります」

「何だ？」

「人類未踏領域の開拓には十分に注意して欲しい。あそこには鳥と蛇と竜がいる」「危険だと言いたいのだろうか、よくわからんな」

ヴァルターは肩をすくめた。

「主の言葉をそのまま伝えたまで。意味まではわかりません」

「危険だが、止めはしないというわけか」

「主は、それは今の人類が決めることだと仰っていました」

「……そうか。忠告承ったと主殿に伝えてくれ」

「承知しました」

ヴァルターが去つて、ウォーリック伯は一人呟いた。

「地球教団のせいでは地獄の釜が開いてしまったのかもしれんな」

地球教団の台頭によつて黒旗軍の末裔が組織化されてしまった。今のところ彼らはある程度穏健な姿勢を保っているが今後はどうなるかわからない。

それに地球アーカイブ。そこには様々な知識が眠っていた。そこには注視すべき不穏な情報も複数存在した。いや、あるいは、そこに存在しない情報にこそ注意すべきなのかもしれない。

黒旗の者達だけではないかもしれない。その疑念がウォーリック伯の気分を暗澹とさせていた。

アルマリック・シムスン。

彼はすべて把握しているのだろうか？

実名なのか仮名なのかわからない黒旗の末裔の主の名を、ウォーリック伯は思い起

こ
し
て
い
た。

番外編 その2 オーベルシユタイン・レポート

ヤンはオーベルシユタインから上がってきた報告書に目を通していた。

「人類の今後の繁栄のために」と題されたその報告は、重要な内容を含んでいた。

オーベルシユタインは旧地球教団、挙国一致救国会議、神聖銀河帝国の関係者で生存の可能性のある者をリスト化していた。

例えば、バーミリオンの会戦でMIAとなった3人のアツシユビークローンが生きている可能性があった。昨今同盟の基地が襲われ、艦艇や物資が強奪される事件が続発していた。その際に「ライアル・アツシユビーによく似た男」が目撃されていた。

また、地球アーカイブに眠る500万人分の保存細胞の存在の件もあった。黒旗軍の攻勢の末に予想される破綻に備えるため、地球統一政府要人や大きな業績を上げた人物の細胞を保管し、来るべき地球再興が成った時にクローンとして復活させる計画が立てられていた。この計画は神聖銀河帝国の滅亡により頓挫したが、細胞自体は保存されたままだった。この凍結細胞の一部が使用あるいは持ち出された形跡があったのだ。

ここまでの情報は各独立保安官にも既に情報が共有されており、彼らが動いてくれる

ことが期待できた。

しかしその後にはヤンに対してだけの短い報告が続いていた。

それは、未解明、未解決案件のリストだった。

それを並べれば以下のようになる。

・人類の人口的衰退

人類はこの500年、その数を減らし続けている。その理由は何故なのか？

・地球統一政府時代の開拓域拡大の停滞

地球統一政府時代の人類による植民域は地球から半径百光年を出なかつた。その原因を当時のワープ技術の限界に求める説が一般的となつている。しかし、それは地球を出発地として見た場合の話であつて植民星から考えればそのような制限は存在しないに等しい。圧政者たる地球から遠く離れた場所に彼らが向かわなかつたのは何故なのか？

・劣悪遺伝子排除法制定の経緯に関する疑念

これはルドルフ大帝が自発的に定めたものだったのか？それを後押しした人物あるいは集団がいたのではないか？いるとすればそれは地球教団だったのか？

・科学技術の長期停滞の原因

国家の革新、人類の永遠の繁栄を唱えたルドルフが、科学技術の停滞を放置したのは何故なのか？

・地球アーカイブの情報欠損問題

地球教団の保有していた情報、地球アーカイブの情報は完全なのか？情報には意図的な欠損が存在し、人類の歴史には我々が把握できていない何かが存在するのではないか？

・存在しない皇帝の謎

ゲオルグ2世、ルードヴィツヒ3世。時たま人々の口から正史に残らぬ皇帝の名が語られることがある。彼らは本当に存在しなかったのか、それとも何らかの理由で歴史から消されたのか？

この他オーベルシュタインの報告は、未解明の領域である航行不能宙域や、人類の精神的脆弱性についても触れていた。

報告書は、「以上の事項が未だに解明されていないままとなっている。情報局はこれに関して調査を行なっていきたい」と結ばれていた。

ヤンにはオーベルシュタインがどこまで本気なのかわからなかった。

一部歴史学志望のヤンの興味を刺激するものもあつたが、大部分はオカルトに属する話にも思えた。

しかし、地球教団のことを考えると、完全に笑い飛ばすこともできなかった。

ヤンはマルガレータの言葉を思い出していた。それに連合を離れる際にウォーリック伯に言われた言葉も。

「地獄の釜が開いているのかもしれない。十分に気をつけてくれ」と、ウォーリックはそう言っていた。

神聖銀河帝国の終焉とともに人類は悪夢から覚めたはずだった。

しかし、その先にあるのは、さらに深い悪夢なのだろうか？

「まあ今考えてもしかたがないか」

ヤンはさしあたってすべきことを考えた。

ヤンは新しい副官、スールズカリッター中佐を呼び、いくつか指示を与えた。

最後にヤンは言った。

「今から昼寝に入るから、敵襲以外起こさないでくれ」

ユリアンにも、協力依頼とともにその報告書が回ってきた。

読み終えたユリアンは、護衛官のマシユンゴに、補佐官のシュトライトと副書記のアイランズを呼ぶようお願いした。

マシユンゴが対応を終えた後、ユリアンは、長い付き合いの彼に何気無く質問した。「マシユンゴ中尉は地球教団以上の闇がこの銀河に潜んでいると思う？」

マシユンゴは答えた。

「私には何とも。ですが、ひとは運命には逆らえませんか」

ユリアンとしても、まともな答えを期待していたわけではない。

「そうだよ。ありがとう」

ユリアンは、シウトライトとアイランズを待つことにした。

その様子を見ながらマシユンゴは声に出さず口の中で再度呟いた。

「^{ひと}人類は、運命には逆らえませんか」

番外編 その3 訪問者2

新銀河連邦の主席となる予定のトリユーニヒトは、ハイネセンにある自邸で、何人目かの訪問者を迎えていた。

訪問者の名はアウロラ・クリスチアン大尉。

トリユーニヒトはいつも通り笑顔で来客を出迎えた。

「久しぶりだね。シンシア・クリステイーン」

「やめてください。トリユーニヒトさん。その名は捨てましたので」

「そうだった。悪かったね。……だけどね、今更なんだけどね、やっぱりユリアン君には言っておくべきだったんじゃないのかな」

アウロラの表情は一気に暗くなった。

「仰りたいことは重々承知しています。でも、ユリアン君には私のことなんて忘れて強く生きていつて欲しかったんです。それが……それが……まさか、こんなことになるなんて……」

「ユリアン君をいろいろな意味で甘く見ていたね。私もだが」

かつてシンシア・クリステイーンであった女性は、フェザーンでのヤンとの戦いでユリアンと共にパトロクロスに突入し、その際に死亡したはずだった。

しかし彼女は生きていた。

地球教、デグスビイ主教との関わりにより恥ずべきものと見なしていた自らの過去を捨てるために、あえて死んだことにして、髪の色を変え、整形し、別人となったのだ。

オーベルシュタインとトリューニヒトがこれに協力した。オーベルシュタインは対地球教団のための手駒を手に入れるために、トリューニヒトはかつての約束を果たすために。

オーベルシュタインは彼女を同盟に派遣した。ヤンのメッセージをビュコックに伝えるためのメッセンジャーとして。

市民登録と軍籍入手はトリューニヒトが手助けした。

クリスチアン大佐やベイ准将の協力を得た上で。

特にクリスチアン大佐には彼女が養女であるということにしてもらった。

そのようにして生まれたアウロラ・クリスチアン大尉はホーランド艦隊の誕生とその活躍に関わり、現在に至るのだった。

しかし、シンシアが死んだとされたことによる影響は一人の少年のせいで甚大なものとなった。

ユリアンは、死んだ彼女の願いを叶えるために地球教団に入り、その才能の巨大さによって銀河の動向に大きな影響を与えてしまった。

ユリアンから地球教団に入ったという連絡を差出人不明の手紙の形でもらって、真相を知るトリユーニヒトがどれほど困惑したか……。

今更真相を伝えようにも、居場所がわからなかった。それにユリアンはもう既に引き返せないところまで来ていた。

トリユーニヒトとしてはユリアンの希望に沿うよう、サポートしてやることしかできなかった。

シンシア改めアウロラは、トリユーニヒトを継るような目で見た。

「トリユーニヒトさん。私、これからどうしたらいいのでしょうか？ユリアン君に謝りに行くべきでしょうか？それともこのまま墓場まで秘密を持って行くべきでしょうか？私、これから銀河保安機構に所属することになっていきますけど、ユリアン君と顔を合わせると思うという耐えられなくて……罪悪感もあるし……ユリアン君の周囲はいつの間にか女の子でいっぱいだし……」

アウロラが見つめる先のトリユーニヒトは、いつも通りの笑顔で。

「自分で考えてくれたまえ」

匙を投げたのだった。

結局アウロラは、ユリアンになかなか真実を告げられず、影ながら彼をサポートすることになった。

情報局長補佐となったバグダツシユ、マシユンゴには真実を告げ、彼らから呆れられながらもその協力を得た。

彼女は地球財団組織に残っていた地球教過激派残党をユリアンが気付く前に排除するなど、その活動は地球財団の穏健化に人知れず大きな役割を果たしたのだった。